一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第1冊

佐古川・窪田遺跡

2006.3

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第1冊

佐古川・窪田遺跡

2006.3

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

序　　文

佐古川・窪田遺跡は一般国道32号綾歌バイパス建設に伴い発掘調査を行った、香川県丸亀市綾歌町栗熊（旧綾歌郡綾歌町栗熊）に所在する遺跡です。

発掘調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成９・10年度に実施し、弥生時代前期後半～中期初頭の周溝墓群、古墳時代の灌漑水路跡群、中世の集落跡を検出することができました。特に弥生時代前期後半～中期初頭の周溝墓群の調査は、全国的にも例が少なく、瀬戸内地域の弥生時代の墓制を考える上で貴重な調査事例となりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、国土交通省四国地方整備局及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年３月

香川県埋蔵文化財センター

所長　　渡　部　明　夫

例　　言

1．本報告書は、一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県丸亀市綾歌町栗熊（発掘調査時は綾歌郡綾歌町栗熊）に所在する佐古川・窪田遺跡（さこがわ・くぼたいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が建設省四国地方建設局（当時）から委託され、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、以下のとおり実施した。

平成９年度

調査期間　　平成９年５月28日～平成10年３月31日

調査担当　　佐藤竜馬　川井國博　中山尚子

平成10年度

調査期間　　平成10年４月１日～平成10年６月30日

調査担当　　乗松真也　川井國博　中村文枝

4．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本書の執筆・編集は同センター文化財専門員山元素子が担当した。

5．調査に当っては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
国土交通省四国地方整備局　綾歌町教育委員会（当時）　綾歌町建設課（当時）　地元各自治会
地元各水利組合

6．本報告書で用いる北は、旧国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT.P.を基準としている。
また、遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＡ：柵列跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝状遺構　ＳＥ：井戸跡　ＳＨ：竪穴住居跡
ＳＫ：土坑　ＳＰ：ピット　ＳＲ：自然河川跡　ＳＸ：性格不明遺構

7．石器実測図中、スクリーントーンを貼っている部分は摩滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れを表す。
なお、現代の折損は濃く黒で塗りつぶしている。

8．本報告に当っては、下記の機関等に業務を委託した。

遺物写真撮影 …… 四国工業写真

佐古川・窪田遺跡出土管玉の産地分析 …… ㈲遺物分析研究所

9．遺構断面図及び土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』による。

10．出土遺物観察表中の土器の残存率は図化のために径を計測した箇所の全体に対する割合で、完形品に対する割合ではない。

本 文 目 次

序文
例言
第1章　調査に至る経緯と経過
　第1節　調査の経緯 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 1
　第3節　整理作業 …… 2
　第4節　発掘調査及び整理作業の体制 …… 2
第2章　立地と環境
　第1節　地理的環境 …… 5
　第2節　歴史的環境 …… 5
第3章　調査の成果
　第1節　土層序 …… 11
　第2節　遺構･遺物 …… 19
　　（1）弥生時代前期の遺構・遺物 …… 19
　　（2）弥生時代中～後期の遺構・遺物 …… 74
　　（3）古墳時代後期の遺構・遺物 …… 91
　　（4）弥生時代後期～古墳時代の遺構・遺物 …… 143
　　（5）中世の遺構・遺物 …… 144
　　（6）時期不明遺構 …… 215
　　（7）上面精査・機械掘削等出土遺物 …… 218
第4章　自然科学分析の結果 …… 222
第5章　まとめ
　第1節　遺構の変遷 …… 243
　　1．弥生時代前期 …… 243
　　2．弥生時代後期 …… 244
　　3．古墳時代後期 …… 244
　　4．古代 …… 249
　　5．鎌倉・室町時代 …… 249

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図（１）…… 1
第２図　遺跡位置図（２）…… 3～4
第３図　周辺の遺跡（1/50,000）…… 7
第４図　調査区割図（1/1,500）…… 8
第５図　遺構配置図および土層柱状図
（1/800、1/20）…… 9～10
第６図　調査区土層図（Ⅰ～Ⅲ区北壁）
（天地 1/40、左右 1/200）…… 12
第７図　調査区土層図（Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ区北壁）
（天地 1/40、左右 1/200）…… 13
第８図　調査区土層図（Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ区南壁）
（天地 1/40、左右 1/200）…… 14
第９図　調査区土層図（Ⅰ区西壁・東壁）
（天地 1/40、左右 1/200）…… 15
第10図　調査区土層図（Ⅱ・Ⅳ区東壁）
（天地 1/40、左右 1/200）…… 16
第11図　調査区土層図（Ⅲ・Ⅵ区東壁）
（天地 1/40、左右 1/200）…… 17
第12図　調査区土層図（土層注記）…… 18
第13図　Ⅱ区 周溝墓１平・断面図（1/40、1/80）、
主体部平・断面図（1/40）…… 19
第14図　Ⅱ区 周溝墓１遺物出土状況（1/80）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 20
第15図　Ⅲ区 周溝墓２・３
平・断面図（1/40、1/80）…… 21
第16図　Ⅲ区 周溝墓２・３
遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 22
第17図　Ⅲ区 周溝墓３
主体部遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/1）…… 23
第18図　Ⅲ区 周溝墓４
遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 24
第19図　Ⅲ区 周溝墓５
遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 25
第20図　Ⅲ区 周溝墓６平・断面図（1/40、1/80）…… 25
第21図　Ⅲ区 周溝墓６遺物出土状況（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 26
第22図　Ⅲ区 周溝墓７平・断面図（1/40、1/80）…… 27
第23図　Ⅲ区 周溝墓７
遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 28
第24図　Ⅲ区 周溝墓８・９
平・断面図（1/40、1/80）…… 29
第25図　Ⅲ区 周溝墓８・９遺物出土状況（1/40、1/80）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 30
第26図　Ⅲ区 周溝墓８主体部平・断面図（1/40）…… 31
第27図　Ⅲ区 周溝墓10平・断面図（1/40、1/80）…… 31
第28図　Ⅲ区 周溝墓11・12・13・14・24
遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、
周溝墓14出土遺物（1/4）…… 32
第29図　Ⅲ区 周溝墓24
遺物出土状況平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 33
第30図　Ⅶ区 周溝墓31平・断面図（1/40、1/80）…… 34
第31図　Ⅶ区 周溝墓31
遺物出土状況（1/40、1/80）…… 35
第32図　Ⅶ区 周溝墓31出土遺物（1/3、1/4）…… 36
第33図　Ⅶ区 周溝墓32平・断面図（1/40、1/80）…… 37
第34図　Ⅶ区 周溝墓32遺物出土状況（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 38
第35図　Ⅴ・Ⅶ区 周溝墓平面図シート割図、
Ⅶ区周溝墓ブロック割図（1/300）…… 39
第36図　Ⅴ・Ⅶ区 周溝墓15・16・17・26・27・33
平・断面図（1/40、1/80）…… 41～42
第37図　Ⅴ・Ⅶ区 周溝墓15・16・17・26・27・33
遺物出土状況（1/40、1/80）、
周溝墓15・16・17・33
出土遺物（1/1、1/2、1/4）…… 43～44
第38図　Ⅴ区 周溝墓15・16主体部平・断面図（1/40）、
周溝墓17主体部遺物出土状況
平・断面図（1/40）…… 45
第39図　Ⅴ区 周溝墓26主体部平・断面図、
遺物出土状況平・断面図（1/40）…… 46

第40図　Ⅴ区 周溝墓18・29平・断面図（1/40、1/80）、
主体部遺物出土状況平・断面図（1/40）…… 47
第41図　Ⅴ区 周溝墓18・29
遺物出土状況（1/40、1/80）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 48
第42図　Ⅴ・Ⅶ区 周溝墓19・20
平・断面図（1/40、1/80）…… 49
第43図　Ⅴ・Ⅶ区 周溝墓19・20
遺物出土状況（1/40、1/80）、
周溝墓19主体部平・断面図（1/40）、
周溝墓19出土遺物（1/2、1/4）…… 50
第44図　Ⅴ区 周溝墓21・30
平・断面図（1/40、1/80）…… 52
第45図　Ⅴ区 周溝墓21・30遺物出土状況（1/40、1/80）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 53
第46図　Ⅴ区 周溝墓25平・断面図、
遺物出土状況（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 54
第47図　Ⅴ区 周溝墓28
遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 55
第48図　Ⅶ区 周溝墓34平・断面図（1/40、1/80）…… 56
第49図　Ⅶ区 周溝墓34遺物出土状況（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 57
第50図　Ⅶ区 周溝墓34
主体部遺物出土状況平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/2）…… 58
第51図　Ⅶ区 周溝墓35・36
平・断面図（1/40、1/80）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 59
第52図　Ⅶ区 周溝墓37
遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 60
第53図　Ⅶ区 周溝墓37主体部平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/2）…… 61
第54図　Ⅶ区 周溝墓38平・断面図、
遺物出土状況（1/40、1/80）、
出土遺物（1/4）…… 62
第55図　Ⅶ区 周溝墓39平・断面図（1/40、1/80）…… 63
第56図　Ⅶ区 周溝墓39主体部平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/2）…… 64
第57図　Ⅶ区 周溝墓40平・断面図、
主体部平・断面図（1/40、1/80）、
出土遺物（1/2）…… 64
第58図　Ⅵ区 周溝墓22・23
遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、
SX32出土遺物（1/4）…… 65～66
第59図　Ⅴ区 SK71
遺物出土状況平・断面図（1/40）…… 67
第60図　Ⅱ区 SP566・569
遺物出土状況平・断面図（1/20）、
SP566 出土遺物（1/4）…… 67
第61図　Ⅰ区 SK01遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 67
第62図　Ⅰ区 SK10
遺物出土状況平・断面図（1/20）…… 68
第63図　Ⅰ区 SK10出土遺物（1）（1/4）…… 69
第64図　Ⅰ区 SK10出土遺物（2）（1/2、1/4）…… 70
第65図　Ⅱ区 SK106遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 71
第66図　Ⅱ区 SK31
遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 72
第67図　Ⅲ区 SK59平・断面図（1/40）…… 73
第68図　Ⅶ区 SK83平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 73
第69図　Ⅰ区 SD04断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 74
第70図　Ⅱ区 SD41断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 74
第71図　Ⅲ区 SH03平・断面図（1/60）、
遺物出土状況（1/20）、出土遺物（1/4）…… 75
第72図　Ⅲ区 SH04平・断面図（1/60）、
遺物出土状況（1/20）…… 76
第73図　Ⅲ区 SH04出土遺物（1/2、1/4）…… 77
第74図　Ⅲ区 SH05平・断面図（1/60）…… 78
第75図　Ⅲ区 SH05遺物出土状況（1/40）…… 79
第76図　Ⅲ区 SH05出土遺物（1/2、1/4）…… 80
第77図　Ⅲ区 SH06平・断面図（1/60）、
遺物出土状況（1/20）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 81
第78図　Ⅱ区 SK41平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 82

第79図　Ⅲ区 SK50遺物出土状況
平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）…… 83
第80図　Ⅲ区 SK101
遺物出土状況平・断面図（1/20）…… 84
第81図　Ⅲ区 SK101出土遺物（1）（1/4）…… 85
第82図　Ⅲ区 SK101出土遺物（2）（1/4）…… 86
第83図　Ⅲ区 SK52平・断面図（1/40）…… 87
第84図　Ⅰ区 SD01断面図（1/40）…… 88
第85図　Ⅰ区 SD01出土遺物（1/2、1/4）…… 89
第86図　Ⅰ区 SD14断面図（1/40）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 89
第87図　Ⅰ区 SH01平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 90
第88図　Ⅰ区 SH01遺物出土状況（1/20）…… 91
第89図　Ⅰ区 SH02平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 92
第90図　Ⅰ区 SH02
遺物出土状況平・断面図（1/20）…… 93
第91図　Ⅶ区 SH07
遺物出土状況平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 94
第92図　Ⅶ区 SH07竈平・断面図（1/20）…… 95
第93図　Ⅰ区 SB01平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 97
第94図　Ⅰ区 SB02平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 97
第95図　Ⅰ区 SB03平・断面図（1/60）…… 98
第96図　Ⅰ区 SB06平・断面図（1/60）…… 98
第97図　Ⅰ区 SB07平・断面図（1/60）…… 99
第98図　Ⅰ区 SB08平・断面図（1/60）…… 100
第99図　Ⅰ区 SB04平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 101
第100図　Ⅰ区 SB05平・断面図（1/60）…… 101
第101図　Ⅰ区 SB09平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 102
第102図　Ⅱ区 SB12平・断面図（1/60）…… 103
第103図　Ⅱ区 SB13平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/2）…… 104
第104図　Ⅲ区 SB15平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 105
第105図　Ⅲ区 SB14 平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 106
第106図　Ⅳ区 SB16平・断面図（1/60）…… 107
第107図　Ⅳ区 SB17平・断面図（1/60）…… 107
第108図　Ⅶ区 SB22平・断面図（1/60）…… 108
第109図　Ⅶ区 SB23平・断面図（1/60）…… 109
第110図　Ⅶ区 SB25平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 109
第111図　Ⅶ区 SB26平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/2）…… 110
第112図　Ⅴ区 SB18平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 111
第113図　Ⅶ区 SB20平・断面図（1/60）…… 112
第114図　Ⅶ区 SB24平・断面図（1/60）…… 113
第115図　Ⅴ区 SB27平・断面図（1/60）…… 114
第116図　Ⅱ区 SK104遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 115
第117図　Ⅱ区 SK105平・断面図（1/40）…… 115
第118図　Ⅱ区 SK20平・断面図（1/40）…… 115
第119図　Ⅱ区 SK32平・断面図（1/40）…… 115
第120図　Ⅱ区 SK34
遺物出土状況平・立・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 117～118
第121図　Ⅱ区 SK40
遺物出土状況平・立・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 119
第122図　Ⅲ区 SK48平・断面図（1/40）…… 119
第123図　Ⅰ区 SD03平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 120
第124図　Ⅰ区 SD06断面図（1/40）…… 120
第125図　Ⅱ区 SD40断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 120
第126図　Ⅶ区 SD83断面図（1/40）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 121
第127図　Ⅱ区 古墳時代包含層
出土遺物（1/2、1/4）…… 121
第128図　Ⅰ・Ⅱ区 SD20平・断面図
（1/40、1/150）…… 123～124
第129図　SD20出土遺物（1）（1/4）…… 125
第130図　SD20出土遺物（2）（1/2、1/4）…… 126
第131図　SD20出土遺物（3）（1/2、1/4）…… 127
第132図　SD20出土遺物（4）（1/4）…… 128
第133図　SD20出土遺物（5）（1/4）…… 129
第134図　SD20出土遺物（6）（1/2、1/4）…… 130

第135図　Ⅱ・Ⅳ区 SD29断面図（1/40）…… 133～134
第136図　SD29下層出土遺物（1）（1/4）…… 135
第137図　SD29下層出土遺物（2）（1/4）…… 136
第138図　SD29下層出土遺物（3）（1/2）…… 137
第139図　SD29中層出土遺物（1/2、1/4）…… 138
第140図　SD29上層・層位不明出土遺物
（1/2、1/4）…… 139
第141図　Ⅱ区 SK39平・断面図（1/40）…… 141
第142図　Ⅴ区 SK65平・断面図（1/40）…… 141
第143図　Ⅴ区 SK68平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/2）…… 141
第144図　Ⅴ区 SK69平・断面図（1/40）…… 141
第145図　Ⅴ区 SK75平・断面図（1/40）…… 142
第146図　Ⅵ区 SK67平・断面図（1/40）…… 142
第147図　Ⅴ区 SX35・36平・断面図（1/40、1/80）、
出土遺物（1/2）…… 142
第148図　Ⅰ区 SB10・SA05平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 145～146
第149図　Ⅱ区 SB11平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 147～148
第150図　Ⅶ区 SB21平・断面図（1/60）、
遺物出土状況（1/40）、出土遺物（1/4）…… 149
第151図　Ⅱ区 SA01平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 150
第152図　Ⅱ区 SA02・03平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 150
第153図　Ⅴ区 SA04平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 150
第154図　Ⅰ区 ピット配置（1/200）…… 151～152
第155図　Ⅰ区 SP005・006・110平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 154
第156図　Ⅰ区 ピット出土遺物（1）
（1/2、1/3、1/4）…… 155
第157図　Ⅰ区 ピット出土遺物（2）（1/4）…… 156
第158図　Ⅱ区 ピット配置（1/200）…… 157～158
第159図　Ⅱ区 SP420・422・423遺物出土状況（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 159
第160図　Ⅱ区 SP448・2001
遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 160
第161図　Ⅱ区 礎石遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 161
第162図　Ⅱ区 ピット出土遺物（1/2、1/4）…… 162
第163図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区
ピット出土遺物（1/4）…… 163
第164図　Ⅲ区 SE02遺物出土状況平・立面図
（1/20）…… 165
第165図　Ⅲ区 SE02出土遺物（1）（1/4）…… 166
第166図　Ⅲ区 SE02出土遺物（2）（1/4）…… 167
第167図　Ⅰ区 SK03平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 168
第168図　Ⅰ区 SK05・06平・断面図（1/40）…… 168
第169図　Ⅰ区 SK07平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 169
第170図　Ⅰ区 SK08平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 169
第171図　Ⅰ区 SK09・11・16平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 170
第172図　Ⅰ区 SK102平・立・断面図（1/40）…… 171
第173図　Ⅰ区 SK102出土遺物（1/2、1/4）…… 172
第174図　Ⅰ区 SK103平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 173
第175図　Ⅱ区 SK18・19平・断面図（1/40）…… 174
第176図　Ⅱ区 SK24・25
遺物出土状況平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 174
第177図　Ⅱ区 SK35平・断面図（1/40）…… 175
第178図　Ⅱ区 SK35
遺物出土状況平・断面図（1/30）…… 176
第179図　Ⅱ区 SK35出土遺物（1/4）…… 177
第180図　Ⅱ区 SK37・38・42平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 178
第181図　Ⅱ区 SK43平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 179
第182図　Ⅱ区 SK109平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 180
第183図　Ⅳ区 SK46平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 180
第184図　Ⅲ区 SK62・63・64、
Ⅳ区 SK47平・断面図（1/40）、
SK62 出土遺物（1/2）…… 181
第185図　Ⅲ区 SK107遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 182

第186図　Ⅲ区 SK108遺物出土状況（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 183
第187図　Ⅵ区 SK70平・断面図（1/40）…… 183
第188図　Ⅲ区 SK49遺物出土状況平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 183
第189図　Ⅰ区 SD05断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 184
第190図　Ⅰ区 SD02・08・09断面図（1/40）、
SD02・08 出土遺物（1/4）…… 184
第191図　Ⅰ区 SD13・15・17・18断面図（1/40）、
SD17遺物出土状況（1/20）、
SD15・17・18出土遺物（1/2、1/4）…… 185
第192図　Ⅱ区 SD21南端部
遺物出土状況平・断面図（1/40）…… 186
第193図　Ⅱ区 SD22断面図（1/40）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 186
第194図　Ⅱ区 SD23・24断面図（1/40）、
SD23出土遺物（1/4）…… 187
第195図　Ⅱ区 SD24出土遺物（1/2、1/4）…… 188
第196図　Ⅱ区 SD25
遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4）…… 189
第197図　Ⅱ区 SD26
遺物出土状況平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/2、1/4）…… 191
第198図　Ⅱ区 SD28・33断面図（1/40）、
SD28出土遺物（1/2）…… 192
第199図　Ⅱ区 SD30遺物出土状況（1/20）、
SD31断面図（1/40）…… 192
第200図　Ⅱ区 SD30出土遺物（1）（1/4）…… 193
第201図　Ⅱ区 SD30出土遺物（2）（1/2）…… 194
第202図　Ⅱ区 SD31出土遺物（1/4）…… 194
第203図　Ⅱ区 SD36・37・38・39断面図（1/40）、
SD36・37・38出土遺物（1/4）…… 195
第204図　Ⅱ・Ⅳ区 SD42・43・44・45・47・48・49
断面図（1/40）、
SD42出土遺物（1/2、1/4）…… 197
第205図　Ⅳ区 SD50・51・52断面図（1/40）、
SD50出土遺物（1/4）、
SD52出土遺物（1/2）…… 199
第206図　Ⅲ区 SD53・54・55・56・57・58・59
断面図（1/40）、SD53・55・56・57・59
出土遺物（1/4）…… 201
第207図　Ⅶ区 SD82断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 201
第208図　Ⅴ・Ⅶ区 SD69断面図（1/40）…… 201
第209図　Ⅵ区 SD63遺物出土状況（1/40）…… 202
第210図　Ⅵ区 SD63断面図（1/40）…… 203
第211図　Ⅵ区 SD63出土遺物（1/2、1/4）…… 204
第212図　Ⅵ区 SD64・65断面図（1/40）、
SD64出土遺物（1/4）…… 205
第213図　Ⅰ区 中世包含層出土遺物（1）（1/4）…… 206
第214図　Ⅰ区 中世包含層出土遺物（2）
（1/2、1/3、1/4）…… 207
第215図　Ⅰ区 中世包含層出土遺物（3）（1/2）…… 208
第216図　Ⅱ区 中世包含層出土遺物（1）（1/4）…… 209
第217図　Ⅱ区 中世包含層出土遺物（2）（1/4）…… 210
第218図　Ⅱ区 中世包含層出土遺物（3）
（1/2、1/4）…… 211
第219図　Ⅰ区 SK02・04・17平・断面図（1/40）…… 212
第220図　Ⅰ区 SK15・Ⅱ区 SK27
平・断面図（1/40）…… 212
第221図　Ⅲ区 SK55・56・57平・断面図（1/40）…… 213
第222図　Ⅲ区 SK58平・断面図（1/40）…… 214
第223図　Ⅲ区 SK60平・断面図（1/40）…… 214
第224図　Ⅲ区 SK61平・断面図（1/40）…… 214
第225図　Ⅲ区 SK66平・断面図（1/40）…… 214
第226図　Ⅴ区 SK73平・断面図（1/40）…… 214
第227図　Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区 SD60・66・67、
SR01断面図（1/40）…… 214
第228図　Ⅰ区 上面精査、機械掘削など出土遺物
（1/2、1/4）…… 217
第229図　Ⅱ区 上面精査、機械掘削など出土遺物
（1/4）…… 219
第230図　Ⅲ～Ⅶ区上面精査、機械掘削など出土遺物
（1/2、1/4）…… 220
第231図　Ⅰ区 予備調査トレンチ出土遺物（1/4）…… 221
第232図　花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル… 232
第233図　弥生（続縄文）時代の碧玉製、緑色凝灰岩
製玉類の原材使用分布圏および碧玉・碧玉
様岩の原産地…… 233

第234図　佐古川・窪田遺跡出土管玉報文番号９
（95043）の蛍光Ｘ線スペクトル…… 234
第235図　佐古川・窪田遺跡出土管玉報文番号10
（95044）の蛍光Ｘ線スペクトル…… 234
第236図　佐古川・窪田遺跡出土管玉報文番号52
（95045）の蛍光Ｘ線スペクトル…… 234
第237図　佐古川・窪田遺跡出土管玉報文番号51
（95046）の蛍光Ｘ線スペクトル…… 235
第238図　碧玉原石のESRスペクトル
（花仙山、玉谷、猿八、土岐）…… 236
第239図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル… 237
第240図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル… 238
第241図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル… 239
第242図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル… 240
第243図　佐古川・窪田遺跡出土管玉の信号（Ⅲ）
のESRスペクトル…… 241
第244図　遺構変遷図（１）（1/1,000）…… 245～246
第245図　遺構変遷図（２）（1/1,000）…… 247～248

表　目　次

第１表　整理作業の工程 …… 2
第２表　発掘調査及び整理作業の体制 …… 2
第３表　各碧玉の原産地における原石群の
　　元素比の平均値と標準偏差値 …… 228
第４表　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の
　　元素比の平均値と標準偏差値 …… 229
第５表　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の
　　元素比の平均値と標準偏差値 …… 230
第６表　佐古川･窪田遺跡出土管玉の分析結果 …… 231
第７表　佐古川･窪田遺跡出土管玉の分析結果 …… 231
第８表　佐古川･窪田遺跡出土弥生時代前期の
　　管玉の原材産地分析結果 …… 242
第９表　周溝墓一覧 …… 250
第10表　掘立柱建物一覧 …… 251

付　図　目　次

付図１　Ⅰ区遺構配置図（1/100）
付図２　Ⅱ区遺構配置図（中世以降、時期不明）（1/100）
付図３　Ⅱ区遺構配置図（古墳時代後期以前）（1/100）
付図４　Ⅲ区遺構配置図（1/100）
付図５　Ⅳ区遺構配置図（1/100）
付図６　Ⅴ・Ⅶ区遺構配置図（1/100）
付図７　Ⅵ区遺構配置図（1/100）
付図８　周溝墓配置図（１）（1/100）
付図９　周溝墓配置図（２）（1/100）
付図10　周溝墓配置図（３）（1/100）

図 版 一 覧

遺 構 図 版

Ⅰ区 全景（東から）
Ⅰ区 北半部（東から）
Ⅰ区 南中央部（東から）
Ⅰ区 中央部（北西から）
Ⅱ区 西部全景（東から）
Ⅱ区 全景（南東から）
Ⅳ区 南半部全景（南から）
Ⅵ区 全景（西から）
Ⅶ区 全景（南東から）
Ⅱ・Ⅲ区 周溝墓１～４全景（南から）
Ⅲ区 周溝墓２・３全景（南から）
Ⅱ・Ⅲ区 周溝墓２～４全景（南から）
Ⅲ区 周溝墓２～４全景（南から）
Ⅲ区 周溝墓５～10検出状況（南西から）
Ⅲ区 周溝墓６・７・８全景（南から）
Ⅲ区 周溝墓６・８全景（南から）
Ⅲ区 周溝墓７・12・13全景（南から）
Ⅲ区 周溝墓７・12・13全景（西から）
Ⅴ区 周溝墓15・16・17・33全景（西から）
Ⅴ区 周溝墓15・16・26全景（北から）
Ⅴ区 周溝墓21・30・17全景（東から）
Ⅶ区 周溝墓34・35・36全景（西から）
Ⅱ区 周溝墓１全景（南東から）
Ⅱ区 周溝墓１全景（西から）
Ⅱ区 周溝墓１遺物出土状況（南から）
Ⅲ区 周溝墓２遺物出土状況（東から）
Ⅲ区 周溝墓２遺物出土状況（北から）
Ⅲ区 周溝墓２遺物出土状況（東から）
Ⅲ区 周溝墓３全景（北西から）
Ⅲ区 周溝墓３主体部木棺痕跡検出状況（南西から）
Ⅲ区 周溝墓３主体部（北東から）
Ⅲ区 周溝墓３主体部床面管玉検出状況（南西から）
Ⅲ区 周溝墓４全景（南から）
Ⅲ区 周溝墓４土層（東から）
Ⅲ区 周溝墓５全景（西から）
Ⅲ区 周溝墓５遺物出土状況（南から）
Ⅲ区 周溝墓６全景（南から）
Ⅲ区 周溝墓６全景（西から）
Ⅲ区 周溝墓６遺物出土状況（南から）
Ⅲ区 周溝墓６遺物出土状況（西から）
Ⅲ区 周溝墓６土層（北から）
Ⅲ区 周溝墓７全景（西から）
Ⅲ区 周溝墓７遺物出土状況（西から）
Ⅲ区 周溝墓７土層（東から）
Ⅲ区 周溝墓７土層（南東から）
Ⅲ区 周溝墓７土層（西から）
Ⅲ区 周溝墓７土層（北東から）
Ⅲ区 周溝墓８全景（南東から）
Ⅲ区 周溝墓８木棺痕跡東部（北から）
Ⅲ区 周溝墓８遺物出土状況（東から）
Ⅲ区 周溝墓８南半溝遺物出土状況（東から）
Ⅲ区 周溝墓８土層（西から）
Ⅲ区 周溝墓８土層（北東から）
Ⅲ区 周溝墓９南側周溝土層（北西から）
Ⅲ区 周溝墓10・SH05 全景（北西から）
Ⅲ区 周溝墓11・13全景（南から）
Ⅲ区 周溝墓12・13土層（北から）
Ⅲ区 周溝墓13土層（北から）
Ⅴ区 周溝墓16・17土層（北西から）
Ⅴ区 周溝墓16・26南西隅土層（東から）
Ⅴ区 周溝墓17全景（西から）
Ⅴ区 周溝墓17土層（西から）
Ⅴ区 周溝墓17・27南周溝遺物出土状況（西から）
Ⅴ区 周溝墓17・33交差部土層（北東から）
Ⅴ区 周溝墓18・29西溝遺物出土状況（北から）
Ⅶ区 周溝墓19全景（南東から）
Ⅶ区 周溝墓19主体部全景（南から）
Ⅶ区 周溝墓19主体部木棺痕跡検出状況（北東から）
Ⅶ区 周溝墓19主体部土層（北から）
Ⅶ区 周溝墓19・37間土層（東から）
Ⅴ区 周溝墓21全景（北東から）
Ⅴ区 周溝墓21遺物出土状況（西から）
Ⅴ区 周溝墓21土層（西から）
Ⅵ区 周溝墓22全景（南から）
Ⅵ区 周溝墓22土層（北から）
Ⅵ区 周溝墓22・23全景（南から）
Ⅵ区 周溝墓23土層（東から）

Ⅲ区 周溝墓24全景（南東から）
Ⅲ区 周溝墓24遺物出土状況（北から）
Ⅴ区 周溝墓28遺物出土状況（北から）
Ⅶ区 周溝墓31全景（南西から）
Ⅶ区 周溝墓31遺物出土状況（東から）
Ⅶ区 周溝墓31遺物出土状況（北から）
Ⅶ区 周溝墓31遺物出土状況（南から）
Ⅶ区 周溝墓31遺物出土状況（北東から）
Ⅶ区 周溝墓31土層（東から）
Ⅶ区 周溝墓31土層（西から）
Ⅶ区 西壁土層（周溝墓31部分）（東から）
Ⅶ区 周溝墓32全景（北西から）
Ⅶ区 周溝墓32遺物出土状況（東から）
Ⅶ区 周溝墓33・34境付近遺物出土状況（東から）
Ⅶ区 周溝墓33・34ベルト土層（北から）
Ⅶ区 周溝墓34全景（南東から）
Ⅶ区 周溝墓34主体部土層（東から）
Ⅶ区 周溝墓34土層（東から）
Ⅶ区 周溝墓34土層（西から）
Ⅶ区 周溝墓37遺物出土状況（東から）
Ⅶ区 周溝墓37全景（南東から）
Ⅶ区 周溝墓38遺物出土状況（南から）
Ⅶ区 周溝墓38遺物出土状況（北から）
Ⅶ区 周溝墓39主体部検出状況（南から）
Ⅶ区 周溝墓39主体部土層（西北から）
Ⅶ区 周溝墓40全景（南から）
Ⅱ区 SP566遺物出土状況（北から）
Ⅰ区 SK01検出状況（東から）
Ⅰ区 SK01土層（東から）
Ⅰ区 SK01遺物出土状況（北から）
Ⅰ区 SK01遺物出土状況（東から）
Ⅰ区 SK01遺物出土状況（南から）
Ⅰ区 SK10遺物出土状況（東から）
Ⅱ区 SK106南東隅遺物出土状況（南から）
Ⅲ区 SH03全景（北から）
Ⅲ区 SH04遺物出土状況（南から）
Ⅲ区 SH04全景（南東から）
Ⅲ区 SH04遺物検出状況（南から）
Ⅲ区 SH05全景（南から）
Ⅲ区 SH05炭化材検出状況（北西から）
Ⅲ区 SH05床面検出状況（北西から）
Ⅲ区 SH06遺物出土状況（東から）
Ⅲ区 SH06全景（北から）
Ⅲ区 SH06遺物出土状況（東から）
Ⅱ区 SK41土層（北から）
Ⅲ区 SK49遺物出土状況（南から）
Ⅲ区 SK52土層（東から）
Ⅰ区 SD01（上層）遺物出土状況
Ⅰ区 SD01上層流路全景（南西から）
Ⅰ区 SD01中層上面遺物出土状況（西から）
Ⅰ区 SD01土層（西から）
Ⅰ区 SD01土層（南西から）
Ⅰ区 SD14土層（南から）
Ⅰ区 SD14土層（北から）
Ⅰ区 SH01全景（東から）
Ⅰ区 SH01遺物出土状況（北から）
Ⅰ区 SH02上位層除去後全景（北から）
Ⅰ区 SH02床面検出状況（北から）
Ⅰ区 SH02床面ピット遺物出土状況（東から）
Ⅶ区 SH07全景（西から）
Ⅶ区 SH07窯部分（南から）
Ⅰ区 SB02全景（南から）
Ⅰ区 SB02・SB06全景（西から）
Ⅰ区 SB07全景（北から）
Ⅰ区 SB08全景（北から）
Ⅱ区 SB13全景（南から）
Ⅱ区 SB13全景（北から）
Ⅲ区 SB15全景（南から）
Ⅴ区 SB18全景（南から）
Ⅶ区 SB23全景（南西から）
Ⅱ区 SK34遺物出土状況（東から）
Ⅱ区 SK34南北土層（西から）
Ⅱ区 SK34遺物出土状況（北西から）
Ⅱ区 SK34下位遺物出土状況（北から）
Ⅱ区 SK40遺物出土状況（南東から）
Ⅱ区 SK40遺物出土状況（南西から）
Ⅱ区 SK40下位遺物出土状況（取り上げ No.15）
（西から）
Ⅰ区 SD03遺物出土状況（北西から）
Ⅰ区 SD20遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SD20中層流路（西）区画②遺物出土状況
（北から）
Ⅱ区 SD20中層区画④西端部遺物出土状況（南から）
Ⅰ区 SD20下層上面遺物出土状況（北から）

Ⅱ区 SD20区画①流路B土層（北から）
Ⅱ区 SD20・29中層流路完掘状況（南から）
Ⅱ区 SD29全景（西から）
Ⅱ区 SD29中層下位遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SD29区画①アゼ２土層（北西から）
Ⅱ区 SD29区画①アゼ土層（北東から）
Ⅱ区 SD29区画②下層遺物出土状況（東から）
Ⅱ区 SD29区画②アゼ２土層（西から）
Ⅱ区 SD29区画④アゼ５土層（東から）
Ⅱ区 SD29区画④アゼ５土層（南西から）
Ⅲ区 SD29土層（東から）
Ⅱ区 SD40アゼ１土層（北から）
Ⅴ区 SX35土層（北から）
Ⅴ区 SX36土層（西から）
Ⅰ区 SB10全景（西から）
Ⅰ区 SB10全景（東から）
Ⅰ区 SB10－10土層（南西から）
Ⅶ区 SB21全景（南西から）
Ⅰ区 SP06遺物出土状況（南から）
Ⅶ区 SP71遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SP422遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SP423遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SP448遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SP569遺物出土状況（南から）
Ⅲ区 SP810遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SP2001遺物出土状況（南から）
Ⅲ区 SE02遺物出土状況（南から）
Ⅲ区 SE02井戸枠検出状況（南から）
Ⅲ区 SE02井戸枠検出状況（東から）
Ⅲ区 SE02井戸枠下端検出状況（南から）
Ⅲ区 SE02井戸枠下端曲物検出状況（西から）
Ⅲ区 SE02井筒検出状況（南から）
Ⅲ区 SE02土層（東から）
Ⅲ区 SE02（南から）
Ⅰ区 SK102全景（南から）
Ⅰ区 SK102石積上面検出状況（南から）
Ⅰ区 SK102遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SK35遺物出土状況（東から）
Ⅱ区 SK35土層（西から）
Ⅲ区 SK107遺物出土状況（南から）
Ⅰ区 SD02土層（南西から）
Ⅰ区 SD07遺物出土状況
Ⅰ区 SD09遺物出土状況（南西から）
Ⅱ区 SD21～24全景（南から）
Ⅱ区 SD24土層（東から）
Ⅱ区 SD25遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SD25遺物出土状況（北から）
Ⅱ区 SD26遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SD26遺物出土状況（東から）
Ⅶ区 SD44土層（北から）
Ⅵ区 SD63全景（南から）
Ⅵ区 SD63区画②遺物出土状況（北から）
Ⅵ区 SD63土層区画①の南側（北から）
Ⅱ区 中世包含層上面ピット検出状況（南から）
Ⅰ区 SP110遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 SB11全景（南から）
Ⅱ区 SB11全景（西から）
Ⅱ区 SB12全景（南から）
Ⅱ区 SD20・29全景（南東から）
Ⅱ区 SK25遺物出土状況（西から）
Ⅰ区 SP05遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 礎石１・２遺物出土状況（北から）
Ⅱ区 礎石２遺物出土状況（南から）
Ⅱ区 中世遺構全景（西から）

遺　物　図　版

Ⅱ区 周溝墓１
Ⅲ区 周溝墓２
Ⅲ区 周溝墓６
Ⅲ区 周溝墓７
Ⅲ区 周溝墓８
Ⅲ区 周溝墓24
Ⅶ区 周溝墓31
Ⅶ区 周溝墓32
Ⅴ区 周溝墓15
Ⅴ区 周溝墓16南溝
Ⅴ区 周溝墓17付近上面精査
Ⅴ区 周溝墓17南溝
Ⅶ区 周溝墓33
Ⅴ区 周溝墓18西溝
Ⅴ区 周溝墓21
Ⅴ区 周溝墓28
Ⅶ区 周溝墓34主体部
Ⅶ区 周溝墓35（23）
Ⅶ区 周溝墓37・39（45）－（47）アゼ
Ⅶ区 周溝墓38
Ⅶ区 周溝墓39主体部
Ⅱ区 SP566
Ⅰ区 SK01
Ⅰ区 SK10
Ⅱ区 SK106
Ⅲ区 SK31
Ⅱ区 SD41
Ⅲ区 SH03
Ⅲ区 SH04
Ⅲ区 SH05
Ⅲ区 SH06
Ⅲ区 SK50
Ⅲ区 SK101
Ⅰ区 SD01 中・下層
Ⅰ区 SD01 中層
Ⅰ区 SD01中・上層
Ⅰ区 SD14上層
Ⅰ区 SH01
Ⅰ区 SH02
Ⅶ区 SH07上層
Ⅶ区 SH07
Ⅱ区 SB13－5
Ⅱ区 SK104
Ⅱ区 SK34
Ⅱ区 SK40
Ⅰ区 SD03
Ⅱ区 SD40
Ⅶ区 SD83
Ⅱ区 古墳時代包含層
Ⅱ区 SD20 流路下層
Ⅱ区 SD20 下層
Ⅰ・Ⅱ区 SD20 中層
Ⅱ区 SD20 流路中層
Ⅰ・Ⅱ区 SD20 上層
Ⅱ区 SD20 流路上層
Ⅱ区 SD20 その他
Ⅱ区 SD20・29 分岐点
Ⅰ区 SD20 付近遺構精査
Ⅱ・Ⅳ区 SD29 下層
Ⅱ・Ⅳ区 SD29 中層
Ⅱ・Ⅳ区 SD29 上層
Ⅱ区 SD29 層位不明
Ⅴ区 SX35
Ⅱ区 SB11－1
Ⅶ区 SB21－7
Ⅰ区 SP005
Ⅰ区 SP006
Ⅰ区 SP110
Ⅰ区 SP149
Ⅰ区 SP240
Ⅰ区 SP276
Ⅰ区 SP284
Ⅰ区 SP288
Ⅰ区 SP290
Ⅰ区 SP344
Ⅰ区 SP102
Ⅰ区 SP304
Ⅰ区 SP386（a）
Ⅱ区 SP420
Ⅱ区 SP423
Ⅱ区 SP448
Ⅱ区 SP2001
Ⅱ区 礎石１、礎石２

Ⅱ区 SP469
Ⅱ区 SP427
Ⅱ区 SP472上層
Ⅱ区 SP572
Ⅲ区 SP2005
Ⅲ区 SP2004
Ⅴ区 SP783
Ⅲ区 SE02
Ⅰ区 SK03
Ⅰ区 SK07
Ⅰ区 SK102
Ⅰ区 SK103
Ⅱ区 SK25
Ⅱ区 SK35
Ⅱ区 SK109
Ⅲ区 SK62
Ⅲ区 SK107
Ⅰ区 SD17
Ⅰ区 SD17・18 上面精査
Ⅱ区 SD22
Ⅱ区 SD24
Ⅱ区 SD25
Ⅱ区 SD26
Ⅱ区 SD28
Ⅱ区 SD30
Ⅱ区 SD36
Ⅱ区 SD42
Ⅳ区 SD52
Ⅲ区 SD59
Ⅶ区 SD82
Ⅵ区 SD63
Ⅱ区 中世包含層
Ⅰ区 上面精査・機械掘削・中世包含層
Ⅰ区 SD01上・中世包含層
Ⅰ区 中世包含層
Ⅱ区 中世包含層
Ⅱ区 北側側溝
Ⅱ区 上面精査
Ⅴ区 周溝墓群上面精査
Ⅴ区 上面精査
Ⅶ区 周溝墓34の北側上面精査
Ⅶ区 西半部上面精査
Ⅶ区 上面精査

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯

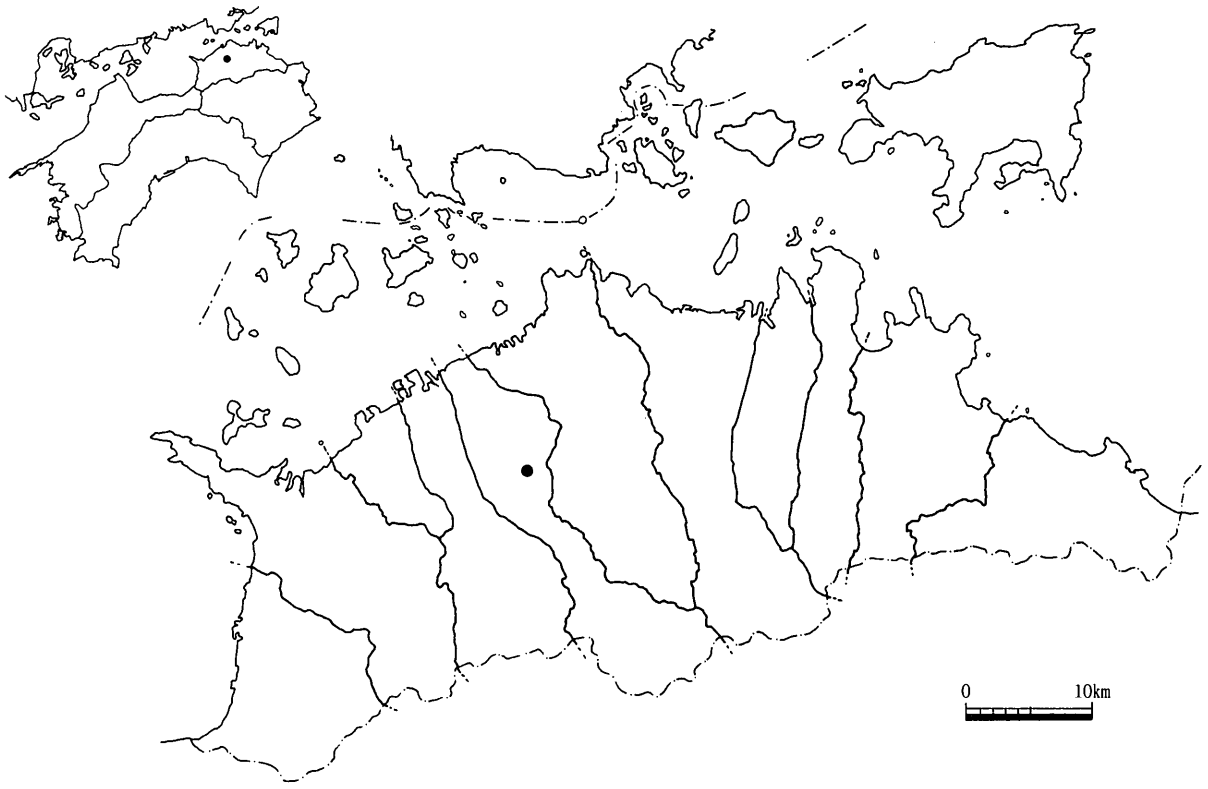
国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財の保護については、これまで香川県教育委員会と国土交通省四国地方整備局との間で適宜協議を行い、適切な保護に努めてきた。中讃地域の主要幹線道路として整備が進められている一般国道32号バイパスのうち、綾南バイパスと綾歌バイパスについては、平成７年12月20日付け建四香第1755号で埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについての照会があり、10地区37箇所の埋蔵文化財の所在を確認している。

平成８年度には、このうち用地買収がまとまって完了した津畑地区（佐古川・窪田遺跡Ⅰ・Ⅱ区に相当）の試掘調査を行った。その結果対象地全域で中世の集落が密集して広がり、中央部では須恵器が出土する旧河道を検出したことにより、全域についての保護措置が必要と判断された。

第２節　調査の経過

平成９年度には香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成９年４月１日付で締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、５月28日から佐古川・窪田遺跡の発掘調査を実施した。当初の対象面積は5,685㎡であったが、調査期間中に弥生時代前期後半～中期初頭の周溝墓群が存在することが明らかになり、調査対象地より東側へ広がっている可能性が高くなったため、建設省香川工事事務所（当時）と協議を行い、路線内の対象地東側で確認調査を行った。その結果周溝墓群が当初の対象地よりさらに東側へ広がることが明らかとなり、佐古川・窪田遺跡の全面積は8,219㎡となった。平成９年度はこのうち6,844㎡の調査を実施することとし、残りは平成10年度に調査を実施することになった。

平成10年度は、前年度発掘調査を実施しなかった残りの1,375㎡について、４月～６月の３ヶ月間で発掘調査を行い、佐古川・窪田遺跡の発掘調査は終了した。



第１図　遺跡位置図（１）

第3節　整理作業

整理作業は平成16年4月1日に開始し、平成17年3月31日に終了した。整理作業の工程は第1表のとおりである。

区分	工程	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
職員	整理指導	═	═	═	═	═	═	═	═	═	═	═	═
	原稿執筆								═	═	═	═	═
遺物	接合・復元	═	═										
	実測・拓本		═	═	═	═	═						
	レイアウト						═	═					
	トレース							═	═	═	═	═	
	観察表				═	═	═						
	写真撮影										═		
	写真レイアウト											═	
遺構	レイアウト						═	═					
	トレース							═	═	═	═	═	
	写真レイアウト											═	
印刷	編集												═
その他	台帳類の作成										═	═	
	遺物収納												═

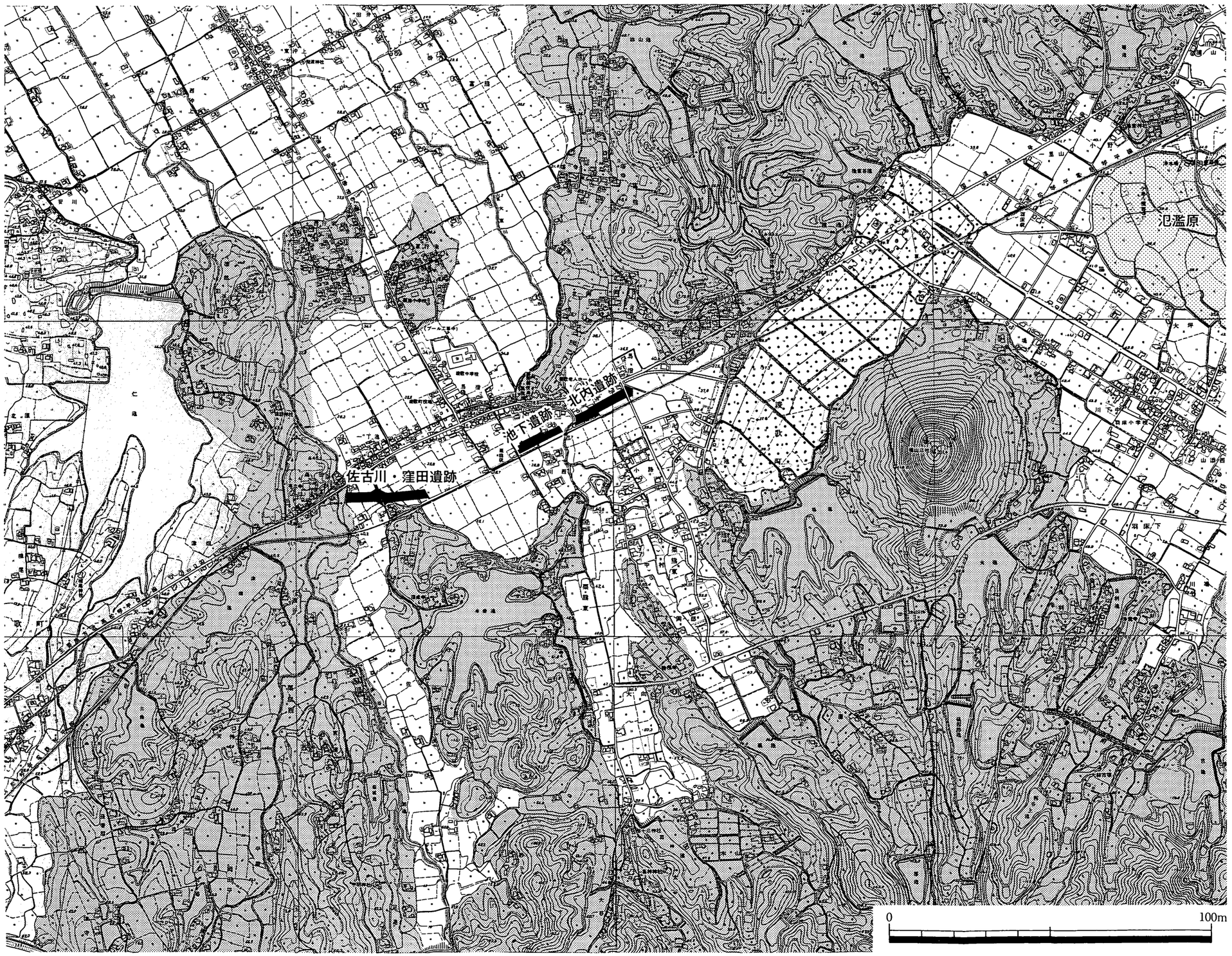
第1表　整理作業の工程

第4節　発掘調査及び整理作業の体制

平成9・10年度の発掘調査及び平成16年度の整理作業の体制は第2表のとおりである。

発掘調査					整理作業		
香川県教育委員会							
	平成9年度		平成10年度		平成16年度		
総括	課長	菅原　良弘	課長	小原　克己	総括	課長	北原　和利
	課長補佐	北原　和利	課長補佐	北原　和利	総務・芸術	課長補佐	森岡　修
	副主幹	渡部　明夫	副主幹	渡部　明夫	文化グループ	主任	香川　浩章
			副主幹兼係長	西村　隆史		主任	堀本　由紀
総務	係長	山崎　隆	係長	中村　禎伸		主任主事	八木　秀憲
	主査	星加　宏明（～5.31）	主査	三宅　陽子	文化財	課長補佐	大山　真充
	主事	松村　崇史（6. 1～）	主査	松村　崇史	グループ	主任	山下　平重
	主事	打越　和美				文化財専門員	佐藤　竜馬
埋蔵文化財	文化財専門員	木下　晴一	係長	西村　尋文		主任技師	松本　和彦
	技師	塩崎　誠司	技師	塩崎　誠司			
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター					香川県埋蔵文化財センター		
総括	所長	大森　忠彦	所長	菅原　良弘	総括	所長	中村　仁
	次長	小野　善範	次長	小野　善範		次長	渡部　明夫
総務	係長	田中　秀文（6. 1～）	参事	別枝　義昭		課長	野保　昌弘
	主査	前田　和也（～5.31）	副主幹兼係長	田中　秀文		係長	松崎日出穂
	主事	佐々木　隆	主査	西川　大（～5.31）	総務	主査	塩崎かおり
			主査	新　一郎（6. 1～）		主査	田中　千晶
調査	参事	近藤　和史	参事	長尾　重盛			
	主任文化財専門員	藤好　史郎	主任文化財専門員	藤好　史郎	資料普及課	課長（兼務）	渡部　明夫
	文化財専門員	佐藤　竜馬	技師	乗松　真也		文化財専門員	山元　素子
	文化財専門員	川井　國博	文化財専門員	川井　國博			
	調査技術員	中山　尚子	調査技術員	中村　文枝			
整理作業員	岡野　雅子、境　敦子、田井　景子、東川真希子、森澤　千尋、米田　静恵						

第2表　発掘調査及び整理作業の体制



第２図　遺跡位置図（２）

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

佐古川・窪田遺跡は丸亀市綾歌町（旧綾歌郡綾歌町）栗熊字佐古川・窪田に位置する。旧綾歌町は、南側には城山、猫山、高見峰の連なる丘陵地が控え、北西側を横山がある丘陵により、西側を堤山や横山から延びる丘陵地に遮られる。東南部は台地上を呈し、平野部はごく限られた地域である。その中を大束川の支流である東大束川、中大束川、馬指川等が北流する。佐古川・窪田遺跡はそのうちの中大束川の東岸に位置する。

中大束川のすぐ東側に位置するⅠ区が最も高燥な場所に位置し、東へ向って低地へと連なり、栗熊地区においては予備調査の結果低湿地となっていて土地開発が及んでいなかったことがわかっている。

第2節　歴史的環境

旧石器時代の遺跡は旧綾歌町内では見つかっていない。

縄文時代の遺跡としては、遺構としては確認されていないものの、行末西遺跡、佐古川遺跡で縄文時代晩期の土器が出土しているほか、佐古川・窪田遺跡でも縄文時代後期の土器が出土する。したがって、縄文時代後期～晩期にかけてすでに人々が居住していたことが窺える。

弥生時代前期には行末遺跡において竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構等を検出した。竪穴住居跡の炉跡からは炭化した籾も出土した。弥生時代後期では佐古川遺跡で、多数の住居跡と環濠を備えた、拠点的と考えられる集落跡を検出し、また、佐古川遺跡の北側に位置する行末西遺跡でも同様の遺構を検出した。次見遺跡でも弥生時代後期末の集落跡を検出した。

弥生時代においては墳墓群が知られる。佐古川・窪田遺跡のすぐ南側の丘陵地には石塚山古墳群、南側の丘陵地帯では平尾墳墓群、定連池東墳墓群等の、弥生時代後期から古墳時代前期まで続く墳墓群が営まれる。また、佐古川・窪田遺跡においては弥生時代前期後半～中期初頭の周溝墓群が検出され、注目を浴びた。

古墳時代前期には、横山山塊最南端の丘陵上に快天山古墳が築造される。全長約100mの前方後円墳で、周囲には埴輪が立てられていたことがわかっている。3基の刳抜式割竹形石棺からは、方格規矩四神鏡、武器類、玉類、工具類等が出土した。この地域の有力首長一族の墳墓と考えられる。北方の横山山塊では横山経塚、奥川内、陣ノ丸、地神山等の古墳群が分布する。横山経塚は前方後円墳を含む積石墳墓群、陣ノ丸古墳群、奥川内古墳群はいずれも軸長40m以下の前方後円墳である。栗熊低地を挟んで南側の丘陵地では小型前方後円墳を含む石塚山古墳群、平尾墳墓群、定連池東丘古墳群、休場池東丘古墳群、原竜王山古墳群等の小規模墳墓群が分布する。これらの形成は古墳時代前期が中心のようであるが、なかには弥生時代後期にまで遡るものもある。

古墳時代中期後半～後期前半の古墳は、羽床盆地縁辺部と岡田台地に集中し、横山山塊や南側の丘陵地では希薄になる。岡田台地では車塚古墳を盟主とする万塚古墳群が営まれる。後期後半では宇閇神社古墳等で横穴式石室が築造される。

集落遺跡は行末西遺跡、佐古川遺跡等で確認される程度である。

古代の状況についてはあまりわかっていない。

中世においては『近衛家所領目録』（1253）や『御分国讃岐国の条』、『大報恩寺領目録』に栗熊庄の名が見られ、13世紀末～14世紀にかけて当地が近衛家領や昭慶門院領、京都の大報恩寺領であったことがわかる。平成11年に発掘調査された池下遺跡では中世の集落跡が検出されたほか、土坑墓が2基検出された。当該期の集落跡は佐古川・窪田遺跡でも検出されている。

綾南町との境には渡池の堤防が残る。渡池は寛永17年の讃岐國大絵図に見える溜池で、現在でも東側と西側

に堤防が残る。北側と南側は丘陵地を利用し、西南部より綾川の氾濫を利用して溜池としたのであろう。渡池の築造は16世紀以降と考えられ、17世紀頃には干拓されたと考えられるが、生駒氏が入部した後には、西嶋八兵衛による亀越池の築造、松平頼重入部後の矢延平六による小津森池や滝鼻出水、仁池、大窪池等の築造により耕地面積は拡大し、農業生産量は格段に上がっていったと考えられる。

〈参考文献〉

綾歌町　1971『綾歌町史』

国木健司　1990『石塚山古墳群』綾歌町教育委員会

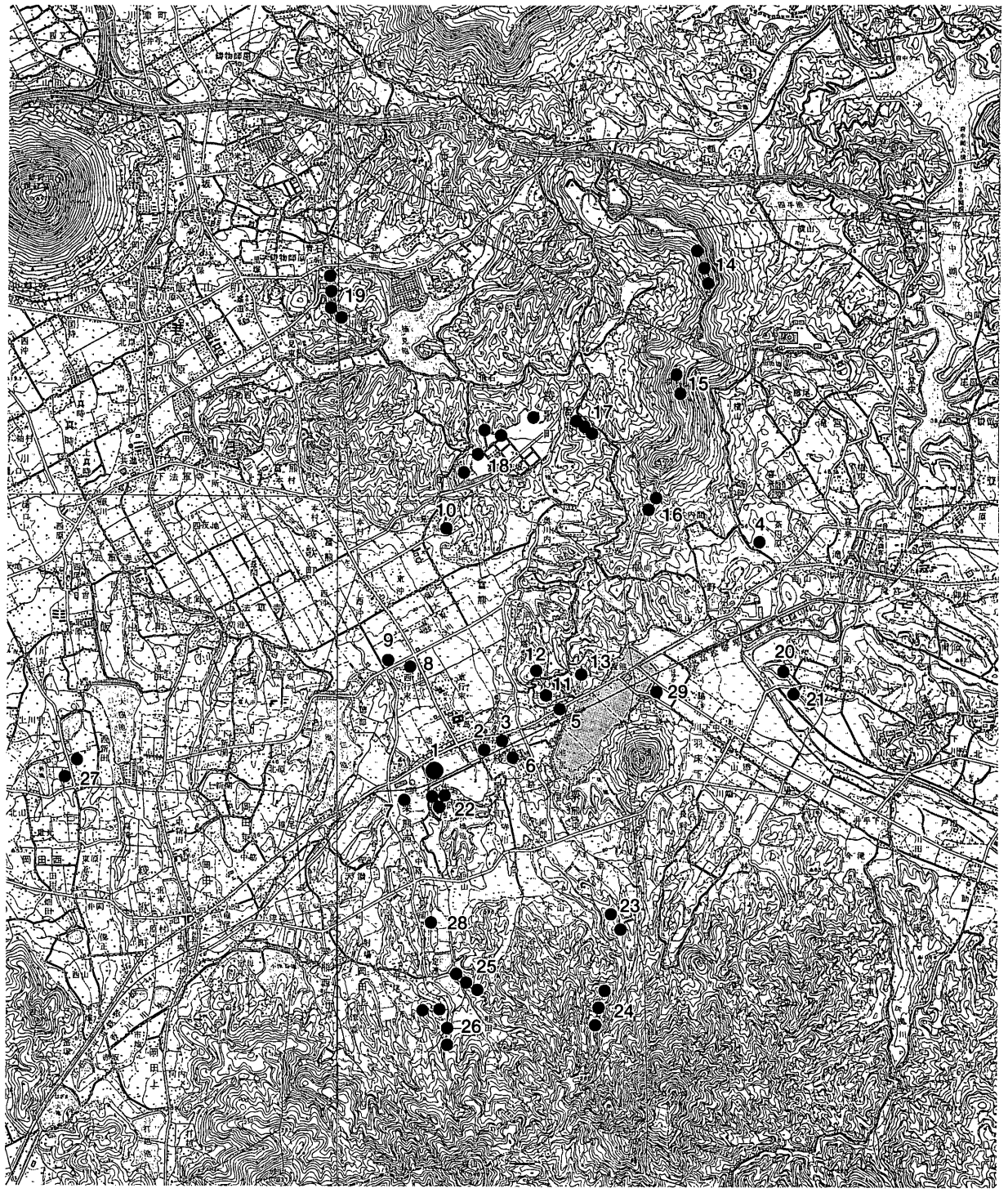
1998『平尾墳墓群』綾歌町教育委員会

近藤武司　1994「定連遺跡」『香川県埋蔵文化財年報』平成５年度　香川県教育委員会

1996「行末西遺跡」『香川県埋蔵文化財年報』平成７年度　香川県教育委員会

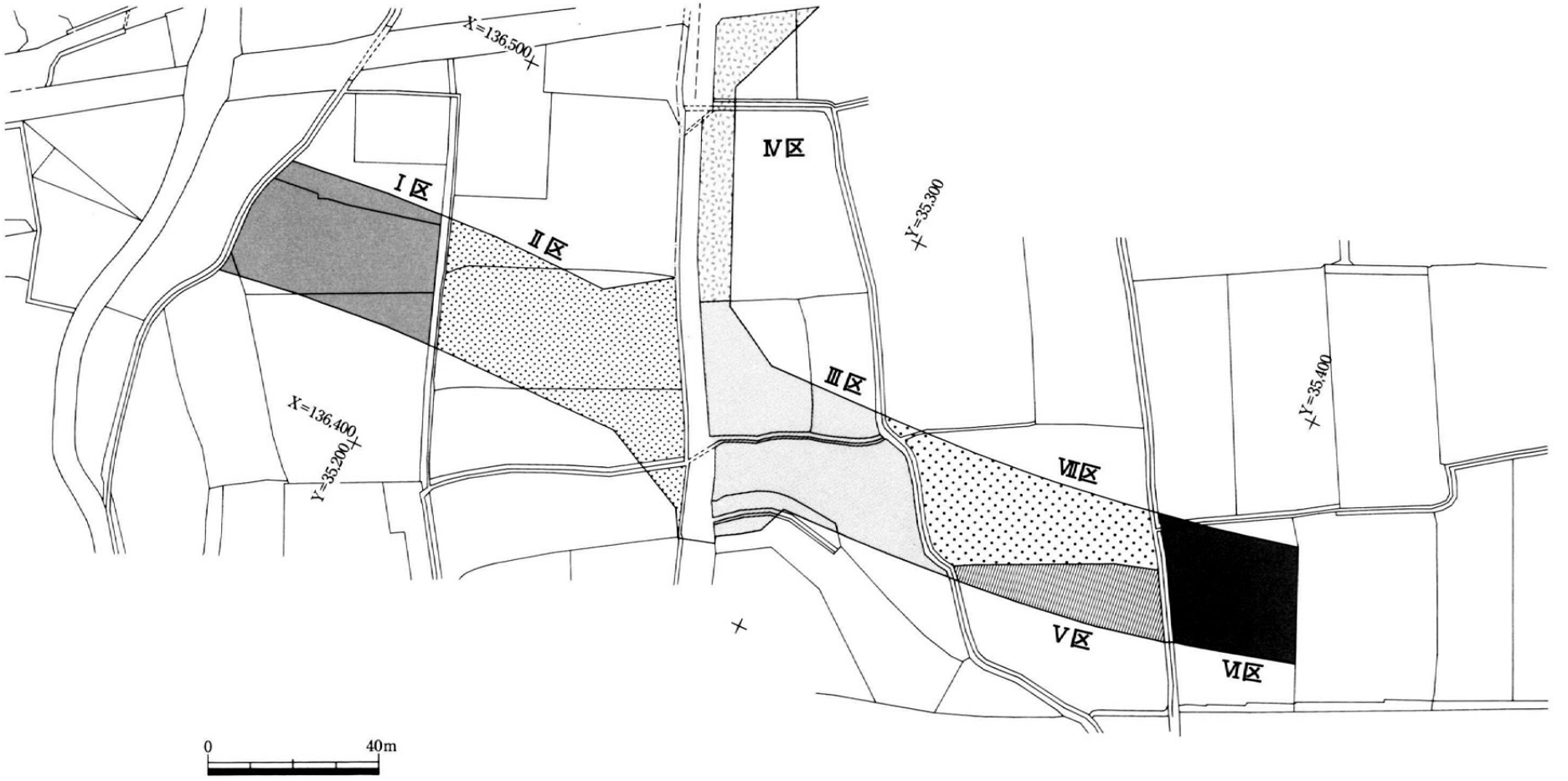
1996「佐古川遺跡」『香川県埋蔵文化財年報』平成７年度　香川県教育委員会

大久保徹也　2002「快天山古墳発掘調査報告書」綾歌町教育委員会

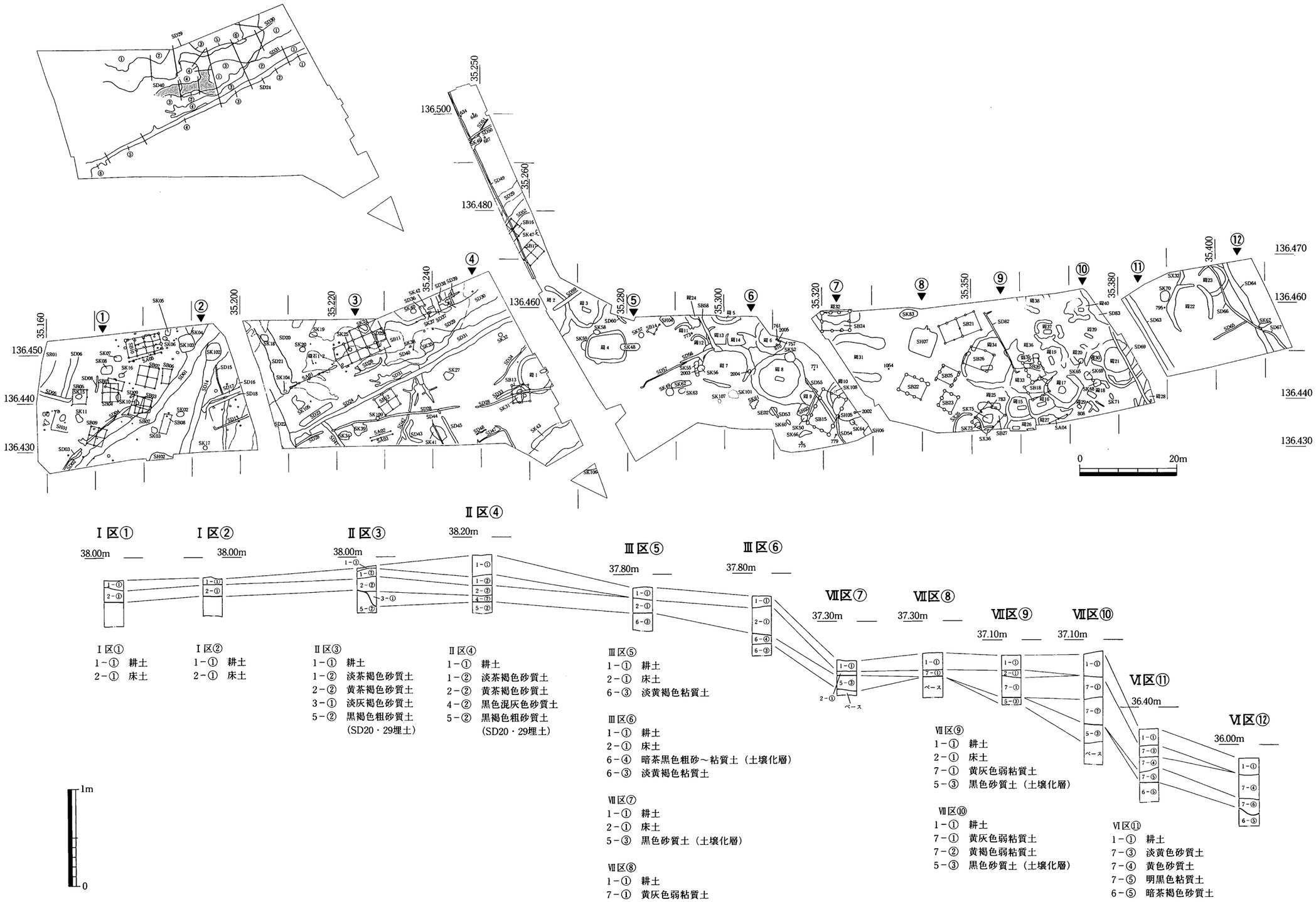


1．佐古川・窪田遺跡　2．池下遺跡　3．北内遺跡　4．白梅遺跡
5．住吉遺跡　6．栗熊遺跡　7．佐古川遺跡　8．行末遺跡
9．行末西遺跡　10．次見遺跡　11．快天山古墳　12．薬師山古墳
13．住吉神社頂上古墳　14．横立山経塚古墳群　15．横峰古墳群　16．奥川内古墳群
17．陣ノ丸古墳群　18．地神山古墳群　19．城山古墳群　20．津頭西古墳
21．津頭東古墳　22．石塚山墳墓群　23．原竜王山古墳群　24．休場池東墳墓群
25．定蓮池東墳墓群　26．平尾墳墓群　27．岡田万塚古墳群　28．宇閇神社古墳
29．渡池

第3図　周辺の遺跡（1/50,000）



第4図　調査区割図（1/1,500）



第５図　遺構配置図および土層柱状図（ 1/800、1/20 ）

第3章　調査の成果

第1節　土層序

①②Ⅰ・Ⅱ区北壁土層（第6図）

Ⅰ区は厚さ約20cmの耕作土・床土の下部で淡黄色粘土のベースを検出した。遺構面のレベルはほぼ37.60mである。

Ⅱ区では厚さ40～50cmの耕作土・床土の下部に厚さ10cm前後の黒色混灰色砂質土（中世包含層）、厚さ8～20cmの黒褐色粗砂質土（古墳時代包含層）が堆積する。中世包含層は西側でやや厚く、古墳時代包含層は東側でやや厚く堆積する。SD20·29は古墳時代包含層を除去した後に検出した。遺構面のレベルは37.45m前後である。

③④⑤Ⅲ・Ⅶ・Ⅵ区北壁土層（第6・7図）

Ⅲ区では包含層はなくなり、厚さ20～40cmの耕作土・床土の下部に淡黄褐色粘質土のベースを検出した。耕作土・床土の堆積は東ほど厚い。Ⅲ区東半部ではベースの土壌化が著しく、ベース上面は暗茶黒色粗砂～粘質土を呈する。西半部では遺構面のレベルは37.45mであったが、ベースの土壌化が進む付近から遺構面が徐々に下がり始め、37.20m前後となる。この付近から東側で周溝墓群が広がる。

Ⅶ区では厚さ10～20cm程度の耕作土・床土の下部に黒色砂質土層の広がりが認められた。Ⅲ区の土層堆積状況から考えればこの土層はベースの土壌化層の可能性があろうが、この面では遺構を識別することはできなかった。遺構面のレベルは36.45～36.70m程度で、東へ向けて下がる。

Ⅵ区では厚さ30～40cmの耕作土・床土の下部に厚さ23cm前後の明黒色粘質土・淡茶褐色砂質土の包含層が堆積する。包含層はほぼ均一に堆積する。遺構は包含層の下部で検出した。

⑥⑦Ⅰ・Ⅱ区南壁土層（第8図）

Ⅰ区では厚さ25～30cm程度の耕作土・床土の下部で、途切れ途切れに8～12cmの淡褐黄色・淡褐灰色シルトの包含層（中世包含層）が堆積する。堆積は部分的で、全面を覆うものではない。中世の遺構は包含層の除去後に検出した。ベースは淡黄色・淡黄褐色粘土である。遺構面のレベルは37.60～37.70mである。

Ⅱ区では厚さ12～24cmの耕作土・床土の下部で遺構面を検出した。包含層の堆積は認められない。遺構面のレベルは37.90mである。

⑧Ⅴ区南壁土層（第8図）

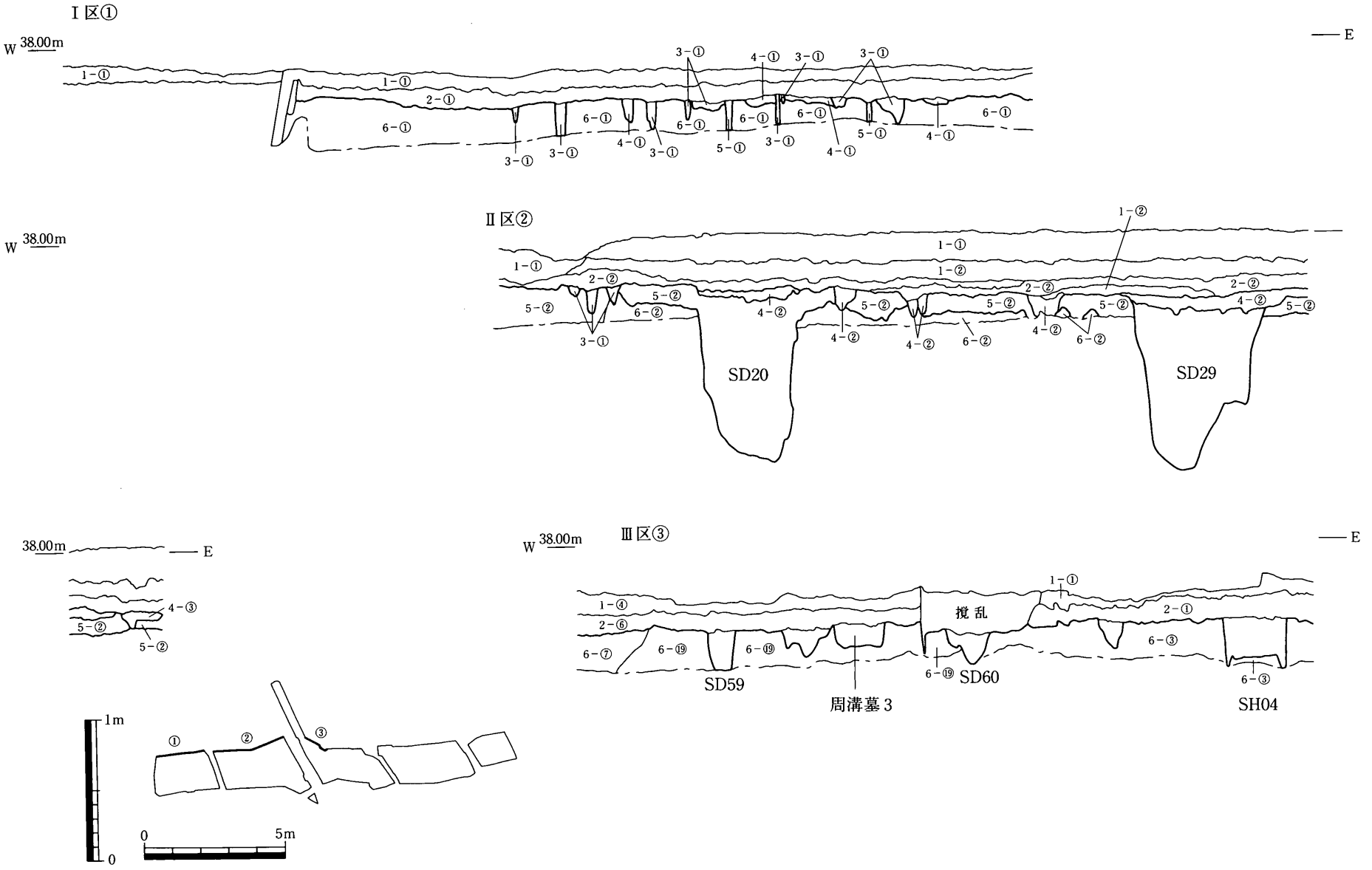
Ⅴ区は耕作土・床土の下部で暗黒褐色粗砂のベースの土壌化層を検出した。ベースまでの厚さは西端では14cmであるが、東側ほど厚くなり、東端では58cmを測る。遺構面のレベルは35.30～36.50mで、東へ向けて徐々に低くなる。

⑨Ⅰ区西壁土層（第9図）

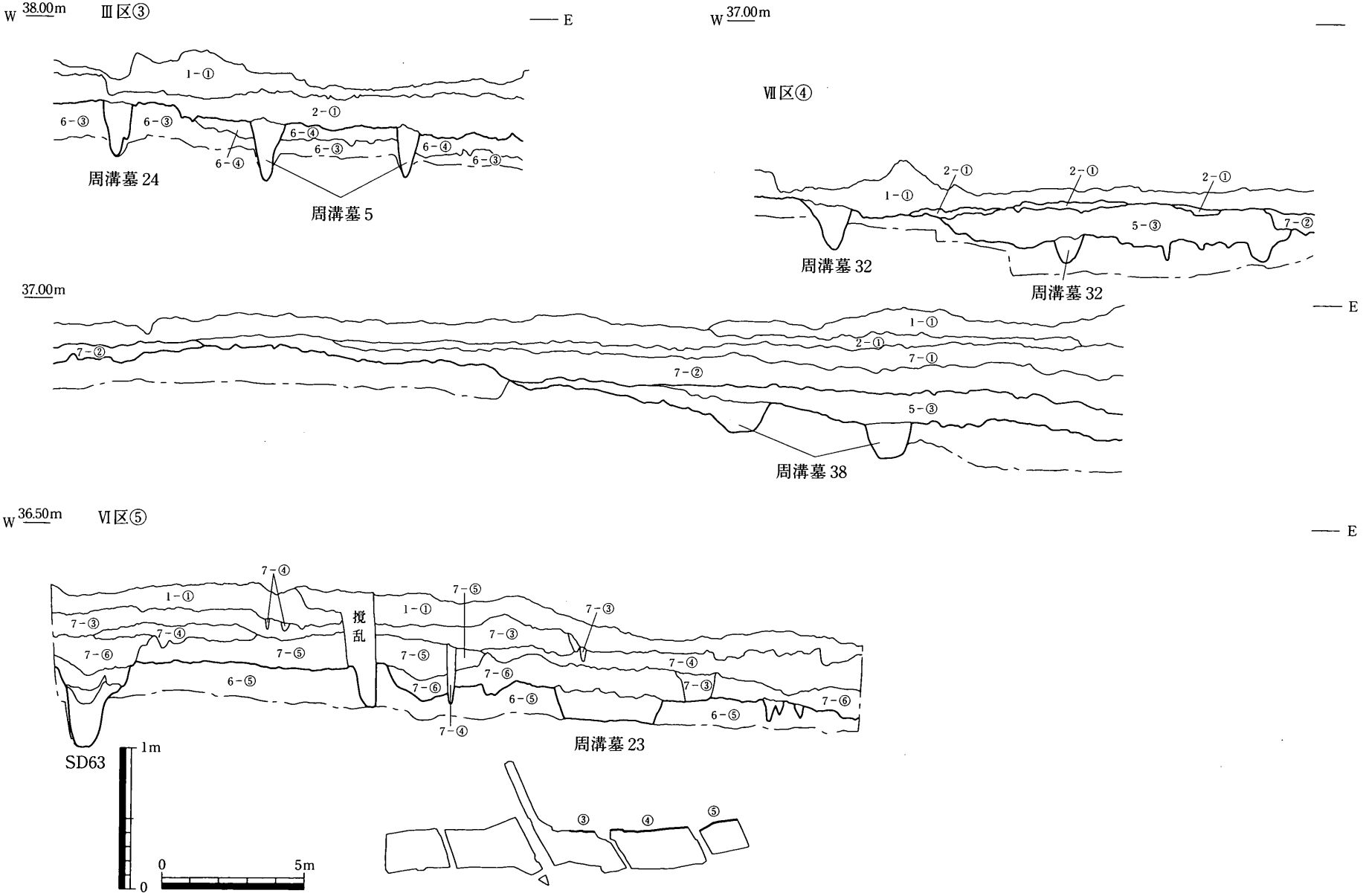
北端部と南端部付近では厚さ20～30cmの耕作土・床土の下部に淡黄褐色粘土のベースを検出したが、中央部付近では厚さ最大30cmの暗灰褐色砂質土の中世包含層が堆積していた。遺構面のレベルは37.75mである。

⑩Ⅰ区東壁土層（第9図）

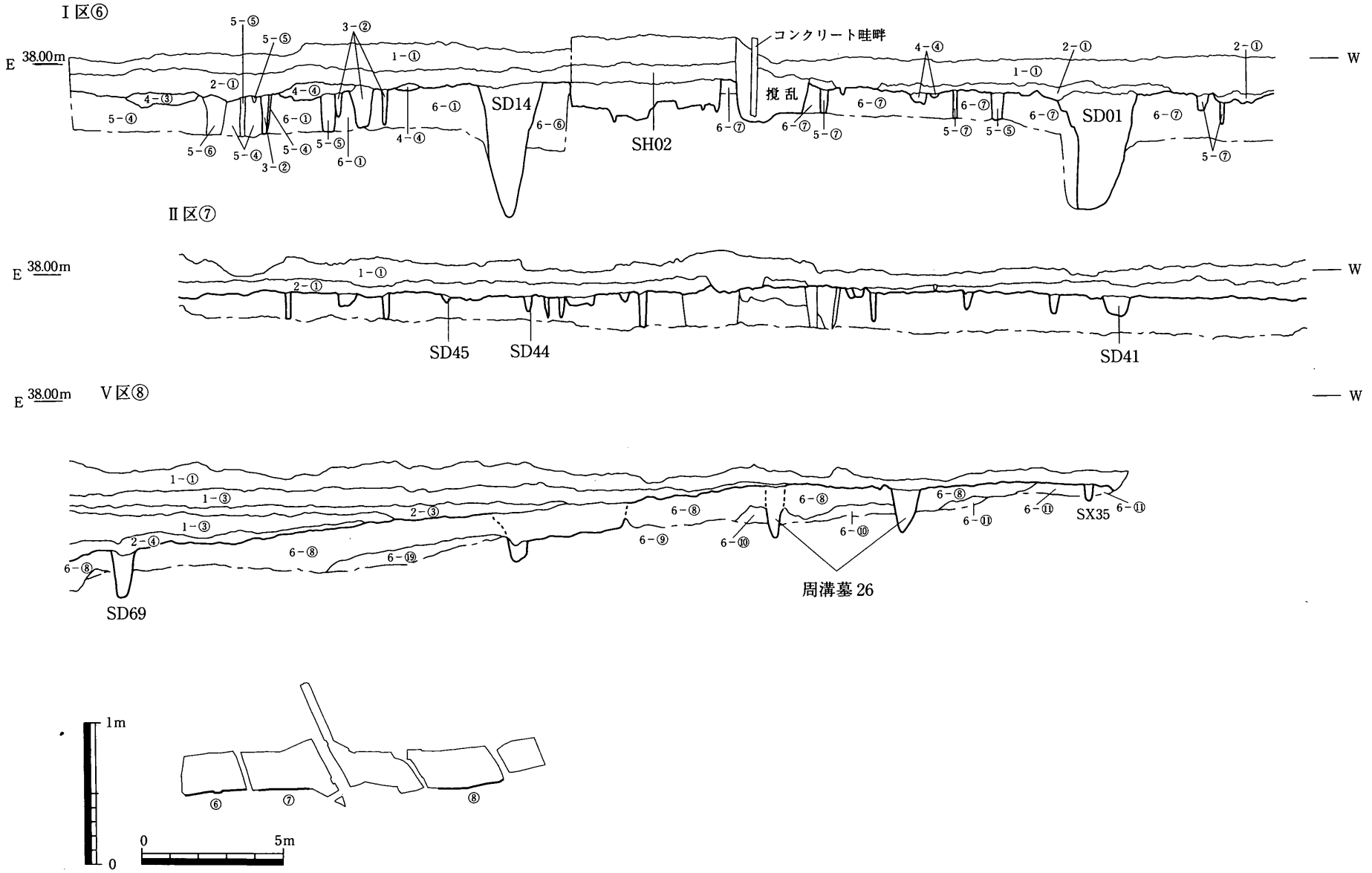
厚さ20～40cmの耕作土·床土の下部で遺構面を検出した。ベースはSD20付近では暗茶色粗砂を呈する。また、SD20上面を中心に部分的に淡灰褐色砂質土·暗灰色砂質土の中世包含層が堆積する。遺構面のレベルは



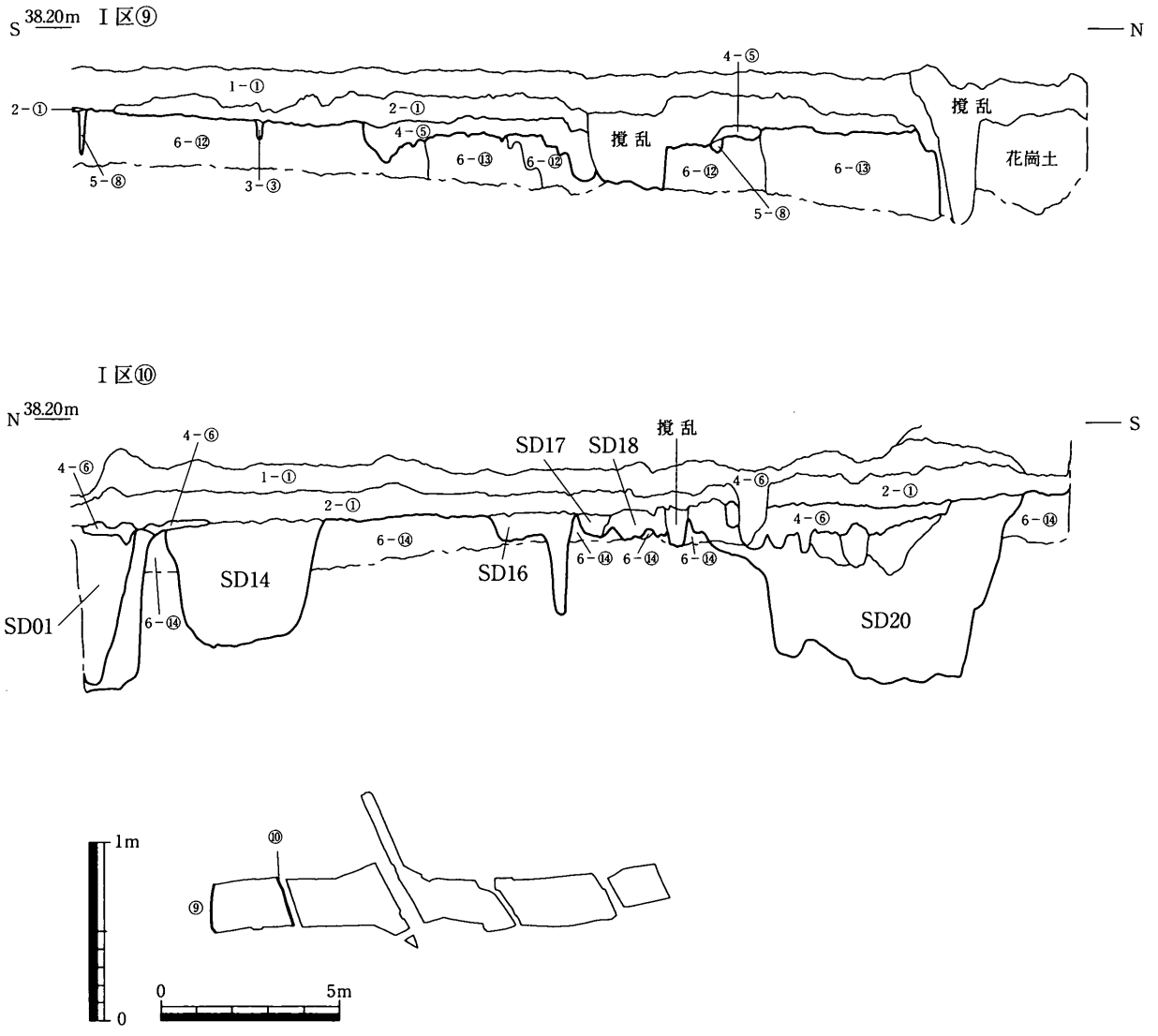
第6図　調査区土層図（Ⅰ～Ⅲ区北壁）（天地 1/40、左右1/200）



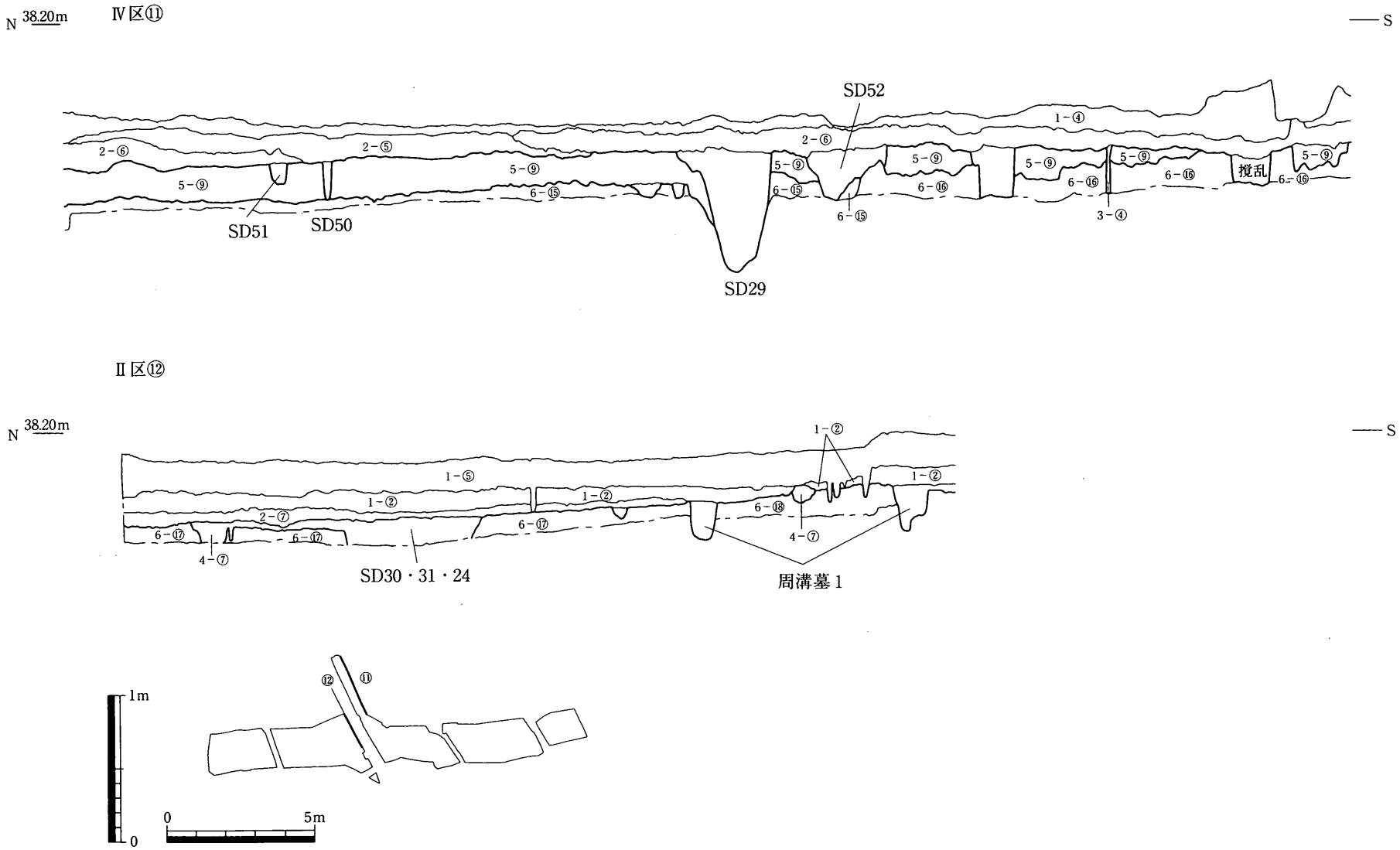
第7図　調査区土層図（Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ区北壁）（天地 1/40、左右1/200 ）



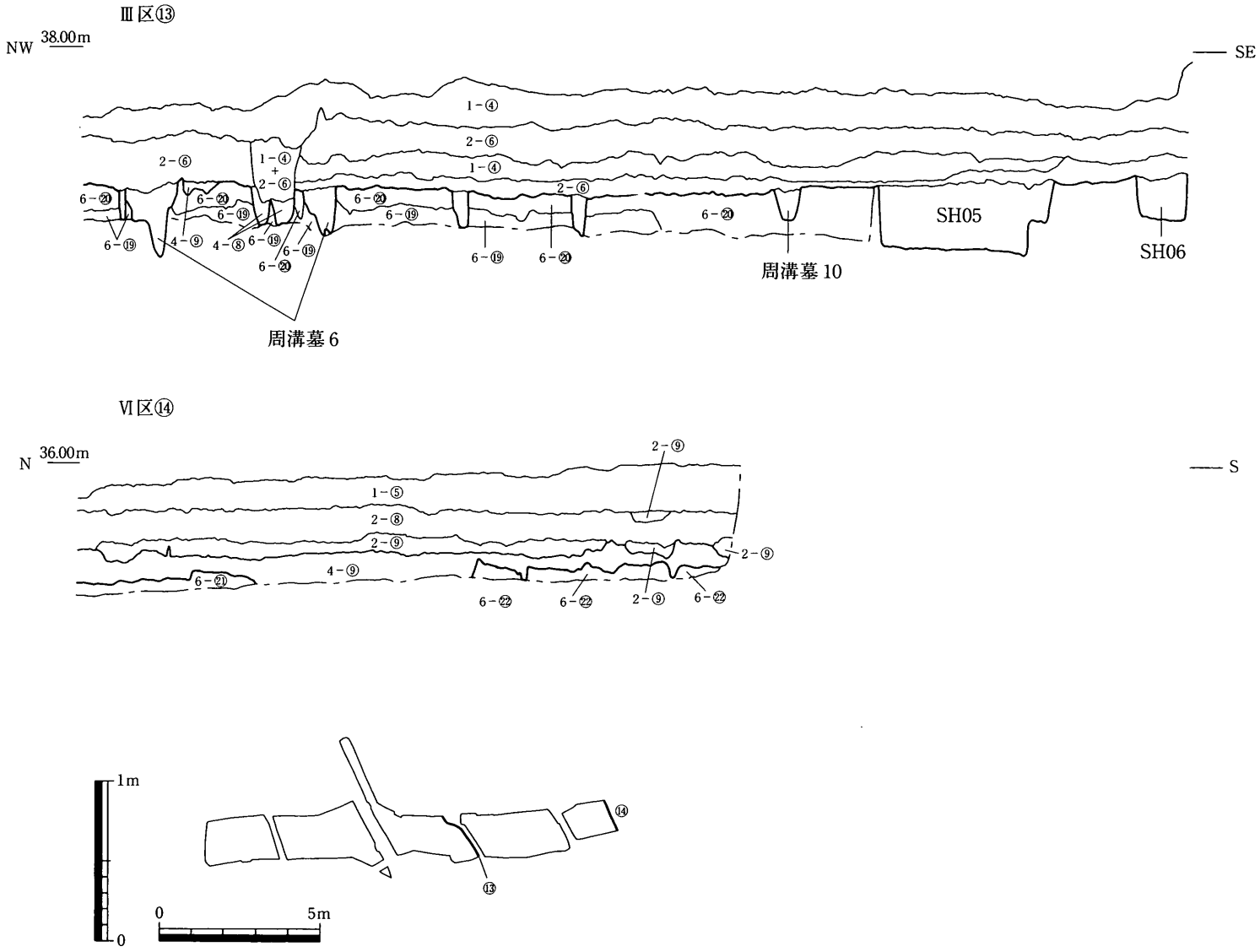
第8図　調査区土層図（Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ区南壁）（天地 1/40、左右1/200 ）



第９図　調査区土層図（Ⅰ区西壁・東壁）（天地 1/40、左右1/200）



第10図　調査区土層図（Ⅳ・Ⅱ区東壁）（天地 1/40、左右1/200 ）



第11図　調査区土層図（Ⅲ・Ⅵ区東壁）（天地 1/40、左右1/200 ）

1－① 耕土
1－② 薄茶褐色砂質土
1－③ 淡灰褐色砂質土
1－④ 淡黒褐色砂質土
1－⑤ 灰色砂質土

2－① 床土
2－② 黄茶褐色砂質土
2－③ 淡黄褐色砂質土
2－④ 淡赤黄色砂質土
2－⑤ 耕土混じりの床土
2－⑥ 淡赤褐色砂質土
2－⑦ 黄茶褐色砂質土
2－⑧ 黄色砂質土
2－⑨ 淡黄色砂質土

3－① 淡灰褐色砂質土
3－② 淡灰褐色砂質土
3－③ 暗灰褐色砂質土
3－④ 淡褐灰色砂質土

4－① 淡褐色砂質土
4－② 黒色混灰色砂質土
4－③ 淡褐黄色シルト
4－④ 淡灰褐色シルト
4－⑤ 暗灰褐色砂質土
（Mnを多く含む）
4－⑥ 暗灰色砂質土
4－⑦ 黒色混灰色砂質土
4－⑧ 淡灰色砂質土
4－⑨ 淡茶褐色砂質土

5－① 暗黒褐色粘土
5－② 黒褐色粗砂質土（SD20・29埋土）
5－③ 黒色砂質土（土壌化層）
5－④ 暗黒褐色粘質土
（SD20埋土。粗い砂粒を含む）
5－⑤ 淡褐色シルト（ピット埋土）
5－⑥ 淡灰黄色シルト（SD20最上層）
5－⑦ 暗黒色粘質土（古墳時代ピット埋土）
5－⑧ 暗黒色粘土（ピット埋土）
5－⑨ 暗茶黒色粘質土
（弥生の遺物包含層。包含量は極少量
ベースの土壌化層か）
6－① 淡黄色粘土（Mnを多く含む）
6－② 茶色混黄色粗砂質土
6－③ 淡黄褐色粘質土
6－④ 暗茶黒色粗砂～粘質土（土壌化層）
6－⑤ 暗茶褐色砂質土
6－⑥ 淡黄褐色粗砂
（固くしまり、Mnを多く含む）
6－⑦ 淡黄褐色粘土～シルト
6－⑧ 暗黒褐色粗砂（土壌化層）
6－⑨ 淡灰色粗砂
6－⑩ 淡褐色砂礫
6－⑪ 淡黄褐色砂質土
6－⑫ 淡黄褐色粘土
6－⑬ 暗褐色粗砂
（固くしまり、Mnを多く含む。
かなり古い時期のSR埋土。遺物なし）
6－⑭ 暗茶色粗砂～粘質土
6－⑮ 淡黄褐色粘質土～シルト
6－⑯ 暗黄褐色粗砂（Mnを多く含む）
6－⑰ 黒色粗砂質土（土壌化層）
6－⑱ 黒色混灰色粗砂質土
6－⑲ 淡黄褐色粘質土
（粗い砂粒を多く含む。上面にMn
を含む）
6－⑳ 暗茶黒色粗砂～粘質土（土壌化層）
6－㉑ 暗茶褐色砂質土（土壌化層）
6－㉒ 茶褐色砂質土

7－① 黄灰色弱粘質土
7－② 黄褐色弱粘質土
7－③ 淡黄色砂質土
7－④ 黄色砂質土
7－⑤ 明黒色粘質土
7－⑥ 淡茶褐色砂質土

1 耕土
2 床土
3 中世ピット埋土
4 中世包含層
5 中世以前ピット・包含層埋土
SD20・29埋土
6 ベース
7 その他

第12図　調査区土層図（土層注記）

37.70m前後である。

⑪⑫Ⅳ区東壁土層・Ⅱ区東壁土層（第10図）

Ⅳ区では厚さ20～36cmの耕作土・床土の下部で暗茶黒色粘質土層を検出した。この層位中からはごく少量の弥生土器が出土するが、すべての遺構がこの層を切り込んでいることから、この層はベースの土壌化層の可能性もある。この層の下位では淡黄褐色粘質土～シルトのベースを検出した。遺構面のレベルは37.20m程度である。

Ⅳ区東壁の南側にほぼ連続するⅡ区東壁では厚さ30～45cmの耕作土・床土の下部でベースを検出した。ベースはⅣ区から続く可能性の高い黒色粗砂質土のベース土壌化層である。南端部付近では土壌化層は消失し、ベースは黒色混灰色砂質土となる。遺構面のレベルは37.60m前後である。

⑬Ⅲ区東壁土層（第11図）

厚さ50～70cmの耕作土・床土の下部でベースを検出した。ベースはⅣ区同様土壌化の進んだ暗茶黒色粗砂～粘質土である。その下部には淡黄褐色粘質土のベースを検出した。遺構面のレベルは37.10m程度である。

⑭Ⅵ区東壁土層（第11図）

厚さ40～50cmの耕作土・床土の下部で厚さ10～20cmの淡茶褐色砂質土の包含層、その下部で暗茶褐色砂質土のベースを検出した。ベースは南半部では茶褐色砂質土となる。遺構面のレベルは35.25～35.40mで、北側ほど徐々に低くなる。

第２節　遺構・遺物

（１）弥生時代前期の遺構・遺物

周溝墓群の概要

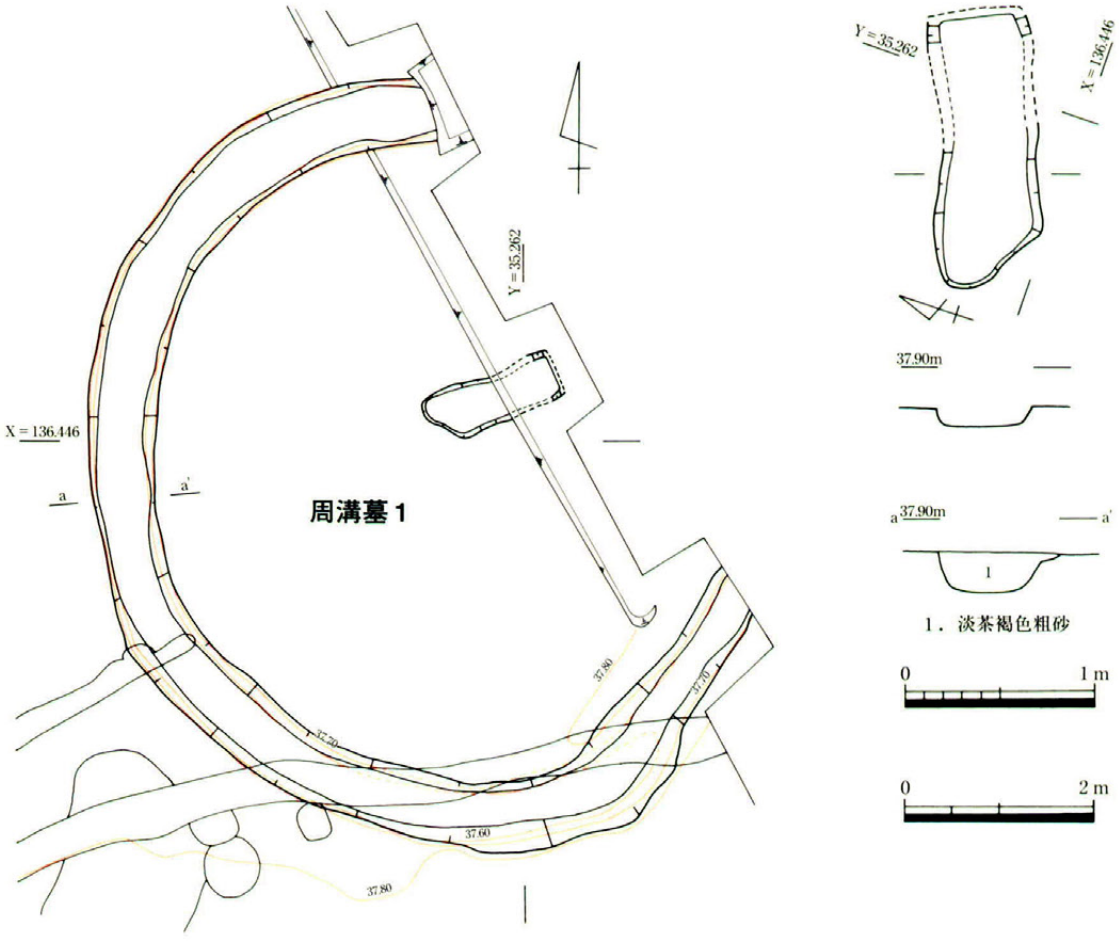
Ⅱ区東端部からⅥ区にかけて40基の周溝墓を検出した。微高地から低地へ向けての斜面上に立地する。おおむね４群に分けられる。形状は円形、隅丸方形が混在し、群や規模により異なる形状をとることはない。また、周溝を共有させながら墓域が広がっていく様子もみられる。遺構の時期はおおむね弥生時代前期後半～中期初頭であった。

周溝墓１（第13・14図）

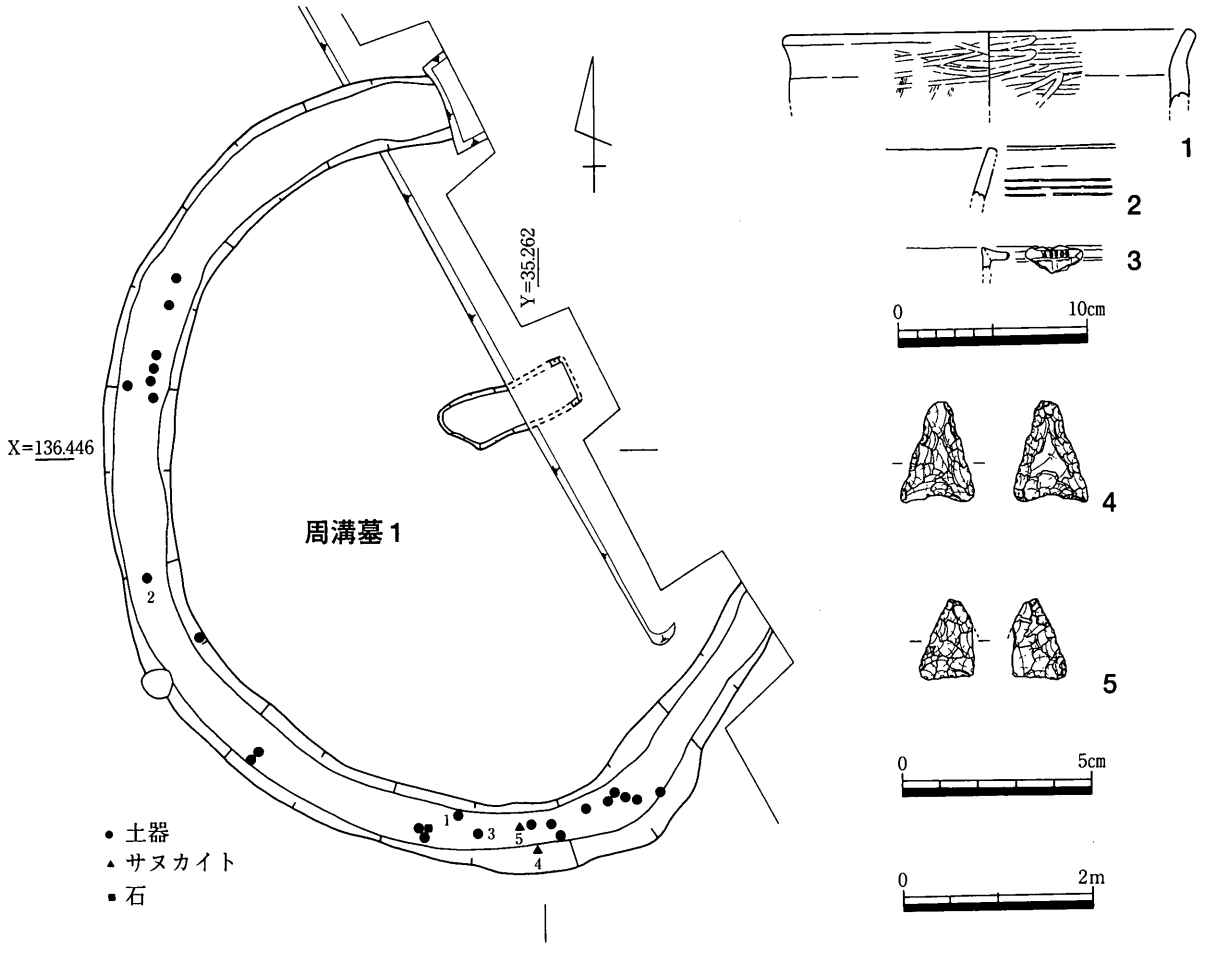
Ⅱ区東端部付近で検出した円形周溝墓である。東部は調査区外へ延びる。周溝内側の直径は推定で７ｍ、周溝の深さはおおむね22㎝でほぼ均一である。埋土は淡茶褐色粗砂、断面形状は逆台形である。周溝の埋土中からは弥生土器小破片と石鏃が出土した。周溝内部やや東寄りのところで主体部を検出した。主体部はおおむね長方形を呈し、長さ約146㎝、幅50㎝、深さ12㎝で、主軸方位をN73°Eに向ける。埋土は不明。木口痕跡は認められなかった。

１～３は弥生土器。いずれも甕口縁部の小片。**１**は如意形口縁を呈し、内外面をヘラ磨きする。**２・３**は逆Ｌ字形口縁を持つが、**２**の口縁部は剥落する。**３**は口縁端部に刻み目を持つ。**４・５**は石鏃。サヌカイト製。**４**は凹基式、**５**は平基式である。

周溝墓１の時期は出土遺物の時期により弥生時代前期後半中葉と考えられる。



第13図　Ⅱ区周溝墓１平・断面図（1/40、1/80）、主体部平・断面図（1/40）



第14図　Ⅱ区周溝墓１遺物出土状況（ 1/80 ）、出土遺物（ 1/2、1/4 ）

周溝墓２（第15・16図）

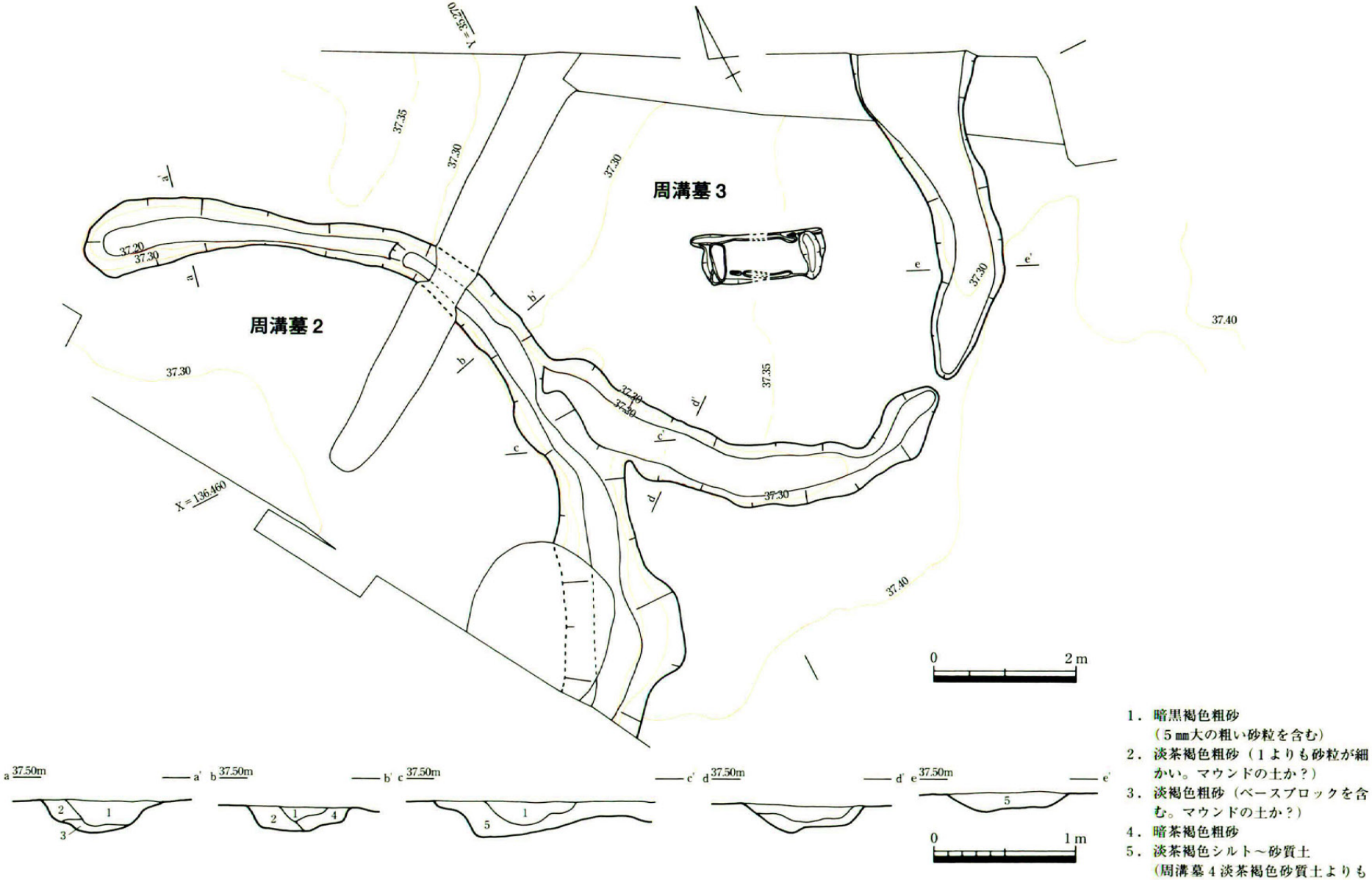
Ⅲ区西北部付近で検出した周溝墓である。西半部は調査区外へ延びる。周溝は北西部付近で途切れており、陸橋部分になると考えられる。円形とすれば、周溝内側の直径は推定で約9.2mであるが、不整円形の可能性もあろう。周溝の幅は40～87cm、周溝の深さは17～24cmで地形的にやや低い北西側がわずかに深い。埋土は下層が淡茶褐色粗砂・淡褐色粗砂、上層は暗黒褐色粗砂を呈する。断面はボウル状または緩い逆台形状である。周溝の東側を周溝墓３と共有し、断面観察からは周溝墓３より新しいと考えられるが、ほとんど時期差はないと考えられる。検出範囲内では主体部は検出できなかった。周溝墓２と周溝墓３が合流する付近からほぼ完形の弥生土器甕が出土した。

6～8は弥生土器。**6**は壷頸部小破片。頸部下端部に刻目突帯を巡らせる。**7**は甕。ほぼ完形。如意形口縁で口縁端部には不規則な刻み目を施す。体部は内外面ともヘラミガキし、沈線は施さない。

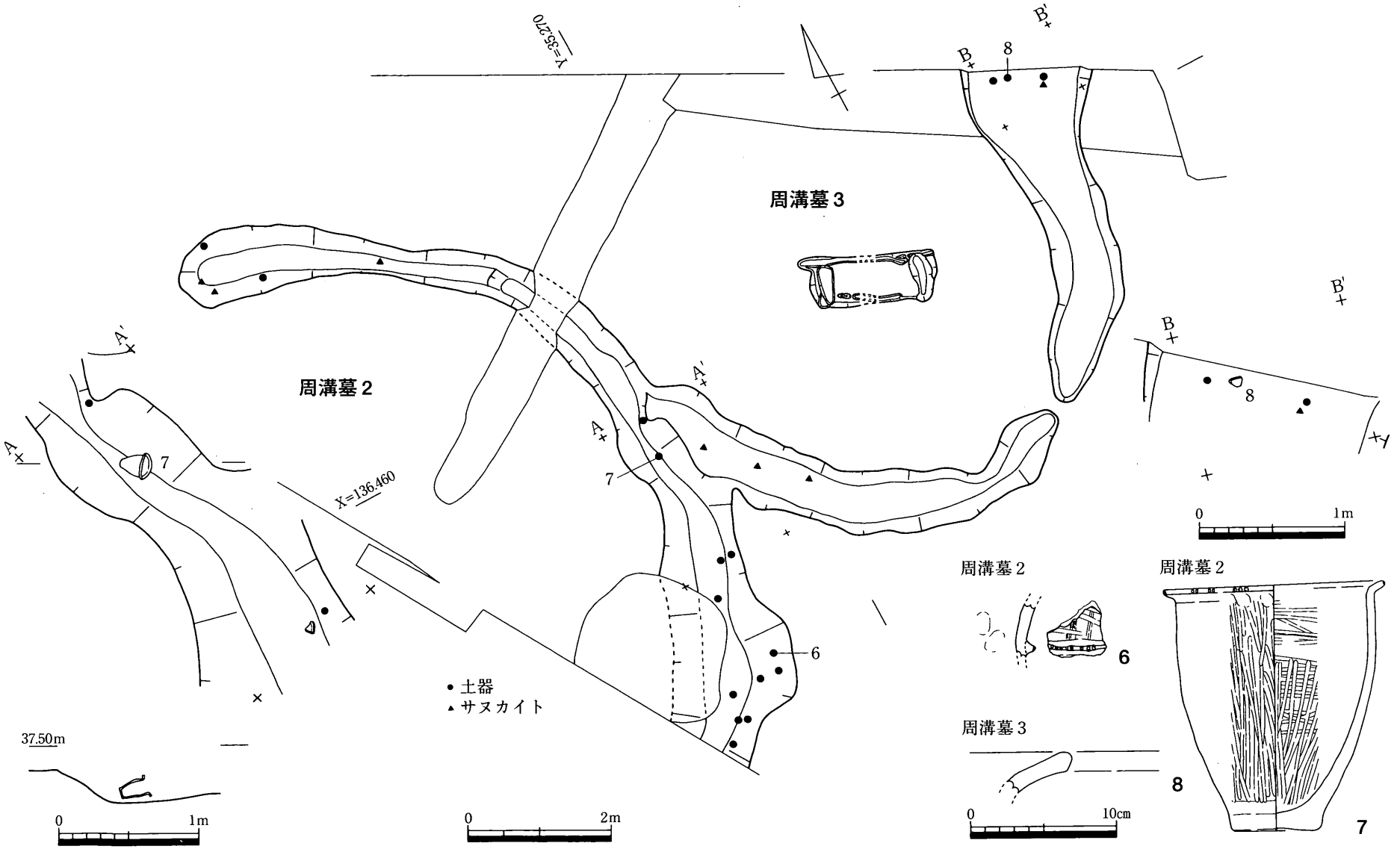
周溝墓２の時期は弥生時代前期後半中葉と考えられる。

周溝墓３（第15・16・17図）

周溝墓２の東側に接して検出した周溝墓である。不整円形または隅丸方形で、北西側は調査区外へ延びると考えられる。周溝墓の南東側は周溝が途切れており、陸橋部分であったと考えられる。また、調査区内であったにもかかわらず、北西部分の周溝を検出することはできず、調査区北側の壁面にも断面は現れていない。周溝内側の長径は約８m、短径は約5.8mと推測できる。周溝の幅は80～150cm、埋土は淡茶褐色シルト～砂質土で、周溝墓２の堆積土と一部共通する。断面形状はおおむね浅い皿状である。深さは10～20cmで、地形的にわ



第15図　Ⅲ区周溝墓２・３平・断面図（1/40、1/80）



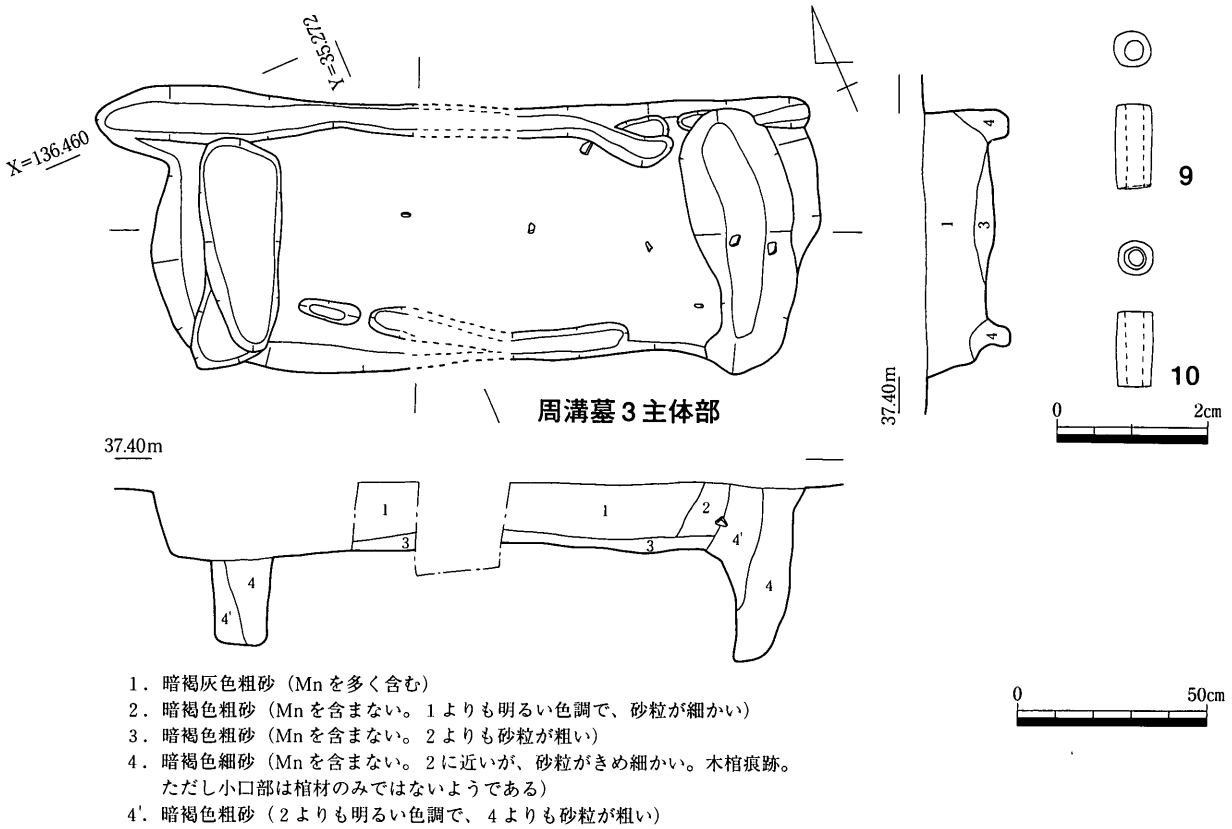
第16図　Ⅲ区周溝墓２・３遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）

ずかに高い北東側が浅い。

周溝内中央付近で主体部を検出した。長方形で長辺180cm、短辺67cm、深さ18cmで、4方向に木口痕跡が残る。北西側の木口は墓壙からはみだしている。主軸方位はN67°Eで、等高線にやや斜交する。埋土はおおむね暗褐灰色粗砂である。主体部からは碧玉製の管玉が2点出土した。

8は弥生土器壷小破片。**9**・**10**は碧玉製管玉。

周溝墓3の時期は周溝墓2とほぼ同じ弥生時代前期後半中葉と考えられる。



1．暗褐灰色粗砂（Mnを多く含む）
2．暗褐色粗砂（Mnを含まない。1よりも明るい色調で、砂粒が細かい）
3．暗褐色粗砂（Mnを含まない。2よりも砂粒が粗い）
4．暗褐色細砂（Mnを含まない。2に近いが、砂粒がきめ細かい。木棺痕跡。ただし小口部は棺材のみではないようである）
4'．暗褐色粗砂（2よりも明るい色調で、4よりも砂粒が粗い）

第17図　Ⅲ区周溝墓3主体部遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/1）

周溝墓4（第18図）

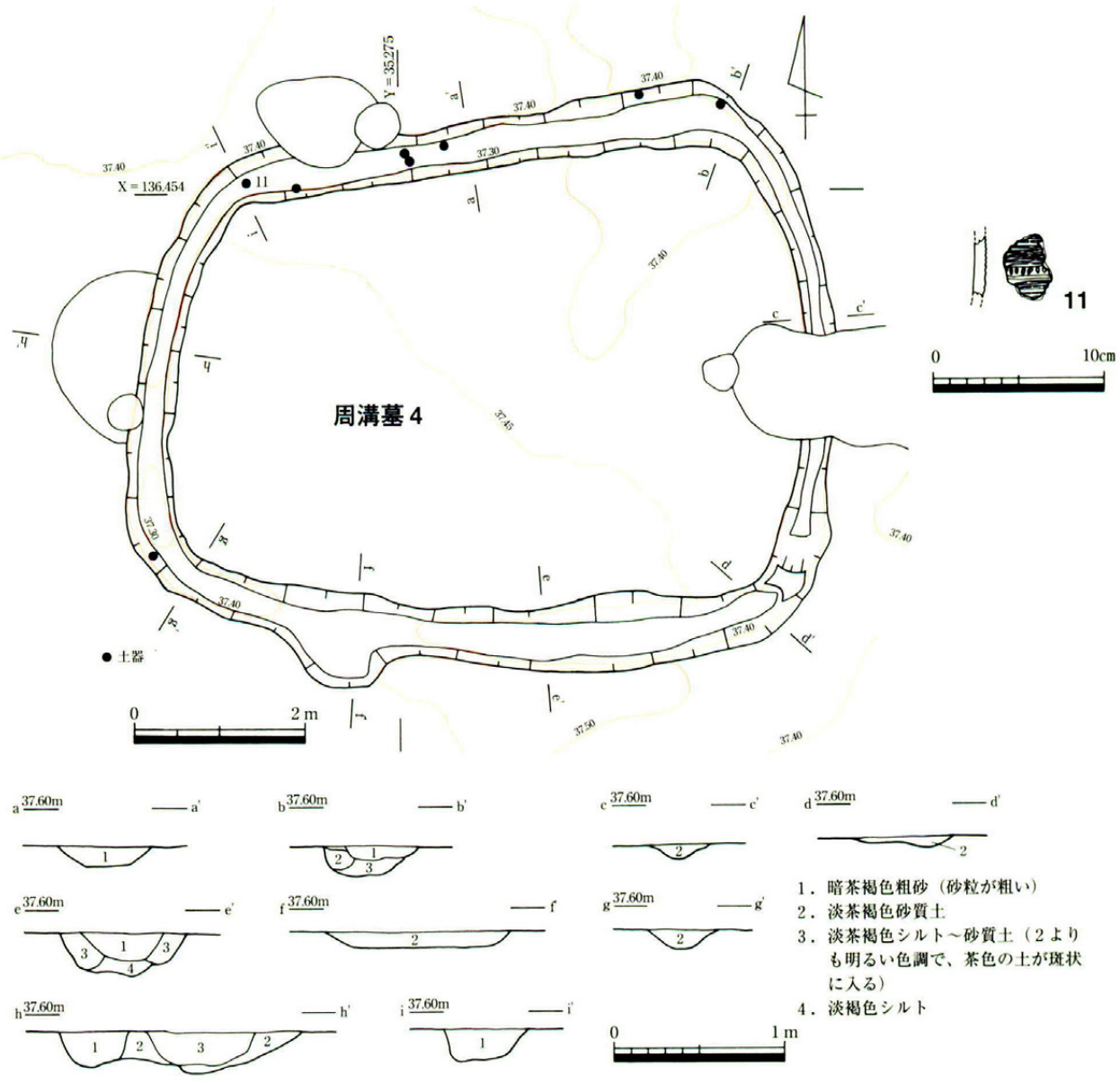
Ⅲ区北西部で検出した方形周溝墓である。長辺7.40m、短辺5.10m、主軸方位はほぼ正方位である。周溝の幅は約50～90cmで、南側に1箇所膨らむ箇所がある。断面形状はおおむね浅いボウル状である。溝の深さは8～24cmである。溝底部のレベルは北側の方がやや深いが、ほとんど変わらない。埋土はおおむね北側部分が暗茶褐色粗砂、南側部分は淡茶褐色砂質土で、後者の方が下部に当たるようである。南東隅付近がやや浅い。周溝内に主体部は検出できなかった。

11は弥生土器壷体部小破片。楕円形の刺突文の上側に7条以上の、下側に4条以上のヘラ描き沈線を施す。

周溝墓4の時期はおおむね弥生時代前期後半後葉と考えられる。

周溝墓5（第19図）

Ⅲ区北東部で検出した周溝墓である。北部大部分は調査区外へ延びる。円形とすれば直径5.20m程度に、隅丸方形とすれば1辺が4.20m程度に復元できようが、検出範囲が狭いので形状・規模とも不明確である。周溝の幅は64～120cm、深さは30～44cm、埋土は上層が暗黒褐色砂礫、下層が暗褐色粗砂で、断面形状は半円形を呈する。検出範囲では溝底部のレベルはおおむね一定である。埋土中からは弥生土器壷小破片が出土した。



第18図　Ⅲ区周溝墓4遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）

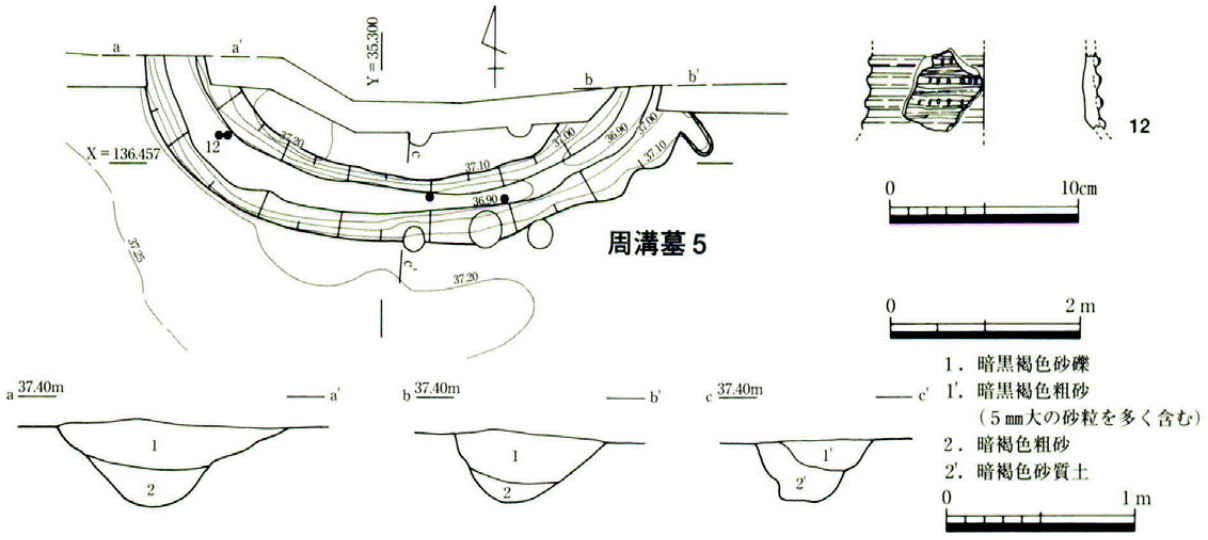
12は弥生土器壷頸部。刻目突帯が4条以上巡らされる。

周溝墓5の時期は弥生時代前期後半後葉と考えられる。

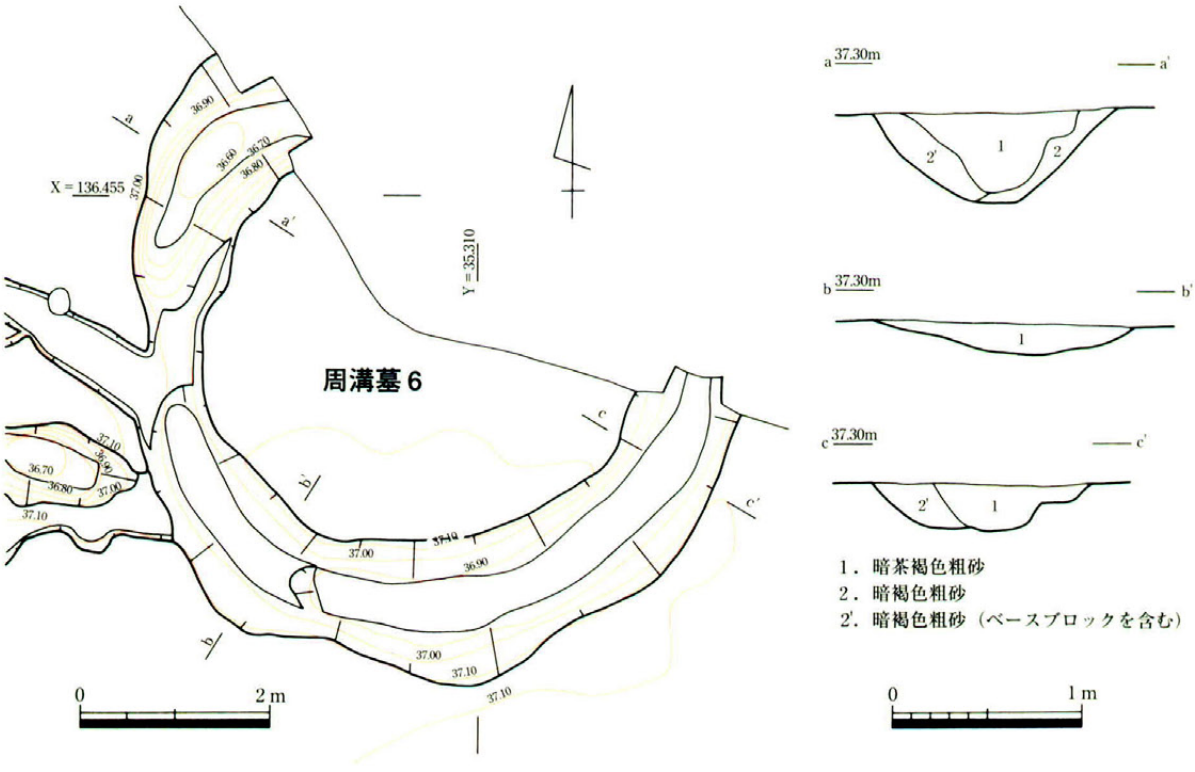
周溝墓6（第20・21図）

Ⅲ区北東部で検出した円形周溝墓である。北東部分は調査区外へ延びる。周溝内側の直径は約4.40mに復元できる。周溝の幅は56～156cm、深さは16～47cmで、周溝の北西側が他の箇所より深く、周溝墓14と合流する付近が他に比べて浅い。埋土は、暗茶褐色粗砂、暗褐色粗砂である。断面形状は深い部分がV字形、浅い部分は浅い皿状である。

13～15は弥生土器。**13**は壷。ほぼ完形。周溝の南部から出土した。やや小型の長頸壷で、外面体部をヘラミガキする。**14**は壷体部。胴部最大径よりやや上部に浅いヘラ描き沈線を1条巡らせ、外面を丁寧にヘラミガキする。やや古い様相。周溝北西部から出土。**15**は甕体部小片。周溝南部から出土。外面に12条以上のヘ



第19図　Ⅲ区周溝墓5遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）



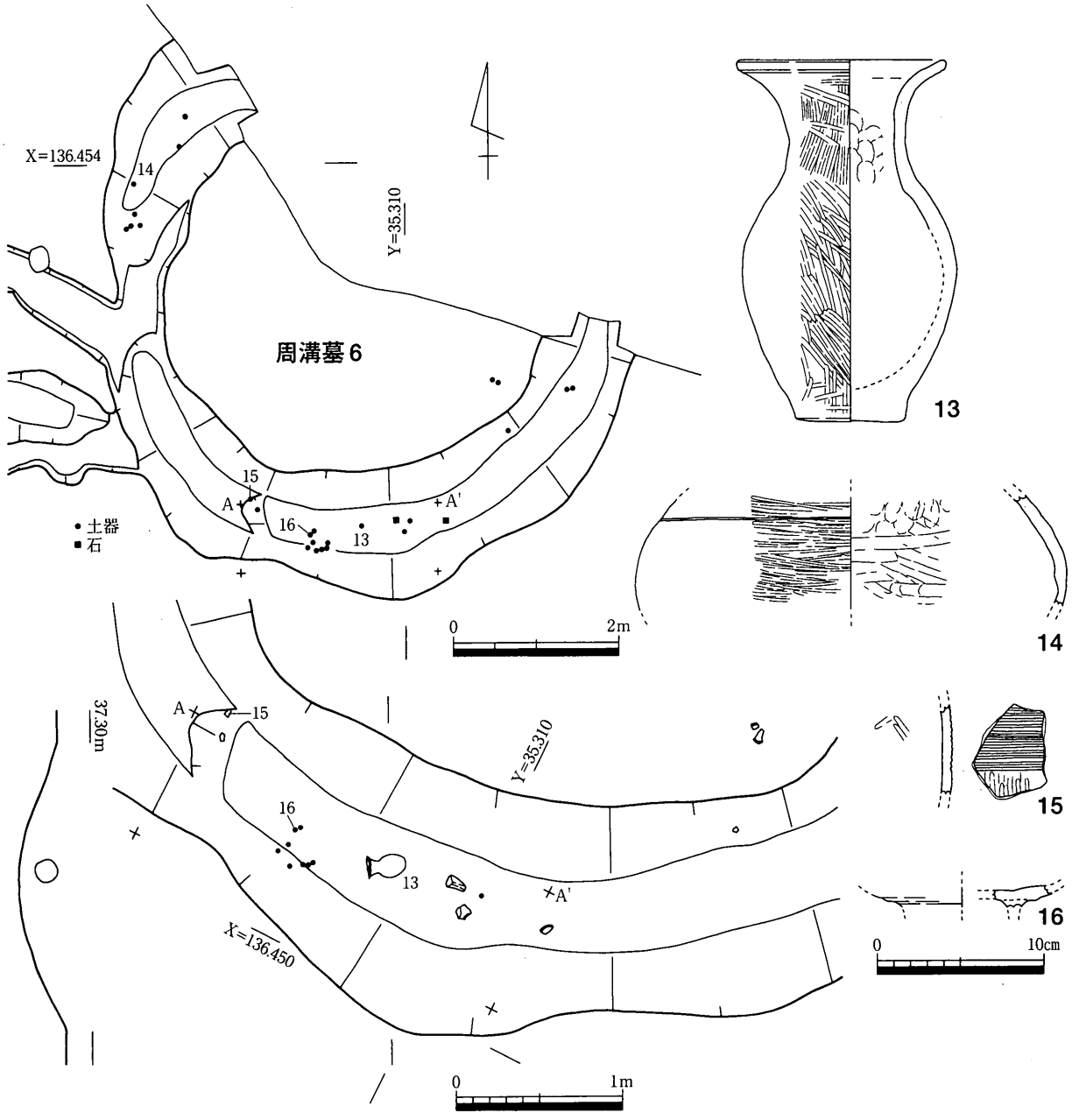
第20図　Ⅲ区周溝墓6平・断面図（1/40、1/80）

ラ描き沈線を施す。**16**は土師質土器椀。小片。高台部分が欠損。周溝南部から出土したが、紛れ込みと考えられる。

周溝墓6の時期は出土遺物により弥生時代前期後半後葉と考えられる。

周溝墓7（第22・23図）

Ⅲ区中央付近で検出した方形周溝墓である。周溝内側で長辺9.00m、短辺6.90mで、周溝の幅は48～128cm、深さ20～44cm、埋土はおおむね暗茶褐色粗砂・暗褐色砂質土で、最下層に淡褐色砂質土・淡茶褐色粗砂が堆積する場合がある。北側周溝は周溝墓12・13・14と共有し、b－b'断面により、周溝墓7の周溝は周溝墓13・14

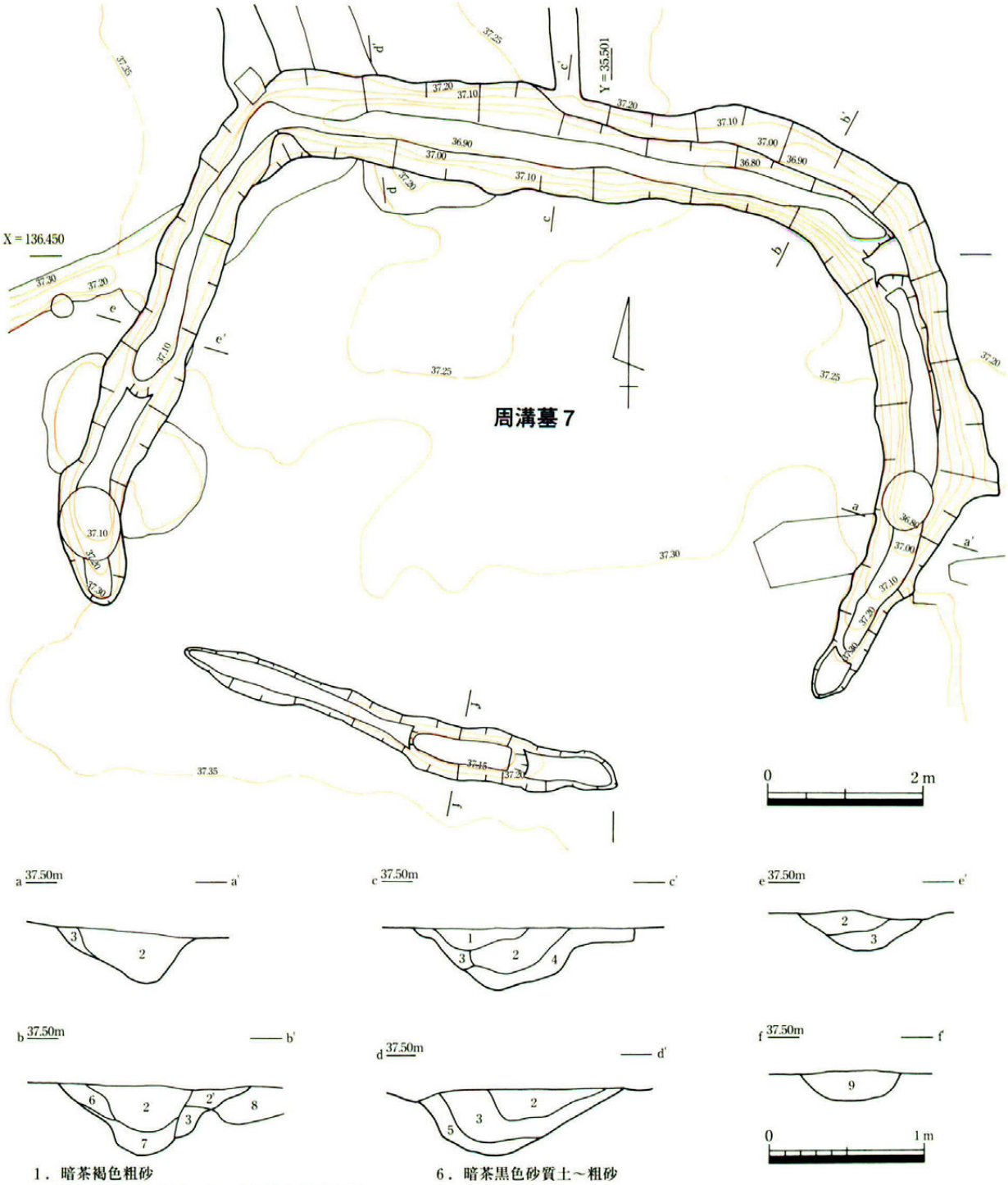


第21図　Ⅲ区周溝墓6遺物出土状況（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）

の周溝より新しいことが観察できるが、周溝墓12～14は明らかに周溝墓7を意識していることから、時間差をおくことは不自然と思われるので、同時期に構築されたと考えられる。東側ではわずかに周溝墓8と接している。周溝は南東・南西のコーナーが途切れており、陸橋部であったと考えられる。全体の地形は緩やかに北へ傾斜しており、周溝の規模は、比較的土地が高い南側が狭く浅く、土地の低い北側で（周溝墓12・13・14と周溝を共有する部分）最も大きい。遺物の大半は北側周溝の周溝墓12・13と合流する付近及び東側周溝から出土した。周溝墓12・13と合流する付近では完形の弥生土器鉢が出土した。

17～21は弥生土器。**17**は鉢。ほぼ完形で、外面にはヘラミガキを施す。**18**は壷小破片。口縁端部がわずかに外反する。やや古いタイプ。**19～21**は甕小片。**19**は逆Ｌ字形口縁が剥離している。内外面はヘラミガキし、沈線は見られない。**20**は如意形口縁を持つ。口縁端部に刻み目を持つ。**21**は8条以上のヘラ描き沈線を施す。

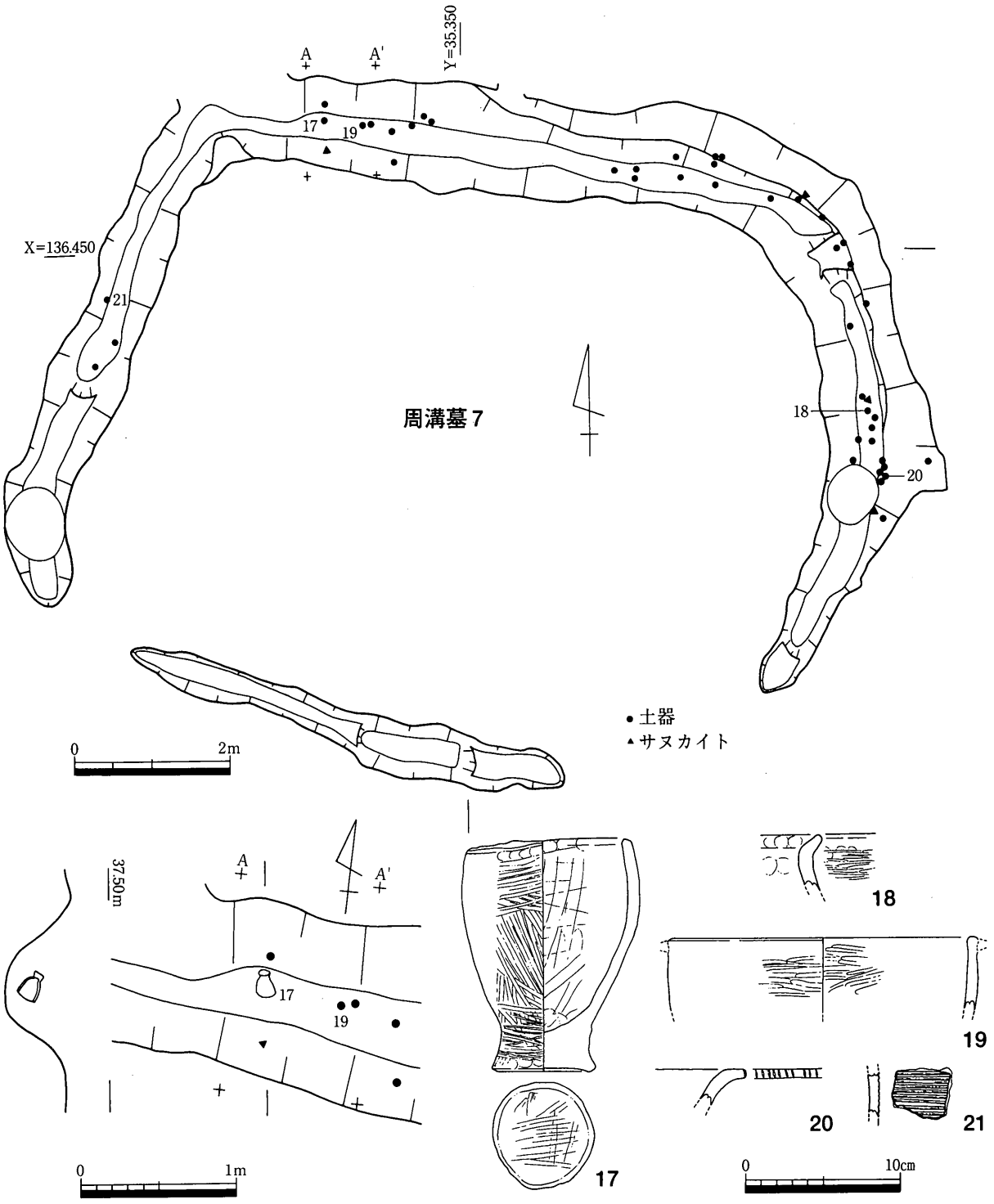
周溝墓7の時期は弥生時代前期後半後葉と考えられる。



第22図　Ⅲ区周溝墓7平・断面図（1/40、1/80）

周溝墓8（第24・25・26図）

Ⅲ区東部で検出した円形周溝墓である。地形は南西から北東へ傾斜する。南東部で周溝墓9と溝を共有する。直径はおおむね8.20m、周溝の幅は96～144cm、深さ36～54cm、埋土はおおむね暗黒褐色粗砂・暗茶褐色粗砂・暗褐色粗砂である。周溝の西側で深い箇所が3箇所見られ、南東側、周溝墓9の周溝と合流する箇所では広く浅い。周溝墓9とは前後関係が認められない。周溝墓9の南西側の溝と合流する付近で、破片の状態では

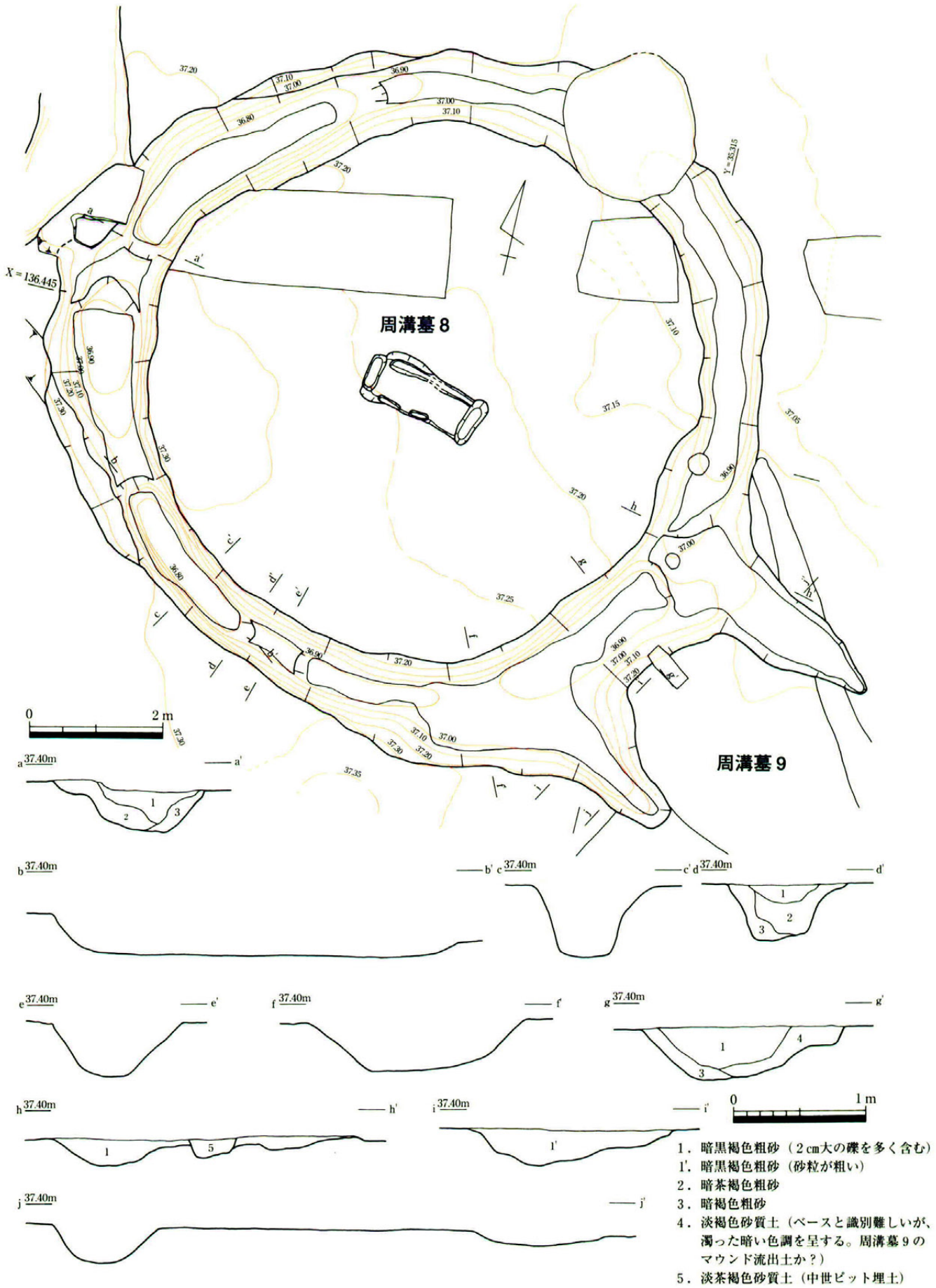


第23図　Ⅲ区周溝墓7遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）

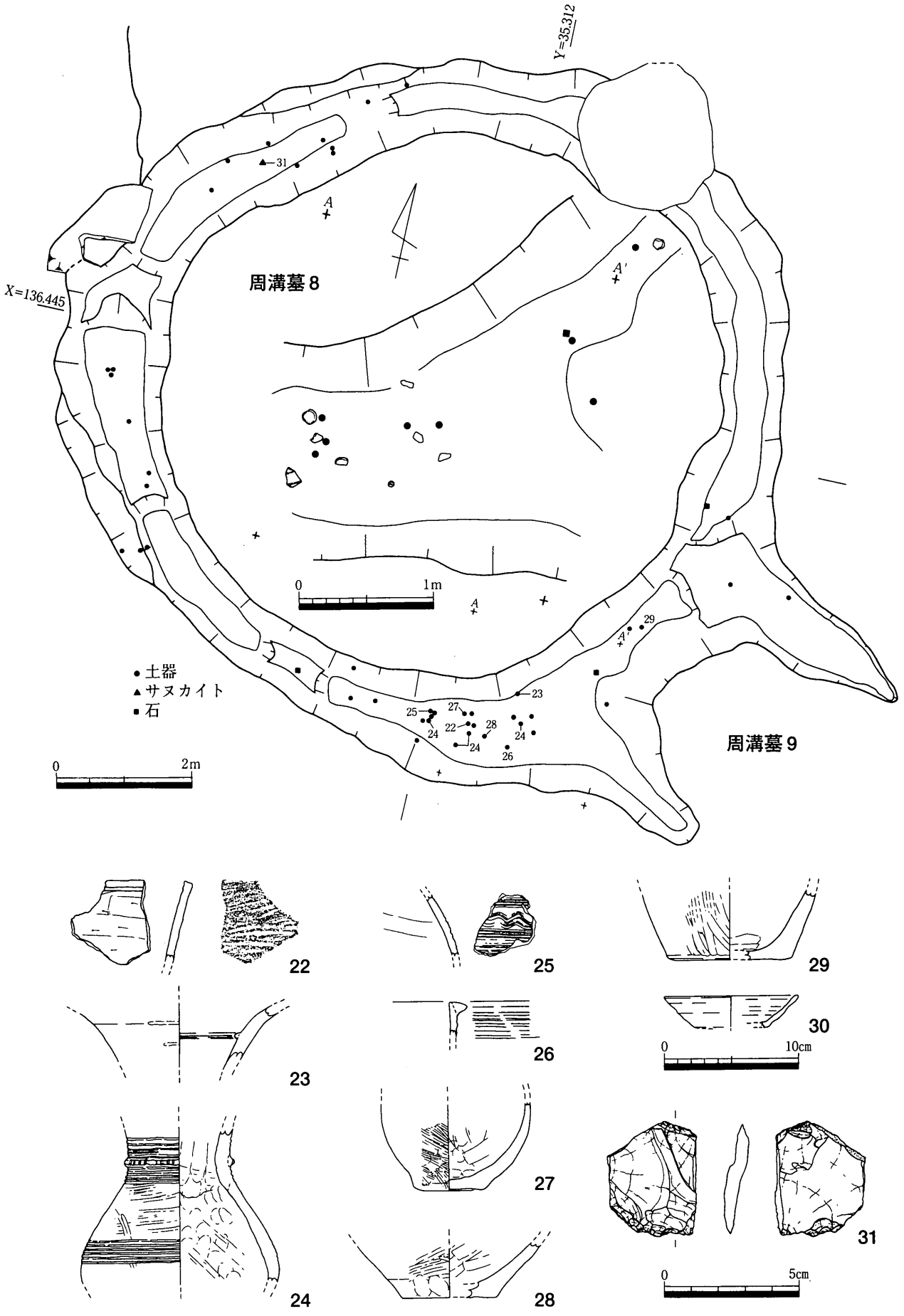
あったが、2／3程度に復元できる弥生土器壷が出土し、他の遺物も主にここから出土した。

周溝墓の中央付近で主体部を検出した。主軸方向はN73°Wで、長方形で長辺185cm、短辺75cm、深さは5cm、埋土は暗褐色粗砂で、4方向に木口痕跡が認められた。木口痕跡の一部は墓壙を越えて検出された。埋土中からは遺物は認められなかった。

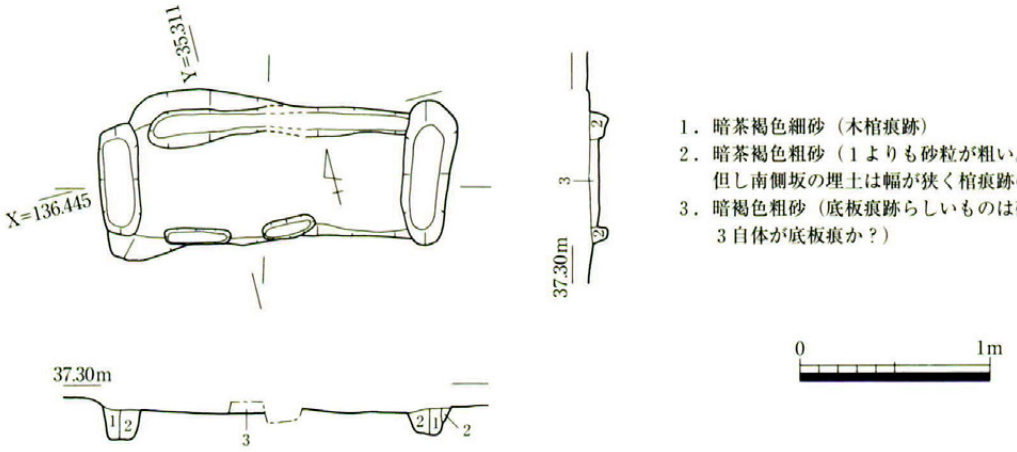
22は縄文土器深鉢。外面に貝殻条痕が顕著に認められる。**23～29**は弥生土器。**23～25**は壷。**23・24**は同一個体の可能性が高い。頸部に刻目突帯を1条、頸部と体部に多条のヘラ描き沈線を施す。頸部内面にも貼付突帯を巡らせる。**25**は小片。体部に櫛描沈線と櫛描波状文を施す。**26**は甕小片。逆L字形口縁部を持ち、4条



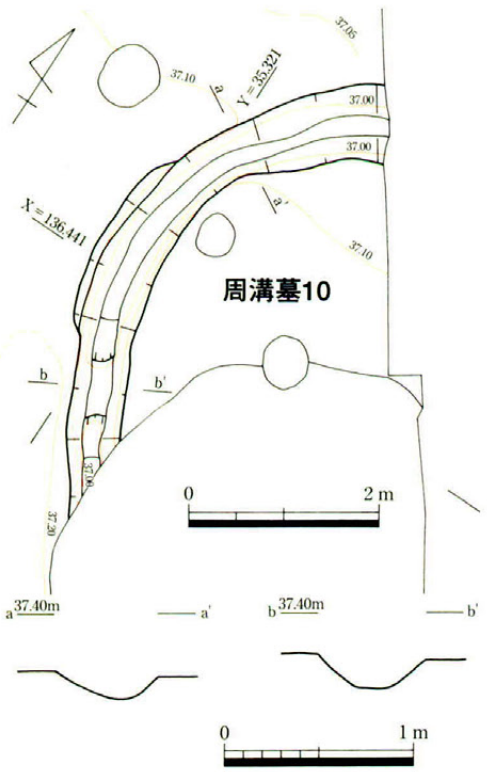
第24図　Ⅲ区周溝墓8・9平・断面図（1/40、1/80）



第25図　Ⅲ区周溝墓８・９遺物出土状況（1/40、1/80）、出土遺物（1/2、1/4）



第26図　Ⅲ区周溝墓８主体部平・断面図（1/40）



第27図　Ⅲ区周溝墓10平・断面図
（1/40、1/80）

以上のヘラ描き沈線を施す。**27**は壷底部。**28・29**は甕底部。**30**は周溝墓内のトレンチから出土した。土師質土器杯。13世紀代のもので、紛れ込みか。**31**はスクレイパー。サヌカイト製。

25は中期初頭まで下るものの、周溝墓８の時期はおおむね弥生時代前期後半後葉と考えられる。

周溝墓９（第24・25図）

周溝墓８の南東側で検出した周溝墓である。方形で、南東部に陸橋部を持つ。主軸方向はN54°Wで、周溝内側で１辺約2.5m、周溝の深さは南西側で28cm、北東側で９cm、幅は80～160cm、埋土は暗黒褐色粗砂である。溝の深さは周溝墓８より浅い。埋土中からは出土遺物はなく、断面観察により、両者の前後関係はないと考えられる。

周溝墓９の時期は周溝墓８とほぼ同時期と考えられる。

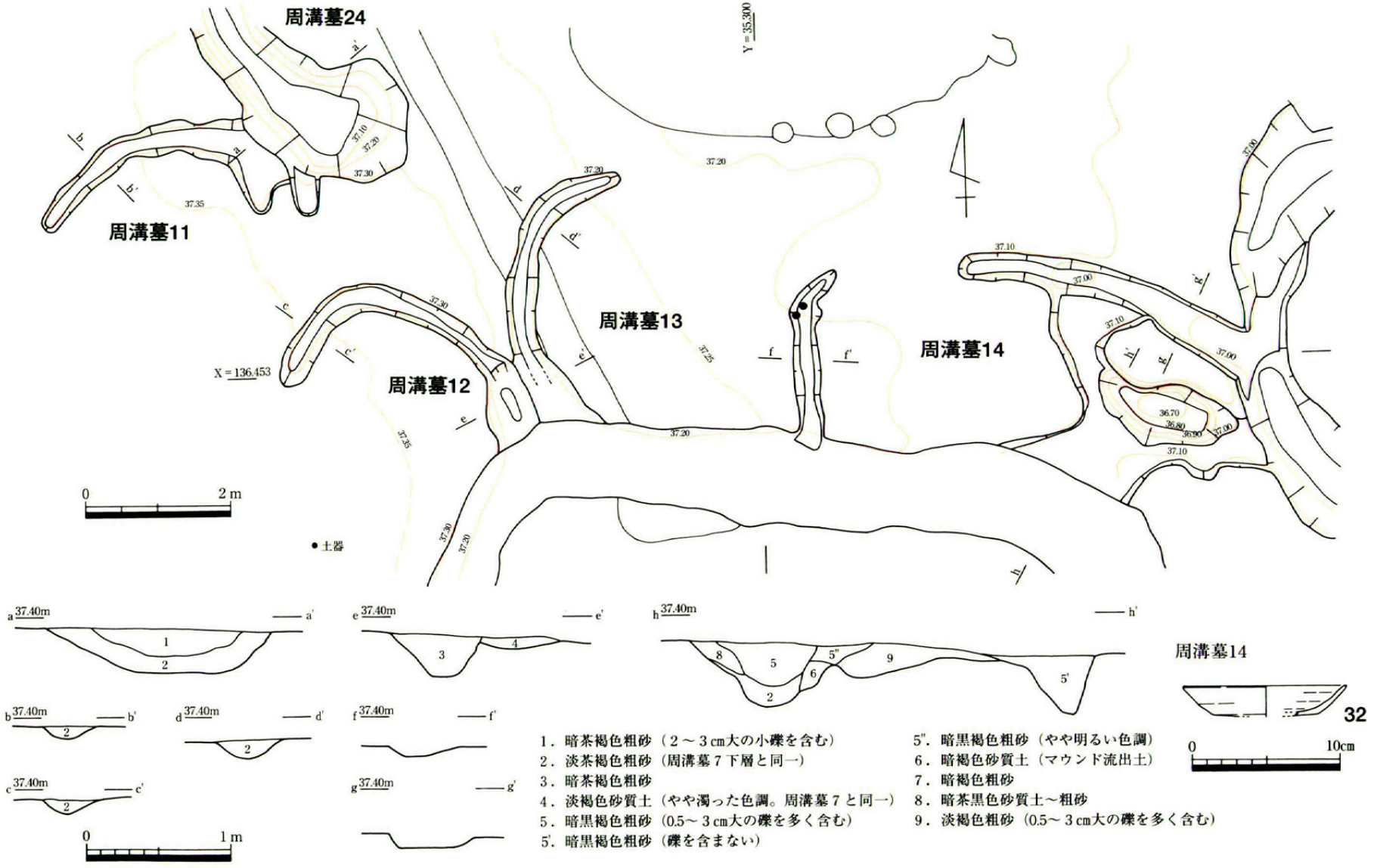
周溝墓10（第27図）

Ⅲ区東端部で検出した周溝墓である。地形は南南東から北北西へ緩く傾斜する。東部は調査区外へ延び、南部はSH05により消失する。円形周溝墓とすれば、直径4.80m、方形とすれば１辺は６m以下程度と考えられる。溝の幅は60～80cm程度、深さは13～15cm程度で、北側がやや深い。埋土中からは遺物は出土しなかった。時期の特定は難しい。

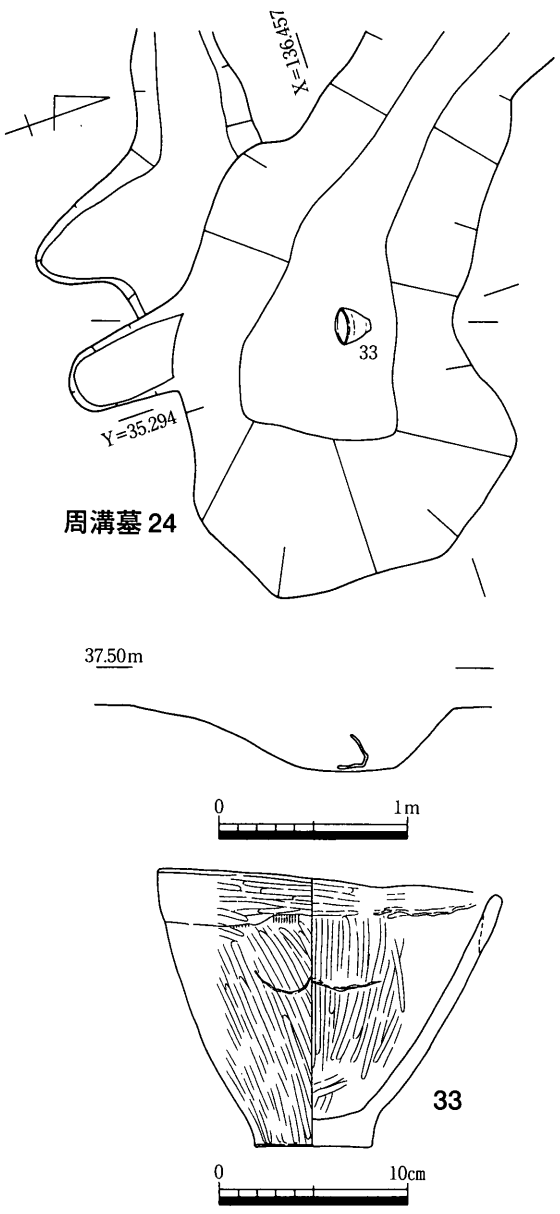
周溝墓11（第28図）

Ⅲ区北部中央付近で検出した周溝墓である。地形的には南西から北東へ緩く傾斜している。周溝墓24と東側で接し、周溝墓12を意識して構築していると考えられる。南西側は周溝がない。周溝の歪みがあるが、円形周溝墓とすれば直径はおおむね3.5～４m前後、方形周溝墓とすれば１辺約2.80m程度と考えられる。主軸方位はN47°Eである。周溝の幅は30～56cm、深さ10cm、埋土は淡茶褐色粗砂で、周溝墓７と同一層であり、周溝墓12・13とも同じである。a－a'断面と平面形態により周溝墓24より古い。

周溝墓11の時期は周溝墓７と同じ弥生時代前期後半後葉と考えられる。



第28図　Ⅲ区周溝墓11・12・13・14・24遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、周溝墓14出土遺物（1/4）



第29図　Ⅲ区周溝墓24遺物出土状況平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

周溝墓12（第28図）

周溝墓11の南側に接して検出した。南西から北東へ緩やかに傾斜する。隅丸方形を呈するが、南西部は周溝がない。主軸方向はN52°W、1辺がおおむね2.80m程度、溝の幅は28～40cm、深さは10cm程度であるが、周溝墓7と合流する付近では深さ30cmを測る。

埋土中からは出土遺物はなかったが、周溝墓13より新しく、周溝墓11とほぼ同時期と考えられる。

周溝墓13（第28図）

周溝墓12の東側に接して検出した。地形は南西から北東へ緩やかに傾斜する。隅丸方形で、長辺3.60m、短辺3.30mと考えられる。北東側に周溝はない。主軸方位はほぼ正方位である。溝の幅は28～44cm、深さ8～12cmで、周溝墓7と合流する付近で浅くなる。e－e'断面によれば、周溝墓12が周溝墓13より新しい。埋土は淡褐色砂質土で、周溝墓7と同じである。

埋土中からの出土遺物はなかったが、周溝墓7とほぼ同時期頃で、周溝墓12よりやや先行すると考えられる。

周溝墓14（第28図）

周溝墓13の東側に接して検出した。東側に周溝墓6が接する。地形は西から東へ緩やかに傾斜する。主軸方向はほぼ正方位で、方形で長辺3.10m、短辺2.30m程度、溝の幅は西側が約38cm、北側が38～60cm、深さは西側が7cm、北側が10cmを測る。周溝の北西部は溝が途切れて陸橋部を作る。東側は濁った土が広がり、区画は不明瞭である。周溝からは土師質土器杯が出土しているが、時期を示すとは考えられず、混入と考えられる。

周溝墓14の時期は周溝墓13とほぼ同時期と考えられる。

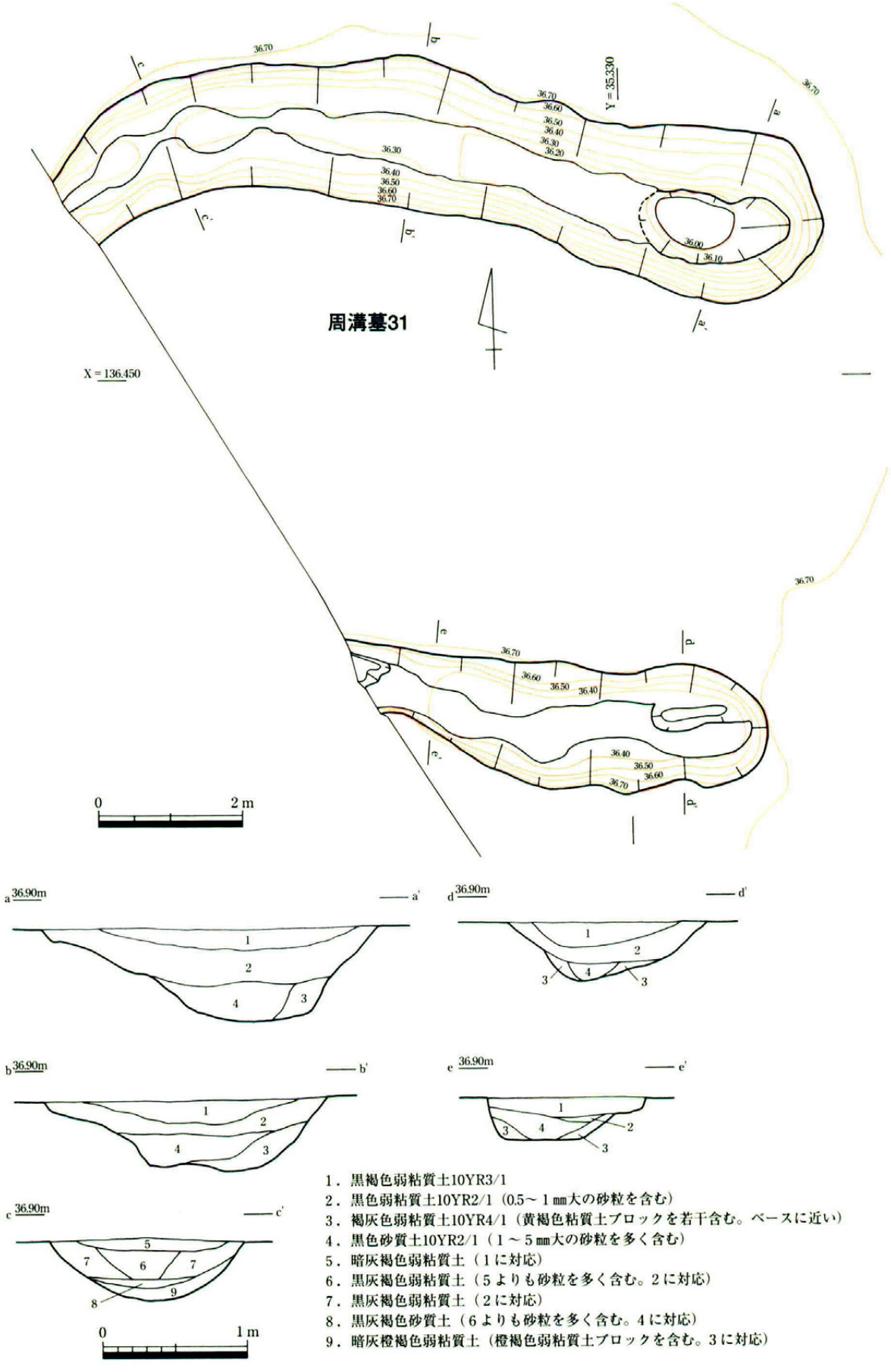
32は土師質土器杯。13世紀代。

周溝墓24（第28・29図）

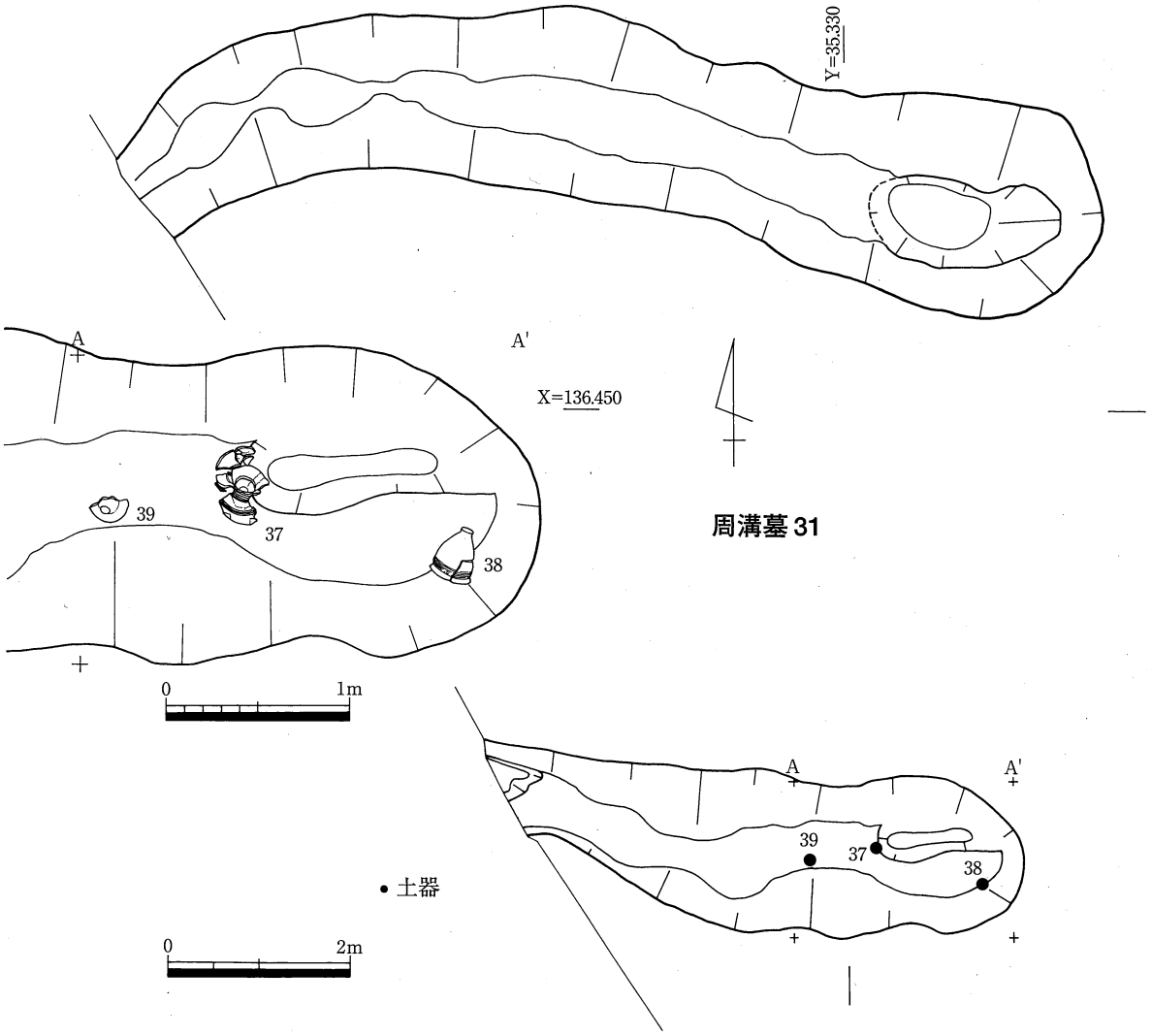
周溝墓11の北東側に接して検出した、周溝の一部と考えられる遺構である。大半が調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明である。周溝の南東側に陸橋部を持つと考えられる。溝の幅は158cm、深さ30cm、埋土は上層が暗茶褐色粗砂、下層が淡茶褐色粗砂で、下層の埋土は周溝墓11・12と共通する。周溝の南端部付近で完形の弥生土器鉢が出土した。

33は弥生土器鉢。内外面ともヘラミガキする。

出土遺物により、周溝墓24の時期は弥生時代前期後半後葉頃と考えられる。



第30図　Ⅶ区周溝墓31平・断面図（1/40、1/80）



第31図　Ⅶ区周溝墓31遺物出土状況（1/40、1/80）

周溝墓31（第30・31・32図）

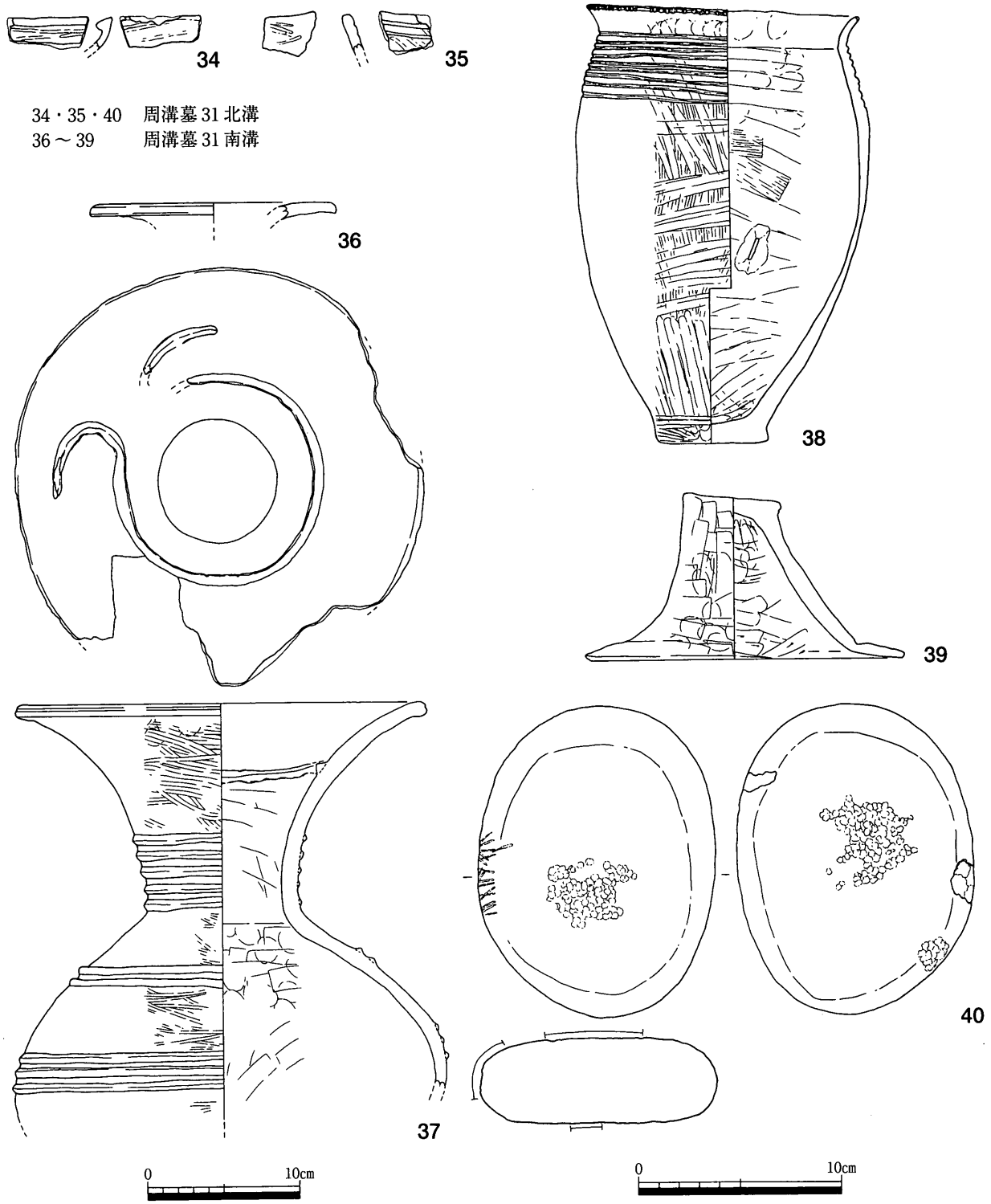
Ⅶ区北西部で検出した。地形は西から東へ緩やかに傾斜する。方形と考えられ、東側は周溝を持たず、陸橋部と考えられる。長辺8.80m、短辺5m程度と考えられる。周溝の幅は120～234cm、深さ24～64cm、埋土は黒褐色・黒色弱粘質土等である。周溝の東端部付近が深くなる。南側周溝の東端部付近のやや深くなっている箇所で、弥生土器甕・壷・蓋が出土した。

34・35は縄文土器浅鉢小片。ともに北側の溝から出土した。**35**は波状口縁を呈す。**36～39**は弥生土器。**36・37**は壷。南側の溝から出土した。**37**は頸部および体部に2～5条の貼付突帯を巡らせ、頸部内面にも貼付突帯がある。上半分程度が復元できた。**38**は甕。ほぼ完形。如意形口縁を呈し、9条のヘラ描き沈線を施す。口縁端部には刻み目を施す。**39**は蓋。ほぼ完形。頂部と体部の境はあまり屈曲せず、頂部は薄い。口縁端部は大きく広がる。**40**は台石。敲打痕を残す。砂岩製。

出土遺物により、周溝墓31の時期は弥生時代前期後半後葉と考えられる。

周溝墓32（第33・34図）

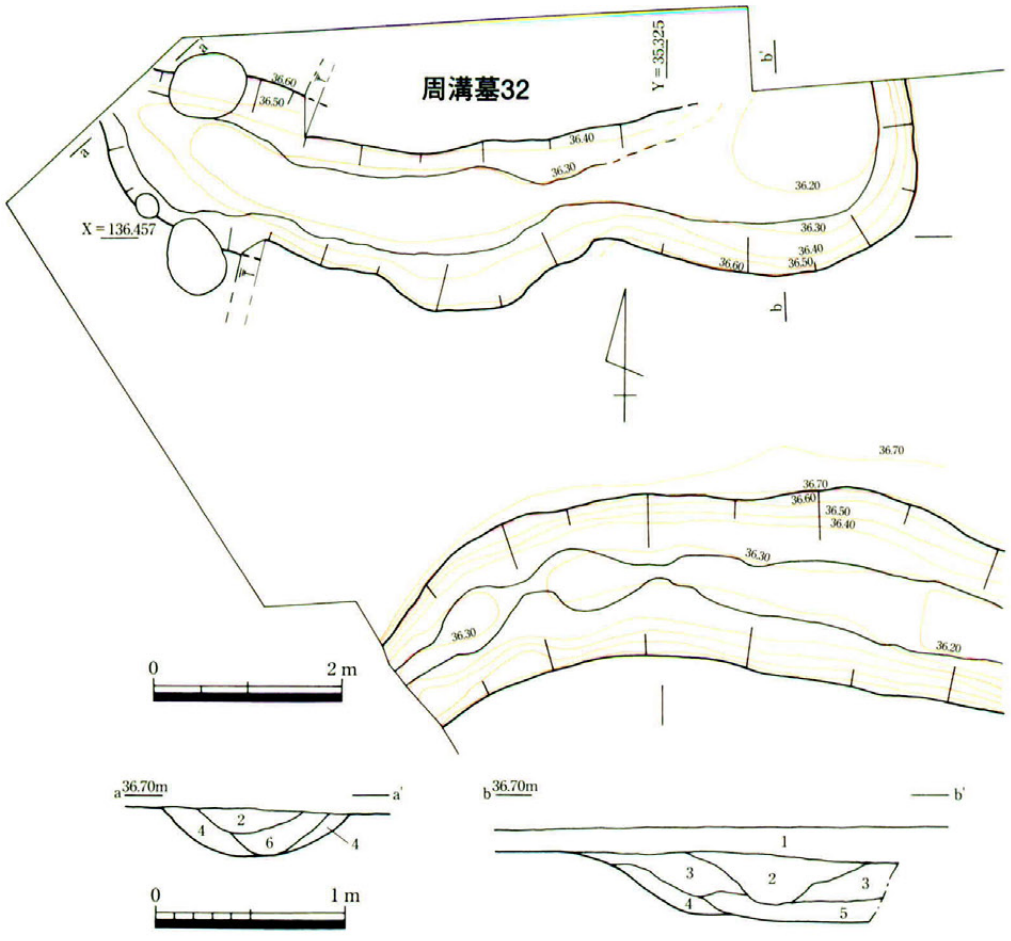
Ⅲ区北西端で検出した周溝墓である。地形はほぼフラットである。検出したのは南側の周溝のみで、大部分



第32図　Ⅶ区周溝墓31出土遺物（1/3、1/4）

は調査区外へ延びる。検出範囲では方形と考えられ、1辺5m前後に復元できる。主軸方位はほぼ正方位と考えられ、周溝の幅は180cm前後、深さは24～38cm、断面形状は緩い逆台形、埋土はおもに黒色・黒褐色砂質土である。溝の東端部、南側周溝のコーナーと考えられる箇所がやや深い。溝の中央付近から2／3ほど遺存した甕が出土した。

41は縄文土器浅鉢小片。口縁端部に沈線を巡らせる。内面はヘラミガキを密にする。**42・43**は弥生土器。



1．オリーブ黒色砂質土 5Y3/1（土壌化層？）
2．黒色砂質土10YR2/1（0.1～1㎝大の砂粒・小礫を含む）
3．黒褐色砂質土2.5Y3/1
4．褐灰色弱粘質土10YR4/1（ベースに近い）
5．黒色砂質土2.5Y2/1（1～2㎝大の小礫を多く含む）
6．黒色砂質土2.5Y2/1（0.1～1㎝大の砂粒・小礫を多く含む）

第33図　Ⅶ区周溝墓32平・断面図（1/40、1/80）

42は壷小片。体部上部を段状にし、その下部にヘラ描き沈線を施す。内外面ともヘラミガキする。**43**は甕。逆Ｌ字形の刻み目口縁を持つ。内外面・底部にヘラミガキを施す。**44**は不明粘土製品。胎土のキメが細かく、摩滅が著しい。外面には指押さえ痕を残す。

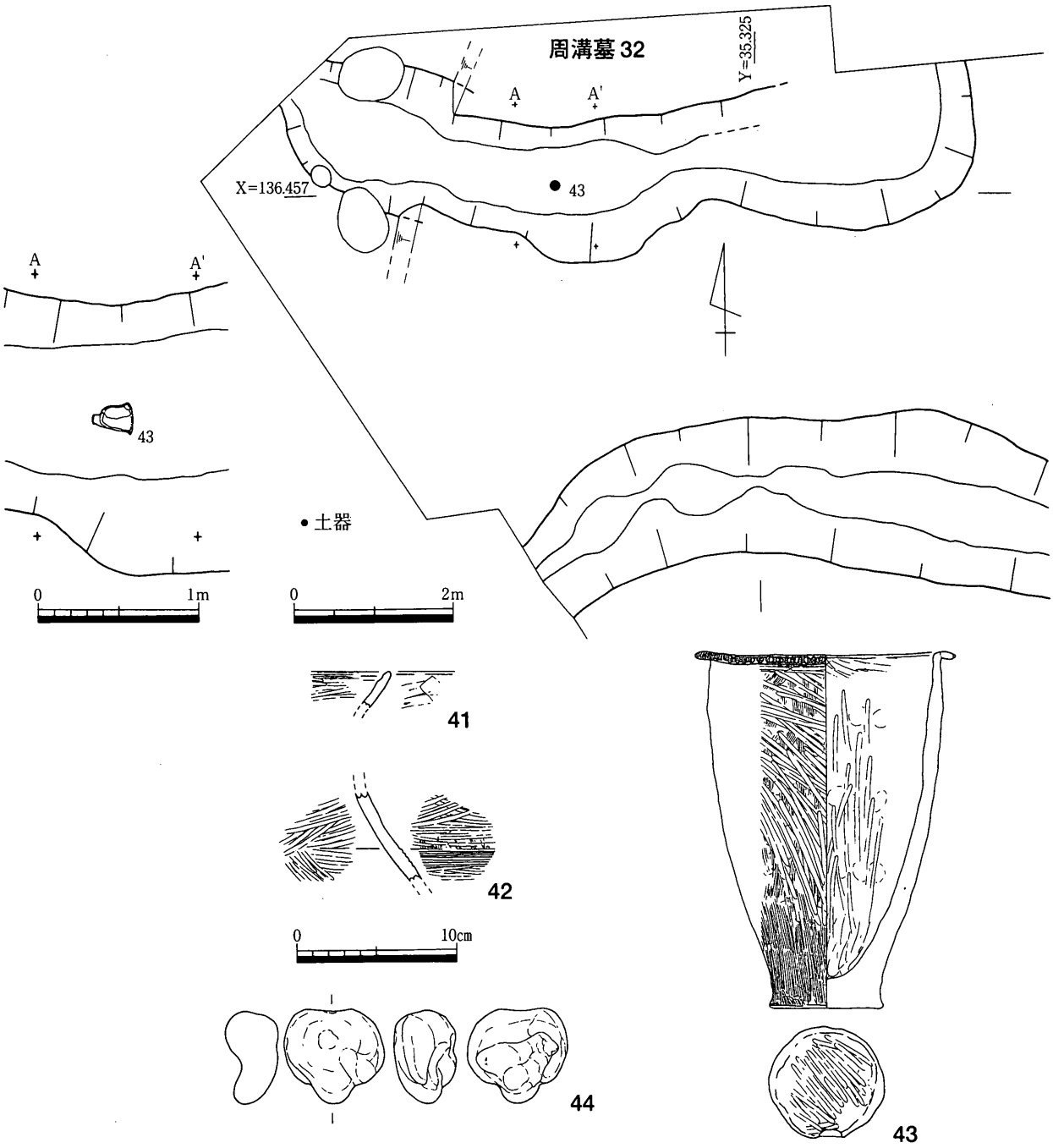
周溝墓32の時期を反映する遺物は**43**と考えられ、時期は弥生時代前期後半中葉と考えられる。

周溝墓15（第36・37・38図）

周溝墓33の南側に接して検出した方形周溝墓である。西から東へ緩やかに傾斜する地形である。一辺4.1m前後で、西側周溝はやや外側へ膨らむ。主軸方位はN8°Eである。ほぼすべての方位で周溝を他の周溝墓と共有する。c－c'断面により周溝墓33より古く、1－1'断面により周溝墓16よりも古い。周溝の幅は50～60㎝、深さ12～20㎝、断面形状は緩めの逆台形、埋土はおおむね暗褐色・暗黒褐色粗砂である。

中央やや東よりの位置に、周溝墓と主軸方位を同じくした長方形の主体部を検出した。主体部の長辺は1.82m、短辺は72㎝、深さは28㎝、埋土は上層が淡茶褐色粗砂、中層が暗茶灰色粗砂、最下層が淡褐色粗砂である。東側では木口痕跡を残す。

45～49は石器。すべてサヌカイト製。**45～48**は石鏃。すべて凹基式。**49**は楔形石器。上・下部に敲打痕を



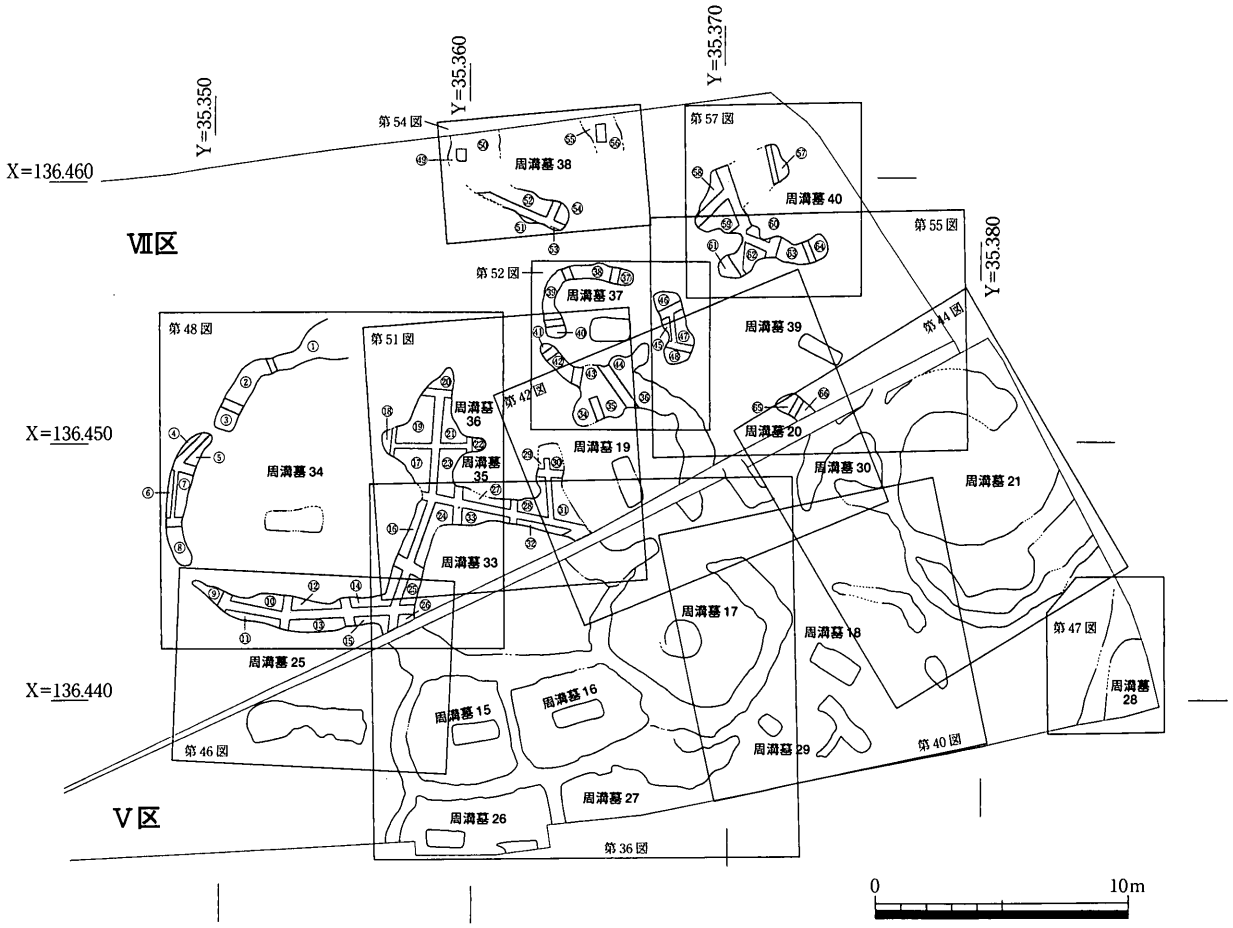
第34図　Ⅶ区周溝墓32遺物出土状況（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）

残す。いずれも縄文時代の所産である可能性もある。

周溝墓15の時期は、周溝墓16と近い弥生時代前期後半後葉と考えられる。

周溝墓16（第36・37・38図）

周溝墓15の東側、周溝墓33の南側に接して検出した方形周溝墓である。西から東へ緩やかに傾斜する地形である。南側周溝がやや長めで、平面形態が台形を呈する。長辺3.60～4.80m、短辺3.40m、主軸方位はN22°Wである。すべての周溝を他の周溝墓と共有する。l－l'断面により周溝墓15より新しく、r－r'断面により周溝墓17より古い。周溝の幅は30～76cm程度、深さ12～22cm、埋土はおおむね暗黒褐色粗砂である。周溝墓27と共有する溝から、口縁部を欠いただけの壷が出土した。



第35図　Ⅴ・Ⅶ区周溝墓平面図シート割図、Ⅶ区周溝墓ブロック割図（1/300）

周溝墓の中央付近で周溝墓と主軸方位を同じくした長方形の主体部を検出した。長辺198cm、短辺66cm、深さ12cm、上層が暗黒褐色粗砂、下層が淡褐色粗砂で、西側に木口痕跡が確認できた。主体部からは碧玉製管玉が2点出土した。

50は弥生土器壷。頸部と体部の境付近および体部最大径部分に2条の刻み目のある貼付突帯を巡らせる。刻み目は2条の貼付突帯を同時に施している。**51・52**は碧玉製の管玉。

周溝墓16の時期は**50**により弥生時代前期後半後葉と考えられる。

周溝墓17（第36・37・38図）

周溝墓16と周溝墓33に接して検出した方形周溝墓である。南東から北西へ緩やかに傾斜する地形である。長辺5.90m、短辺4.90m、主軸方位はN51°Wである。周溝の北側は陸橋部となる。溝の幅は68～132cm、深さは13～37cm、断面形状は浅い皿状またはボウル状、埋土はおおむね暗褐色粗砂、暗黒褐色粗砂である。o－o'断面により周溝墓19より古く、p－p'断面により周溝墓33より新しい。周溝の北東端部、陸橋部との境と周溝墓16の南東コーナーと接する箇所が他よりやや深い。周溝墓の中央付近で主体部に想定できる円形の土坑を検出した。

土坑は、直径150cm、深さ33cm、断面形状は逆台形、埋土は暗黒褐色粗砂である。埋土中の出土遺物はない。

53は縄文土器深鉢。胴部下半部に縄文を、上半部に貝殻条痕を残す。**54**は弥生土器底部。小片。**55・56**は石器。サヌカイト製。**55**は石鏃。凹基式。**56**は楔形石器。下部と側縁部に敲打痕を残す。一部に被熱による細かいひび割れが認められる。

周溝墓17の時期は、周溝墓33・16より新しく、周溝墓19より古いが、詳細な時期は不明である。

周溝墓26（第36・37・39図）

周溝墓15の南側に接して検出した周溝墓である。方形を呈すると考えられるが、南半部は調査区外へ延びるため全体の規模は不明である。西側の周溝は外側へやや膨らむ。おおむね西から東へ緩やかに落ちる地形である。１辺６ｍ程度、主軸方位はN3.5°W、周溝の幅は56～64cm、深さは12cm程度、埋土は暗褐色・暗黒褐色粗砂で、断面形状は浅い皿状である。l－l'断面により周溝墓16より古く、平面形状より周溝墓27よりも古いと考えられる。周溝墓15との前後関係は不明であるが、平面形態により周溝墓15に先行する可能性が高い。

周溝墓内に主体部を２基検出した。東西に並ぶ配置で、西側のものは長辺150cm、短辺66cm、深さ18cmを測る。主軸方位はほぼ正方位である。東側のものは南半部が調査区外へ延びるため全体の規模は不明であるが、長辺126cm、短辺40cm以上、深さ42cmで、主軸方位はN5°Wである。主体部の北辺が西へ突き出しているのは、木口痕跡であった為と考えられる。

埋土中からは出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

周溝墓27（第36・37図）

周溝墓26の東側に接して検出した周溝墓である。方形で東側に陸橋を持つと考えられるが、南半部は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明である。おおむね西から東へ落ちる地形である。１辺3.60ｍ程度、主軸方位はN10°W、周溝の幅は54～75cm程度、深さは12～22cm程度、断面形状は浅いボウル状、埋土はおおむね暗黒褐色粗砂等である。平面形態から周溝墓26よりは新しいと考えられ、周溝墓16との前後関係は不明であるが、平面形態によりこれに先行すると考えられる。周溝墓の北東辺の周溝は不明瞭となっている。

周溝墓27の詳細な時期は不明である。

周溝墓33（第36・37図）

Ⅴ区とⅦ区の境で検出した方形の周溝墓である。南西から北東へ緩やかに下がる地形である。長辺6.90ｍ、短辺５ｍ程度で、すべての方位で他の周溝墓と周溝を共有する。主軸方位はN10°W、周溝の幅は84～120cm、深さ22～40cm、断面形状はおおむねボウル状を呈する。溝の幅は周溝墓15・16と接する位置でやや広くなる。埋土はおおむね暗灰黒色砂礫、暗茶褐色粗砂等である。周溝南西隅、周溝墓15西側周溝が取り付く付近が最も深い。c－c'断面により周溝墓15より新しく、p－p'断面により、周溝墓17より古い。また平面形態より、周溝墓19よりも先行すると考えられる。

57・58は弥生土器。**57**は蓋小片。頂部径が小さく、厚みがあるもの。**58**は甕。周溝墓34と共有する溝からほぼ完形で出土した。口縁端部よりやや下がった位置に刻み目を持つ逆Ｌ字形口縁部を持ち、その下部に７条のヘラ描き沈線、２条１組の山形ヘラ描き文、６条のヘラ描き沈線文を施す。

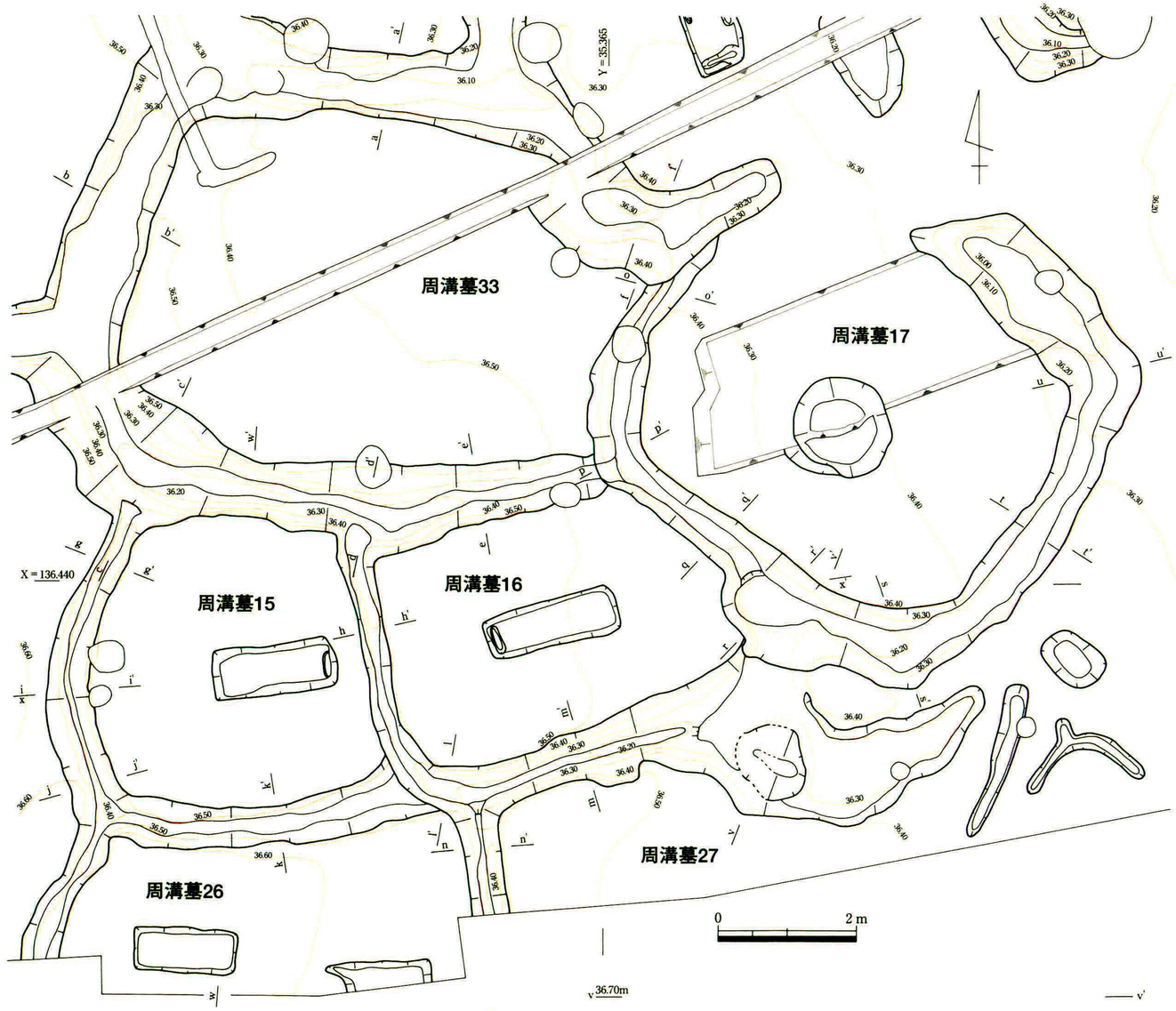
58が周溝墓33の時期を反映していると考えられ、時期は弥生時代後期後半末葉頃と考えられる。

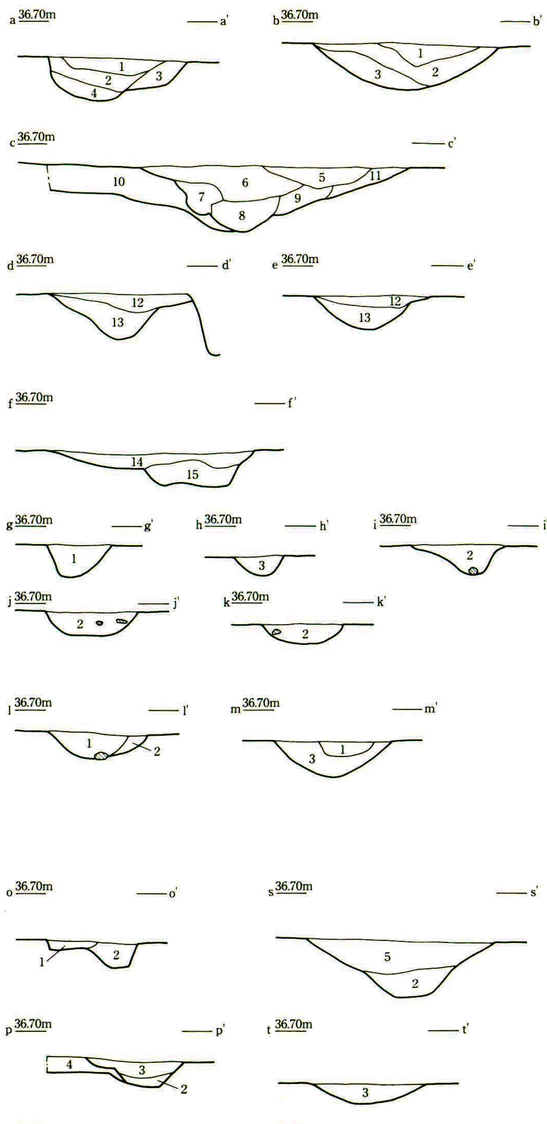
周溝墓18（第40・41図）

Ⅲ区南東部で検出した周溝墓である。南西から北東へ傾斜する地形である。南西側と北東側に周溝を掘り込み、北西側は周溝墓17と周溝を共有するが南東側の周溝はなく、各コーナー部も周溝が途切れる。形状は歪な方形で、１辺3.70～4.80ｍ程度、周溝の幅は44～68cm、深さは10～17cm、断面形状は皿状で、埋土は暗茶褐色・暗褐色粗砂である。南西側周溝の南端部がやや深くなっており、そこからは弥生土器壷がほぼ完形で出土した。

周溝墓のやや北西に寄った位置で長方形の主体部を検出した。長辺192cm、短辺90cm、深さ20cmで、埋土は暗黒灰色粗砂、底部・側縁部は淡褐色粗砂で、この部分が棺痕跡に当たると考えられる。主軸方位はN60°Wである。

59は弥生土器壷。頸部と体部最大径部分にそれぞれ１条の刻目突帯を巡らせる。外面はヘラミガキする。



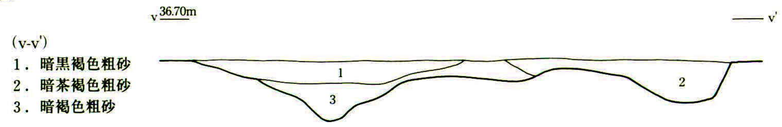


（周溝墓33）a-a'～f-f'
1．暗灰色砂質土N3/
（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。6に対応）
2．黄灰色砂質土2.5Y4/1
（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。8に対応）
3．黄灰色砂質土2.5Y5/1（9に対応）
4．褐灰色砂質土10YR4/1（黄褐色10YR5/6弱粘質土ブロックを若干含む。0.5㎜大の砂粒を若干含む）
5．暗茶褐色粗砂（砂粒がやや細かい）
6．暗灰黒色砂礫（1～2㎝大の小礫を多く含む）
7．暗褐色粗砂
8．暗茶褐色粘質土（1～2㎝大の小礫を少量含む）
9．暗茶褐色細砂
10．暗褐色粗砂（3よりも明るい色調）
11．淡褐色細砂（ベースに似るが、やや濁った色調）
12．暗灰黒色粗砂（砂粒が粗い。周溝墓2・3の1上層と同一。6に対応）
13．暗茶褐色粗砂（2～5㎝大の小礫を含む。7又は8に対応）
14．暗褐色粗砂（周溝墓17-2よりも濃い色調）
15．暗黒色粗砂

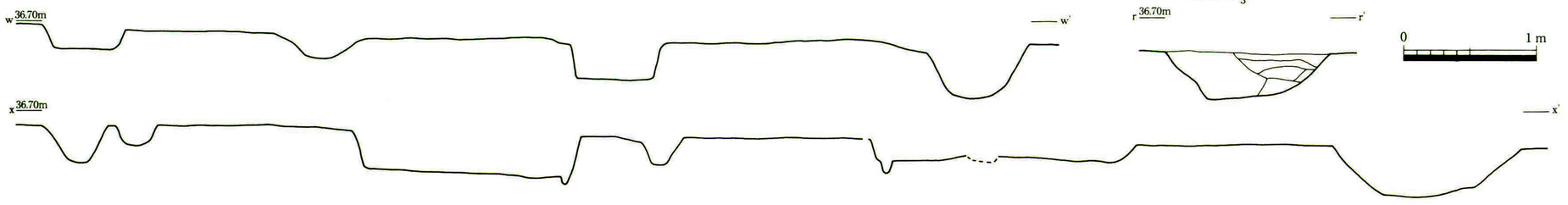
（周溝墓15）g-g'～k-k'
1．暗褐色粗砂（周溝墓33-7よりも明るい色調）
2．暗黒褐色粗砂（砂粒が粗く、3～5㎝大の礫を含む）
3．暗茶褐色粗砂（2～5㎝大の小礫を含む）

（周溝墓16）l-l'～n-n'
1．暗黒褐色粗砂（砂粒が粗い）
2．暗褐色粗砂
3．淡褐色粗砂

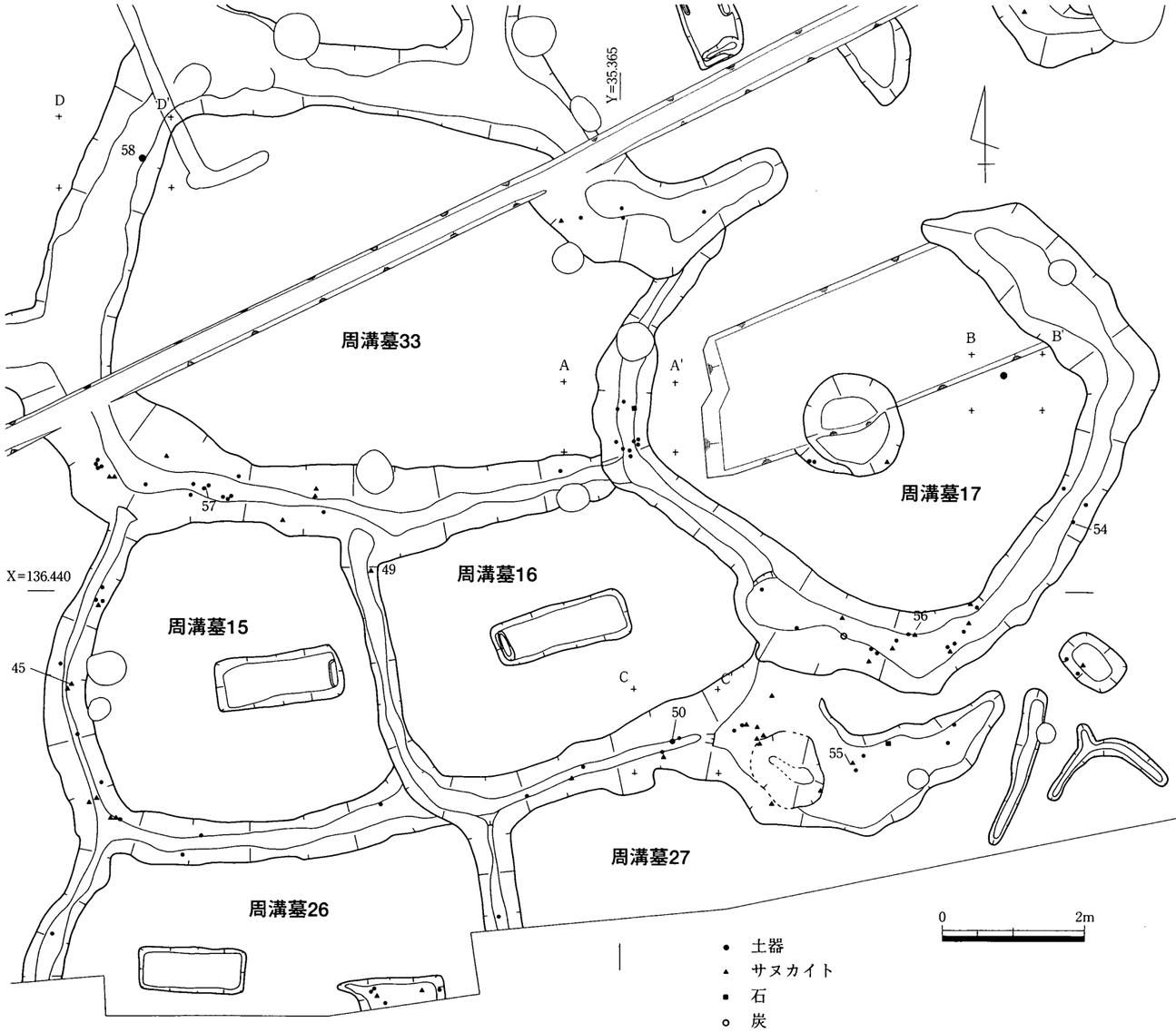
（周溝墓17）o-o'～g-g', s-s'～u-u'
1．暗褐色粗砂（2よりもやや濃い色調）
2．暗褐色粗砂
3．暗黒褐色粗砂（粘質土ブロックを含む）
4．淡褐色粗砂（ベースに似るが、やや濁った色調）
5．暗茶褐色粗砂

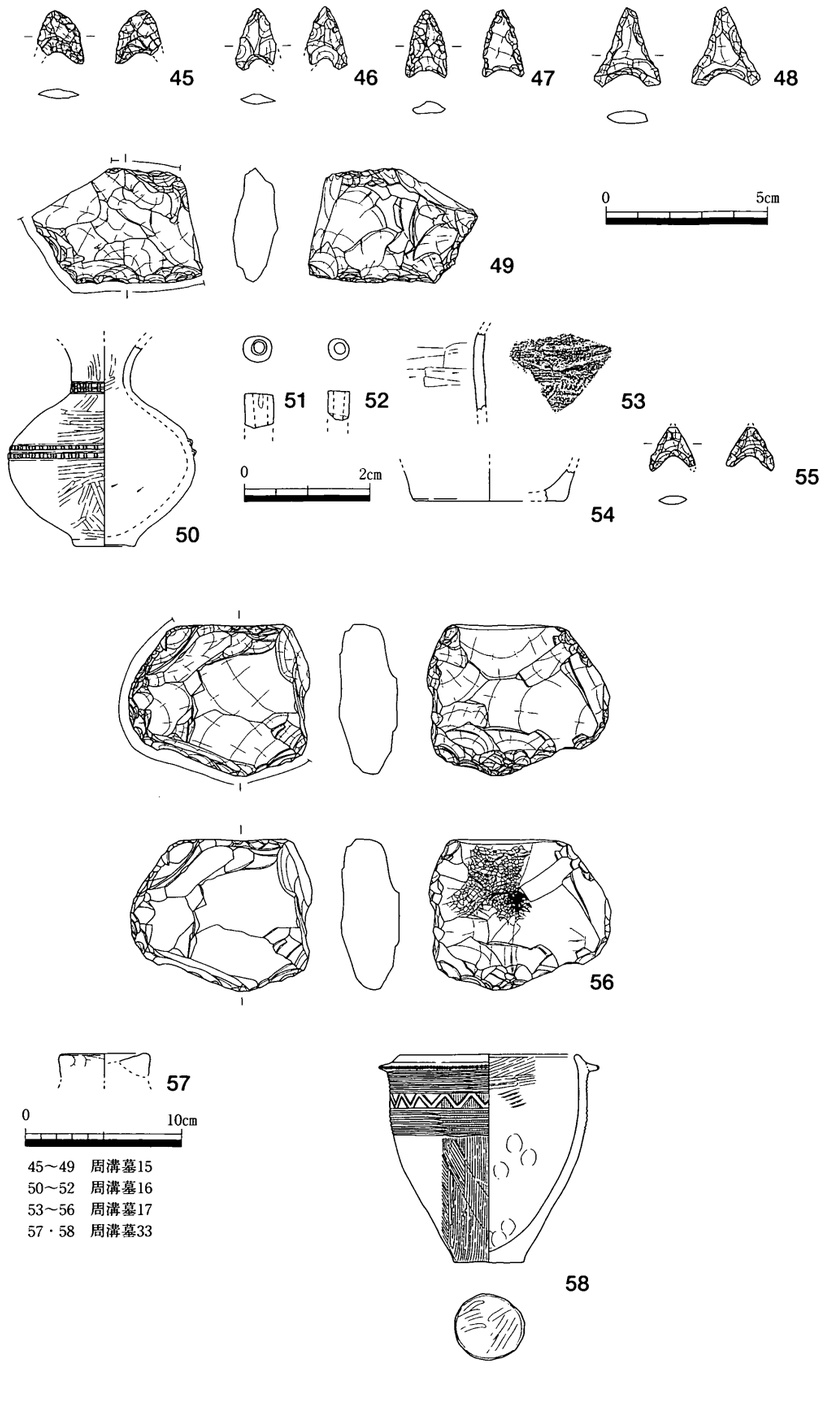


（v-v'）
1．暗黒褐色粗砂
2．暗茶褐色粗砂
3．暗褐色粗砂

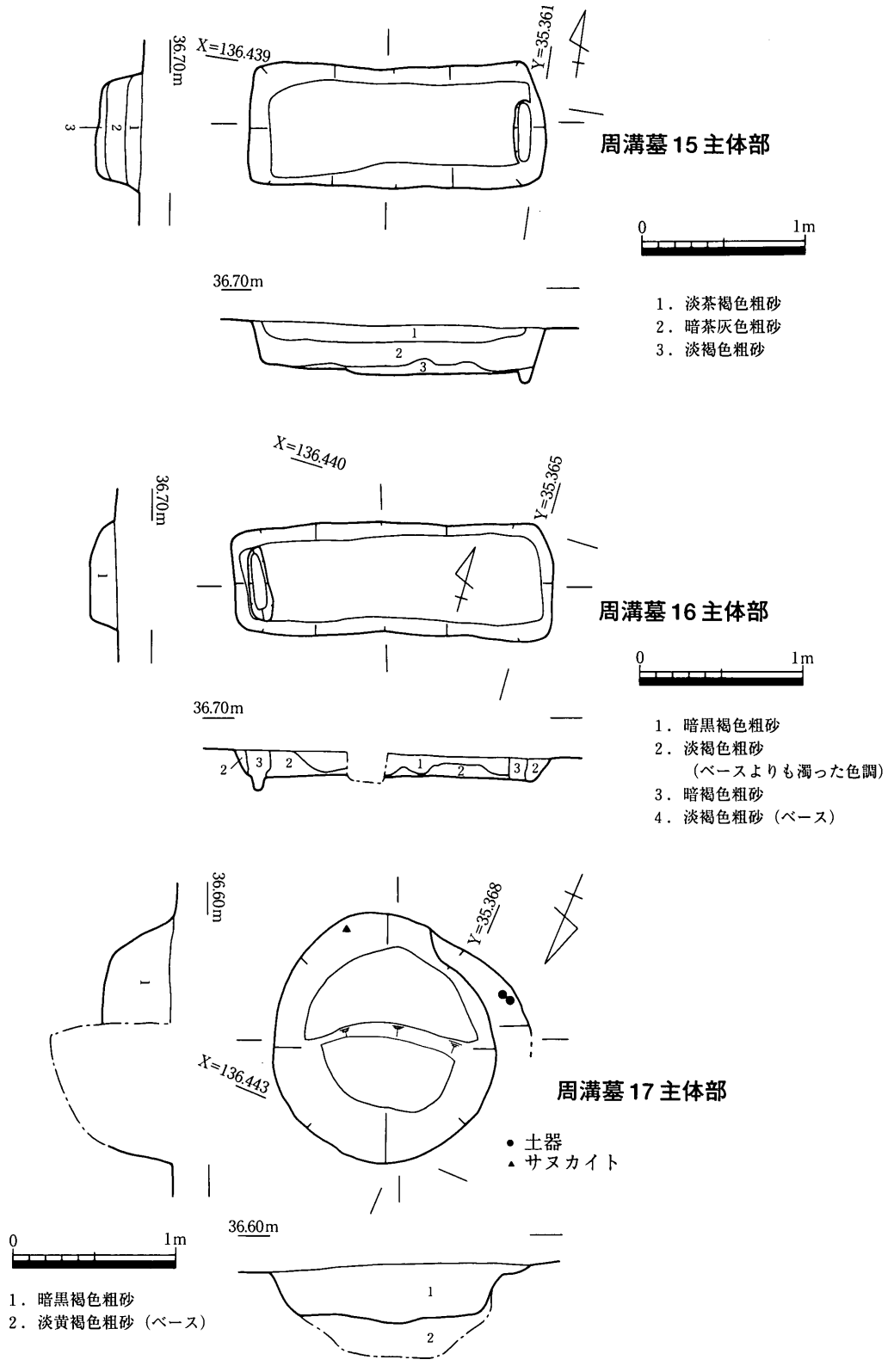


第36図　Ⅴ・Ⅶ区周溝墓15・16・17・26・27・33平・断面図（1/40、1/80）





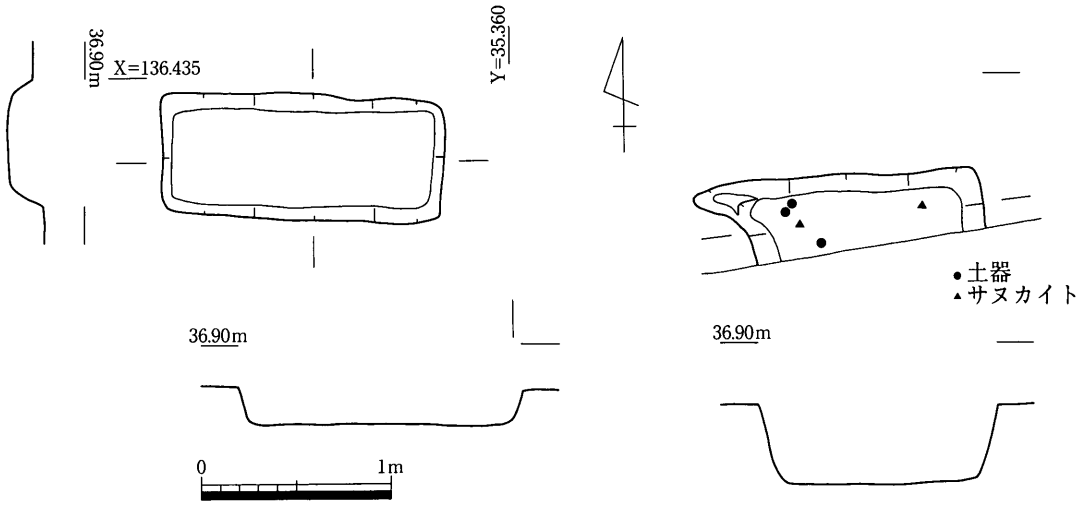
第37図　Ⅴ・Ⅶ区周溝墓15・16・17・26・27・33遺物出土状況（1/40、1/80）、周溝墓15・16・17・33出土遺物（1/1、1/2、1/4）



第38図　Ⅴ区周溝墓15・16主体部平・断面図（1/40）、周溝墓17主体部遺物出土状況平・断面図（1/40）

60は石鏃。サヌカイト製。平基式。先端部欠損。

周溝墓18の時期は壷の時期である弥生時代前期後半中葉と考えられる。



第39図　Ⅴ区周溝墓26主体部平・断面図、遺物出土状況平・断面図（1/40）

周溝墓29（第40・41図）

周溝墓18の南西側に接して検出した周溝墓である。南西から北東へ傾斜する地形で、方形と考えられる。長辺3.20m、短辺2.00mで、主軸方位はN51°Wである。北西は周溝墓17と、北東は周溝墓18と周溝を共有し、他の位置の周溝は規模が小さい。コーナーのうち3箇所は溝が途切れ、陸橋部となっている。他の周溝墓と溝を共有しない箇所での周溝の幅は20～26cm程度、深さは5cm前後である。

周溝墓の北西に偏った位置に主体部と考えられる土坑を検出した。隅丸方形で、主軸方位はN51°W、長辺92cm、短辺64cm、深さ12cm、埋土は暗茶褐色粗砂質土の単層で、棺痕跡は認められなかった。

出土遺物から遺構の時期を知ることはできないが、おおむね周溝墓17・18から少し遅れる頃と考えられる。

周溝墓19（第42・43図）

Ⅴ区とⅦ区にまたがって検出した周溝墓である。東側周溝以外は他の周溝墓と溝を共有する。やや歪な形状だがおおむね円形と考えられ、N49°Wを主軸方位とする2箇所に陸橋部を持つ。直径4.5m前後と考えられ、周溝の幅は80～120cm、深さは8～22cm、断面形状は浅い皿型～逆台形、埋土は暗褐色・暗黒褐色粗砂である。d－d'断面により、周溝墓37より古く、平面形態より周溝墓17・33より新しい。

周溝墓の中央付近で長方形の主体部を検出した。長辺186cm、短辺75cm、深さ19cm、埋土は上層は黄灰色砂質土、下層は上層よりやや粘性を持ち、四周に木口痕跡を残す。主軸方位はN21°Wである。

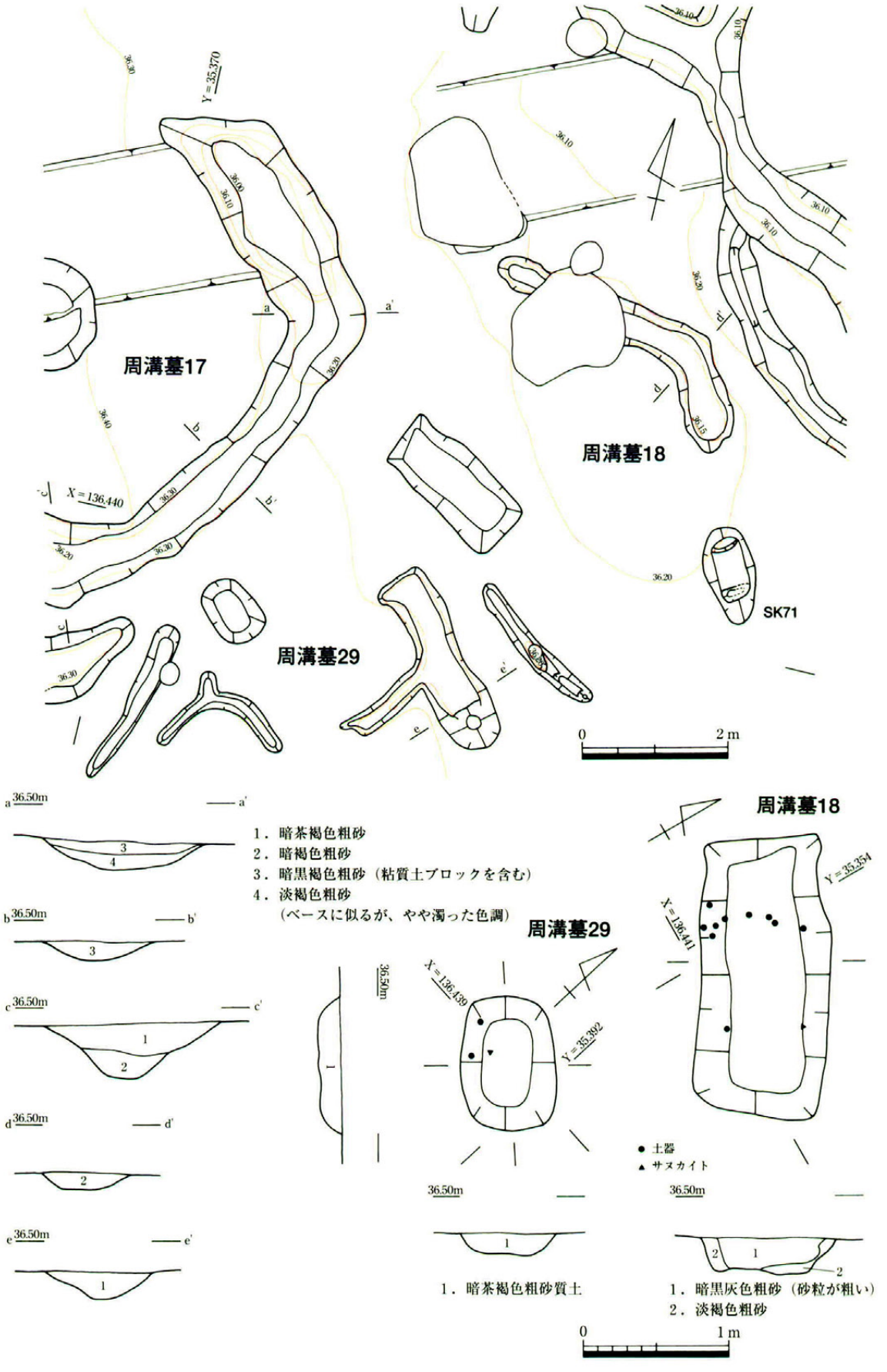
61は西側周溝南部から出土した。須恵器杯身小片。6世紀末～7世紀初頭。**62**は石鏃。サヌカイト製。凹基式。

周溝墓19の詳細時期は不明である。

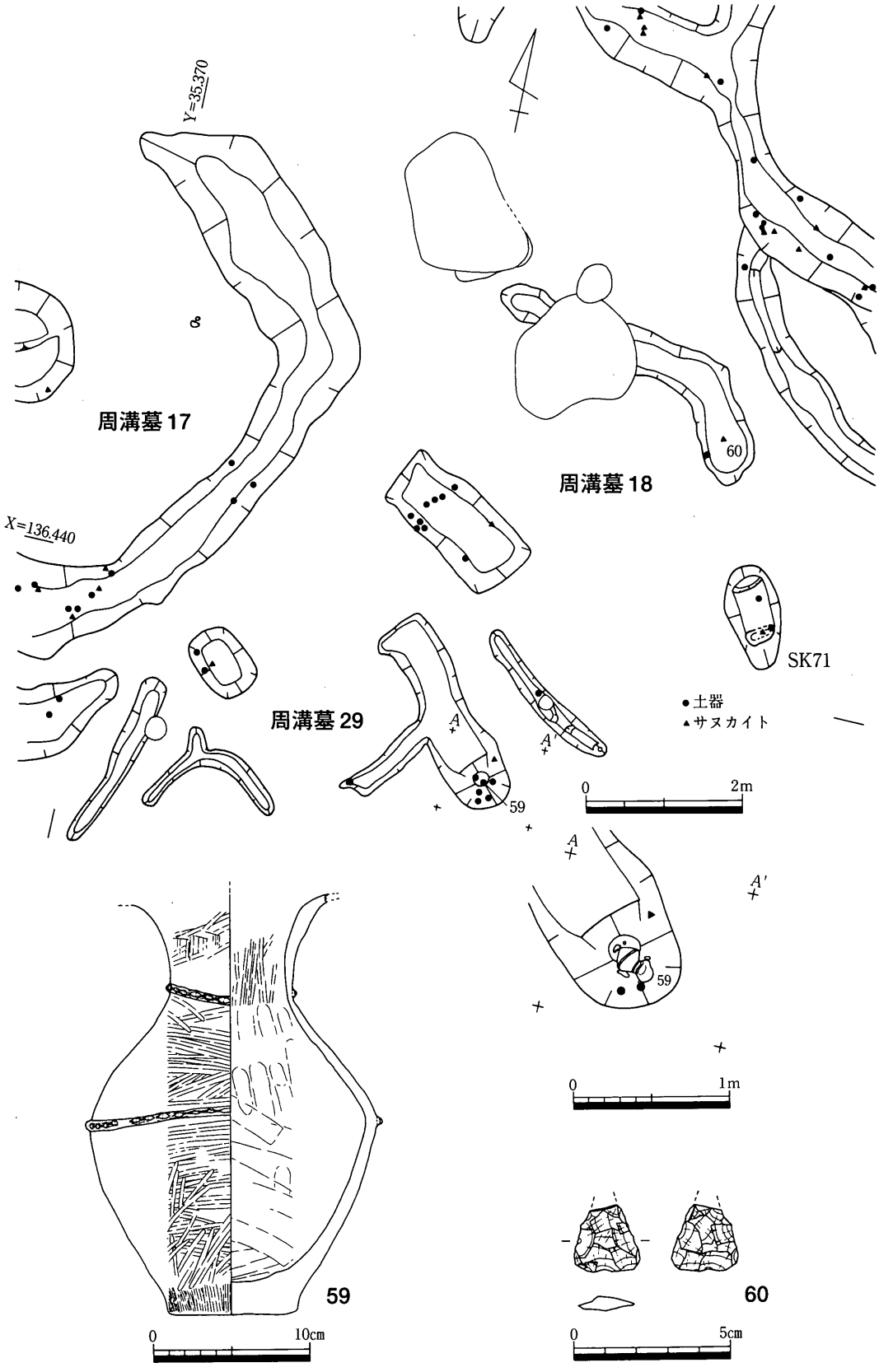
周溝墓20（第42・43図）

周溝墓19の東側に接して検出した周溝墓である。南西から北東へ緩やかに傾斜する地形である。東側では周溝墓30・39と共有するが、周溝墓19とは溝を共有しない。北西側は周溝は途切れ、陸橋部となる。平面形は歪な方形で1辺2.20m前後と考えられる。周溝の幅は80cm前後、深さ12～24cm、断面形状は半円形～逆台形、埋土は暗黒褐色粗砂・暗褐色粗砂である。

良好な出土遺物がなく、周溝墓20の時期は明らかではないが、周溝墓30を意識して作られており、これとあまり隔たらないと考えられる。

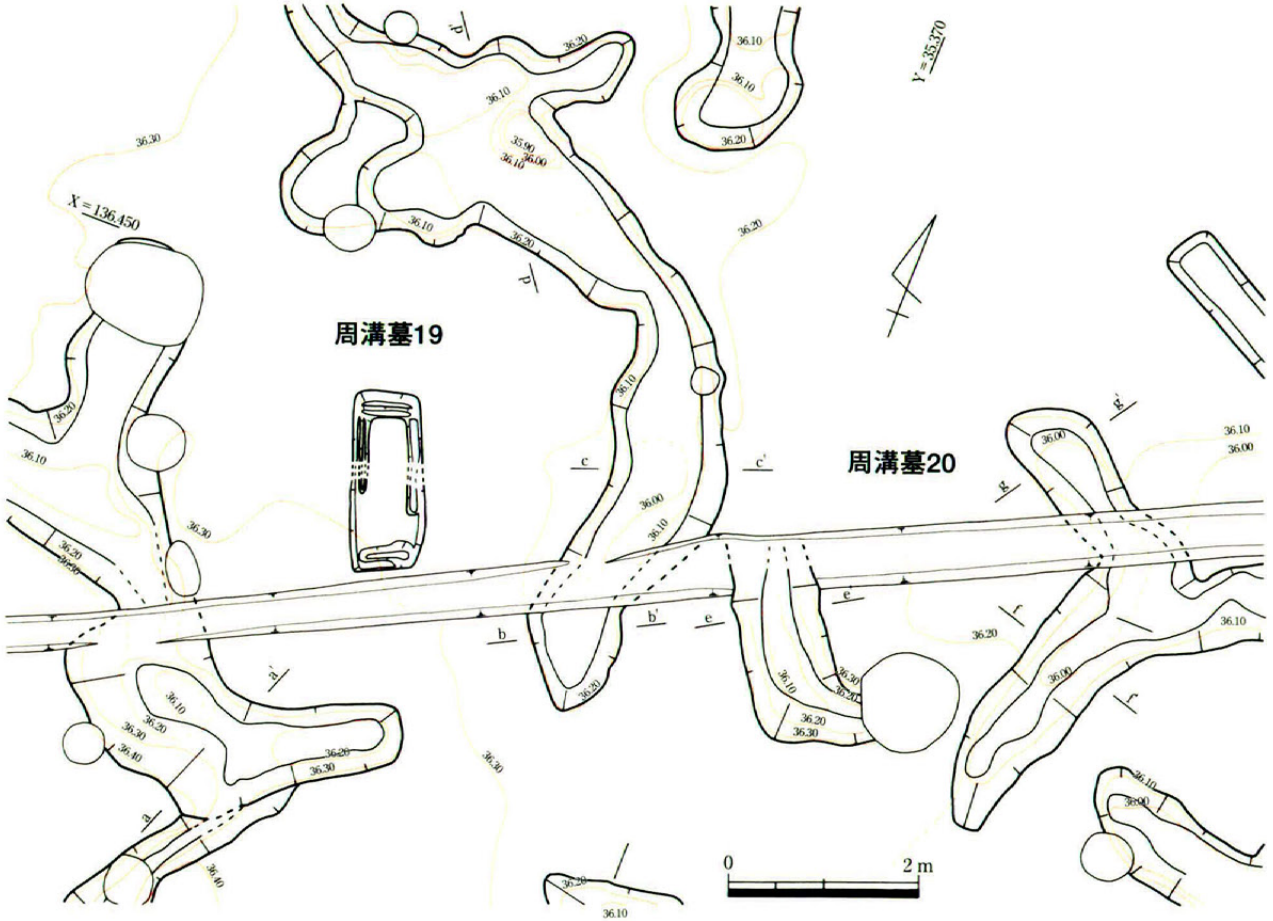


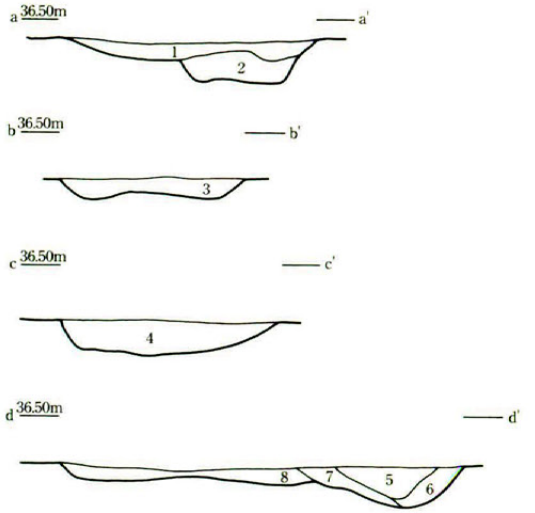
第40図　V区周溝墓18・29平・断面図（1/40、1/80）、主体部遺物出土状況平・断面図（1/40）



59・60　周溝墓18

第41図　V区周溝墓18・29遺物出土状況（1/40、1/80）、出土遺物（1/2、1/4）



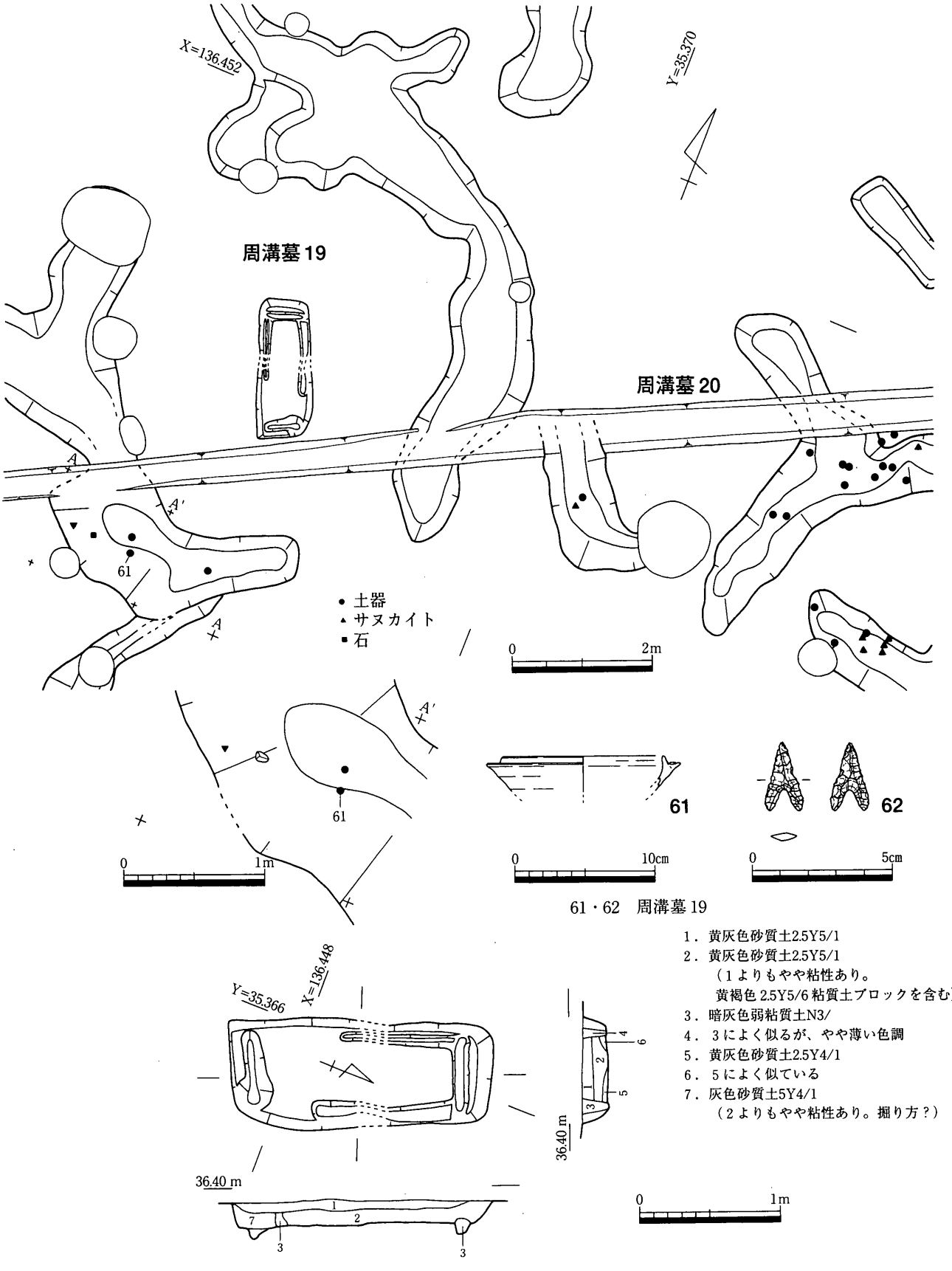


1．暗褐色粗砂（周溝墓17の３層よりも濃い色調）
2．暗黒色粗砂
3．暗黒褐色粗砂
4．黄灰色砂質土2.5Y5/1
5．暗灰色砂質土N3/（0.5㎜大の砂粒を含む）
6．褐灰色砂質土10YR5/1（黄褐色10YR5/6・褐色10YR4/6ブロックを若干含む）
7．黒褐色砂質土10YR3/1
8．褐灰色砂質土10YR4/1・黄褐色砂質土10YR4/6

1．暗黒褐色粗砂
2．暗褐色粗砂（1～2㎝大の小礫を含む）
3．黒色弱粘質土10YR2/2（0.5㎝大の砂粒を含む）

0 1 m

第42図　Ⅴ・Ⅶ区周溝墓19・20平・断面図（1/40、1/80）



61・62　周溝墓19

第43図　Ⅴ・Ⅶ区周溝墓19・20遺物出土状況（1/40、1/80）、周溝墓19主体部平・断面図（1/40）、周溝墓19出土遺物（1/2、1/4）

周溝墓21（第44・45図）

Ⅴ区東端部で検出した周溝墓である。円形と考えられるが、東端部付近は調査区外へ延びる。西北部では周

溝墓30と溝を共有する。周溝墓21の南側では弧を描くようなやや小規模な溝が検出されているが、周溝墓21と合流する部分で途切れ、その内側では検出していない。内側周溝の直径は約4.6～5.9m、外側を含めると長軸7.96mで、周溝の幅40～140cm、深さ12～26cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は暗黒褐色・暗褐色粗砂である。c－c'断面により、外側の溝より内側の溝を後から掘っている。また、南側の周溝の中央付近では長軸3.20m、短軸0.92m、深さ26cmの長楕円形の土坑が重なって検出されており、この遺構も周溝と関連があると考えられる。土坑の埋土は外側の周溝および内側の周溝の下層埋土と共通する。周溝の北東側は途切れており、陸橋部となっていたと考えられる。北側周溝の東端付近、調査区際で完形に近い弥生土器甕が出土した。

63は縄文土器深鉢。小片。**64～69**は弥生土器。**64**は壷。算盤型に近い胴部で、胴部最大径のやや上部にヘラ描きの沈線を1条巡らせる。やや古いもの。**66～69**は甕。**66**は**69**と同一固体か。口縁部と体部の境を屈曲させ、体部は櫛描き沈線を施す。最下部には刺突文が残る。**67・68**はともに外側の溝から出土したもの。口縁部を如意状にし、口縁端部に刻み目を施す。**67**の端部の刻み目は不均等に施される。体部には9条のヘラ描き沈線文が施される。**68**は体部に9条のヘラ描き沈線を巡らせ、口縁部には横方向の沈線を巡らせた後、刻み目を施す。**69**は外側に屈曲する口縁部に丸みを帯びた体部を持つ。頸部と底部には2孔1対の孔が対角線上の2箇所にある。5条1単位の櫛描き沈線文と波状文・刺突文を組み合わせた文様を施す。**70**は石鏃。凹基式。**71**は石錐未製品か。ともにサヌカイト製。

周溝墓21の時期は**69**の時期である弥生時代中期初頭頃と考えられる。

周溝墓30（第44・45図）

周溝墓21の北西側に接して検出した周溝墓である。いびつな方形と考えられ、1辺1.60～2.10mで、南西部の周溝が途切れ、陸橋部となる。周溝の幅は90cm、深さは20cm程度、断面形状は緩いV字形～逆台形、埋土は暗黒褐色・暗褐色粗砂である。

出土遺物からは周溝墓30の時期は不明であるが、周溝墓21と共通する埋土が多く、周溝墓21とほぼ同時期と考えられる。

周溝墓25（第46図）

周溝墓34の南側、周溝墓15・33の西側で検出した周溝墓である。南西から北東へ緩やかに傾斜する地形である。平面形態は長方形で、西側の周溝を欠く他、南東部のコーナーも途切れる。長辺6.40m、短辺3.00m、主軸方位はN3°Eである。周溝墓15・33・34の周溝を意識して築造されていると考えられ、周溝墓25の築造はそれらからあまり時期を経ないと考えられる。周溝の幅は72～152cm、深さは13～32cmで、南側の溝は、溝の両端部が深い。埋土中からは土器小片が出土したのみである。

72は縄文土器深鉢小片。外面に貝殻条痕を残す。**73**は弥生土器小片か。

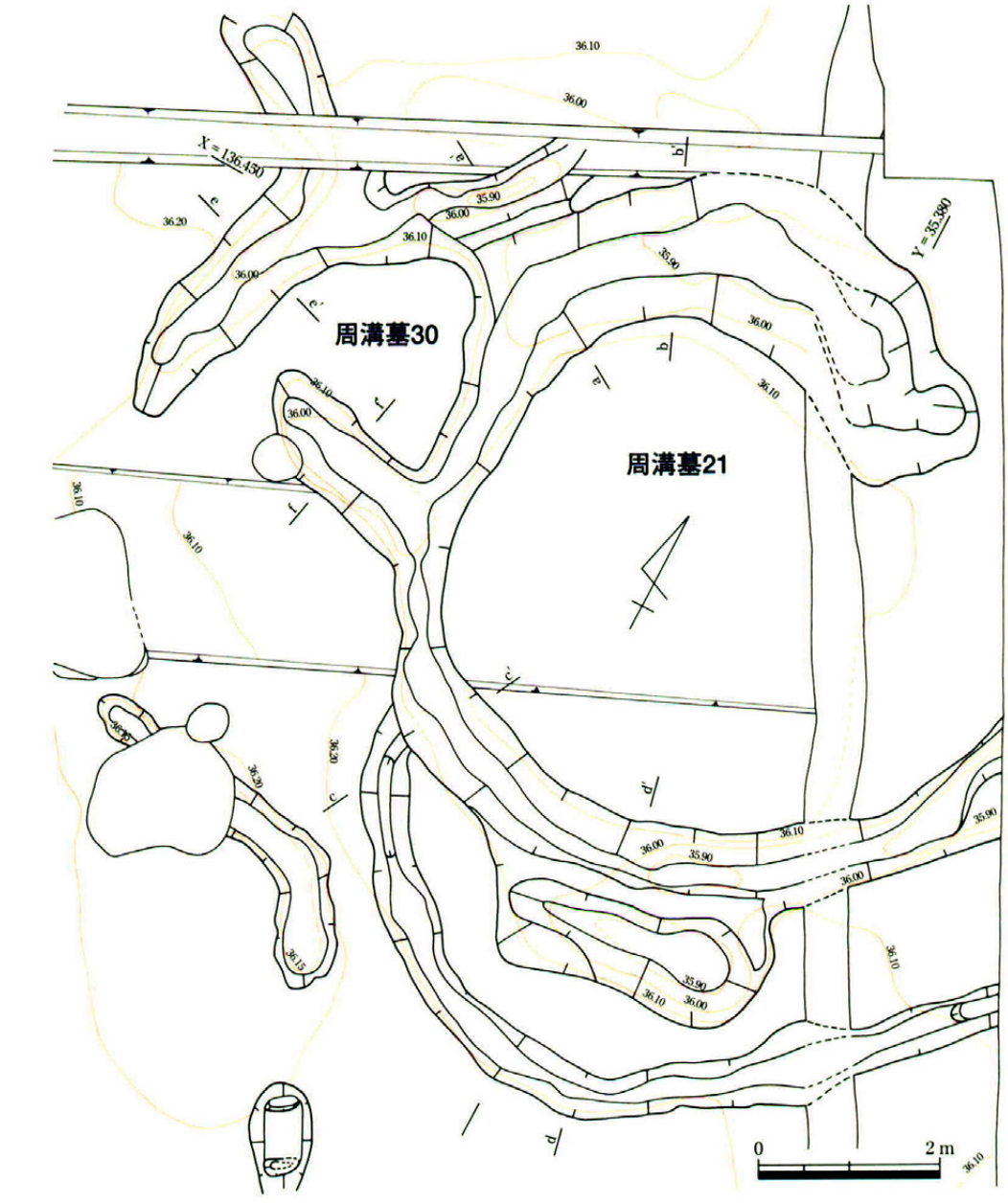
出土遺物からは周溝墓25の時期は判明しないが、周溝墓15・33・34からあまり時期を経ずに築かれたと考えられる。

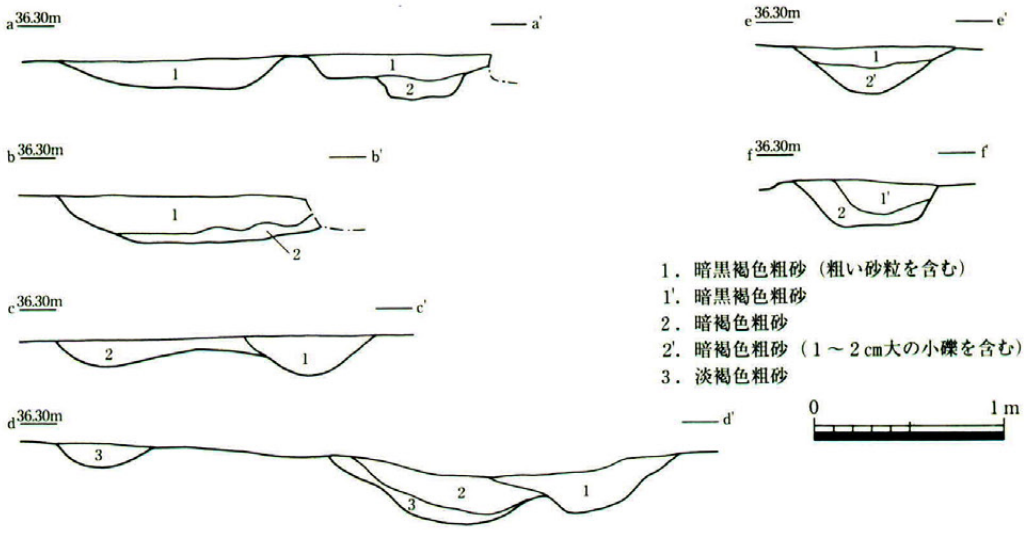
周溝墓28（第47図）

V区南東端部で検出した。南南西から北北東へ向く溝を検出したが、遺構の大半は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明である。しかし、溝の北東端部は幅が両側に広がっており、ここがコーナーとなる方形周溝墓と考えられる。また、溝の北西側の肩が北へ広がっていることから、北東側に別の1基が想定できるかもしれない。

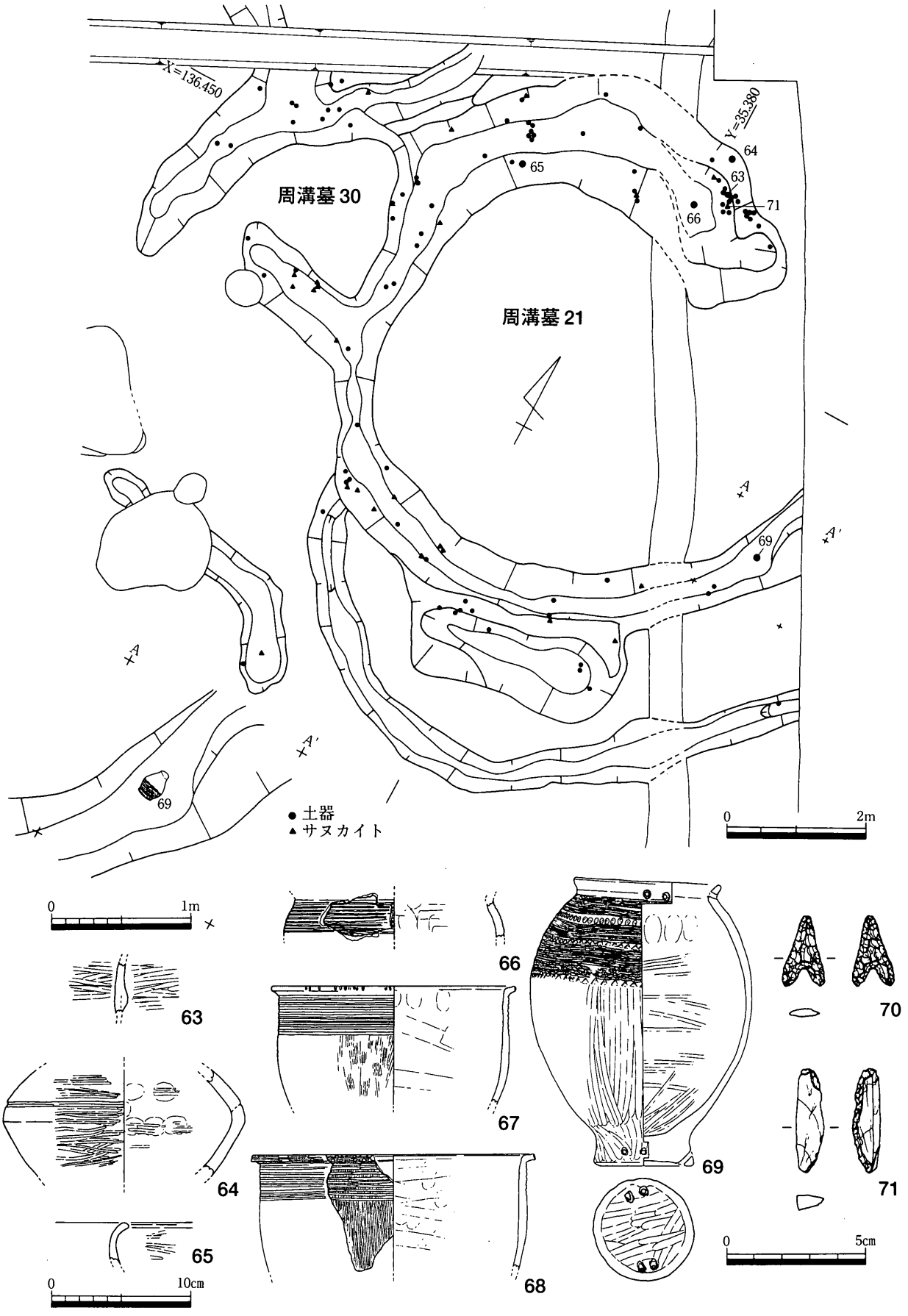
周溝の幅は84cm、深さ14cm、埋土は淡褐色粗砂で、北東端付近でやや深い。周溝のやや南西寄り部分で弥生土器壷片が出土した。

74は弥生土器壷。頸部と体部最大径に5条1単位の櫛描き沈線文と刺突文を施す。

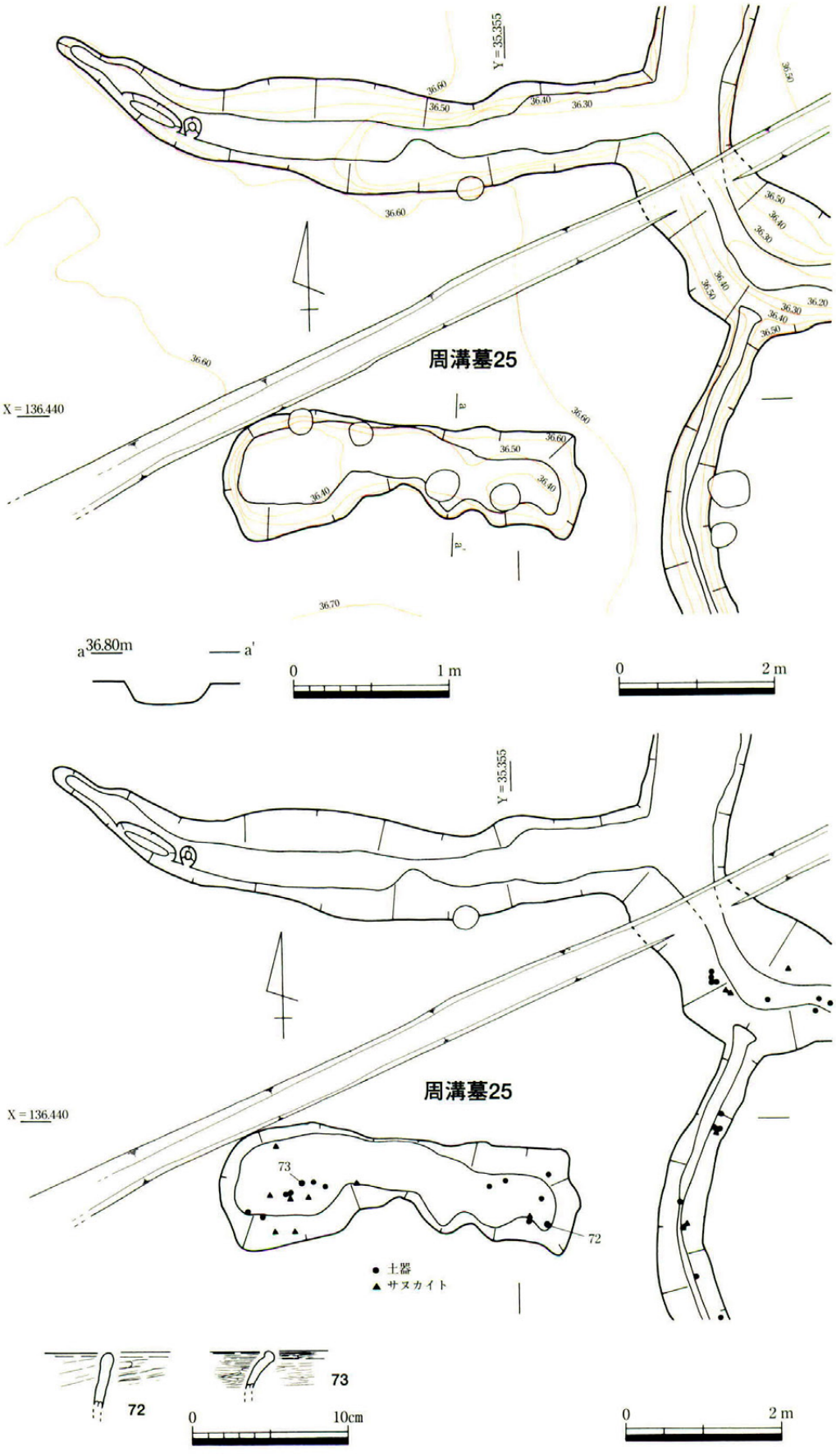




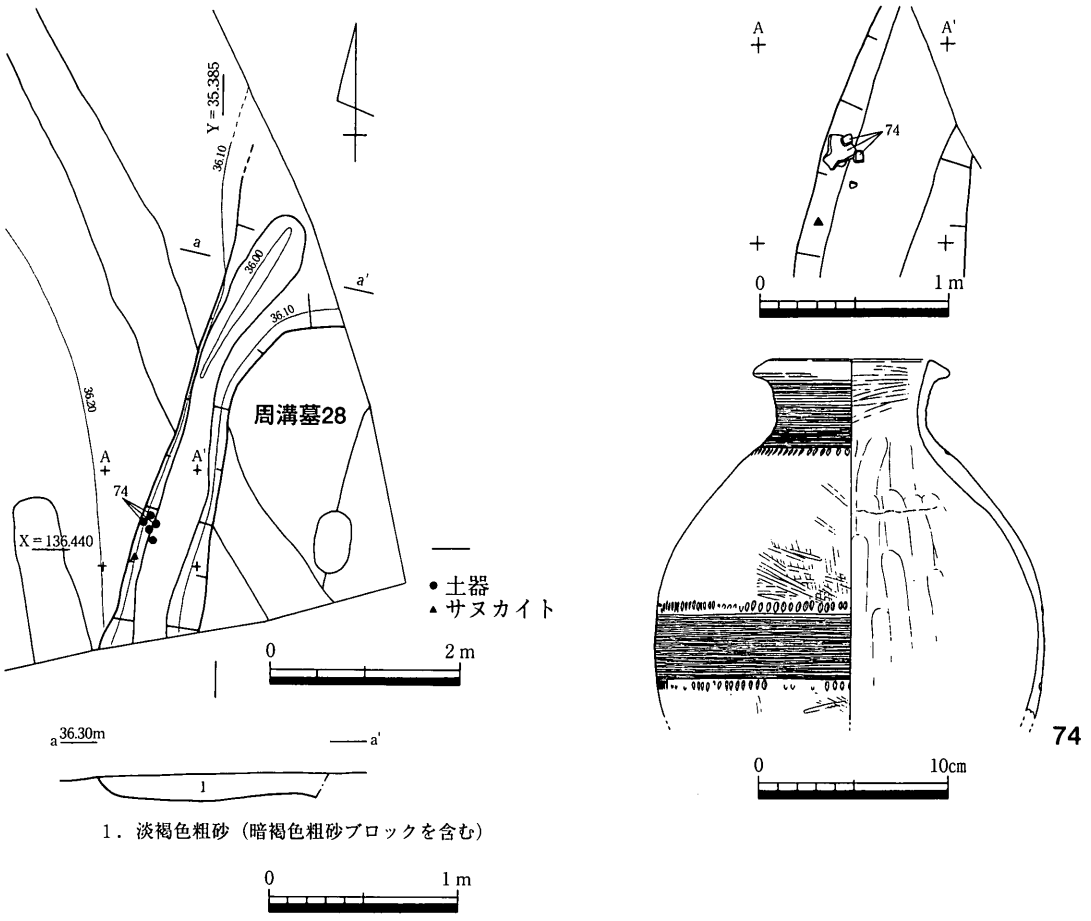
第44図　V区周溝墓21・30平・断面図（1/40、1/80）



第45図　Ⅴ区周溝墓21・30遺物出土状況（1/40、1/80）、出土遺物（1/2、1/4）



第46図　Ⅴ区周溝墓25平・断面図、遺物出土状況（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）



第47図　Ⅴ区周溝墓28遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）

周溝墓28の時期は**74**により弥生時代中期初頭と考えられる。

周溝墓34（第48・49・50図）

Ⅶ区中央部付近で検出した周溝墓である。西南西から東北東へ傾斜する地形である。北東部と西側に2箇所に陸橋部を持つ。南部では周溝墓25と、東南部で周溝墓33と、東北部で周溝墓35・36と接する。形状は他の周溝墓と接する東部は方形を呈するが、西部から北部にかけては円形状を呈する。1辺8.60～9.30m、周溝の幅は54～160cm、深さ8～34cm、断面形状はボウル状～皿状、埋土は黒褐色砂質土、暗灰色弱粘質土、黒褐色弱粘質土等である。周溝は地形的にやや高く、他の周溝墓と接しない西側が浅く、東側がやや深い。おおむね主軸方位はN12°Eである。

周溝墓の中央やや南寄りの位置で長方形の主体部を検出した。長辺230cm、短辺78cm、深さは24cm、埋土は褐灰色砂質土、灰黄褐色砂質土で、西側で褐灰色砂質土の棺痕跡が観察できた。主軸方位は正方位である。

75は弥生土器底部。平底を呈する。**76**は黒色土器A椀底部。小片。

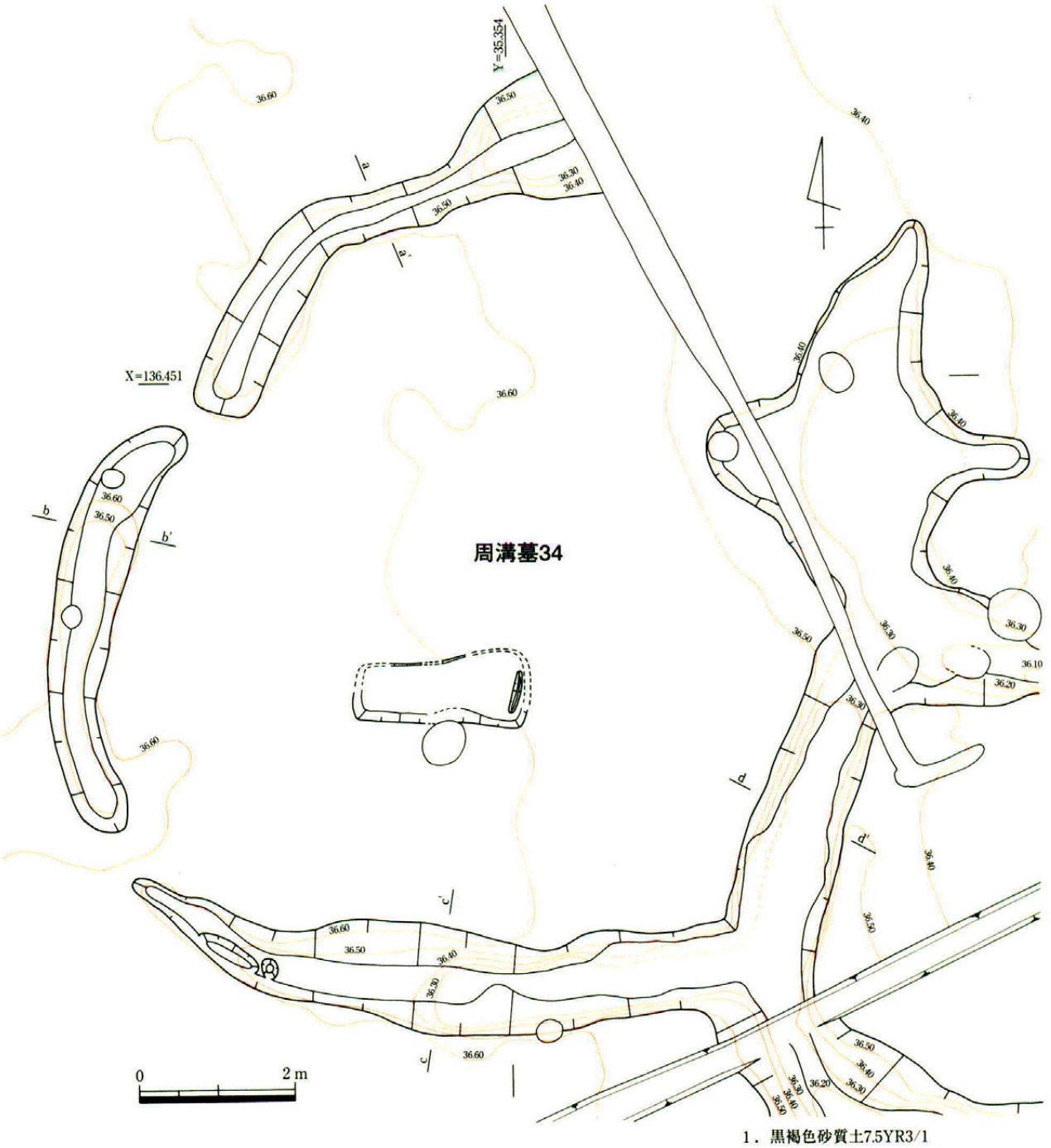
77～79はいずれも主体部から出土した石器である。サヌカイト製。**77・78**は石鏃。**77**は凹基式。**78**は平基式である。**79**は石匙。

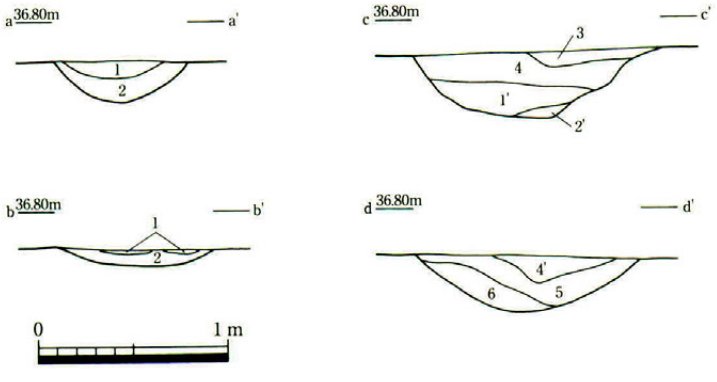
出土遺物の大半は遺構の時期を示しているとは考えられず、他からの紛れ込みと考えられる。

周溝墓34の時期は周溝墓33よりやや古い時期と考えられる。

周溝墓35（第51図）

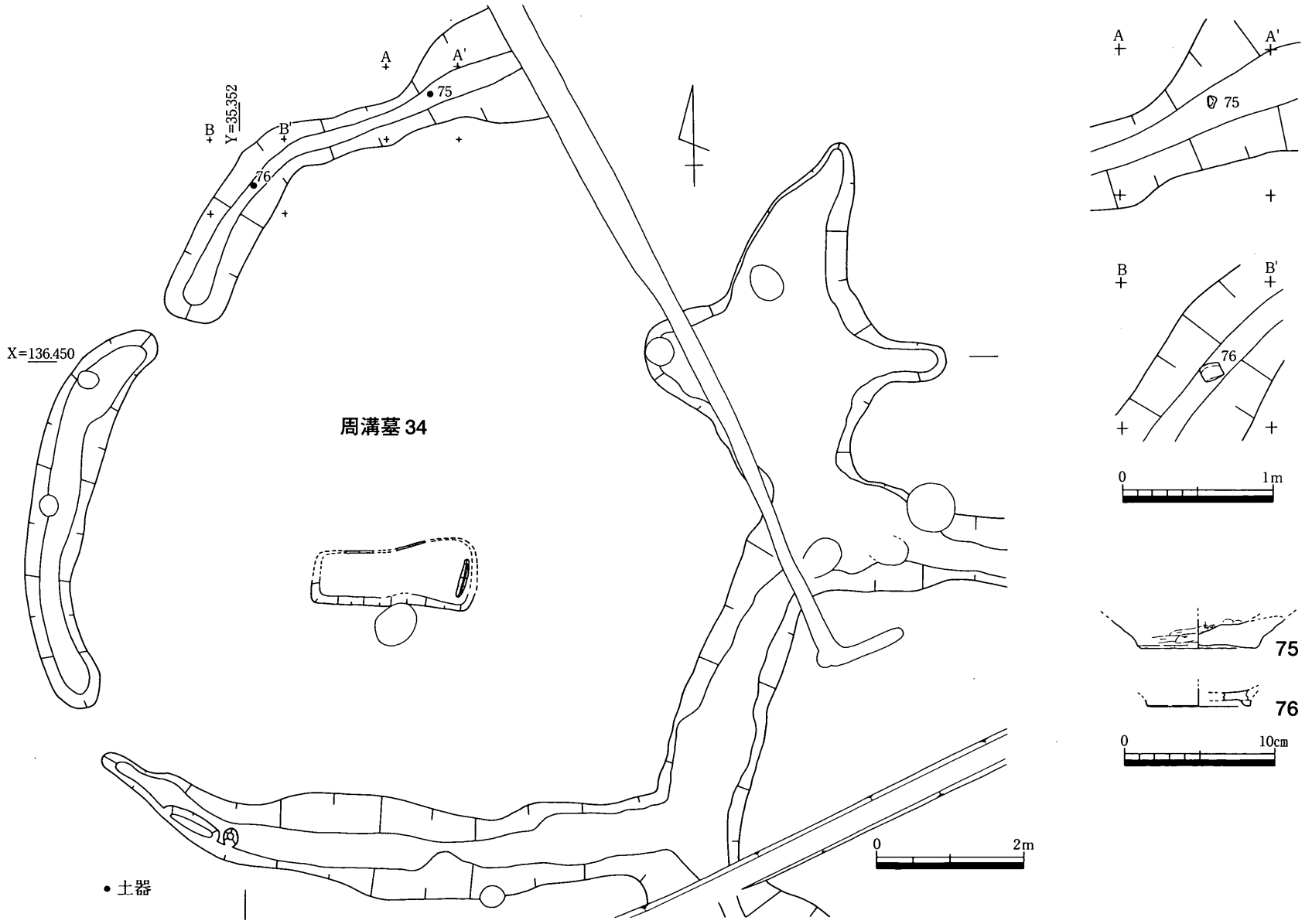
Ⅶ区中央付近、周溝墓33の北側で検出した周溝墓である。西から東へ緩やかに傾斜する地形である。方形で北側に陸橋部を持ち、陸橋部を通して周溝墓36と接する。長辺3.10m、短辺1.40m、主軸方位はN13°Eである。



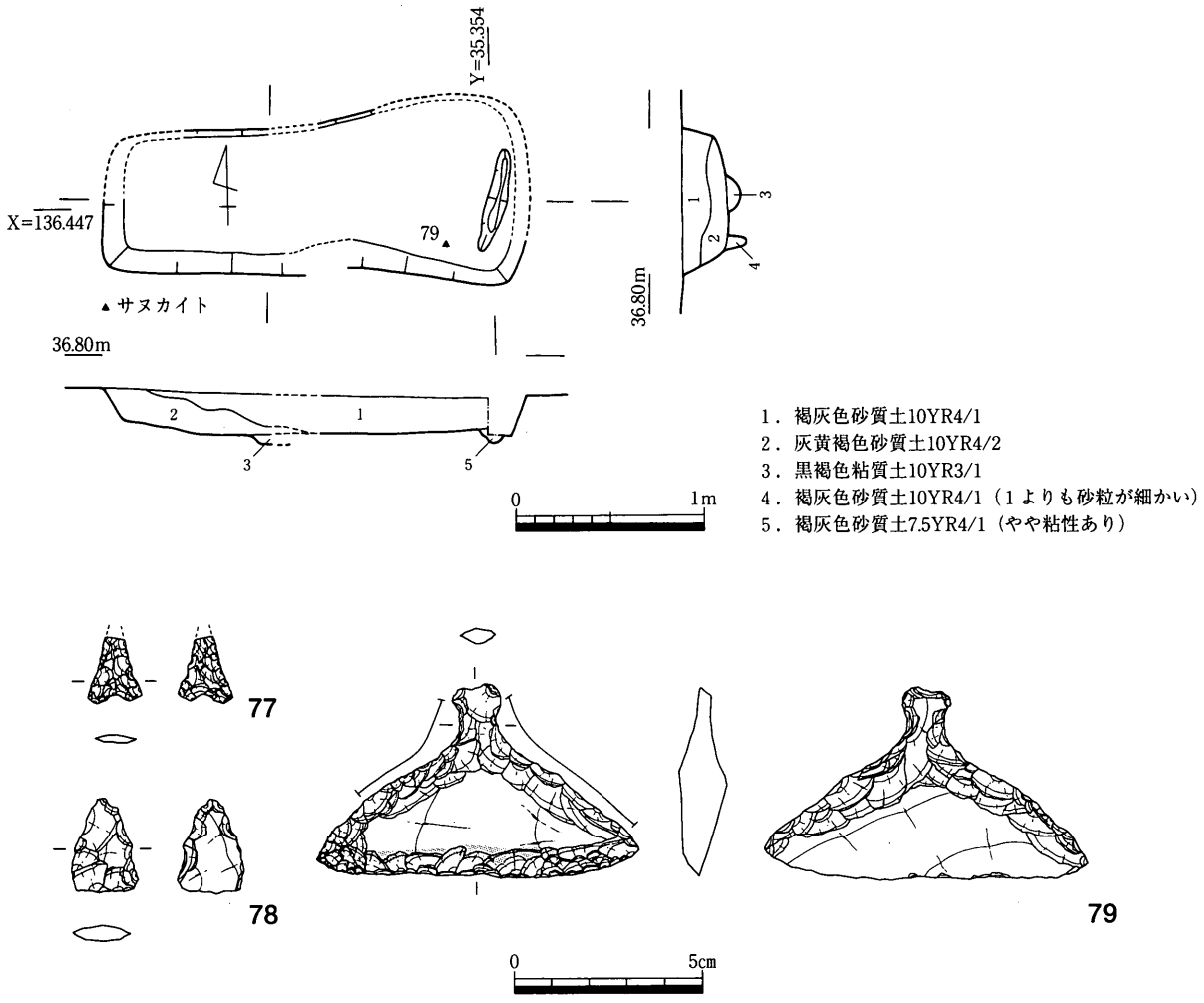


1．黒褐色砂質土7.5YR3/1
1'．黒褐色弱粘質土7.5YR3/1
（4よりも砂粒が細かい）
2．褐灰色弱粘質土10YR4/1
（砂粒を多く含む）
2'．褐灰色弱粘質土10YR4/1
（黄褐色10YR5/6が斑状に入る）
3．黒色弱粘質土N2/
（粗い砂粒を多く含む）
4．暗灰色弱粘質土N3/
（3よりも細かい砂粒を多く含む）
4'．暗灰色砂質土N3/
（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）
5．黄灰色砂質土2.5Y4/1
（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）
6．黄灰色砂質土2.5Y4/1
（0.5～1㎝大の小礫を含む）

第48図　Ⅶ区周溝墓34平・断面図（1/40、1/80）



第49図　Ⅶ区周溝墓34遺物出土状況（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）



第50図　Ⅶ区周溝墓34主体部遺物出土状況平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2）

周溝の幅は40～152cm、深さは周溝墓33と接する溝以外は8cm程度で、やや浅い。

80は縄文土器深鉢。小片。**81～83**は石器。サヌカイト製。**81・82**は石鏃。凹基式。**83**はスクレイパーか。上部にのみ敲打痕を残す。

出土遺物は遺構の時期を反映しているとは言えず、周溝墓35の時期は周溝墓33からやや遅れる時期と考えられる。

周溝墓36（第51図）

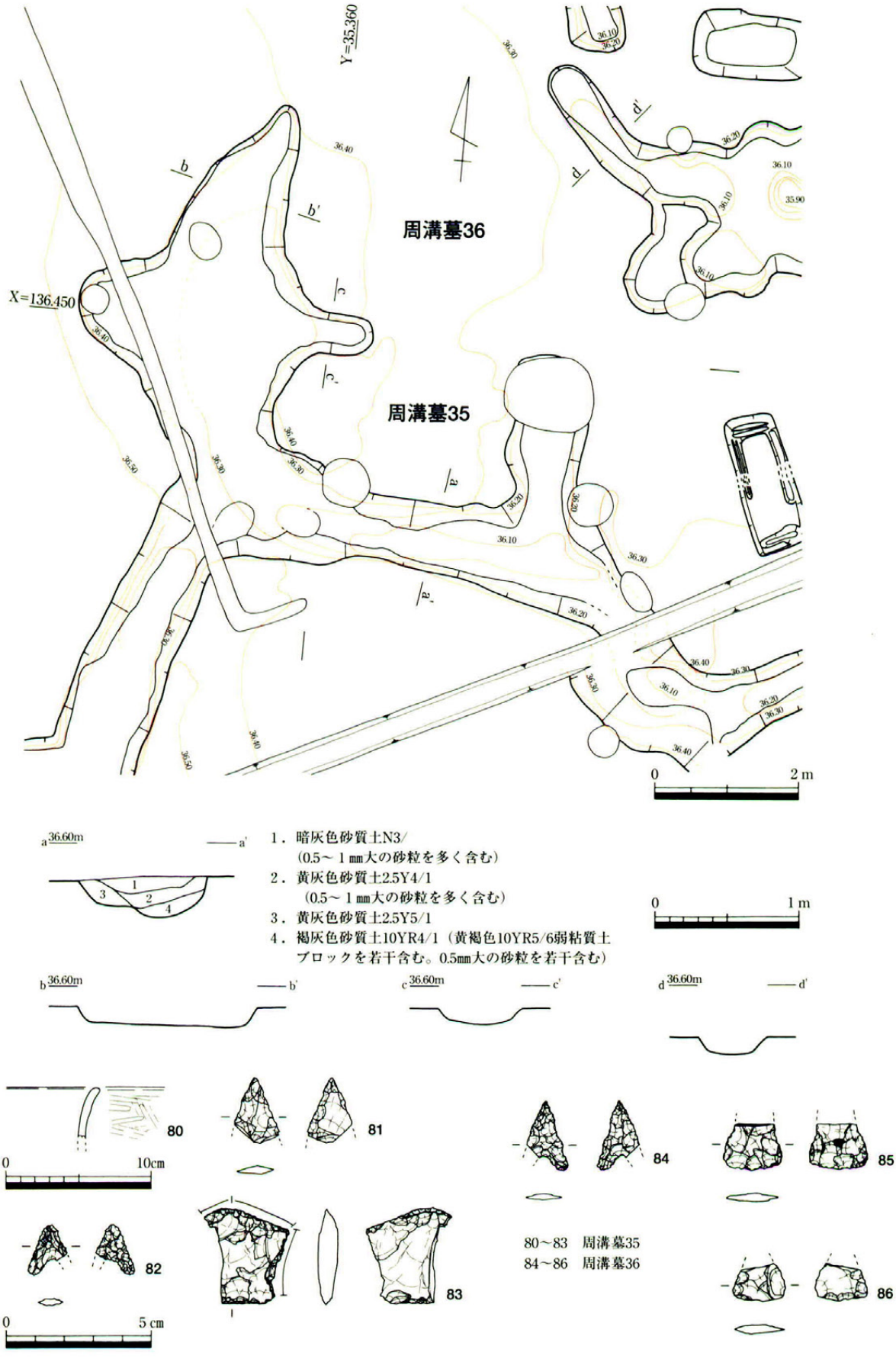
周溝墓35の北側に接して検出した周溝墓である。西から東へ緩やかに傾斜する。北東で周溝墓37、南東で周溝墓19と接し、周溝墓35・周溝墓19を意識して作られていると考えられる。おおむね方形と考えられるが、北西側、南東側のかなりの部分が陸橋部として残されている。長辺4.30m、短辺2.60m、主軸方位は西側の溝からみればN16°Wである。周溝の幅は44～120cm程度、深さ10cm程度と浅い。

84～86はいずれも石鏃。サヌカイト製。**84**は凹基式、**85・86**は平基式。

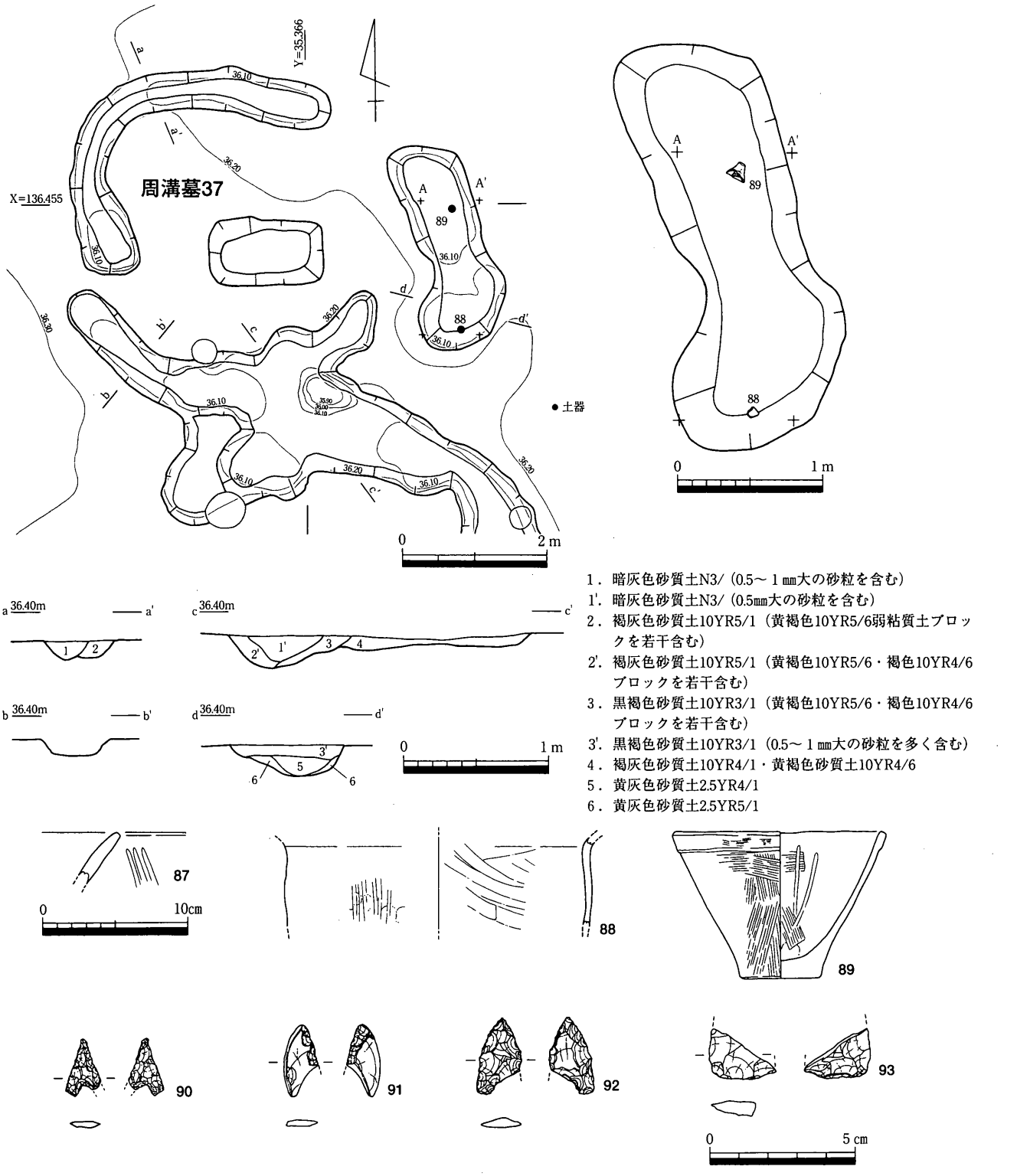
遺物はいずれも遺構の時期を示しているとは考えられず、周溝墓36の時期は周溝墓35からあまり隔たらない時期と考えられる。

周溝墓37（第52・53図）

Ⅶ区東寄り、周溝墓19の北側、周溝墓36の北東側で検出した周溝墓である。南西から北東へ緩やかに傾斜す

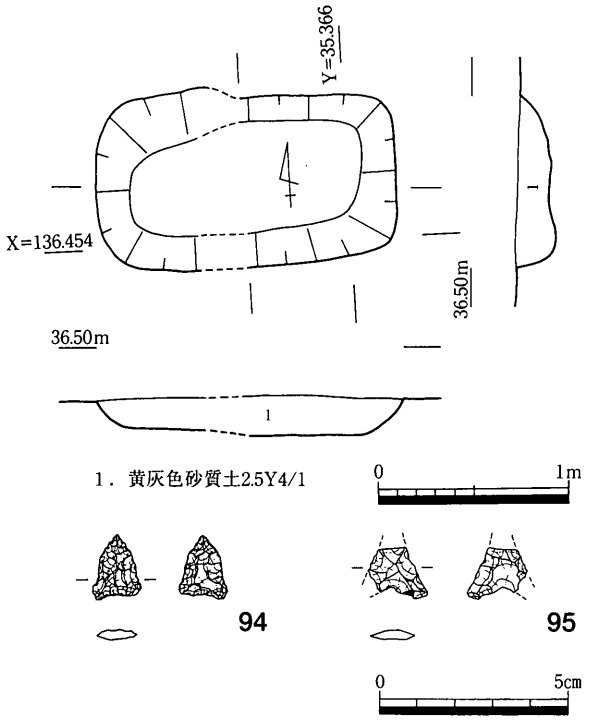


第51図　Ⅶ区周溝墓35・36平・断面図（1/40、1/80）、出土遺物（1/2、1/4）



第52図　Ⅶ区周溝墓37遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、出土遺物（1/2、1/4）

る。形状は長方形と考えられ、長辺3.20m、短辺2.60m程度と考えられる。主軸方位はN5°Wである。周溝は西側で1箇所、北東部、南東部で各1箇所に陸橋部を持つ。東側の周溝は他より規模が大きい。周溝の幅は東側周溝で78cm、その他で46～64cm、深さは東側周溝で24cm、その他で15～18cm、断面形状は浅いボウル状、埋土は暗灰色砂質土、黒褐色砂質土である。c－c'断面により周溝墓19より新しい。東側周溝から完形に近い弥生土器鉢が出土した。



第53図　Ⅶ区周溝墓37主体部平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2）

周溝内部やや南寄りの位置で主体部を検出した。長方形の土坑で、主軸方位はN1°E、長辺160cm、短辺89cm、深さ21.6cm、埋土は黄灰色砂質土である。棺痕跡は認められず、土坑墓であったと考えられる。

87～89は弥生土器。**87**は壷小片。**88**は甕体部片。如意形口縁を持ち、体部はハケ調整が残る。**89**は鉢。ほぼ完形で、東側周溝から出土した。口縁端部を厚くし、全面にハケ調整が残る。**90～95**は石鏃または石鏃未製品。いずれもサヌカイト製。**90・92**は凹基式、**93**は平基式、**91**は未製品と考えられる。**94・95**はともに凹基式で、主体部から出土したものだが、主体部と関連する遺物ではないと考えられる。

周溝墓37の時期は**89**の時期である弥生時代前期後半後葉頃と考えられる。

周溝墓38（第54図）

Ⅶ区北東部で検出した周溝墓である。おおむね西から東へ傾斜する地形である。北半部は調査区外へ延びるため全体の規模・形状は不明であるが、調査区端で検出した部分は幅が広くなっている為、この部分で屈曲するのかもしれない。南東側に陸橋部を持つ。1辺または直径3.60m、周溝墓の幅は92～192cm、深さ7cm～31cm、断面形状は浅いボウル状、埋土は上層が黒褐色弱粘質土、下層が黄灰色砂質土・褐灰色弱粘質土である。西南側の溝端のみがやや深く、他はいずれも10～20cm程度であった。周溝南西側の深い部分から、甕と鉢が1個体ずつほぼ完形で出土した。

96～98は弥生土器。**96**は甕。逆L字形口縁を持ち、体部には沈線を施さない。**97**は鉢。口縁端部を厚くする。**98**は甕小片。

遺構の時期は弥生時代前期後半後葉と考えられる。

周溝墓39（第55・56図）

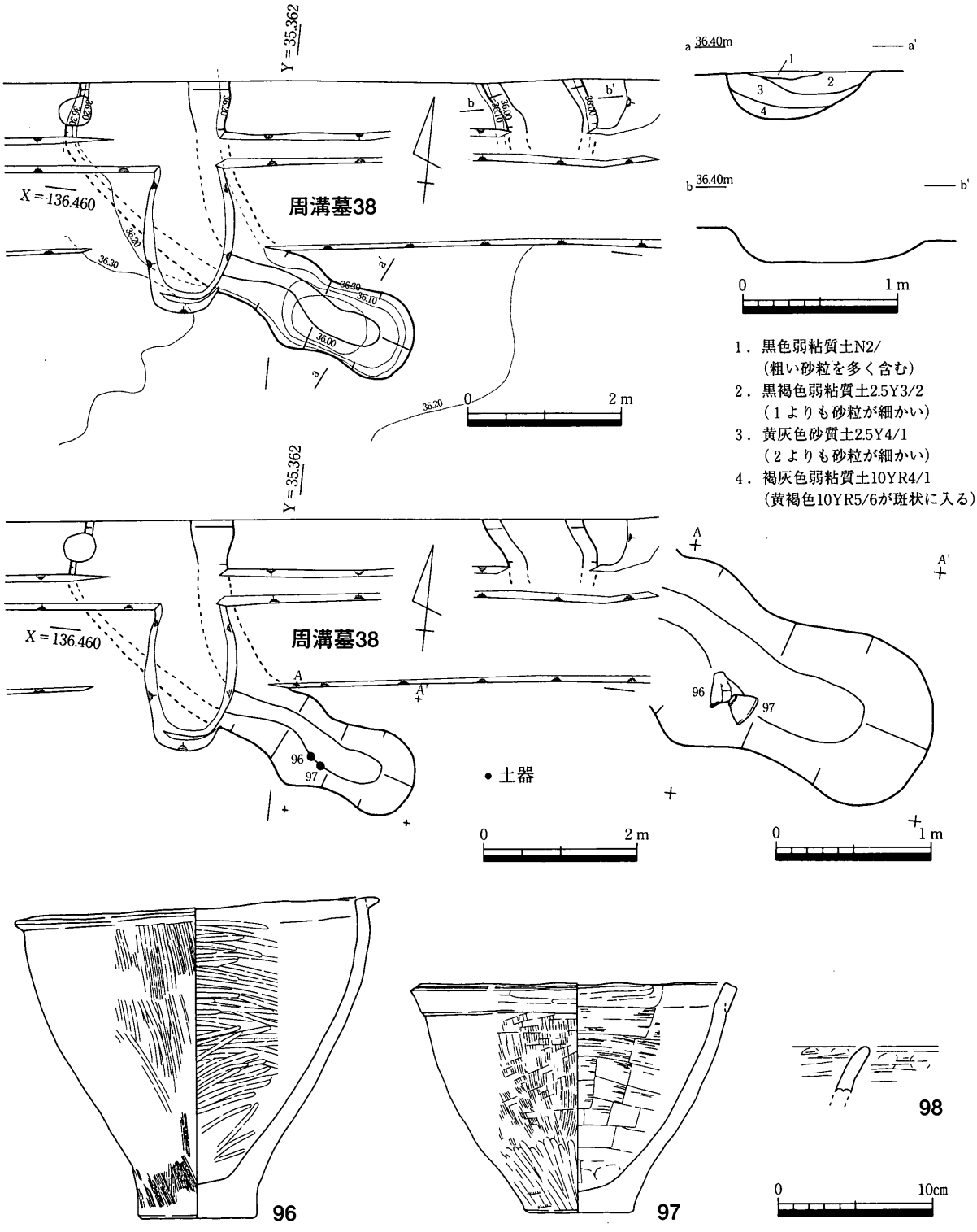
Ⅶ区東部で検出した周溝墓と考えられる。南側は周溝墓21・30・20、北側は周溝墓40、北西側は周溝墓37と接する。平面形態は長方形と考えられるが、かなりゆがんでいる。周溝の北西・北東・南東側で溝が大きく途切れ、陸橋部となる。長辺6.40m、短辺4m前後に復元できる。周溝の幅は64～92cm程度、深さ8～20cm、断面形状は浅い皿状である。

周溝内のやや南東に寄った位置で長方形の主体部を検出した。長辺175cm、短辺52cm、深さは17cm、埋土は黒色砂質土で、南東辺で棺痕跡が認められた。主軸方位はN28°Eである。埋土中からは石鏃が出土したが、遺構の時期を示す遺物は出土しなかった。

99～101は石鏃。サヌカイト製。**99**は凹基式、**100・101**は平基式である。

周溝墓40（第57図）

Ⅶ区北東隅で検出した周溝墓である。南西から北東に傾斜する地形である。平面形態は長方形に近いがややいびつである。東側では周溝は検出されず、陸橋部になっていたと考えられる。長辺2.40m、短辺2.10m程度と考えられる。周溝の幅は74～170cm、深さ10～15cm、断面形状は浅い皿状、埋土は暗灰色砂質土・褐灰色砂質土等である。

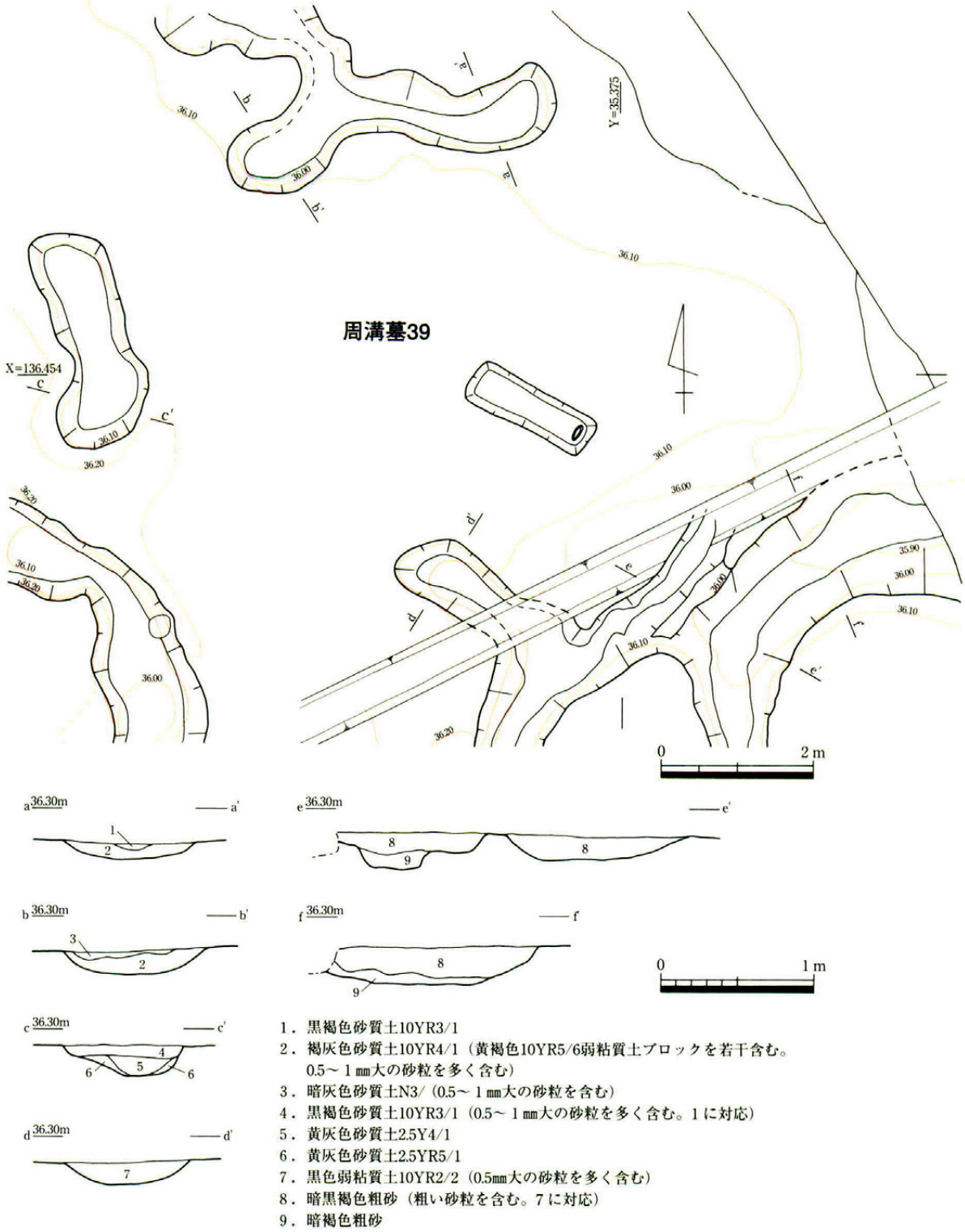


第54図　Ⅶ区周溝墓38平・断面図、遺物出土状況（1/40、1/80）、出土遺物（1/4）

周溝内のほぼ中央付近から長方形の主体部を検出した。長辺110cm、短辺63cm、深さ18cm、埋土は黒褐色砂質土である。棺痕跡は認められず、土坑墓であったと考えられる。

102は石鏃。凹基式。サヌカイト製。

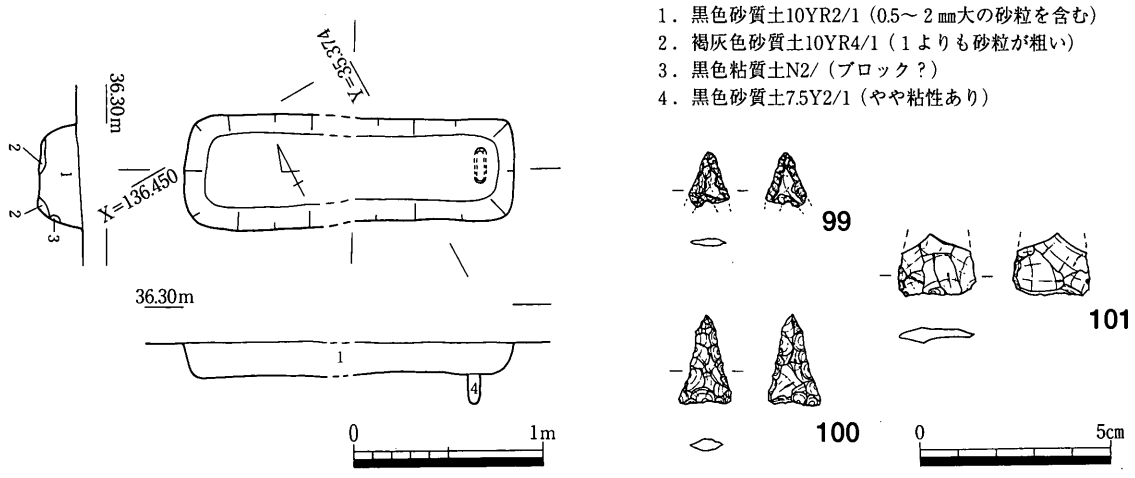
周溝墓40の時期は出土遺物からは判然としない。



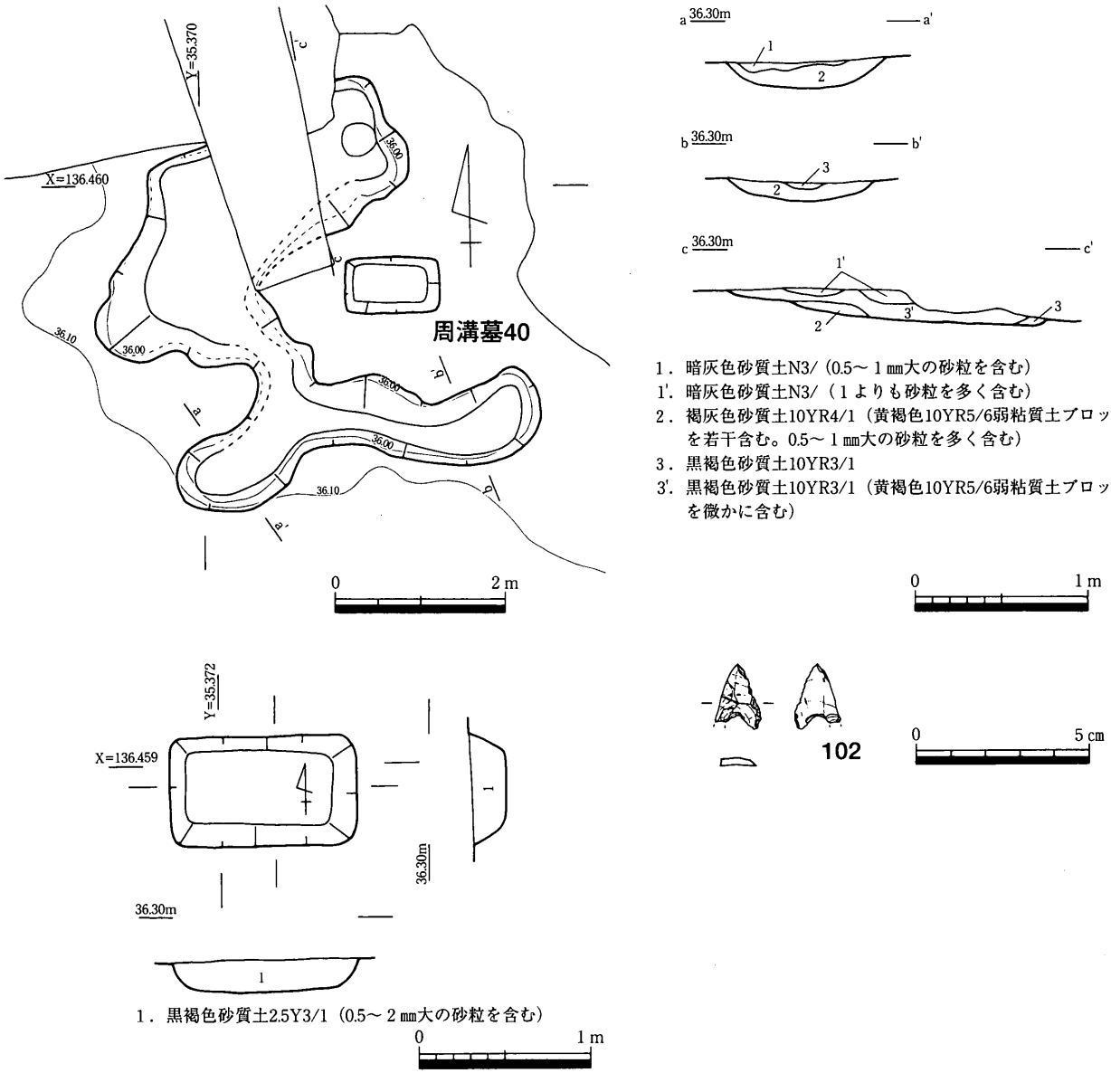
第55図　Ⅶ区周溝墓39平・断面図（1/40、1/80）

周溝墓22（第58図）

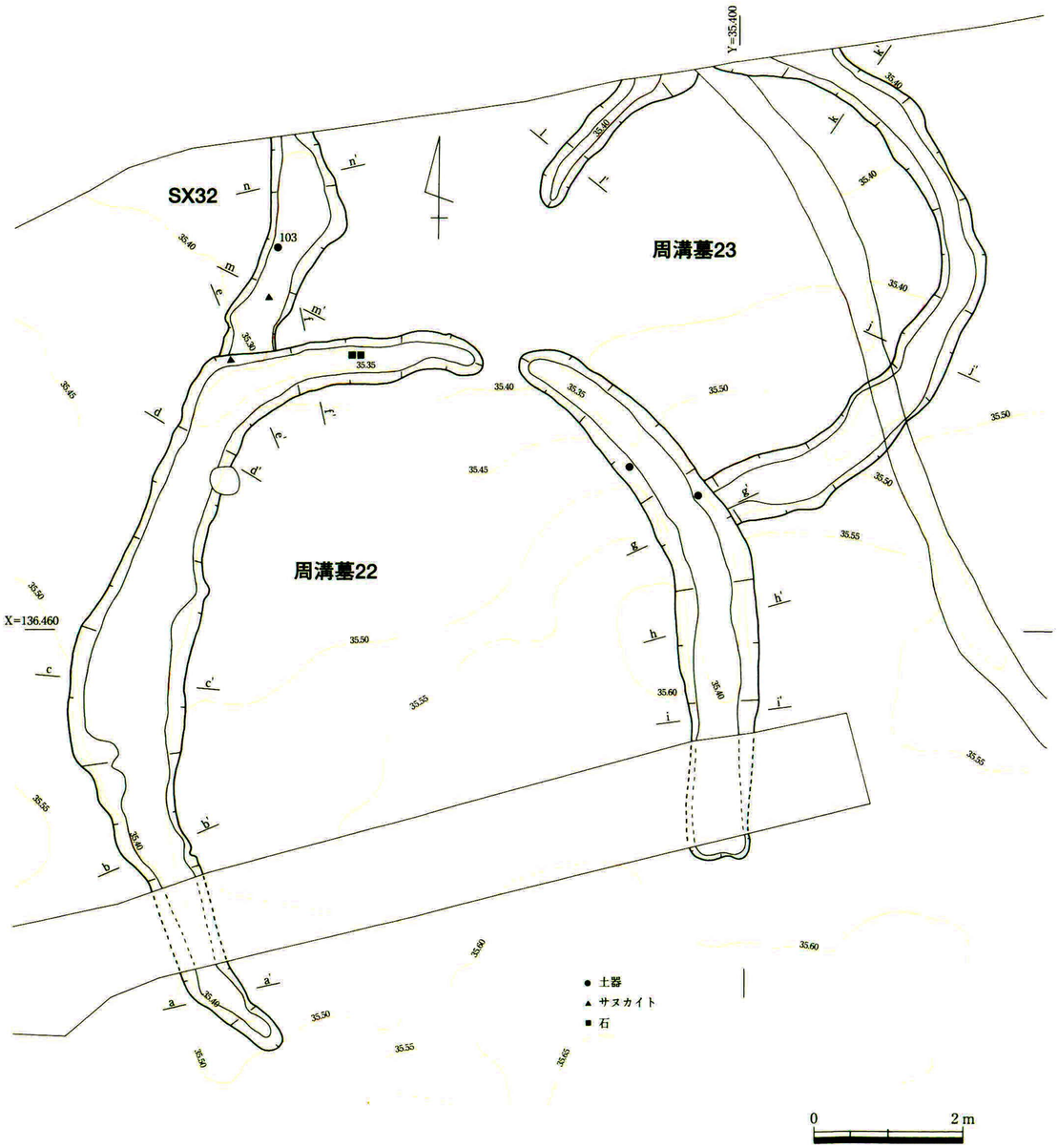
Ⅵ区中央やや北寄りで検出した。南から北へ傾斜する地形である。隅丸長方形と考えられるが、西側の周溝はやや外側へ膨らむ。北東部の一部と南側は溝が途切れ、陸橋部と考えられる。長辺8.50m、短辺6.90m、主軸方位はN6°Wと考えられる。周溝の幅は50～155cm、深さは8～20cm、断面形状は浅い皿状、埋土は暗灰色



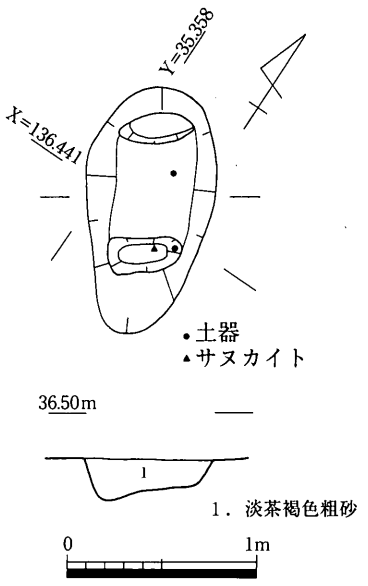
第56図　Ⅶ区周溝墓39主体部平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2）



第57図　Ⅶ区周溝墓40平・断面図、主体部平・断面図（1/40、1/80）、出土遺物（1/2）



第58図　Ⅵ区周溝墓22・23遺物出土状況平・断面図（1/40、1/80）、SX32出土遺物（1/4）



第59図　Ⅴ区SK71遺物出土状況平・断面図（1/40）

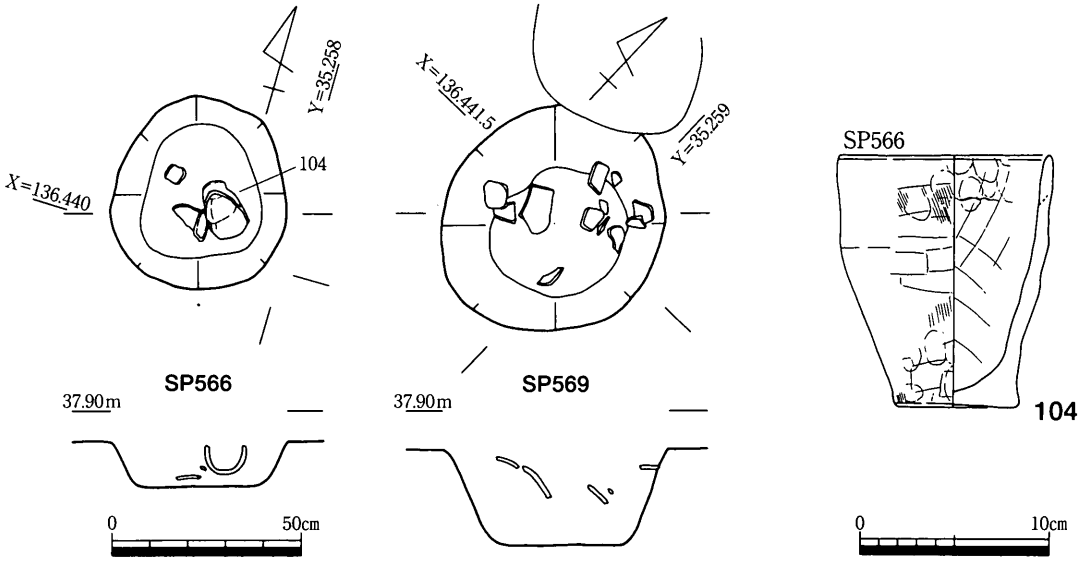
砂質土である。

遺構埋土中からは遺物はほとんど出土せず、周溝墓22の時期は不明である。

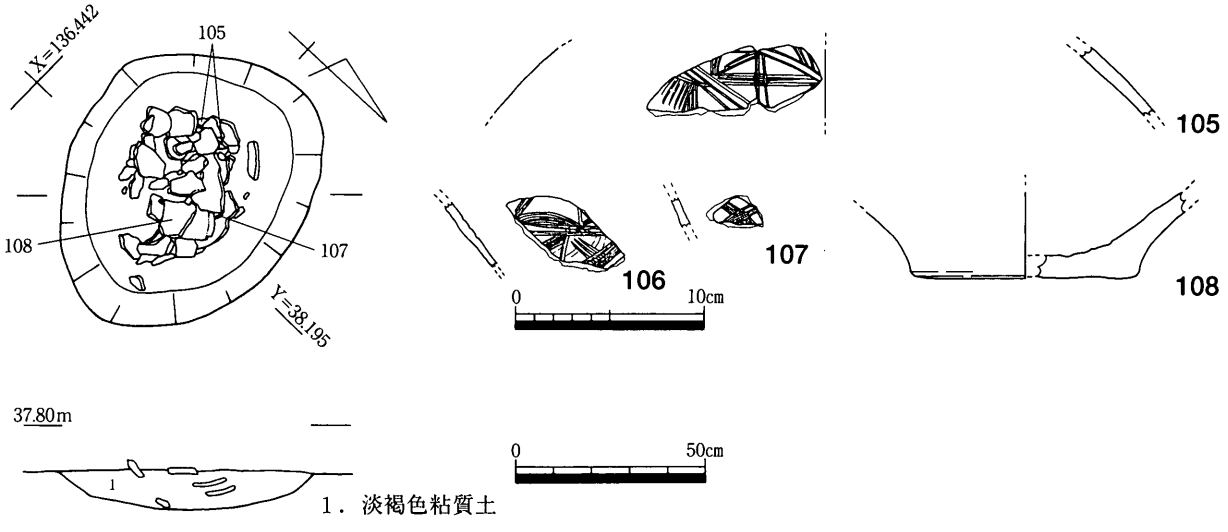
周溝墓23（第58図）

Ⅵ区中央やや北寄り、周溝墓22の北東部に接して検出した。おおむね南から北へ傾斜する地形である。周溝南西部で周溝墓22と接し、西側に陸橋部を持つ。円形または方形であるが、南西側は周溝墓22に強く規制されている。一辺5.20m、主軸方位はN59°Eと考えられる。周溝の幅は47～88cm、深さ6～12cm、断面形状は浅い皿状、埋土は明黄色砂質土である。

遺構埋土中からは遺物はほとんど出土せず、周溝墓23の時期は不明である。



第60図　Ⅱ区SP566・569遺物出土状況平・断面図（1/20）、SP566出土遺物（1/4）



第61図　Ⅰ区SK01遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

SX32（第58図）

周溝墓23の西側に接して検出した溝状遺構である。南西から北東へ傾斜する地形である。周溝墓22の北西から、北へやや弧を描くようにして検出した。幅70～100cm、深さ10cmを測る。埋土は明黄色砂質土で、周溝墓23と共通する。e－e'断面により周溝墓22より古い。西側を限る溝は検出できなかった。周溝墓の可能性が高いと思われるが、検出範囲が狭く、性格不明遺構として報告した。

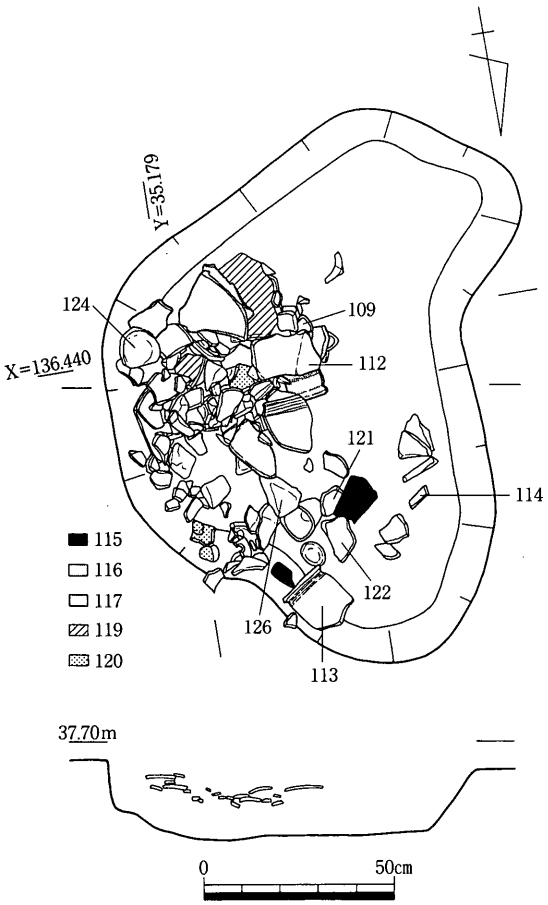
103は縄文土器深鉢。波状口縁を呈する。口縁端部内面に沈線を施し、沈線の上側にヘラ描きで三角形模様を描く。

SK71（第59図）

Ⅴ区D12グリットで検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.31m、短軸0.67m、深さ14～21cm、埋土は淡茶褐色粗砂で、主軸方位はN23°Wである。土坑の短辺側2箇所には幅14cm、深さ7～14cmの溝状の落ち込みがみられた。土坑の立地から、周溝を伴わない土坑墓と考えられ、溝状の落ち込みは木口痕跡と考えられる。

周溝墓以外の遺構の概要

大半はⅠ区～Ⅱ区西部の微高地上で検出した土坑と溝状遺構である。周溝墓とは異なる立地を示す。住居跡は検出できなかったが、集落跡が近在すると考えられる。



第62図　Ⅰ区SK10遺物出土状況平・断面図（1/20）

Ⅱ区SP566・569（第60図）

ともにⅡ区D6グリットで検出したピットである。ともに円形で、SP566は直径約50cm、深さ11.5cm、SP569は直径57cm、深さ25cmである。SP566の埋土中からは弥生土器鉢が、SP569の埋土中からは弥生土器小片が出土した。

104はSP566出土遺物。弥生土器鉢。弥生時代前期後半頃。

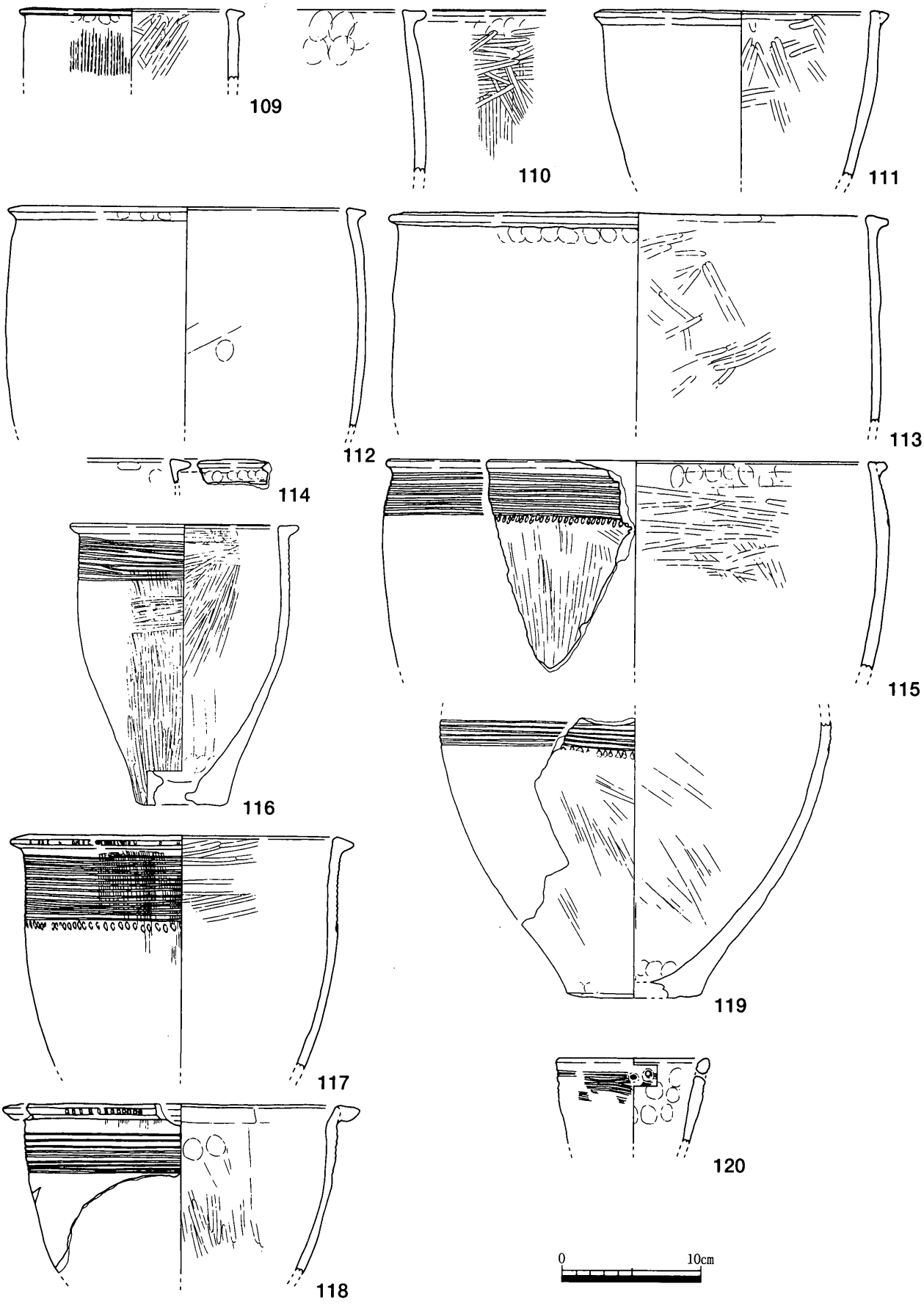
Ⅰ区SK01（第61図）

Ⅰ区D3グリットで検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸80cm、短軸63cm、深さ10cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は淡褐色粘質土である。埋土中からは弥生土器体部小片が多く出土した。

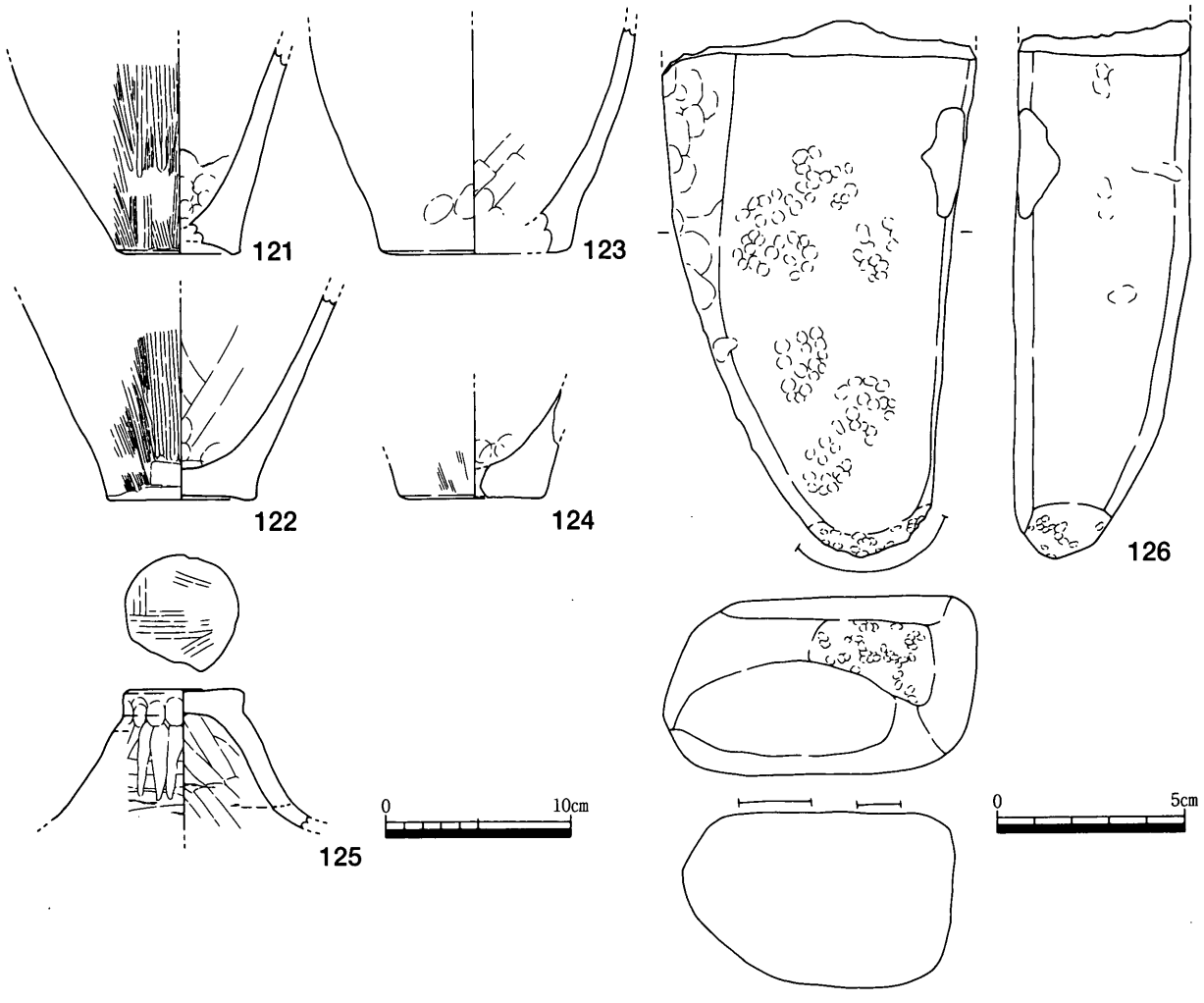
105～108は弥生土器。**105～107**は壺小片。ヘラ描き木葉文が施されており、同一個体の可能性もある。**108**は壺底部。木葉文が描かれる壺片が出土することから、遺構の時期は弥生時代前期前半後葉と考えられる。

Ⅰ区SK10（第62・63・64図）

Ⅰ区E2グリットで検出した土坑である。不整円形で、長軸1.45m、短軸0.96m、深さ19cm、断面形状は逆台形である。土坑の北東部分に弥生土器が集中して



第63図　Ⅰ区SK10出土遺物（1）（1/4）



第64図　Ⅰ区SK10出土遺物（2）（1/2、1/4）

出土した。廃棄土坑であったと考えられる。

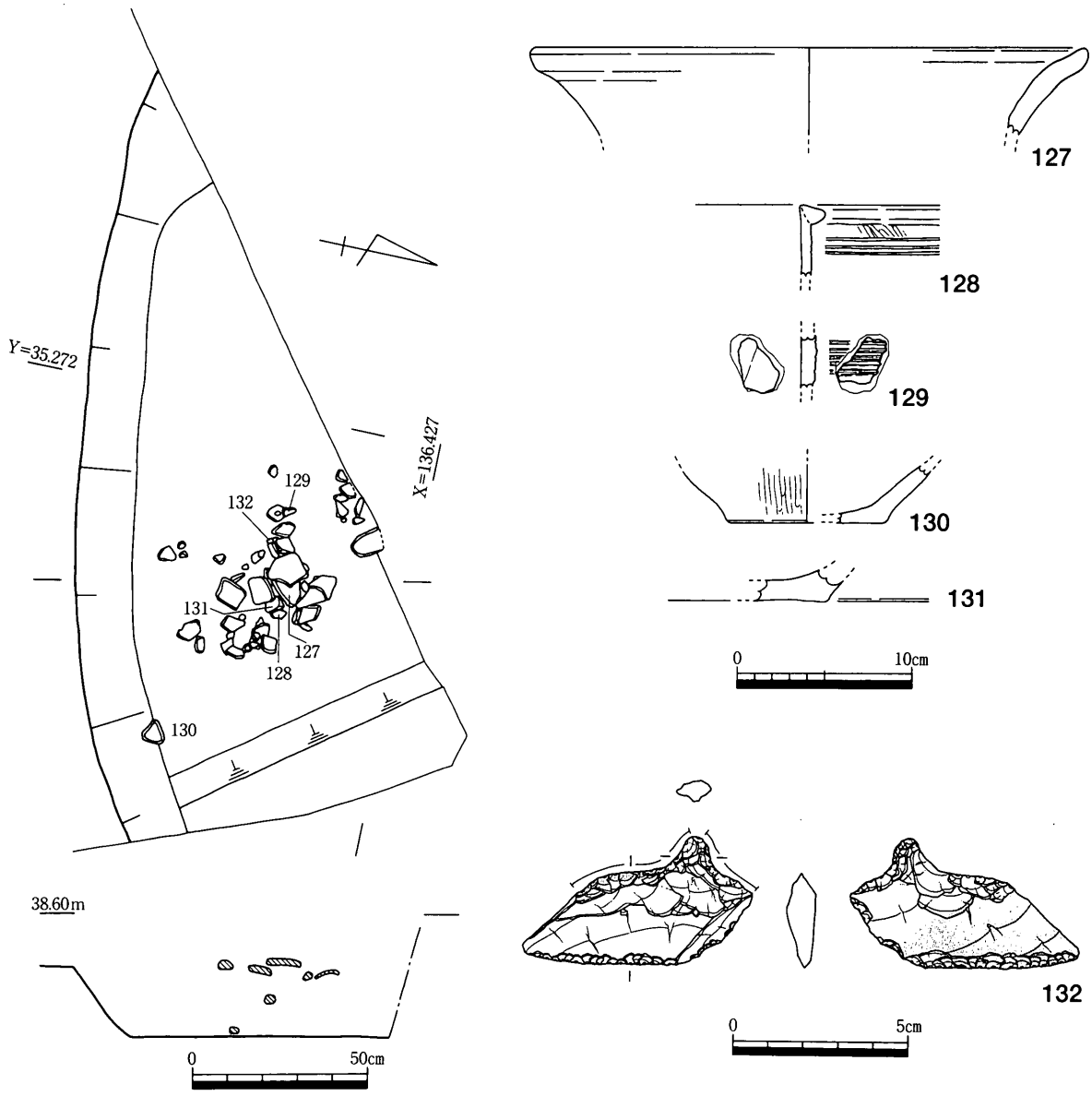
109～125は弥生土器。**109～119**は甕。**109～118**は逆Ｌ字形口縁部を持つ。**109～113**は体部無文。**109**は体部にハケ、**110・111**は体部にヘラミガキ痕を残す。**114**は小片。口縁部下部にヘラ描き沈線文を持つ。**115～119**は9～14条のヘラ描き沈線文を持つ。**115・117・119**はヘラ描き沈線文の下部に刺突文を施す。**116**は焼成後に底部に穿孔する。**117・118**は口縁端部に不均等な刻み目を持つ。**120**は鉢。口縁部は丸く仕上げ、端部付近に2孔1対の穿孔を対角線上に施す。体部には4条1単位の櫛描き沈線文を3単位施す。**121～124**は甕の底部。**124**の体部は粘土の継ぎ目で剥離しており、底部は焼成後に穿孔する。**125**は蓋。天井部径はやや広めで厚みはあまりない。**126**は叩き石。端部と側縁部に敲打痕を残す。砂岩製。

出土遺物の大半が甕という特異な構成であるが、甕はすべて逆Ｌ字形口縁部で、体部は無文またはヘラ描き多条沈線文が施されることから、遺構の時期は弥生時代前期末と考えられる。

Ⅰ区SK106（第65図）

Ⅱ区E7グリットで検出した土坑である。検出したのは南西部一部のみで大半は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明である。深さは20cmを測る。埋土中からは弥生土器小片やサヌカイト片がやや集中して出土した。出土した土器はいずれも摩滅が著しかった。

127～131は弥生土器。**127**は壷口縁部。**128・129**は甕小片。**128**は逆Ｌ字形口縁を持ち、3条のヘラ描き沈線文が確認できるが、表面の摩滅が著しいので、ヘラ描き沈線文の条数はさらに多い可能性がある。**129**は



第65図　Ⅱ区SK106遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/2、1/4）

体部。5条以上のヘラ描き沈線文が観察できる。**130・131**は底部。しっかりした平底を持つ。**132**は石匙。サヌカイト製。

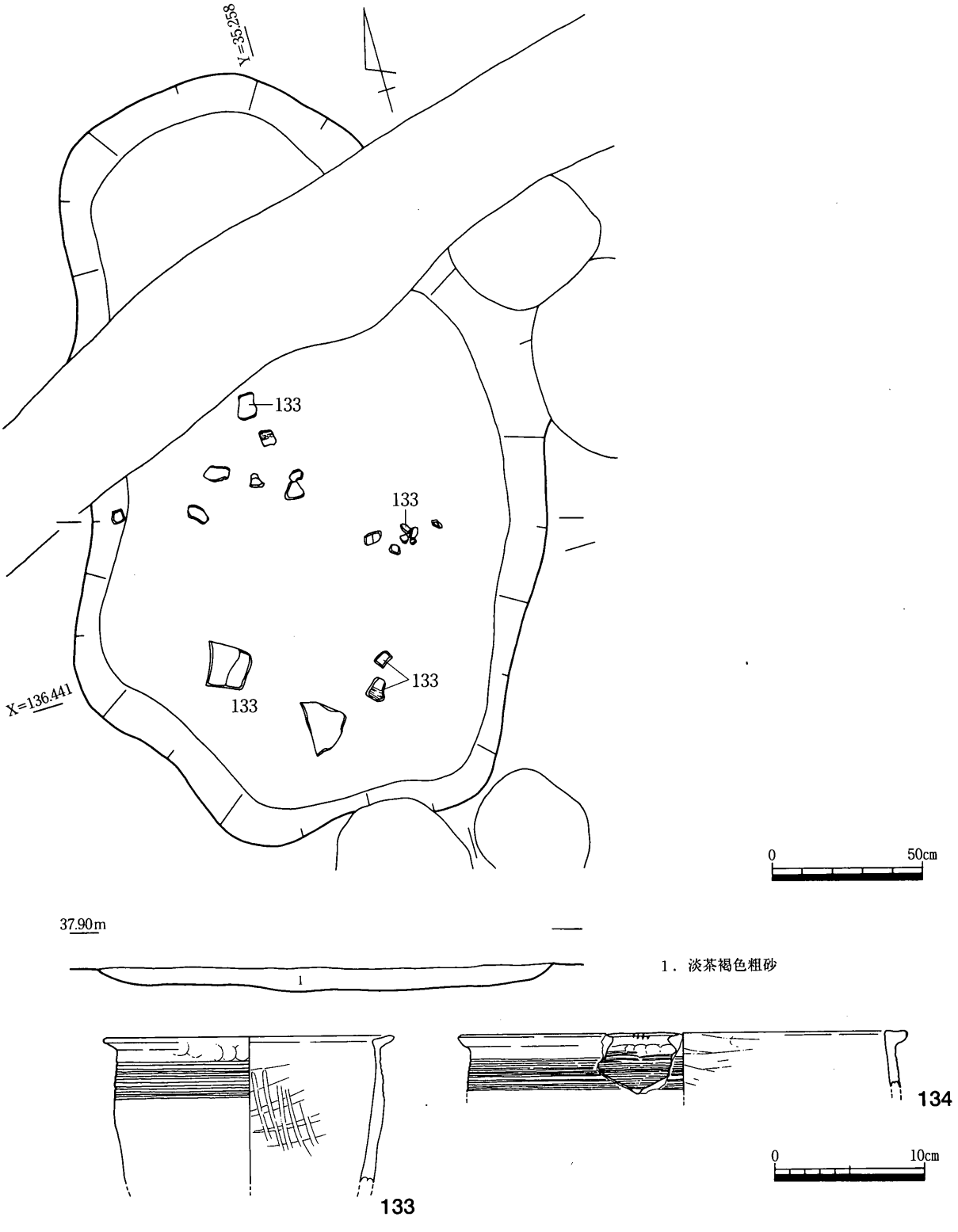
遺構の時期は甕片や底部片から弥生時代前期後半と考えられる。

Ⅱ区SK31（第66図）

Ⅱ区D6グリットで検出した土坑である。SP566・569と近接し、遺構の前後関係により、SK31の方が古い。長楕円形を呈し、長軸2.40m、短軸1.53m、深さ7㎝、断面形状は浅い皿状、埋土は淡茶褐色粗砂である。埋土中からは弥生土器甕片やサヌカイト小片が出土した。

133・134は弥生土器甕。逆L字形口縁を呈し、**134**は口縁端部にわずかに刻み目を持つ。7～8条のヘラ描き沈線文を施す。

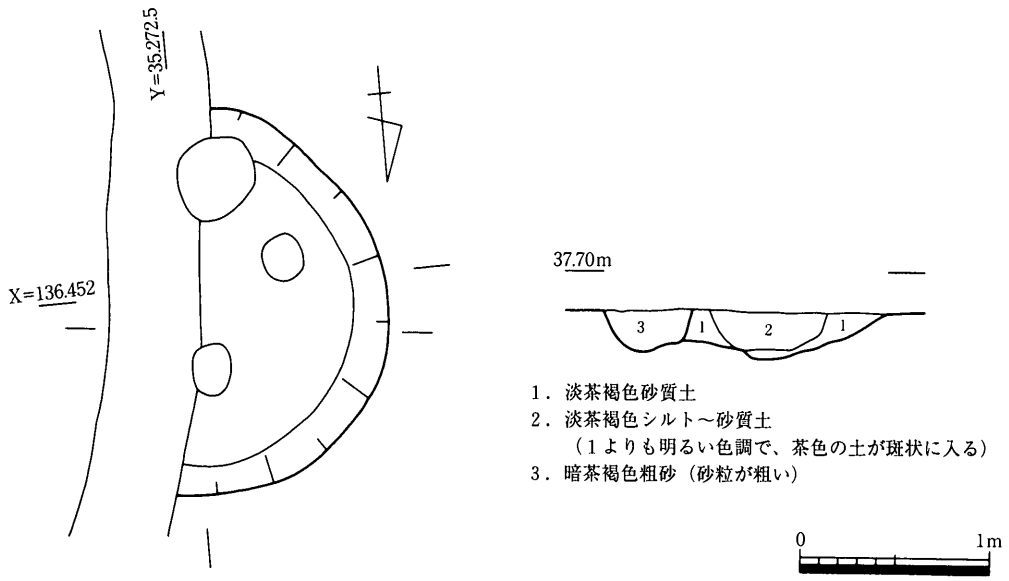
遺構の時期は弥生時代前期末頃と考えられる。



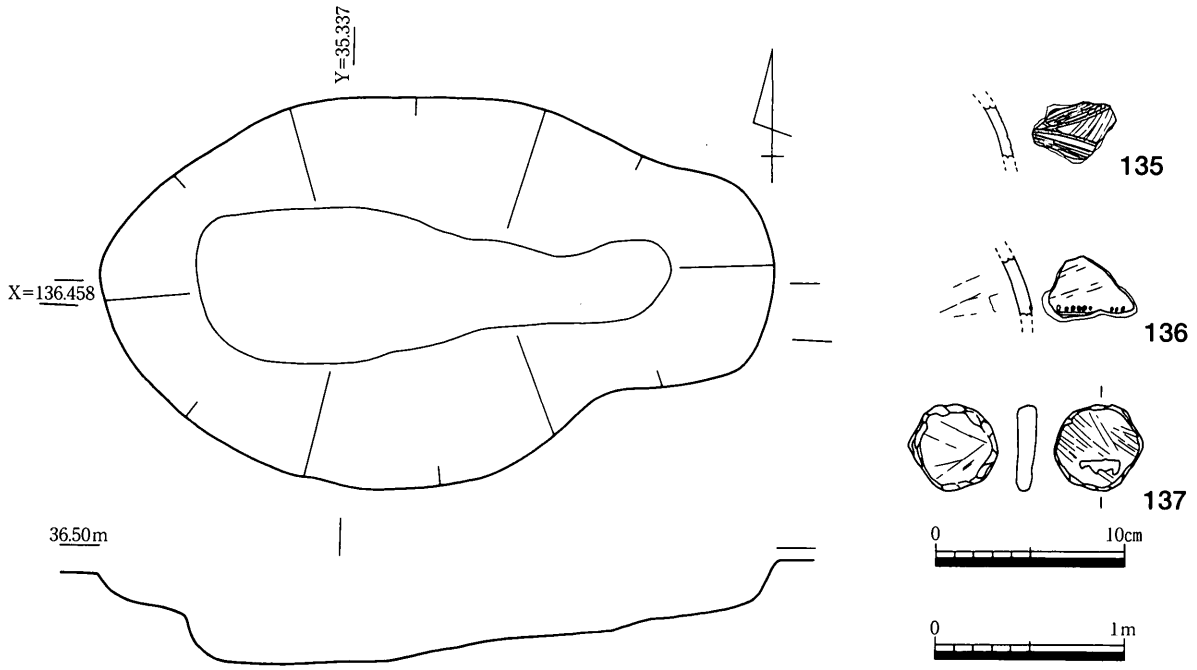
第66図　Ⅱ区SK31遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

Ⅲ区SK59（第67図）

Ⅲ区D7グリットで検出した土坑である。周溝墓4の西側の溝の西に接して検出し、溝の東側では検出できなかった。楕円形と考えられ、長径2m、短径1.30m程度、深さ24cm、埋土は淡茶褐色シルト～砂質土である。断面観察によれば周溝墓4より古い。埋土中からは弥生土器小片がわずかに出土しただけである。



第67図　Ⅲ区SK59平・断面図（1/40）



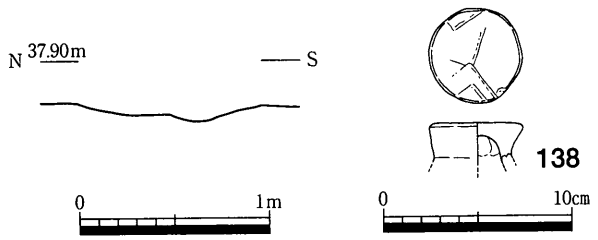
第68図　Ⅶ区SK83平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

Ⅶ区 SK83（第68図）

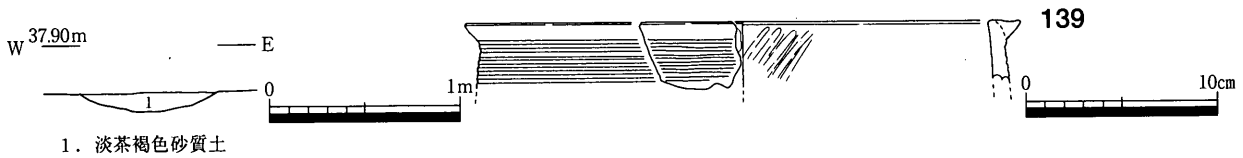
Ⅶ区D10グリットで検出した土坑である。長楕円形で、長軸3.55m、短軸2.05m、深さ50cm、断面形状は浅い皿状である。埋土中からは弥生土器小片、サヌカイト小片が出土した。周溝墓31・32に近接し、前期の遺物が出土することから、周溝墓の一部を構成する可能性もあるが、ここでは土坑として報告する。

135・136は弥生土器壷小片。**135**はヘラ描きの木葉文が観察できる。弥生時代前期前半。**136**は刺突文の下部にヘラ描き沈線が1条観察できるが、以下欠損する為、全容は不明である。弥生時代前期後半頃か。**137**は円盤状土製品。土器片を打ち欠いて円形にして再利用したもの。

遺構の時期は**136**の弥生時代前期後半としておく。



第69図　Ⅰ区SD04断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第70図　Ⅱ区SD41断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

Ⅰ区 SD04（第69図）

Ⅰ区E2グリットで検出した溝状遺構である。南西から北東へ向き、北東端付近で二股に分かれる。検出長6.50m、幅96cm、深さ10cmで、断面形状は浅い皿状である。溝の中程で二段掘り状を呈しているが、全般に溝のラインは不明瞭である。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

138は弥生土器蓋。頂部。天井部径はやや小さく、天井部と体部の境の括れは顕著。弥生時代前期後半頃のもの。

Ⅱ区 SD41（第70図）

Ⅱ区E4・5グリットで検出した溝状遺構である。南南東から北北西へ向く。遺構の重複関係によりSD24・28より古いが、SD24より北側では検出できなかった。溝の幅は72cm、深さ9cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は淡茶褐色砂質土である。埋土中からは弥生土器小片、サヌカイト小片が出土した。

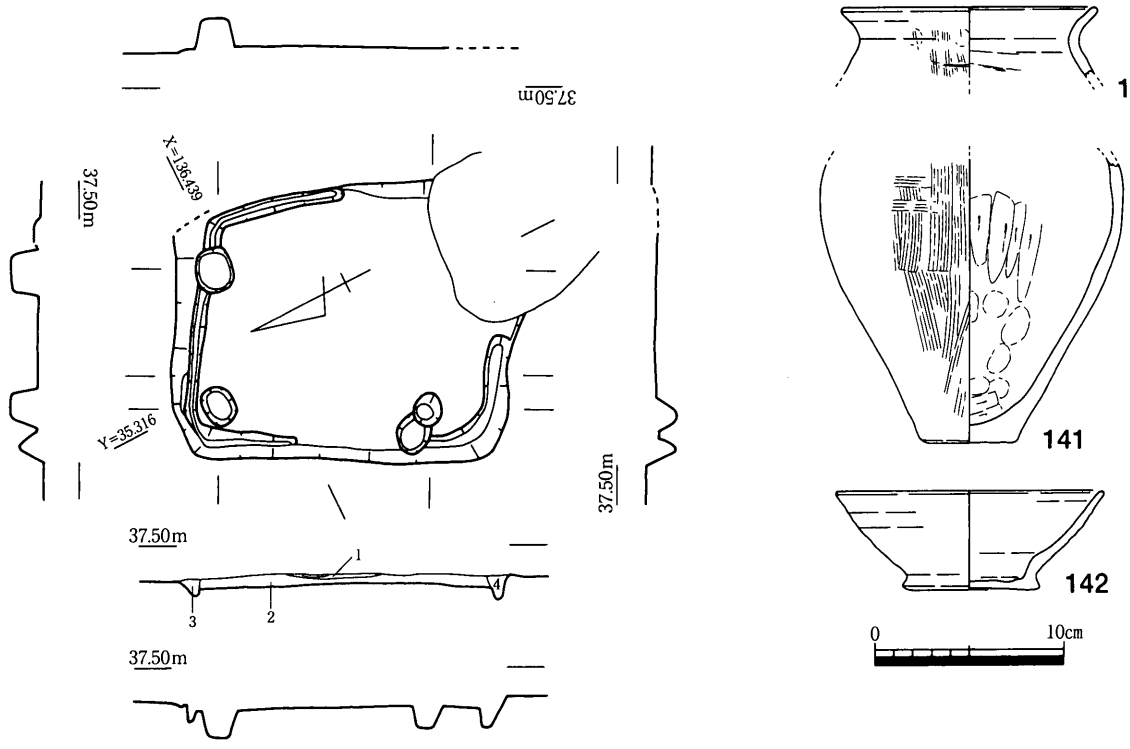
139は弥生土器甕小片。逆L字形の口縁部を持ち、6条のヘラ描き沈線文を持つ。弥生時代前期後半頃と考えられる。

（2）弥生時代中～後期の遺構・遺物

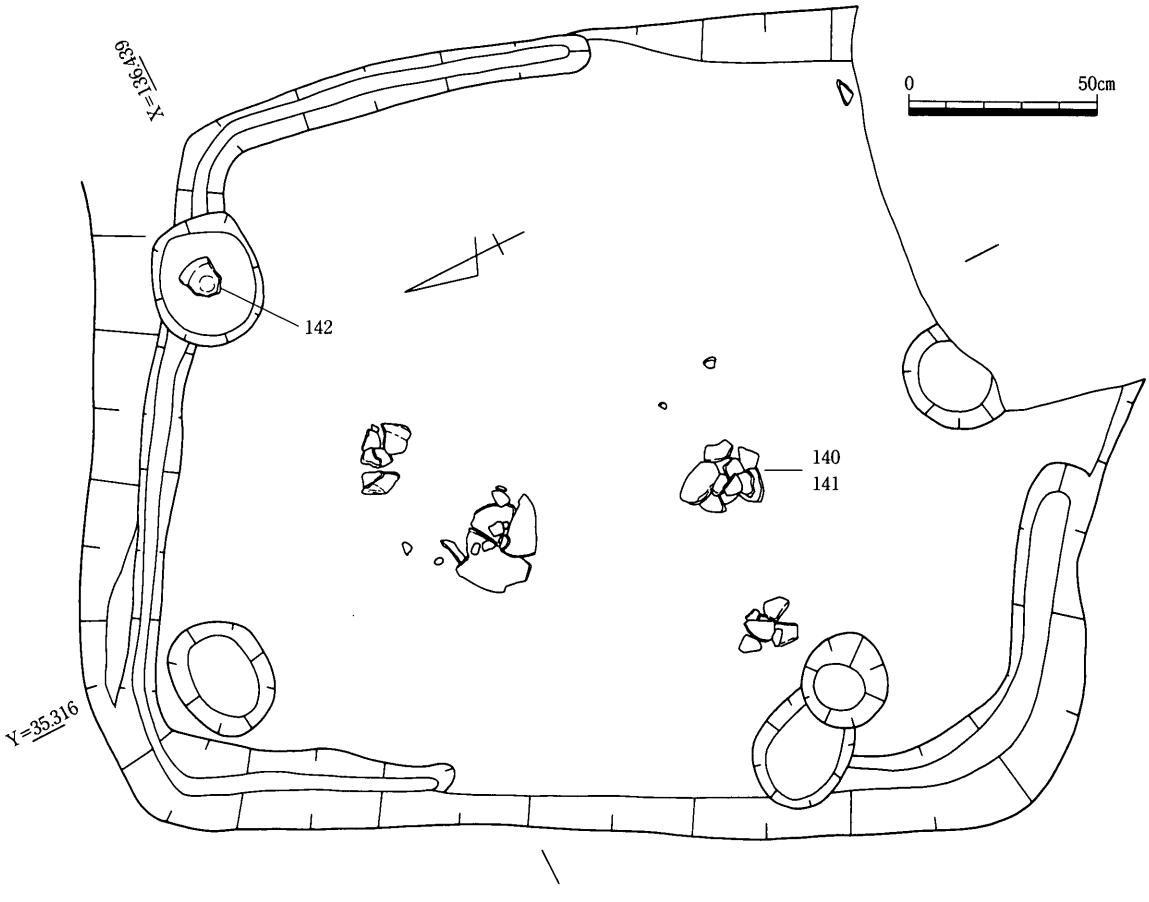
弥生時代中～後期の遺構の概要

Ⅰ区微高地上に2条の灌漑水路SD01・14が掘削される。住居跡はやや地形的に下がったⅢ区を中心に展開する。

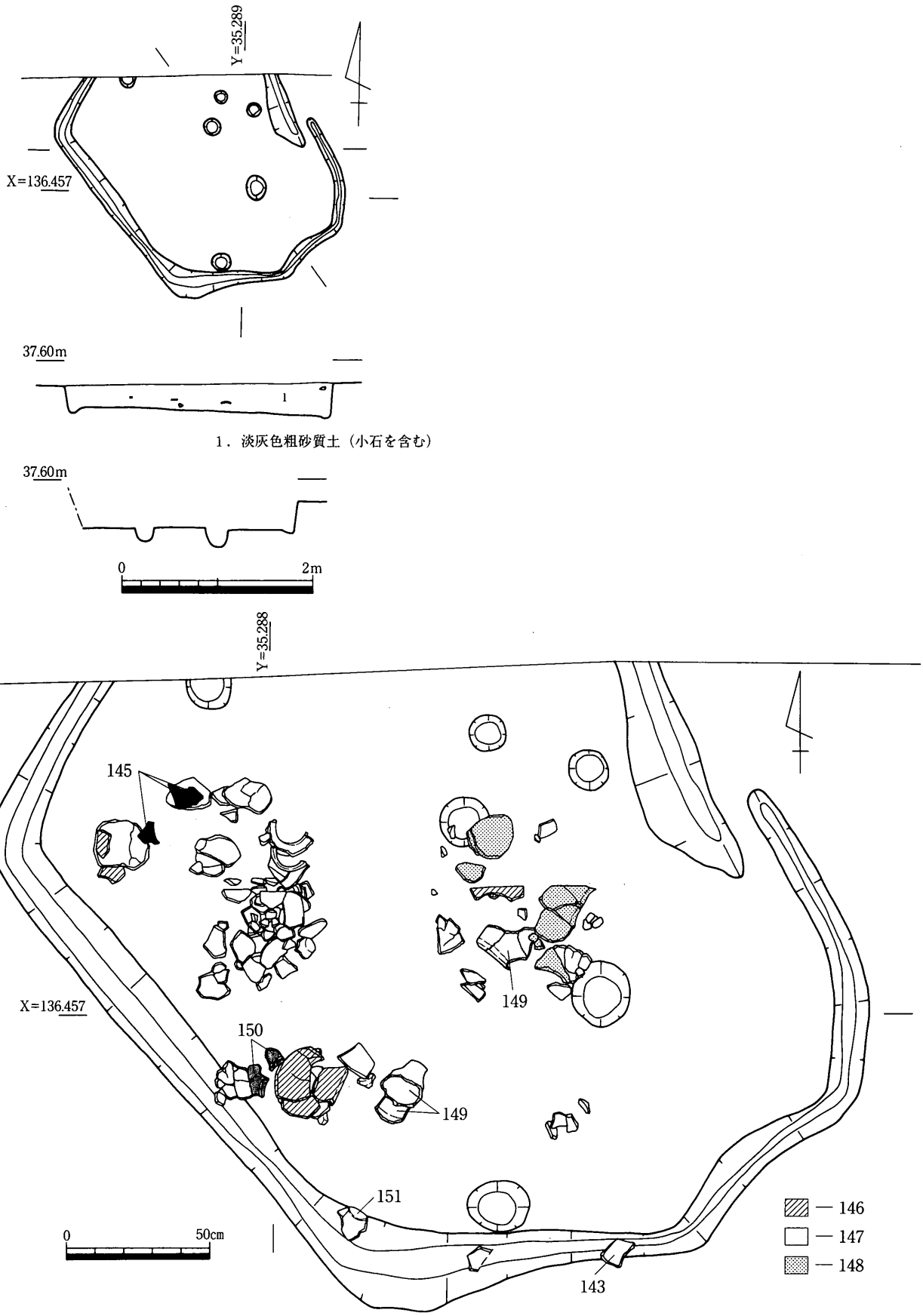
Ⅲ区では4棟の竪穴住居跡を検出したが、このうち2棟は小規模で方形を呈し、中央土坑を持たない。1棟は円形で、焼失家屋である。その他、土器溜まり等の遺物廃棄遺構も検出した。



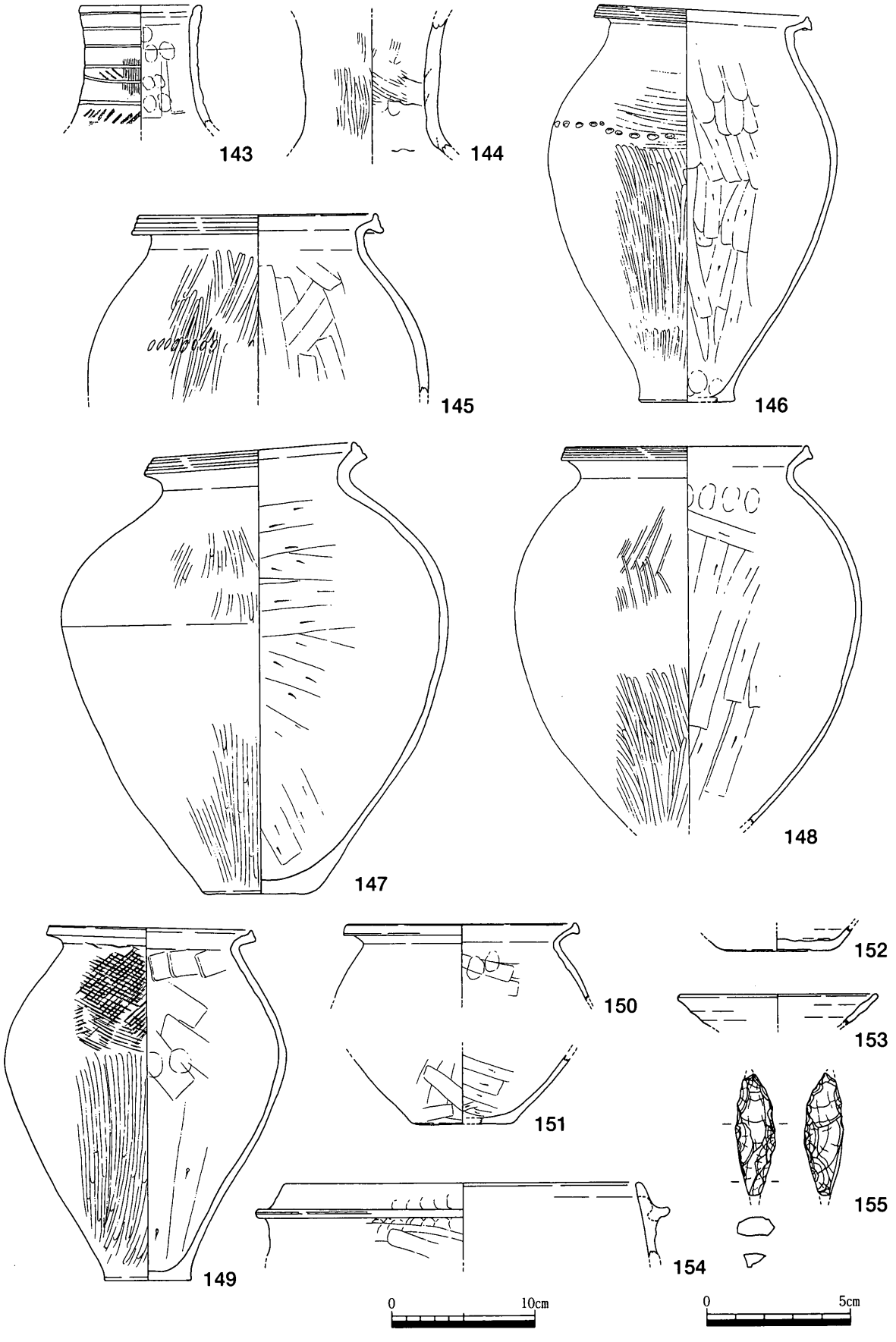
1．暗黒褐色粗砂（炭化物を多く含む）
2．暗褐色粗砂（南半では5～6㎝大の礫を含む）
3．暗茶褐色砂質土
4．暗茶褐色砂質土（礫を多く含む）壁溝埋土（3・4）



第71図　Ⅲ区SH03平・断面図（1/60）、遺物出土状況（1/20）、出土遺物（1/4）



第72図　Ⅲ区SH04平・断面図（1/60）、遺物出土状況（1/20）

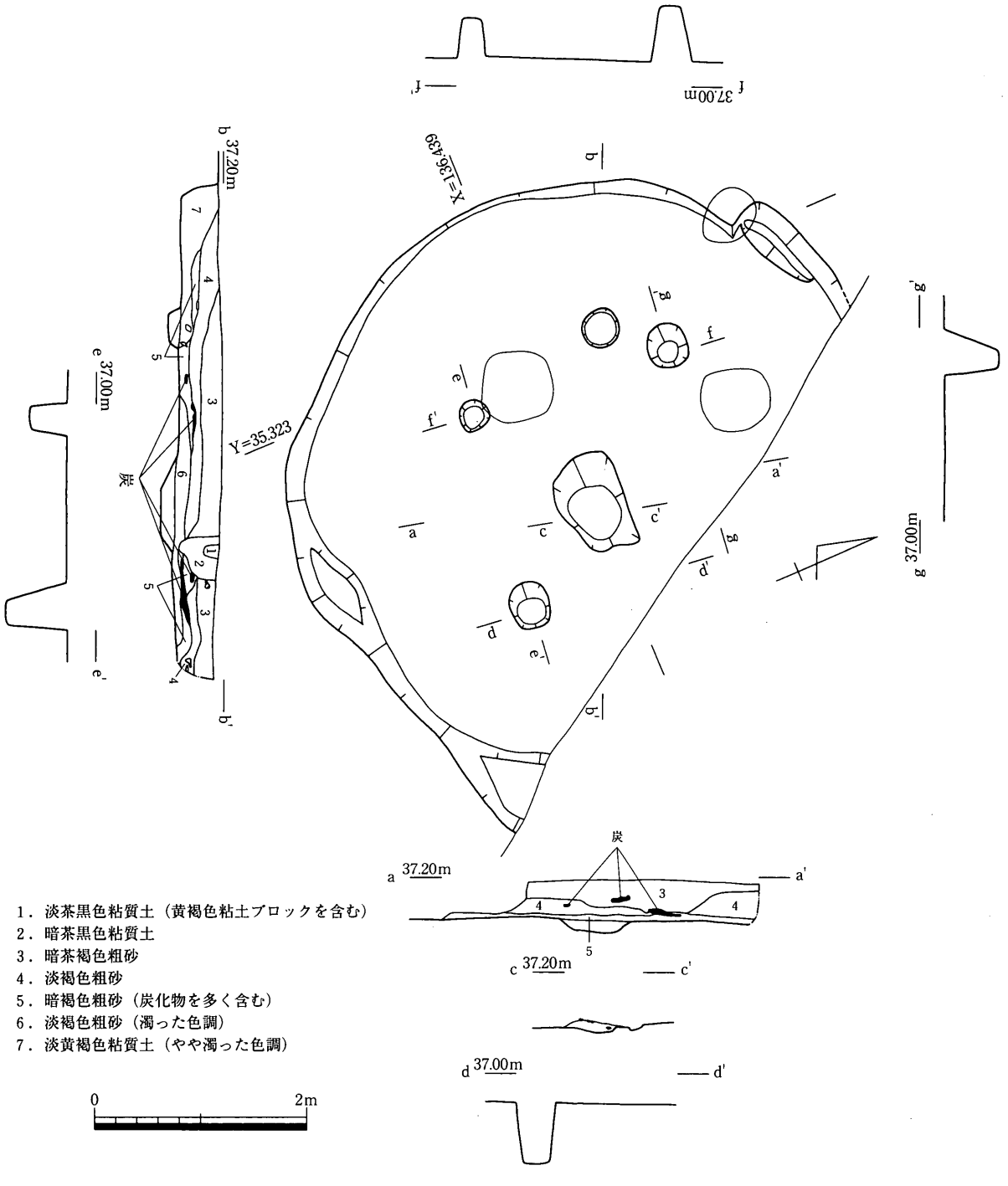


第73図　Ⅲ区SH04出土遺物（1/2、1/4）

Ⅲ区SH03（第71図）

Ⅲ区E9グリットで検出した竪穴住居跡である。方形の竪穴住居跡で、長辺2.67m、短辺2.13m、推定面積は約5.7㎡で、主軸方位はN25°Wである。床面は検出面から9㎝、埋土はおもに暗褐色粗砂である。一部で壁溝、壁溝際に主柱穴と考えられる柱穴を2穴検出したが、中央土坑は検出できなかった。床面中央付近で弥生土器甕の破片が出土した。

140・141は弥生土器甕。出土位置が近接しており、同一固体の可能性が高いが、直接接合はしなかった。**140**は口縁部。緩くくの字に屈曲する口縁部を持つ。**141**は体部から底部。外面はハケメ、内面体部にヘラ削り痕を明瞭に残す。底部は平底を呈する。弥生時代後期後半。**142**は土師質土器杯。SH03北東隅床面上で検



第74図　Ⅲ区SH05平・断面図（1/60）

第75図　Ⅲ区SH05遺物出土状況（1/40）

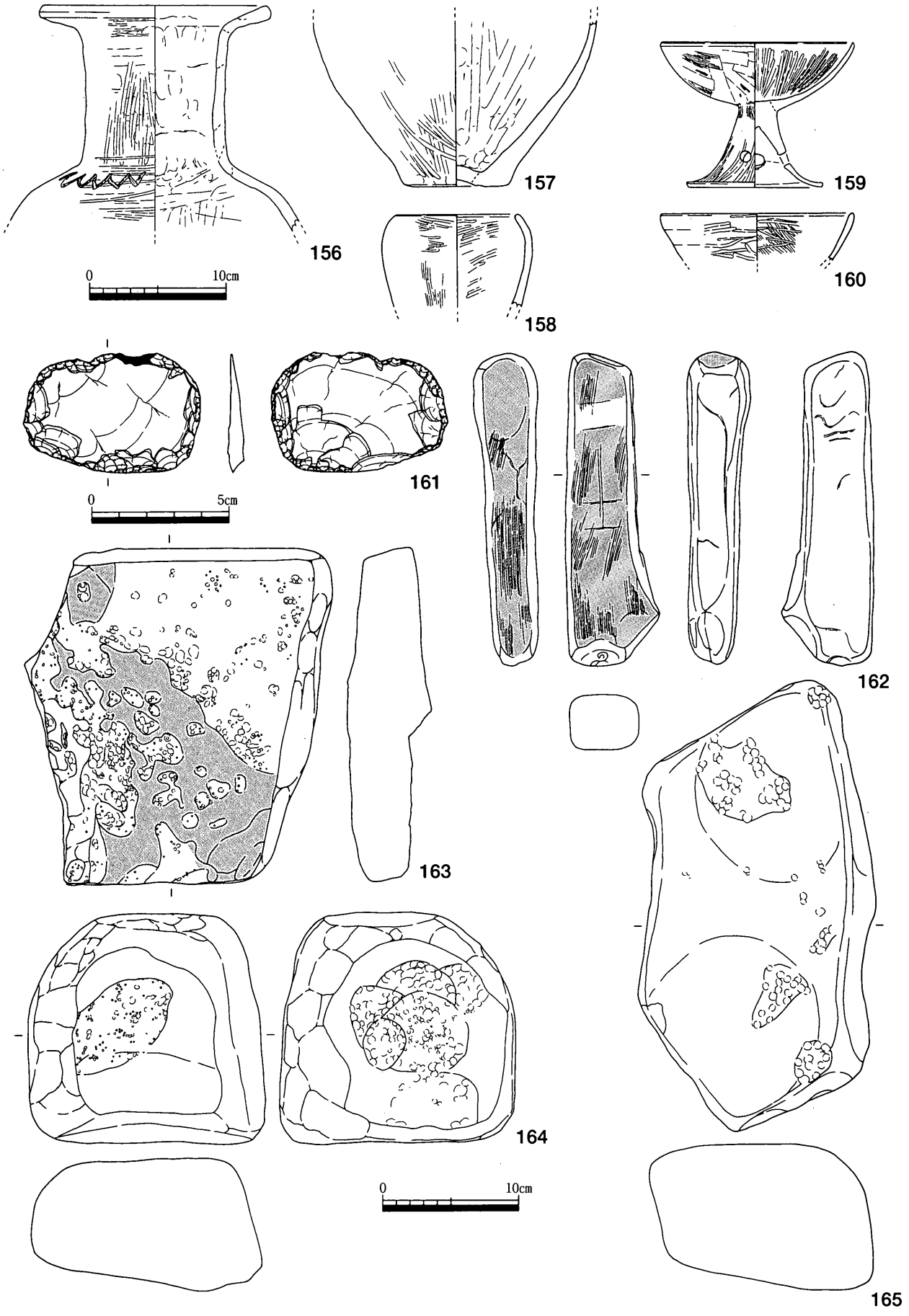
出したピット完掘後に出土したものであるが、おそらくはSH03の上面から掘り込まれたピットと考えられ、竪穴住居跡を構成するものではないと考えられる。

遺構の時期は床面出土遺物より弥生時代後期後半と考えられる。

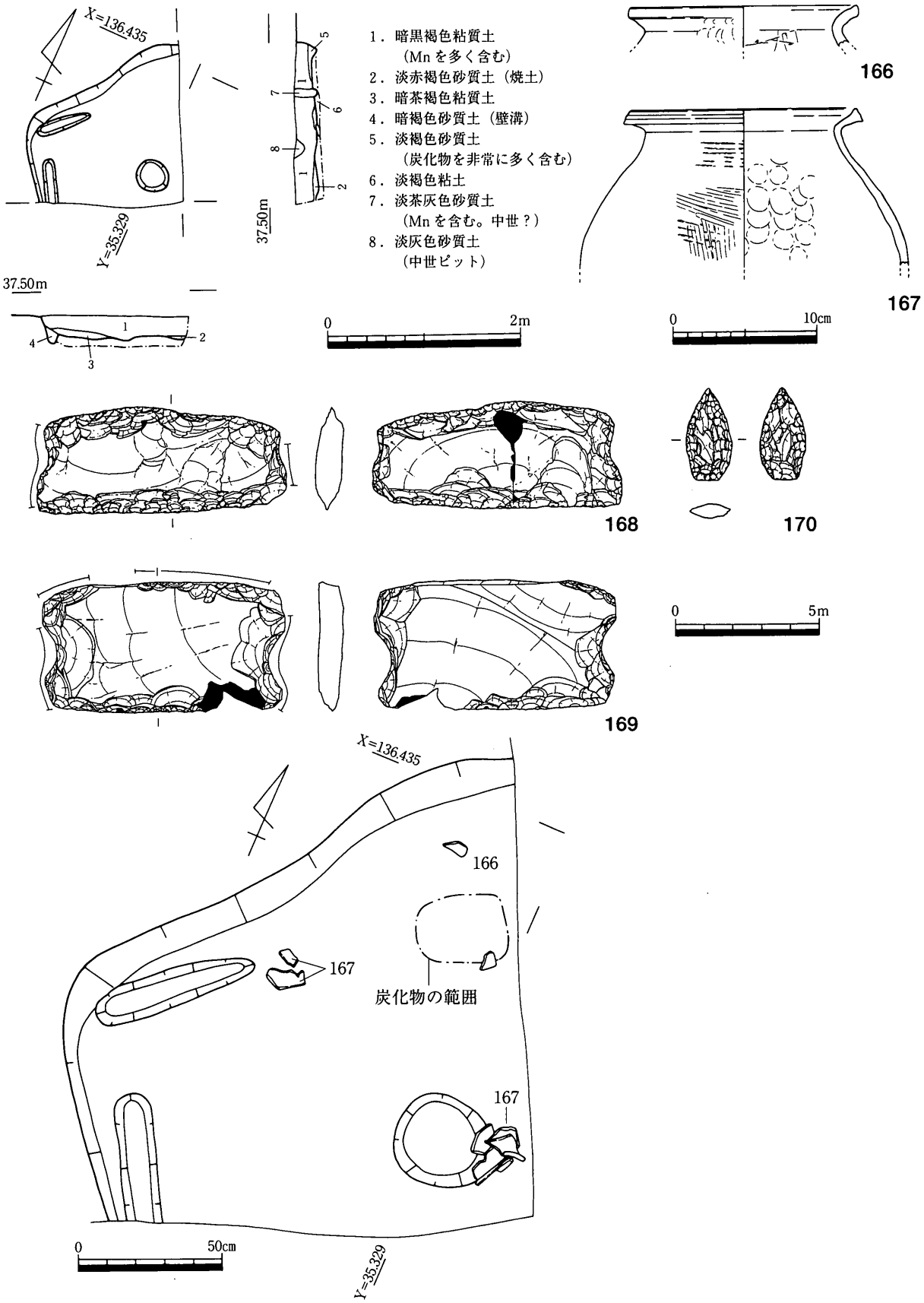
Ⅲ区SH04（第72・73図）

Ⅲ区D8グリットで検出した竪穴住居跡である。方形を呈し、北側の一部は調査区外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、長辺2.46m以上、短辺2.25m、推定面積は5.8㎡前後の小規模の竪穴住居跡である。深さ28cm程度、埋土は淡灰色粗砂質土の単層、主軸方位はN37°Wである。周囲には幅15～18cm、深さ3～7cmの壁溝を巡らせるが、北東辺の一部で壁溝がずれている。床面上からは柱穴を6穴検出したが、主柱穴に当たるものは明確ではない。中央土坑は検出されなかった。竪穴住居跡の上面には弥生土器が多量に出土しており、竪穴住居廃絶後に廃棄土坑として利用されたと考えられる。

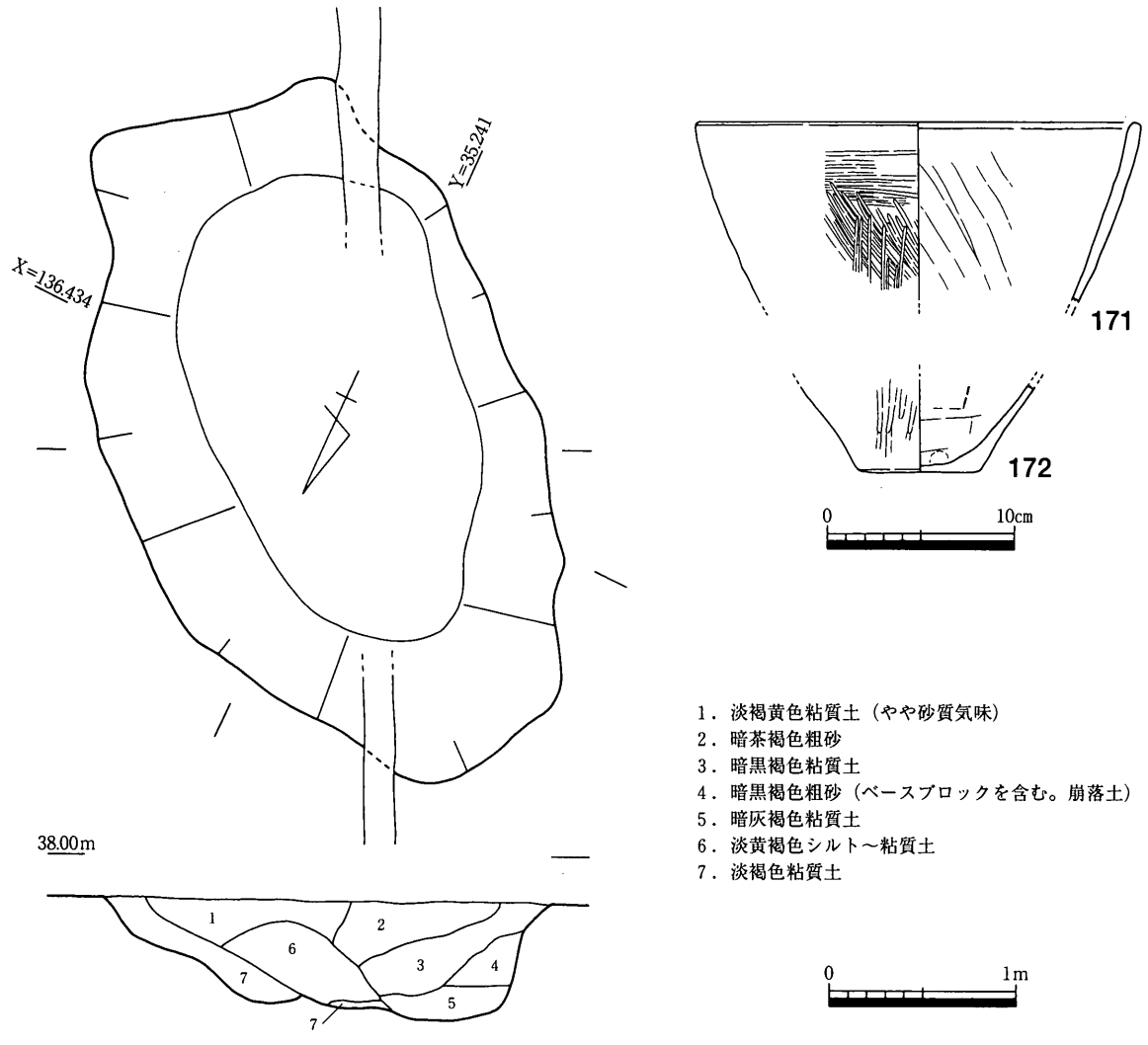
遺物はいずれも竪穴住居廃絶後に投棄された状態で出土したものである。**143～151**は弥生土器。**143・144**



第76図　Ⅲ区SH05出土遺物（1/2、1/4）



第77図　Ⅲ区SH06平・断面図（1/60）、遺物出土状況（1/20）、出土遺物（1/2、1/4）



第78図　Ⅱ区SK41平・断面図（1/40）出土遺物（1/4）

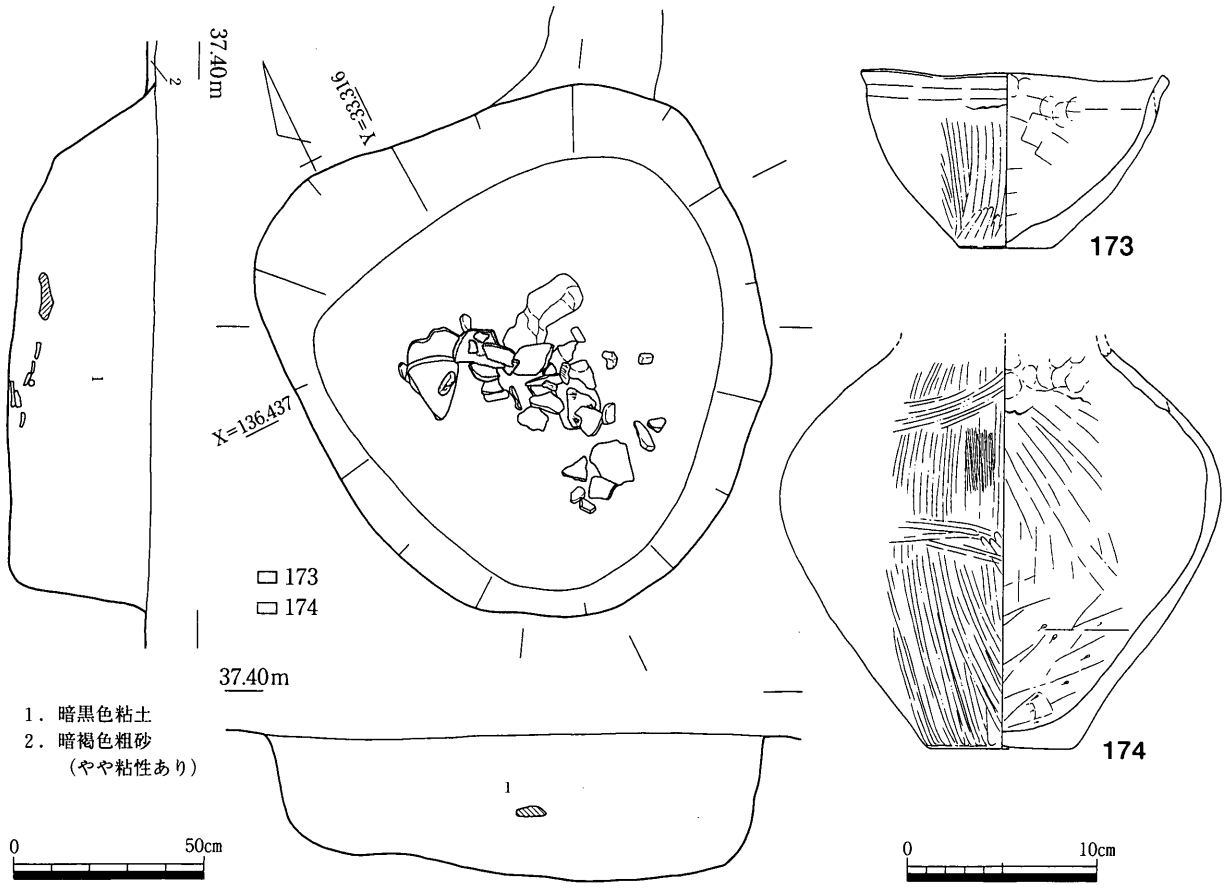
は長頸壷頸部。**143**は口縁部が広がらないもので、頸部にヘラ描き沈線が6条巡る。頸部の一部には斜め方向に工具の木口を連続して押し当てた痕跡を残す。**145～151**は甕。**145～148**は口縁端部に凹線文を巡らせる。外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りで調整する。**145・146**は体部最大径部分付近に刺突文を施す。**149・150**は口縁端部に凹線を巡らせないもので、**149**の体部上半にはハケ目が残る。**151**は底部。**152～154**は土師質土器。紛れ込みと思われる。**152・153**は杯。**154**は足釜。13世紀代のもの。**155**は石錐の未製品か。サヌカイト製。

遺構の時期は弥生時代中期中葉頃と考えられる。

Ⅲ区SH05（第74・75・76図）

Ⅲ区南東端、D・E10グリットにまたがって検出した竪穴住居跡である。北東部の一部は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明であるが、直径約5.60m、推定面積23～24㎡程度で、北東部調査区端に張り出しが認められる。ほぼ対角線上やや東寄りにも若干の広がりが見られ、2箇所に張り出しを持つ構造になるとも考えられる。床面上では柱穴を4穴検出し、このうちの3穴が主柱穴になると考えられ、1穴は調査区外にあると考えられる。主柱穴は円形で、おおむね直径30～42cm、深さ36～60cmである。中央付近では長軸90cm、短軸60cm、深さ4cm程度の楕円形で浅い、炭が堆積する土坑を検出した。壁溝は認められなかった。

床面上面の堆積土は多量の炭や炭化材で占められ、焼失家屋であったことがわかる。炭を取り除くと、主柱穴を結ぶライン上に梁材と考えられる部材をはじめ、垂木材と考えられるやや細めの部材、屋根材と考えられ



第79図　Ⅲ区SK50遺物出土状況平・断面図（1/20）出土遺物（1/4）

る板材や藁、焼土が集中して出土した。

156～159は弥生土器。**156**は長頸壷。口縁部が開く。体部と頸部の境にヘラ描きによる文様が部分的に残される。外面はヘラミガキする。**157**は壷体部から底部。**158**は鉢か。**159**は高杯。北西側主柱穴の南西に隣接して検出したピットからほぼ完形で出土した。杯部内面・脚部外面は放射状にヘラミガキする。**160**は黒色土器A椀。紛れ込み。**161**はスクレイパー。サヌカイト製。**162**は砥石か。安山岩製。表面と1側面に擦痕を顕著に残す。**163～165**は凹み石。砂岩製。ともに敲打痕を残す。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期前半頃と考えられる。

Ⅲ区SH06（第77図）

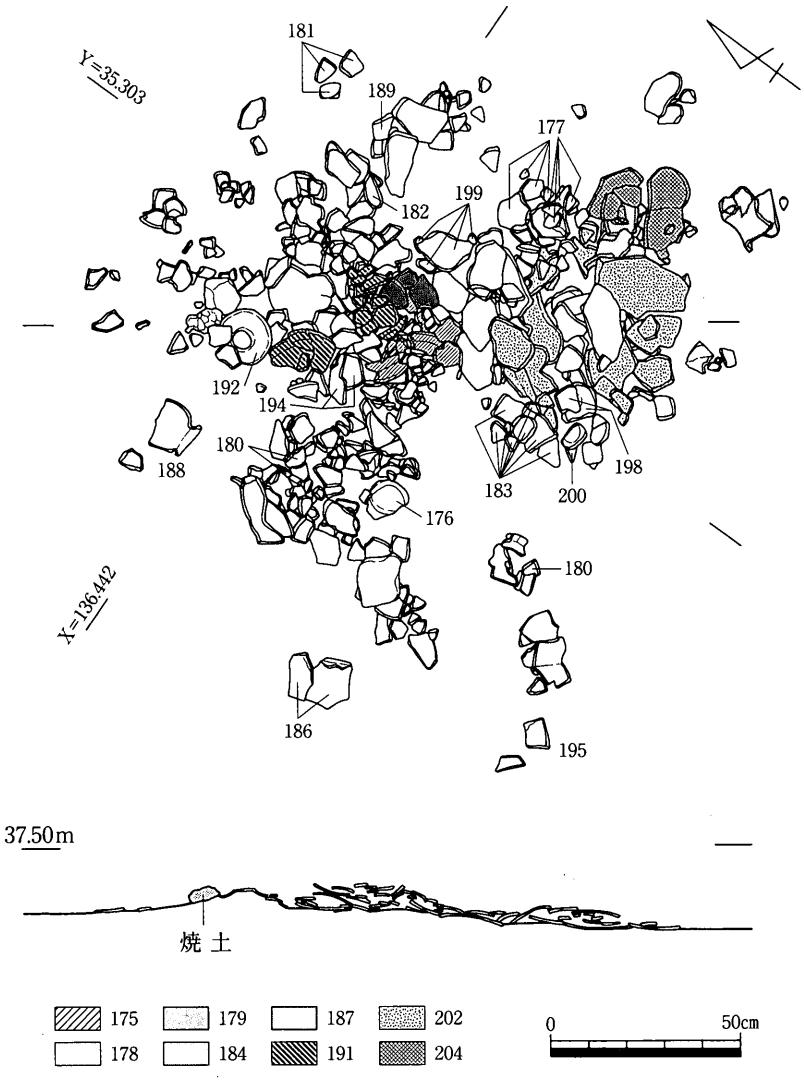
Ⅲ区南東端、E10グリットで検出した竪穴住居跡である。大部分は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明であるが、おおむね方形で、主軸方位はN38°Wと考えられる。1辺は1.6m以上、深さ25cm、埋土は暗黒褐色粘質土である。床面上からは一部で幅12cm、深さ10cmの壁溝と主柱穴と考えられるピットを1穴検出した。調査区東隅付近で焼土がみられ、この付近に炉があったとも考えられる。

166・167は弥生土器甕。**167**は口縁端部に凹線を巡らせる。外面はヘラミガキを施す。**168～170**は石器。すべてサヌカイト製。**168・169**は石庖丁。両側に抉りを入れ、上部に敲打痕を残す。**170**は石鏃。

遺構の時期は弥生時代後期前半頃と考えられる。

Ⅱ区SK41（第78図）

Ⅱ区E5・6グリットで検出した土坑である。長軸3.64m、短軸2.18m、深さ62cm、断面形状は東側がなだら



第80図　Ⅲ区SK101遺物出土状況平・断面図（1/20）

かな逆台形である。SK41はSD44により壊される。

171は弥生土器鉢。大型の鉢で、外面はヘラミガキする。**172**は甕の底部。平底を呈し、外面はヘラミガキをする。

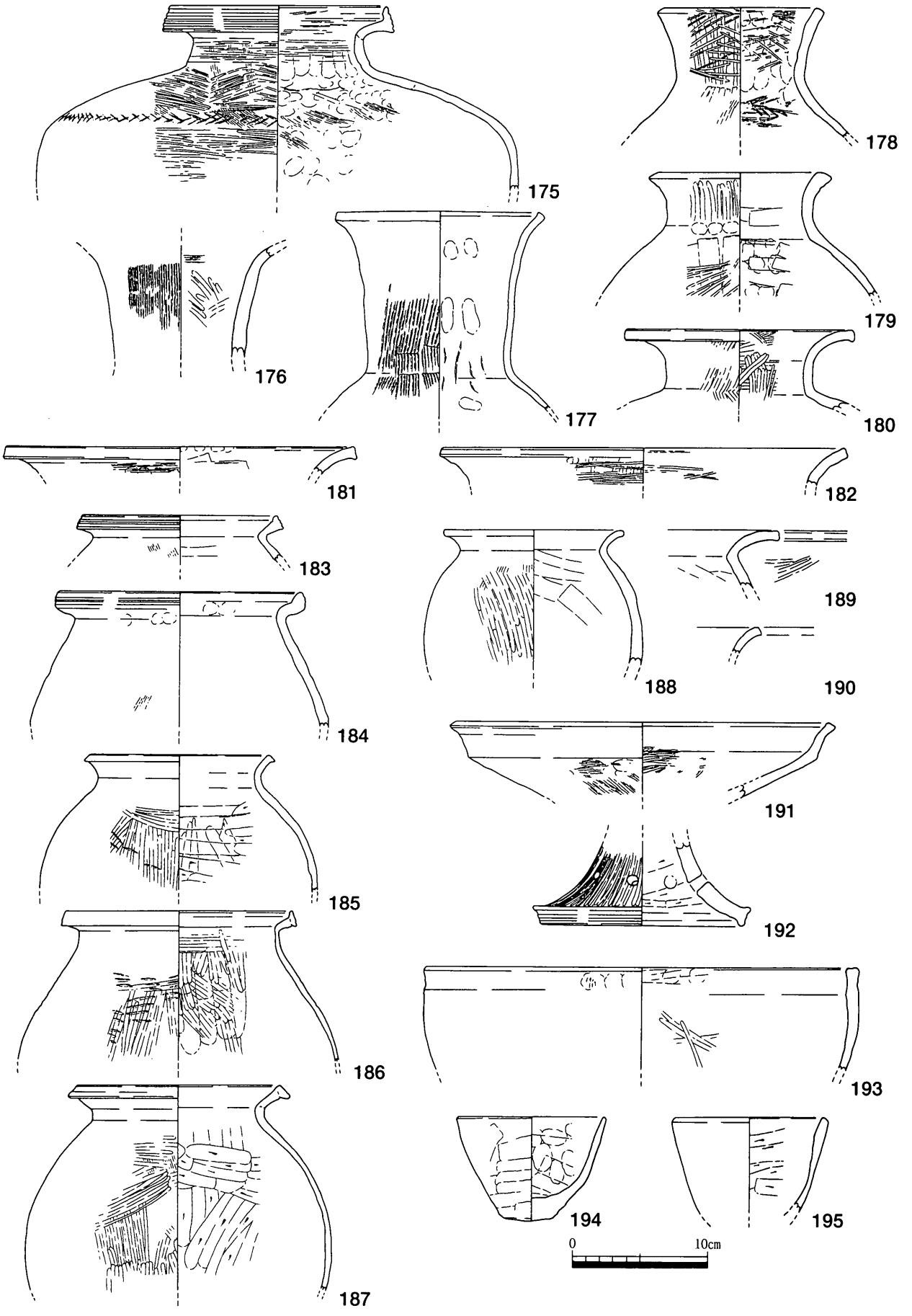
遺構の時期は弥生時代後期前半頃と考えられる。

Ⅲ区SK50（第79図）

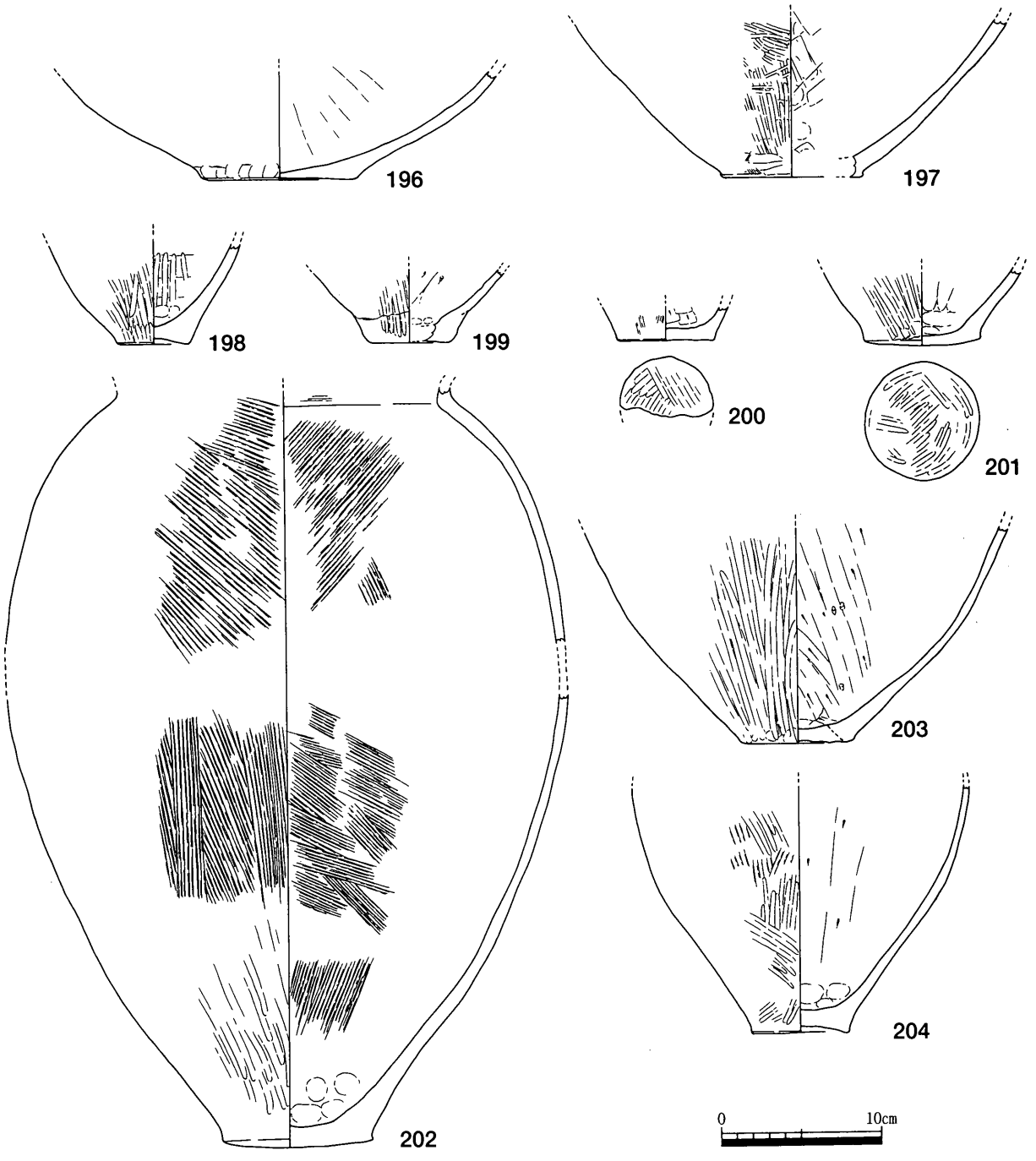
Ⅲ区E9グリットで検出した土坑である。不整円形で、直径1.25～1.31m、深さ38cm、断面形状はおおむね逆台形で、埋土は暗黒色粘土である。土坑底部付近からは弥生土器片が集中して出土した。廃棄土坑と考えられる。

173・174は弥生土器。**173**は鉢。椀型の器形である。**174**は壺体部。底部は平底で、体部中位よりやや上側に最大径を持つ。

出土遺物はおおむね弥生時代後期前半頃と考えられる。SK50はこの頃の遺構と考えられるSH03の上面から掘り込まれており、土坑から出土した遺物はSH03のものである可能性もあろうが、遺構の時期は弥生時代後期前半頃としておく。



第81図　Ⅲ区SK101出土遺物（1）（1/4）

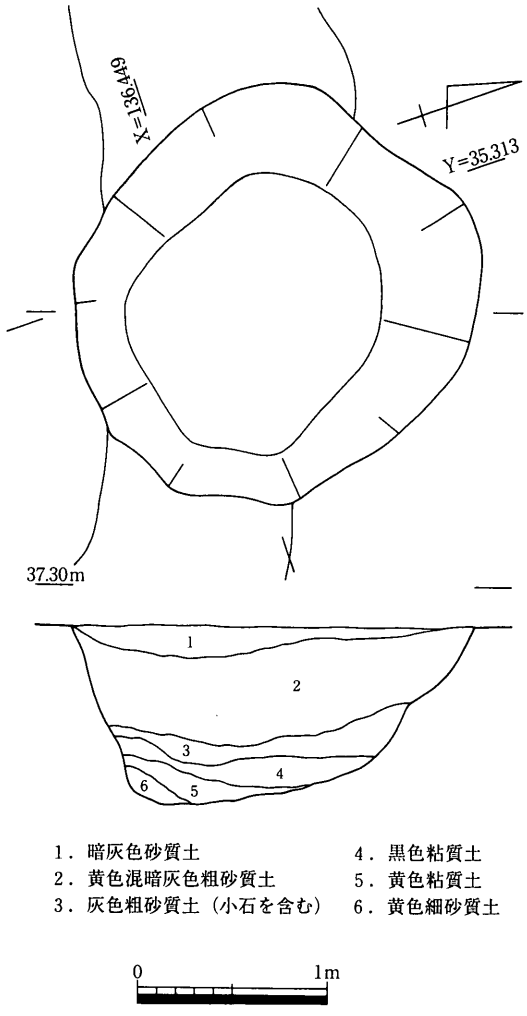


第82図　Ⅲ区SK101出土遺物（2）（1/4）

Ⅲ区SK101（第80・81・82図）

Ⅲ区D9グリットで検出した遺構である。明確な遺構の掘り方を持たず、土器が散乱した状態で検出した。おおむね1.90m×1.90mの範囲で、特にその中央部の1.40m×1.00mの範囲で密集していた。土器を取り上げた後には遺構は検出できなかった。

175～204は弥生土器。**175～182**は壺。**175**は口縁端部に凹線を巡らせ、体部最大径よりやや上側に斜め方向のヘラ状工具痕が残る。**176～179**は長頸壺。**177～179**は口縁端部はあまり開かない。**181・182**は小破片で口径・傾きともやや不確かである。**183～190**は甕。**183・184**は口縁端部に凹線を巡らせる。**185～187**は口縁端部を広げて面を持たせる。**185～188**は外面をヘラミガキで調整する。**191・192**は高杯。**191**は口縁端



第83図　Ⅲ区SK52平・断面図（1/40）

部に面を持たせる。**192**は脚部に7孔の孔を持たせ、脚端部には凹線を巡らせる。いずれも外面には密なヘラミガキを施す。**193～195**は鉢。いずれも椀型で、**194・195**は小型。**196～199**は壺底部。いずれも平底。**200～204**は甕底部。

遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期前半頃と考えられる。

Ⅲ区SK52（第83図）

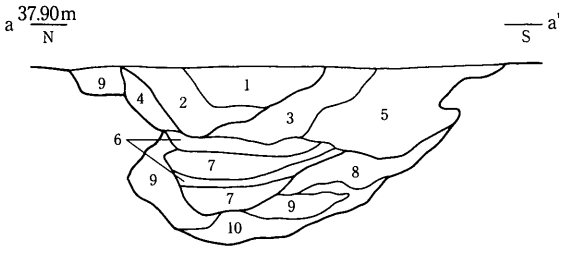
Ⅲ区D9グリットで検出した土坑である。おおむね円形を呈し、直径2.10m、深さ94cm、断面形状は逆台形であるが、北側はやや傾斜が緩い。埋土はおもに暗灰色砂質土・黄色混暗灰色粗砂質土である。SK52は周溝墓8の上面で検出した。埋土中からは土器小片がわずかに出土したのみである。

遺構の時期は埋土から弥生時代後期頃としておく。

Ⅰ区SD01（第84・85図）

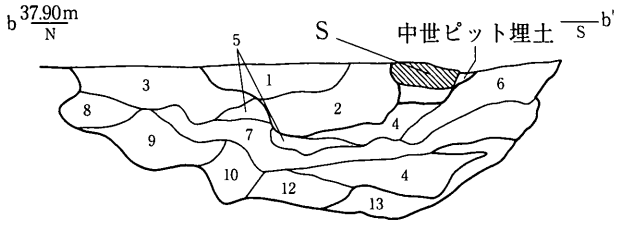
Ⅰ区を南西から北東へ流れる溝状遺構である。幅1.60～2.60m、深さ68～92cmである。

断面形状は、おおむね北西側で立ち上がりが急で、南東側で緩やかであり、北西側の溝の肩をえぐり込むようにしながら南東方向へ流れていったことがわかる。f－f'断面により、SD14よりも後で開削されたことがわ



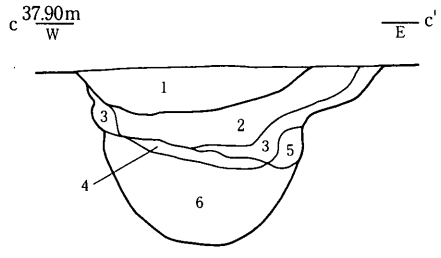
（a－a'）

1．暗黒褐色粘質土
2．暗茶褐色粘質土
3．淡灰茶色シルト（粗砂がラミナ状に入る）
4．淡茶褐色シルト
5．淡灰褐色シルト
6．淡灰色シルト
7．淡灰褐色粗砂（砂粒が非常に粗い）
8．暗黒色粘土　　上層（1・2）
9．暗黒褐色粘質土（ベースブロックを含む）　　中層（3～7）
10．淡黄褐色シルト（ベース崩落土？）　　下層（8～12）



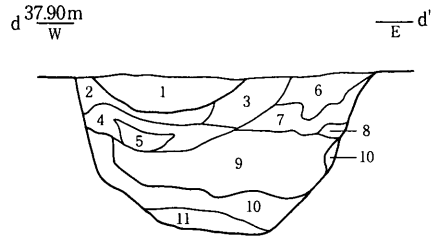
（b－b'）

1．暗褐色粘質土
2．暗茶褐色粘質土
3．淡茶褐色シルト（粗砂がラミナ状に入る）
4．淡灰色シルト
5．淡黄褐色シルト
6．暗茶黒色粘質土
7．淡灰褐色シルト
8．暗黒褐色粘土
9．暗黒色粘土
10．暗茶灰色砂質土
11．暗褐色粗砂　　上層（1・2）
12．淡褐黄色粗砂　　中層（3～12）
13．暗灰色シルト～粗砂　　下層（13）



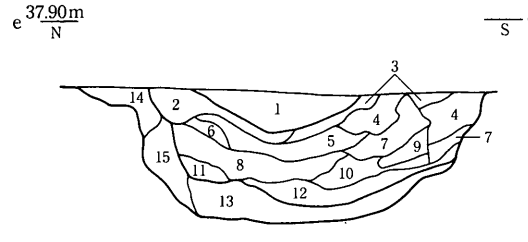
（c－c'）

1．暗黒褐色粘質土（ベースブロックを含む）
2．淡灰褐色シルト
3．暗茶黒色粘質土
4．暗褐色粗砂
5．淡黄褐色粘土ブロック　　上層（1）
6．淡褐茶色粗砂　　中層（2～6）



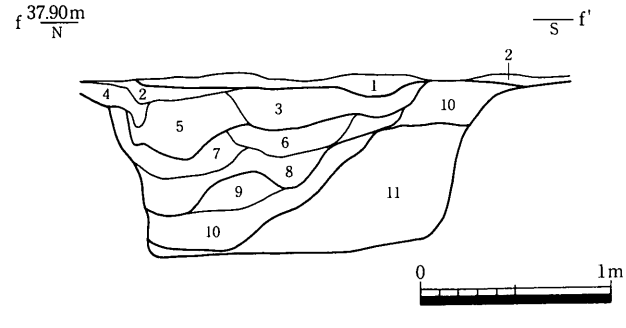
（d－d'）

1．暗茶褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土
3．暗茶灰色粘質土
4．暗褐色シルト
5．暗褐色粗砂
6．暗茶灰色粘質土（3よりも明るい色調）
7．暗黒色粘質土
8．淡黄褐色粘質土（ベース崩落土）
9．淡褐色粗砂　　上層（1）
10．淡灰色シルト～細砂　　中層（2～9）
11．淡黄褐色粗砂　　下層（10・11）



（e－e'）

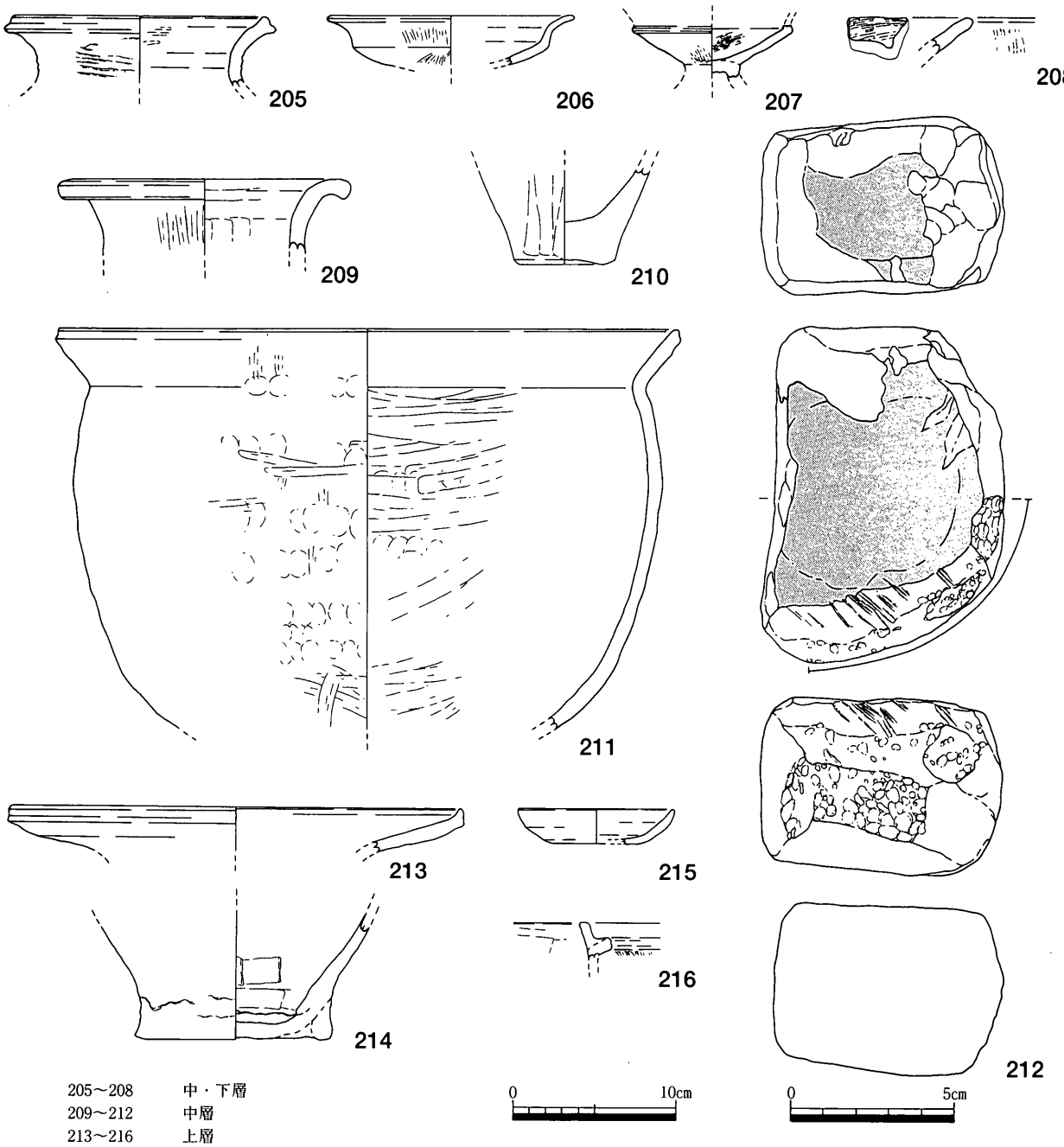
1．暗茶褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土
3．暗茶灰色粘質土
4．暗黒褐色粘質土
5．暗灰褐色粗砂
6．淡褐黄色細砂
7．暗黒色粘質土　　上層（1）
8．淡灰色シルト～細砂　　中層（2～12）
9．暗褐色粗砂　　下層（13）
10．淡褐色粗砂　　下層？（14・15）
11．淡褐黄色粗砂
12．暗灰褐色粗砂
13．淡褐灰色粗砂～細砂
14．暗茶褐色粘質土
15．暗茶灰色粘質土



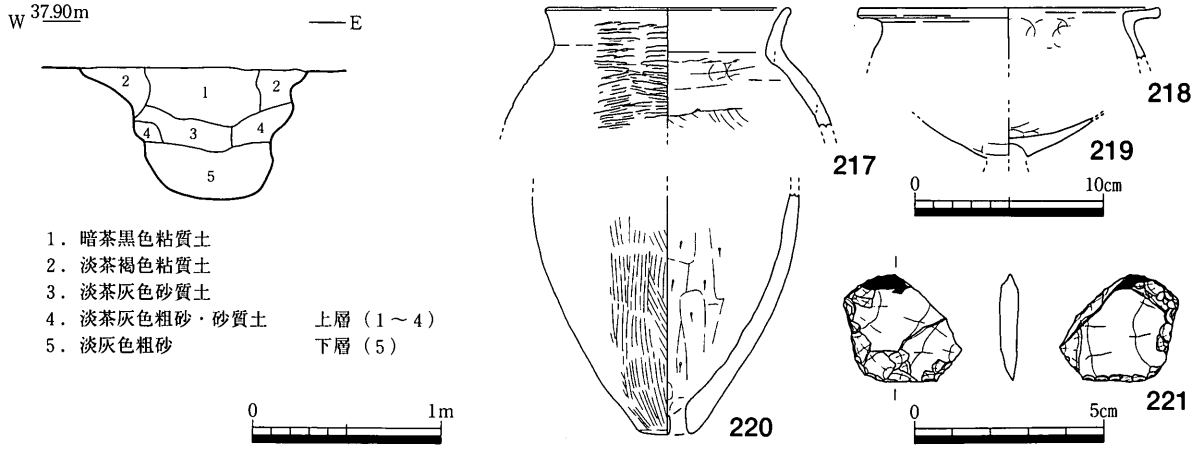
（f－f'）（調査区壁）

1．淡灰褐色砂質土
2．暗褐灰色砂質土（Mnを多く含む）
3．暗灰茶色粗砂（やや粘性あり）
4．淡褐白色シルト
5．暗黒褐色粘質土
6．淡灰褐色シルト～中砂　　中世包含層（1）
7．暗褐色粗砂（ややしまる）　　上層（2～5）
8．暗黒色粘土　　中層（6～8）
9．淡黄褐色粗砂　　下層（9・10）
10．淡灰色シルト　　SD14（11）
11．暗褐色粗砂

第84図　Ⅰ区SD01断面図（1/40）



第85図　Ⅰ区SD01出土遺物（1/2、1/4）



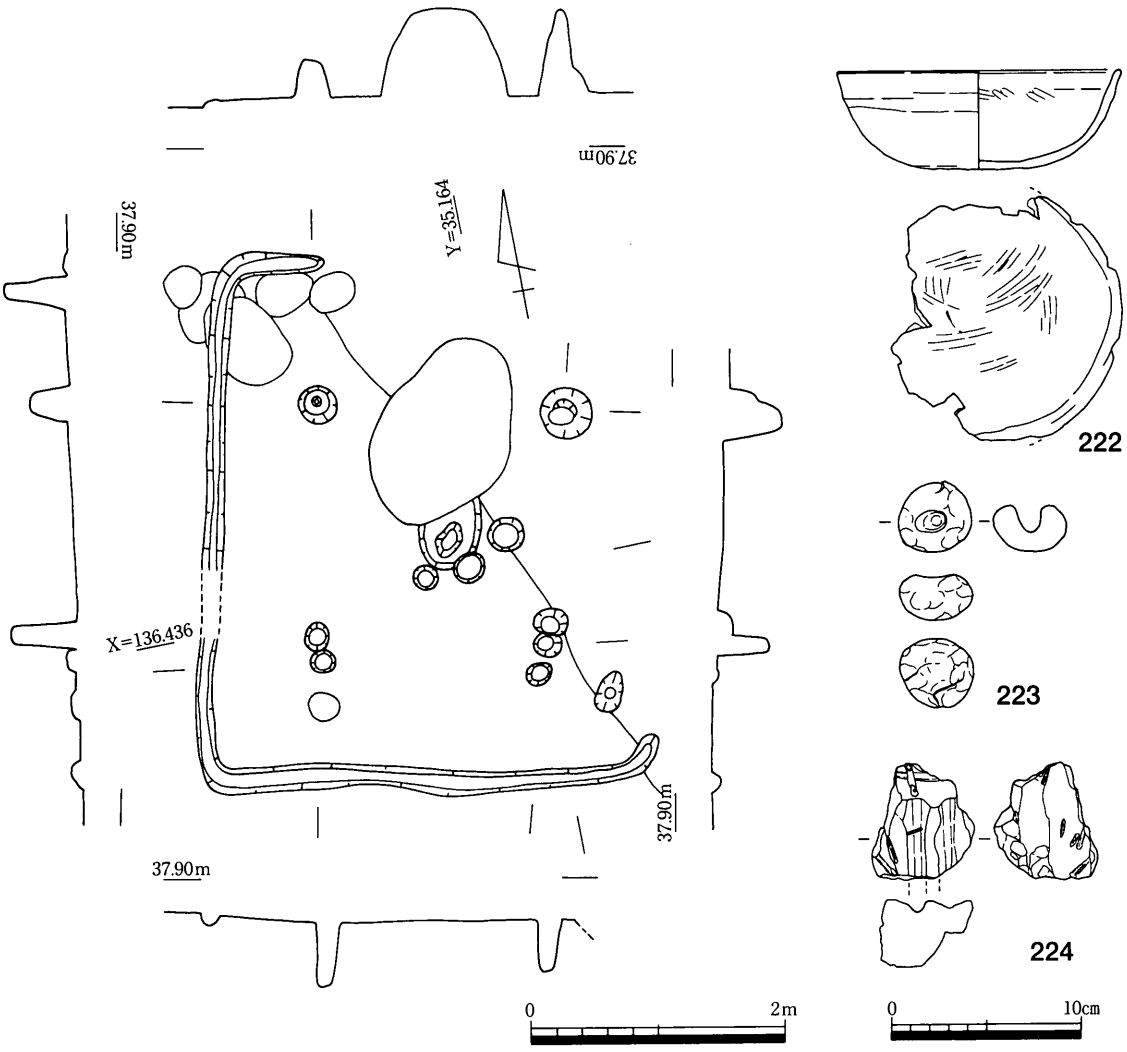
第86図　Ⅰ区SD14断面図（1/40）、出土遺物（1/2、1/4）

かる。

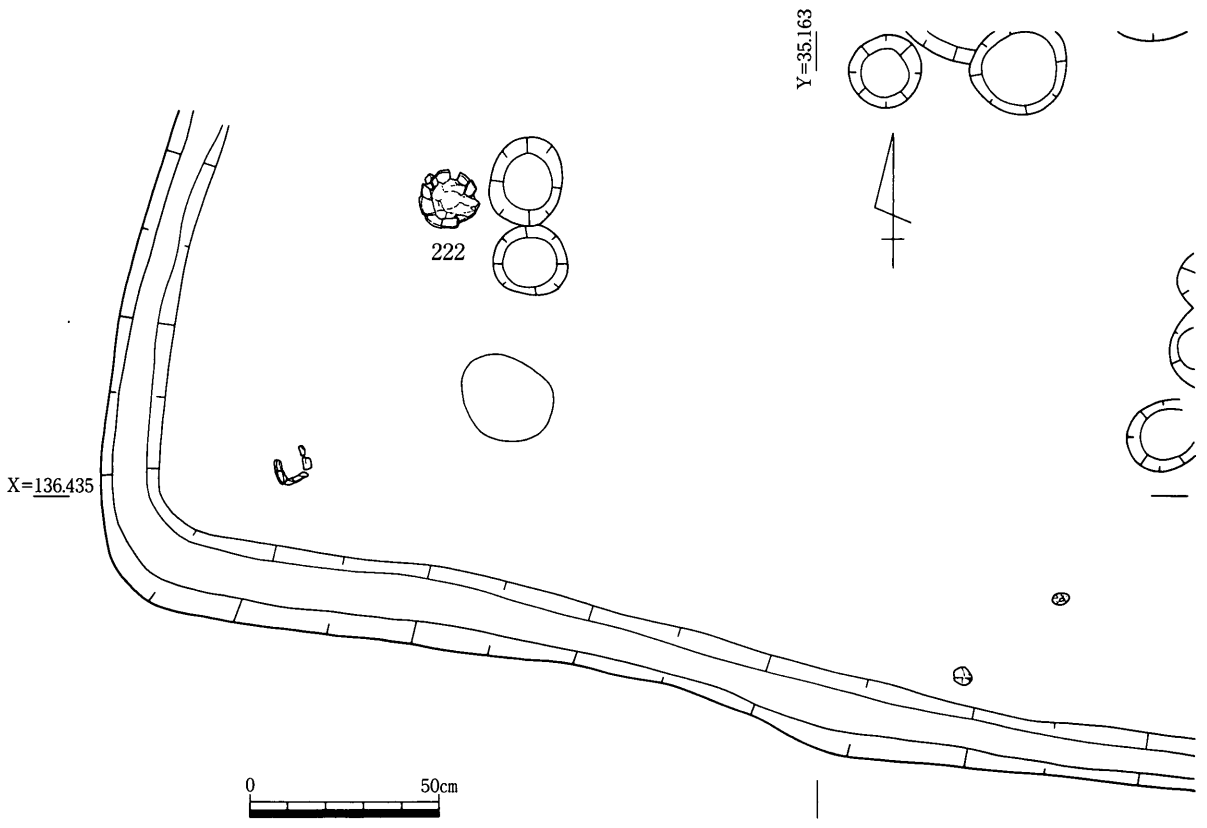
埋土は3層に分けた。下層はおもに淡黄褐色、淡灰色などの色調で、粗砂、シルト層が厚さ30cm程度堆積する。中層は厚さ50cm程度のシルト層・粗砂層により構成されるが、部分的に上面に暗灰色・暗褐色粘質土層の堆積がみられ、中層までは比較的短期間に埋没したものの、その後の堆積は、やや時間がかかったと思われる。上層はおおむね幅0.80～1.20m、深さ25～35cmの規模で最掘削されたものである。埋土はおおむね暗茶褐色粘質土である。

205～208は中・下層から出土した遺物である。すべて弥生土器。**205**は壺。やや短めの頸部で、口縁部は緩く開く。**206・207**は高杯。**207**は杯部の口縁部と脚部が剥離している。杯部の立ち上がり部分に沈線を巡らせる。**209～212**は中層出土遺物。**209～211**は弥生土器。**209**は壺。口縁端部が短く開く。**210**は底部。**211**は鉢。**212**は叩き石。側縁部にあばた状・線状の敲打痕を残す。**213～216**は上層から出土した遺物。**213**は壺口縁部。口縁部が大きく開く。**214**は底部。しっかりした平底を呈する。底部には粘土の接合痕が明瞭に残る。**215・216**は土師質土器。**215**は杯。**216**は足釜小破片。**215・216**は上面に堆積する中世包含層に由来するものと考えられる。

SD01の遺物出土量は少なく、中・下層からはタタキ甕等の弥生土器小片やサヌカイト小片が、上層から6世紀代の須恵器杯身や甕、13世紀代の土師質土器杯、小皿、足釜等が出土した。中・下層からは弥生時代前期頃の甕小片がわずかに出土しているが、全体の遺物量が少なく、弥生時代前期から機能していたかどうかは



第87図　I区SH01平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第88図　Ⅰ区SH01遺物出土状況（1/20）

慎重を期す必要がある。遅くとも弥生時代後期前半にはSD01は開削され、古墳時代後期頃に上層が埋没したと考えられる。中世の遺物は上面に堆積する中世包含層に由来するものと考えられる。

Ⅰ区SD14（第86図）

Ⅰ区南南西から北北東へ向く溝状遺構である。Ⅰ区北東端部でSD01に溝の肩を壊される。幅120cm、深さ70cmを測り、断面形状はU字状を呈する。埋土は上層、下層に分かれ、上層はおもに淡茶灰色砂質土・暗茶黒色粘質土、下層が淡灰色粗砂である。埋土中からは弥生土器片が出土しているが、遺物量は全体的に少ない。また、出土遺物からは上層と下層の明確な時期差は認められなかった。

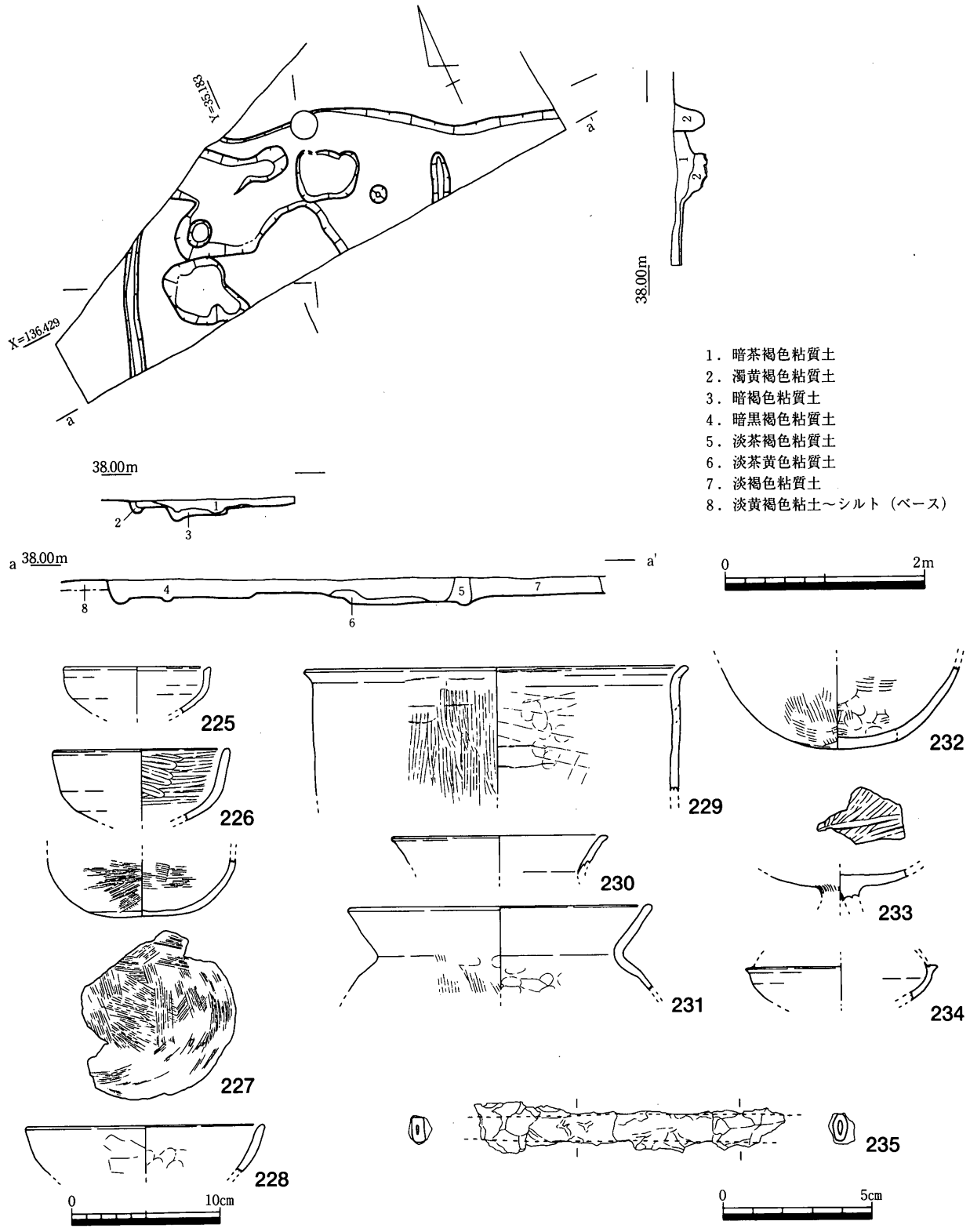
217～220は弥生土器。**217・218**は甕。**217**は外面をタタキにより調整する。**218**は口縁端部を極端に上向きに広げる。形態は下川津B類に似るが、胎土中には雲母をわずかに含むだけで、角閃石は含まない。**219**は高杯。脚部を接合する部分が剥離している。**220**は甑。底部に1箇所穿孔する。**221**は楔形石器。サヌカイト製。上・下部・側縁部に敲打痕を残す。

遺構の時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。

（3）古墳時代後期の遺構・遺物

古墳時代後期の概要

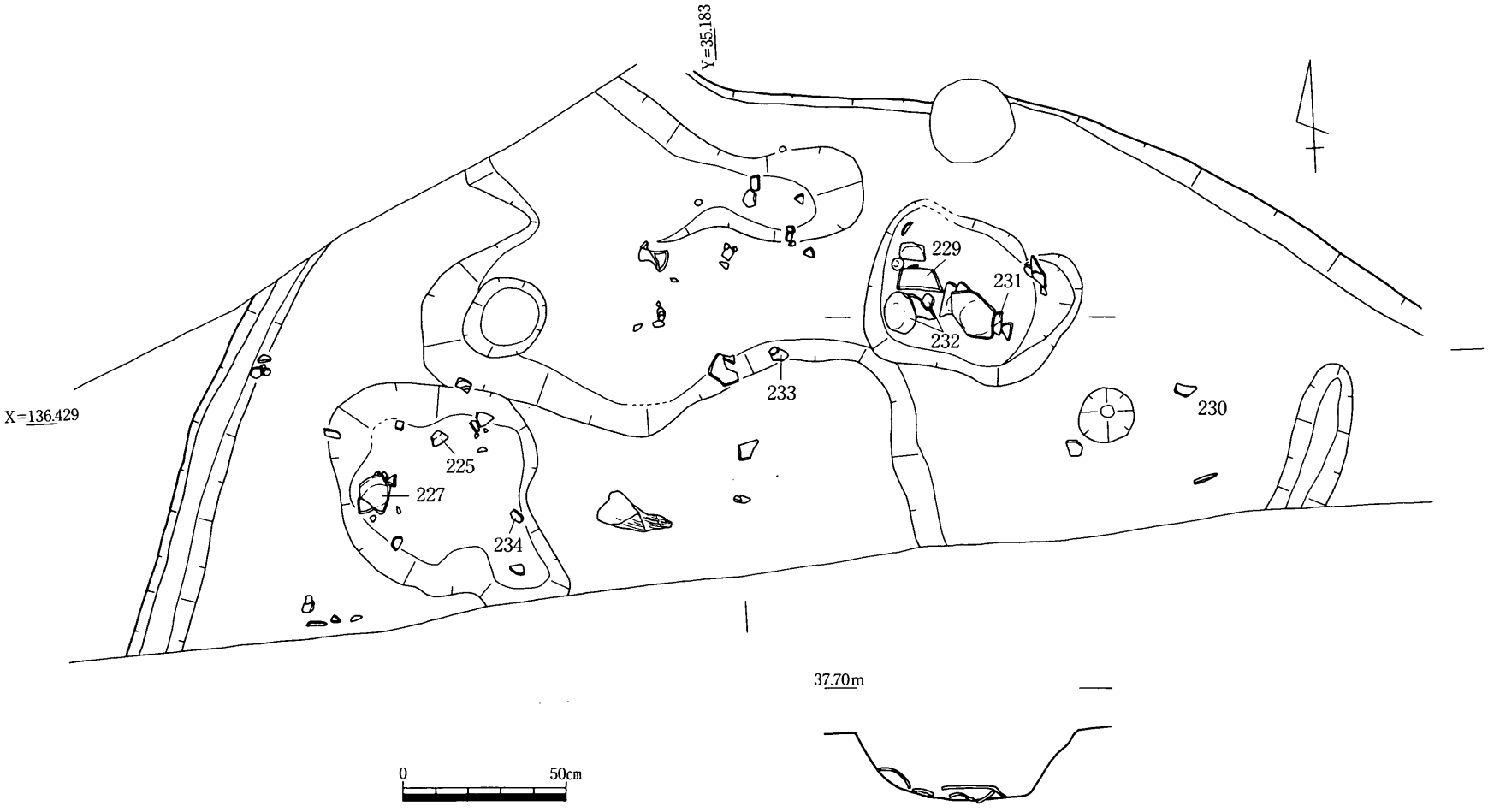
Ⅰ区東端部からⅡ区にかけて、大規模な水路跡が開削される。この水路跡は南西から北東へ向いて流れ、途中で東へ分岐し、さらに北東へ流れる。それに伴ってか、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区ではその水路跡に沿うようにして、やや柱穴の小さい総柱建物や側柱建物が多く建てられる。Ⅲ区東端からⅤ・Ⅶ区にかけては規模の大きい側柱建物跡や竪穴住居跡が検出された。その他の土坑・小規模な溝状遺構等はⅠ区・Ⅱ区で散在して検出した。



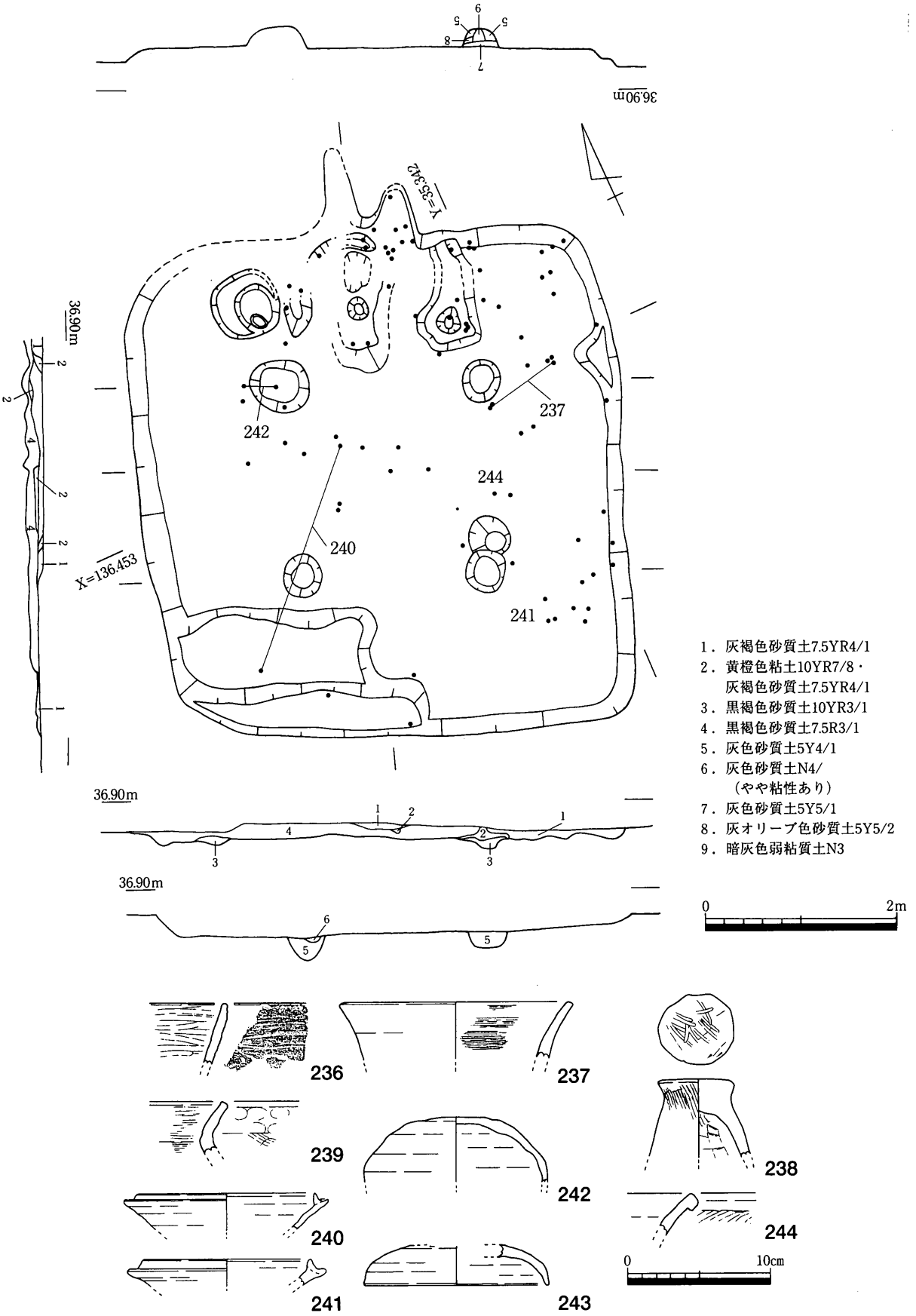
第89図　Ⅰ区SH02平・断面図（1/60）、出土遺物（1/2、1/4）

Ⅰ区SH01（第87・88図）

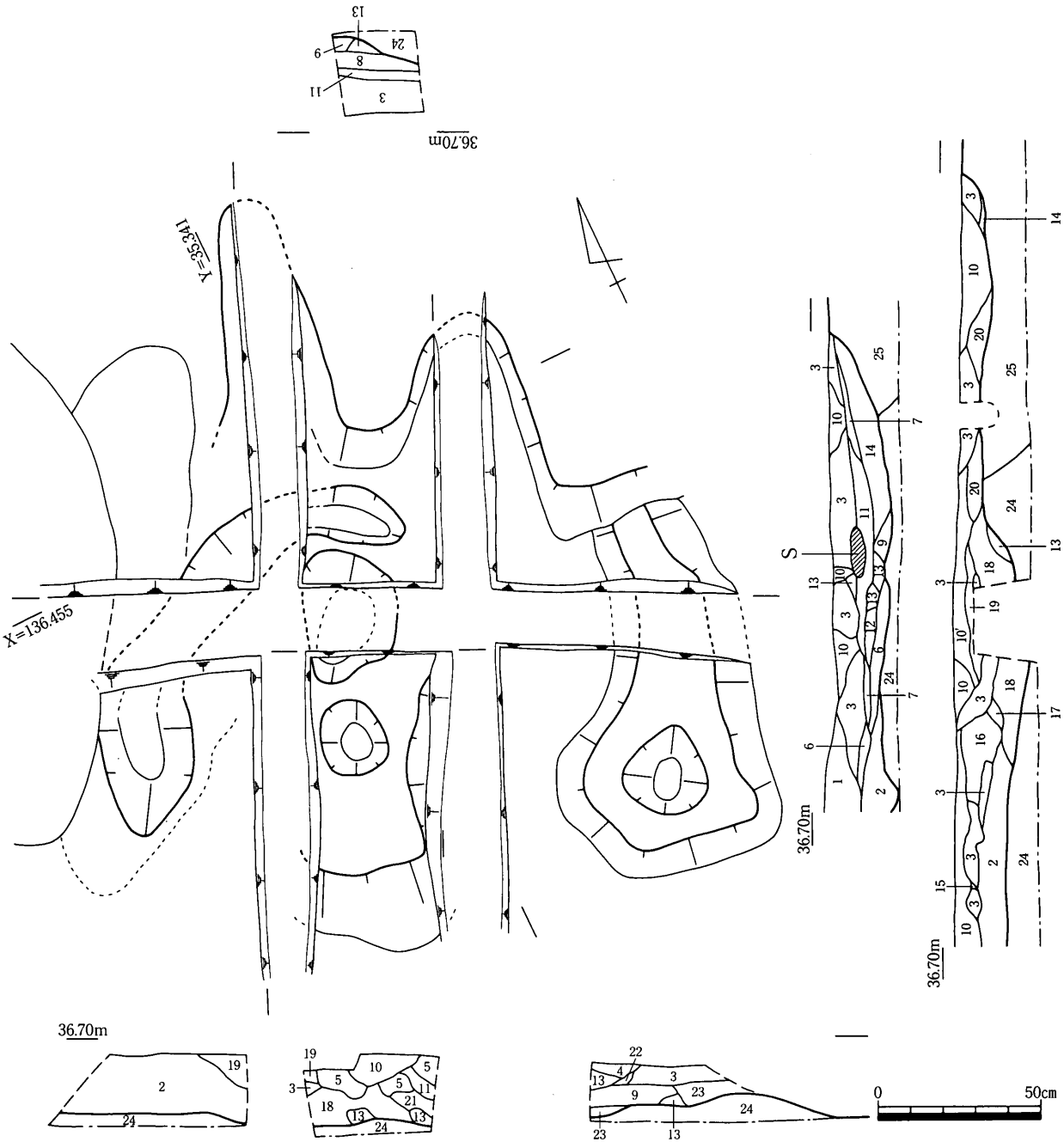
Ⅰ区E2で検出した竪穴住居跡である。長方形で長辺4.20m、短辺3.20m、推定面積が13.4㎡、主軸方位はN17°Eである。遺構の北東側約1／2は後世の落ち込みにより消失している。竪穴住居跡の埋土はなく、遺構検出面で壁溝と主柱穴を検出している。遺構面が削平を受けたためとも考えられるが、他の周囲の遺構と検出面が同レベルであることを考えれば、平地式住居であった可能性もあろう。



第90図　Ⅰ区SH02遺物出土状況平・断面図（1/20）



第91図　Ⅶ区SH07遺物出土状況平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



1．褐灰色砂質土7.5YR4/1
2．黒褐色砂質土10YR3/1
3．黄橙色粘土10YR7/8
4．黄橙色粘土10YR7/8（部分的に被熱？）
5．黄橙色粘土10YR7/8（部分的に被熱？）
6．黒色弱粘質土10YR2/1（炭化物・黄橙色粘土ブロックを若干含む）
7．黒色粘質土N2（炭化物を多く含む）
8．黒褐色砂質土2.5Y3/1・黄橙色粘土10YR7/8
9．黒褐色砂質土2.5Y3/1・黄橙色粘土10YR7/8（焼土ブロックを含む）
10．褐灰色砂質土10YR4/1（黄橙色粘土ブロックを若干含む）
10'．褐灰色砂質土10YR4/1（黄橙色粘土ブロックを含む）
11．黒色弱粘質土10YR2/1（炭化物・焼土ブロックを若干含む）
12．黒色弱粘質土N2/（炭化物を多く含み、焼土ブロックは若干含む）
13．明赤褐色粘土
14．黄灰色砂質土2.5Y4/1
15．暗灰色弱粘質土（炭化物を含む）
16．灰色弱粘質土5Y5/1
17．黒褐色砂質土2.5YR2/1・明赤褐色粘土
18．褐灰色砂質土10YR4/1
19．黒褐色弱粘質土10YR3/1
20．褐灰色砂質土10YR4/1（10'よりも粘土ブロックを多く含む）
21．黄灰色弱粘質土2.5Y4/1（黄橙色粘土ブロックを若干含む）
22．黒色弱粘質土10YR2/1（炭化物を含む）
23．オリーブ黒色砂質土5Y3/1
24．灰黄褐色砂質土10YR5/2
25．黒褐色砂質土2.5Y3/1

竪穴住居埋土（1・2）
天井崩落部（3・4）
かまどブロック（5～12）
焼土ブロック（13～23）
ベース（24・25）

第92図　Ⅶ区SH07竈平・断面図（1/20）

竪穴住居跡内では壁溝とピットを検出した。壁溝は幅15～18cm、深さ７～10cmで、竪穴住居跡を検出した範囲では全体にわたっていた。ピットは12穴検出した。ピットはおおむね長方形に配置され、中心にも配する。このうち、南側のピットは２～４穴が近接してあり、一部建て替えの可能性もあろう。中央土坑・竈等は認められなかった。

222は土師器杯。内外面にヘラミガキ痕が残る。**223**は用途不明品。粘土を丸めた後、上側を窪ませた形状である。**224**は壁土か。方柱状の粘土に管状の窪みを残す。同様の土製品は中世の遺構から数多く出土しており、住居床面が遺構面と同じであることを考えれば、後世の紛れ込みと考えられる。

遺構の時期は６世紀代と考えられる。

Ⅰ区SH02（第89・90図）

Ⅰ区E3グリットで検出した竪穴住居跡である。北西隅は後世の水路掘削により消失し、南東側の大部分は調査区外へ延びる。形状は方形と考えられ、１辺4.50m以上、検出面からの深さ12～25cm、埋土はおおむね淡褐色粘質土、主軸方位はN22°Wである。床面上からはピットを２穴検出したほか、不定形の落ち込みを数箇所検出した。落ち込み部分の埋土は濁黄褐色粘質土、淡茶褐色粘質土で、比較的ベースと類似した埋土をもつ。これらの落ち込み部分から比較的多くの土器が出土した。不定形の落ち込み部分は貼り床の可能性があろう。

225～233は土師器。**225～228**は杯。**226**は内面に横方向のヘラミガキ、**227**は横方向のハケを施す。**229～232**は甕。**233**は高杯。杯部体部と脚部は欠損。内面には放射状と思われるヘラミガキを施す。**234**は須恵器杯身。**235**は鉄製品。用途不明。棒状を呈し、中空になっている。

遺構の時期は６世紀代と考えられる。

Ⅶ区SH07（第91・92図）

Ⅶ区D10グリットで検出した竪穴住居跡である。方形で１辺5.10～5.30m、深さ18cm程度、面積は約27㎡、埋土はおおむね灰褐色・黒褐色砂質土、主軸方位はN19°Eである。竪穴住居跡の南西側は一部階段状のベット状遺構が見られる。床面上からは方形状に並ぶ主柱穴を検出した。南東側の柱穴は２穴重複している。竪穴住居跡の北辺中央付近で竈を２箇所検出した。

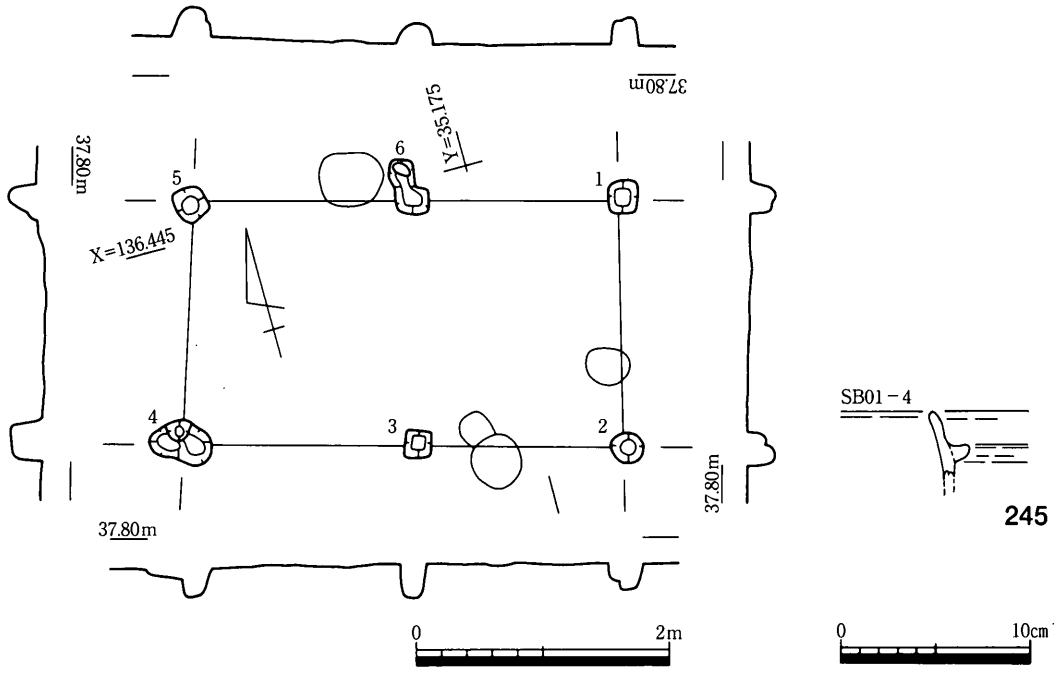
西側の竈の煙道部は竪穴住居跡の外側74cmまで検出できたが、竪穴住居跡の内部では竈の袖部分は確認できず、西側ではその部分には浅い落ち込みが見られる。埋土中にはわずかに焼土ブロック等が認められるが、埋土の大半は竈の構築土と考えられる黄橙色粘土ブロックであり、竈としてはそれほど機能していなかったと思われる。東側の竈については、煙道部が竪穴住居跡の外側へおおむね40cm程度延び、竪穴住居跡の内部では袖部を両側で検出した。袖部南端では深さ３～５cm、直径25cm程度の浅い円形の落ち込みがそれぞれにある。竈は焚き口の袖部分を若干深めに掘り窪め、天井部はおもに黄橙色粘質土により構築する。東側の袖部の竈の構築土中に焼土ブロックが混じるのは、西側の竈を壊した後にこの土を使用して竈を構築したからであろう。焚き口部分には炭化物が厚さ約５cmほど堆積していた。２基の竈は遺構の検出状況から、同時併存ではなく西側の竈を構築した後、あまり時を経ずに東側へ竈を作り直したと考えられる。

236は縄文土器深鉢口縁部。外面は貝殻条痕を残す。**237・238**は弥生土器。**237**は壷口縁部。**238**は蓋として図化したが、底部の可能性もあろう。**239**は土師器甕。**240～244**は須恵器。**240・241**は杯身。口縁部の返りの退化が著しい。**242・243**は蓋。**242**はやや深め、**243**は浅め。頂部にヘラ切り痕が残る。**244**は甕。口縁端部を外側へ折り曲げて肥厚させ、下部にはハケメ状の工具痕を残す。

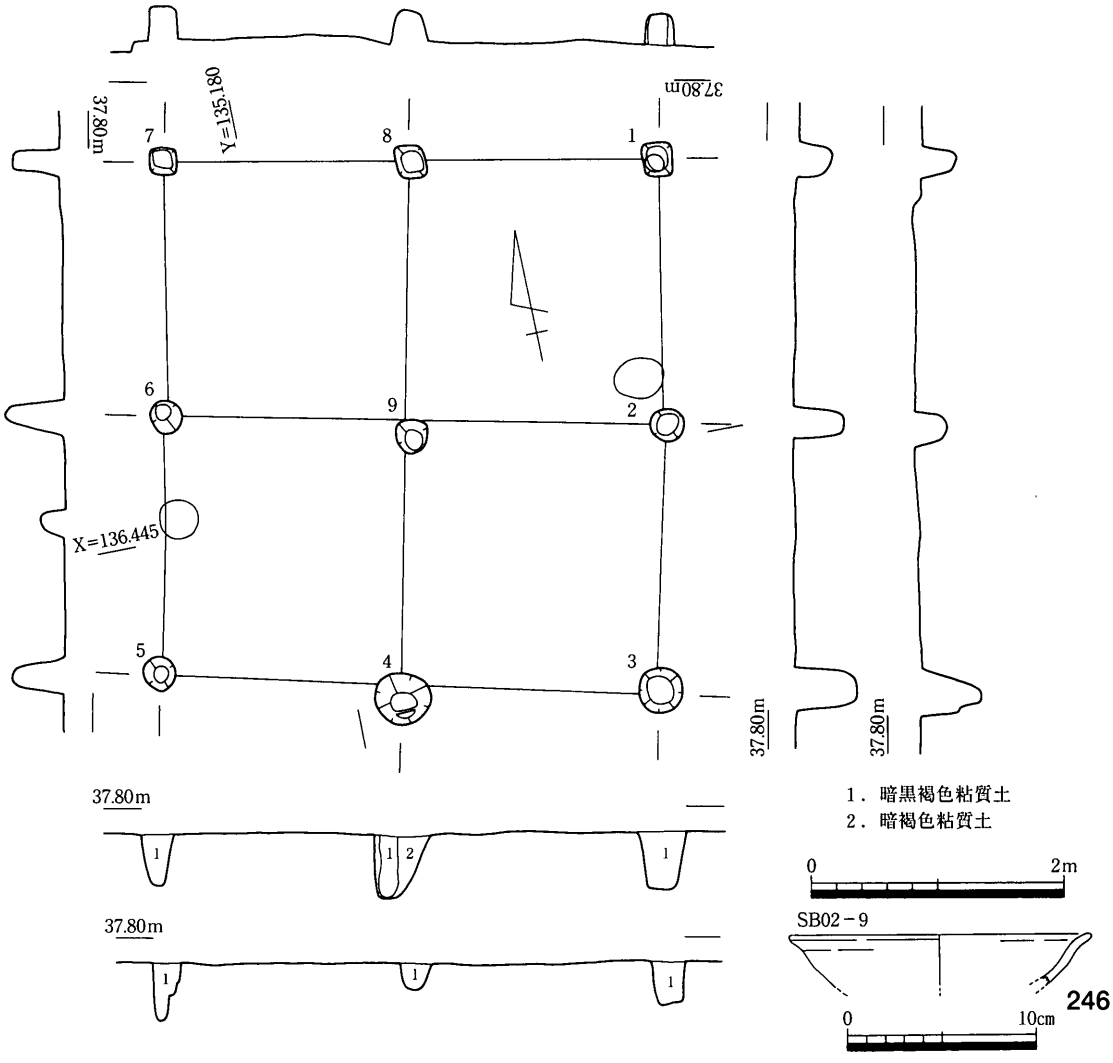
遺構の時期は７世紀前半頃と考えられる。

Ⅰ区SB01（第93図）

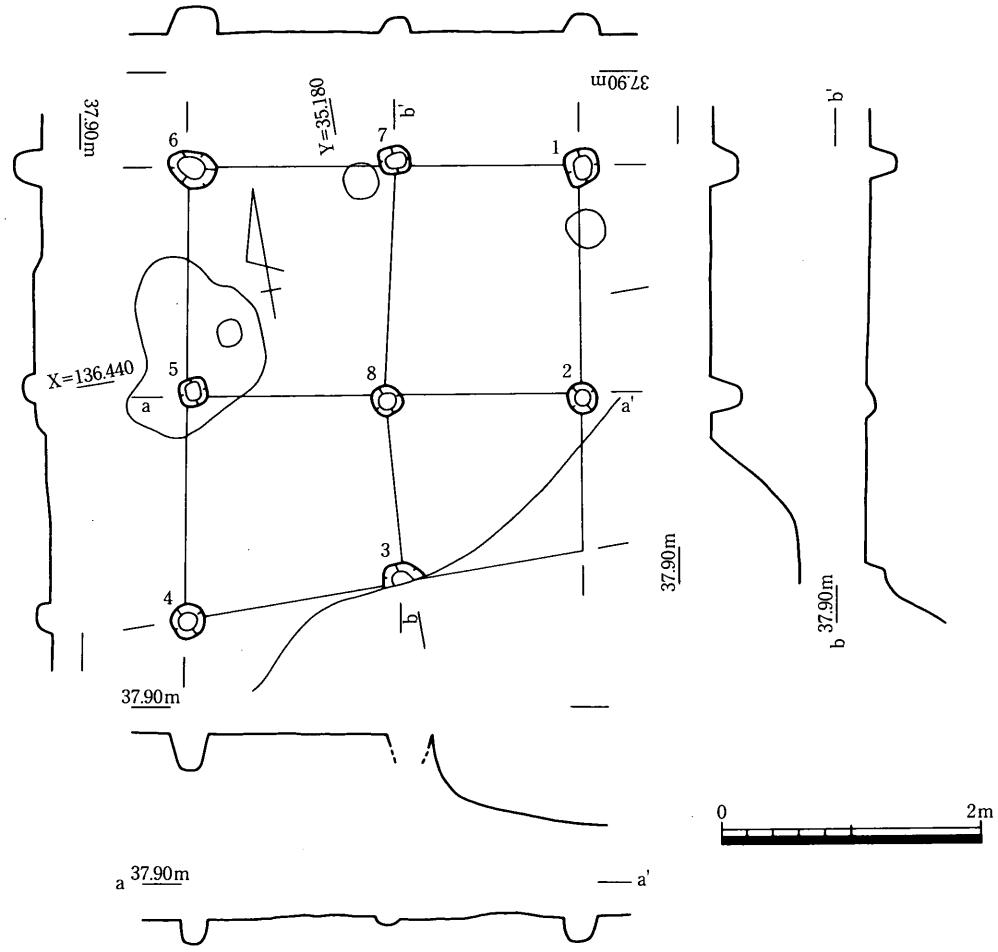
Ⅰ区D2グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行２間（3.45m）、梁間１間（1.92m）、面積は約6.6㎡、



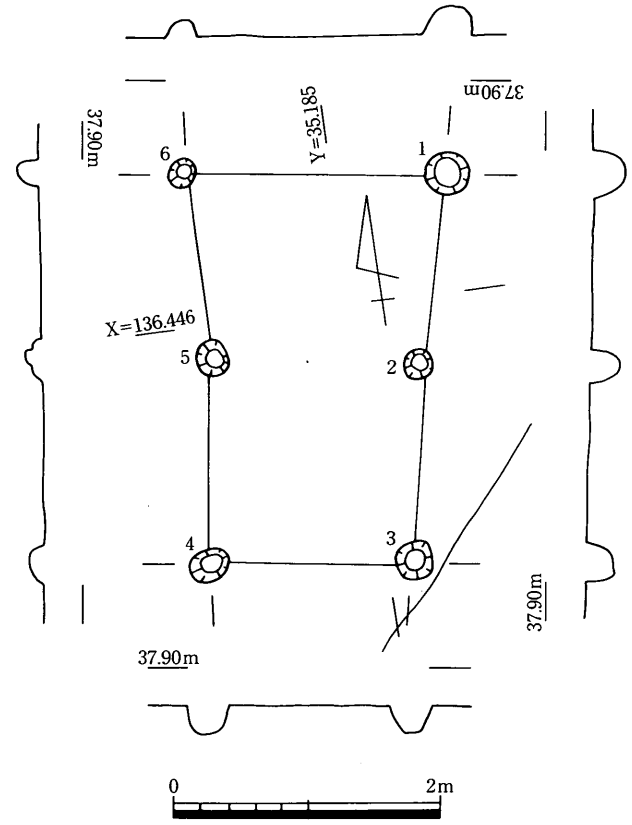
第93図　Ⅰ区SB01平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第94図　Ⅰ区SB02平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第95図　Ⅰ区SB03平・断面図（1/60）



第96図　Ⅰ区SB06平・断面図（1/60）

主軸方位はN73°Wである。桁行の柱間はおおむね1.70m、柱穴は南東隅が円形、南西隅が不定形であるほかは方形である。柱穴の規模は1辺または直径が24～30cm、深さ21～25cmである。柱穴埋土中からはおおむね土器の小片が出土しただけであるが、SB01－4からは土師質土器足釜・瓦器小片が出土している。

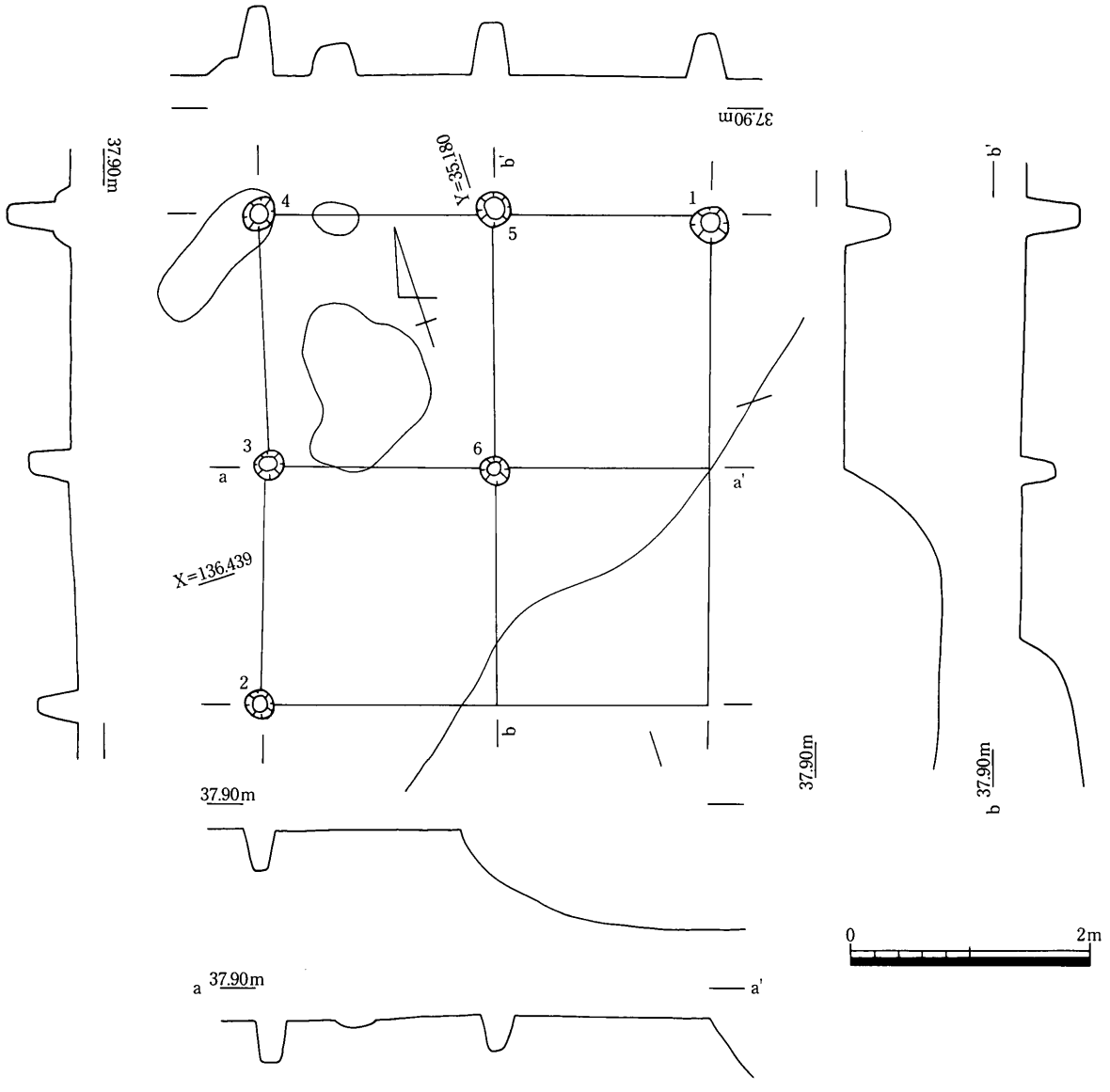
245は土師質土器足釜。鍔部に接合痕を残す。13世紀後半頃。

遺構の時期については建物の方向性から古墳時代後期のものとしたが、出土遺物から若干疑問も残る。

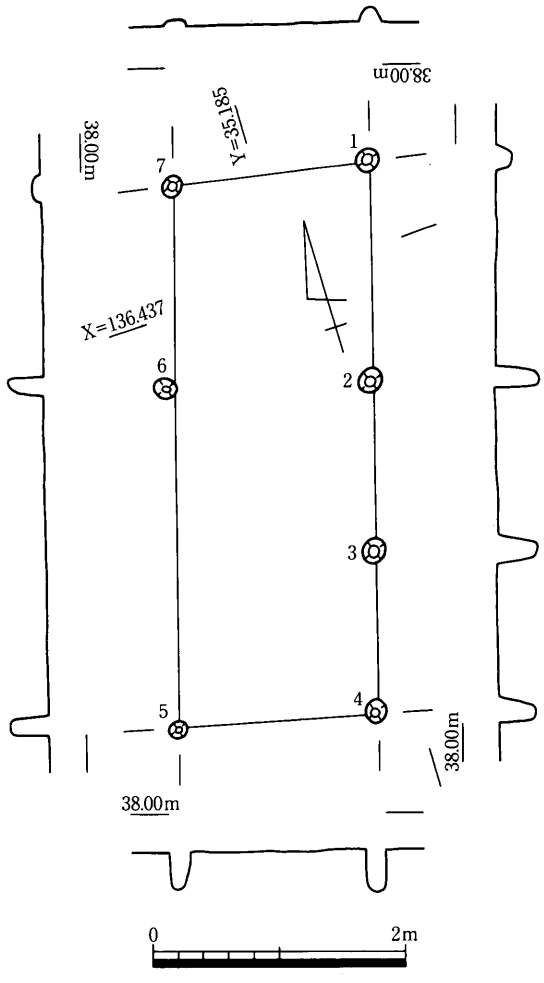
Ⅰ区SB02（第94図）

Ⅰ区D2・3グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間（4.06～4.26m）、梁間2間（3.96m）、面積は約16.5㎡の総柱建物で、主軸方位はN12°Eである。柱間は1.95～2.10m、柱穴は北側列は方形、残りは円形で、1辺または直径が24～45cm程度、深さ23～48cm、柱痕跡の規模はおおむね直径15～16cmである。柱痕跡に比べて柱掘り方は小さい。柱穴の埋土は柱掘り方が暗褐色粘質土、柱痕跡が暗黒褐色粘質土である。柱穴埋土中からは土器小片が出土したほか、土師質土器杯が出土している。

246は土師質土器杯。13世紀代。



第97図　Ⅰ区SB07平・断面図（1/60）



第98図　Ⅰ区SB08平・断面図（1/60）

遺構の時期は、埋土が古墳時代後期の遺構に多い埋土であること、建物の主軸方位が条里型地割の方向と合わないことから、古墳時代後期としておく。

Ⅰ区SB03（第95図）

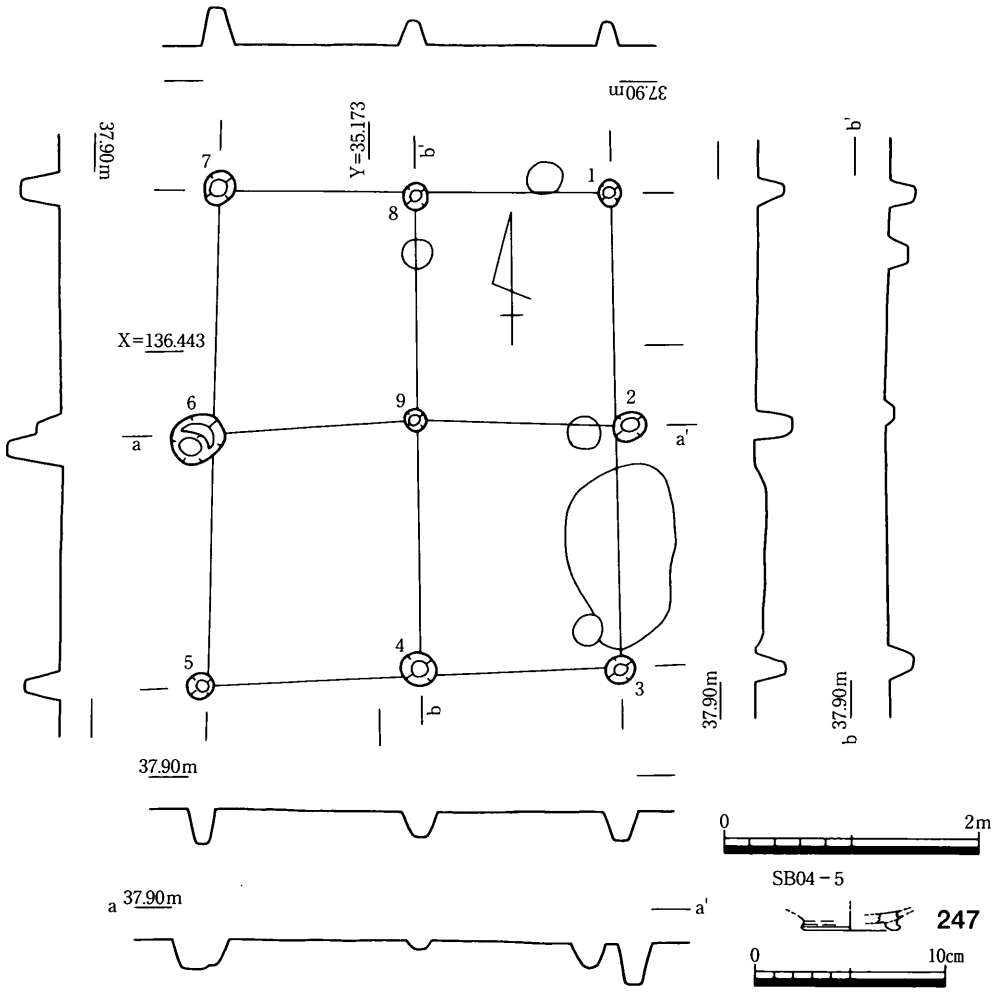
Ⅰ区E3杭付近で検出した掘立柱建物跡である。桁行2間（3.40～3.60m）、梁間2間（3.10m）、面積は8.8㎡以上でおおむね10.9㎡程度になる総柱建物で、主軸方位はN10°Eである。柱間は1.44～1.89m、柱穴は円形で、直径24～30cm、深さ15～30cmである。柱穴埋土中からは土器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、主軸方位が条里型地割と合わないことや、SB02との規模の類似性から古墳時代後期頃としておく。

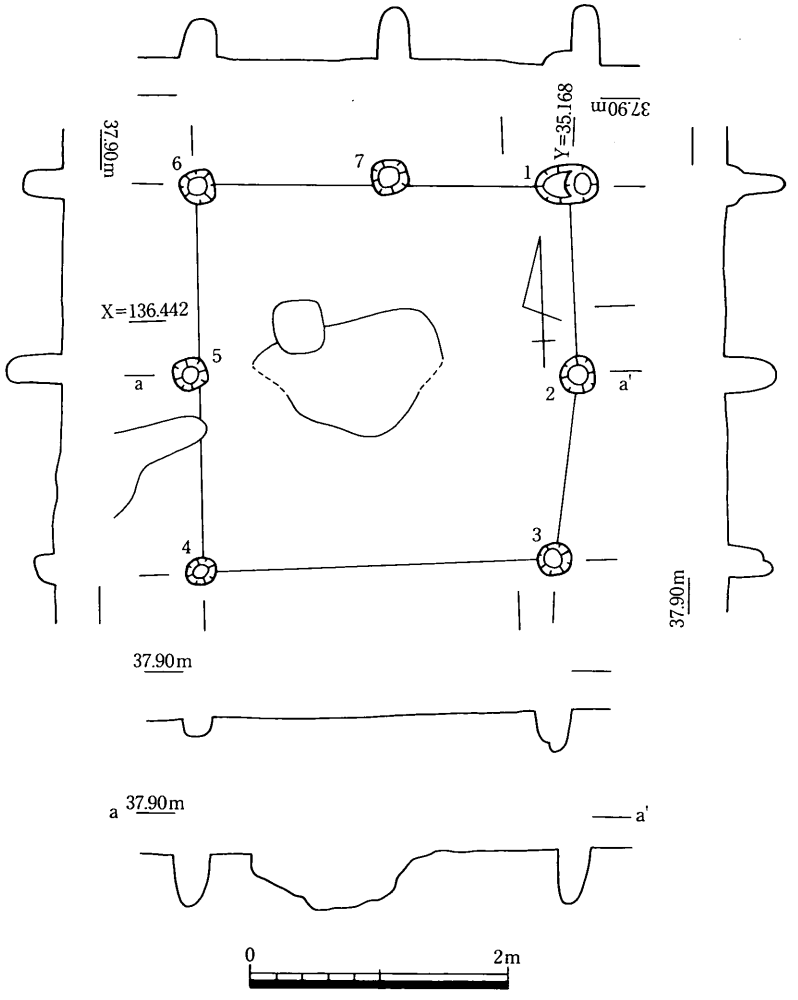
Ⅰ区SB06（第96図）

Ⅰ区D3グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間（3.15m）、梁間1間（1.56～1.95m）、面積は約5.5㎡、主軸方位はN10°Eである。柱間は桁行が1.50～1.65m、梁間が1.53～1.95m、柱穴は円形で直径24～36cm、深さは12～24cmである。柱穴埋土中からは出土遺物はなかった。

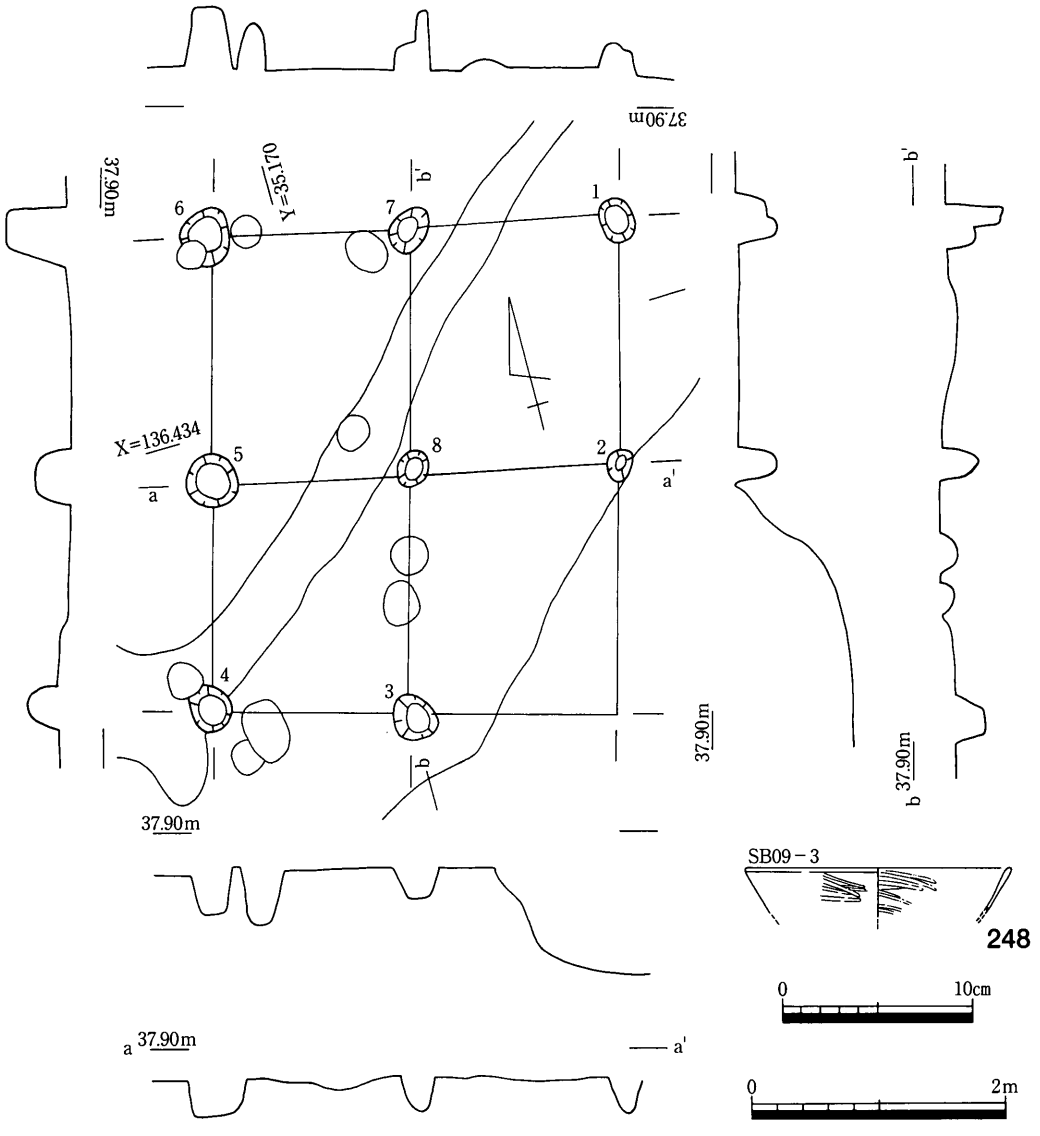
遺構の時期はSB02との方向の類似性から、古墳時代後期としておく。



第99図　Ⅰ区SB04平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第100図　Ⅰ区SB05平・断面図（1/60）



第101図　Ⅰ区SB09平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

Ⅰ区SB07（第97図）

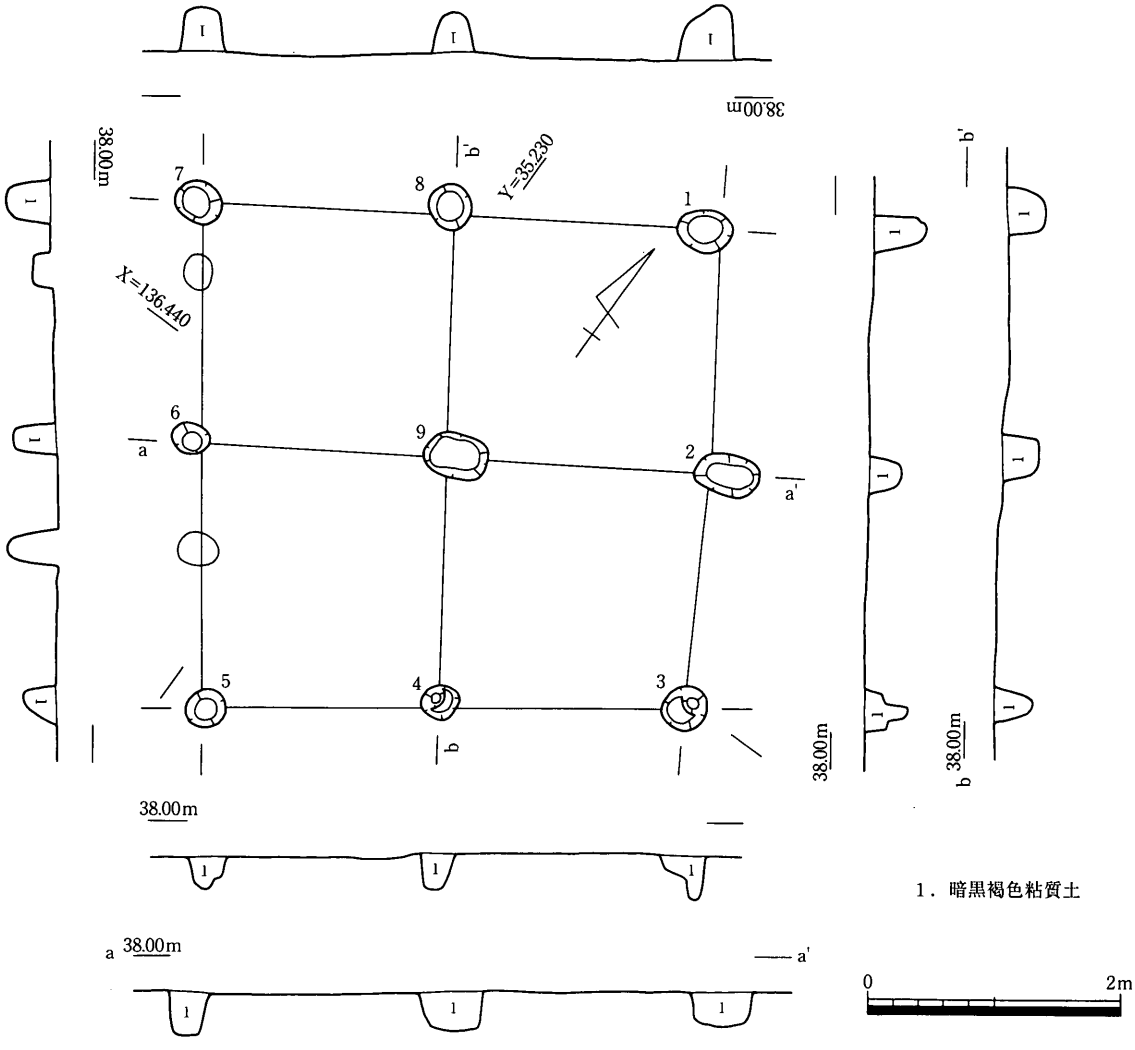
Ⅰ区E3杭付近で検出した掘立柱建物跡である。SB03と重複して検出したが、前後関係は明らかではない。桁行2間（4.14m）、梁間2間（3.81m）、面積は約15.8㎡の総柱建物である。主軸方位はN20°Eである。柱間は桁行が2.04～2.10m、梁間が1.80～1.95mで、柱穴は円形で、直径24～30cm、深さ30～57cmを測る。柱穴埋土中からは土器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、SB02をかなり意識した建物配置が認められることから、SB02と同じ、古墳時代後期頃としておく。

Ⅰ区SB08（第98図）

Ⅰ区E3グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行3間（4.14～4.20m）、梁間1間（1.56m）、面積は約6.5㎡、主軸方位はN16.5°Eである。西側柱穴列の南から2穴目は検出できなかった。柱間は桁行が1.26～1.68m、梁間が1.56m、柱穴は円形で直径15～18cm、深さ9～36cmである。柱穴埋土中からは遺物は出土しなかった。

遺構の時期はSB02・07と方向がほぼ同じであることから、古墳時代後期としておく。



第102図　Ⅱ区SB12平・断面図（1/60）

Ⅰ区SB04（第99図）

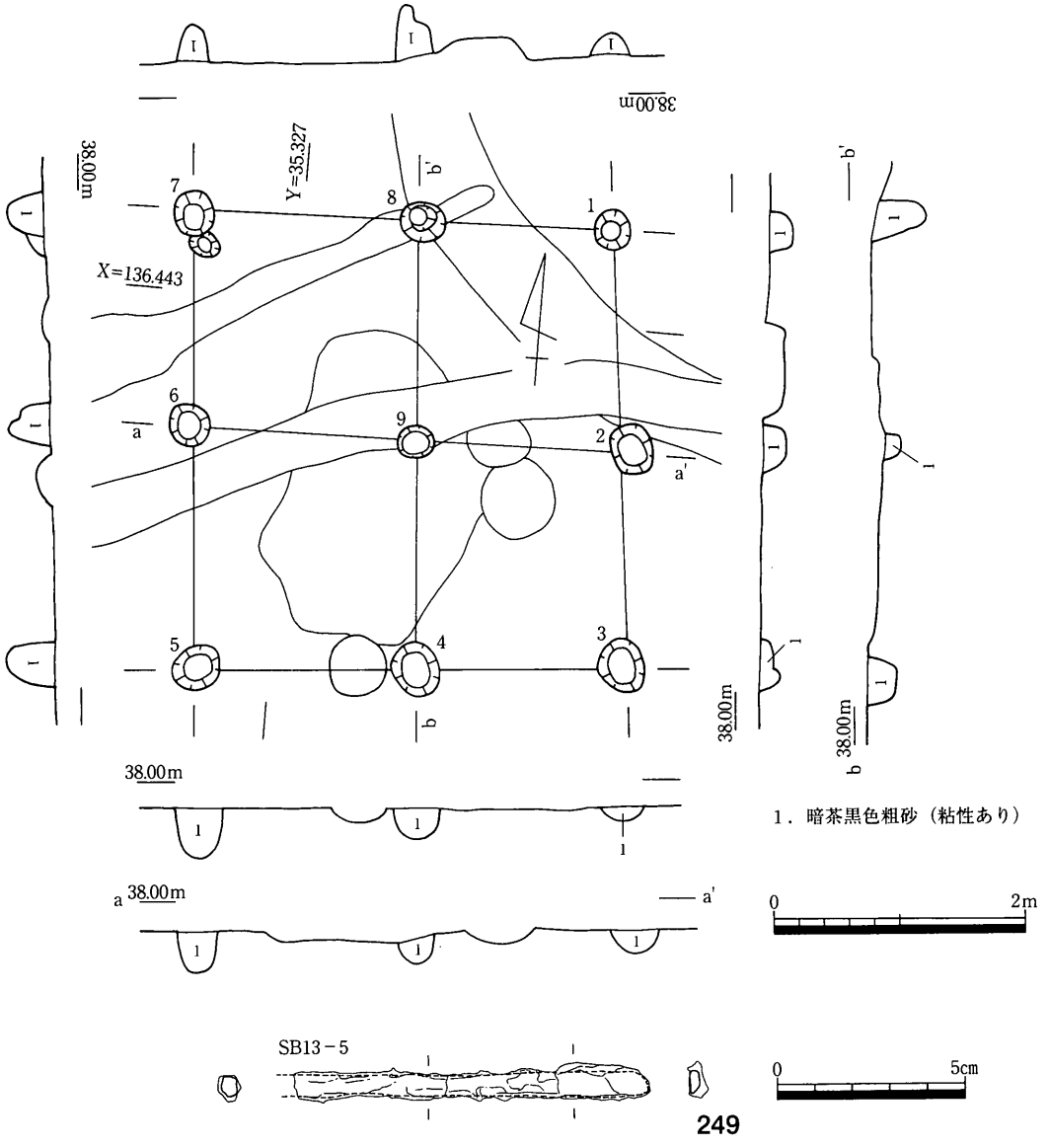
Ⅰ区D2グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間（3.84～3.96m）、梁間2間（3.12～3.30m）、面積は約12.3㎡の総柱建物である。主軸方位はN1°Eを指す。柱間は桁行が1.86～1.98m、梁間が1.53～1.68m、柱穴の形状は円形で、直径18～45cm、深さは7.5～44cmである。SB05を意識した建物配置をとる。柱穴埋土中からは土師質土器椀底部、土器小片が出土している。

247は土師質土器椀。底部小片。12世紀～13世紀代のものである。

遺構の時期は、柱穴の出土遺物からは12～13世紀代の年代が与えられるが、他の総柱建物との規模の類似性や、建物方位が条里型地割の方位ではなく、地形の制約を受けていることから、古墳時代後期としておく。

Ⅰ区SB05（第100図）

Ⅰ区D2グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間（2.94～3.09m）、梁間2間（2.76～2.94m）、面積は約8.8㎡であるが、南側の柱穴列の中央のピットを欠く。主軸方位はN1°Eである。柱間は桁行が1.50～1.59m、梁間は1.44～1.50mである。柱穴の形状は円形または隅丸方形、直径または1辺28.5～34.5cm、深さ15～45cmである。SB04と柱筋をほぼ揃える。SB05の中央付近からSK15を検出している。SK15は遺構の時期は不明であるが、SB05に付属する貯蔵穴となる可能性もある。柱穴埋土中からは須恵器小片等の土器小片が出



第103図　Ⅱ区SB13平・断面図（1/60）、出土遺物（1/2）

土した。

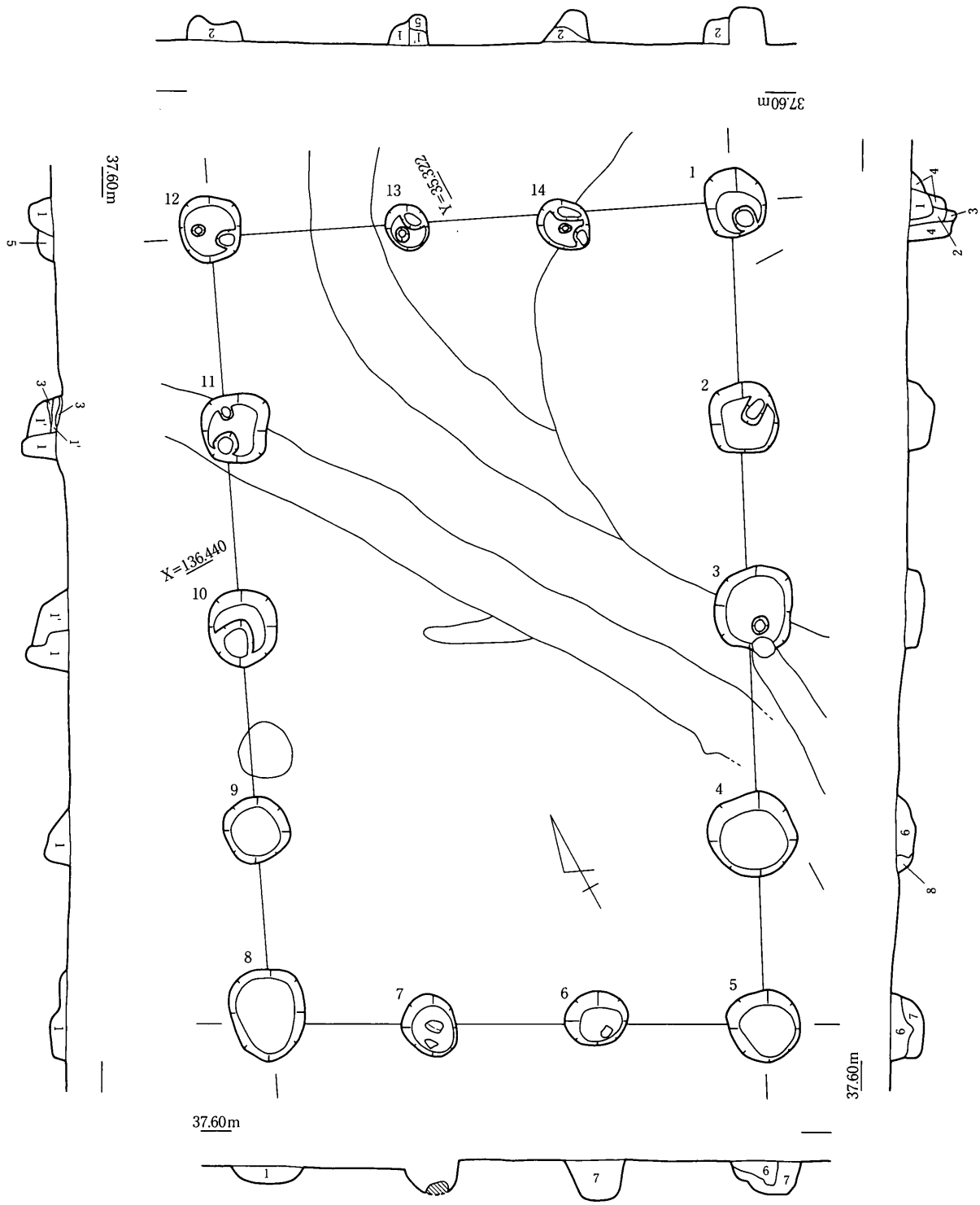
遺構の時期はSB04と方向が同じことや他の掘立柱建物跡との類似性から古墳時代後期としておく。

Ⅰ区SB09（第101図）

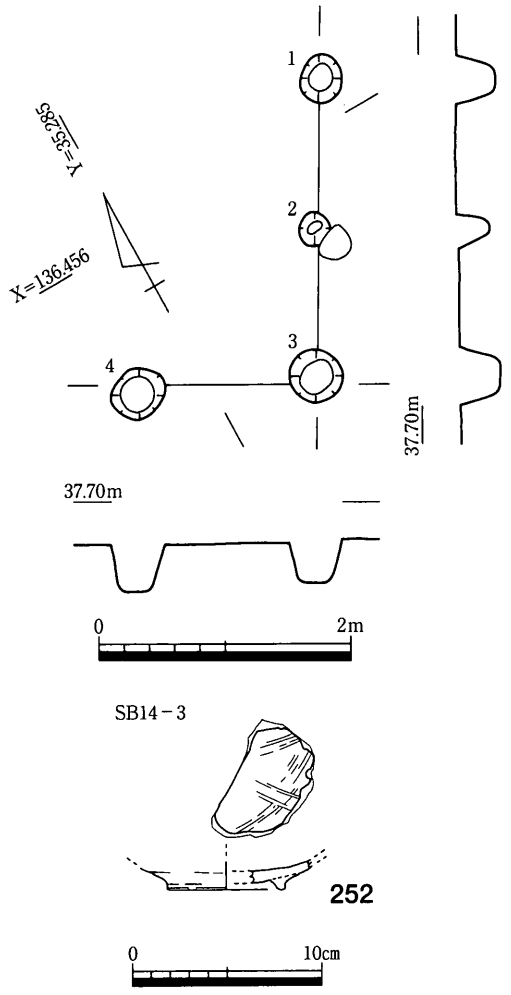
Ⅰ区E2グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間（3.69～3.75m）、梁間2間（3.21～3.27m）、面積は約12.1㎡の総柱建物である。南東隅の柱穴はSD01を掘り下げ時に消失した可能性が高い。主軸方位はN16°Eである。柱間は桁行が1.77～1.92m、梁間が1.59m、柱穴の形状は円形で、直径24～42cm、深さ24～45cmである。SB01・02・06・07・08とほぼ主軸方位を同じくする。柱穴埋土中からは須恵器甕片や黒色土器A椀が出土した。

248はSB09－3出土遺物。黒色土器A椀。内外面にヘラミガキを施す。

遺構の時期は、他の掘立柱建物跡との類似性から古墳時代後期としておく。



第104図　Ⅲ区SB15平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第105図　Ⅲ区SB14平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

Ⅱ区SB12（第102図）

Ⅱ区D・E5で検出した掘立柱建物跡である。桁行2間（3.87～4.14m）、梁間2間（3.75～3.99m）、面積は約15.5㎡の総柱建物である。主軸方位はN57.5°Eである。柱間は桁行が1.86～2.16m、梁間が1.86～2.10m、柱穴の形状は円形または楕円形で、直径27～39cm、または長軸51cm程度、短軸33cm程度、深さは27～42cm、埋土は暗黒褐色粘質土である。南西の柱穴列には、柱穴間に小柱穴が検出されているが、SB12と関連があるかどうかは不明である。柱穴埋土中からは黒色土器A椀等、土器小片が出土した。

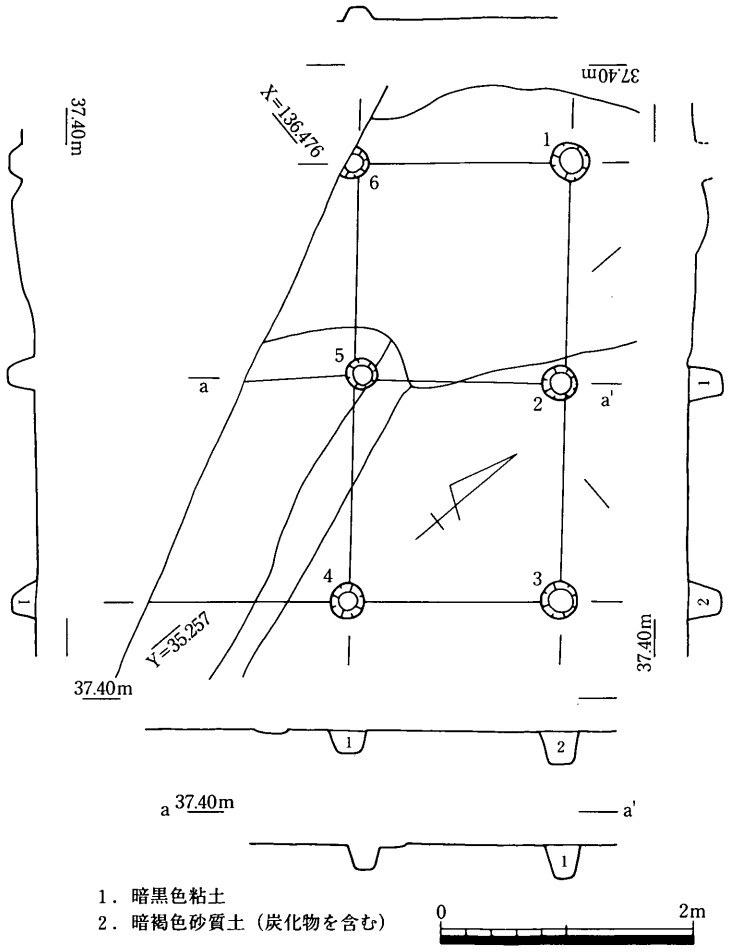
遺構の時期は、柱穴からは12～13世紀代の黒色土器Aが出土しているものの、埋土や建物の規模等から、古墳時代後期と考えられる。

Ⅱ区SB13（第103図）

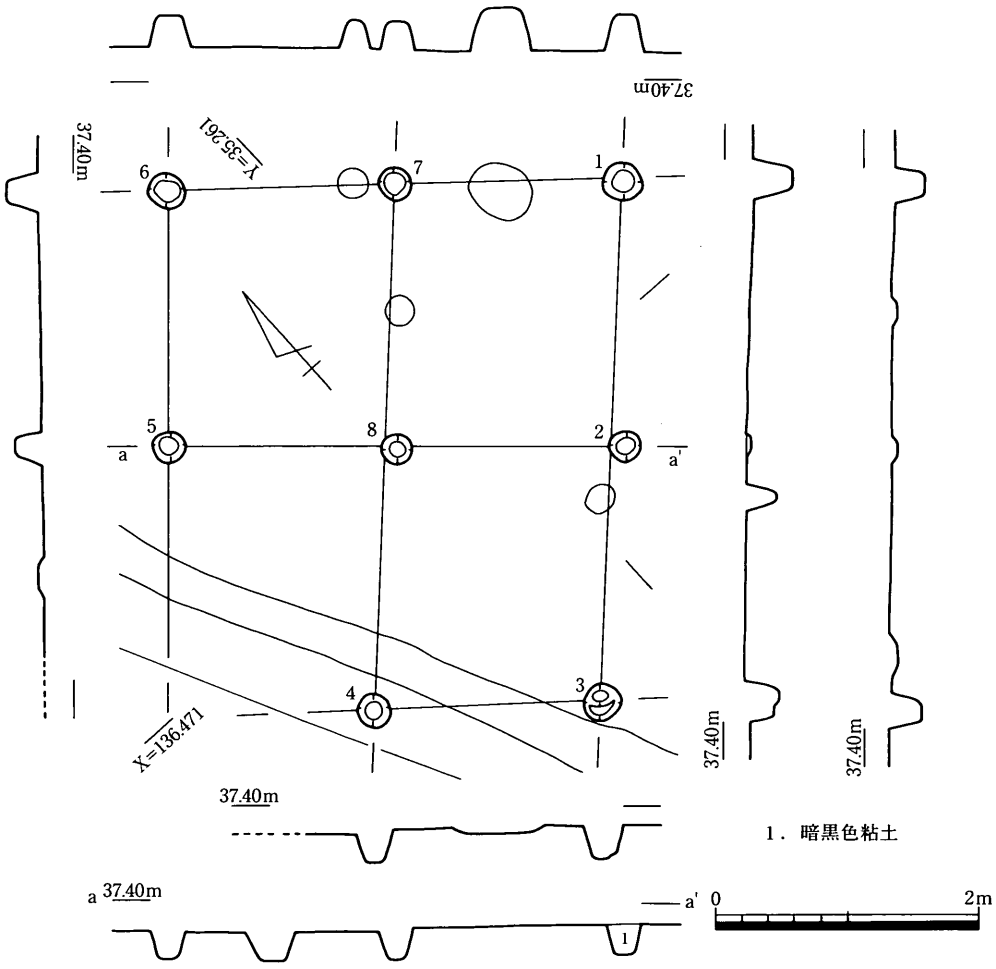
Ⅱ区E・D5グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間（3.45～3.60m）、梁間2間（3.36～3.45m）、面積は約12.0㎡の総柱建物で、主軸方位はN4°Wである。柱間は桁行が1.65～1.92m、梁間が1.56～1.80m、柱穴の形状は円形で、直径30～39cm、深さ12～39cm、埋土は暗茶黒色粗砂でやや粘性がある。柱穴埋土中からは土器小破片のほか、鉄器が出土した。

249は鉄器。棒状を呈するが、場所により断面形状が若干異なる。

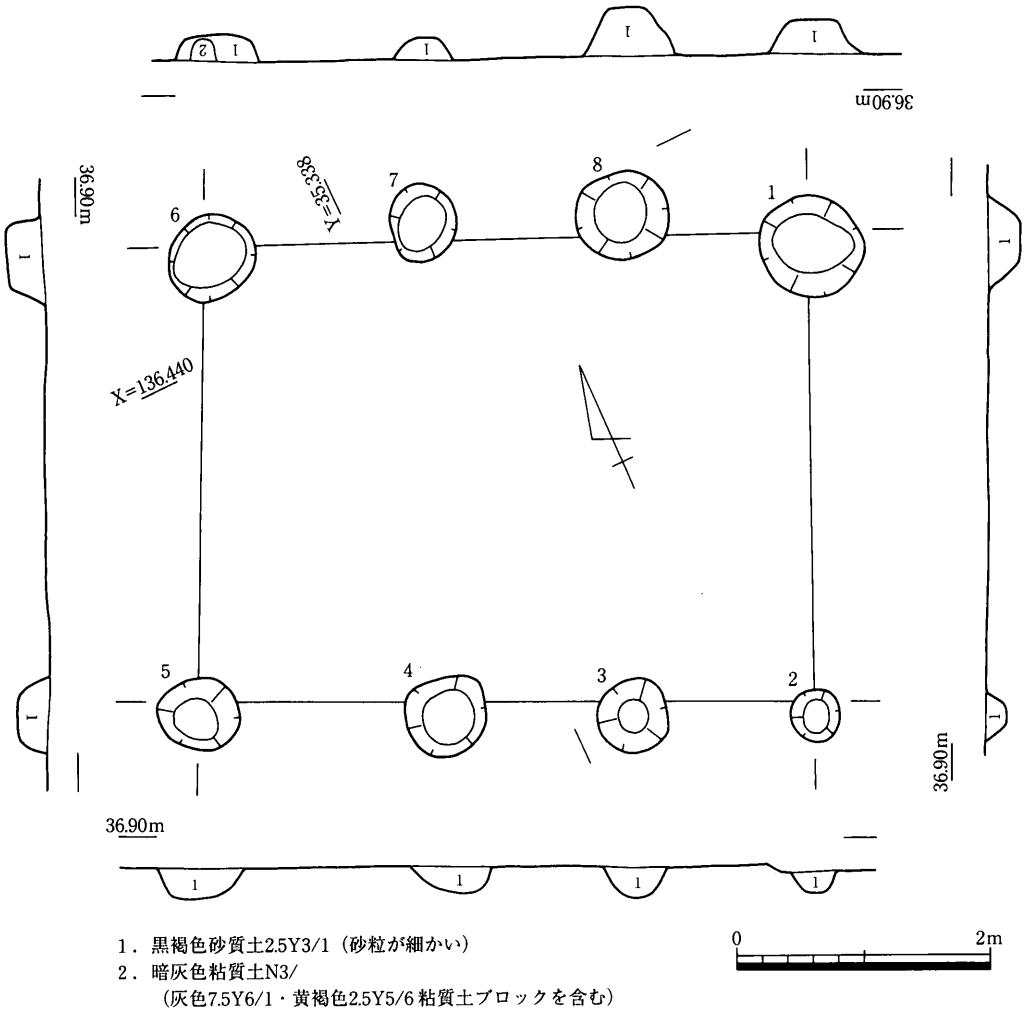
遺構の時期は柱穴の埋土により古墳時代後期と考えられる。



第106図　Ⅳ区SB16平・断面図（1/60）



第107図　Ⅳ区SB17平・断面図（1/60）



第108図　Ⅶ区SB22平・断面図（1/60）

Ⅲ区SB15（第104図）

Ⅲ区E10杭付近で検出した掘立柱建物跡である。SH05の上面で検出した。桁行4間（7.56～7.86m）、梁間3間（4.86～5.10m）、面積は約38.4㎡で、主軸方位はN26°Eである。柱間は桁行が1.83～2.04m、梁間が1.56～1.71m、柱穴の形状は円形または隅丸方形で、直径45～90cm、深さ15～42cm、埋土はおおむね暗黒色粘土・粘質土である。梁間柱穴列の中間のピットは他に比べてやや小さい。柱痕跡が検出できたピットでは、柱の直径は20cm前後に復元できる。SB15－7では根石が確認できた。柱穴埋土中からは弥生土器小片や須恵器甕片が出土した。弥生土器はSH05からの混入の可能性が高いと考えられる。

250・251はともに弥生土器壺。**251**は口縁端部に凹線を巡らせる。弥生時代中期後半。

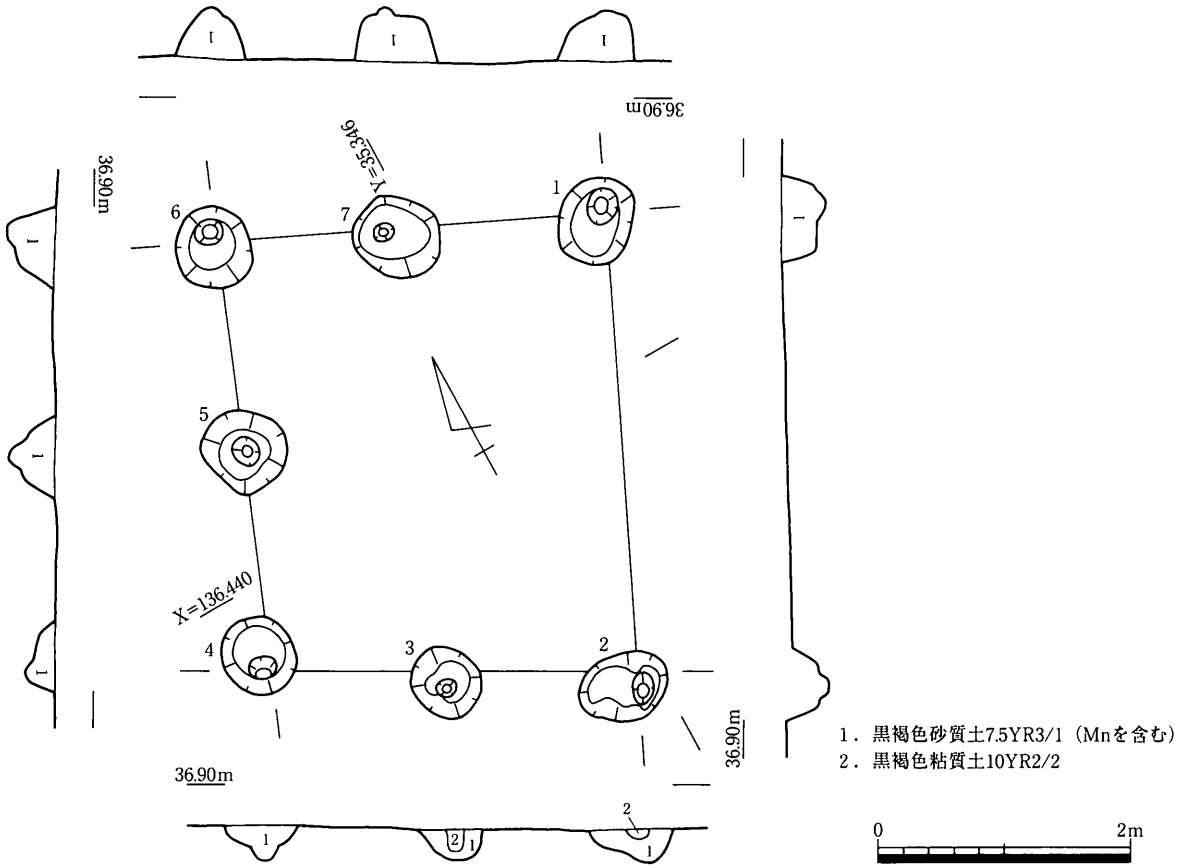
遺構の時期は埋土により古墳時代後期としておく。

Ⅲ区SB14（第105図）

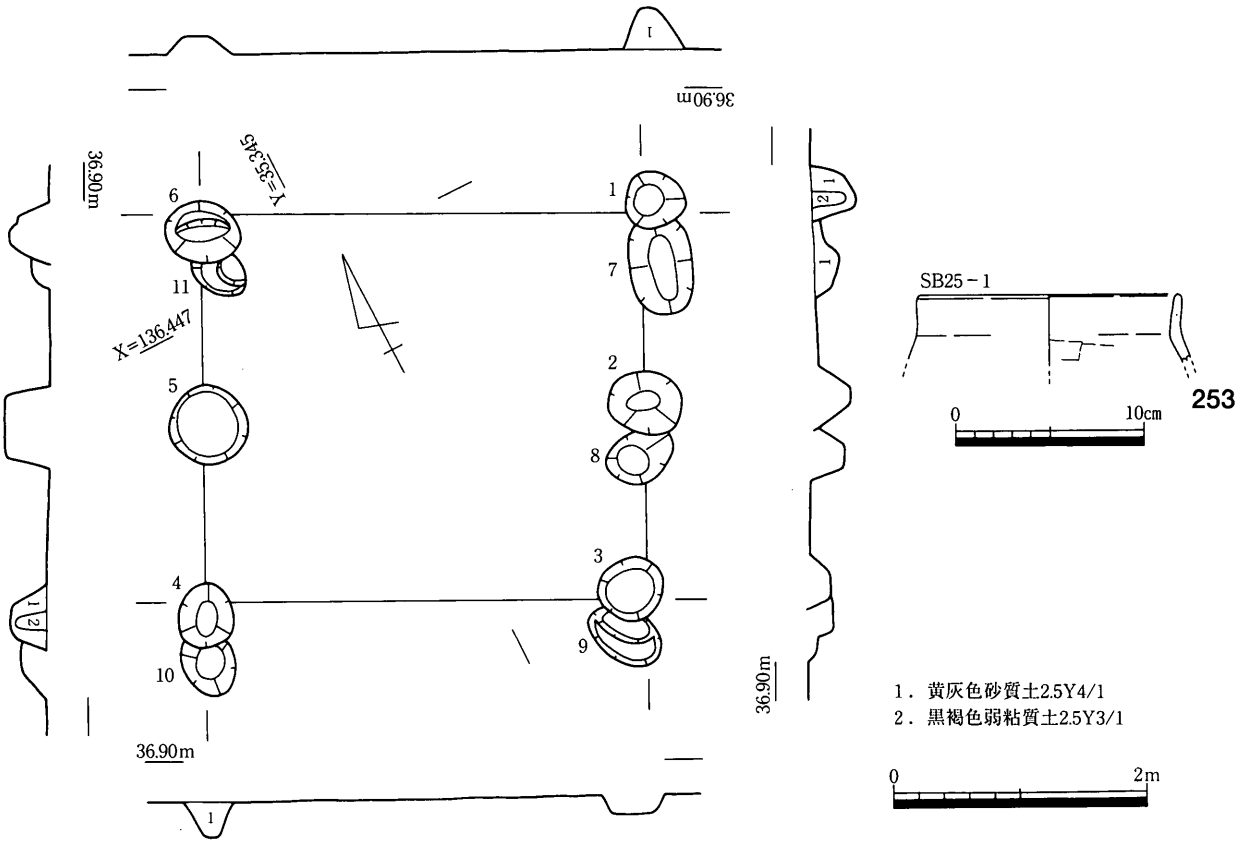
Ⅲ区D8グリットで検出した掘立柱建物跡と考えられる。北西側と北東側の柱列を欠いているが、他の柱列が直角に配列していること、周囲に他にあまり柱穴がないことから、掘立柱建物跡とした。桁行2間（2.28m）梁間1間（1.40m）で、主軸方位はN31°Eである。柱穴の形状は円形で、直径27～42cm、深さ26～33cmである。柱穴埋土中からは土師質土器椀小片等が出土している。

252は土師質土器椀。

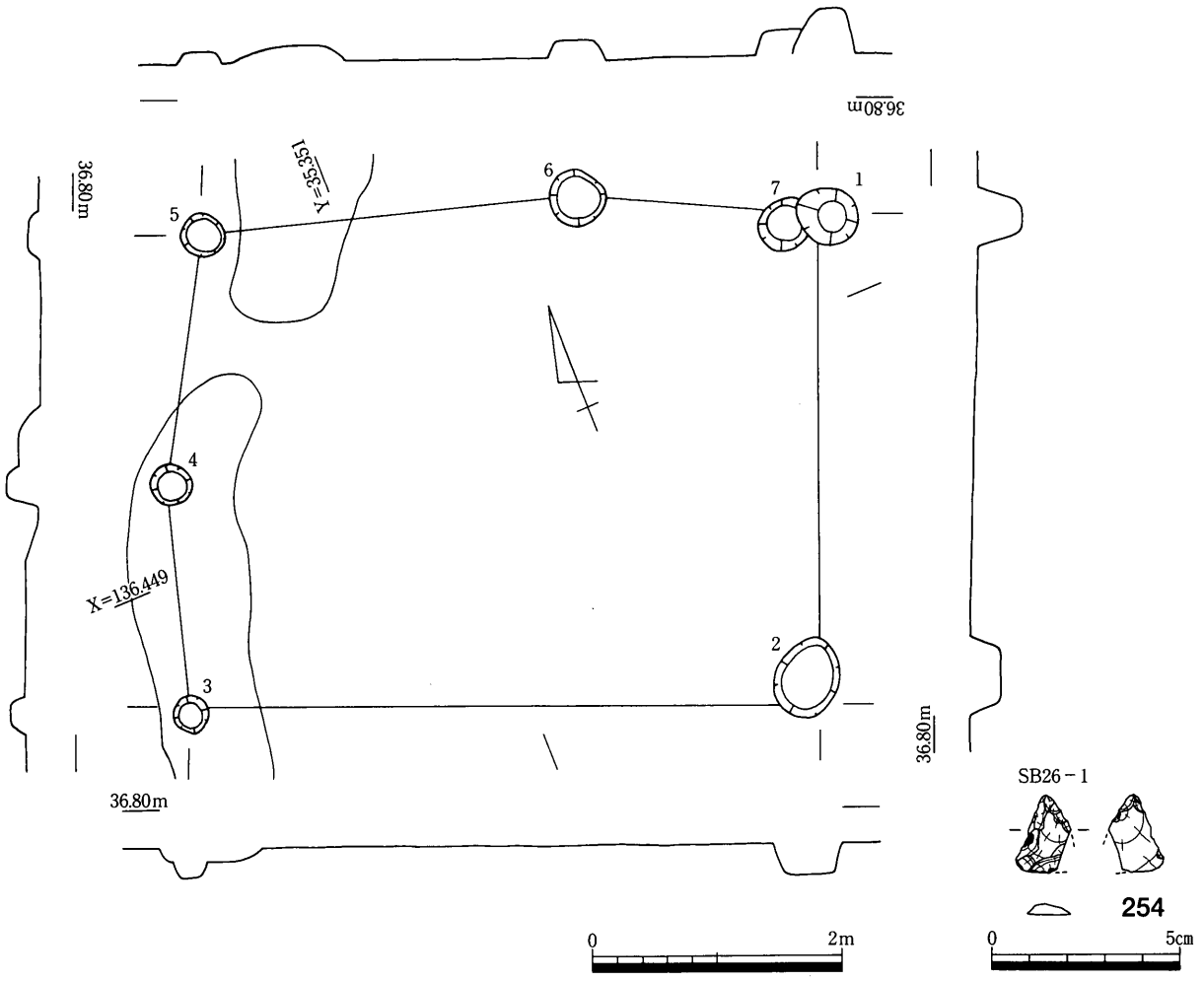
遺構の時期は不明であるが、他の掘立柱建物跡から類推して、古墳時代後期頃としておく。



第109図　Ⅶ区SB23平・断面図（1/60）



第110図　Ⅶ区SB25平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第111図　Ⅶ区SB26平・断面図（1/60）、出土遺物（1/2）

Ⅳ区SB16（第106図）

Ⅳ区C6グリットで検出した掘立柱建物跡である。梁間は1間分検出しているが、他の掘立柱建物跡から類推すれば、桁行2間（3.51m）、梁間2間（3.39m以上）と考えられ、主軸方位はN48°Wである。柱間は桁行が1.71～1.80m、梁間が1.68m、柱穴の形状は円形で、直径24～33cm、深さ12～27cm、埋土はおおむね暗黒色粘土である。埋土中には出土遺物はなかった。SB17とは柱筋が揃う。

遺構の時期は他の総柱建物と規模・形状が類似することから、古墳時代後期頃と考えられる。

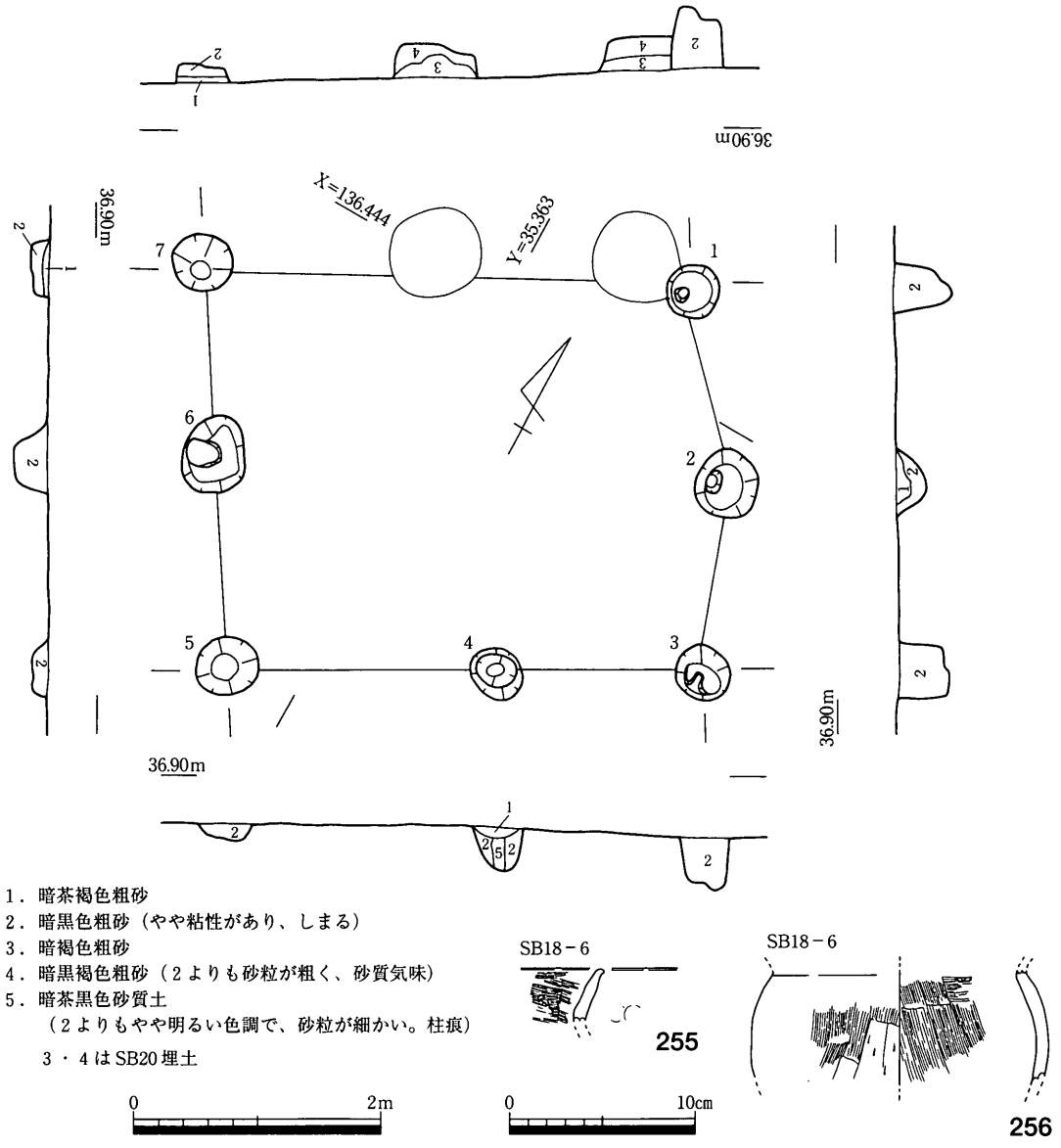
Ⅳ区SB17（第107図）

Ⅳ区C6グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間（4.11m）、梁間2間（3.57m）、面積は14.7㎡の総柱建物で、主軸方位はN44.5°Eである。柱間は桁行で2.01～2.10m、梁間で1.77～1.80m、柱穴の形状は円形で、直径24～30cm、深さ24～33cm、埋土は暗黒色粘土である。SB16とは柱筋が揃う。柱穴埋土中からは土器小片が出土しただけであった。

遺構の時期はSB16と同じ古墳時代後期頃と考えられる。

Ⅶ区SB22（第108図）

Ⅶ区D10・11グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行3間（4.95m）、梁間1間（3.60m）で、面積は約17.8㎡、主軸方位はN64°Wである。柱間は桁行で1.44～2.04mとややばらつきがあるが、おおむね1.50m程



第112図　Ⅴ区SB18平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

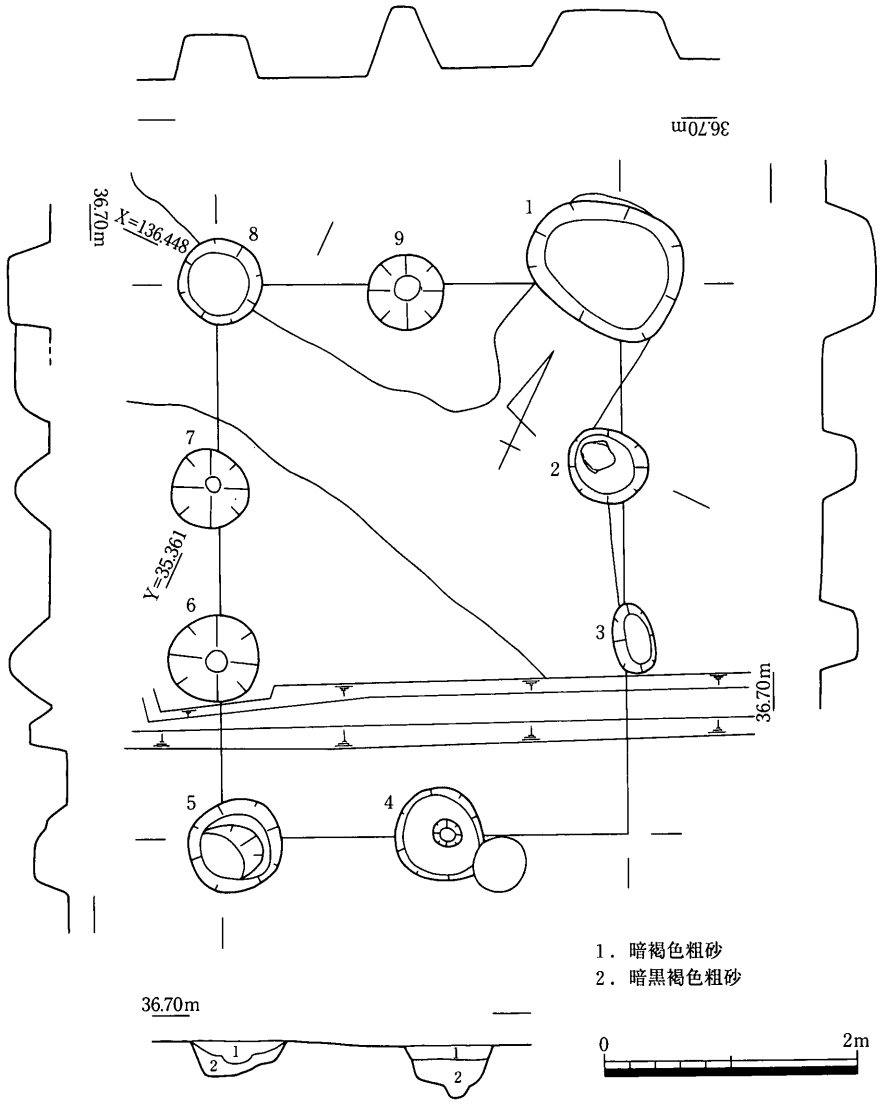
度である。柱穴の形状は円形で、直径39～76.5cm、深さ18～36cm、埋土は黒褐色砂質土である。SB23・25・26、SH07と方位を揃え、SB23とは柱筋も揃う。埋土中からは出土遺物はほとんどなかった。

遺構の時期は埋土から古墳時代後期頃と考えられる。

Ⅶ区SB23（第109図）

Ⅶ区D・E11グリットで検出した掘立柱建物跡である。SB22と柱筋を揃えて検出した。また、SB25・26、SH07と方位をほぼ同じにする。桁行2間（3.39～3.84m）、梁間2間（3.00～3.12m）で、面積は約10.6㎡、主軸方位はN28°Eである。東側柱穴列の中央部のピットは検出できなかった。柱間は桁行が1.68～1.74m、梁間が1.38～1.44m、柱穴の形状は楕円形で、長軸75cm程度、短軸60cm程度、深さは18～39cmである。埋土はおおむね黒褐色砂質土であった。柱穴の底からは直径20cm程度の柱痕跡が検出できた。柱穴埋土中からは土器小片やサヌカイト小片が出土したのみであった。

遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。



第113図　Ⅶ区SB20平・断面図（1/60）

Ⅶ区 SB25（第110図）

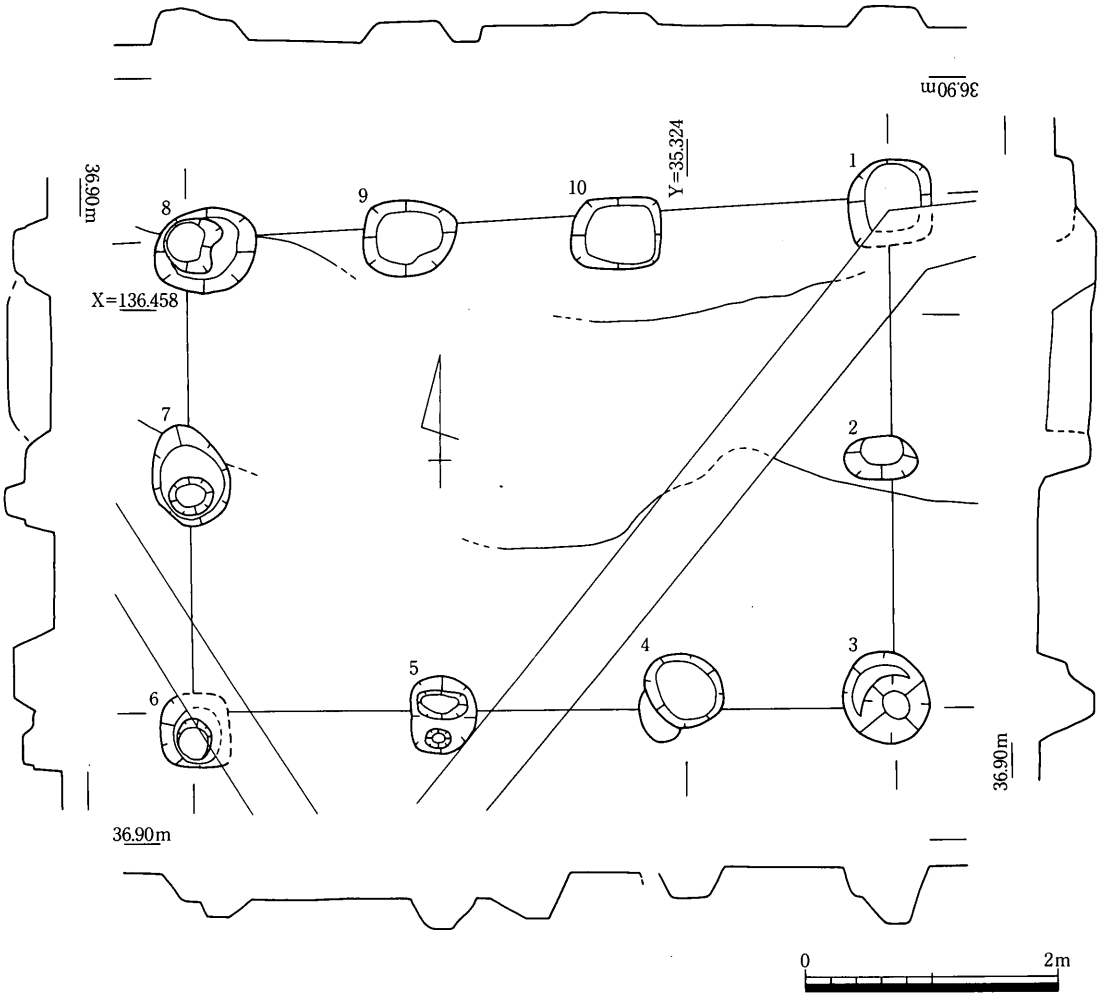
Ⅶ区D11グリットで検出した掘立柱建物跡である。SB22・23・26、SH07と方位を同じにする。西側柱穴列の中央のピット以外は全て、南北に前後関係を持つピットを検出しており、同位置での建て替えが想定できる。桁行2間（3.06m）、梁間1間（3.51m）で、面積は約10.7㎡、主軸方位はN26°Eである。柱間は桁行が1.44～1.65m、梁間は3.51m、柱穴は円形または楕円形で、おおむね長軸60～72cm、短軸39～48cm、深さは18～36cm、埋土は柱掘り方が黄灰色砂質土、柱痕跡部分が黒褐色弱粘質土である。柱穴埋土中から土師器甕小片等が出土した。

253は土師器甕小片。

遺構の時期は出土遺物や他の掘立柱建物跡との類似性により、古墳時代後期と考えられる。

Ⅶ区 SB26（第111図）

Ⅶ区D11グリットで検出した掘立柱建物跡である。SB25と柱筋をほぼ揃える。主軸方位はN22°Eである。桁行2間（5.04～5.10m）、梁間2間（3.75～3.81m）、面積は約19.2㎡である。東側・南側柱穴列では中央のピットを欠き、他の列でも中央のピットはやや外側へ偏る。柱間は桁行で2.04～3.06mとややばらつきがある。



第114図　Ⅶ区SB24平・断面図（1/60）

梁間は1.83～1.98m、柱穴はほぼ円形で、直径30～54cm、深さ10.5～36cmである。柱穴埋土中からは土器小片のほか石鏃が出土した。

254は石鏃。サヌカイト製。平基式。一部欠損。片面はほとんど加工しない。

遺構の時期はSB22・23・25と同じ、古墳時代後期と考えられる。

Ⅴ区SB18（第112図）

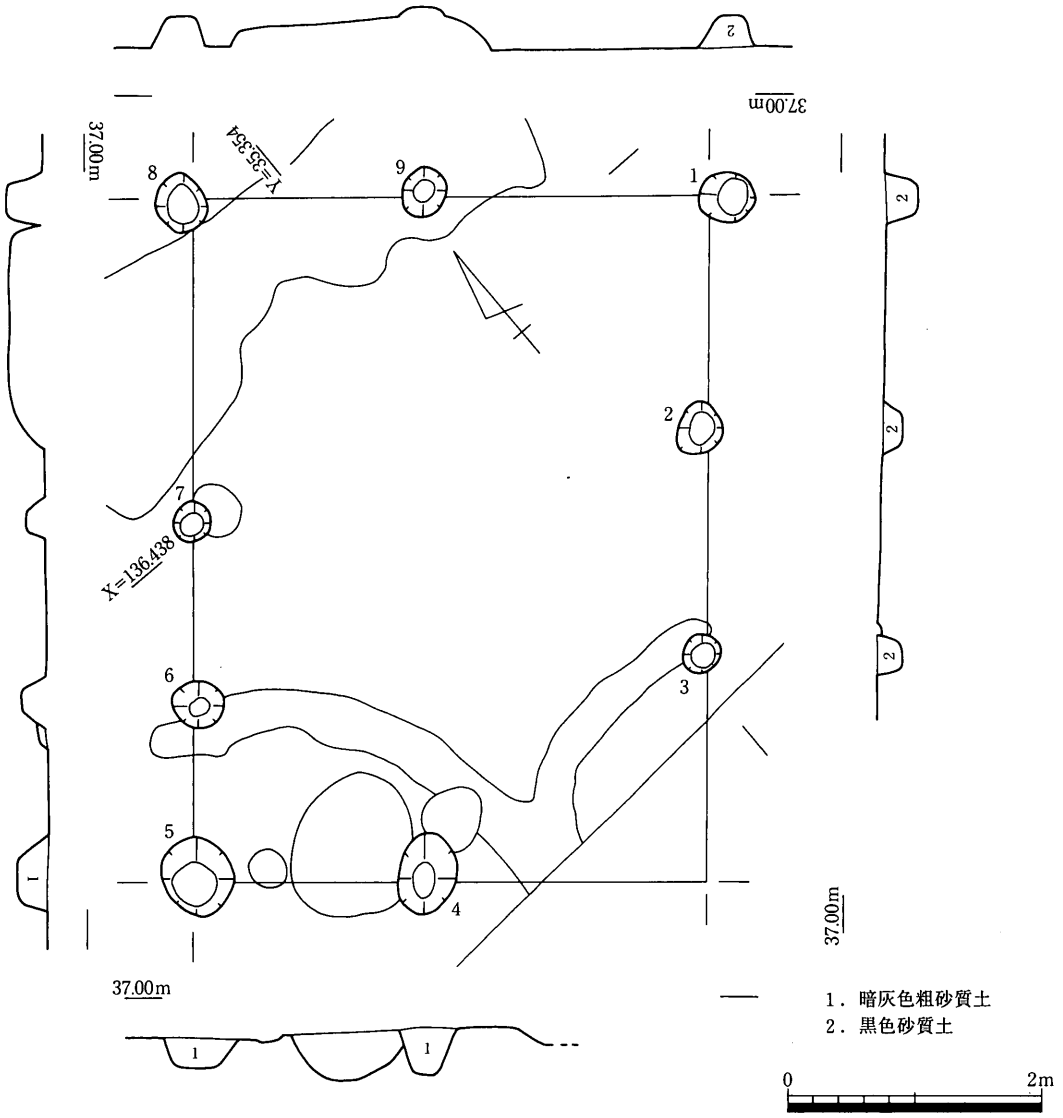
Ⅴ区D12グリットで検出した掘立柱建物跡である。SB20と重複し、SB20より新しい。桁行2間（3.84m）、梁間2間（3.15～3.21m）、面積は約12.3㎡である。主軸方位はN30°Wである。北側柱穴列は中央のピットを欠く。柱間は桁行が1.68～2.20m、梁間は1.50～1.71m、柱穴はほぼ円形で、おおむね直径45～60cm、深さ15～51cm、埋土は暗黒色粗砂、暗茶褐色粗砂等である。埋土中からは土師器甕片のほか、土器・サヌカイト小片が出土した。

255・256は土師器甕。同一個体の可能性もある。内外面ともハケを使い、体部内面はその後ヘラケズリする。

遺構の時期は出土遺物と掘立柱建物跡の方位等により、古墳時代後期である。

Ⅴ・Ⅶ区SB20（第113図）

Ⅴ・Ⅶ区D12グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行3間（4.38m）、梁間2間（3.21m）、面積は約14.1㎡である。東南隅の柱穴を欠く。主軸方位はN25°Wである。柱間は桁行が1.29～1.56m、梁間が1.50～



第115図　V区SB27平・断面図（1/60）

1.80m、柱穴の形状は円形で、おおむね直径60～75cm、深さ27～54cm、埋土は暗褐色粗砂、暗黒褐色粗砂である。埋土中からは土器・サヌカイト小片が出土しただけである。

遺構の時期はSB18とあまりかわらない古墳時代後期頃と考えられる。

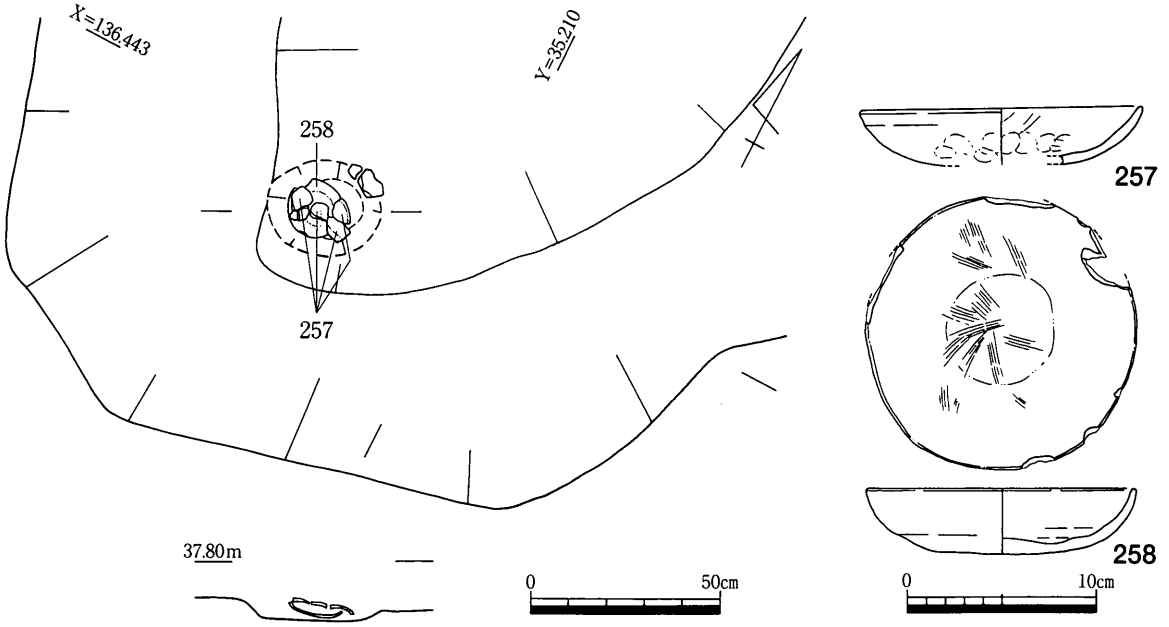
Ⅶ区 SB24（第114図）

Ⅶ区D10グリットで検出した掘立柱建物跡である。周溝墓32の上面で検出した。桁行3間（5.61～5.70m）、梁間2間（3.96m）、面積は22.4㎡で、主軸方位はN2°Wである。柱間は桁行が1.62～2.25m、梁間が1.95～2.01m、柱穴は円形、楕円形、隅丸方形で、長軸・長径は60～81cm、短軸・短径は51～60cm、深さ15～45cmである。SB24－6・7では直径30cm程度の柱痕跡を検出した。柱穴埋土中からは土器小片が出土した。

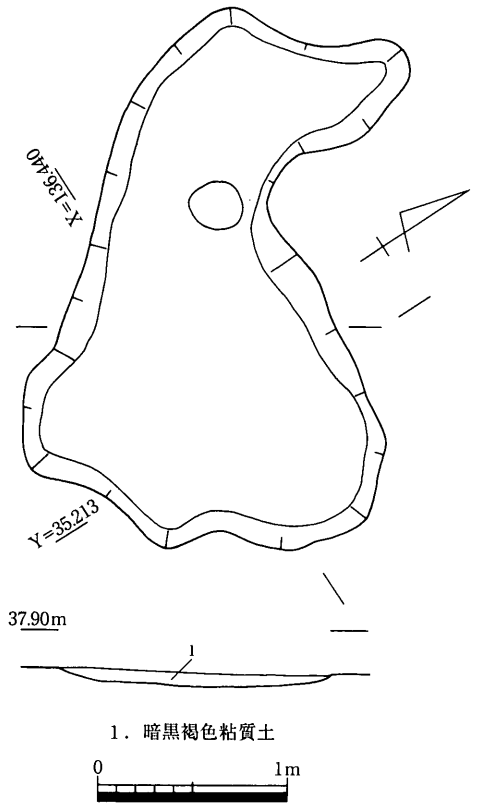
遺構の時期は古墳時代後期としておく。

V区 SB27（第115図）

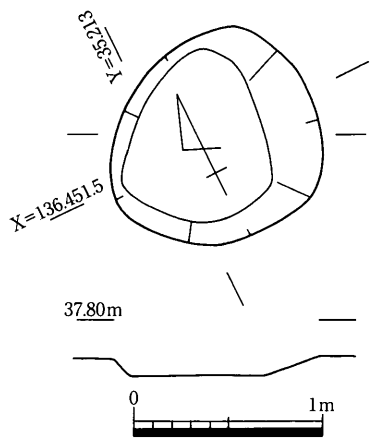
V区E11グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行3間（5.34m）、梁間2間（4.29m）、面積は約22.9㎡で、主軸方位はN40°Wである。柱間は桁行1.41～2.52m、梁間は1.80～2.43m、柱穴の形状は円形で、直径



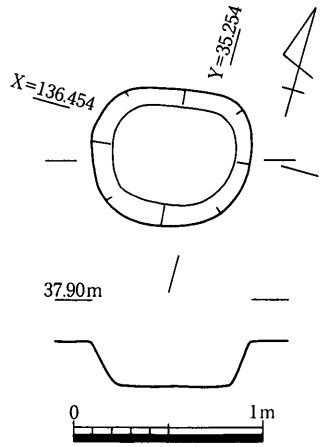
第116図　Ⅱ区SK104遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）



第117図　Ⅱ区SK105平・断面図（1/40）



第118図　Ⅱ区SK20
平・断面図（1/40）



第119図　Ⅱ区SK32
平・断面図（1/40）

30～60cm、深さ16.5～37.5cm、埋土は暗灰色粗砂質土、黒色砂質土である。SB27－4からは古墳時代後期と考えられる須恵器杯身または蓋が出土した。

遺構の時期は出土遺物や埋土により古墳時代後期頃と考えられる。

Ⅱ区SK104（第116図）

Ⅱ区D4グリットで検出した土坑である。中世の遺構であるSD21を掘り下げた後に検出したので、遺構の規模・形状は不明瞭であるが、おおむね直径25～30cm程度の円形または楕円形の範囲で、深さはSD21の底面からさらに5cm程度深い。土坑内からは2個の土師器杯が合わせのような状態で検出された。杯の中から出土した遺物はなかった。

257・258は土師器杯。**258**は内面に放射状のハケ目が観察できる。

遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

Ⅱ区SK105（第117図）

Ⅱ区D・E4で検出した不定形の土坑である。長軸2.80m、短軸0.88～1.94m、深さ7cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は暗黒褐色粘質土である。埋土中からの出土遺物はなかったが、埋土により古墳時代後期と考えられる。

Ⅱ区SK20（第118図）

Ⅱ区D4グリットで検出した土坑である。SD20の上面で検出した。楕円形で直径1.12～1.16m、深さ10cmで、断面形状は浅い皿状である。埋土中からは須恵器高杯が出土した。

出土遺物からは遺構の時期は古墳時代後期と考えられるが、土坑の位置からSD20の一部の可能性もある。

Ⅱ区SK32（第119図）

Ⅱ区D6グリットで検出した土坑である。隅丸方形で、長辺84cm、短辺73cm、深さは23cm、断面形状は逆台形である。埋土中からは須恵器杯身または杯蓋が出土した。

遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

Ⅱ区SK34（第120図）

Ⅱ区E5グリットで検出した土坑である。楕円形で長軸2.73m、短軸1.72m、深さ1.03m、断面形状は上半部はなだらかに落ち、下半部は急激に落ちる。埋土はおもに黒色粘土層である。埋土の中位には炭化物の混入が見られる。土坑の底から11cm程度の個所で、土師器甕が割れた状態で集中して出土した。

259～261は土師器。**259**は杯。外面は横方向に丁寧にヘラミガキする。**260・261**は甕。**261**は外面はハケ、内面は指押さえ痕が残る。

遺構の時期は6世紀代と考えられる。

Ⅱ区SK40（第121図）

Ⅱ区D5グリットで検出した土坑である。楕円形で、長軸1.04m、短軸0.91m、深さ42cm、断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗茶黒色粘質土、下層が暗黒褐色粘土で、下層の上位付近にはベースブロックや土師器甕が割れた状態で出土した。

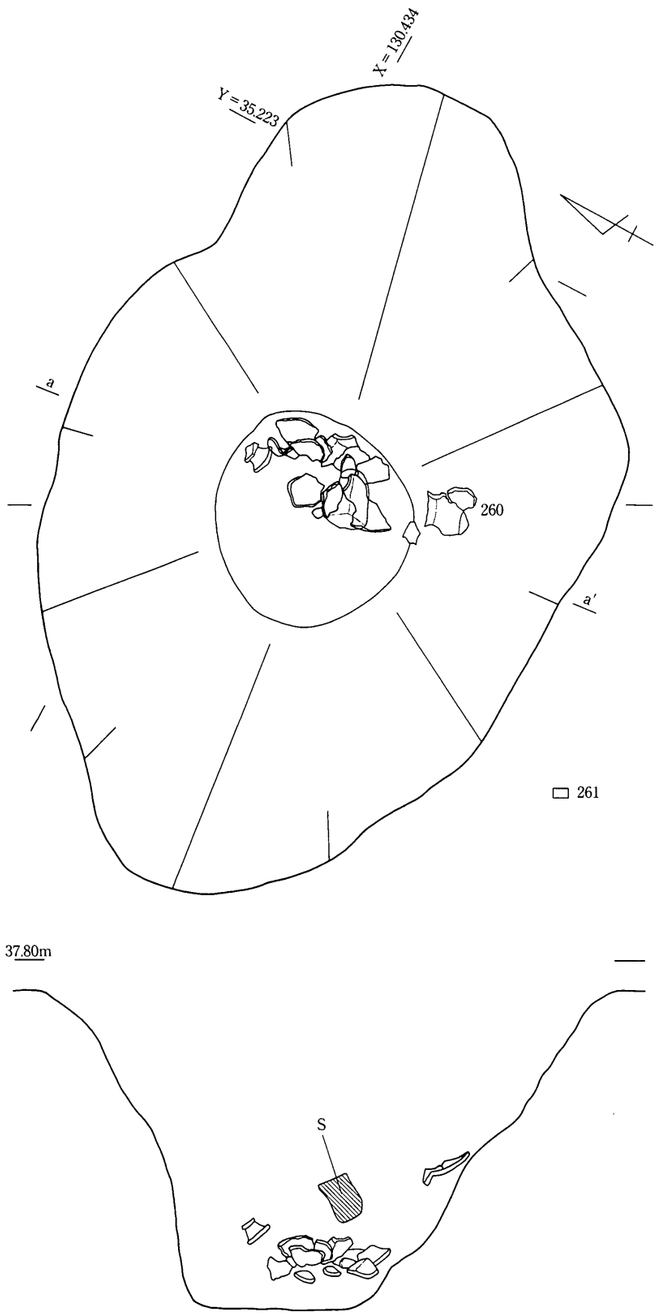
262・263は土師器甕。同一個体の可能性が高い。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。

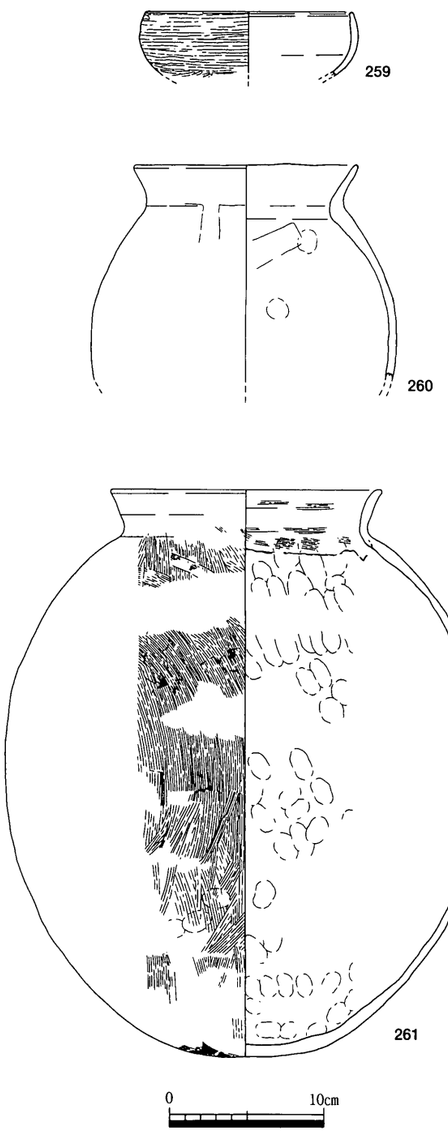
遺構の時期は出土した土師器甕により古墳時代後期頃と考えられる。

Ⅲ区SK48（第122図）

Ⅲ区D7・8グリットで検出した土坑である。周溝墓4の上面で検出した。楕円形を呈し、長軸3.90m、短軸1.48m、深さ1.26mで、断面は逆台形を呈する。埋土中からは須恵器高杯片が出土した。

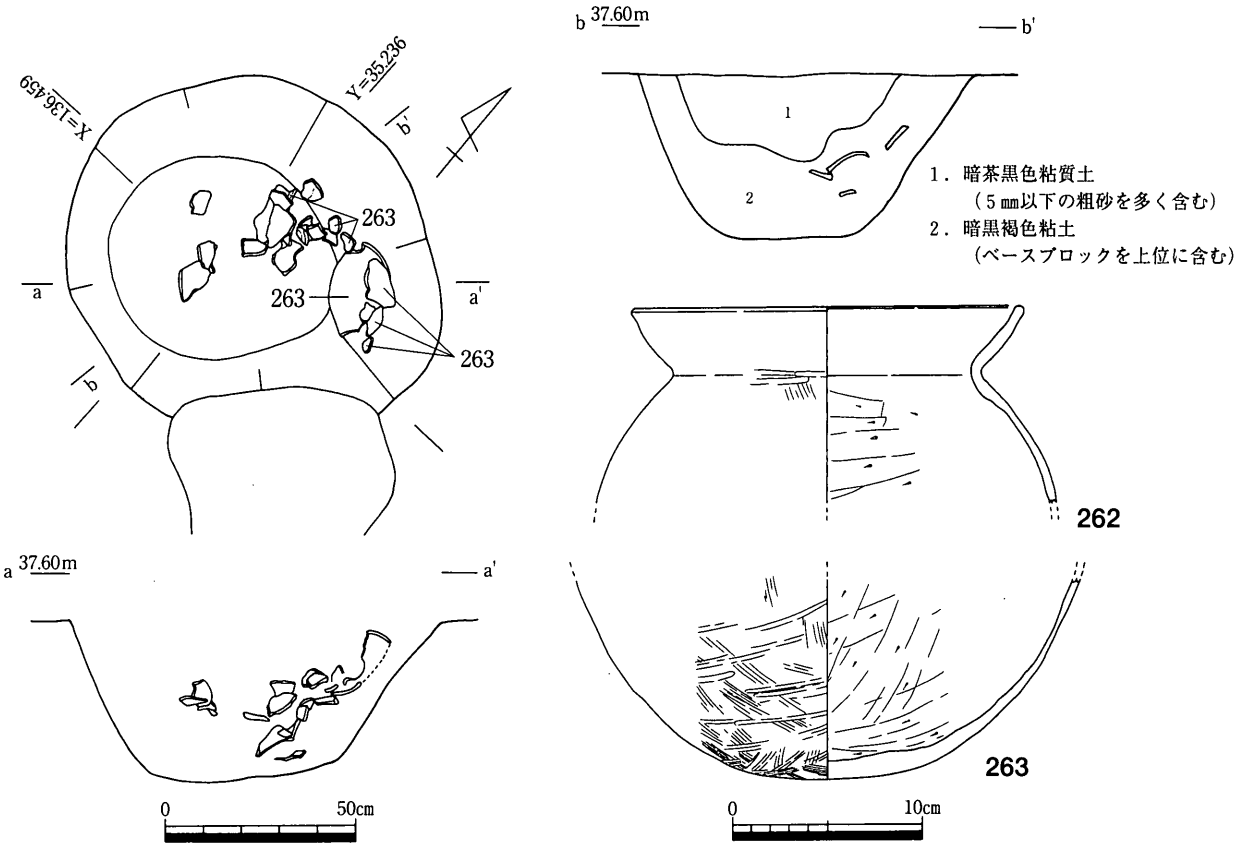
遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。



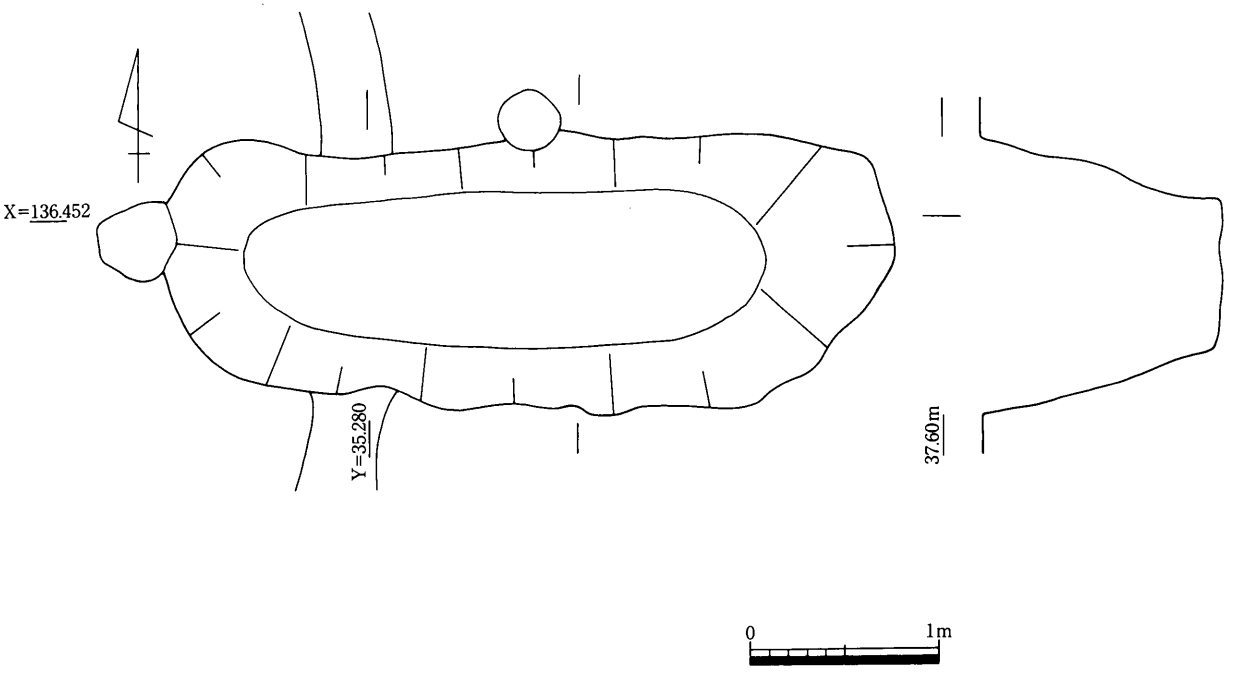


1．黒色粘土
2．黒色灰色混粘土（炭化物混入。ブロック状堆積物を含む）
3．黒色茶褐色混粘土
4．黒色粘土

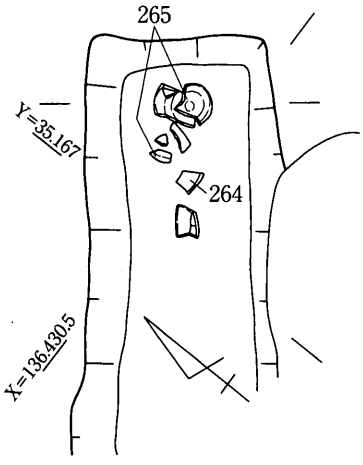
第120図　Ⅱ区SK34遺物出土状況平・立・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

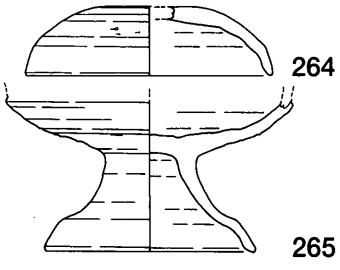


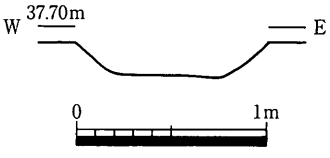
第121図　Ⅱ区SK40遺物出土状況平・立・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）



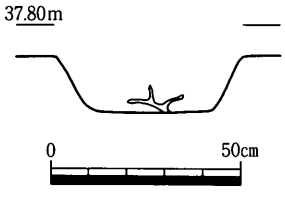
第122図　Ⅲ区SK48平・断面図（1/40）

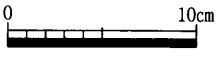




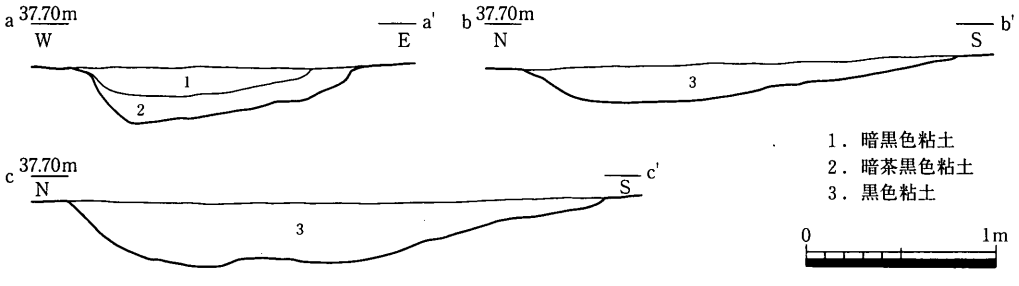


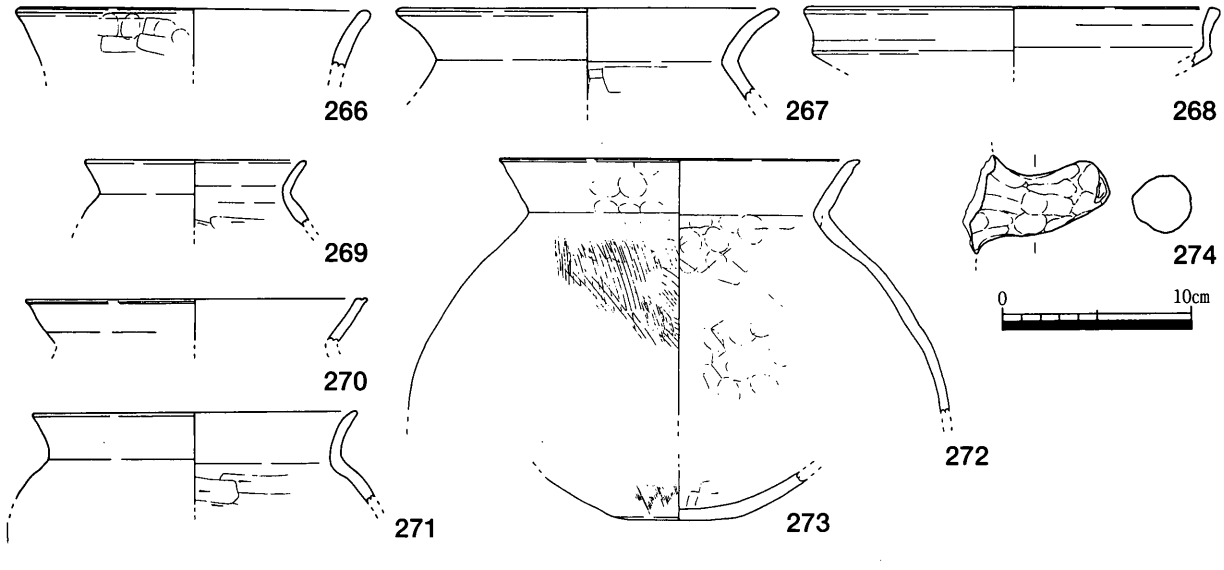
第124図
Ⅰ区SD06断面図（1/40）



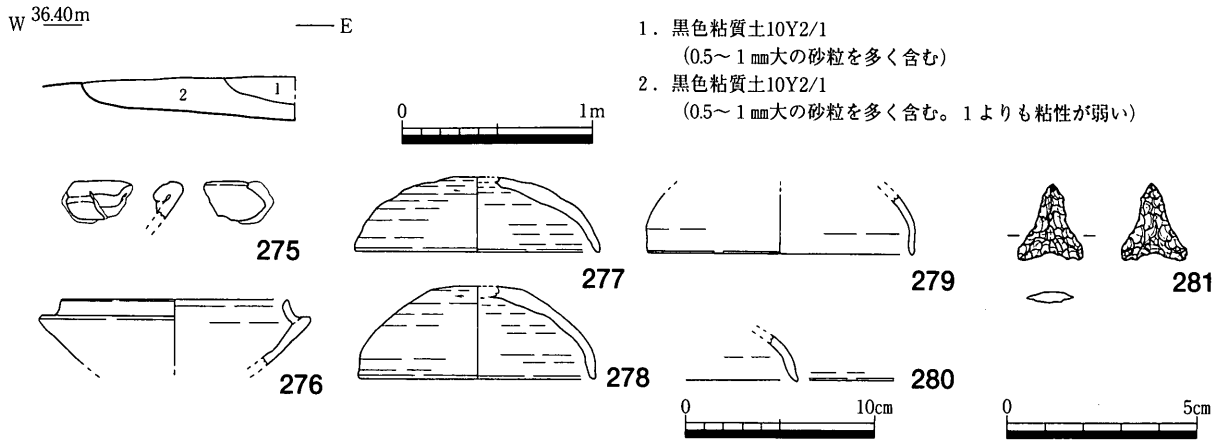


第123図　Ⅰ区SD03平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

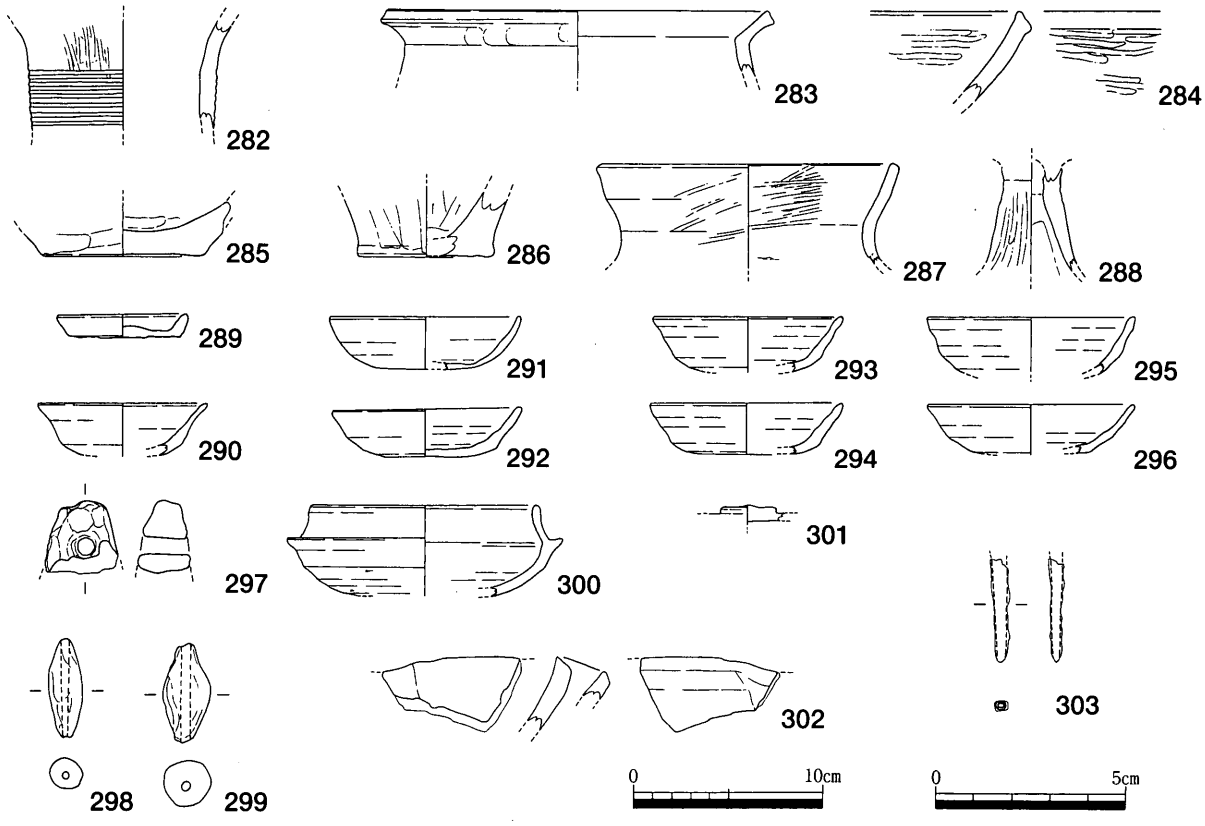




第125図　Ⅱ区SD40断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第126図　Ⅶ区SD83断面図（1/40）、出土遺物（1/2、1/4）



第127図　Ⅱ区古墳時代包含層出土遺物（1/2、1/4）

Ⅰ区SD03（第123図）

Ⅰ区E2グリットで検出した溝状遺構である。溝の南東肩はSD02により壊される。検出長は約3m、幅51cm、深さ15cm、主軸方位はN45.5°Wである。溝の北東端では須恵器が集中して出土した。

264・265は須恵器。**264**は蓋。上半部はヘラケズリする。**265**は高杯脚部。杯部底部は回転ヘラケズリする。

遺構の時期は6世紀後半～7世紀前半と考えられる。

Ⅰ区SD06（第124図）

Ⅰ区D2グリットで検出した溝状遺構である。検出長は8.60m、幅1.00～1.40m、深さ17cmで、主軸方位はN17°Eである。SD05により消失し、それより南側では中世の溝状の落ち込みと区別ができなくなる。埋土中からの出土遺物はなかった。

遺構の時期は、中世の遺構がほとんど条里型地割の方向を示すことを考え併せれば、それ以前と考えられ、古墳時代後期としておく。

Ⅱ区SD40（第125図）

Ⅱ区D5グリットで検出した溝状遺構である。SD29から南側へ分岐し、約3.30m南で直交する方向へ向きを変え、西へ10m、東へ2m付近で消失する。幅1.60～2.30m、深さ18～33cm、埋土は黒色粘土等である。埋土中からは土師器甕片等が出土した。

266～268は弥生土器。**266・267**は甕。**268**は高杯小片。**269～274**は土師器。**269～273**は甕。おおむね体部外面はハケメ、内面はヘラケズリである。**273**は底部。**269～272**のいずれかの底部になると考えられる。**274**は甑把手。

遺構の時期は古墳時代後期頃と考えられる。

Ⅶ区SD83（第126図）

Ⅶ区C・D12で検出した溝状遺構である。調査区端で検出しており、遺構の東肩は検出できていない。検出長7.95m、幅1.18m以上、深さ22cm、埋土は黒色粘質土である。埋土中からは須恵器杯身・杯蓋片が出土した。

275は縄文土器。浅鉢。口縁端部を内側へ折り返して肥厚させ、折り返した継ぎ目に粘土を足して継ぎ目を目立たなくしている。**276～280**は須恵器。**276**は杯身。口縁部の返りの退化が進む。**277～280**は杯蓋。体部にはゴマ状降灰がみられる。**277・278**は頂部にわずかにヘラケズリを施す。須恵器はいずれもTK209頃と考えられる。**281**は石鏃。サヌカイト製。凹基式。

遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭頃と考えられる。

Ⅱ区古墳時代包含層（第127図）

Ⅱ区D5グリット付近で堆積していた包含層である。厚さ8～20cm、埋土は黒色粗砂質土である。おもにSD29の上面付近で堆積したものと思われる。埋土中からは弥生土器、土師器、須恵器等が出土している。

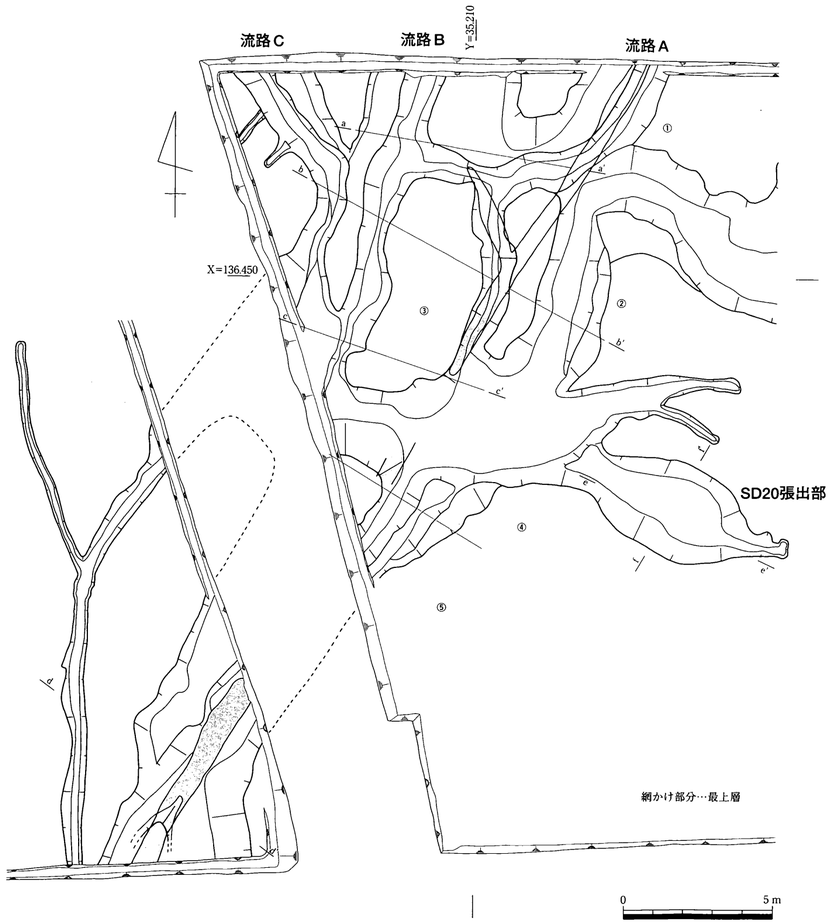
282～286は弥生土器。**282**は壺。長頸壺の頸部の破片で、頸部には7条以上のヘラ描き沈線を巡らせる。**283**は甕。**284**は鉢小片。**285・286**は底部。しっかりした平底をもつ。**285**は底部と体部の境付近で剥離痕がみられる。弥生時代の遺物は前期後半頃である**282**以外はいずれも中期後半頃と考えられる。**287・288**は土師器。**287**は甕。**288**は高杯。**289～296**は土師質土器。**289**は小皿。底部には時計回りのヘラ切り痕が残る。**290～296**は杯。口径は8.9～10cmのものと11cm前後のものがある。いずれも13世紀代。上面に堆積する中世包含層のものと思われる。**297**は土師器蛸壺。把手部分のみ残る。頂部はわずかに窪ませる。**298・299**は管状土錘。**300～302**は須恵器。**300**は杯身。底部下半部をヘラケズリする。口縁端部や返り部分の端部は丸みを持つ。TK10型式頃か。**301**は蓋。つまみ部分。**302**は捏鉢。片口部が残る。**303**は棒状の鉄製品。断面は四角形で中空である。

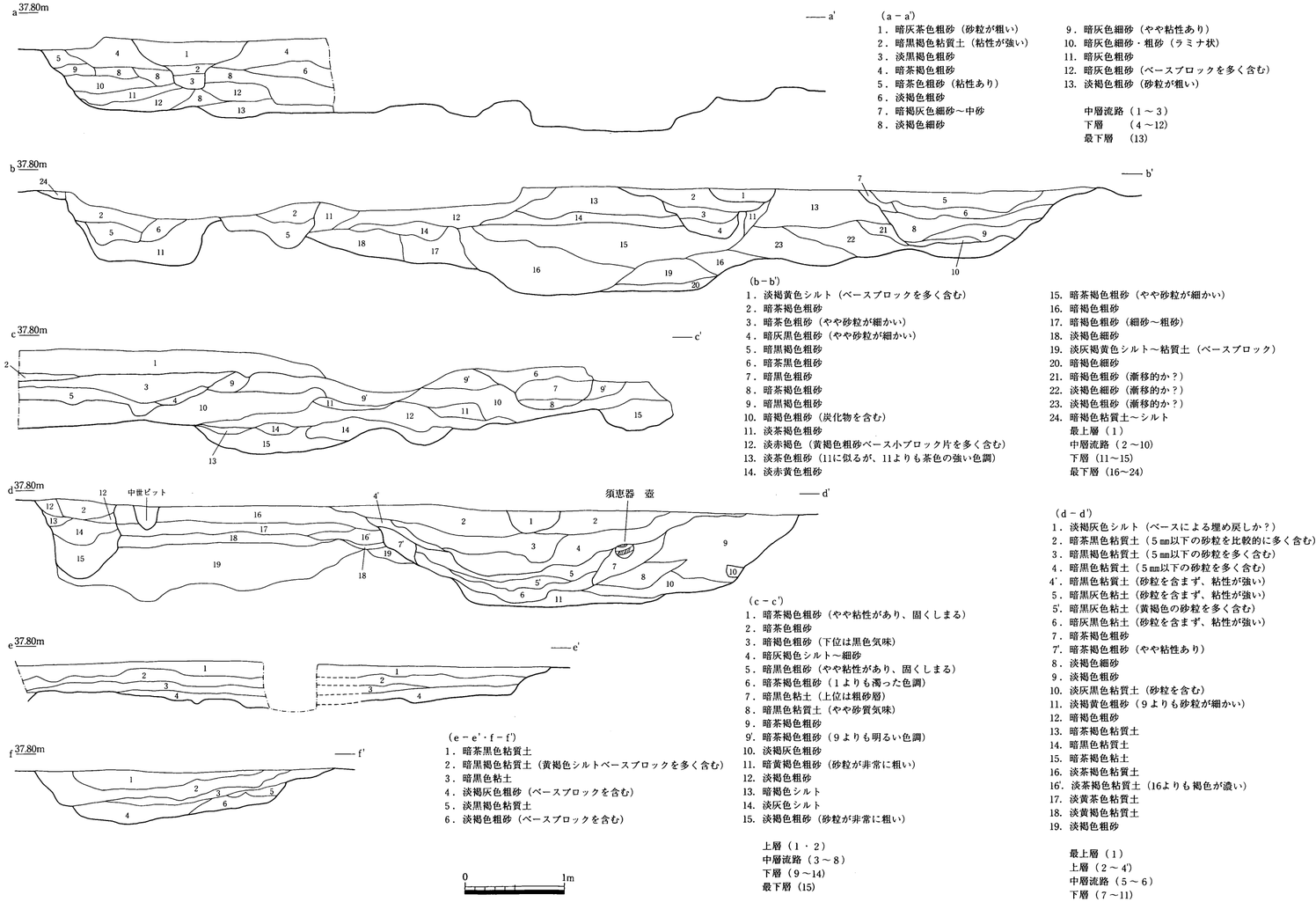
包含層の遺物の時期は弥生時代から中世まであるが、古墳時代の遺物は6世紀前半頃と考えられる。

Ⅰ・Ⅱ区SD20（第128・129・130・131・132・133・134図）

Ⅰ・Ⅱ区E3・4、D4で検出した溝状遺構である。幅は最大10.70mを測り、D4グリットで分岐して東へ7.80m程度延びる。さらに6m北側ではSD29と分岐する。両者に前後関係は認められず、同時併存であったと考えられる。

遺物は下層・中層・上層・最上層に分けて取り上げた。下層は幅10.70m、深さ1～1.10mを測り、断面形状からⅠ区部分では東・西に2箇所の深い部分があるが、Ⅱ区部分ではほぼ中央部分の1条になる。埋土は大部分が砂層で埋没しており、急激に埋没していったことがわかる。





（a－a'）
1．暗灰茶色粗砂（砂粒が粗い）
2．暗黒褐色粘質土（粘性が強い）
3．淡黒褐色粗砂
4．暗茶褐色粗砂
5．暗茶色粗砂（粘性あり）
6．淡褐色粗砂
7．暗褐灰色細砂～中砂
8．淡褐色細砂
9．暗灰色細砂（やや粘性あり）
10．暗灰色細砂・粗砂（ラミナ状）
11．暗灰色粗砂
12．暗灰色粗砂（ベースブロックを多く含む）
13．淡褐色粗砂（砂粒が粗い）

中層流路（1～3）
下層　（4～12）
最下層　（13）

（b－b'）
1．淡褐黄色シルト（ベースブロックを多く含む）
2．暗茶褐色粗砂
3．暗茶色粗砂（やや砂粒が細かい）
4．暗灰黒色粗砂（やや砂粒が細かい）
5．暗黒褐色粗砂
6．暗茶黒色粗砂
7．暗黒色粗砂
8．暗茶褐色粗砂
9．暗黒褐色粗砂
10．暗褐色粗砂（炭化物を含む）
11．淡茶褐色粗砂
12．淡赤褐色（黄褐色粗砂ベース小ブロック片を多く含む）
13．淡茶色粗砂（11に似るが、11よりも茶色の強い色調）
14．淡赤黄色粗砂
15．暗茶褐色粗砂（やや砂粒が細かい）
16．暗褐色粗砂
17．暗褐色粗砂（細砂～粗砂）
18．淡褐色細砂
19．淡灰褐黄色シルト～粘質土（ベースブロック）
20．暗褐色細砂
21．暗褐色粗砂（漸移的か？）
22．淡褐色細砂（漸移的か？）
23．淡褐色粗砂（漸移的か？）
24．暗褐色粘質土～シルト

最上層（1）
中層流路（2～10）
下層（11～15）
最下層（16～24）

（c－c'）
1．暗茶褐色粗砂（やや粘性があり、固くしまる）
2．暗茶色粗砂
3．暗褐色粗砂（下位は黒色気味）
4．暗灰褐色シルト～細砂
5．暗黒色粗砂（やや粘性があり、固くしまる）
6．暗茶褐色粗砂（1よりも濁った色調）
7．暗黒色粘土（上位は粗砂層）
8．暗黒色粘質土（やや砂質気味）
9．暗茶褐色粗砂
9'．暗茶褐色粗砂（9よりも明るい色調）
10．淡褐灰色粗砂
11．暗黄褐色粗砂（砂粒が非常に粗い）
12．淡褐色粗砂
13．暗褐色シルト
14．淡灰色シルト
15．淡褐色粗砂（砂粒が非常に粗い）

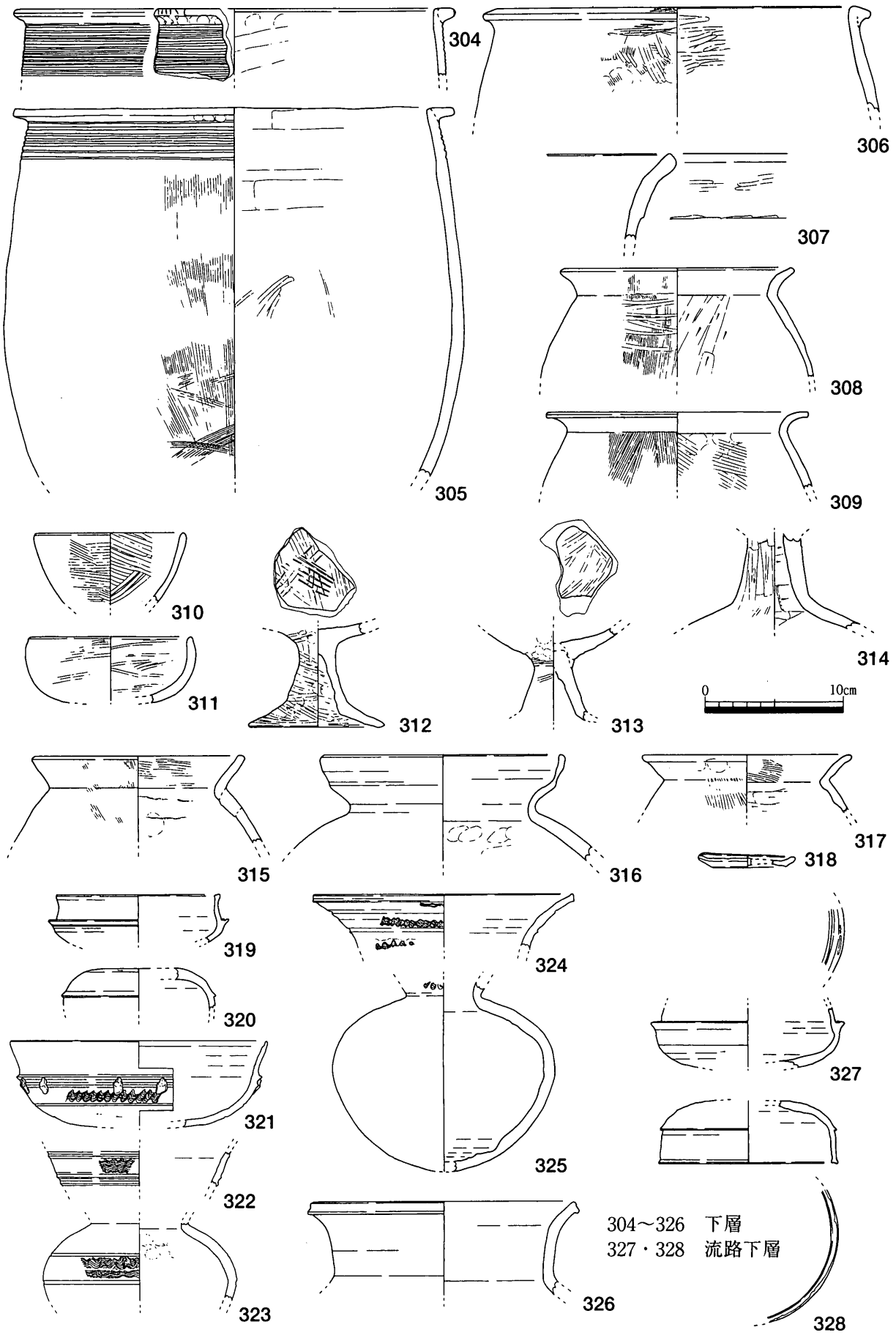
上層（1・2）
中層流路（3～8）
下層（9～14）
最下層（15）

（d－d'）
1．淡褐灰色シルト（ベースによる埋め戻しか？）
2．暗茶黒色粘質土（5㎜以下の砂粒を比較的に多く含む）
3．暗黒褐色粘質土（5㎜以下の砂粒を多く含む）
4．暗黒色粘質土（5㎜以下の砂粒を多く含む）
4'．暗黒色粘質土（砂粒を含まず、粘性が強い）
5．暗黒灰色粘土（砂粒を含まず、粘性が強い）
5'．暗黒灰色粘土（黄褐色の砂粒を多く含む）
6．暗灰黒色粘土（砂粒を含まず、粘性が強い）
7．暗茶褐色粗砂
7'．暗茶褐色粗砂（やや粘性あり）
8．淡褐色細砂
9．淡褐色粗砂
10．淡灰黒色粘質土（砂粒を含む）
11．淡褐黄色粗砂（9よりも砂粒が細かい）
12．暗褐色粗砂
13．暗茶褐色粘質土
14．暗黒色粘質土
15．暗茶褐色粘土
16．淡茶褐色粘質土
16'．淡茶褐色粘質土（16よりも褐色が濃い）
17．淡黄茶色粘質土
18．淡黄褐色粘質土
19．淡褐色粗砂

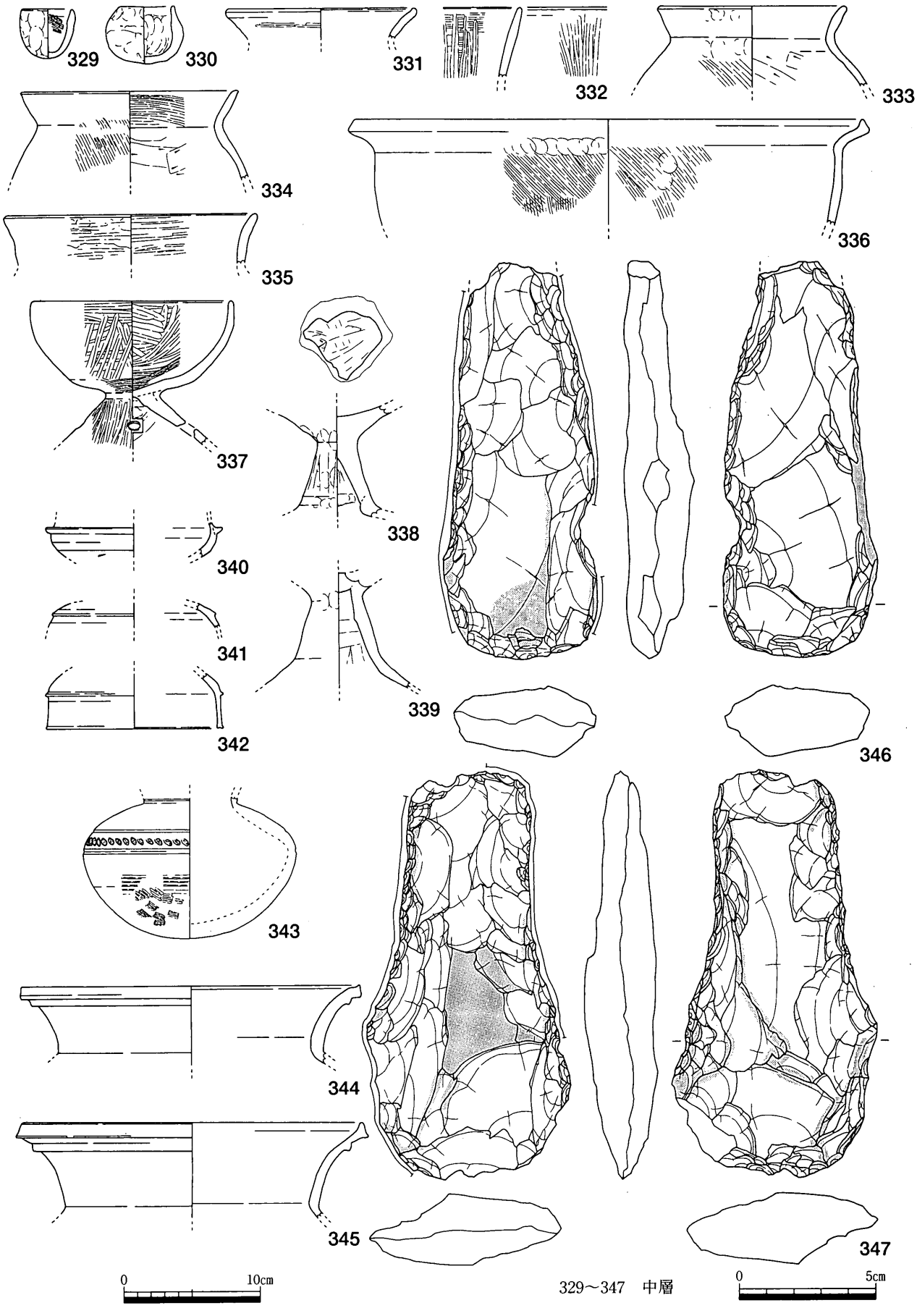
最上層（1）
上層（2～4'）
中層流路（5～6）
下層（7～11）
最下層（16～19）

（e－e'・f－f'）
1．暗茶黒色粘質土
2．暗黒褐色粘質土（黄褐色シルトベースブロックを多く含む）
3．暗黒色粘土
4．淡褐灰色粗砂（ベースブロックを含む）
5．淡黒褐色粘質土
6．淡褐色粗砂（ベースブロックを含む）

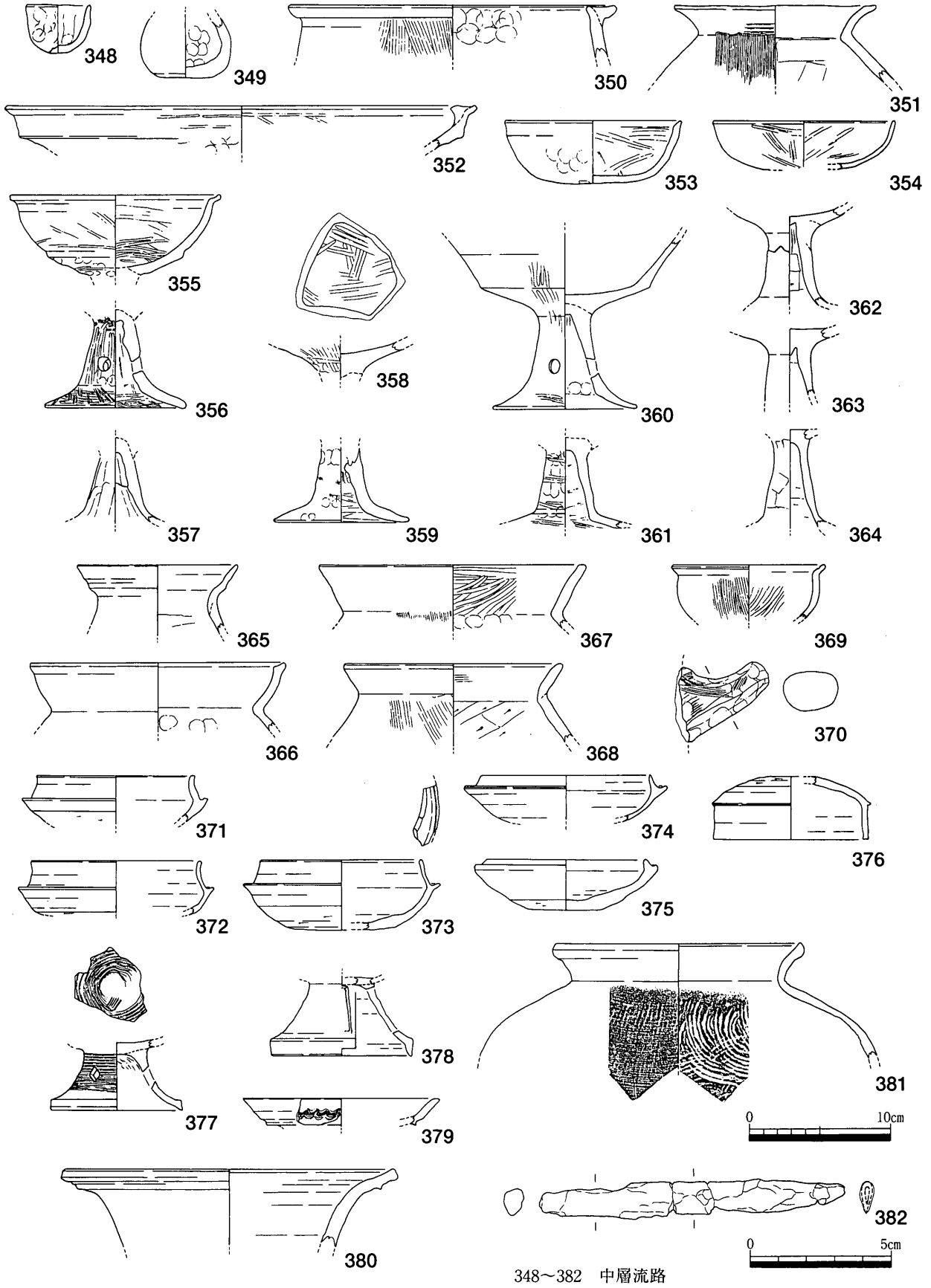
第128図　Ⅰ・Ⅱ区SD20平・断面図（1/40、1/150）



第129図　SD20出土遺物（1）（1/4）

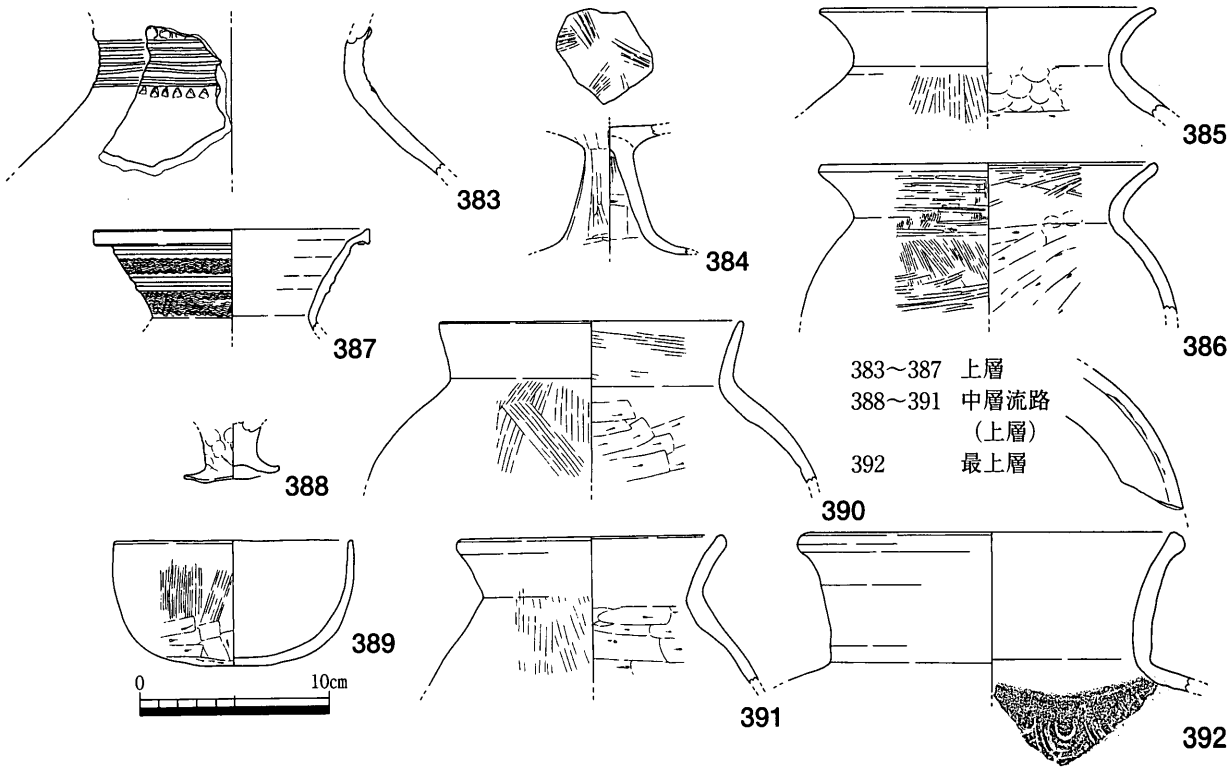


第130図　SD20出土遺物（2）（1/2、1/4）



348～382　中層流路

第131図　SD20出土遺物（3）（1/2、1/4）



第132図　SD20出土遺物（4）（1/4）

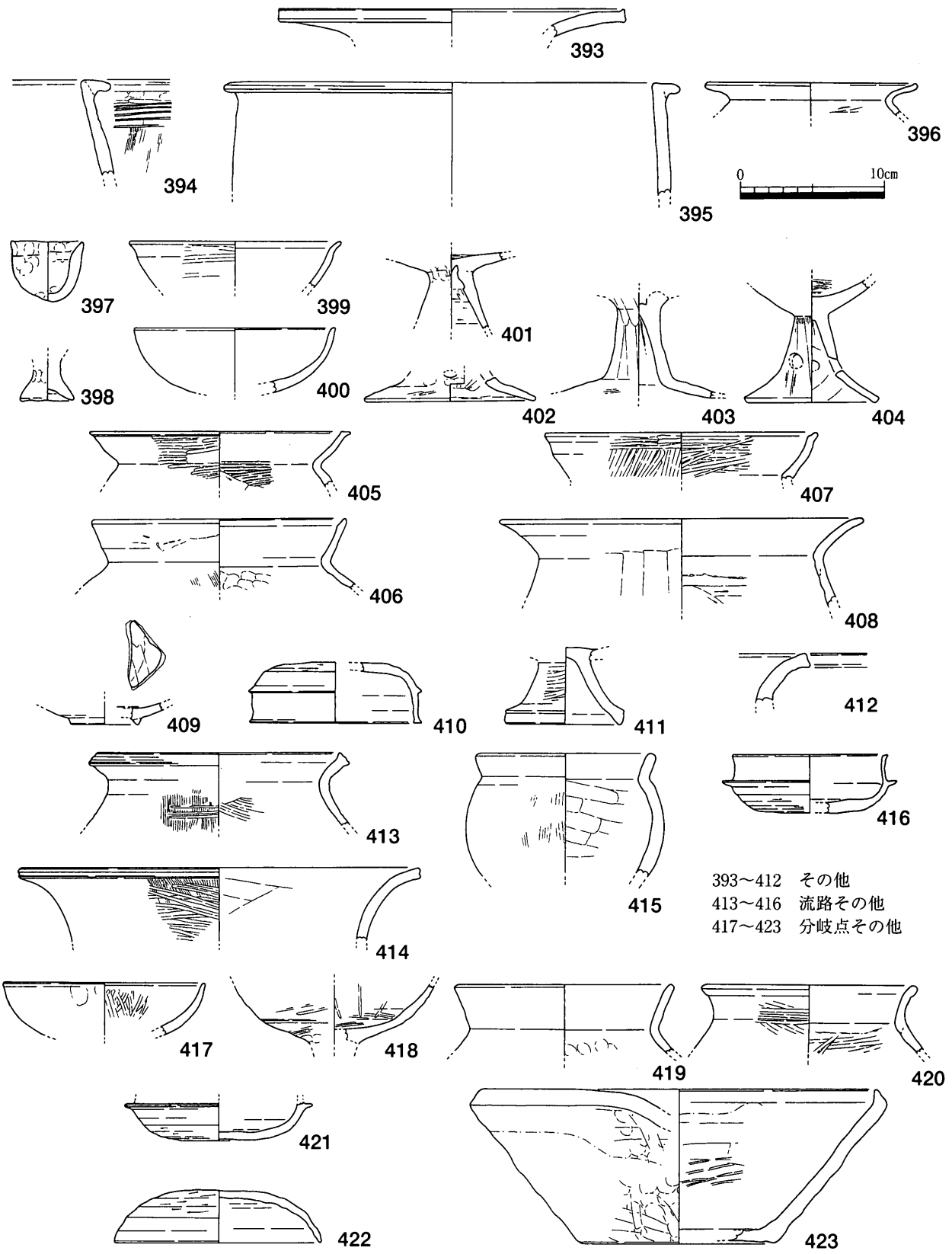
中層は埋没した下層流路上を2～4条の流路が網の目状に流れる。Ⅰ区部分では西端部で幅0.80m、深さ80cm、断面形状はU字形の流路と、東側にややしっかりした幅3m、深さ94cmの、下層の深い部分を踏襲したような2条であるが、Ⅱ区部分では下層の深い部分からはやや外れた上位の箇所で、幅1.00～1.20m、深さ40～50cmの流路が3～4条へ分岐・合流を重ねており、安定した流路ではなかったと思われる。中層の埋土は、南側であるⅠ区部分では粘土層が厚く堆積し、滞水状態であったらしいが、Ⅱ区部分の流路が安定しない場所では砂層で覆われており、急激に埋没していった様子が窺える。

上層はd－d'断面およびc－c'断面でのみ観察できたが、b－b'断面では西側のやや縦横面の窪んでいる箇所が同層に当たると思われる。上層は、幅4.20m、深さ65cm程度と考えられ、埋土は砂を含む暗茶黒色・暗黒褐色・暗黒色粘質土で、土壌化が進んでいたことを窺わせる。Ⅰ区部分では下層および中層東側流路を踏襲し、c－c'断面およびb－b'断面ではSD20の西側の流路上面を流れる。

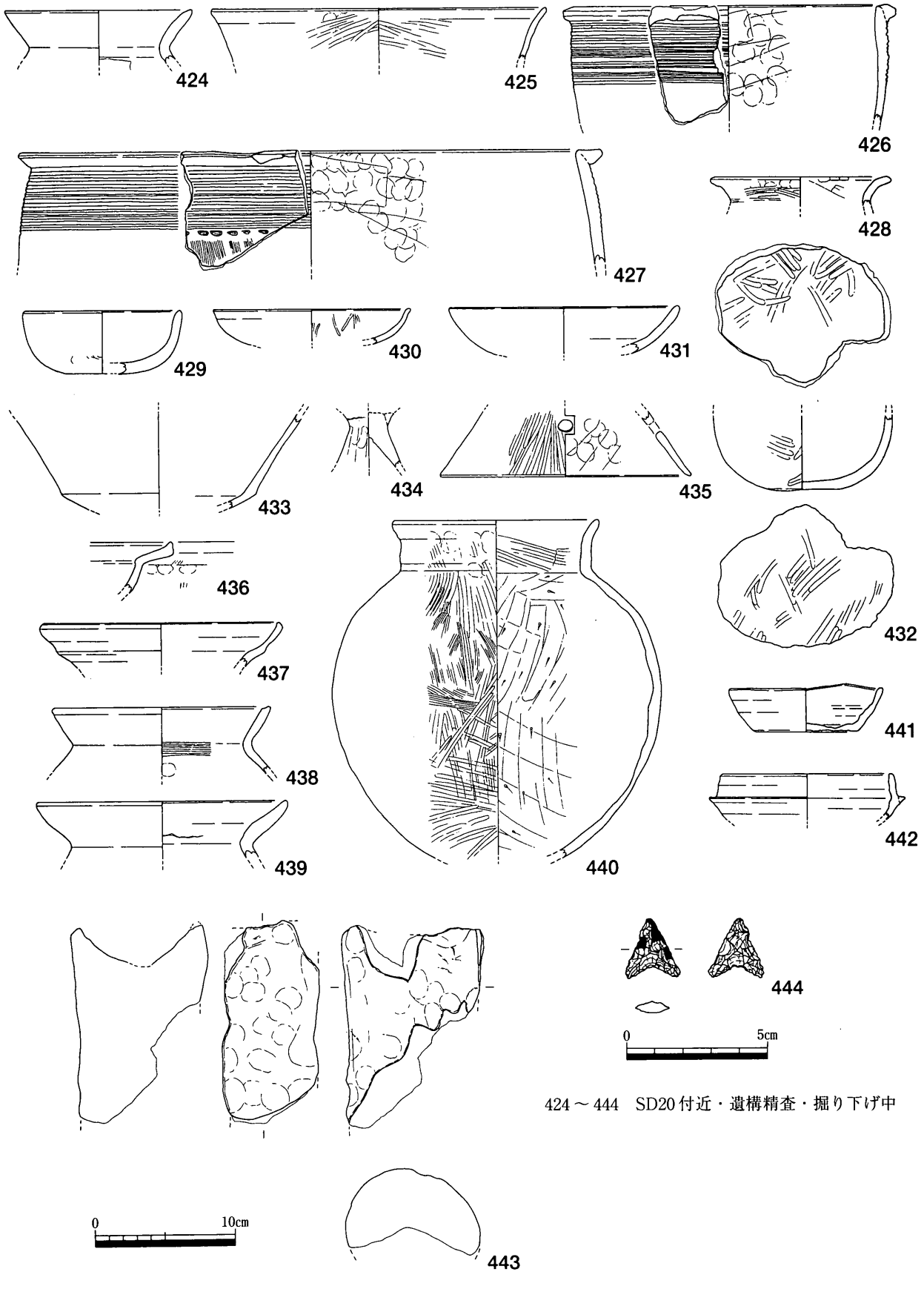
最上層は幅0.60m前後、深さ14～22cmを測り、埋土は淡黄褐色・淡褐色シルトである。ベースブロックを多く含み、人為的に埋め戻されたと考えられる。

Ⅱ区D4グリットで検出した張り出し部は幅3m、深さ55cmを測り、埋土には下部にはベースブロックを含む砂層が、上層には暗茶黒色・暗黒褐色粘質土層が堆積する。恒常的な流路ではなく、流れが急であったときに一時的に溢れ出たものが徐々に埋没していったものと思われる。

304～326はSD20下層から出土した遺物である。おおよそSD20張り出し部以南から出土したものである。**304～309**は弥生土器。**304～306**は逆L字形口縁部を持つ甕で、**304・305**は12条以上・6条のヘラ描き沈線を巡らせる。**304**は口縁端部に刻み目を施す。**306**は無文。**307**は壺小片。口縁部は外側へ厚くする。**308・309**は甕。外面はハケ、内面は**308**はヘラケズリ、**309**はハケで調整する。**310～317**は土師器。**310・311**は杯。いずれも内外面とも横方向のヘラミガキを施す。**312～314**は高杯。脚部下部を屈曲させる。**312**は外面は横から斜め方向のヘラミガキ、内面は横方向へヘラミガキする。**313**は杯部と脚部の接合状況が明瞭に観察できる。**315～317**は甕。**315**は体部の粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。**316**は口縁部が二重口縁に近い形態をとる。**318**は土師質土器小皿。歪みが著しい。**319～326**は須恵器。**319**は杯身。口縁端部は角がある。底部のヘラケ



第133図　SD20出土遺物（5）（1/4）



424～444　SD20付近・遺構精査・掘り下げ中

第134図　SD20出土遺物（6）（1/2、1/4）

ズリの有無は不明である。320は蓋。頂部と口縁部の境には突帯状の稜線が巡る。頂部には回転ヘラケズリを施す。321は高杯杯部。体部中程に2条の突帯を巡らせ、その部分に2条1組の棒状の粘土を貼り付ける。突帯の下部は波状文を巡らせその下部にはヘラケズリを施す。322は壺または甕口縁部。突帯を上下に巡らせ、その間に波状文を巡らせる。323は壺または甕の体部。体部中位～上位に沈線を2条巡らせ、その間に2段の波状文を施す。324は壺または甕口縁部。沈線および突帯を巡らせ、その間に波状文を巡らせる。325は壺。頸部の波状文がわずかに観察できる。326は甕。

327・328は北側の、流路が分岐する部分（流路Cの下層部分）で出土した遺物である。ともに須恵器。327は杯身。体部下半部はヘラケズリする。杯身の受け部に重ね焼き痕と考えられる土器の溶着痕がある。328は杯蓋。頂部と口縁部の境には突帯状の稜線を巡らせる。頂部には自然釉が掛かり、ヘラケズリの有無は不明である。口縁端部には重ね焼きと考えられる土器の付着痕が観察できる。

304～307は弥生時代前期末、308・309は弥生時代後期後半、318は13世紀代で、遺構の時期は示さない。その他の土師器、須恵器の時期はおおむねTK23型式（5世紀末葉）を中心とする時期と考えられ、下層の時期はそのころにおくことができる。

329～347は中層出土遺物で、主に張り出し部以南から出土した遺物である。329・330はミニチュア土器。鉢形の器形で、主に手捏ねにより成形する簡単な作りである。331は弥生土器甕。332～339は土師器。332は丸底壺口縁部。内外面ともヘラミガキする。333～335は甕。333・334は外面はハケ、内面はヘラケズリする。336は鉢。337～339は高杯。337は低脚のもの。脚部の円孔は2箇所に残るが、残存部より、円孔は4箇所と考えられる。円孔の内面側は焼成後の割れが見られ、きれいに調整していない。338・339は脚部下部で屈曲する。340～345は須恵器。340は杯身。体部下半部はヘラケズリする。341・342は杯蓋。ともに頂部と口縁部の境に突帯状の稜線を持つ。342は口縁端部を内外へやや肥厚させる。頂部のヘラケズリの有無は残存範囲が狭く、不明である。343は壺。体部最大径部とその上位に沈線を巡らせ、その間に楕円形の刺突文を1列に配する。体部下半部はカキメ、その後タタキ風の圧痕が残される。344・345は甕。口縁端部の下部に突線を巡らせる。346・347は打製石斧。サヌカイト製。

中層の時期は、出土した土師器・須恵器により下層とそれほど隔たらない5世紀末を中心とする時期（TK23またはTK47型式頃）と考えられる。

348～382は、SD20張出部より北側の、流路が網の目状に入り組んでいる部分で出土した遺物である。

348・349はミニチュア土器。鉢形で、手捏ねによる簡単な作り。350～352は弥生土器。350・351は甕。350は逆L字形口縁部を持ち、体部は無文。弥生時代前期末葉頃。351は弥生時代後期後半頃。352は高杯。口縁端部の内側に粘土を貼り付けて面を持たせている。弥生時代後期前半。353～370は土師器。353・354は杯。内面に横～斜め方向のヘラミガキを施す。355～364は高杯。355は椀型。体部と底部の境に段を持たせ、口縁端部は外反させる。356・357・359～364は脚部。脚端部まで残るものは脚部の下部で屈曲する。356・357・358・360・361では、脚部と杯部の接合部が残り、脚部の先端を杯底部へ押し当てるように接合させている。脚部の円孔は356・360で3孔ある。調整はおおむね外面にヘラミガキ、脚部内面は横方向のヘラケズリで、脚部端部にヘラミガキを施す。365～368は甕。365は小破片で口径は不確か。口縁部は二重口縁気味に立ち上がる。369は鉢。370は甑把手。371～381は須恵器。371～375は杯身。いずれも口縁端部はやや丸みを持ち、受け部は小さい。底部下半部には374以外は底部下半部にヘラケズリが観察できるが、375はヘラケズリが雑で、底部にはヘラ切り痕が残る。373は受け部部分に土器の付着痕が残る。376は杯蓋。頂部と口縁部の境の突帯状の稜線が入り、頂部には回転ヘラケズリを施す。377・378は高杯脚部。377は杯部底部と脚部にカキメを入れる。脚部には菱形の透かし孔を3箇所に施す。透かし孔を外面から内面へ向けて穿つ際に、内面側はうまく剥がれなかったようで、透かし孔の縁はきれいに仕上がっていない。接合部内面には絞り目が観察できる。378は長方形の透かし孔が2箇所に残り、残存部分から透かし孔は4箇所と考えられる。379は甕の口縁部。口縁端部に波状文を施す。380・381は甕口縁部。380は口縁端部直下に突帯を巡らせる。

口縁部内面には自然釉が掛かる。**381**は口縁端部外側を肥厚させる。外面はタタキ後カキメ、内面には青海波紋の当て具痕を残す。**382**は鉄製品。細長い板状のものを緩く折り曲げて、一方を閉じて細くする形状である。

中層流路から出土する須恵器は、5世紀末～7世紀初頭（TK23～TK209型式頃）までにわたると思われるが、6世紀前後（MT10～TK10型式）のものが多く、流路が機能していた主な時代もその頃であろう。

383～387は上層である。**383**は弥生土器壺。頸部に7条のヘラ描き沈線を施し、その下部には三角形の刺突文、上部には突帯を巡らせ、そこに刻み目風の押圧痕を施す。弥生時代前期後半～末頃。**384～386**は土師器。**384**は高杯。外面はヘラミガキ、脚部内面はヘラケズリを施す。脚部は杯部に押し込んだ状態で接合している。**385・386**は甕。外面はハケ、内面はヘラケズリする。頸部の屈曲は緩い。**387**は須恵器壺。頸部中程に2条の緩い突帯を巡らせ、その上下に櫛描波状文を施す。

出土遺物にはやや乏しいが、おおむね**387**の時期である5世紀末～6世紀前半（MT15型式頃）が考えられ、中層とはあまり時期差がないと考えられる。

388～391は流路B・C部分の上層である。**388**はミニチュア土器か。上部は欠損。手捏ねで、円柱の部分には絞り目が顕著に残る。**389～391**は土師器。**389**は杯。やや深めの器形。体部外面にはハケ、底部外面はヘラケズリする。**390・391**は甕。外面はハケ、内面は横方向へヘラケズリする。頸部の屈曲は緩め。

392は最上層出土遺物。須恵器甕。口縁端部を外側へ肥厚させる。口縁部全体に自然釉が掛かる。口縁端部に重ね焼き痕と考えられる土器の付着痕が観察できる。7世紀中頃。

393～412は流路A～C以外の個所でトレンチ等から出土した、層位不明の遺物である。

393～396は弥生土器。**393**は広口壺口縁部。口縁端部を上部へやや引き上げる。**394・395**は逆L字形口縁部を持つ甕。**394**は5条のヘラ描き沈線を施す。**395**は無文。弥生時代前期後半～末頃。**396**は甕。小片。弥生時代後期後半以降。**397**はミニチュア土器。鉢形で、手捏ねによる粗い作り。**398**はミニチュア土器の脚部。製塩土器の脚部にも似るが、底部が厚く、ミニチュア土器とした。**399～408**は土師器。**399・400**は杯。**399**は口縁端部を少し外反させる。外面にはヘラミガキを施す。小片で傾きが若干異なる可能性もある。**401～404**は高杯。**402**は脚部に1箇所の円孔がみられる。残存部分が少なく、孔の個数は不明である。**403**は脚部上端が剥離する。**404**は脚部の3箇所に円孔がみられ、残存部分から2孔1対の円孔が2箇所にあったと考えられる。杯部は丸みを帯びている。**405～408**は甕。**405～407**は口縁端部に面を持つ。**407**のヘラミガキは薄く、それほど明瞭ではない。**408**は胴部がそれほど張らないもので、やや新しい形態。

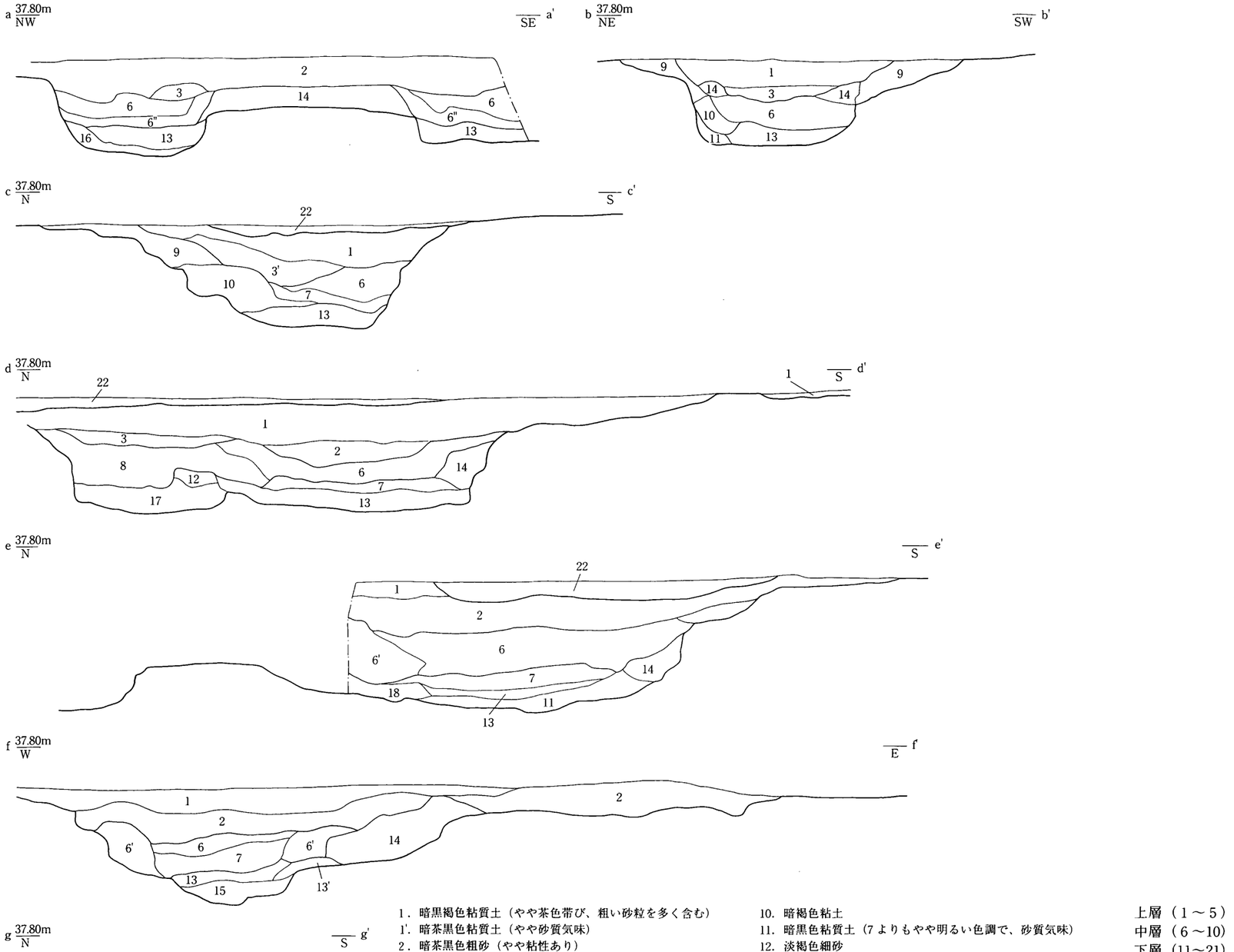
409は土師質土器椀底部。混入。**410～412**は須恵器。**410**は杯蓋。頂部と口縁部の境に突帯状の稜線を巡らせる。頂部上半は回転ヘラケズリで調整する。口縁端部は平たくし、内・外側へ拡張させる。**411**は高杯脚部。脚部にはカキメを施す。**412**は甕小片。須恵器はおおむね5世紀末～6世紀初頭。

413～416は流路A～C部分で層位の不明な出土遺物である。**413**は弥生土器甕。口縁端部に凹線を巡らせる。弥生時代中期後半頃。**414**は土師器広口壺。口縁部がラッパ状に開き、口縁端部に緩い沈線が入る。古墳時代初頭。

415は甕。**416**は須恵器杯身。口縁端部には面を持ち、体部下半はヘラケズリする。5世紀末（MT15）頃か。**417～423**はSD29との合流部から出土した遺物である。**417～420**は土師器。**417**は杯。やや浅めの器形で、口縁端部はわずかに外傾する。内面はヘラミガキする。**418**は高杯。杯部の底部と体部の境に緩い沈線を入れる。内外面ともヘラミガキする。**419・420**は甕。**421・422**は須恵器。**421**は杯身。受け部から上部は欠損。体部下半部はヘラケズリする。5世紀末～6世紀前半か。**422**は杯蓋。浅い器形。上半部はヘラケズリするが、ヘラケズリは頂部まで及ばず、頂部にヘラ切り痕を残す。7世紀前半頃。**423**は須恵器捏鉢。外面に重ね焼きの痕跡を残す。混入。

424～444はⅠ区でSD20の遺構ラインを検出中に出土した遺物で、おおむねSD20から出土したものと考えて差し支えない遺物である。

424～428は弥生土器。**425**は壺片か。**424・426～428**は甕。**426・427**は逆L字形口縁を持つもので、**426**は

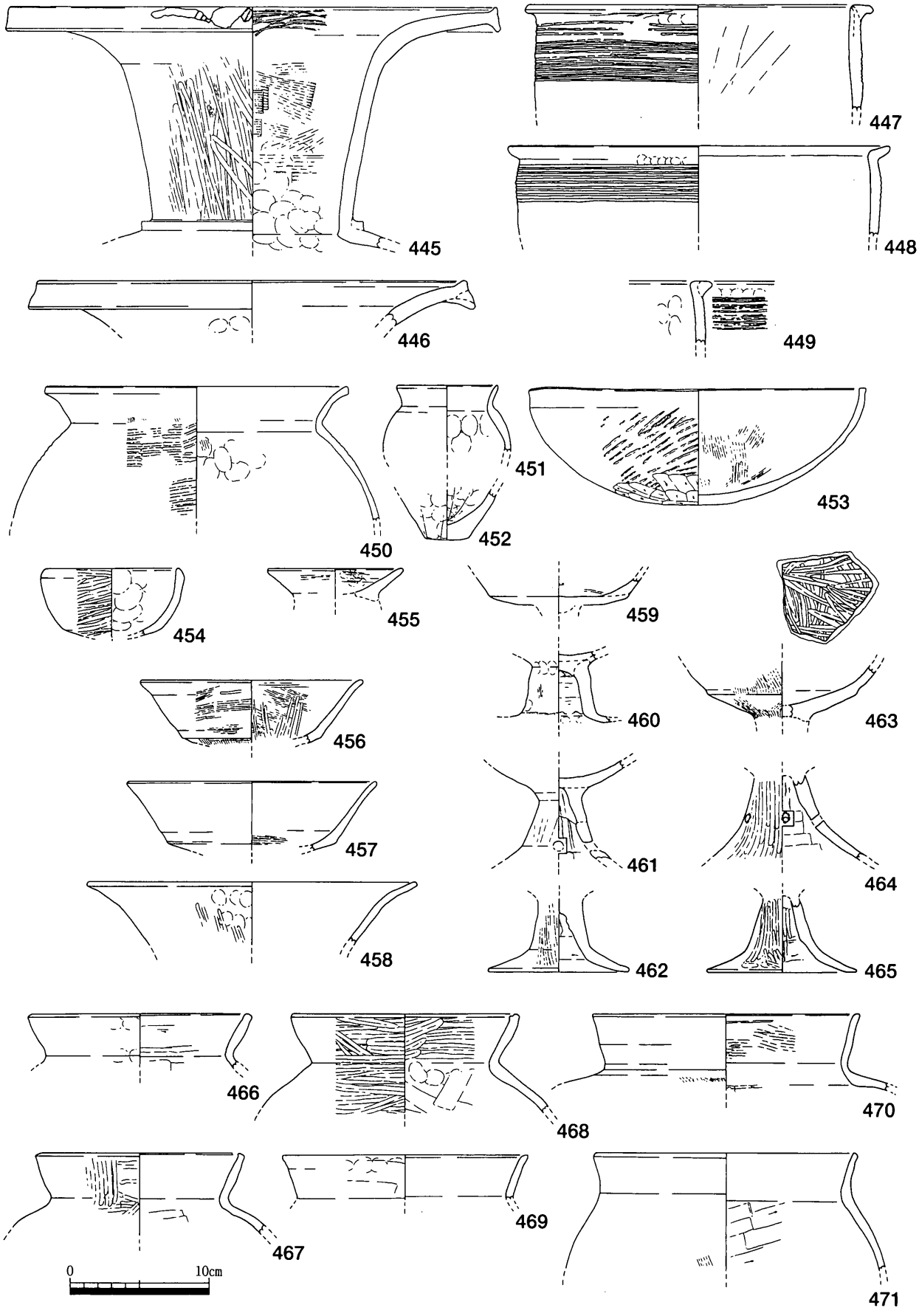


1．暗黒褐色粘質土（やや茶色帯び、粗い砂粒を多く含む）
1'．暗茶黒色粘質土（やや砂質気味）
2．暗茶黒色粗砂（やや粘性あり）
3．暗茶色粗砂
3'．暗茶色粘質土（3に似るが、やや暗い色調）
4．暗黒褐色粘質土（黄褐色粗砂～シルトベースを含む）
4'．暗黒褐色粘質土
5．暗茶黒色粘質土
6．暗黒褐色粘質土（1よりも粘性が強い）
6'．暗黒褐色粘質土（6に似るが、粘性がやや弱く、砂質気味）
6"．暗灰黒色粘土～シルト（6'に基本的には同一か？）
7．暗黒色粘土
8．暗赤褐色砂質土（ベースブロックを含む）
9．淡茶褐色粘質土
10．暗褐色粘土
11．暗黒色粘質土（7よりもやや明るい色調で、砂質気味）
12．淡褐色細砂
13．暗褐色粗砂（黒色粘土がラミナ状に入る）
13'．暗褐色粗砂（黄色シルトベースブロックを含む）
14．暗茶褐色粗砂
15．暗黄褐色粗砂（13'よりも砂粒が粗く、5㎝前後の礫を少量含む）
16．暗黒色粘土（粘性が非常に強い）
17．暗灰色粘質土
18．暗褐黒色粘質土
19．暗褐色粗砂
20．暗茶褐色粘質土
21．暗黒褐色粘土
22．淡褐色砂質土（SD30）

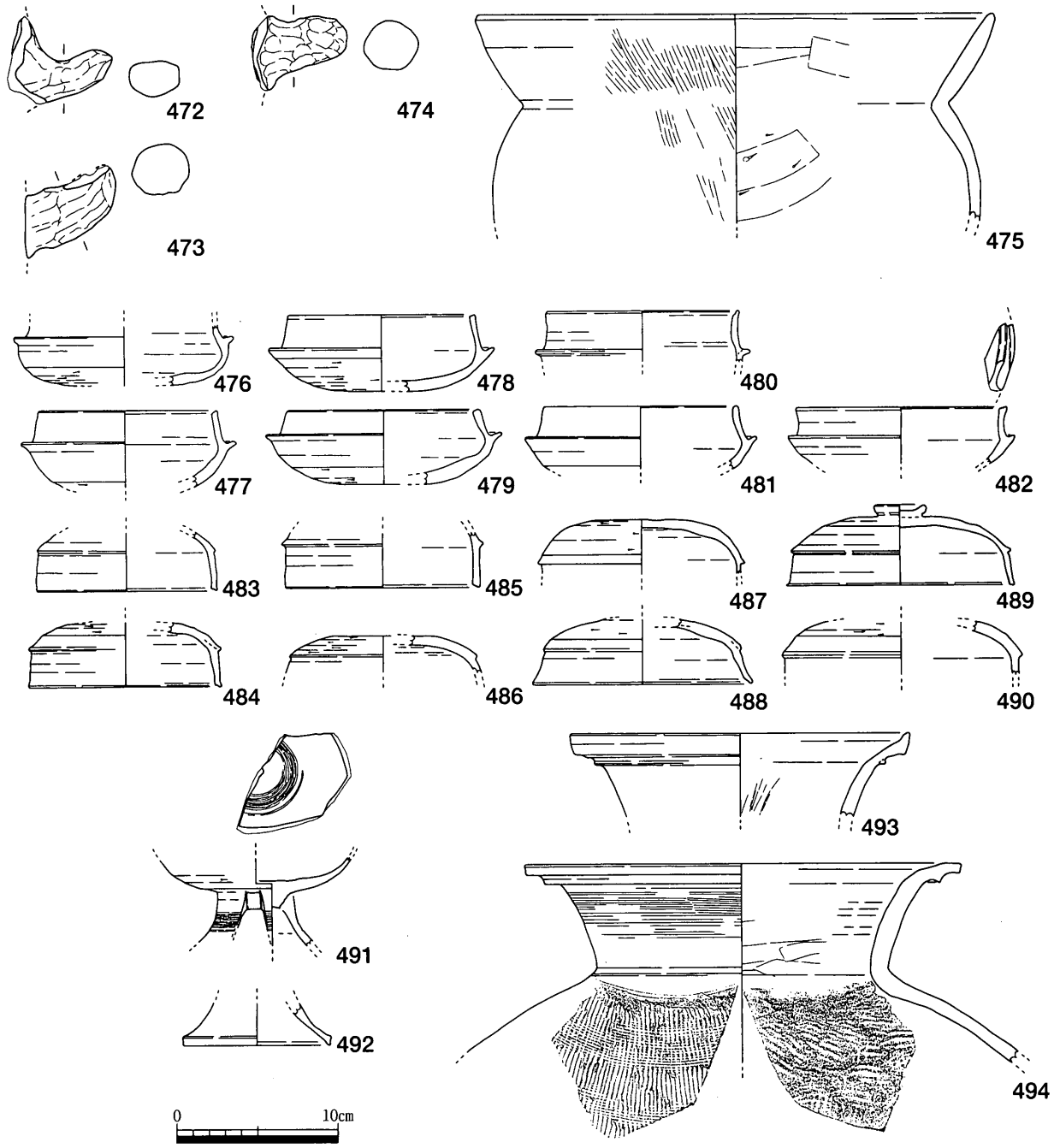
0 1m

上層（1～5）
中層（6～10）
下層（11～21）

第135図　Ⅱ・Ⅳ区SD29断面図（1/40）

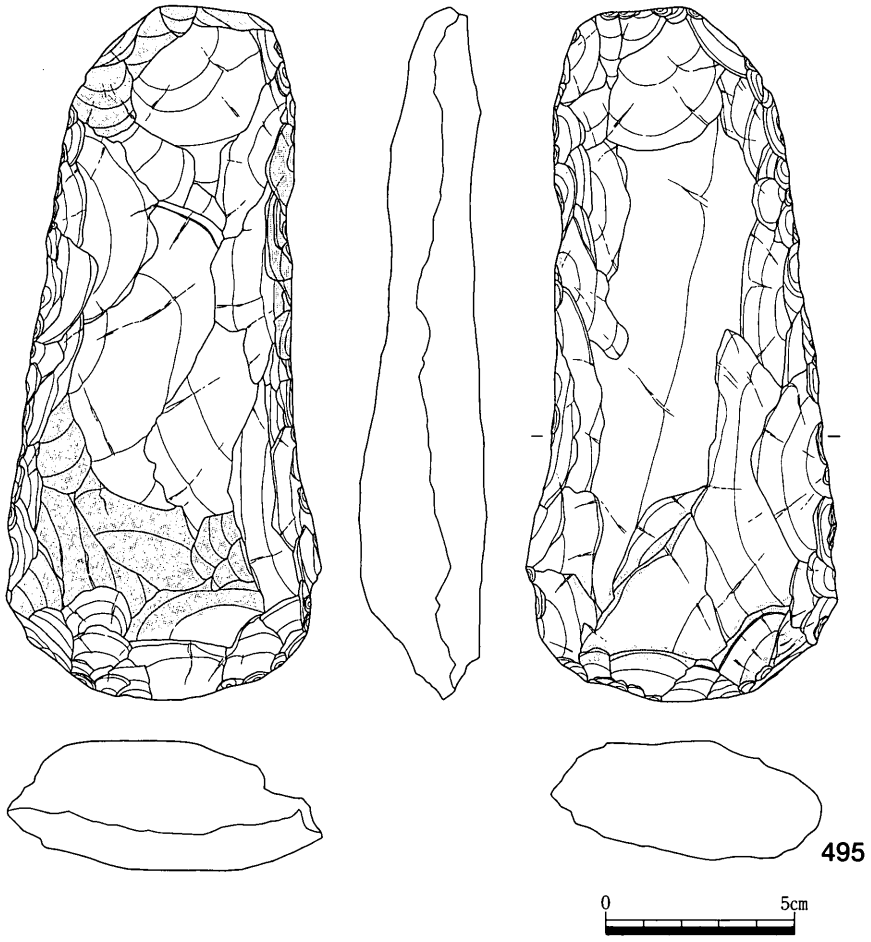


第136図　SD29下層出土遺物（1）（1/4）



第137図　SD29下層出土遺物（2）（1/4）

14条のヘラ描き沈線、427は12条のヘラ描き沈線の下部に楕円形の刺突文を施す。弥生時代前期末。428は甕口縁部。弥生時代後期後半。429～440は土師器。429～432は杯。429・432は深めの器形、430・431は浅めの器形。432は内外面にヘラミガキがある。433・434は高杯。433は杯部の底部と口縁部の境の屈曲部付近。434は脚部上端付近で剥離痕が見られる。435は台付鉢等の脚部か。436は鉢。437～440は甕。437は二重口縁気味に立ち上がる。440は口縁部は直立気味に立ち上がり、球形の体部を持つ。441は土師質土器杯。歪みがある。13世紀代。442は須恵器杯身。口縁部は四角気味にする。底部の回転ヘラケズリの有無は不明である。6世紀前半。443は器種不明。きめの細かい土師質の胎土で、外面には緩い指押さえ痕がある。円柱状で一方の端は半球状に窪む。444は石鏃。サヌカイト製。凹基式。



第138図　SD29下層出土遺物（3）（1/2）

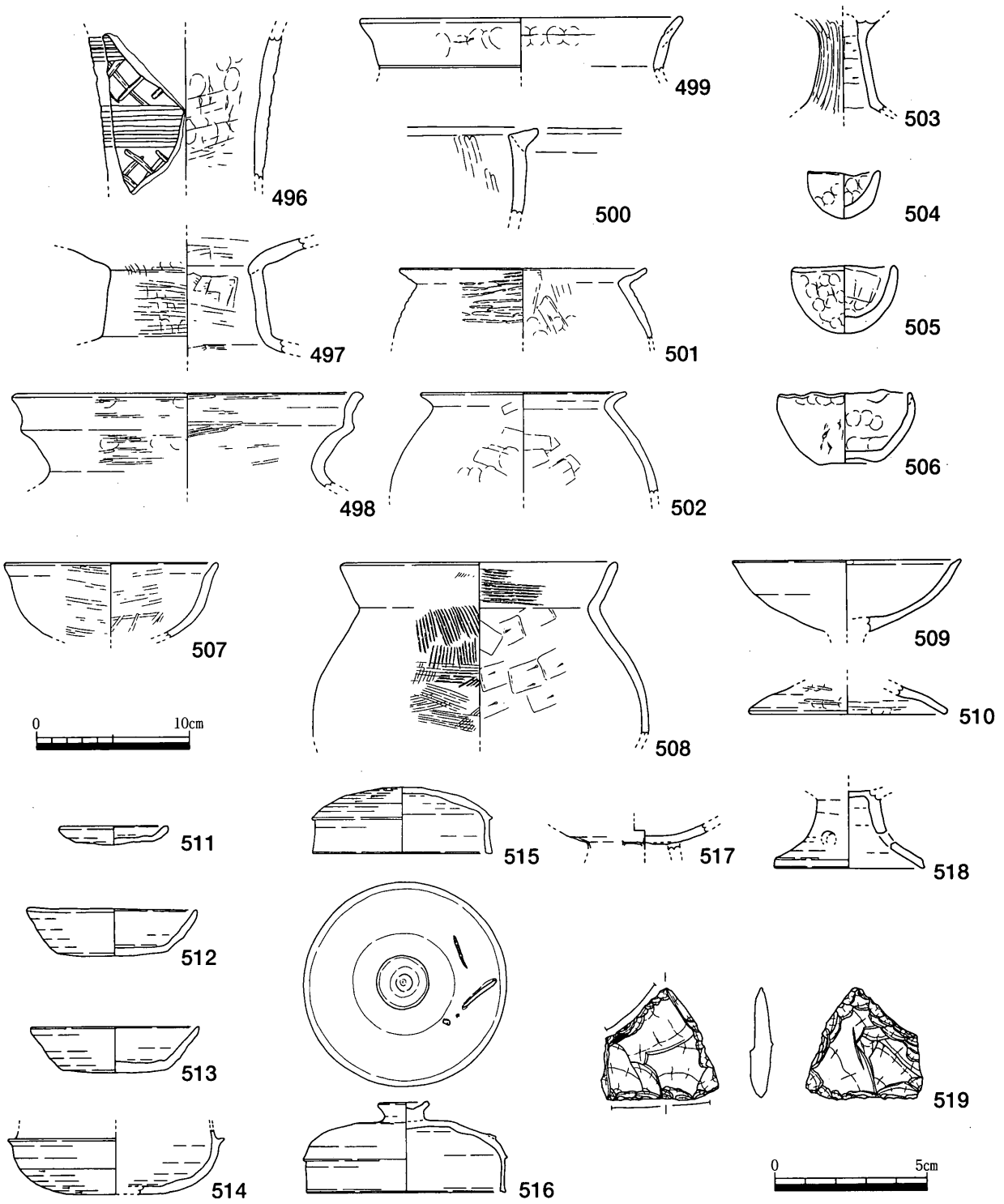
以上から、SD20は5世紀末頃から埋没をはじめ、6世紀前後に一旦不安定な流路が形成された後に徐々に埋没をはじめ、7世紀中頃には完全に埋まったと考えられる。

Ⅱ・Ⅳ区SD29（第135・136・137・138・139・140図）

Ⅱ区D4～D6、Ⅳ区B6にかけて検出した溝状遺構である。SD20から分岐する。幅2.80～4.10m、深さ72～104cmで蛇行しながら北東方向へ流れる。埋土は上層・中層・下層に分けて遺物を取り上げた。

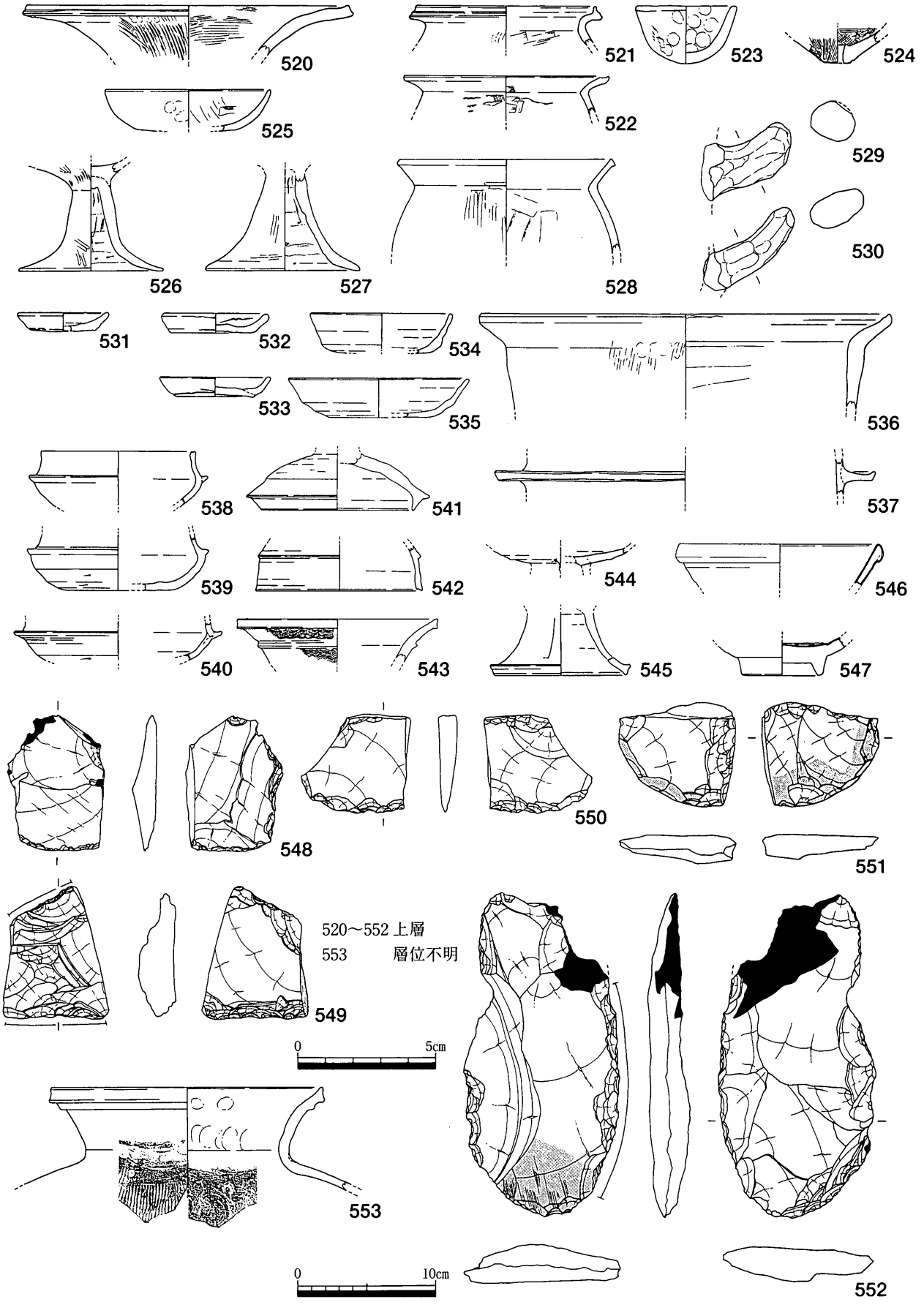
上層は最大厚約50cm、最大幅6.40mにわたって堆積する。埋土は暗黒褐色（茶色がかる）・暗茶黒色粘質土等、茶色がかった粘質土が主体で、土壌化に近い状態であったことが窺える。部分的に下部に暗茶色粗砂が堆積する。中層は暗黒褐色粘土・暗灰黒色・暗黒色粘土等、有機物を含んだ粘り気の強い埋土が主体を占め、湿地に近い状態であったと考えられる。厚さは最大で約48cmを測る。下層は部分的に最下層で暗黒色・暗黒褐色粘土が堆積するほかはおおむね砂層で占められる。

445～495は下層から出土した遺物である。**445～453**は弥生土器。**445・446**は広口壺。**445**は口縁端部にヘラ描きの斜線文を描き、頸部と体部の境には突帯を巡らせる。**446**は口縁端部下側に粘土を足して拡張している。**447～451**は甕。**447・449**は逆L字形口縁部を持ち、体部には4～5条1単位の櫛描き沈線文を施す。**448**は如意形口縁を持ち、体部は8条のヘラ描き沈線文を巡らせる。**450**は体部をタタキで調整する。器壁は薄い。**452**は底部。**453**は鉢。椀型で、外面は右へ回転させながら右上から左下へタタキで調整したのち、底部を上から下へヘラケズリする。**448**は弥生時代前期末。**447・449**は弥生時代中期初頭。その他はおおむね弥生時代終末期頃と考えられる。**454～475**は土師器。**454**は杯。やや深めの器形で、外面を緻密にヘラミガ



第139図　SD29中層出土遺物（1/2、1/4）

キする。456～465は高杯。456～459は杯部。456はハケののちヘラミガキ、457～459はヘラミガキで調整する。459は杯底部と脚部の境に剥離痕が観察できる。460～462・464・465は脚部。外面の調整は、461は板ナデで、それ以外はヘラミガキを施す。内面は横方向の板ナデまたはヘラケズリである。461は脚部に1箇所円孔が残される。杯部は丸みを持つと考えられる。463は杯部底部と口縁部の境に緩やかな段を持つ。464は脚部に不均等に配される4孔の円孔がある。466～471は甕。いずれも口縁部は直立気味に立ち上がる。467・468は口縁部に薄いヘラミガキが残される。472～474は甑把手。473は上向きに図化したが、下向きに



第140図　SD29 上層・層位不明出土遺物（ 1/2、1/4 ）

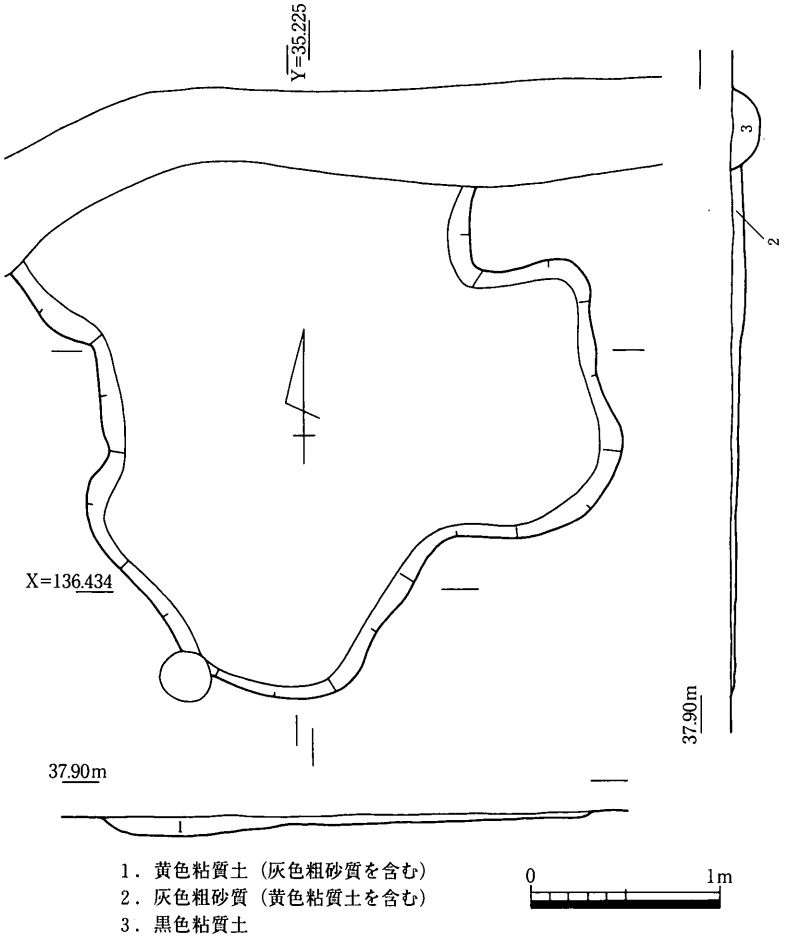
付く可能性がある。476～494は須恵器。476～482は杯身。いずれも体部下半部を回転ヘラ削りする。口縁端部は、480が先端を尖らせる以外は角張り気味である。482は受け部に重ね焼き痕跡が残る。483～490は蓋。489以外は杯蓋。頂部上半部は回転ヘラ削りする。おおむね頂部と口縁部の境は退化した突帯状の稜線が巡り、口縁端部は角張る。488は突帯状の稜線が退化して段状になり、口縁端部は尖らせる。489は有蓋高杯の蓋。つまみを持つ以外は他の杯蓋と調整・形態とも共通する。491・492は高杯脚部。491は杯部下半部を回転ヘラ削りし、底部内面にはカキメを同心円状に施す。脚部中位にもカキメを施し、長方形の透かし孔を4箇所に施す。透かし孔の上部には、孔を開ける際に付けたと思われる縦方向の工具痕が孔からはみ出して残されており、孔の上部はカットがうまく行かなかったようで、表面が平滑になっていない。493・494は甕口縁部。ともに口縁端部直下に突帯を巡らせる。口縁端部は493は上方へ引き上げる形態、494は四角く収める。495は打製石斧。安山岩。

下層出土遺物は弥生時代前期末～中期初頭、終末期のものが若干含まれるが、土師器・須恵器の時期はおおむね5世紀後半（TK23～TK47）頃に収まると考えられ、遺構の時期もこの頃と考えられる。

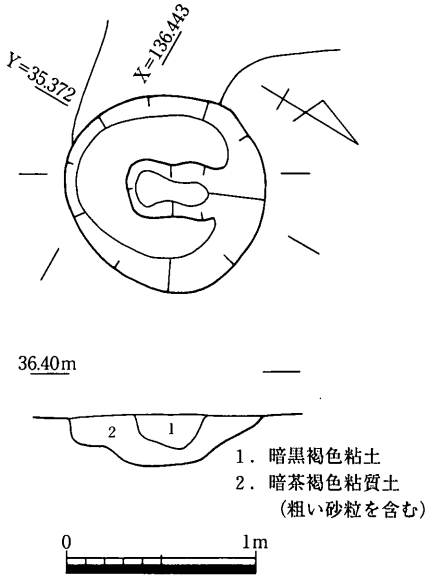
496～519は中層出土遺物である。496～506（498・503以外）は弥生土器。496・497は壷。496は長頸壷。頸部にはヘラ描きの沈線文と斜格子文を交互に配する。弥生時代中期後半頃。497は広口壷。頸部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は大きく開く。弥生時代後期後半。498～502は甕。498は土師器。口縁部は二重口縁気味に立ち上がる。499は下部の割れ口端にヘラ描き沈線が1条残る。500は逆L字形の口縁部を持つ。体部は無文。弥生時代前期末。501はタタキで調整する。503は土師器高杯。外面はヘラミガキ、内面は横方向のヘラ削りをする。脚部裾部は屈曲する。504～506はミニチュア土器鉢。いずれも手捏ねで、指押さえ痕やクラックを残す。507～510は土師器。507は杯。内外面ともヘラミガキする。508は甕。口縁部内面と外面はハケで調整し、内面はヘラ削りする。509・510は高杯。511～513は土師質土器。511は小皿。512・513は杯。いずれも13世紀代のもので、混入と考えられる。514～518は須恵器。514は杯身。下半部はヘラ削りする。515は杯蓋。頂部上半は回転ヘラ削りする。頂部と口縁部の境は段状の稜線を巡らせ、口縁端部は四角くする。516は有蓋高杯の蓋。頂部にはヘラ切り痕を残す。全面に自然釉が掛かり、頂部外面には重ね焼き痕と考えられる土器の付着痕がある。517・518は高杯。517は杯部と脚部の接合部付近。長方形の透かし孔が2箇所に残り、土器の残存状況から4箇所に配されたと考えられる。透かし孔の位置を決める際に付けたと思われるヘラ描きの縦方向の工具痕が、孔の上部の杯底部に残される。518は脚部に円形の透かし孔が3箇所に配される。519は楔形石器。上・下部に敲打痕を残す。サヌカイト製。

中層の遺物は弥生時代前期～後期までの遺物をわずかに含むが、土師器・須恵器の時期は5世紀後半～末（TK47）頃と考えられ、下層とは時期差はあまりないと考えられる。

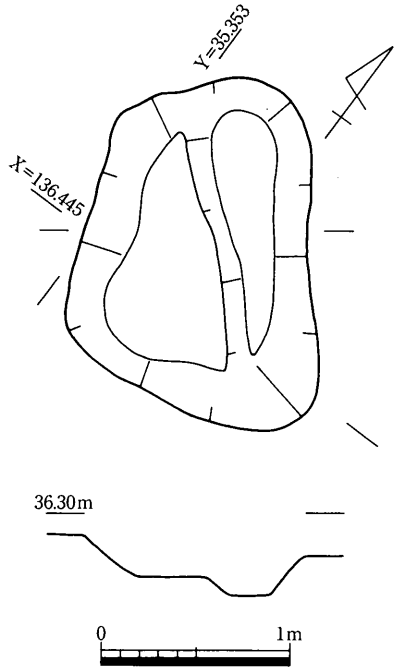
520～552は上層から出土した遺物である。520～524は弥生土器。520は広口壷。ラッパ状に開く口縁部で、弥生時代終末期～古墳時代初頭。521・522は甕。521は口縁端部に凹線を巡らせるもので、弥生時代中期後半頃と考えられる。522は外面をタタキの後ハケで調整する。523はミニチュア土器鉢。簡単な手捏ねで、指押さえ痕やクラックを残す。524は甑。底部に焼成前に1孔穿孔する。525～530は土師器。525は杯。526・527は高杯。やや摩滅しているものの、いずれも外面はヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリをする。526は脚部を杯底部へ押し当てて、周囲に粘土を足して接合した様子が剥離痕から見て取れる。528は甕。529・530は甑把手。直線的に延びるもので、上向きに図化したが、下向きの可能性もある。531～537は土師質土器。531～533は小皿。534・535は杯。いずれも13世紀代と考えられる。536は甕。11世紀中～後半。537は羽釜の鍔。10世紀前後。538～545は須恵器。538～540は杯身。いずれも下半部は回転ヘラケズリする。541は蓋。つまみが付くもので、口縁端部には返りが付く。頂部上半は回転ヘラケズリする。542は杯蓋。頂部と口縁部の境は段を持つ。口縁端部は面を持ち、中央部が若干窪む。543は壺または甕。口縁部中位に突帯を巡らせ、その上下に櫛描き沈線文を施す。544・545は高杯。544は杯部下半部を回転ヘラケズリするが、最底部までは及ばない。脚部との接合部で長方形と考えられる透かし孔の端が見えるが、孔の個数は不明である。



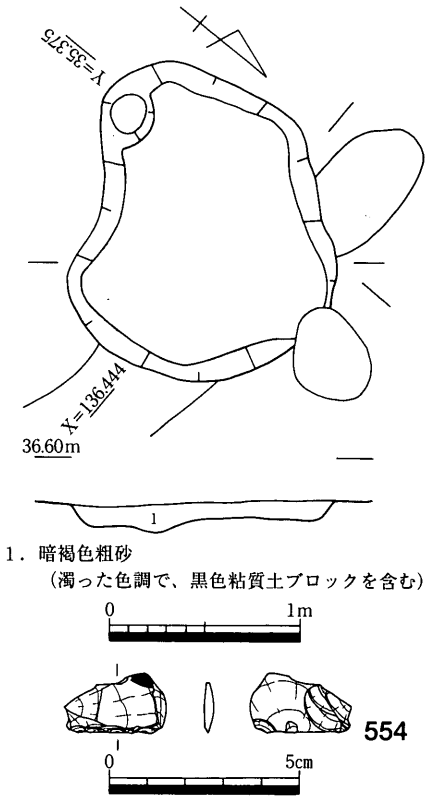
第141図　Ⅱ区SK39平・断面図（1/40）



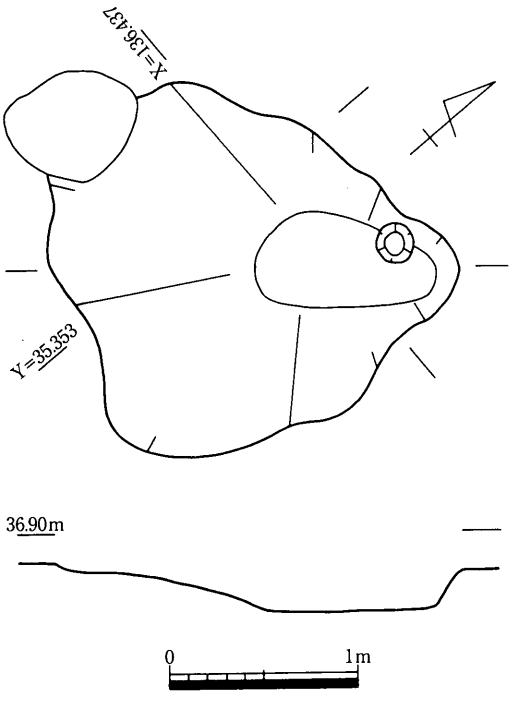
第142図　Ⅴ区SK65
平・断面図（1/40）



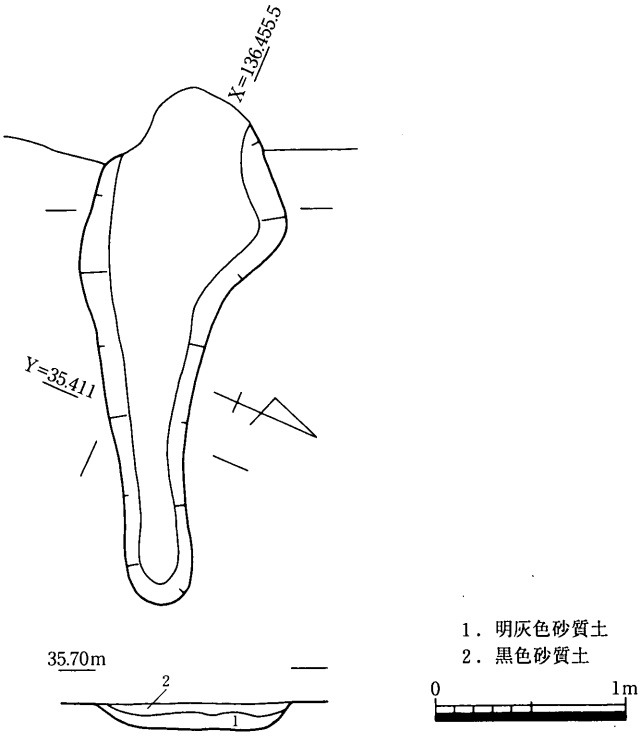
第144図　Ⅴ区SK69平・断面図（1/40）



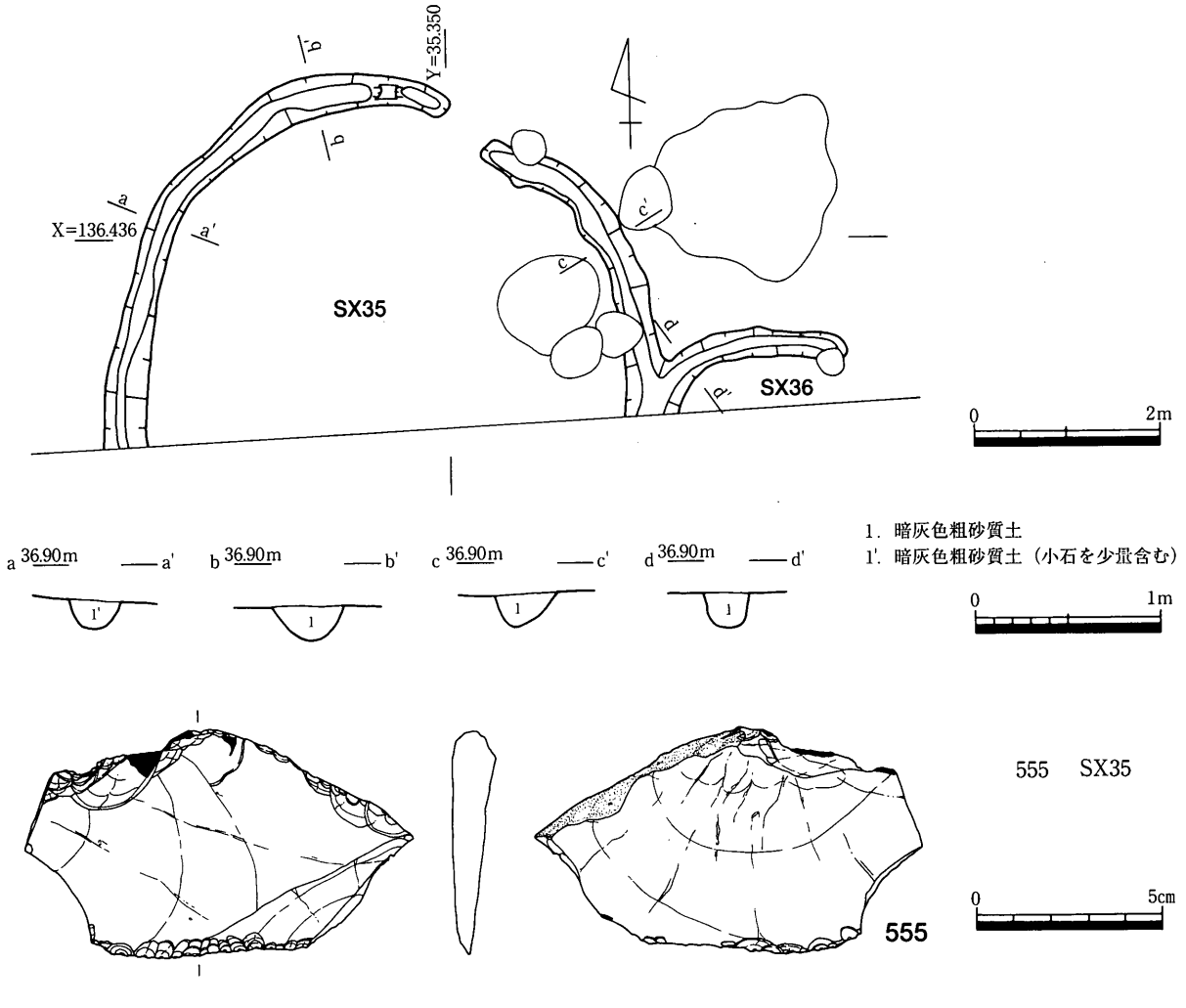
第143図　Ⅴ区SK68平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2）



第145図　V区SK75平・断面図（1/40）



第146図　Ⅵ区SK67平・断面図（1/40）



第147図　V区SX35・36平・断面図（1/40、1/80）、出土遺物（1/2）

545は長方形の透かし孔が2箇所に認められ、遺物の残存状況から3箇所に透かし孔があったと考えられるが、孔の幅や上端は不明であった。**546・547**は白磁。**546**は白磁Ⅳ類。口縁端部には玉縁状にする。残っていた範囲では全体に釉が掛かっている。**547**はⅣ類底部。見込み部分に沈線を1条巡らせる。残っている範囲では外面には釉は掛かっていない。ともに11世紀後半～12世紀前半。**548～552**は石器。サヌカイト製。**548**はスクレイパー。**549～551**は楔形石器。**552**は打製石斧。刃部に擦痕を残す。

上層出土遺物はわずかに弥生土器を含むが、おおむね5世紀末～7世紀に入るものまで出土しており、やや時期幅を持って埋没していったと考えられる。13世紀代の遺物は混入と考えられる。

553はトレンチから出土した層位不明遺物。須恵器甕。口縁端部は上を向き、口縁端部下部に突帯を巡らせる。頸部外面の一部には粘土を足して補強した痕跡が残る。

（4）弥生時代後期～古墳時代の遺構・遺物

以下では、出土遺物がなく、遺構の時期を決めがたいが、埋土や遺構の配置等から中世までは下らない遺構について記述する。

Ⅱ区SK39（第141図）

Ⅱ区E5グリットで検出した土坑である。SD28により北側の肩を壊され、これより北では検出できなかった。平面形態は不定形で、長軸2.80m、短軸2.03m、深さは10cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は黄色粘質土・灰色粗砂質土である。埋土中からは土器小片とサヌカイト片が出土しただけであった。

遺構の時期は明らかではないが、SD28に壊されることから、弥生時代後期～古墳時代後期のいずれかと思われる。

Ⅴ区SK65（第142図）

Ⅴ区D12グリットで検出した土坑である。周溝墓20の上面で検出した。円形で、直径1.07m、深さ26cm、断面形状は中央部分がやや窪み、埋土は暗茶褐色粘質土と暗黒褐色粘土である。埋土中からの出土遺物はない。

遺構の時期は埋土により弥生時代～古墳時代の可能性が高い。

Ⅴ区SK68（第143図）

Ⅴ区D12グリットで検出した土坑である。周溝墓18の上面で検出した。不整円形で、長軸1.70m、短軸1.16m、深さ15cm、断面形状は浅い逆台形で、埋土は暗褐色粗砂である。埋土中からは土器小片とサヌカイト片が出土した。

554はサヌカイト片。下部に調整痕がある。刃部を下にして図化したが、石鏃の未製品の可能性がある。

遺構の時期は埋土により弥生時代～古墳時代の間に収まるものと思われる。

Ⅴ区SK69（第144図）

Ⅴ区D12グリットで検出した土坑である。不整円形で、長軸1.80m、短軸1.18m、深さ22cm、断面形状は二段掘り状になる。埋土中からは須恵器甕片やサヌカイト片が出土した。

遺構の明確な時期は決め難いが、出土遺物から古墳時代の可能性が高いと思われる。

Ⅴ区SK75（第145図）

Ⅴ区E11グリットで検出した土坑である。不整円形で、長軸2.18m、短軸1.60m、深さ22cm、断面形状は南西側がなだらかで、北東側が立ち上がりが急になる。埋土中からは土器やサヌカイトの小片が出土した。

遺構の時期は決め難いが、周囲に中世まで下る遺構はなく、弥生時代～古墳時代の間と思われる。

Ⅵ区SK67（第146図）

Ⅵ区D14グリットで検出した土坑である。SD64の下部で検出した。長楕円形で、長軸2.70m、短軸0.33～1.03m、深さ14cmで、断面形状は浅い皿状、埋土は明灰色砂質土・黒色砂質土である。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は決め難いが、遺構の前後関係と埋土から弥生時代～古墳時代の間と思われる。

Ⅴ区SX35（第147図）

Ⅴ区E11グリットで検出した円形に巡る溝状遺構である。幅23～40cm、深さ18～20cmを測り、埋土は暗灰色粗砂質土、断面形状はボウル状である。溝の直径は、内側で推定5.28mである。北東部に溝が途切れた部分を持つ。東側では溝をSX36と共有する。埋土中からはサヌカイト製のスクレイパーが出土した以外は出土遺物はなかった。埋土より弥生時代頃と考えられる。周溝墓群に隣接し、SX35は周溝墓とも考え得るが、Ⅴ・Ⅶ区の他の周溝墓に比べて溝の規模が小さい割に深いことを考え、周溝墓としては報告しない。

555はスクレイパー。サヌカイト製。片面にのみ刃部を作る。

Ⅴ区SX36（第147図）

Ⅴ区E11グリットで検出した溝状遺構である。SX35と同様円形に巡り北東部に途切れた場所を持つと考えられる。西側はSX35と共有する。溝の幅は15cm、深さ20cm、埋土は暗灰色粗砂質土、断面形状は逆台形である。埋土中からは出土遺物はなかったが、埋土より弥生時代と考えられる。SX35と同様の理由で周溝墓としては報告しなかった。

（5）中世の遺構・遺物

Ⅰ・Ⅱ区の微高地上を中心に多数の中世のピット、土坑、溝状遺構を検出した。ピットはⅠ・Ⅱ区で多数検出したが、なかには焼土塊の混じるものも多く検出した。建物はⅠ・Ⅱ区でそれぞれ1棟ずつ復元したが、さらに増える可能性もある。溝状遺構は条里型地割に沿うものが多く検出され、地割を構成するものを数多く検出した。

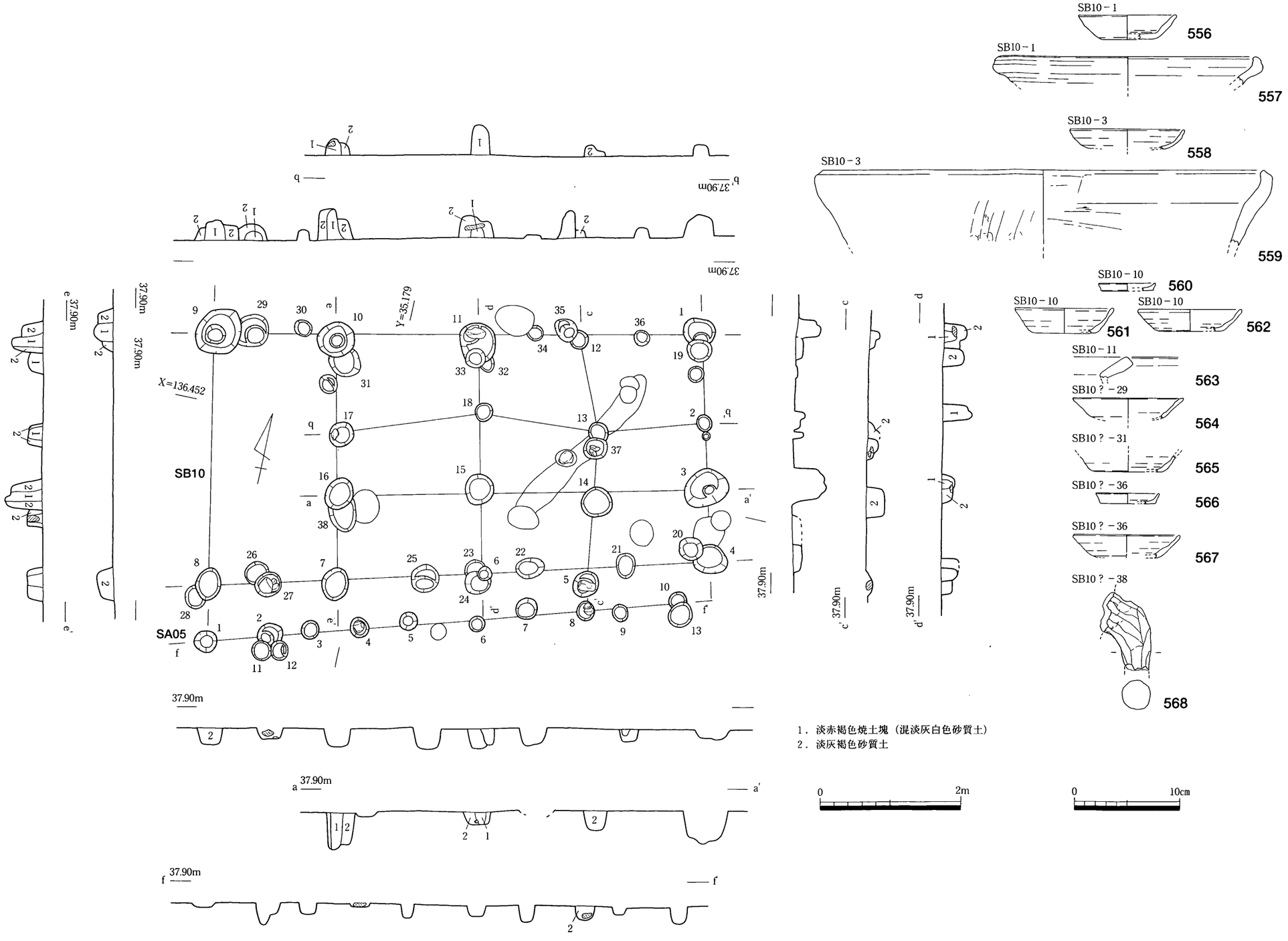
遺構の時期は13世紀代のものが大半であるが、12世紀代まで遡るものも若干認められる。

Ⅰ区SB10・SA05（第148図）

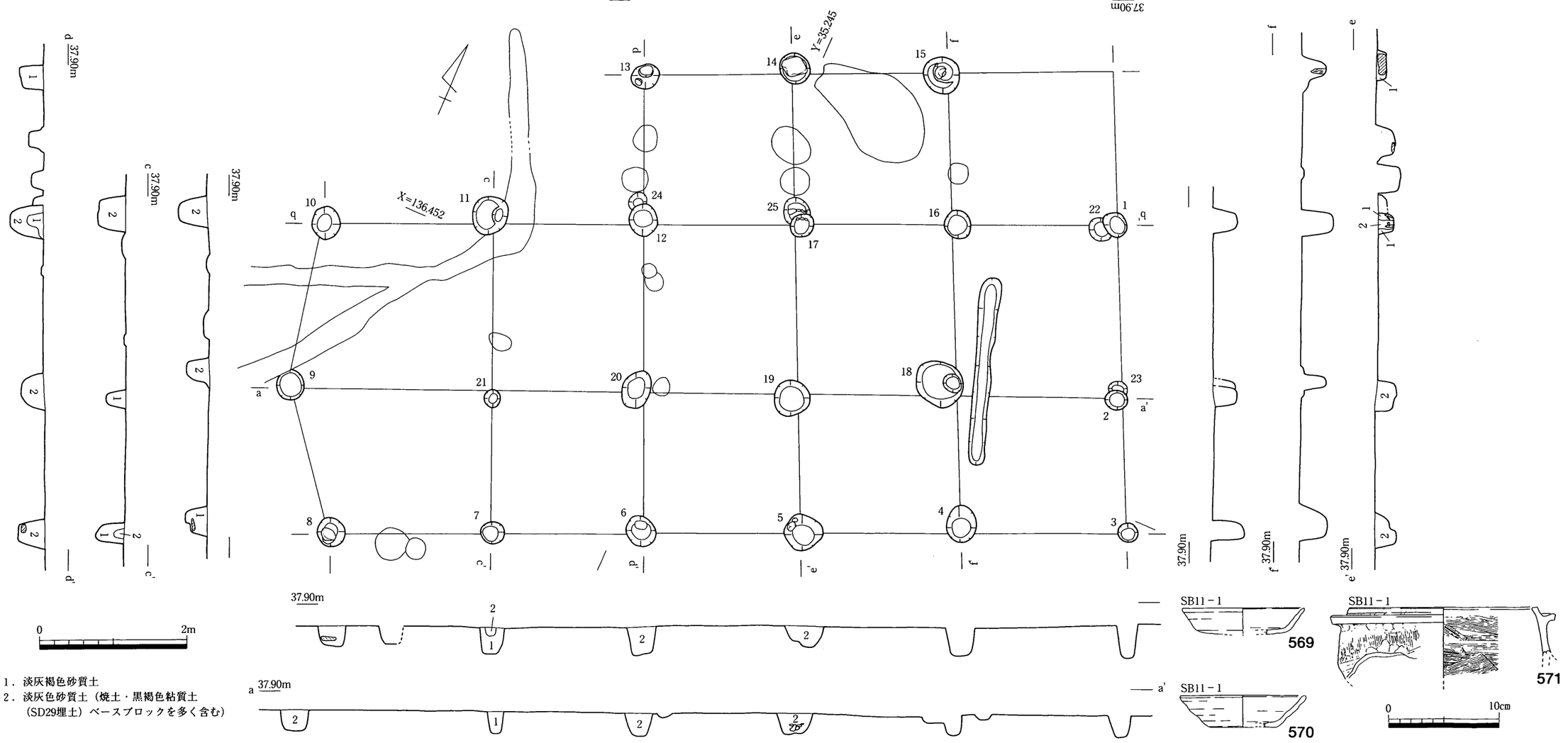
Ⅰ区D2・3で検出した掘立柱建物跡である。桁行4間（7.32m）、梁間3間（3.30～3.65m）であるが、西側柱穴列では中間の2穴を欠く。南側の柱穴列では、梁を通す柱の中間にそれぞれ1穴ずつ検出しており、これらも掘立柱建物を構成する柱と思われる。重複する柱穴も数穴見られ、部分的に柱の建て替えがあったのかもしれない。建物の南側約66cmの位置では目隠し塀になると考えられる柵列を検出した。主軸方位はN79°W、面積は約25.4㎡である。柱間は桁行が1.50～2.10m、梁間が0.99～1.44m、柱穴の形状はおおむね円形で、直径21～63cm、深さ15～54cm、埋土はおもに淡灰褐色砂質土で、焼土塊が混ざるものも多い。柱穴の中には柱痕の残るもの、根石の残るものもあった。柱穴埋土中からは土師質土器小皿・杯・羽釜等が出土した。

SA05はSB10の南側0.60～0.75mの位置で検出した柵列である。主軸方位はN73°Eで、SB10とほぼ平行であるが、やや東側でSB10の方へ寄る。西側は柱列をSB10に揃えるが、そのほかの柱穴はあまりSB10を意識していないようだ。柵列は9間を数え、延長は6.90m、柱間は48～90cm、柱穴の形状は円形で直径21～39cm、深さ7.5～33cm、埋土は淡灰褐色砂質土である。西から4穴目には礎石が残されていた。SB10との位置関係から、SB10の目隠し塀と考えられる。

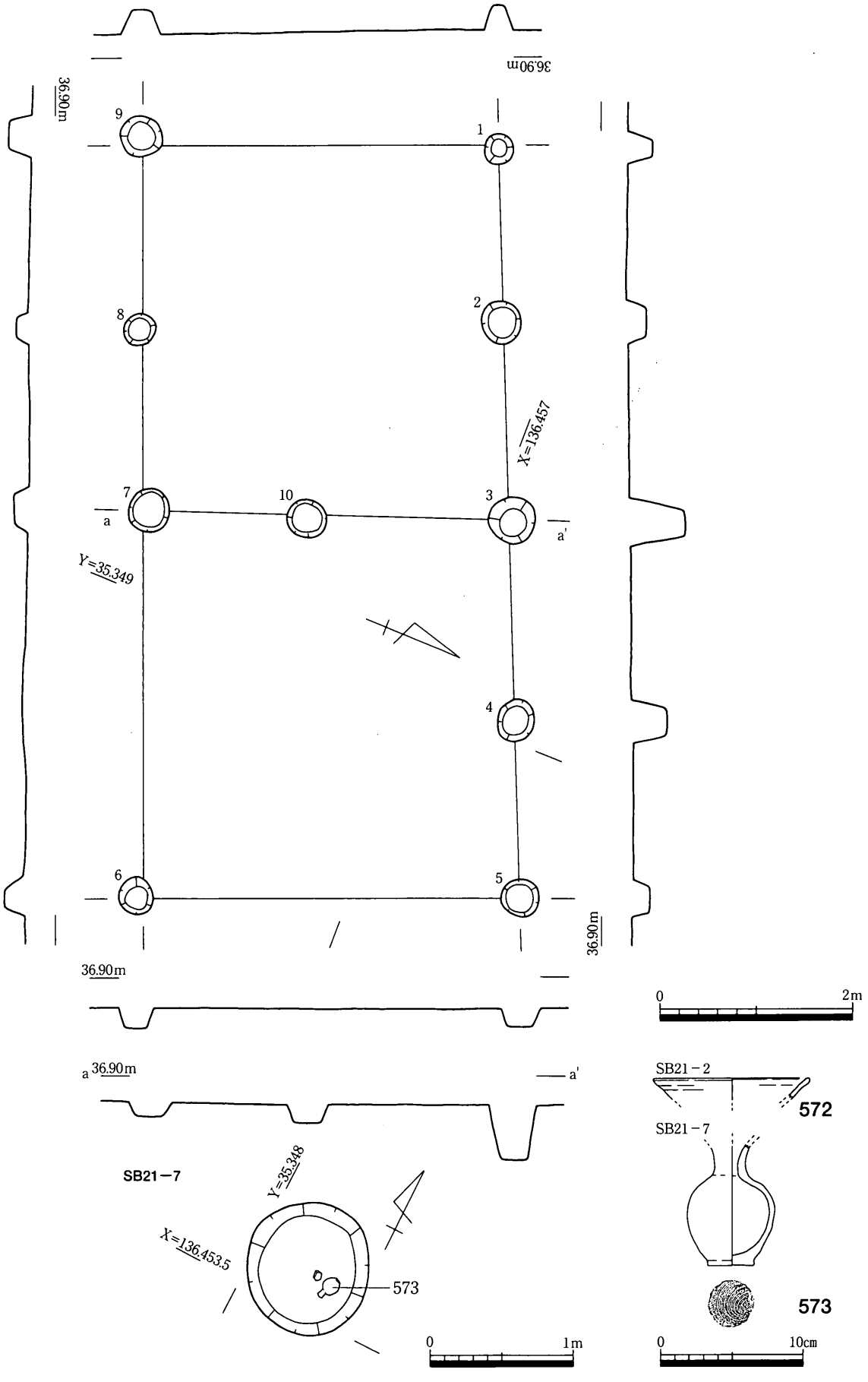
556～563は柱穴から出土した遺物。**556・557**はSB10－1出土遺物。**556**は土師質土器杯。杯DⅡ－7。**557**は須恵器捏鉢。**558・559**はSB10－3出土遺物。土師質土器。**558**は皿。**559**は土鍋。SP23出土遺物と接合し



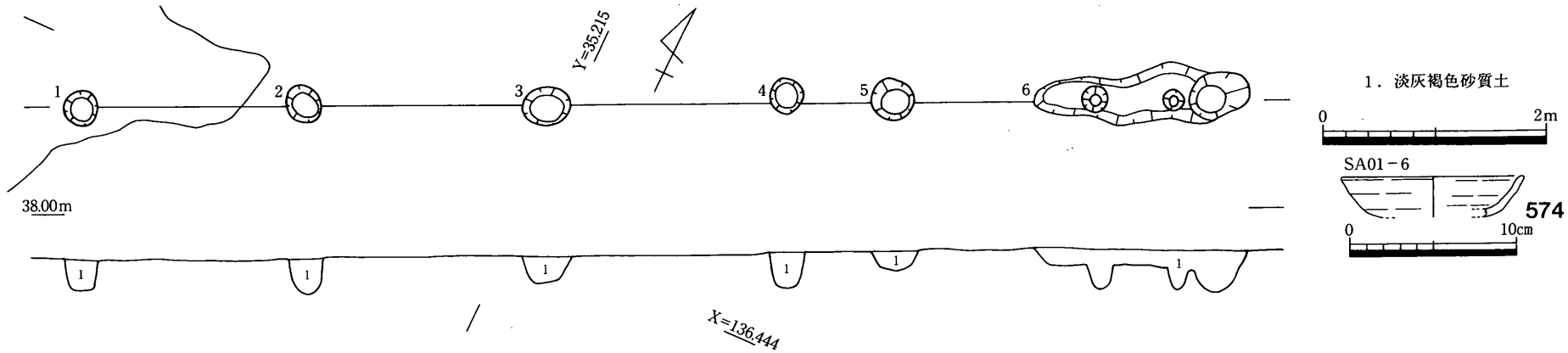
第148図　Ⅰ区SB10・SA05平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



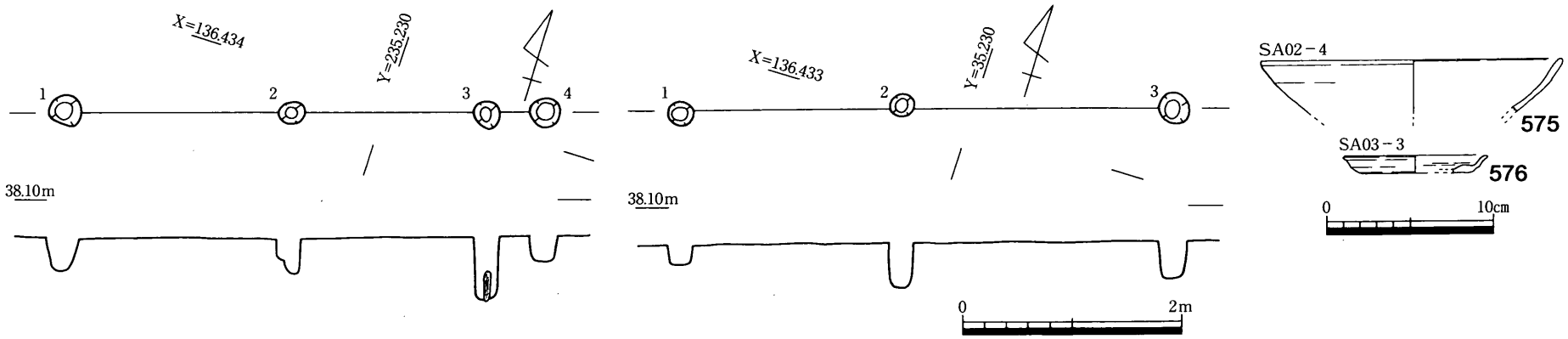
第149図　Ⅱ区SB11平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



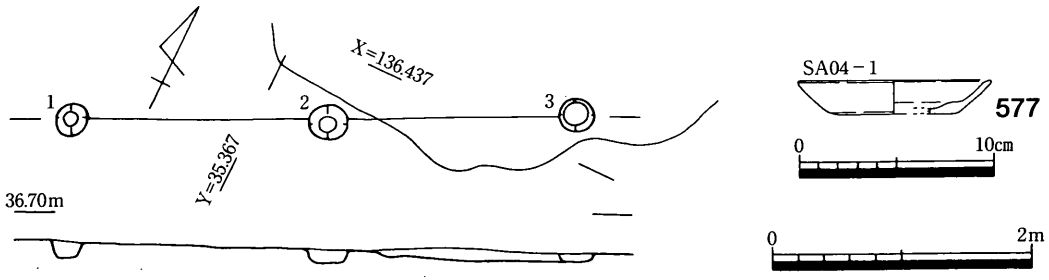
第150図　Ⅶ区SB21平・断面図（1/60）、遺物出土状況（1/40）、出土遺物（1/4）



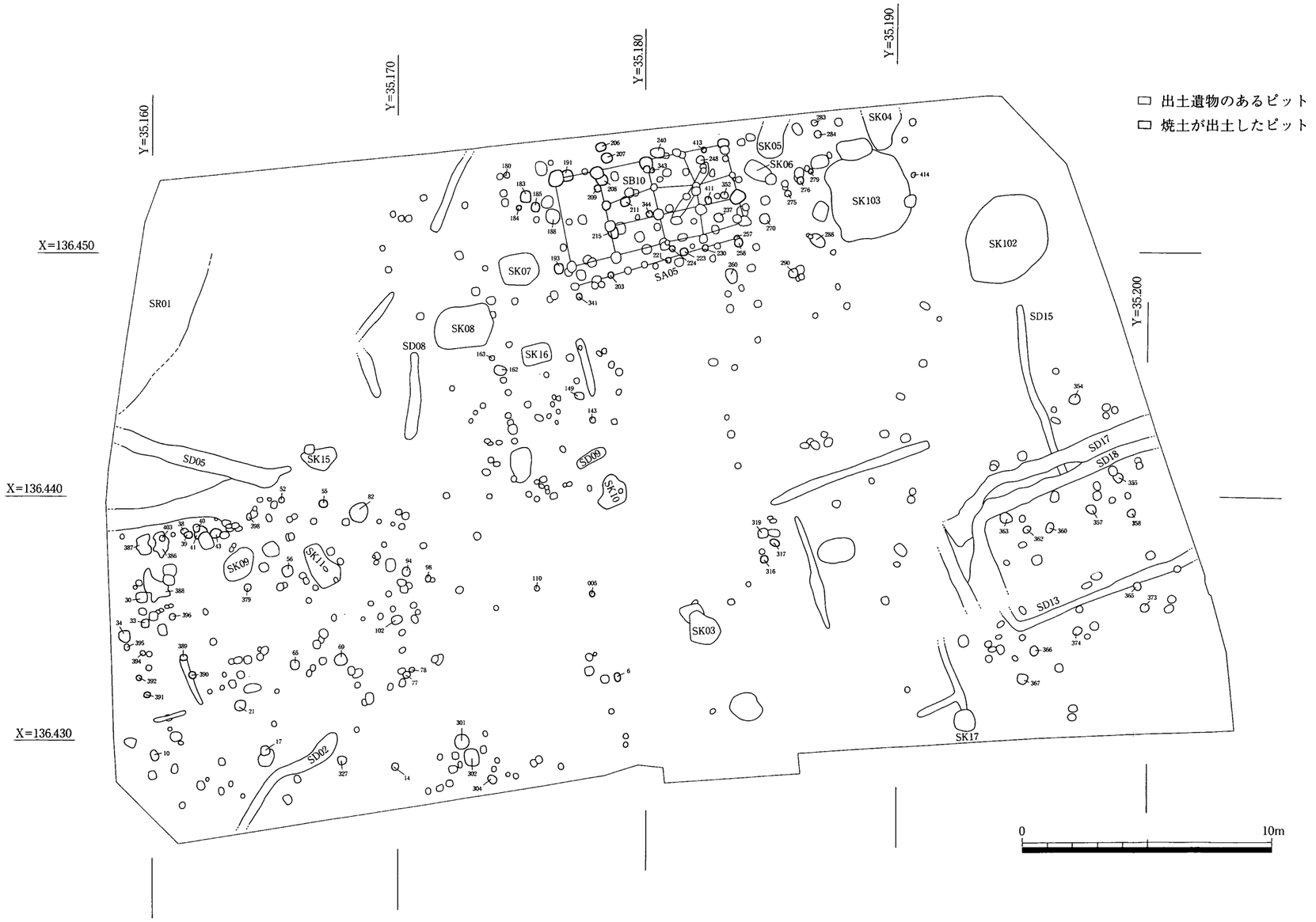
第151図　Ⅱ区SA01平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第152図　Ⅱ区SA02・03平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第153図　Ⅴ区SA04平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第154図　Ⅰ区ピット配置図（ 1/200 ）

た。**560～562**はSB10－10出土遺物。土師質土器。**560**は小皿。**561・562**は杯。**563**はSB10－11出土遺物。土師質土器土鍋口縁部。これらの出土遺物はおおむね13世紀中頃～14世紀前半頃と考えられる。**564～568**はSB10の柱穴の可能性があるピットから出土した遺物である。**564**はSB10－29出土、**565**はSB10－31出土遺物。ともに土師質土器杯。**566・567**はSB10－36出土遺物。土師質土器。**566**は小皿。**567**は杯。**568**はSB10－38出土遺物。土師質土器足釜の脚部。これらの出土遺物はおおむね13世紀中頃～14世紀前半頃と考えられ、SB10出土遺物の時期と合致する。

遺構の時期は出土遺物から13世紀中頃～14世紀前半と考えられる。

Ⅱ区SB11（第149図）

Ⅱ区D5グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行5間（10.92m）、梁間3間（6.36m）と考えられ、北東隅のピットと北側柱列の西から1・2穴のピットは検出できなかった。柱間は桁行がおおむね2.01～2.31m、梁間が1.86～2.55m、柱穴の形状はおおむね円形で、直径30～72cm、深さ18～43.5cm、埋土は淡灰褐色砂質土で、焼土やSD29の埋土ブロックが混ざる場合もある。主軸方位はN24°W、梁間を3間とすれば、面積は約69.5㎡を測る。検出できなかったピットは元来存在せず、北側と東側に2間×1間の庇を持つ建物に復元すれば、母屋面積は約36.6㎡となり、SB10と比べても突出したものとはならないと考えられる。柱穴の中には柱痕跡や根石が残されるものもあった。東から2列目の柱穴列の25～50cm東側で、幅25.5cm・延長2.60mの溝状遺構を検出し、そこには21枚の土師質土器皿と7枚の土師質土器杯が埋められていた。この遺構はSB10を建築した際に地鎮的な役割を果たしたと考えられる。柱穴の埋土中からは土師質土器杯等が出土した。

569～571はSB11－1から出土した。いずれも土師質土器。**569・570**は杯。**571**は足釜。脚部が剥離した痕跡が見られる。

遺構の時期はおおむね13世紀中頃～後半頃と考えられる。

Ⅶ区SB21（第150図）

Ⅶ区D11グリットで検出した掘立柱建物跡である。桁行4間（7.74～7.80m）、梁間2間（3.75～3.93m）であるが、東西梁間列の中央のピットおよび南側柱列の東から2穴目は検出できなかった。柱間は桁行で1.86～2.04m、梁間は1.65mおよび2.10mである。柱穴の形状は円形で、直径30～42cm、深さ12～60cmである。建物の主軸方位はN22°W、面積は約29.1㎡である。SB21－7からは須恵器壺がほぼ完形で出土した。地鎮的な意味合いがあったと考えられる。

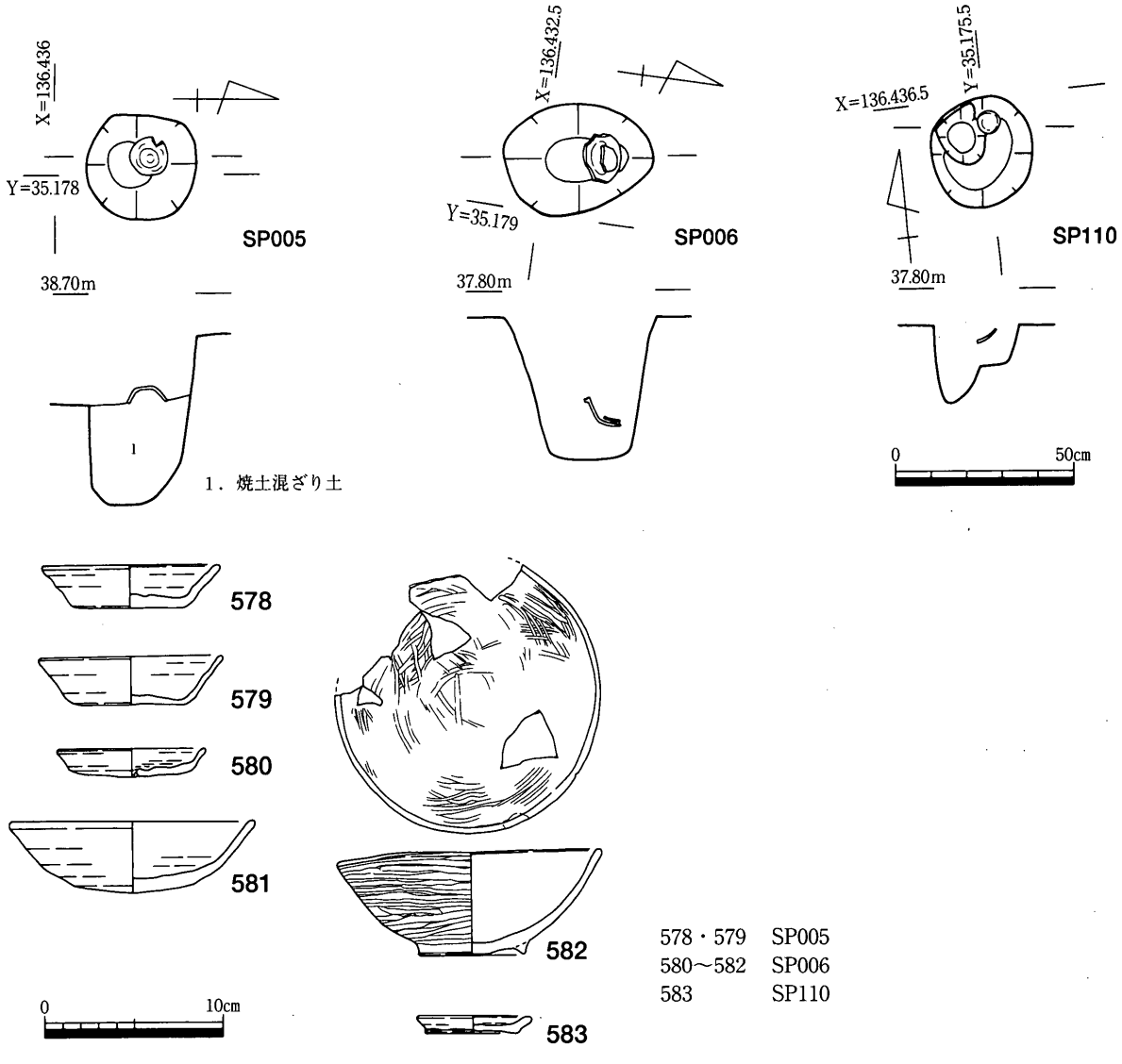
572はSB21－2出土遺物。土師質土器杯。小片。**573**はSB21－7出土遺物。須恵器壺。口縁部を欠くほかは完形。底部は回転糸切り痕が残る。外面には火襷がかかる。9世紀代。

遺構の時期は出土遺物の遺存状態から考えれば9世紀代と考えられるが、他の遺構の検出状況や主軸方位から考えれば土師質土器の時期である13世紀代の可能性もある。

Ⅱ区SA01（第151図）

Ⅱ区D4グリットで検出した柵列跡である。7間分（10.41m）を検出したが、柱間にはばらつきが多い。東端部の3穴の柱穴は幅51cm、深さ15cm、延長1.92mの溝状遺構の中に掘り込まれたようで、3穴が連結した状態で検出した。柱間は0.05～1.86m、主軸方位はN64.5°Eである。柱穴の形状は円形で、直径21～54cm、深さ18～39cm、埋土は淡灰褐色砂質土で、東端部の溝状遺構も同じ埋土である。埋土中からは土師質土器杯が出土した。

574はSA01－6出土遺物。土師質土器杯。13世紀中頃～後半で、遺構の時期も同時期と考えられる。



第155図　Ⅰ区SP005・006・110平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

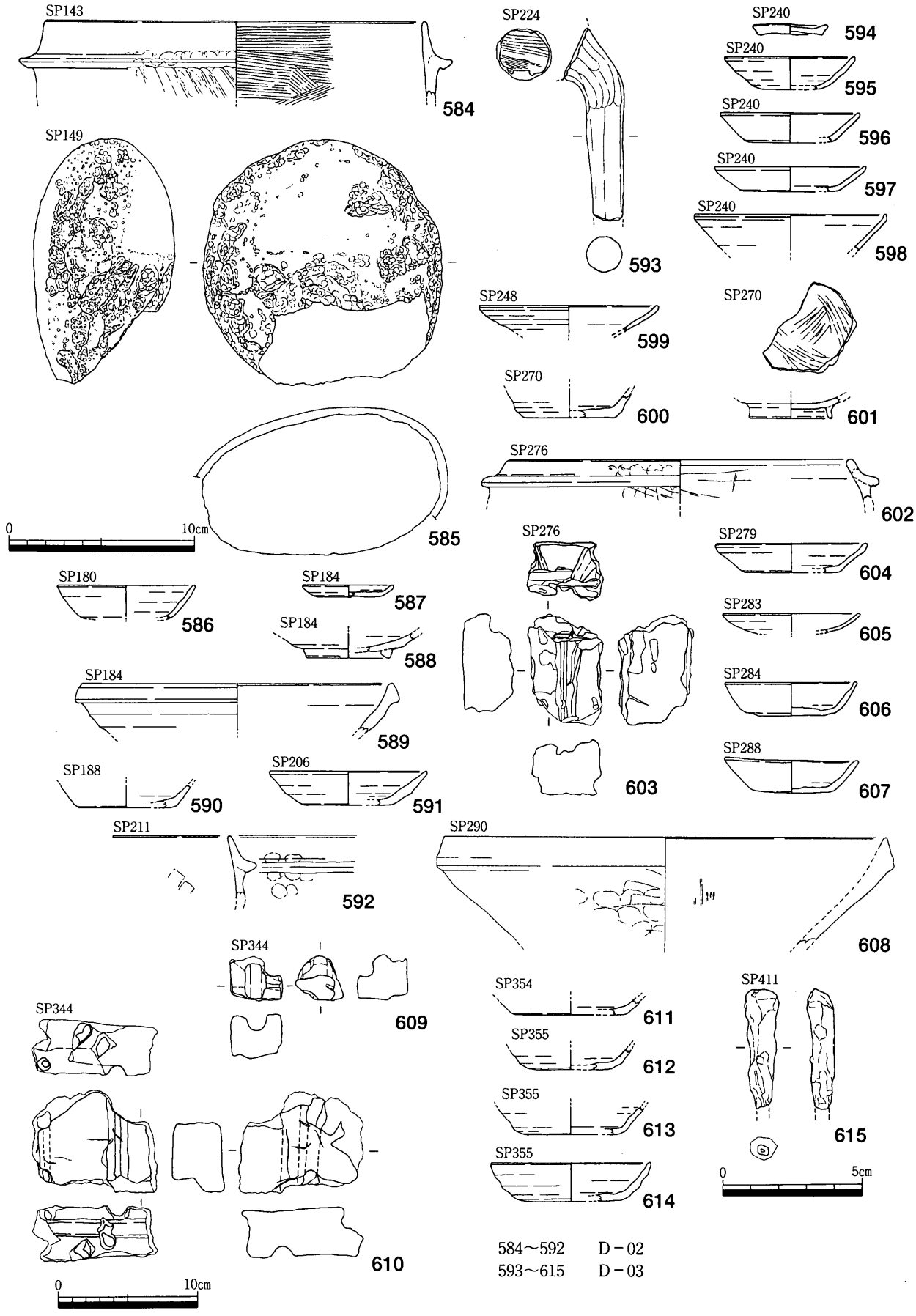
Ⅱ区SA02（第152図）

Ⅱ区E5グリットで検出した柵列跡である。SA03の北側0.60mの位置で検出した。3間分（4.47m）を検出したが、東端の2穴の柱間は短い。柱間は東端が0.24m、他は1.5～1.8m、主軸方位はN72°Eである。柱穴の形状は円形で、直径24～30cm、深さ24～60cmを測る。東から2穴目の柱穴には柱材が遺存していた。柱穴からは土師質土器が出土した。

575はSA02－4出土遺物。土師質土器杯または椀。破片が小さく、口径はやや不確かである。

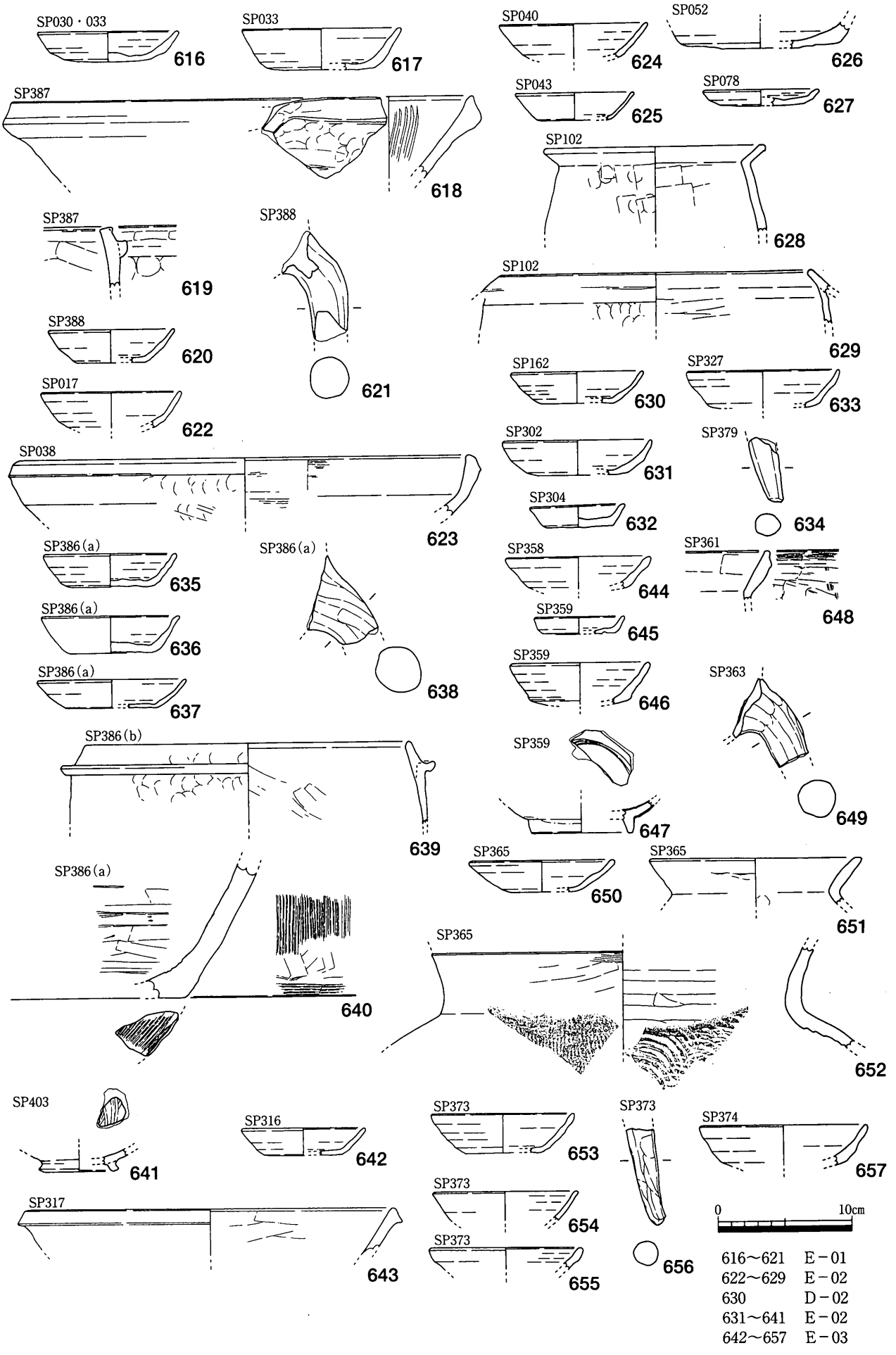
Ⅱ区SA03（第152図）

Ⅱ区E5グリットで検出した柵列跡である。SA02の0.60m南側で検出した。2間分（4.50m）を検出した。柱間は2.01～2.49m、主軸方位はN73°Eである。柱穴の形状は円形で、直径24～30cm、深さ18～42cmである。



584～592　D－02
593～615　D－03

第156図　Ⅰ区ピット出土遺物（1）（1/2、1/3、1/4）



616～621　E－01
622～629　E－02
630　D－02
631～641　E－02
642～657　E－03

第157図　Ⅰ区ピット出土遺物（2）（1/4）

□ 出土遺物のあるピット
□ 焼土が出土したピット

Y = 35.210
Y = 35.220
Y = 35.230
X = 136.460
Y = 35.240
Y = 35.250
Y = 35.260
X = 136.450
X = 136.440
X = 136.430

SK18 SK19 SK24 SK25 SK42 SK37 SK38 SK35 SK27 SK109 SK43
SD21 SD22 SD23 SD24 SD25 SD26 SD30 SD31 SD33 SD34 SD36 SD37 SD38 SD39 SD42 SD43 SD44 SD45 SD47 SD48
SB11
SA01 SA02 SA03
礎石1 礎石2

0 10m

第158図　Ⅱ区ピット配置図（ 1/200 ）

576はSA03－3出土遺物。土師質土器小皿。

遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

Ⅴ区SA04（第153図）

Ⅴ区E12グリットで検出した柵列跡である。2間分（4.02m）を検出した。柱間は2.01m、主軸方位はN64°Eである。柱穴の形状は円形で、直径24～30cm、深さ6～13.5cmである。柱穴からは土師質土器皿が出土した。

577はSA04－1出土遺物。土師質土器皿。11世紀後半～12世紀前半。

遺構の時期も同時期と考えられる。

Ⅰ区SP005（第155図）

Ⅰ区E2グリット、SD01の上面で検出したピットである。楕円形で長軸30.5cm、短軸27cm、深さは28cmで、埋土は焼土が混ざるものである。埋土の中位付近でほぼ完形の土師質土器杯がうつ伏せになって埋められていた。

578・579は土師質土器杯。ともにほぼ完形で、焼けムラがある。**578**は火襷がみられ、焼成状況は非常にいい。ともに13世紀中頃～14世紀前半で、遺構の時期も同じである。

Ⅰ区SP006（第155図）

Ⅰ区E2グリットで検出したピットである。楕円形で長軸42cm、短軸29cm、深さ39cmである。ピット内からは土師質土器や黒色土器椀が出土した。

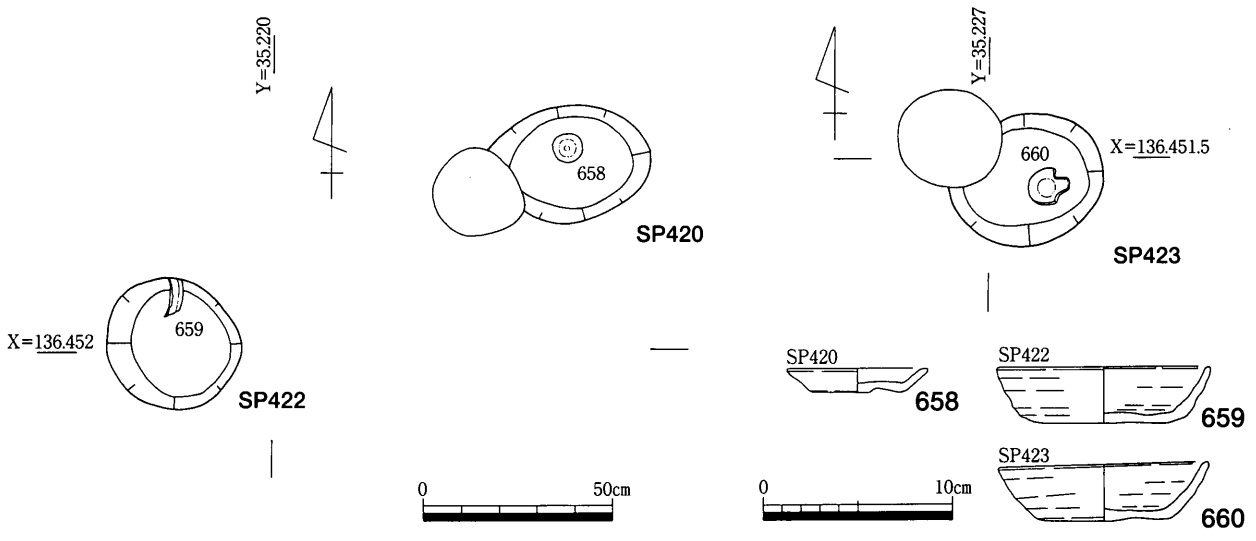
580・581は土師質土器。**580**は小皿。**581**は杯。底部に板圧痕が残る。**582**は黒色土器A椀。内外面に横方向のヘラミガキを施す。底部外面にはヘラ切り痕が残り、高台部直上にはヘラケズリ痕はない。

遺物の時期は12世紀代と考えられ、遺構の時期も同じと考えられる。

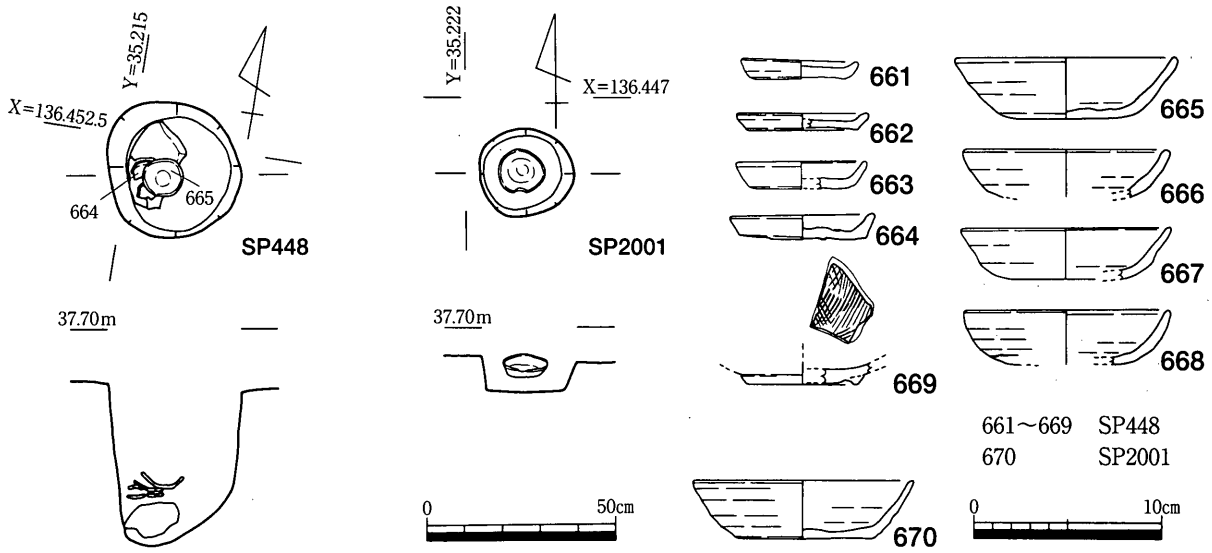
Ⅰ区SP110（第155図）

Ⅰ区E2グリットで検出したピットである。断面は北側に落ち込みを持つ、二段掘りの形状である。円形で直径30cm、深さは浅い部分が10cm、底部分は21cmである。埋土の上方から土師質土器小皿が完形で上向きで出土した。

583は土師質土器小皿。底部外面は右向きの回転ヘラ切りで、板圧痕を残す。13世紀中頃～14世紀前半。



第159図　Ⅱ区SP420・422・423遺物出土状況（1/20）、出土遺物（1/4）



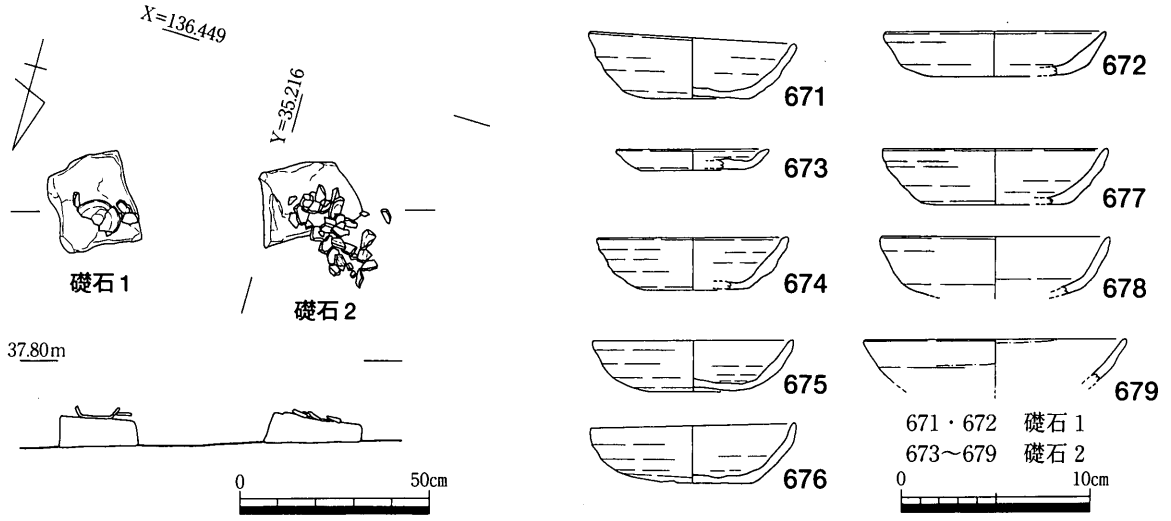
第160図　Ⅱ区SP448・2001遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

遺構もこの時期と考えられる。

Ⅰ区その他ピット出土遺物（第154・156・157図）

Ⅰ区からはD2・3、E2・3区を中心に多数のピットを検出した。ピットはおおむね黒褐色粘質土、淡褐色粘質土に分類され、前者が古墳時代後期、後者が中世に分類されるようであるが、個別のピットについて時期分けはできていない。中世のピットには焼土が混ざっているものも多くみられた。

584はSP143出土。土師質土器羽釜。鍔の上部に粘土を足して口縁部を作る。13世紀末～14世紀前半。**585**はSP149出土。叩き石。側縁部を中心に敲打痕を残す。**586**はSP180出土。土師質土器杯。13世紀後半～14世紀前半。**587～589**はSP184出土。**587・588**は土師質土器。**587**は小皿。13世紀中頃～14世紀前半。**588**は椀。底部外面にはヘラ切り痕を残し、底部と体部の境付近にヘラケズリを施す。**589**は須恵器捏鉢。口縁端部外面に自然釉が付着。13世紀代。**590**はSP188出土。土師質土器杯底部。13世紀代。**591**はSP206出土。土師質土器杯。13世紀代。**592**はSP211出土。土師質土器足釜。鍔の下部に接合痕が見える。13世紀末～14世紀前半。**593**はSP224出土。土師質土器足釜脚部。脚内面にハケが観察できる。**594～598**はSP240出土。すべて土師質土器。**594**は小皿。歪みが著しい。底部には時計回りのヘラ切り痕が残る。**595～598**は杯。おおむね13世紀代に収まる。**599**はSP248出土。土師質土器杯。他よりやや古く、11世紀末頃。**600・601**はSP270出土。**600**は土師質土器底部。**601**は吉備系土師器椀。内面にはヘラミガキを施す。12世紀前半頃。**602・603**はSP276出土。**602**は土師質土器足釜。鍔の上部と下部に接合痕がある。**603**は壁土か。方柱状を呈し、表面には溝状の窪みが数箇所にある。土師質の焼成。13世紀末～14世紀前半。**604**はSP279出土。土師質土器杯。口縁端部をわずかに上部へ引き上げる器形。13世紀末～14世紀前半。**605**はSP283出土。土師質土器小皿。12世紀代。**606**はSP284出土。土師質土器杯。13世紀中頃～後半。**607**はSP288出土。土師質土器杯。13世紀中頃～後半。**608**はSP290出土。土師質土器擂鉢。4条以上1単位の擂り目が1箇所見える。内面の器表面は全体に薄く剥離する。**609・610**はSP344出土。ともに壁土か。方柱状の粘土塊の表面に溝状の窪みが数条走る。**611**はSP354出土。土師質土器杯。**612～614**はSP355出土。いずれも土師質土器杯。おおむね13世紀代。**615**はSP411出土。棒状の鉄製品。断面長方形で中空。**616・617**はSP033出土。**616**は土師質土器皿。SP030と接合した。**617**は土師質土器杯。12世紀前半～13世紀前半頃。**618・619**はSP387出土。**618**は土師質土器擂鉢。楠井産か。5条1単位の擂り目を施す。外面には煤が付着する。**619**は土師質土器足釜。鍔部に接合痕を残す。13～14世紀。**620・621**はSP388出土。いずれも土師質土器。**620**は杯。**621**は足釜脚部。13世紀後半～14世紀



第161図　Ⅱ区礎石遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

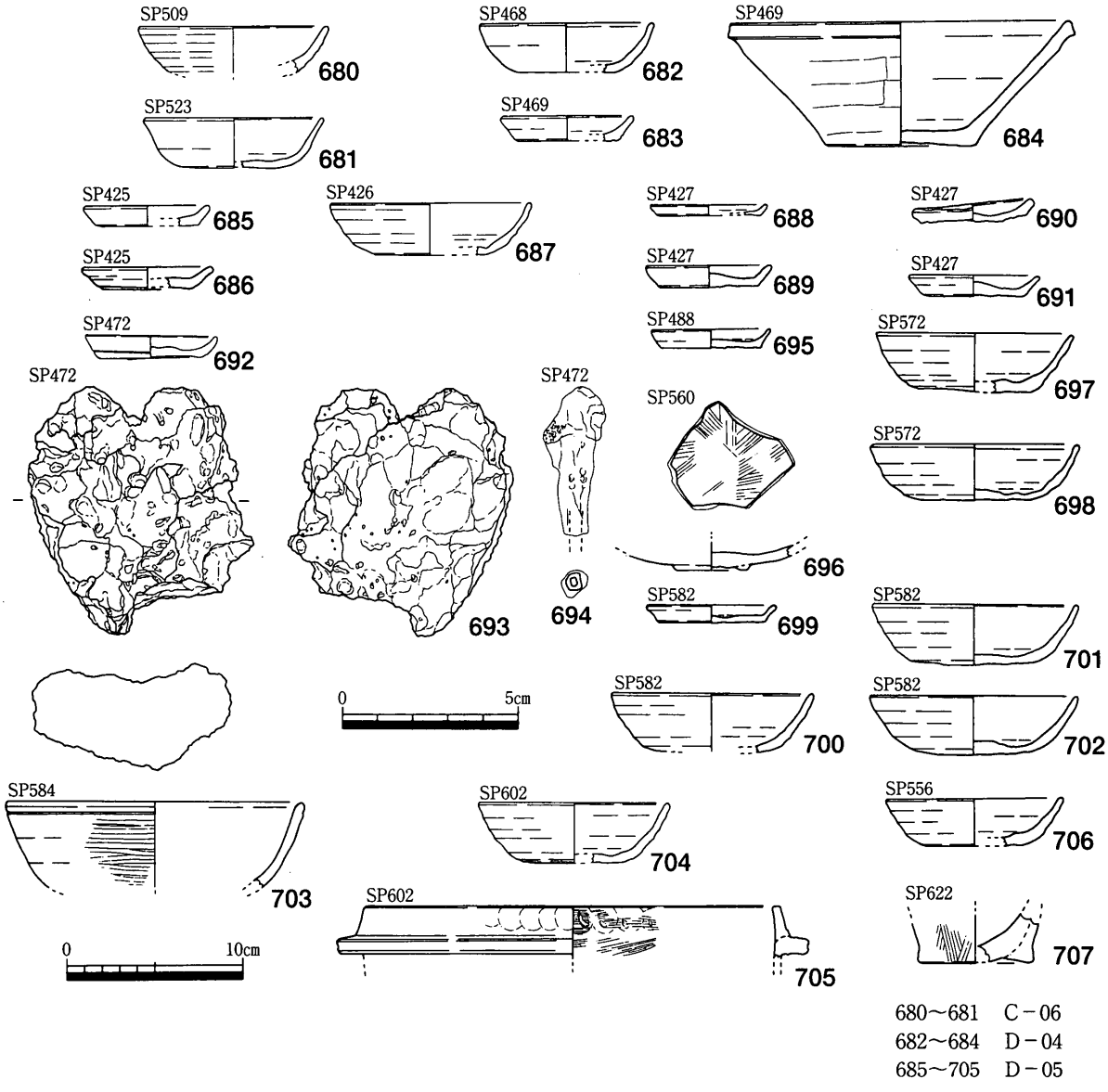
前半。**622**はSP017出土。土師質土器杯。13世紀代。**623**はSP038出土。土師質土器鍋。口縁部が内湾し、外面には煤が付着する。14世紀末。**624**はSP040出土。土師質土器杯。13世紀前半～中頃。**625**はSP043出土。土師質土器杯。13世紀末～14世紀前半。**626**はSP052出土。土師質土器杯。**627**はSP078出土。土師質土器皿。12世紀後半～13世紀前半。**628・629**はSP102出土。**628**は弥生土器。甕。外面には指頭痕が顕著に残る。**629**は土師質土器羽釜。鍔の上部に粘土を足して口縁部を作る。13世紀末～14世紀前半。弥生土器は混入と思われる。**630**はSP162出土。土師質土器杯。13世紀後半～14世紀前半。**631**はSP302出土。土師質土器杯。やや古い時期のもので、11世紀末～12世紀前半。**632**はSP304出土。土師質土器小皿。13世紀中頃～14世紀前半。**633**はSP327出土。土師質土器杯。13世紀代。**634**はSP379出土。土師質土器足釜脚部。**635～640**はSP386出土。**640**以外は土師質土器。**635～637**は杯。**635**は底部に板圧痕を残す。**638**は足釜脚部。**639**は足釜。鍔の上側に粘土を足して口縁部を作っている。**640**は須恵器底部。甕か。内面はヘラケズリ、外面は縦方向のカキメが見える。ピットの時期は13世紀後半頃。**641**はSP403出土。黒色土器A椀小片。内面にヘラミガキが観察できる。12世紀後半。**642**はSP316出土。土師質土器杯。13世紀後半～14世紀前半。**643**は土師質土器捏鉢。器形は須恵器か。13世紀代。**644**はSP358出土。土師質土器杯。13世紀中頃～後半。**645～647**はSP359出土。**645・646**は土師質土器。**645**は小皿。**646**は杯。**647**は白磁碗。内面に片彫りで文様を施す。外面高台部付近まで施釉する。ピットの時期は土師質土器の時期である13世紀中頃～後半と考えられる。**648**はSP361出土。土師質土器鍋口縁部小片。13世紀末～14世紀前半。**649**はSP363出土。土師質土器足釜脚部。**650～652**はSP365出土。**650**は土師質土器杯。**651**は土師器甕。古墳時代後期。**652**は須恵器甕。上部割れ口際に沈線が観察できる。ピットの時期は土師質土器の時期である13世紀中頃～後半と考えられる。**653～656**はSP373から出土。すべて土師質土器。**653～655**は杯。13世紀後半。**656**は足釜脚部。**657**はSP374から出土。土師質土器杯。13世紀前半。

ピットの時期は一部12世紀まで遡るものもあるが、大半は13世紀中頃～14世紀前半と考えられる。

Ⅱ区SP420（第159図）

Ⅱ区D4で検出したピットである。SP422の約80cm東北東で検出し、この2穴はSB11の北西部の柱列に平行して約60cm北西側で検出した。平面形態は楕円形で、長径44cm、短径31cmを測る。埋土中からは土師質土器小皿が出土した。

658は土師質土器小皿。底部には時計回りにヘラ切り痕、板圧痕が残る。13世紀前半～14世紀前半。



第162図　Ⅱ区ピット出土遺物（1/2、1/4）

Ⅱ区SP422（第159図）

Ⅱ区D5グリットで検出したピットである。SP422の約80cm西南西で検出した。平面形態は円形で、直径36cmを測る。埋土中からは土師質土器杯が完形で出土した。

659は土師質土器杯。底部には板圧痕が残る。13世紀代。

Ⅱ区SP423（第159図）

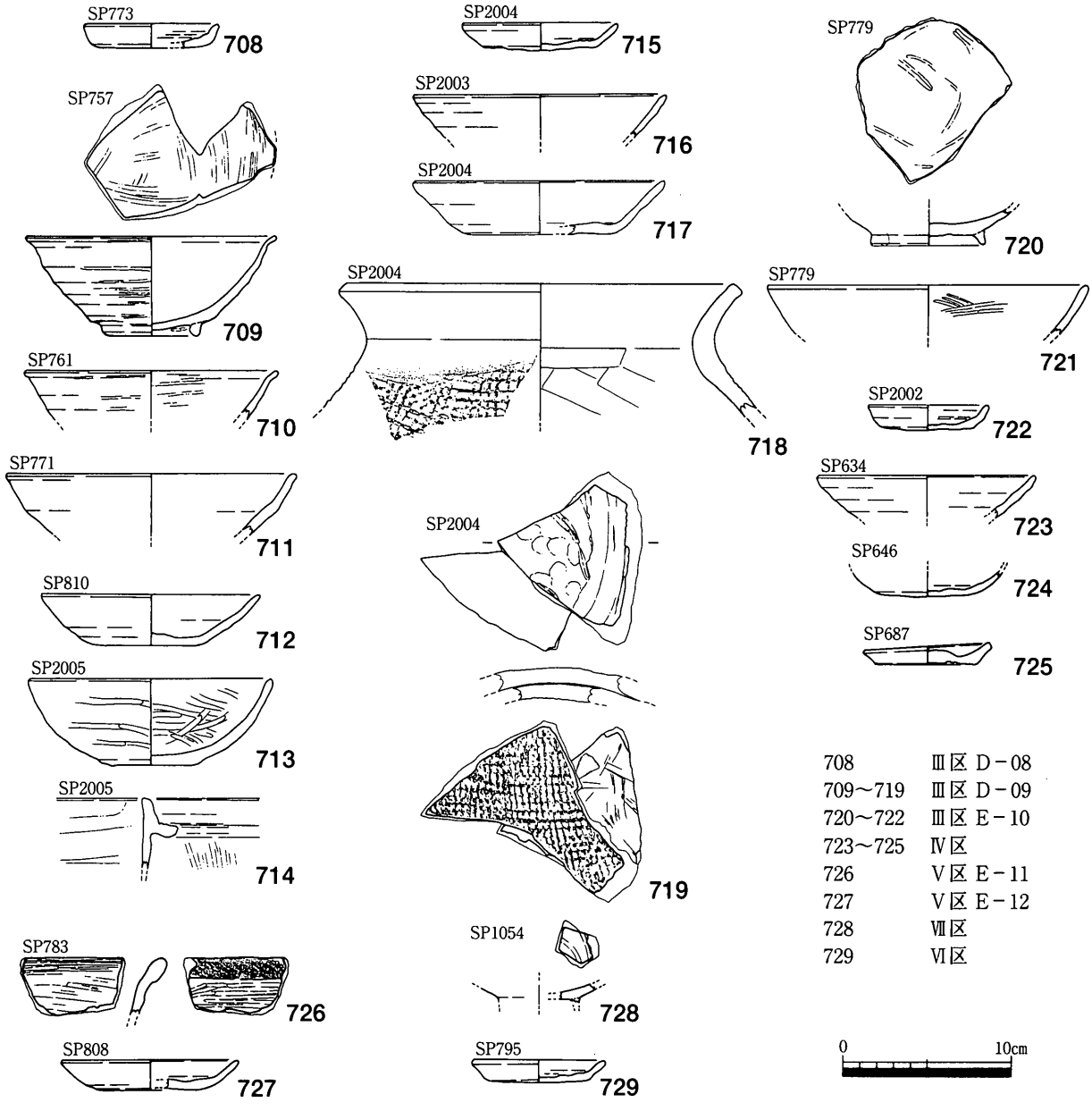
Ⅱ区D5グリットで検出したピットである。SB11の柱穴に隣接する。平面形態は楕円形で、長径41cm、短径34cmを測る。埋土中からは土師質土器杯が出土した。

660は土師質土器杯。底部には時計回りのヘラ切り痕を残す。13世紀代。

Ⅱ区SP448（第160図）

Ⅱ区D4グリットで検出したピットである。円形で直径38cm、深さ42cmを測る。ピットの底部には1辺13cm、厚さ9cm大の石が据えられ、その上部には土師質土器小皿や杯が折り重なって出土した。

661～668は土師質土器。**661～664**は小皿。**661・664**は底部に時計回りのヘラ切り痕が残る。**665～668**は杯。**665**は底部に板圧痕が残される。**669**は須恵器椀底部。内面にハケ目が残される。いずれも13世紀代に収



第163図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区ピット出土遺物（1/4）

まるものと考えられる。

Ⅱ区SP2001（第160図）

Ⅱ区D5グリットで検出したピットである。SB11南西隅付近で検出した。平面形態は円形で、直径約26cm、深さ9cmを測る。ピットの底からやや浮いた位置で土師質土器杯が出土した。

670は土師質土器杯。13世紀代。

Ⅱ区礎石1（第161図）

Ⅱ区D5グリットで検出した。長辺23cm、短辺21cm、厚さ7cmのほぼ直方体で、上面はほぼ平らである。礎石2の33cm西南西で検出し、この2基の礎石はほぼSA01と同じ方向で並ぶ。礎石の上面からは土師質土器杯が出土した。礎石の上面に土器を置く状況はSP448と類似しており、この礎石はもともとはピット内にあった可能性がある。

671・672は土師質土器杯。13世紀代。

Ⅱ区礎石2（第161図）

Ⅱ区D5グリットで検出した。長辺25cm、短辺18cm、厚さ6cmのほぼ直方体で、上面はほぼ平らである。礎石1の33cm東北東で検出し、この2基の礎石はほぼSA01と同じ方向で並ぶ。礎石の上面からは土師質土器小皿・杯が細かく割れた状態で出土した。礎石の上面に土器を置く状況はSP448と類似しており、この礎石はもともとピットであった可能性がある。

673～678は土師質土器。**673**は小皿。**674～678**は杯。**676**は底部に時計回りのヘラ切り痕を残す。**679**は須恵器椀。摩滅が著しい。口縁端部付近に重ね焼き痕を残す。

遺構の時期はおおむね13世紀中～後半頃と考えられる。

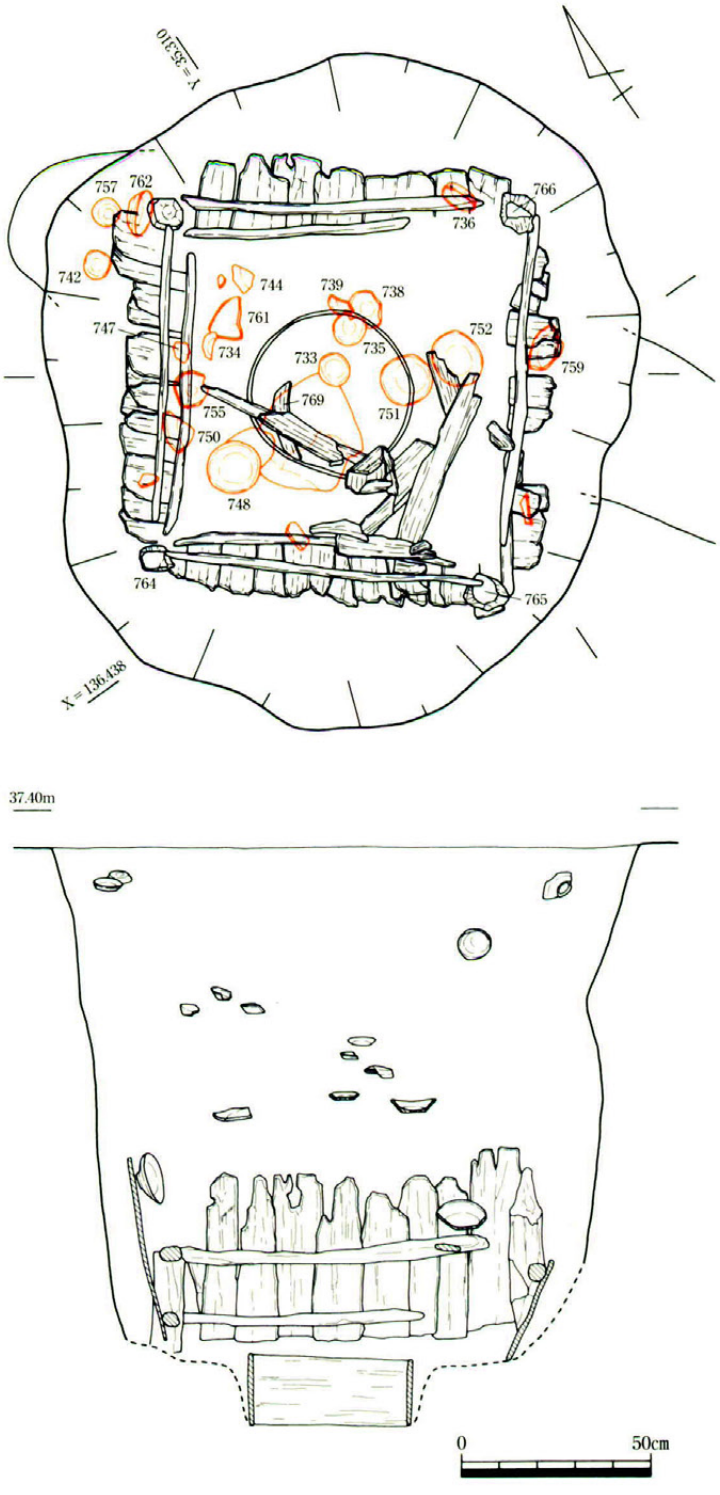
Ⅱ区その他ピット出土遺物（第158・162図）

Ⅱ区からは主にSD29の上面で、SD24から北側で多く検出した。

680はSP509出土遺物。SP509はSD38内で検出した。土師質土器杯。13世紀中～後半。**681**はSP523出土遺物。SP509とはSD30に沿って5.60m東側へ寄った位置になる。土師質土器杯。13世紀後半～14世紀前半。**682**はSP468出土遺物。SB11の西側で検出した。土師質土器杯。13世紀後半～14世紀前半。**683・684**はSP469出土遺物。SP468の東側に近接して検出した。**683**は土師質土器小皿。**684**は須恵器鉢。口縁部内外面に重ね焼き痕がある。13世紀代。**685・686**はSP425出土遺物。SB11南側柱列の、西隅柱穴と西から1間目の柱穴のほぼ中間で、遺構の重複関係により後述するSP426より古い。ともにSB11に関連する可能性もある。ともに土師質土器小皿。13世紀中頃～14世紀前半。**687**はSP426出土遺物。SP426は前述のSP425を一部壊している。土師質土器杯。13世紀代。**688～691**はSP427出土遺物。SB11西南隅ピットの北東へ近接して検出した。すべて土師質土器小皿。**689・690**は底部に時計回りのヘラ切り痕がある。**690**は歪みが著しい。13世紀中～14世紀前半。**692～694**はSP472出土遺物。SB11の西側柱列に近接して検出した。**692**は土師質土器小皿。**693**は椀型鍛冶滓。**694**は棒状の鉄製品。断面は四角形で、中空である。**695**はSP488出土遺物。SD30の北側で検出した。土師質土器小皿。13世紀中～14世紀前半。**696**はSP560出土遺物。須恵器椀底部。内面には放射状に施されるハケ目がある。高台は退化が進み、底部にはヘラ切り痕が残る。13世紀後半。**697・698**はSP572出土遺物。SK35の南側で検出した。ともに土師質土器杯。**697**は底部に板圧痕が残る。13世紀中～後半。**699～702**はSP582出土遺物。SD30内で検出した。いずれも土師質土器。**699**は小皿。**700～702**は杯。時期は13世紀中～後半。**703**はSP584出土遺物。SP582の西側に隣接して検出した。吉備系土師器椀。外面には密なヘラミガキが観察できる。12世紀末頃。**704・705**はSP602出土遺物。SD30内で検出した。いずれも土師質土器。**704**は杯。**705**は足釜。鍔部の上部に粘土を足して口縁部を作る。鍔端部、口縁端部ともに断面を四角くする。13世紀中～後半。**706**はSP556出土遺物。土師質土器杯。13世紀後半～14世紀前半。**707**はSP622出土遺物。弥生土器底部。

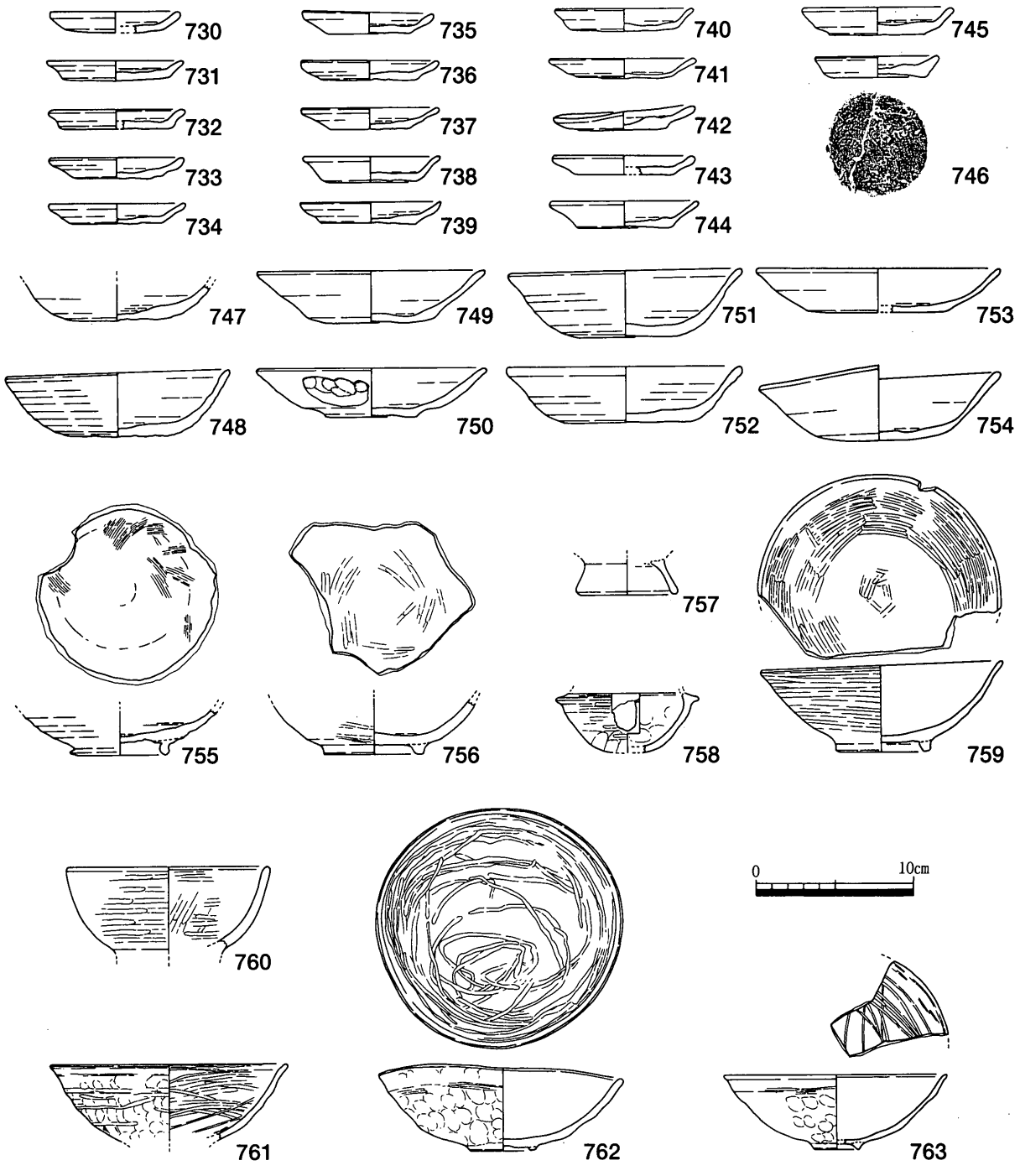
Ⅲ区ピット出土遺物（第163図）

708はSP773出土遺物である。土師質土器小皿。12世紀後半～13世紀代。**709**はSP757出土遺物。周溝墓6の内部で検出した。須恵器椀。内外面をヘラミガキし、口縁端部を外湾させる。11世紀後半。**710**はSP761出土遺物。SP757に近接して検出した。須恵器椀。形態は**709**に似る。11世紀後半。**711**はSP771出土遺物。調査区東端付近で検出した。土師質土器杯。小片で口径はやや不確か。**712**はSP810出土遺物。SP757・761に近接して出土した。土師質土器杯。底部には板圧痕が残る。11世紀後半。**713・714**はSP2005出土遺物。SP810に近接して検出した。ともに土師質土器。**713**は杯。内外面にヘラミガキを残す。**714**は足釜。**715・717～719**はSP2004出土遺物。周溝墓7周溝掘り下げ後に検出した。**715**は土師質土器小皿。底部には反時計

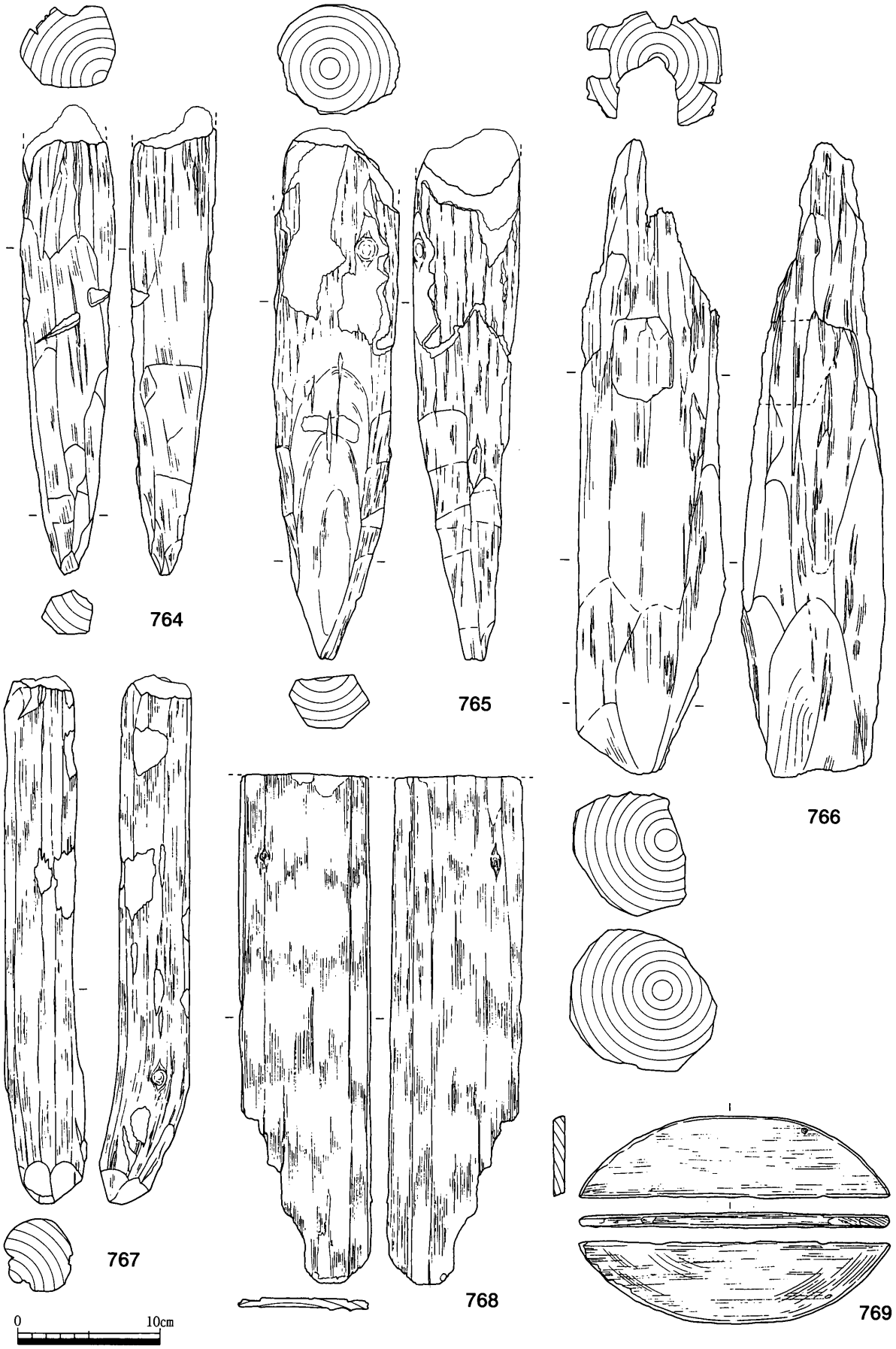


第164図　Ⅲ区SE02遺物出土状況平・立面図（1/20）

回りのヘラ切り痕を残す。**717**は土師質土器杯。**718**は須恵器甕。外面は格子叩き、内面は板ナデで調整する。口縁部内外面には自然釉が掛かる。**719**は甕体部片と壺体部片が溶着したもの。ピットの時期は12世紀代と考えられる。**716**はSP2003出土遺物。周溝墓7の西側の溝を掘り下げ中に検出した。土師質土器杯。12世紀後半。**720・721**はSP779出土遺物。調査区南東隅付近で検出した。**720**は黒色土器A椀。内面にはヘラミガキ痕が残る。外面の底部と体部の境付近には回転ヘラケズリは認められない。12世紀後半。**721**は黒色土器B椀。



第165図　Ⅲ区SE02出土遺物（1）（1/4）



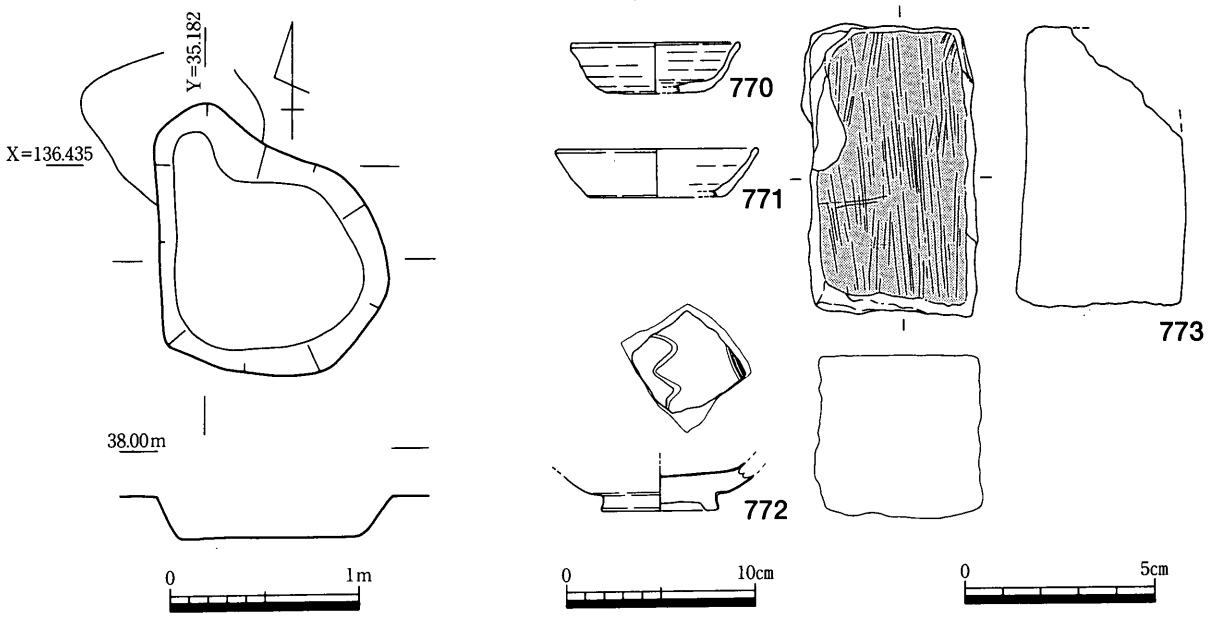
第166図　Ⅲ区SE02出土遺物（2）（1/4）

722はSP2002出土遺物。SH05上面で検出した。土師質土器小皿。底部には時計回りのヘラ切り痕を残す。13世紀中頃～14世紀前半。

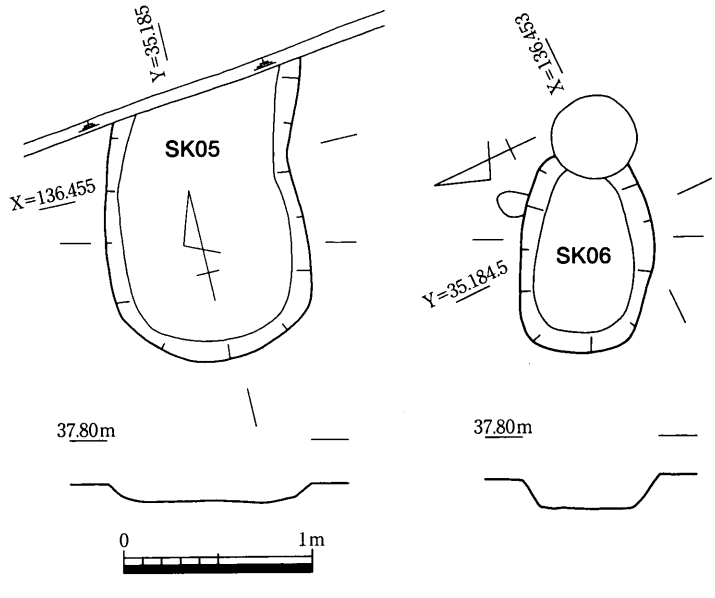
Ⅳ区ピット出土遺物（第163図）

Ⅳ区ピットは主に調査区の北側で検出した。

723はSP634出土遺物。Ⅳ区北西部で検出した。土師質土器杯。13世紀前半頃。**724**はSP646出土遺物。SP634の東側で検出した。土師質土器杯。13世紀代。**725**はSP687出土遺物。Ⅳ区北部で検出した。土師質土器小皿。底部には板圧痕が残る。13世紀中～14世紀前半。



第167図　Ⅰ区SK03平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2、1/4）



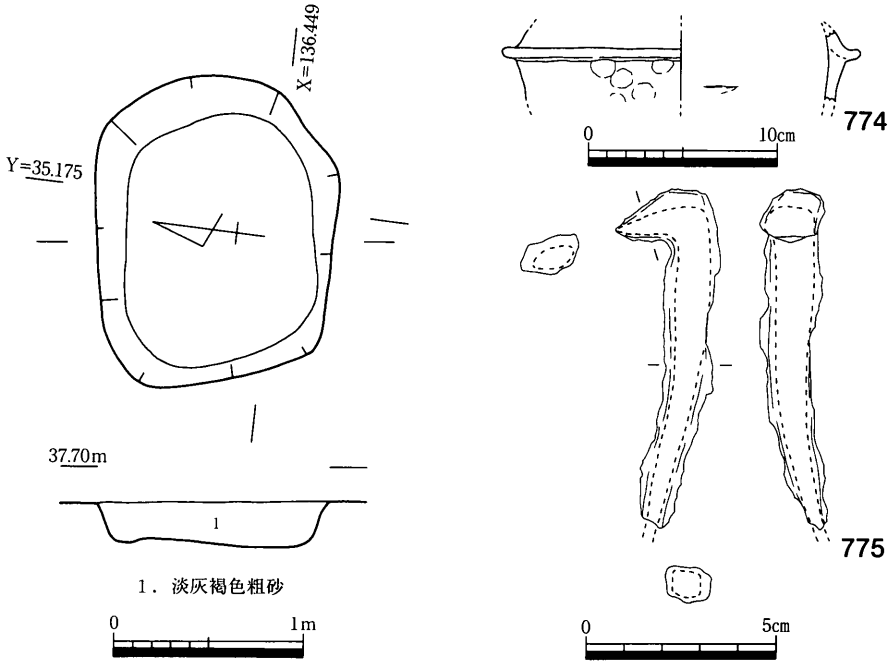
第168図　Ⅰ区SK05・06平・断面図（1/40）

Ⅴ区・Ⅶ区・Ⅵ区ピット出土遺物（第163図）

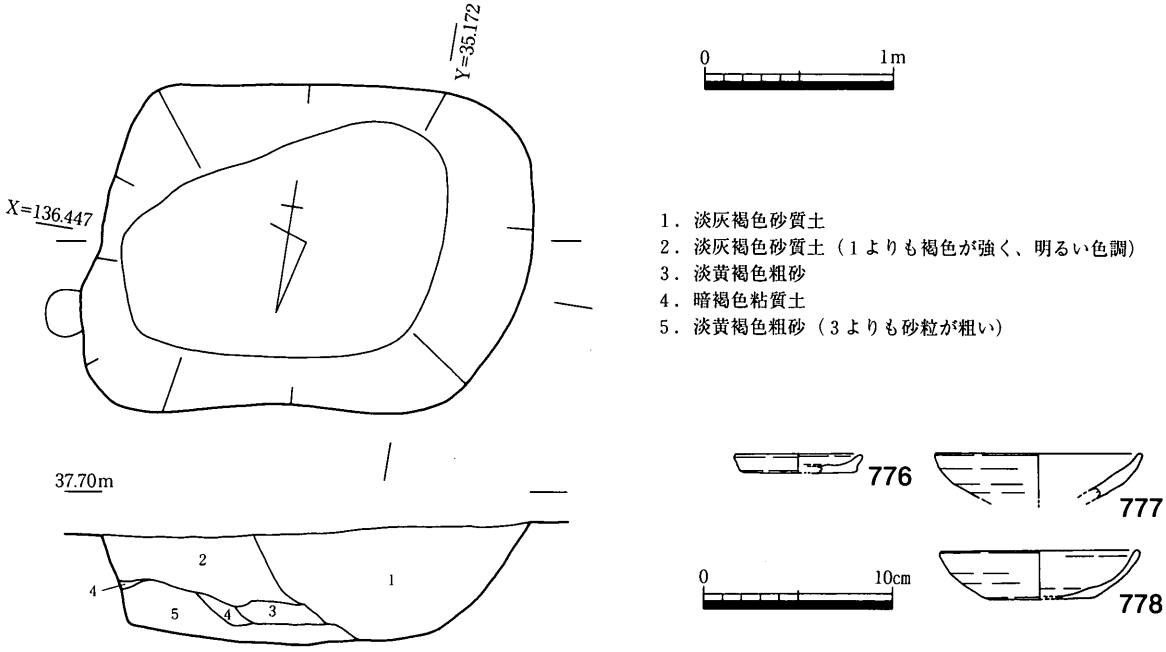
726・727はⅤ区出土遺物。**726**はSP783出土遺物。周溝墓25南溝の上面で検出した。縄文土器深鉢。口縁端部外側にはRLの縄目を施す。**727**はSP808出土遺物。周溝墓29付近で検出した。土師質土器小皿。11世紀後半～12世紀前半。

728はⅦ区のSP1054出土遺物。土師質土器椀。内面にはヘラミガキが見られる。吉備系土師器椀。12世紀後半頃。

729はⅥ区のSP795出土遺物。土師質土器小皿。13世紀～14世紀前半。



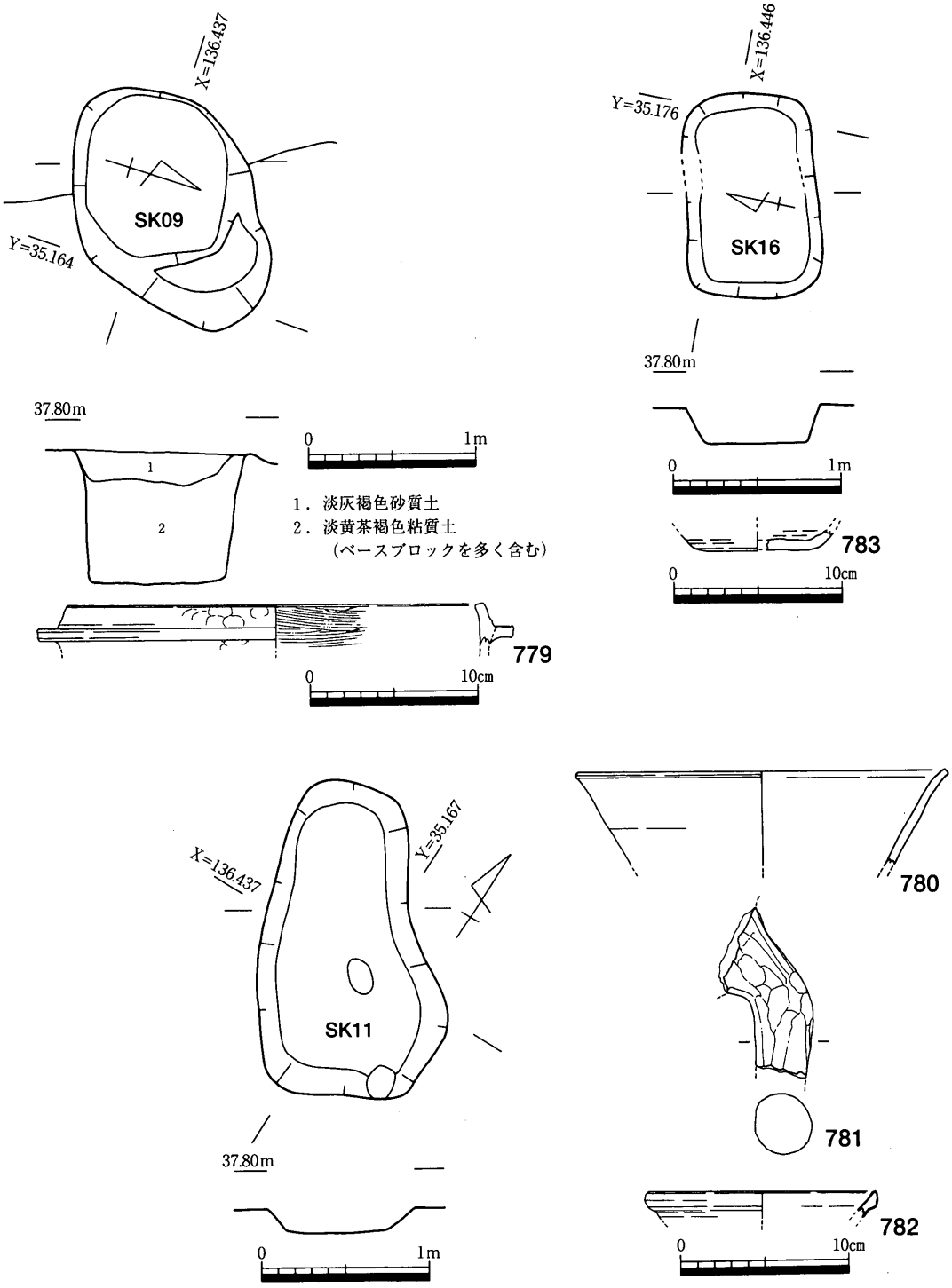
第169図　Ⅰ区SK07平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2、1/4）



第170図　Ⅰ区SK08平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

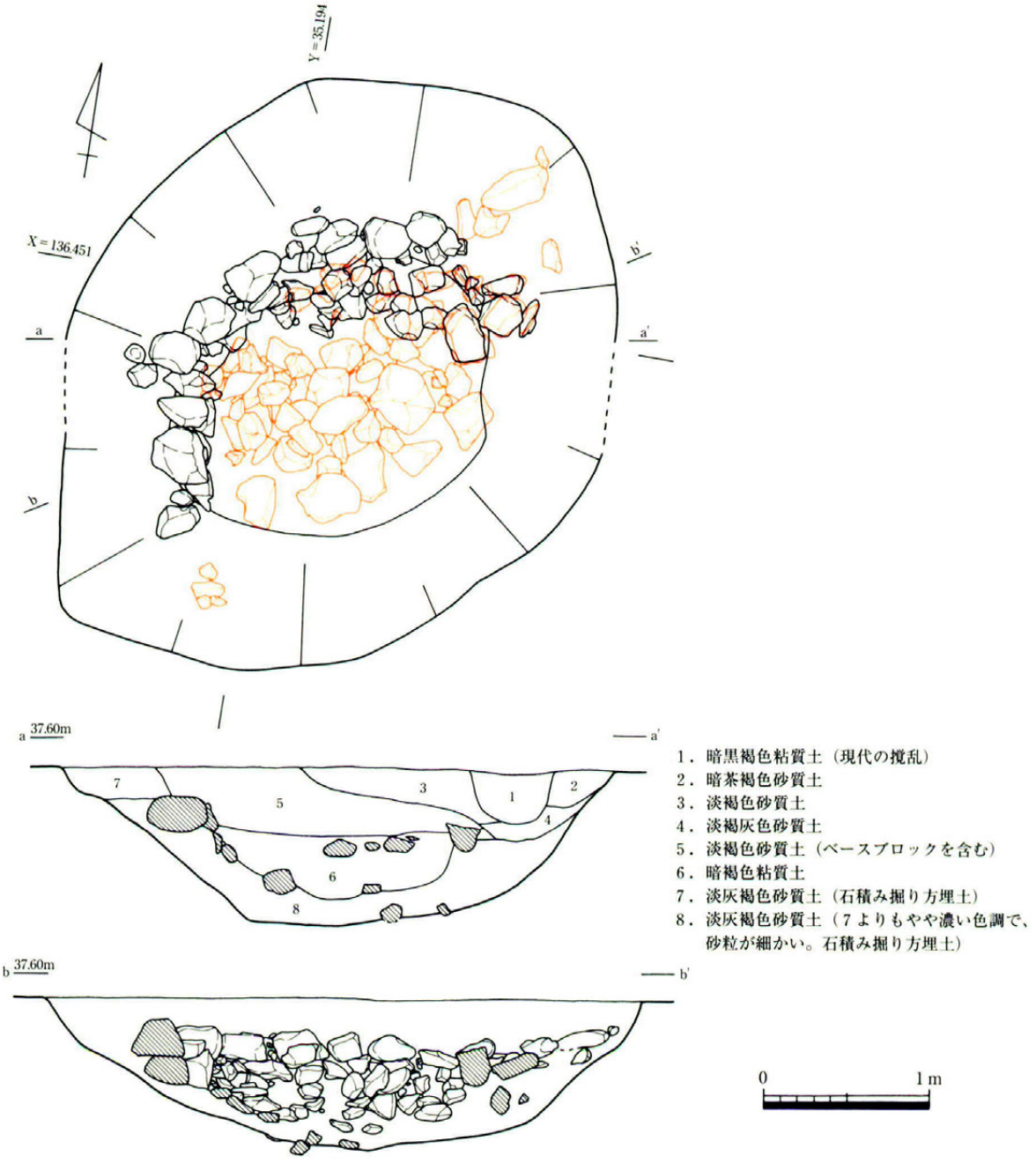
Ⅲ区SE02（第164・165・166図）

Ⅲ区E9グリットで検出した井戸跡である。長軸1.75m、短軸1.53mの楕円形を呈し、検出面より約85cm下部で木の井戸枠を検出した。その上部では、見通し断面をみれば、断面擂鉢状に破片の大きい土師質土器杯・小皿等が投棄された様子が窺える。井戸枠を検出したのは遺構面より85cm下がったところではあるが、側板の上端部が割れていないと思われる部分もあり、上部は素掘りであったと考えられる。井戸枠は1辺90～100cm、深さは約50cmを測る。4隅に杭を打ち込み、杭と杭の間に側板を10枚程度立て、上・下2段の横木により支える。木の井戸枠の下部には直径44cm、深さ19cmの曲物の側板が埋められ、井戸枠としている。曲物を設置する際には、曲物の大きさに合わせて掘り下げたようである。

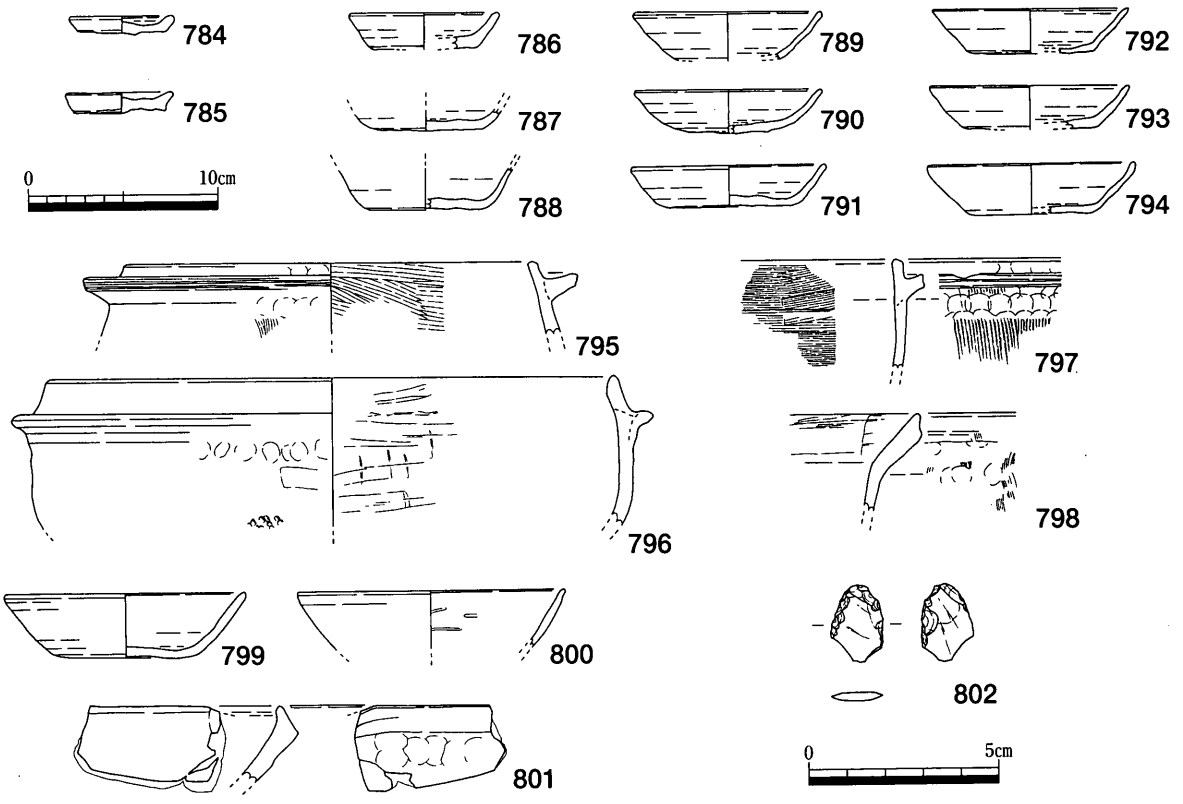


第171図　Ⅰ区SK09・11・16平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

730～758は土師質土器。**730～746**は小皿。口径は８～９㎝程度で、底部の切り離しは**746**以外ヘラ切りである。底部には**733・739**には反時計回り、**736・738・745**には時計回りのヘラ切り痕を残し、**734・739・741・744**には板圧痕が残る。**746**は底部を回転糸切りにより切り離す。**747～754**は杯。口径はほぼ14～15㎝に収まる。底部はすべてヘラ切りにより、**748**には時計回りのヘラ切り痕が残る。**750**は器表面にレンズ状の剥がれがみられ、焼成中に器表がはじけた可能性がある。**755・756**は椀。**755**は底部に時計回りのヘラ切り痕が残る。内面には放射状のハケ目が残る。**757**は高台付皿の高台部か。剥離面には円弧状の刻みがネガの状態で残されており、皿部分には高台と接着しやすいように円弧状の刻みが施されていたことがわかる。**758**は器種不明。外面は横方向にヘラミガキをする。端部は摩滅しており、まだ上部へ続く可能性もある。剥離痕が１箇所に見られる。**759**は須恵器椀。内外面ともに横方向にヘラミガキをする。底部にヘラ切り痕を残す。**760**は黒色土器Ｂ椀。**761～763**は瓦器椀。いずれも和泉産。内面には横方向のヘラミガキをやや密に、外面



第172図　Ｉ区SK102平・立・断面図（ 1/40 ）



第173図　Ⅰ区SK102出土遺物（1/2、1/4）

には疎らにヘラミガキを施す。**761・763**は底部に直線状の細いヘラミガキを残す。

764～766は井戸枠の隅柱。上部は欠損。先端の尖らせている部分を除けば樹皮が残る。**767**は井戸枠の横木。片側は欠損。木材を小口から4分割程度にして、その内の1本を材料にしている。端部をわずかに削って角を取る程度である。**768**は井戸枠の板。板目取りの材で、幅9.2cm、厚さ6.5mm程度に加工する。**769**は曲物の底板。片面には円弧状の擦痕が残る。表面および側面に綴じ紐を通した孔が残る。

遺構の時期はおおむね12世紀後半頃と考えられる。

Ⅰ区SK03（第167図）

Ⅰ区E3グリットで検出した土坑である。不整円形で、長軸1.52m、短軸1.28m、深さ20cm、断面形状は逆台形である。埋土中からは土師質土器、青磁片等が出土した。

770・771は土師質土器杯。13世紀後半頃。**772**は青磁碗。見込み部分に片彫り状の文様がある。外面全体に施釉する。12世紀中～後半。**773**は砥石。上面の擦痕が著しい。

青磁の時期は土師質土器に比べて古いが、遺構の時期は土師質土器の時期である13世紀後半頃と考えられる。

Ⅰ区SK05（第168図）

Ⅰ区D3グリットで検出した土坑である。北部は調査区外へ延びる。楕円形で、長径1.46m以上、短径1.06m、深さ8cm、断面形状は浅い皿状である。埋土中からは土師質土器杯・足釜脚部が出土した。

遺構の時期は13世紀代と考えられる。

Ⅰ区SK06（第168図）

Ⅰ区D3グリットで検出した土坑である。楕円形で、長径1.10m、短径0.73m、深さ16cm、断面形状は逆台形である。埋土中からは土師質土器杯・足釜底部が出土した。

遺構の時期は13世紀代と考えられる。

Ⅰ区SK07（第169図）

Ⅰ区D2グリットで検出した土坑である。隅丸長方形で、長軸1.60m、短軸1.28m、深さ22cm、断面形状は逆台形、埋土は淡灰褐色粗砂である。埋土中からは土師質土器杯・足釜片、鉄等が出土した。

774は土師質土器足釜。13世紀中～14世紀前半。**775**は鉄釘。上部を折り曲げ、下部はやや尖らせる。断面は四角形で、中空ではない。

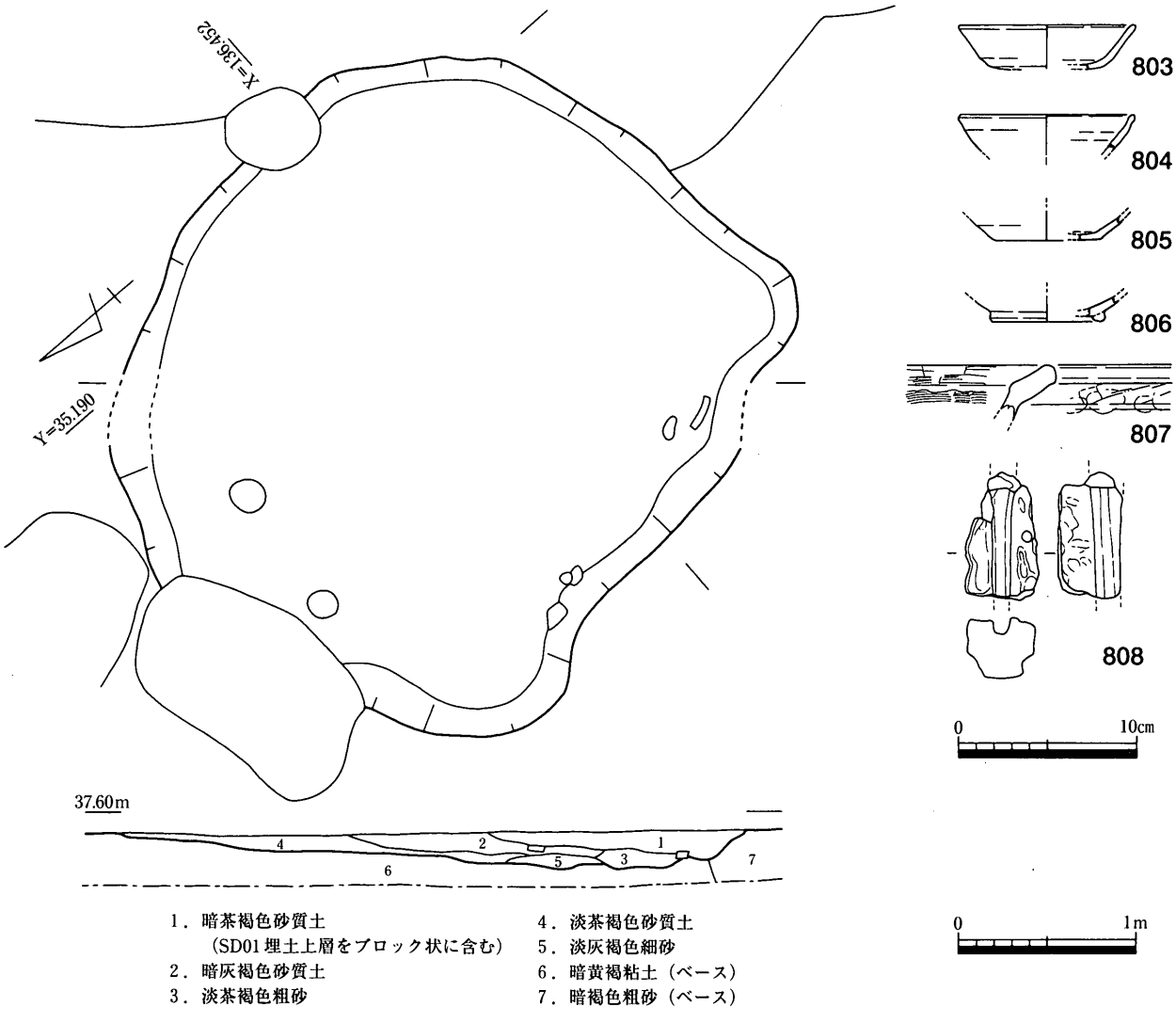
遺構の時期は13世紀中～14世紀前半頃と考えられる。

Ⅰ区SK08（第170図）

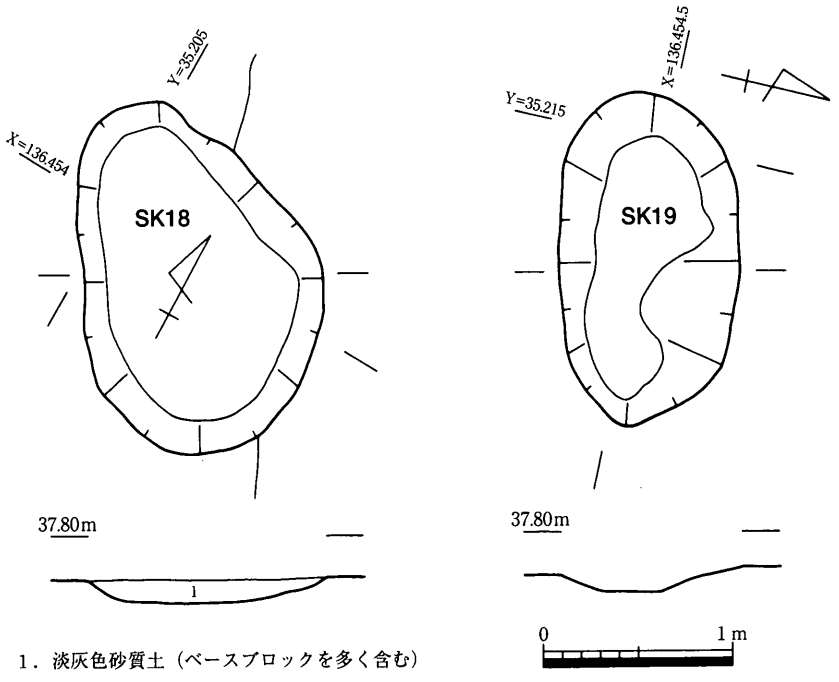
Ⅰ区D2グリットで検出した土坑である。隅丸長方形で、長軸2.30m、短軸1.68m、深さ60cmである。土層断面では、一旦土坑が埋まった後、西半部のみ再掘削しているようであるが、両者の埋土はあまり差がない。埋土はおおむね淡灰褐色砂質土である。埋土中からは土師質土器杯・小皿・足釜脚部が出土した。

776～778は土師質土器。**776**は小皿。**777・778**は杯。

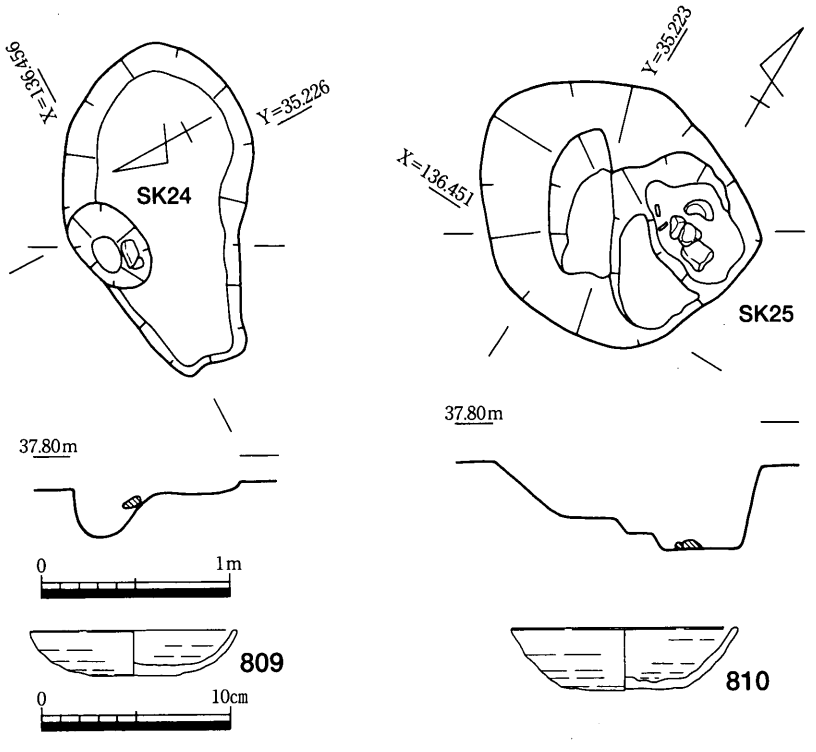
遺構の時期は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。



第174図　Ⅰ区SK103平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第175図　Ⅱ区SK18・19平・断面図（1/40）

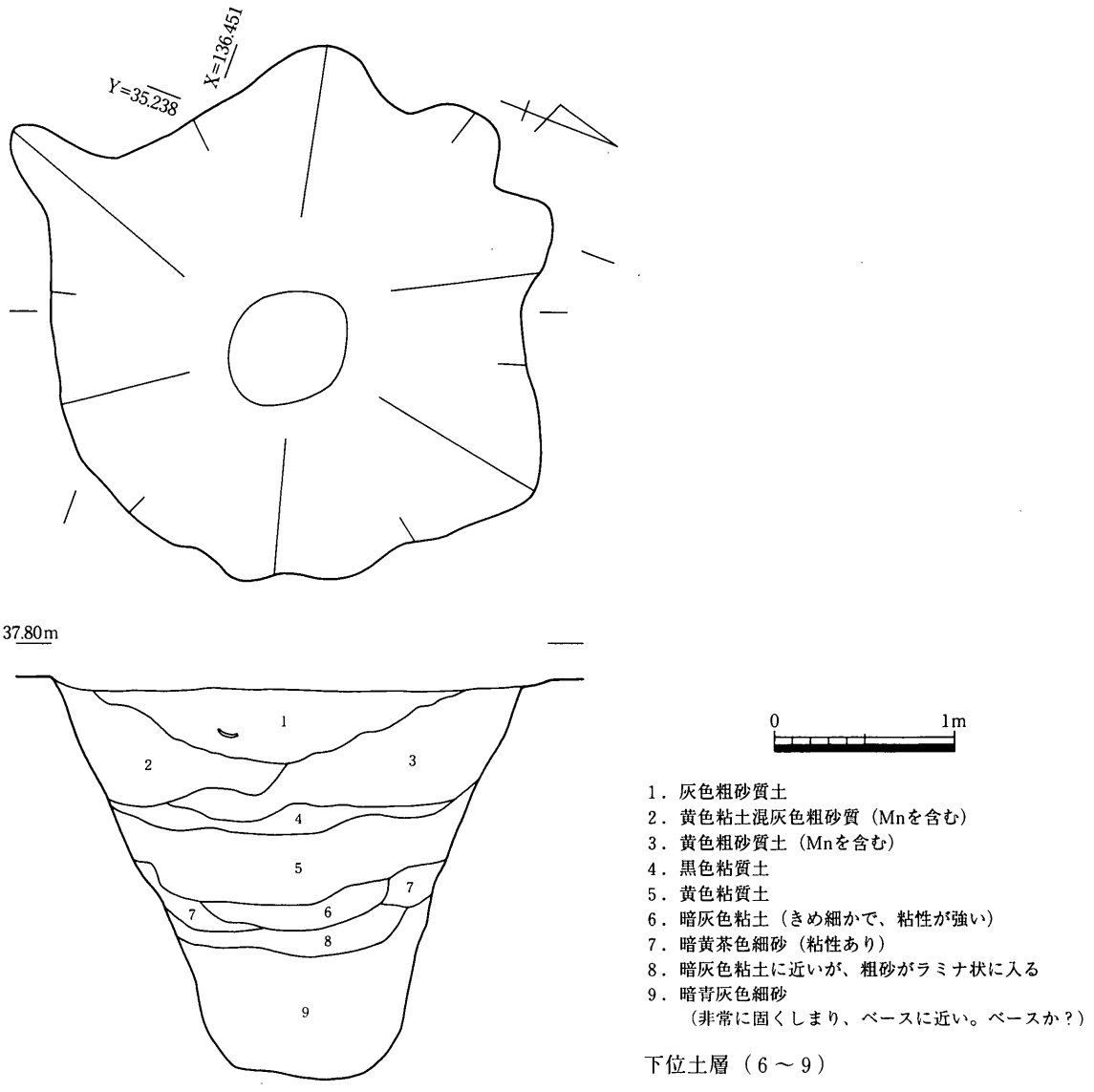


第176図　Ⅱ区SK24・25遺物出土状況平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

Ⅰ区SK09（第171図）

Ⅰ区E2グリットで検出した土坑である。SH01の上面で検出した。楕円形で、長軸1.56m、短軸1.09m、断面形状は二段掘りを呈し、深さは深い部分が78cm、浅い部分は63cmである。埋土は深さ18cmまでは淡灰褐色砂質土で、それより深い部分は埋土中にベースブロックを多量に含む。埋土中からは土師質土器足釜片が出土した。

779は土師質土器足釜片。外面の鍔より下部には煤が付着する。鍔の断面に接合痕が認められるほか、内面



第177図　Ⅱ区SK35平・断面図（1/40）

にも粘土の接合痕が2箇所に見られる。13世紀末～14世紀前半。

遺構の時期もこの時期と考えられる。

Ⅰ区SK11（第171図）

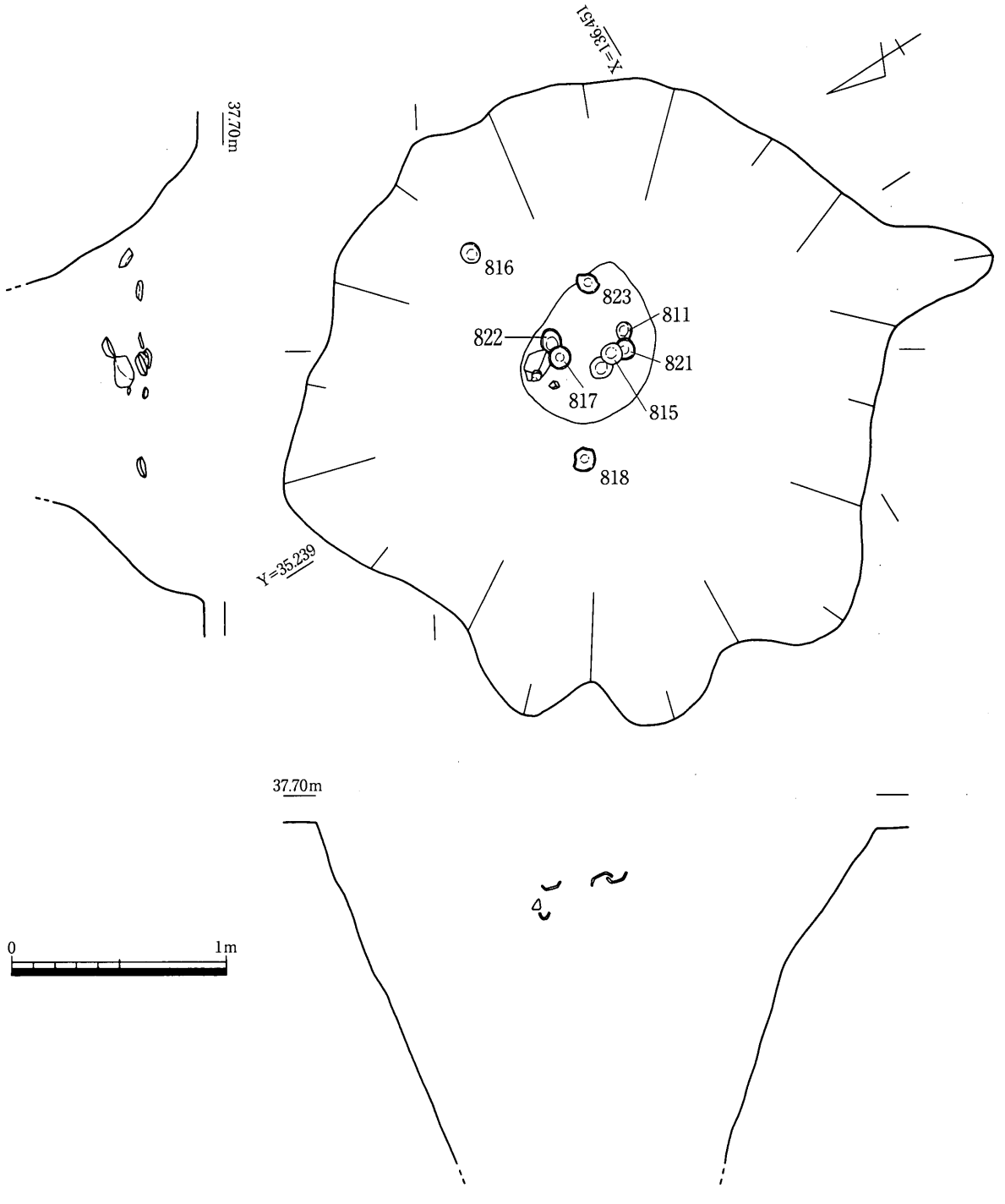
Ⅰ区E2グリットで検出した土坑である。楕円形で、長軸1.90m、短軸0.92m、深さは14cm、断面形状は浅い逆台形である。埋土中からは土師質土器杯・足釜、須恵器甕、白磁片等が出土した。

780は土師器高杯。杯部口縁部。摩滅が著しい。**781**は土師質土器足釜脚部。**782**は白磁碗。口縁部片。口縁端部を玉縁状にする。白磁Ⅳ類。11世紀後半～12世紀前半。

やや時期の遡る白磁が出土するものの、遺構の時期は足釜の時期に近い13世紀後半以降と考えられる。

Ⅰ区SK16（第171図）

Ⅰ区D2グリットで検出した土坑である。隅丸長方形で、長軸1.22m、短軸0.84m、深さは21cm、断面形状は



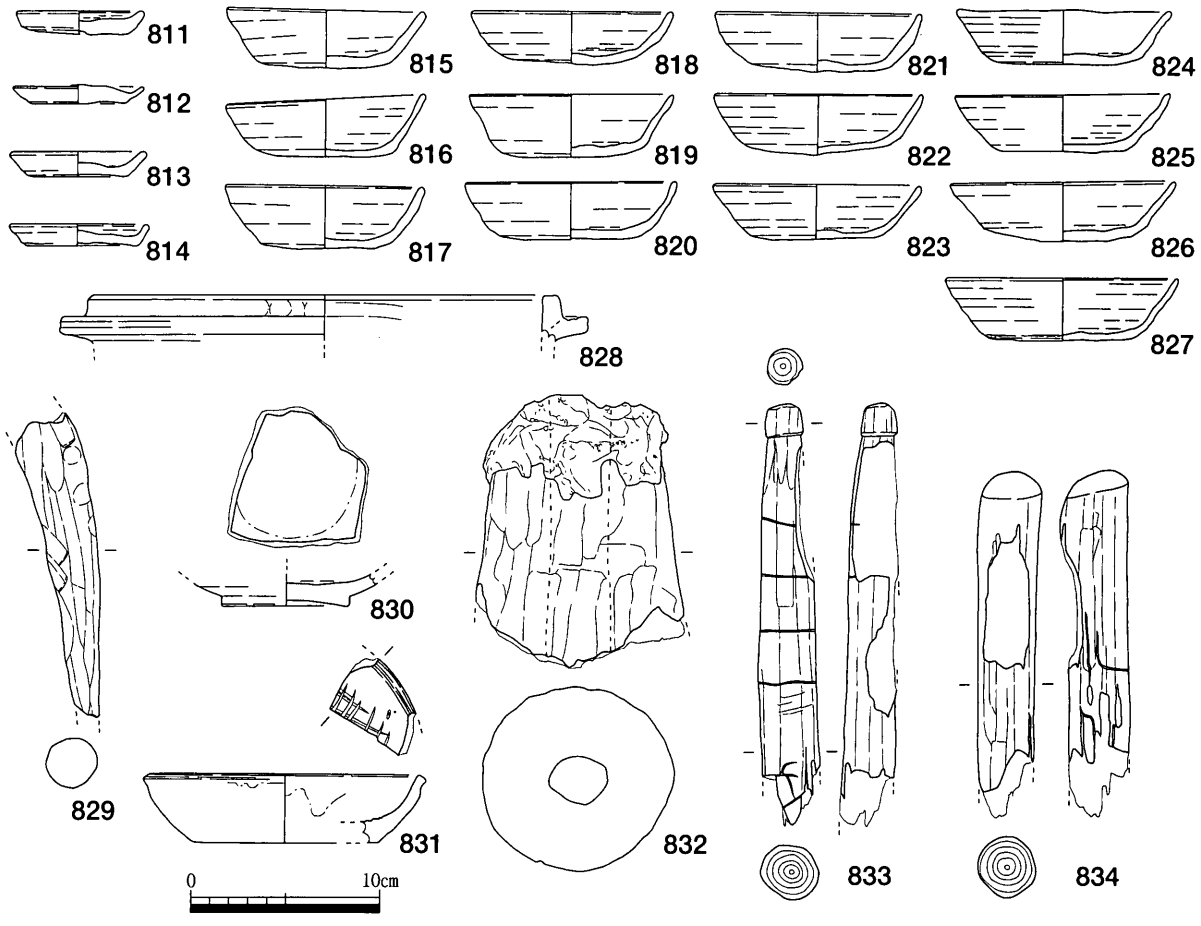
第178図　Ⅱ区SK35遺物出土状況平・断面図（1/30）

逆台形である。埋土中からは土師質土器杯が出土した。

783は土師質土器杯。13世紀中～後半と考えられ、遺構の時期もこの頃と考えられる。

Ⅰ区SK102（第172・173図）

Ⅰ区D3グリットで検出した土坑である。SD14の上面で検出した。長楕円形で、長軸4.14m、短軸3.12m、深さは90cm、断面形状は浅い皿形で、埋土は主に淡褐色砂質土・暗褐色粘質土である。遺構面から20cm程度掘り下げた地点で20～30cm大の石が集中して出土した。上部の石を取り除くと、想定される1.60m×1.20mの隅丸長方形の、北辺と西辺に深さ50cm程度に石が積まれていたようにも見える。しかし、石の積み方は乱雑で、規則性はあまり認められず、意図して積んだものとは考え難い。埋土中からは土師質土器小皿・杯等数多く出



第179図　Ⅱ区SK35出土遺物（1/4）

土した。

784～798は土師質土器。**784～786**は小皿。**784**は時計回りのヘラ切り痕を残す。**787～794**は杯。**787**は底部に反時計回りのヘラ切り痕と板圧痕を残し、**791**は時計回りのヘラ切り痕を残す。口径はおおむね9.8～10.8cmの間に収まる。**795～797**は足釜。**795・797**は足釜A。**795**は鍔を接合した痕跡が断面からわかる。鍔端部には沈線が2条巡る。**796**は足釜B。底部には格子叩きが施される。鍔の上部及び鍔部には接合痕が観察できる。**798**は鍋A。**799**は須恵器杯。口縁端部には重ね焼き痕が残る。**800**は瓦器椀。小片。**801**は須恵器捏鉢または擂鉢。片口部がわずかに残る。**802**は石鏃未製品。サヌカイト製。

遺構の時期は13世紀後半頃と考えられる。

Ⅰ区SK103（第174図）

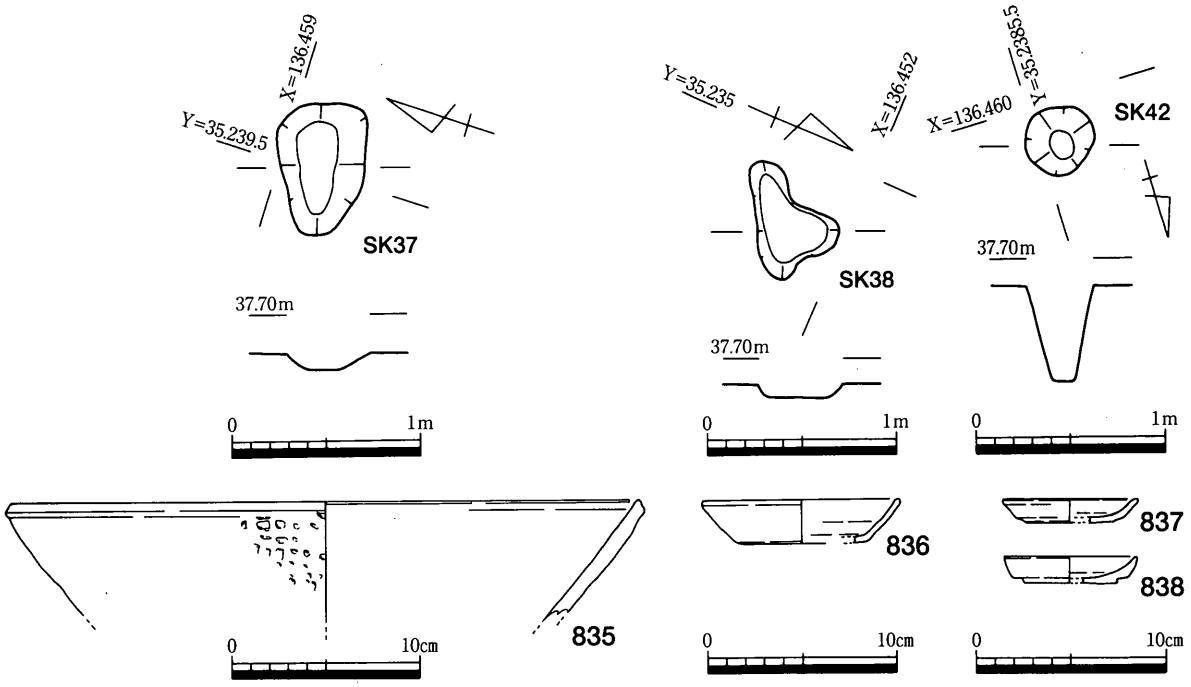
Ⅰ区D3グリットで検出した土坑である。SD01上面で検出した。隅丸方形で、長軸3.56m、短辺3.24m、深さは18cm、断面形状は浅い皿状である。埋土は暗灰褐色砂質土、淡茶褐色粗砂・砂質土等で、漸次的に埋まったようであるが、最上層だけは、ベースであるSD01のブロックを含んでおり、人為的に埋められたことがわかる。埋土中からは土師質土器等が出土した。

803～807は土師質土器。**803～805**は杯。**806**は吉備系土師器椀。**807**は鍋小片。**808**は壁土か。直方体の形状で、溝状の窪みが数箇所に見られる。

遺構の時期は13世紀後半頃と考えられる。

Ⅱ区SK18（第175図）

Ⅱ区D4グリットで検出した土坑である。SD21の上面で検出した。楕円形で長軸1.82m、短軸1.29m、深さ



第180図　Ⅱ区SK37・38・42平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

12cm、断面形状は浅い皿形で、埋土は淡灰色砂質土である。

埋土中からの出土遺物はなかったが、SD21の上面で検出したことから、時期は13世紀代以降である。

Ⅱ区SK19（第175図）

Ⅱ区D5グリットで検出した土坑である。楕円形で、長軸1.70m、短軸0.96m、深さ9cm、断面形状はなだらかな台形である。埋土中からは土師質土器杯の小片が出土している。

Ⅱ区SK24（第176図）

Ⅱ区D5グリットで検出した土坑である。楕円形で、長軸1.70m、短軸0.88m、深さ8cmである。土坑の中央北寄りに長軸52cm、短軸34cm、深さ24cmのピット状の落ち込みがある。埋土中からは土師質土器が出土した。

809は土師質土器杯。底部には時計回りのヘラ切り痕を残す。13世紀中～後半。

遺構の時期もこの時期と考えられる。

Ⅱ区SK25（第176図）

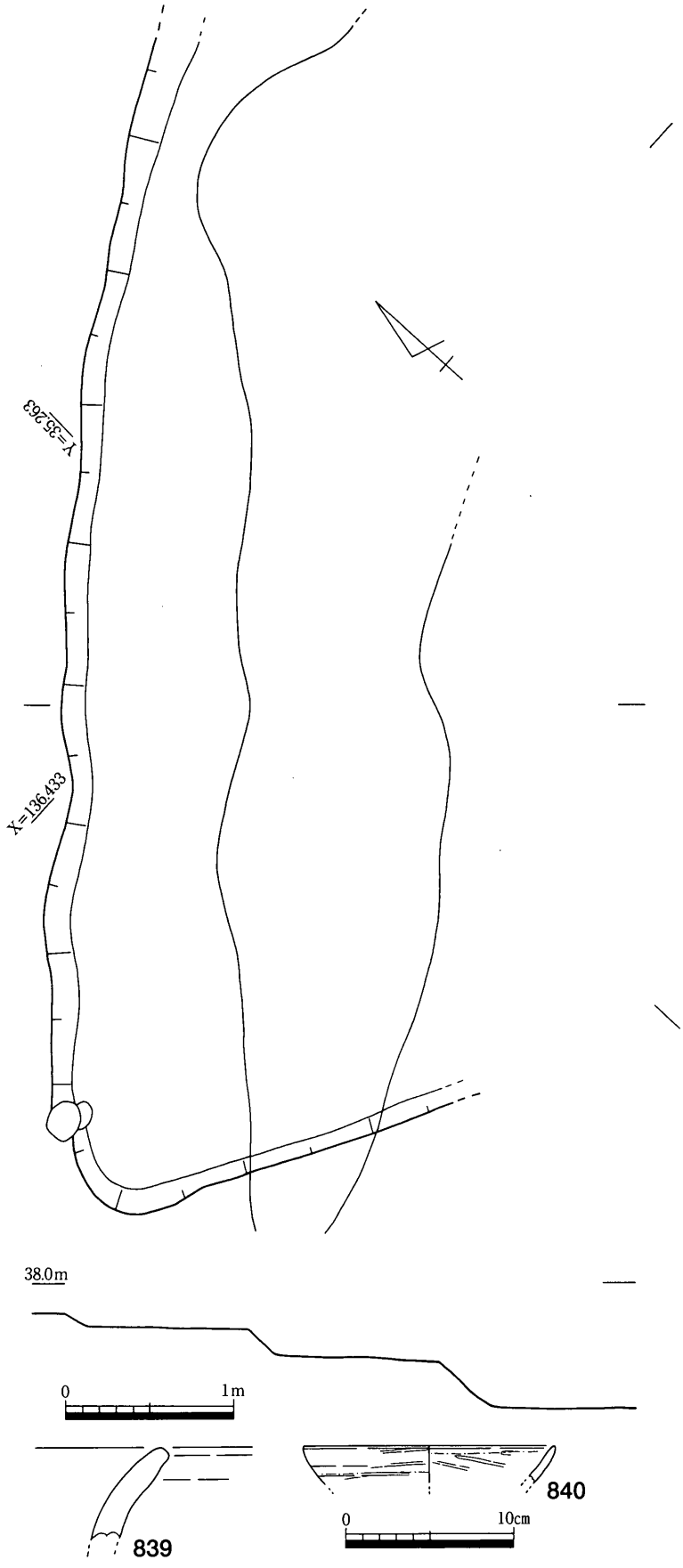
Ⅱ区D5グリットで検出した土坑である。ほぼ円形で直径1.44m、深さ44cmで、底部は三段に掘り窪められる。埋土中からは土師質土器杯が出土した。

810は土師質土器杯。底部には板圧痕が残される。13世紀代のもので、遺構の時期もその時期と考えられる。

Ⅱ区SK35（第177・178・179図）

Ⅱ区D5からD6にかけて検出した土坑である。SD30・31の上面から検出した。平面形態はやや不整な部分があるが、おおむね直径2.70～2.80mの円形で、深さ2.20mを測る。埋土は灰色粗砂質土、黄色粗砂質土、黒色粘質土、黄色粘質土、暗灰色粘土、暗黄茶色細砂、暗青灰色細砂等で、このうち、上面から約50cm、黒色粘質土層から上部で土師質土器等が多く出土した。

811～829は土師質土器。**811～814**は小皿。口径6.7～7.3cmに収まり、小型化が進む。**812～814**には時計回りのヘラ切り痕が観察できる。**815～827**は杯。**815～825**は口径が10.3～11.2cmに収まり、**826・827**は口径



第181図　Ⅱ区SK43平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

12cm前後になる。**821・822・825・826・827**には底部に時計回りのヘラ切り痕が、**816・818・821・822・827**には底部に板圧痕が残る。**828**は足釜A口縁部。鍔を接合した痕跡が観察できる。口縁端部から内面にかけて煤が付着している。**829**は脚部。**830**は緑釉陶器碗底部。底部は削り出しの平高台で、内面には重ね焼き痕跡がみられる。焼成は軟質。摩滅が著しく、釉はほとんど残っていない。京都産。**831**は瀬戸焼灰釉陶器。卸皿。見込み部分に格子状の卸目を付け、卸目の上部から外面口縁端部にかけて施釉する。14世紀頃。**832**はふいご羽口。端部には溶融痕跡が顕著に残る。**833・834**は竪杵。**833**は上部を削り出して段を作り、その下部にはほぼ2.8cmごとに横方向に工具で刻み目を入れる。下部は、間隔が上側より広いが、刻み目部分で折損する。**834**は下部を丸くする。

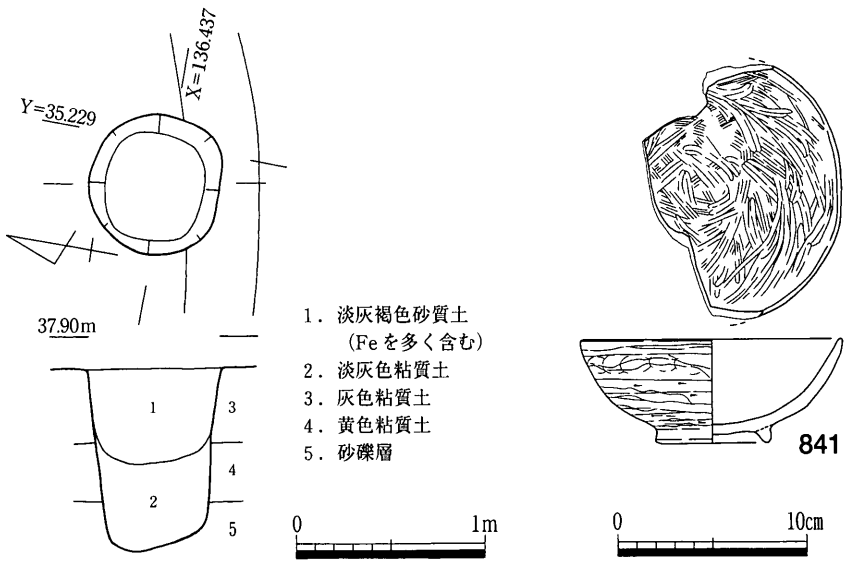
遺構の時期は、土師質土器の年代と瀬戸焼が出土することにより、14世紀前半頃と考えられる。緑釉陶器は紛れ込みと考えられる。

Ⅱ区SK37（第180図）

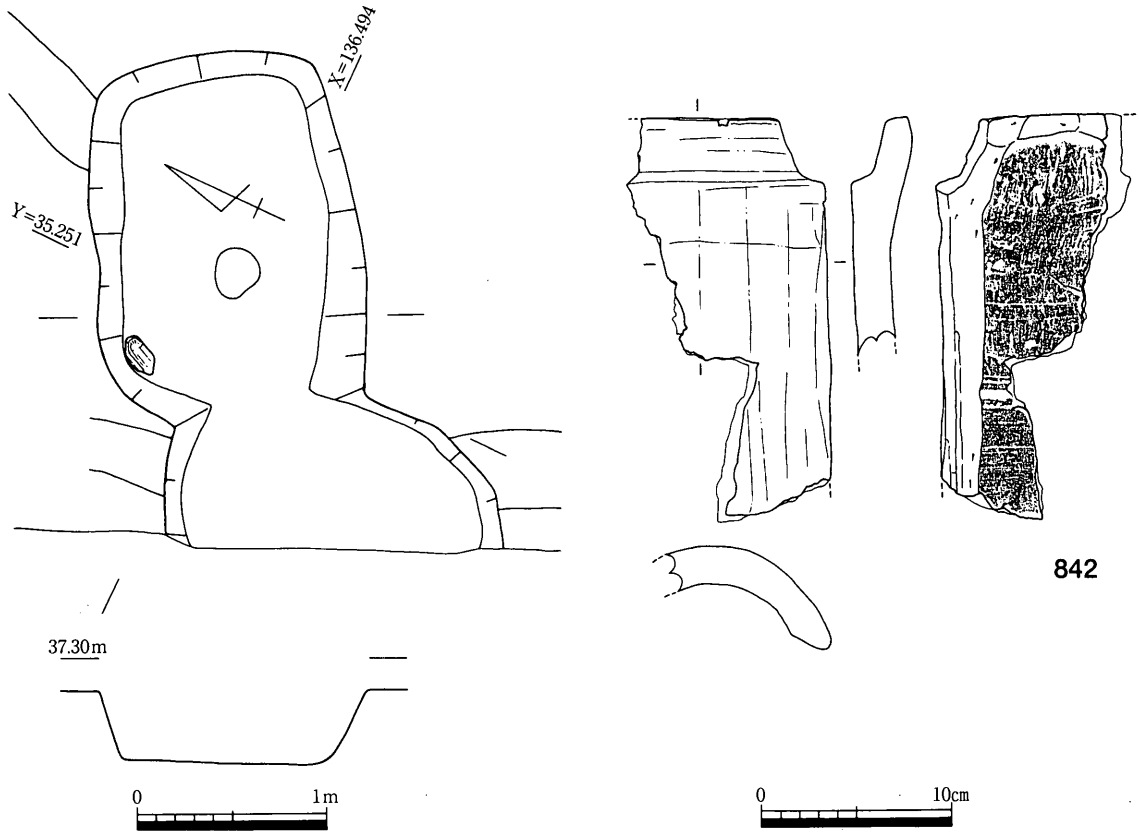
Ⅱ区D5グリットで検出した土坑である。楕円形で、長軸69cm、短軸45cm、深さ9cmで、断面形状は浅い皿状である。埋土中からは土師質土器杯、須恵器捏鉢が出土した。

835は須恵器鉢E。外面に格子叩きが残る。12世紀後半～13世紀前半。

遺構の時期も同時期と考えら



第182図　Ⅱ区SK109平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

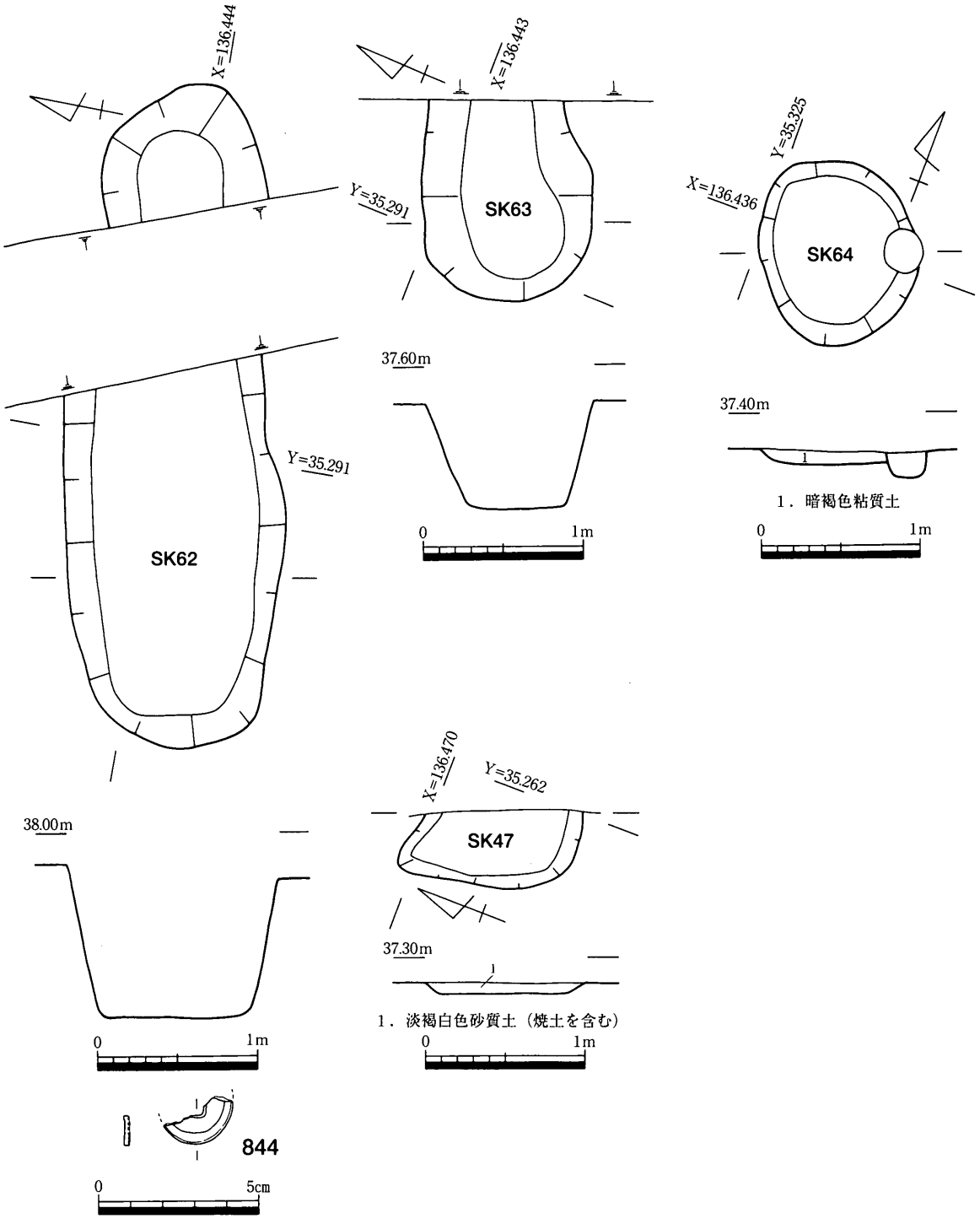


第183図　Ⅳ区SK46平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

れる。

Ⅱ区SK38（第180図）

Ⅱ区D5グリットで検出した土坑である。不整形を呈し、長軸64cm、短軸43cm、深さ7cmである。SD30の上面で検出しているが、SD30が消失しかかる付近で検出しており、SD30の一部の可能性もあろう。埋土中からは土師質土器杯が出土した。



第184図　Ⅲ区SK62・63・64、Ⅳ区SK47平・断面図（1/40）、SK62出土遺物（1/2）

836は土師質土器杯。13世紀中～後半で、遺構の時期も同時期と考えられる。

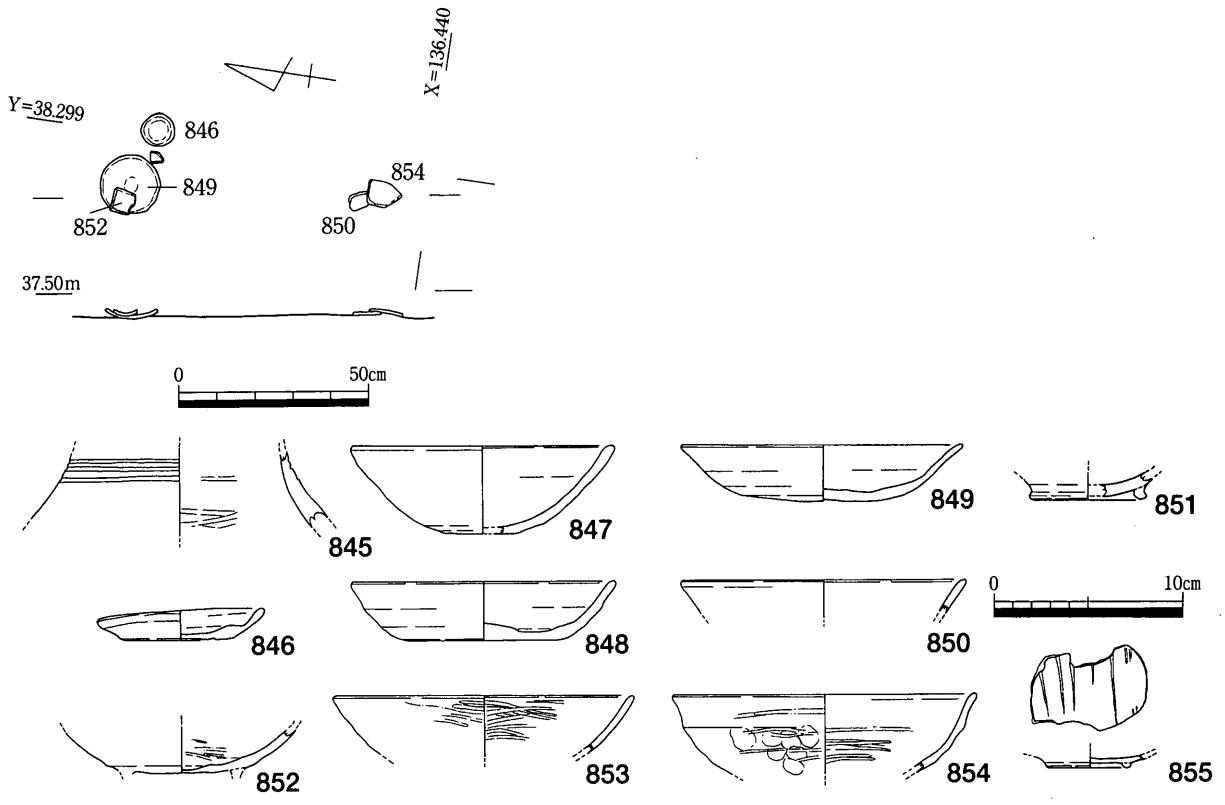
Ⅱ区SK42（第180図）

Ⅱ区D5グリットで検出した。円形で、直径38cm、深さ52cmを測る。埋土中からは土師質土器小皿、杯等が出土した。

837・838は土師質土器小皿。

Ⅱ区SK43（第181図）

Ⅱ区E7グリットで検出した。不定形の落ち込みである。検出長は約6.60m、幅約2.40m、深さ8cmを測る。



第185図　Ⅲ区SK107遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

東側は調査区外へ延びるため、南側は重複する溝状遺構のため全体の規模は不明である。埋土中からは須恵器椀・甕小片が出土した。溝状遺構との前後関係は不明であるが、溝状遺構の約5m南側を現水路が通っており、溝状遺構はその前身の水路と考えられる。SK43はそのオーバーフローした痕跡かもしれない。

839・840は須恵器。**839**は甕C。小片。やや軟質の瓦質に近い焼成。**840**は椀。内外面にヘラミガキを施し、口縁端部には重ね焼きの痕跡が残る。

いずれも13世紀前半頃と考えられ、遺構の時期も同じと考えられる。

Ⅱ区SK109（第182図）

Ⅱ区E5グリットで検出した土坑である。SD28の上面で検出した。円形で直径72cm、深さ92cm、埋土は淡灰褐色砂質土である。埋土中からは1／2程度の破片の黒色土器A椀が出土した。

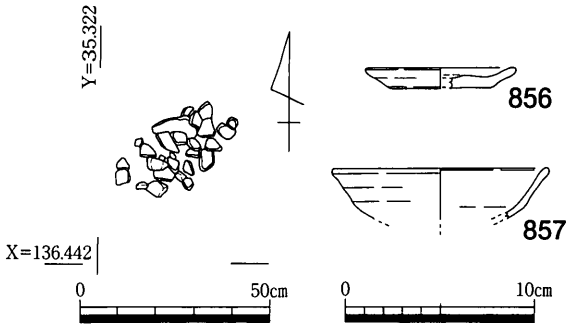
841は黒色土器A椀。内面には放射状のハケの後横方向のヘラミガキを、外面には回転ヘラ削りの後横方向のヘラミガキを施す。12世紀後半。

遺構の時期も同じと考えられる。

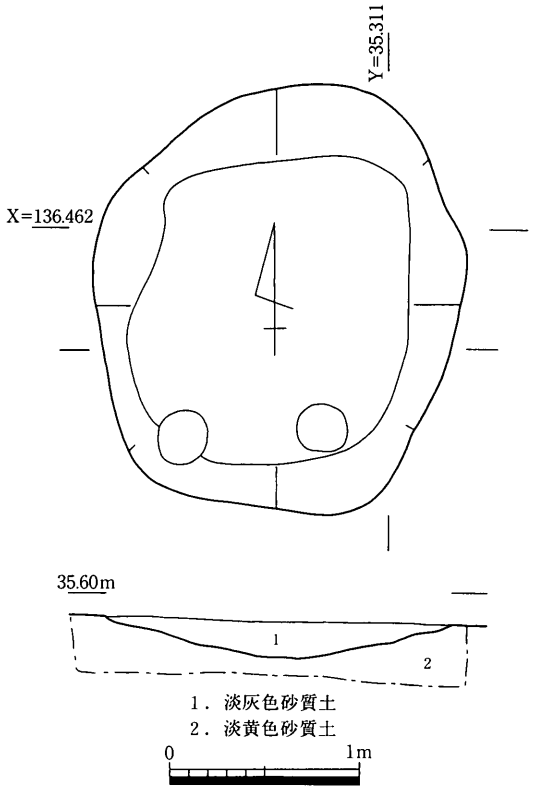
Ⅳ区SK46（第183図）

Ⅳ区B6グリットで検出した土坑である。SD49・51の上面で検出した。隅丸方形と楕円形の土坑を2基連ねたような形状で、西側は調査区外へ延びる。長軸は2.63m以上、幅は1.40m程度、深さ38cmである。埋土中からは丸瓦片が出土した。

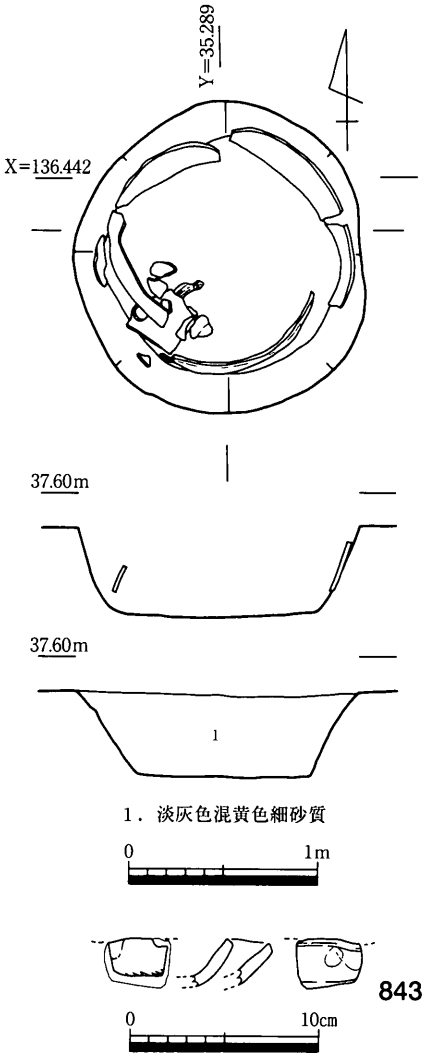
842は丸瓦。外面は板ナデ、内面にはコビキBの痕跡と布目痕が残り、粘土板はコビキBによって切り離されたことがわかる。内面の縁部の面取りは、瓦の下端部から玉縁の上部まで一度にヘラ削りをして面取りし、その後玉縁の上部を左から右へヘラ削りして面取りする。16世紀以降。



第186図　Ⅲ区SK108遺物出土状況（1/20）、出土遺物（1/4）



第187図　Ⅵ区SK70平・断面図（1/40）



第188図　Ⅲ区SK49遺物出土状況平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

遺構の時期も16世紀以降と考えられる。

Ⅳ区SK47（第184図）

Ⅳ区C7グリットで検出した土坑である。西側は調査区外へ延びる。楕円形で、長径1.02m、短径0.50m以上、深さ7cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は淡褐白色砂質土で、焼土を含む。

埋土中からは出土遺物はなかったが、埋土に焼土を含むことから中世の遺構と考えられる。

Ⅲ区SK62（第184図）

Ⅲ区D8グリットで検出した楕円形の土坑である。長径4.14m、短径1.38m、深さ91cm、断面形状は逆台形を示す。埋土中からは銭貨が出土した。

遺構の時期は中世以降と考えられる。

844は銭貨。傷みが著しく種類は不明。

Ⅲ区SK63（第184図）

Ⅲ区D8グリットで検出した土坑である。楕円形で、東側は攪乱により消失する。長径1.25m以上、短径1.06m、深さ66cm、断面形状は逆台形を呈する。埋土中からの出土はなかった。

Ⅲ区SK64（第184図）

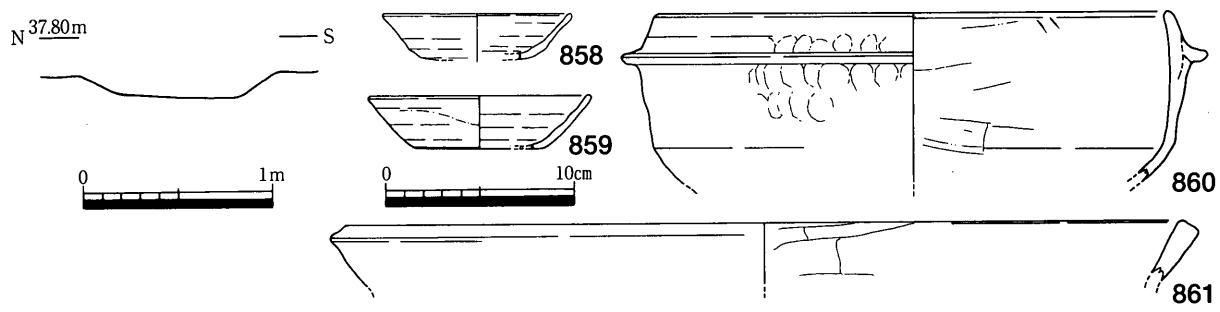
Ⅲ区E10グリットで検出した土坑である。楕円形で、長径1.14m、短径1.00m、深さ8cm、埋土は暗褐色粘質土、断面形状は浅い皿状である。埋土中からは土師質土器杯片が出土した。

Ⅲ区SK107（第185図）

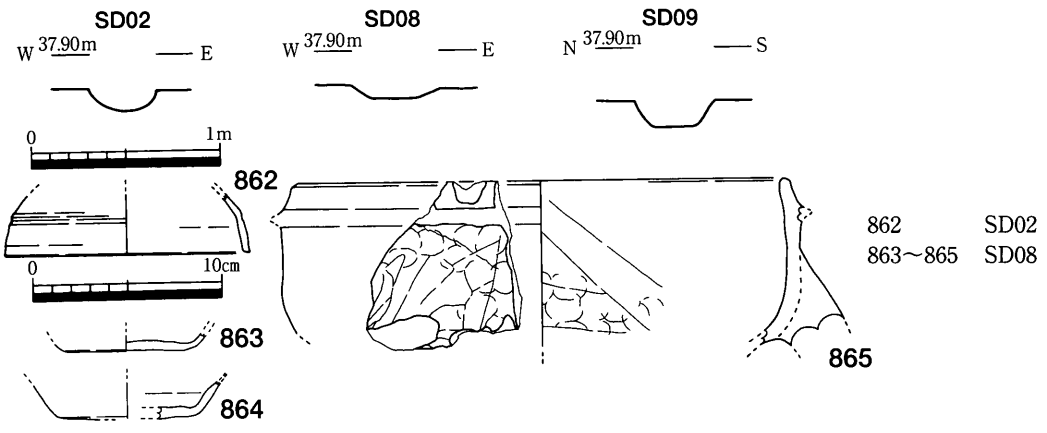
Ⅲ区D8で検出した土器集中遺構である。丘陵地が調査地に迫ってくる付近で土器がやや集中して出土しており、検出した際には遺構の肩は明確ではなかったが、削られた可能性もある。南北85cm、東西30cmの範囲で土師質土器杯等が多く出土した。

845は弥生土器壺。頸部にヘラ描き沈線が3条施される。弥生時代前期後半。周溝墓からの混入か。**846～851**は土師質土器。**846**は小皿。歪みがある。底部には時計回りのヘラ切り痕を残し、板圧痕が見られる。**847～850**は杯。**848**には底部に板圧痕が見える。**851**は椀底部。**852**は須恵器椀。底部にはヘラ切り痕、板圧痕が残る。高台部は剥離する。内面はヘラミガキ痕が見える。**853**は黒色土器A椀。内外面に密にヘラミガキを施す。**854・855**は瓦器。ともに和泉産。**854**は内外面に横方向のヘラミガキを施す。外面は指押さえ痕が顕著に残る。**855**は底部。見込み部分に1方向の暗文がある。

遺構の時期はおおむね12世紀後半頃と考えられる。



第189図　Ⅰ区SD05断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第190図　Ⅰ区SD02・08・09断面図（1/40）、SD02・08出土遺物（1/4）

Ⅲ区SK108（第186図）

Ⅲ区D10グリットで検出した。明確な遺構のラインを持たず、長軸約40cm、短軸約22cmの範囲で土師質土器等が広がって出土した。

856・857はともに土師質土器。**856**は小皿。**857**は杯。いずれも13世紀代と考えられ、遺構の時期も同じと考えられる。

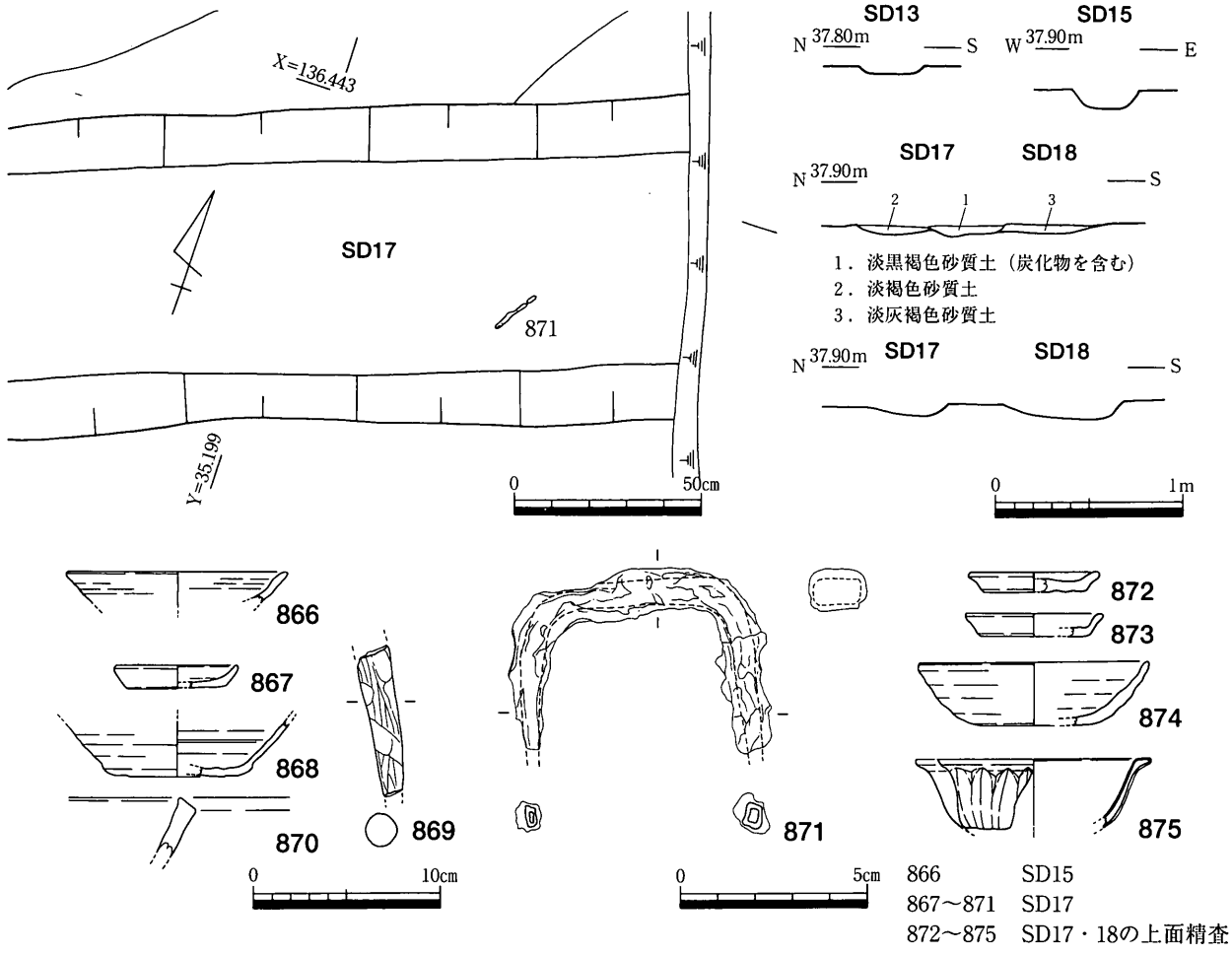
Ⅵ区SK70（第187図）

Ⅵ区C13グリットで検出した土坑である。楕円形で長径2.20m、短径1.95m、深さ20cm、断面形状は浅い擂鉢状、埋土は淡灰色砂質土である。埋土中からの出土遺物はなかった。

Ⅲ区SK49（第188図）

Ⅲ区D8グリットで検出した。円形で、直径1.60m、深さ43cm、埋土は淡灰色混黄色細砂質土である。土坑中には底部のない土師質土器甕が埋め込まれていた。肥溜めとして利用されていたもので、時期は近世以降と考えられる。埋土中からは他に陶器片が出土した。

843は瀬戸焼灰釉陶器卸皿。片口部が少し残る。残存部分では、卸目より上部から外面にかけて灰釉が施される。



第191図　Ⅰ区SD13・15・17・18断面図（1/40）、SD17遺物出土状況（1/20）、SD15・17・18出土遺物（1/2、1/4）

Ⅰ区SD05（第189図）

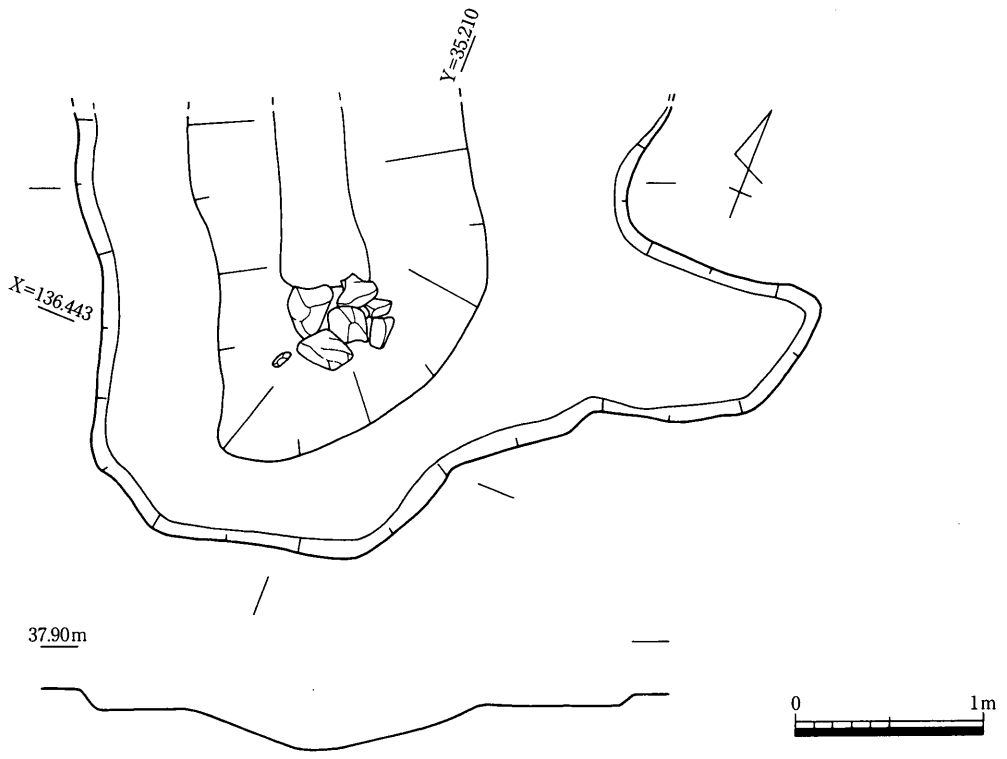
Ⅰ区D1・2にまたがって検出した溝状遺構である。検出長は6.70m、幅102cm、深さ11cm、断面形状は浅い皿状で、主軸方位はN73°Eである。SD05はSD06の上面で検出した。埋土中からは土師質土器、須恵器等が出土した。

858は土師質土器杯。**859**は須恵器杯。口縁端部から体部外面にかけて重ね焼きの痕跡が残る。西村産。**860**は土師質土器足釜B。鍔部分に接合の痕跡がある。**861**は土師質土器鍋A。

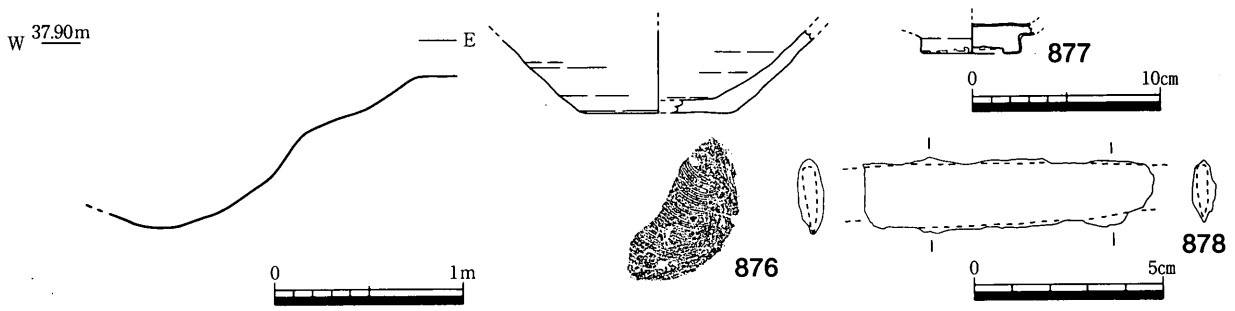
出土遺物から遺構の時期は14世紀前半頃と考えられるが、溝の主軸方位は周辺の条里型地割の方向とは異なる。

Ⅰ区SD02（第190図）

Ⅰ区E2グリットで検出した溝状遺構である。SD03の上面で検出した。SD03と重なる付近で方向をやや南側へ屈曲させている。検出長は約5.50m、幅36cm、深さ11cm、断面形状はボウル状で、主軸方位は屈曲部より南西側がN32°E、屈曲部より北東側は、やや外湾するがN58°Eである。埋土中からは須恵器杯蓋、土師質土器小皿・杯が出土した。



第192図　Ⅱ区SD21南端部遺物出土状況平・断面図（1/40）



第193図　Ⅱ区SD22断面図（1/40）、出土遺物（1/2、1/4）

862は須恵器杯蓋。頂部と口縁部の境に緩い沈線を巡らせる。6世紀前半頃。SD03からの混入と考えられる。

遺構の時期は、土師質土器小皿や杯の小片が出土しているので、中世としておく。

Ⅰ区SD08（第190図）

Ⅰ区D2グリットで検出した溝状遺構である。検出長3.70m、幅46cm、深さ4cm、断面形状は浅い皿状である。主軸方位はN3.5°Eである。埋土中からは土師質土器杯小片が出土した。

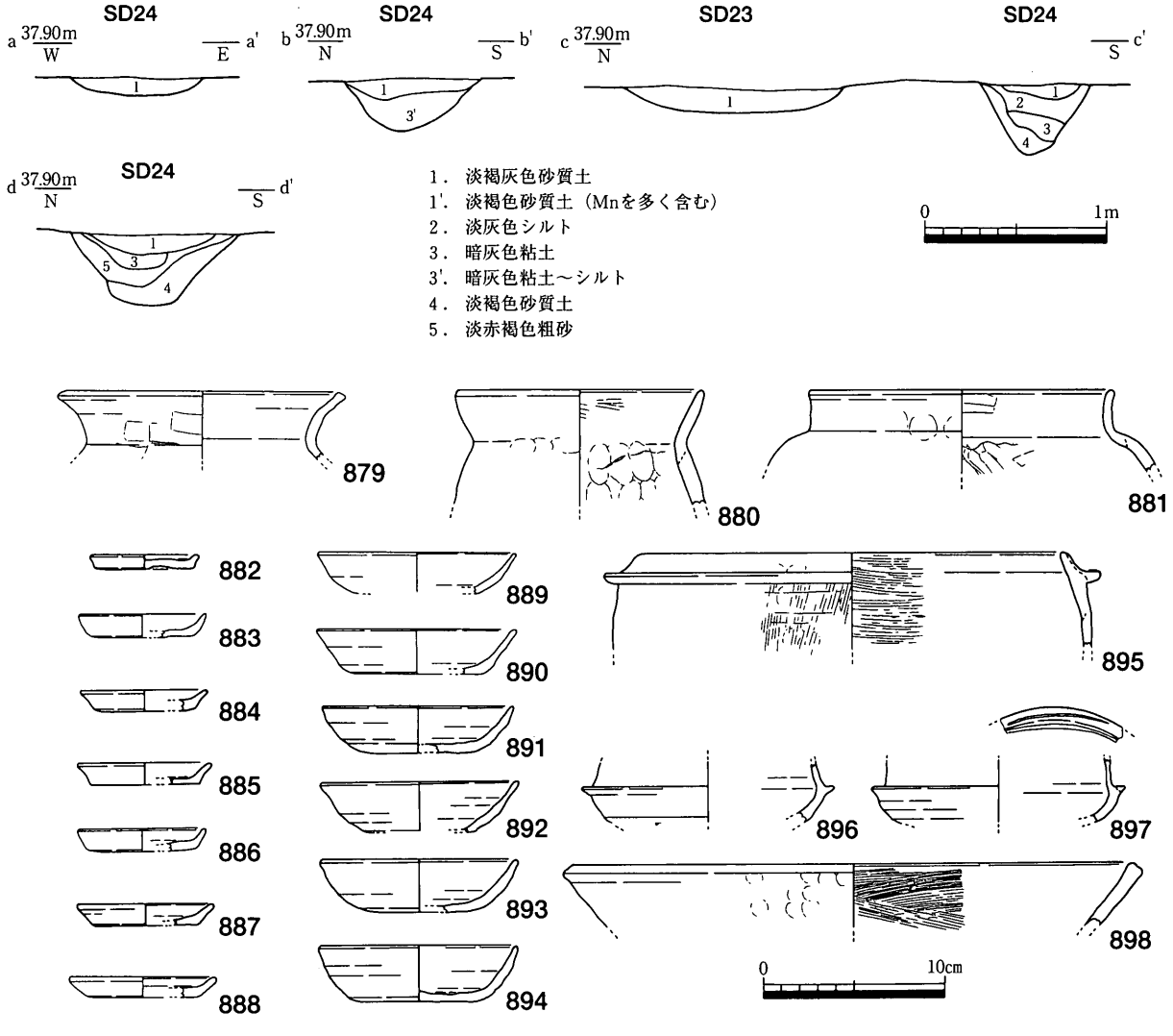
863・864は土師質土器杯。863には底部に時計回りのヘラ切り痕が残る。865は土師質土器足釜B。鍔先端部は欠損。

遺構の時期は14世紀前半頃と考えられる。

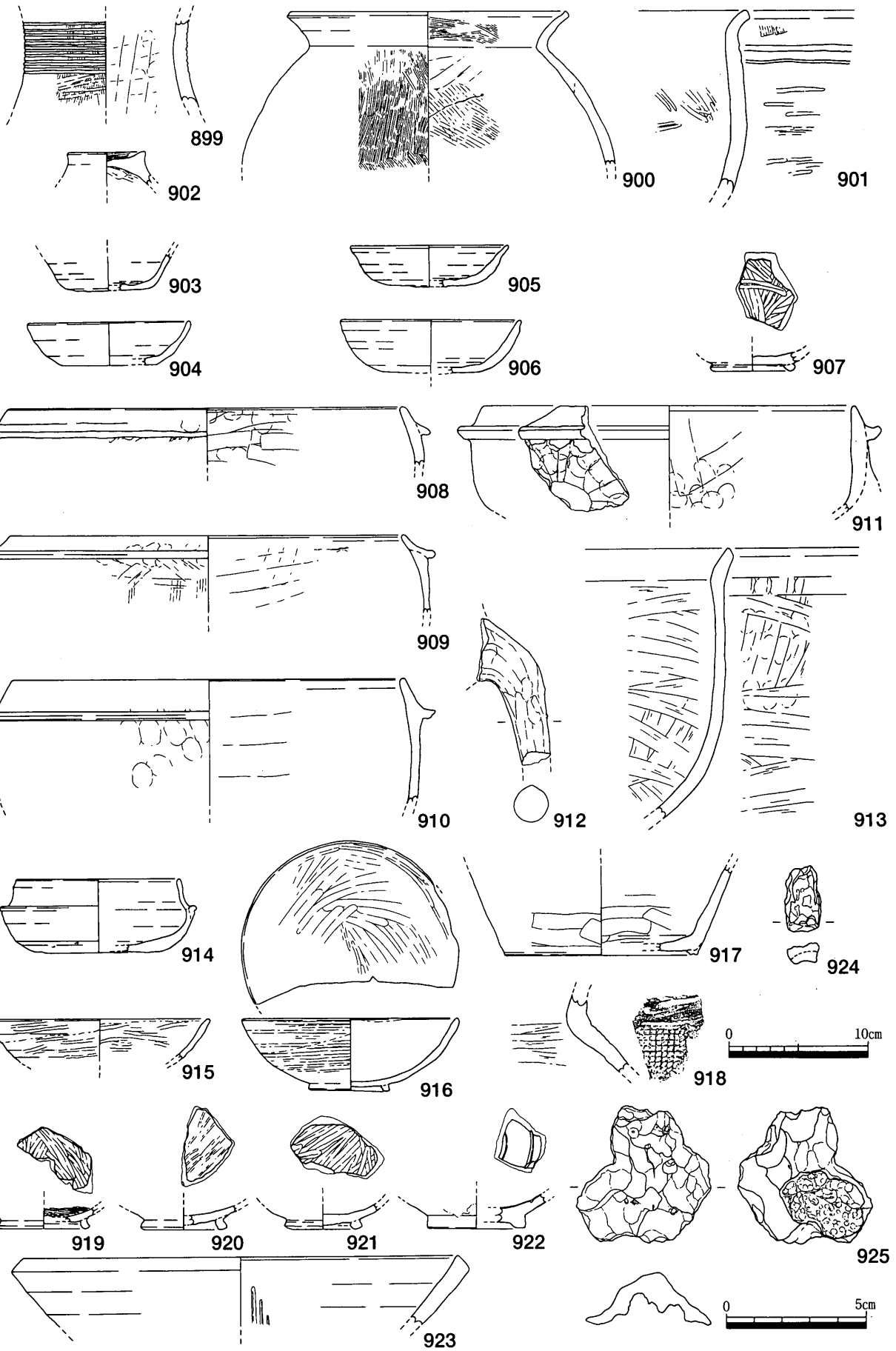
Ⅰ区SD09（第190図）

Ⅰ区D2グリットで検出した溝状遺構である。SB07－SP04の上面で検出した。検出長131cm、幅42cm、深さ14cm、断面形状は逆台形、主軸方位はN59°Eである。埋土中からは土師質土器足釜片、須恵器甕片が出土した。

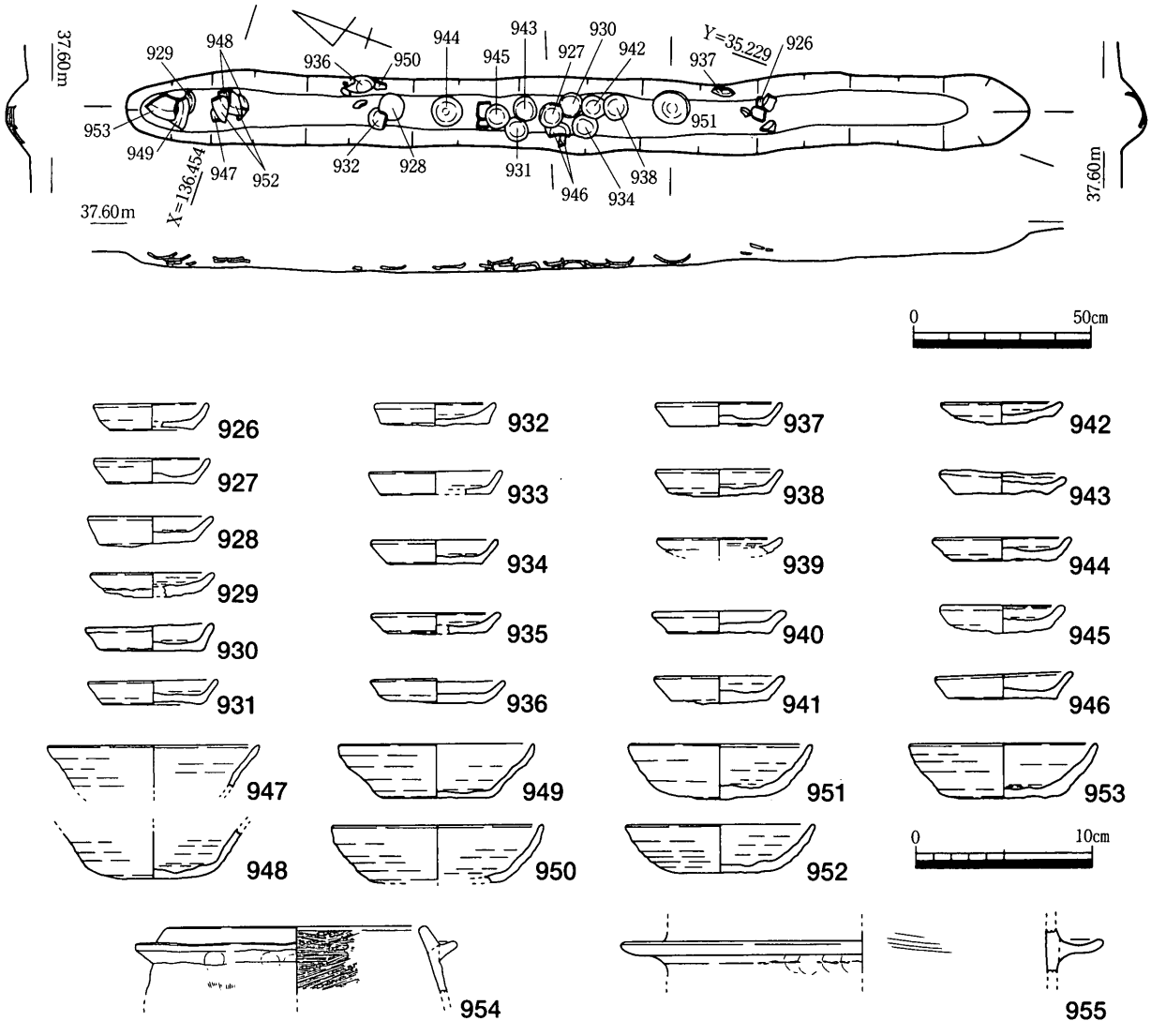
遺構の時期は、足釜が出土していることから、14世紀代頃と考えられる。



第194図　Ⅱ区SD23・24断面図（1/40）、SD23出土遺物（1/4）



第195図　Ⅱ区SD24出土遺物（1/2、1/4）



第196図　Ⅱ区SD25遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

Ⅰ区SD13（第191図）

Ⅰ区E3・4グリットにまたがって検出した溝状遺構である。調査区東端から7.50m検出し、そこから北西方向へ屈曲する。Ⅱ区では延長部を検出しておらず、Ⅰ区とⅡ区の境で途切れる。幅35cm、深さは4cmである。旧地割境の攪乱から北側では、やや幅の広いSD18を検出しているが、これと同一溝かどうかは明らかではない。断面形状は浅い皿状、主軸方位はN65°Eである。埋土中からは土師質土器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、溝が条里型地割と同じ方位を指すことから、中世としておく。

Ⅰ区SD15（第191図）

Ⅰ区D3グリットで検出した溝状遺構である。SD17・18の下部で検出した。SK102へ向かって延びるが、SK102までは達しない。また、SD18より南では検出できなかった。検出長6.25m、幅30cm、深さ10cm、断面形状は逆台形、主軸方位はN16°Wである。埋土中からは土師質土器小皿・杯が出土した。

866は土師質土器杯。13世紀代。遺構の時期も同時期と考えられる。

Ⅰ区SD17（第191図）

Ⅰ区D・E3グリットで検出した溝状遺構である。SD15の上面で検出した。SD18とわずかに重複し、これより新しい。調査区の東端から7mの地点で南西へ屈曲し、消失する。幅80cm、深さ5cmを測り、埋土は淡黒

褐色砂質土、淡褐色砂質土である。主軸方位はN59°Eである。埋土中からは土師質土器杯・小皿、須恵器鉢等が出土した。

867～869は土師質土器。**867**は小皿。**868**は杯。**869**は足釜脚部。**870**は須恵器鉢E口縁部片。**871**は鉄製品。U字状に棒状の鉄を折り曲げ、カスガイ状にする。遺物はおおむね12世紀後半～14世紀前半頃までのものを含む。

872～875はSD17・18の上面精査の際に出土した遺物で、どちらかから出土した可能性が高い。**872・873**は土師質土器小皿。**874**は土師質土器杯。**875**は青磁碗。外面に鎬蓮弁を彫る。口縁端部は上を向く。龍泉窯系。

遺構の時期は、出土遺物と遺構の重複関係から13世紀中～後半頃と考えられる。

Ⅰ区SD18（第191図）

Ⅰ区D・Eグリットで検出した溝状遺構である。SD15の上面で検出し、SD17の下部で検出した。調査区東端から7.15mの地点でほぼ直角に南南東方向へ屈曲し、旧水田境付近で消失する。SD13とは近い位置にあるが、同一の溝かどうかは明らかではない。幅70cm、深さ8cm、埋土は淡灰褐色砂質土で、主軸方位はN66°Eである。埋土中からは遺物は出土しなかったが、SD17とはあまり隔たらないと考えられる。

Ⅱ区SD21（第192図）

Ⅱ区D4グリットで検出した溝状遺構である。北から16mの地点で消失する。幅2.30～3.40m、深さ32cm、断面形状は二段掘り状、主軸方位はN25°Wである。溝の南端部では東側へもわずかに延びるように張り出している。また、南端部では20cm大の川原石を6個程度かためて置いていた。埋土中からはサヌカイト片が出土しただけであった。

遺構の時期はSD22やSA01と同じ頃と考えられる。

Ⅱ区SD22（第193図）

Ⅱ区D・E4グリットで検出した溝状遺構である。調査区南西端で検出し、南側は調査区外へ延び、北側はSD20により消失する。検出長13m、幅170cm以上、深さ80cm、断面は中程で落ち込みの勾配が急になり、主軸方位はN24°Wである。埋土中からは須恵器鉢底部、青磁碗等が出土した。

876は須恵器鉢底部。底部には糸切り痕が残る。**877**は青磁碗底部。高台内は施釉しない。12世紀中～後半頃。**878**は鉄製品。棒状で、下端部を少し細くする。

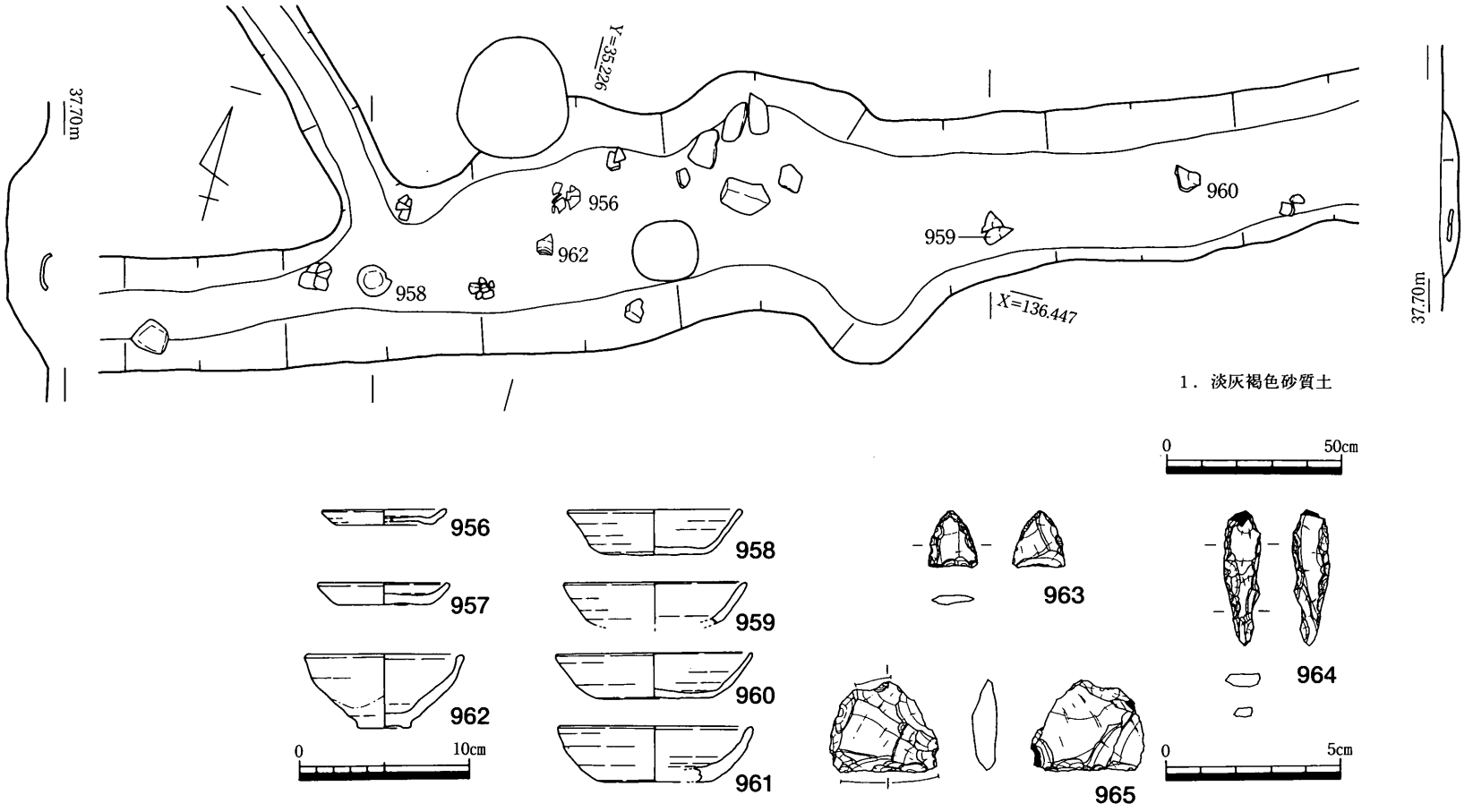
遺構の時期は13世紀代と考えられる。

Ⅱ区SD23（第194図）

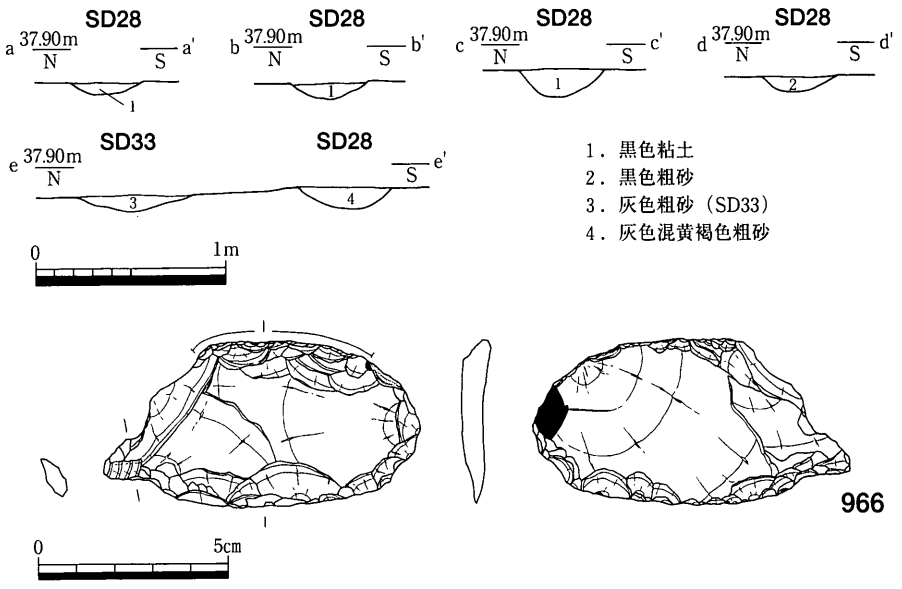
Ⅱ区E4グリットで検出した溝状遺構である。SD22から2.60m東側の位置から、SD24の北側0.70mの位置に平行して検出した。検出長7.70m、幅120cm、深さ12cm、断面形状は浅い皿状・埋土は淡褐灰色砂質土、主軸方位はN56°Eである。埋土中からは土師質土器、須恵器等が出土した。SD31がSD23の延長部で検出されており、同一遺構の可能性もあろう。

879は土師器甕。**880**は弥生土器甕。内面に粘土紐の接合痕が残る。**881**は土師器壷。**882～895**は土師質土器。**882～888**は小皿。口径が5.8cmのものと7.0～8.2cmのものがある。**889～894**は杯。口径は10.4～10.9cmに収まる。底部は判明するものはすべてヘラ切りによる。**895**は足釜。鍔から上部を粘土を足して作り出した痕跡が残る。**896～898**は須恵器。**896・897**は杯身。ともに体部下半部を回転ヘラ削りする。**897**には受け部の上部に重ね焼きによる土器の溶着痕が残る。**898**は鉢E。内面はハケによる。

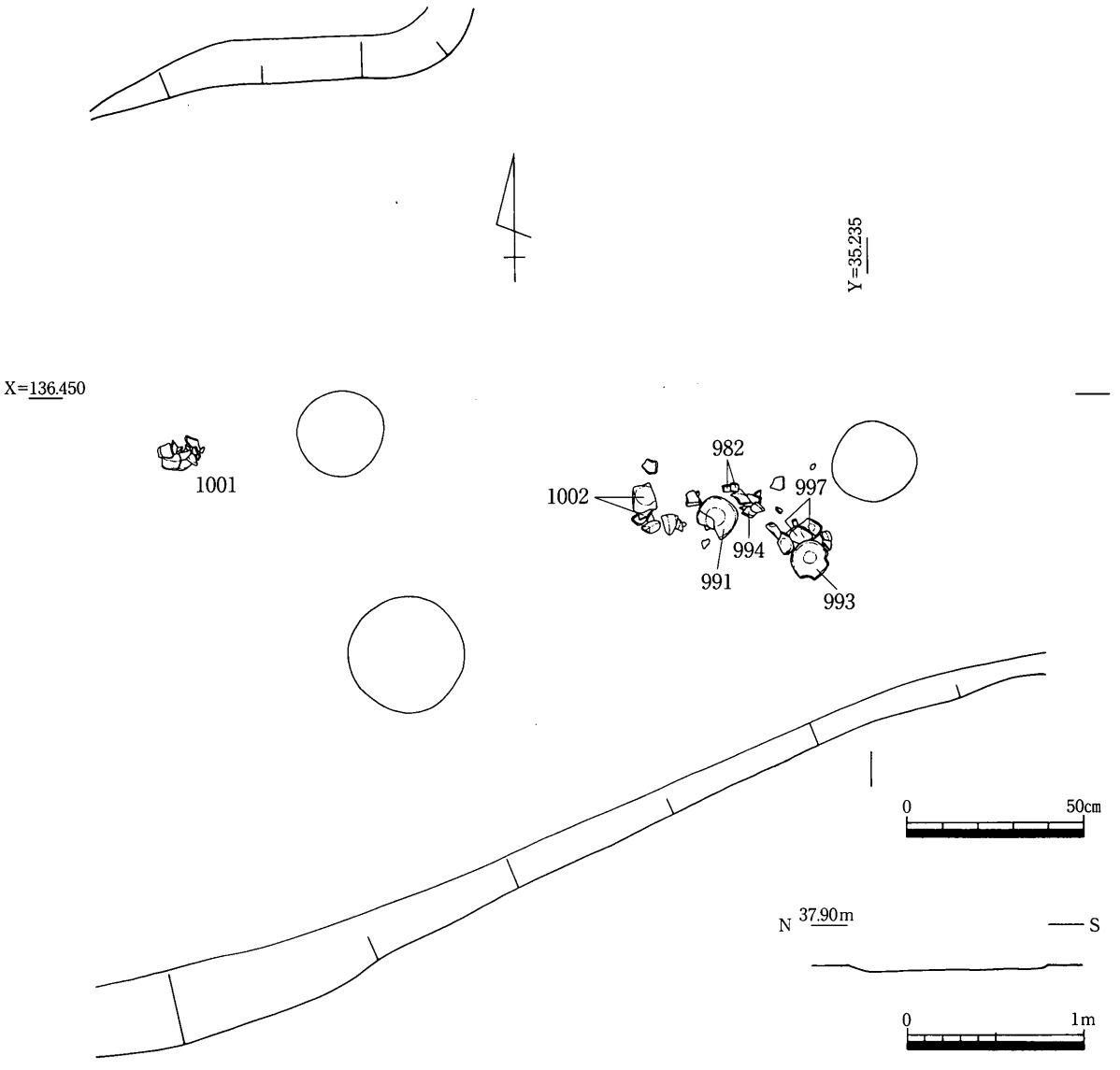
遺構の時期は土師質土器の時期から13世紀後半頃と考えられる。5世紀代の須恵器は、下部に堆積する古墳



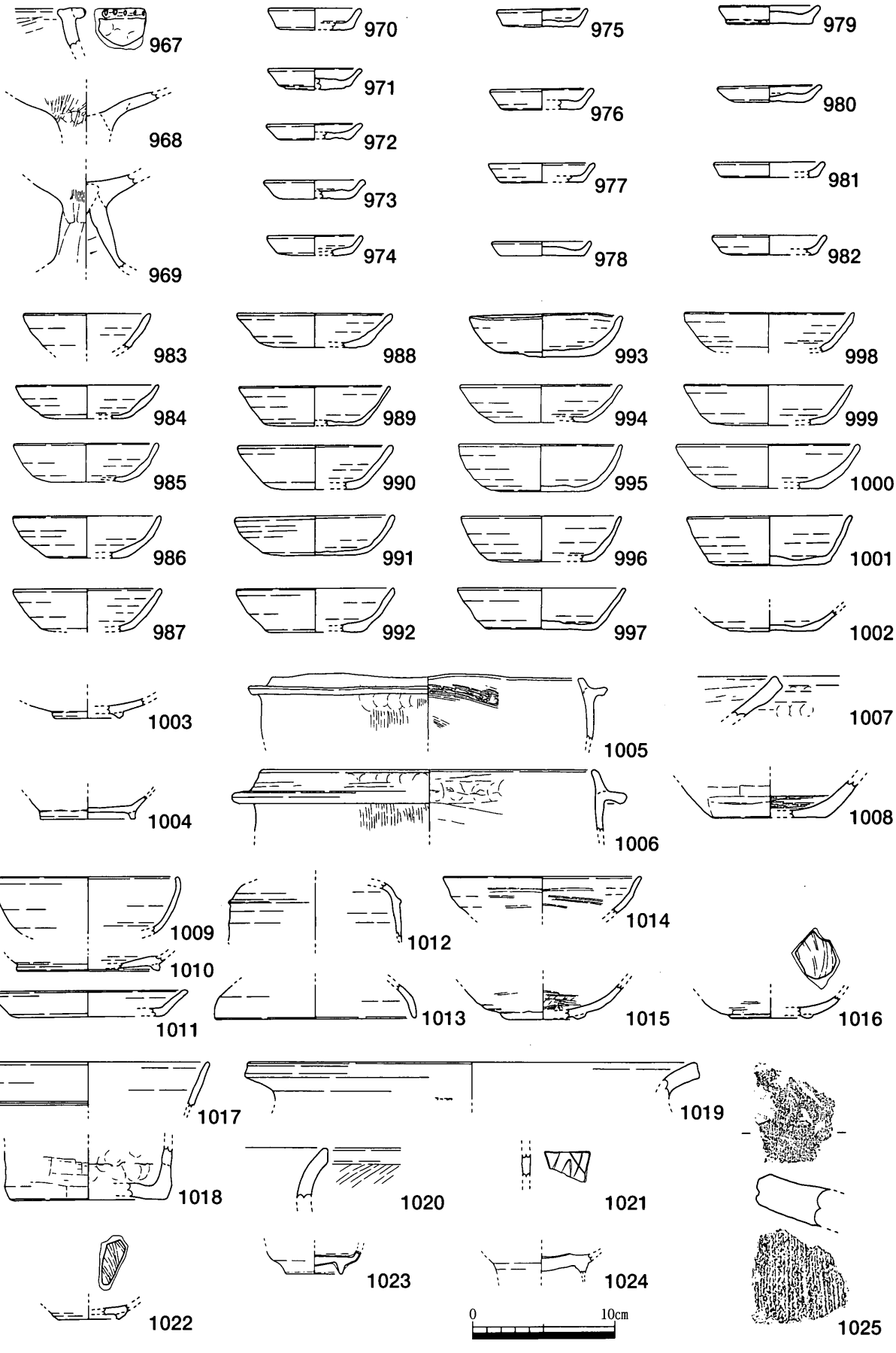
第197図　Ⅱ区SD26遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/2、1/4）



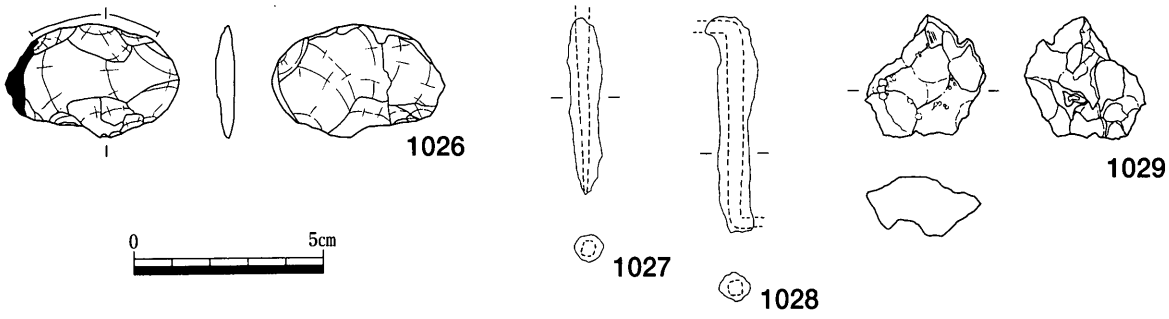
第198図　Ⅱ区SD28・33断面図（1/40）、SD28出土遺物（1/2）



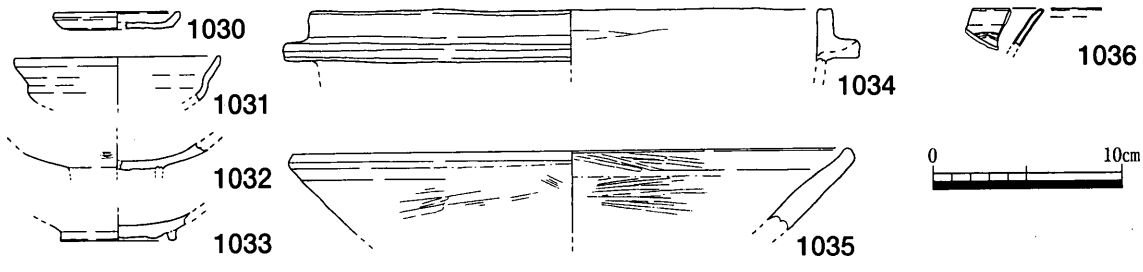
第199図　Ⅱ区SD30遺物出土状況（1/20）、SD31断面図（1/40）



第200図　Ⅱ区SD30出土遺物（1）（1/4）



第201図　Ⅱ区SD30出土遺物（2）（1/2）



第202図　Ⅱ区SD31出土遺物（1/4）

時代包含層からの混入と考えられる。

Ⅱ区SD24（第194・195図）

Ⅱ区E4・5、D5・6にまたがって検出した溝状遺構である。調査区の南西から北東へ向けて横断する。幅62～92cm、深さ29～38cm、埋土の中位に暗灰色粘土が堆積し、その上部に淡褐灰色砂質土、下部に淡褐色砂質土等が堆積する。主軸方位はN63°Eで、ほぼ条里型地割と同方位である。SD31の上面、SD22の下部で検出した。埋土からは土師質土器、須恵器、鉄滓等が出土した。

899～902は弥生土器。**899**は壷。頸部に11条以上のヘラ描き沈線文を施す。**900・901**は甕。**901**は如意形口縁を持ち、体部には2条のヘラ描き沈線を施す。**902**は蓋。頂部は薄く、天井部と体部の境のくびれは少ない。**899**は弥生時代前期末、**900**は弥生時代終末期、**901・902**は弥生時代前期中～後半と考えられる。**903～913**は土師質土器。**903～906**は杯。底部の切り離しは、観察できるものはすべてヘラ切りによる。**907**は椀。内面にヘラミガキを施し、底部にはヘラ切り痕を残す。**908～912**は足釜。**908**は鍔部に、**909**は鍔部から上部に接合痕を残す。**913**は鍋。口縁部破片で、傾きは不確かである。**914～918**は須恵器。**914**は杯身。底部は回転ヘラ削りする。MT15形式。**915・916**は椀。ともに口縁端部内面から体部外面中位に重ね焼きの痕跡を残し、内外面とも横方向のヘラミガキを密に施す。**917**は壷底部。**918**は甕頸部片。外面には格子叩きを施し、内面は板ナデをする。**919～921**は黒色土器A椀。いずれも内面に密にヘラミガキを施し、底部にはヘラ切り痕が観察できる。高台部の外側には回転ヘラ削り痕は観察できない。**922**は白磁碗。施釉は外面の体部と高台部の境付近までである。見込みには圏線が1条と片彫りの文様がある。**923**は備前焼擂鉢。卸し目がわずかに残る。**924**は粘土塊。**925**は椀型鍛冶滓。凸面側にわずかに木炭痕が残る。

遺構の時期はおおむね13世紀前半を中心とする時期と考えられる。弥生土器および須恵器杯身は混入と考えられる。

Ⅱ区SD25（第196図）

Ⅱ区D5グリットで検出した溝状遺構である。SB11の東から2列目の柱穴列の約30cm東側で、方向もほぼ揃えて検出した。検出長2.56m、幅20cm、深さ7cm、断面形状半円形で、主軸方位はN28°Wである。溝の底からは意図的に埋置されたと考えられる土師質土器小皿・杯が中央付近を中心に出土した。

出土したのはすべて土師質土器である。**926～946**は小皿。口径は6.4～7.8cmの間に収まる。底部の切り離し

はすべてヘラ切りである。ヘラ切り痕は、928・930・931・936・938・942・944は時計回り、943は反時計回りである。947～953は杯。口径は10.4～11.0cmと11.9cmに分かれる。底部はヘラ切りで、951・953には板圧痕が残る。951は時計回りのヘラ切り痕が残る。954は足釜A。鍔部と鍔上部に接合痕が残る。955は羽釜B鍔部小片。

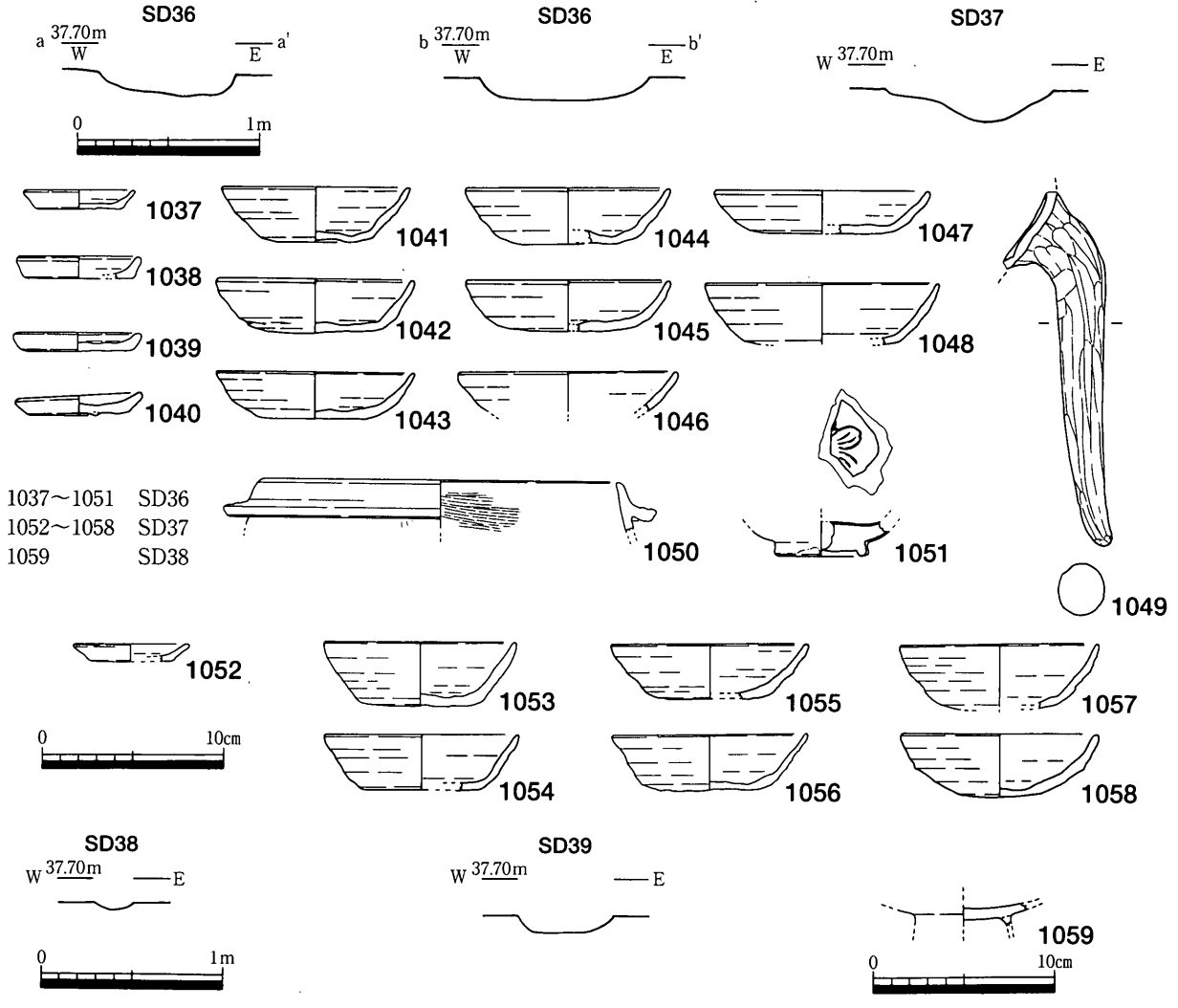
遺構の時期は、955以外はおおむね13世紀中～後半と考えられる。

Ⅱ区SD26（第197図）

Ⅱ区D5ブロックで検出した溝状遺構である。SB11の南側柱穴列の南約2.50mで、方位を揃えて検出した。検出長6m、幅34～70cm、深さ5～11cm、埋土は淡灰褐色砂質土、主軸方位はN68°Eである。溝の東端部で北へ直角に屈曲し、1mで消失する。また、西から1.80m付近で北西方向へ屈曲し、1.40mで消失する。埋土中からは土師質土器片等が出土した。

956～961は土師質土器。956・957は小皿。底部はヘラ切りによる。958～961は杯。底部はヘラ切りで、958には時計回りのヘラ切り痕が残る。962は天目茶碗。外面体部下半部まで濃茶色の釉が掛かる。963～965はサヌカイト製石器。963は石鏃。964は石錐。965は楔形石器。上・下部に敲打痕が残る。

遺物の時期は、天目茶碗が15世紀前半頃まで下ると思われるが、他の土師質土器は13世紀後半であり、遺構の時期も他の遺構の検出状況から13世紀後半としたい。



第203図　Ⅱ区SD36・37・38・39断面図（1/40）、SD36・37・38出土遺物（1/4）

Ⅱ区SD28（第198図）

Ⅱ区E4～7で検出した溝状遺構である。調査区を西から東まで横断する。SD41・42の上面で検出した。幅34～48cm，深さ6～14cm、埋土はおもに黒色粘土、黒色粗砂、主軸方位はおおむねN82°Eである。埋土中からは須恵器、土師器小片やサヌカイト片が出土した。

966は石匙。サヌカイト製。

遺構の時期は、中世の遺物出土するSD42の上面で検出したことから、中世以降とするが、埋土や溝の主軸方位、出土遺物を考えれば、時期は遡る可能性はある。

Ⅱ区SD33（第198図）

Ⅱ区D6で検出した溝である。検出長6.6m、幅20～60cm、深さ9cm、埋土は灰色粗砂、主軸方位はN62°Eである。埋土中からの出土遺物はなかったが、主軸方位がおおむね条里型地割の方位を指すことから、中世以降の遺構と考えられる。

Ⅱ区SD30（第199・200・201図）

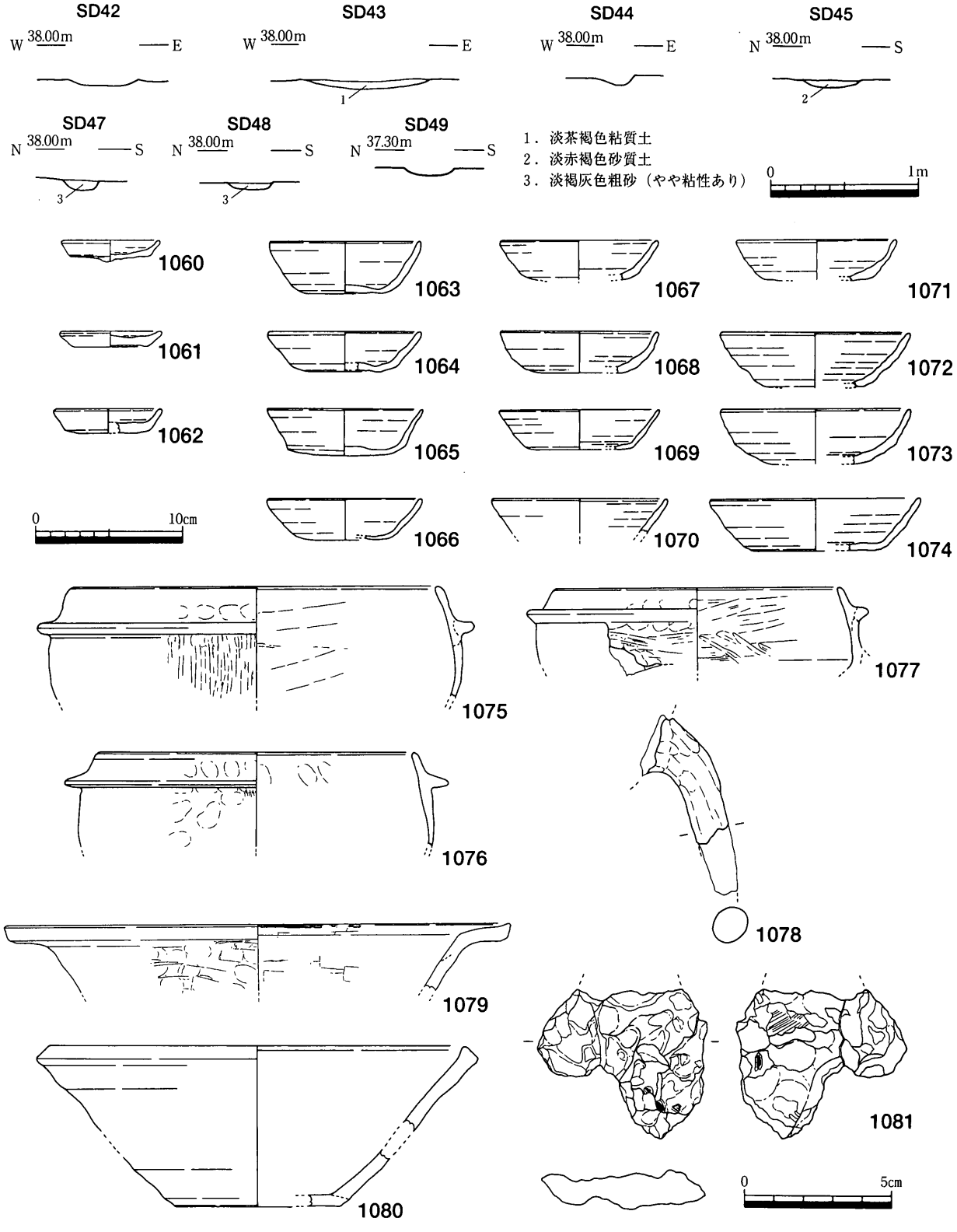
Ⅱ区E5・6で検出した溝状遺構である。幅3.60～7.20mを測り、主軸方位はN63°Eを指す。検出長は26mで、SD36付近で幅が広くなり、調査区東端から22m付近で二股に分かれ、SB11付近で消失する。溝の南西部で土師質土器杯等が集中して出土した。

967は弥生土器甕小片。逆L字形口縁部を持ち、口縁端部に刻み目を持つ。体部無文。**968・969**は土師器高杯。**968**は杯部小片。底部と脚部は剥離する。外面には縦方向のヘラミガキが見える。**969**では杯部底部と脚部に接合痕が観察でき、**968**と合わせれば、脚部と杯部の接合方法がよくわかる。**970～1008**は土師質土器。**970～982**は小皿。口径はおおむね6.3～6.6cm、6.9～7.4cmに分かれる。底部はすべてヘラ切りで、**975・978・979**は時計回りのヘラ切り痕が観察できる。**983～1002**は杯。口径はおおまかには9.8～10.8cm、11.1～11.8cm、12.7cmのものに分かれる。**983**は小破片のため、口径はやや正確さを欠くと思われる。**997・1002**は底部に板圧痕を残す。**1003・1004**は椀。**1004**は体部が直線的に立ち上がるもので、9世紀後半頃と考えられる。**1005・1006**は足釜。ともに外面にハケを残し、鍔上部に接合痕を残す。**1007**は鍋口縁部。**1008**は底部片。**1009～1021**は須恵器。**1009**は鉄鉢口縁部か。**1010**は高台付杯。**1011**は皿。**1009～1011**は8世紀後半～9世紀前半頃と考えられる。**1012・1013**は杯蓋。**1012**は頂部と口縁部の境に突帯状の稜線が入る。MT15段階頃。**1013**はTK217段階頃。**1014～1016**は椀。**1014**は口縁端部外面に重ね焼き痕が残る。内外面には粗いヘラミガキが残る。**1015**は見込み部分に放射状の板ナデを施し、その後ヘラミガキする。**1017**は壷片。**1018**は壷底部。内面には指押さえ痕が顕著に残り、外面下部は板ナデする。焼成や色調は土師質だが、器形から須恵器とした。**1019・1020**は甕小片。**1019**は口径はやや不確か。**1020**は口縁部外面にハケ状の工具痕が残る。**1021**は須恵器小片。器種、傾きは不明。外面にヘラ描きの文様がある。**1022**は瓦器椀。高台の退化が著しい。内面にはヘラミガキが残る。**1023**は青磁。**1024**は白磁。**1025**は平瓦片。凹面に布目、凸面に縄目を残す。**1026**はサヌカイト製石器。上部に敲打痕を残す。楔形石器か。**1027・1028**は鉄製品。**1027**は先端が尖っており、釘と考えられる。**1029**は椀型鍛冶滓。凹面に木炭痕を残す。

遺構の時期は、遺物の大半を占める土師質土器の時期からおおむね13世紀中～後半頃と考えられる。古墳時代後期の遺物はSD29からの混入と考えられる。他ではあまり見られない9世紀代前後の遺物が散見され、同時期の遺構が付近にあったことも予想される。

Ⅱ区SD31（第202図）

Ⅱ区D5・6で検出した溝状遺構である。D5では、SD30とSD24の間で検出し、西から9.50mの位置で南へ直角に屈曲し、3.50mで消失する。遺構の重複関係によりSD24より古い。南側ではSD31に連続する位置で



第204図　Ⅱ・Ⅳ区SD42・43・44・45・47・48・49断面図（1/40）、SD42出土遺物（1/2、1/4）

SD45を検出するが、遺構の重複関係によりSD45より新しい。南側への屈曲点の東側でも溝の痕跡が見られるが、浅くなり、溝のラインも不明確であった。溝の南側の肩はSD24に壊されて検出できなかった。溝の幅は12～40cm程度、深さは4cm程度、主軸方位はN62°Eである。埋土中からは土師質土器小皿・杯等が出土した。

1030～1034は土師質土器。**1030**は小皿。底部はヘラ切り。**1031**は杯。**1032・1033**は椀。体部外面にわずかにヘラミガキの痕跡が残る。底部にはヘラ切り痕が残る。高台部は欠損。**1034**は足釜A。鍔上半部に粘土

を足して口縁部を作る。**1035**は須恵器捏鉢。口縁端部内外面に重ね焼き痕を残す。**1036**は青磁碗小片。内面に片彫り状の文様を施す。同安窯系。12世紀中～後半。

須恵器捏鉢、青磁碗の時期が若干古いものの、遺構の時期は、土師質土器の時期である13世紀中～後半頃と考えられる。

Ⅱ区SD36（第203図）

Ⅱ区D5グリットで検出した溝状遺構である。SD30の西から約10.50mの位置に、北側に直交する位置で検出した。SD30との前後関係は認められない。検出長3m、幅76～93cm、深さ11cm、主軸方位はN28°Wである。埋土中からは土師質土器小皿・杯等が出土した。

1037～1050は土師質土器。**1037～1040**は小皿。口径は6.0～6.9cm。底部はヘラ切りで、**1040**は時計回りのヘラ切り痕が観察できる。**1041～1048**は杯。底部はヘラ切りで、**1041・1042**には板圧痕が残る。**1049**は足釜脚部。**1050**は足釜A。**1051**は青磁碗。見込み部分に片彫りで花模様が彫られる。施釉は高台部外面までである。龍泉窯系。

遺構の時期は、出土遺物から13世紀中～後半と考えられる。

Ⅱ区SD37（第203図）

Ⅱ区D6グリットで検出した溝状遺構である。SD30の西から約13.50mで、北側へ直交する。SD30の下部で検出した。検出長3.40m、幅92cm、深さ17cm、主軸方位はN22°Eである。埋土中からは土師質土器小皿・杯が出土した。

すべて土師質土器。**1052**は小皿。**1053～1058**は杯。口径は10.2～10.8cmに収まる。底部はヘラ切りである。**1058**は底部に板圧痕が残る。

遺構の時期は13世紀中～後半と考えられる。

Ⅱ区SD38（第203図）

Ⅱ区D6グリットで検出した溝状遺構である。SD30の北側1.20mの位置で、ほぼSD30に平行して検出した。SD36の東約0.50mの位置から東へ向けて検出し、3.50mの位置で北側へ直角に枝分かれし、さらに東へ流れるものは2条に分かれ、4.20mで消失する。遺構の前後関係から、SD37より古く、従って、SD30・36より古い。溝の検出長は7.60m、幅20cm、深さ4cm、主軸方位はN63°Eである。埋土中からは土師質土器椀、須恵器甕片が出土した。

1059は土師質土器椀。底部にはヘラ切り痕が残る。

遺構の時期は、遺構の前後関係から13世紀中頃以前である。

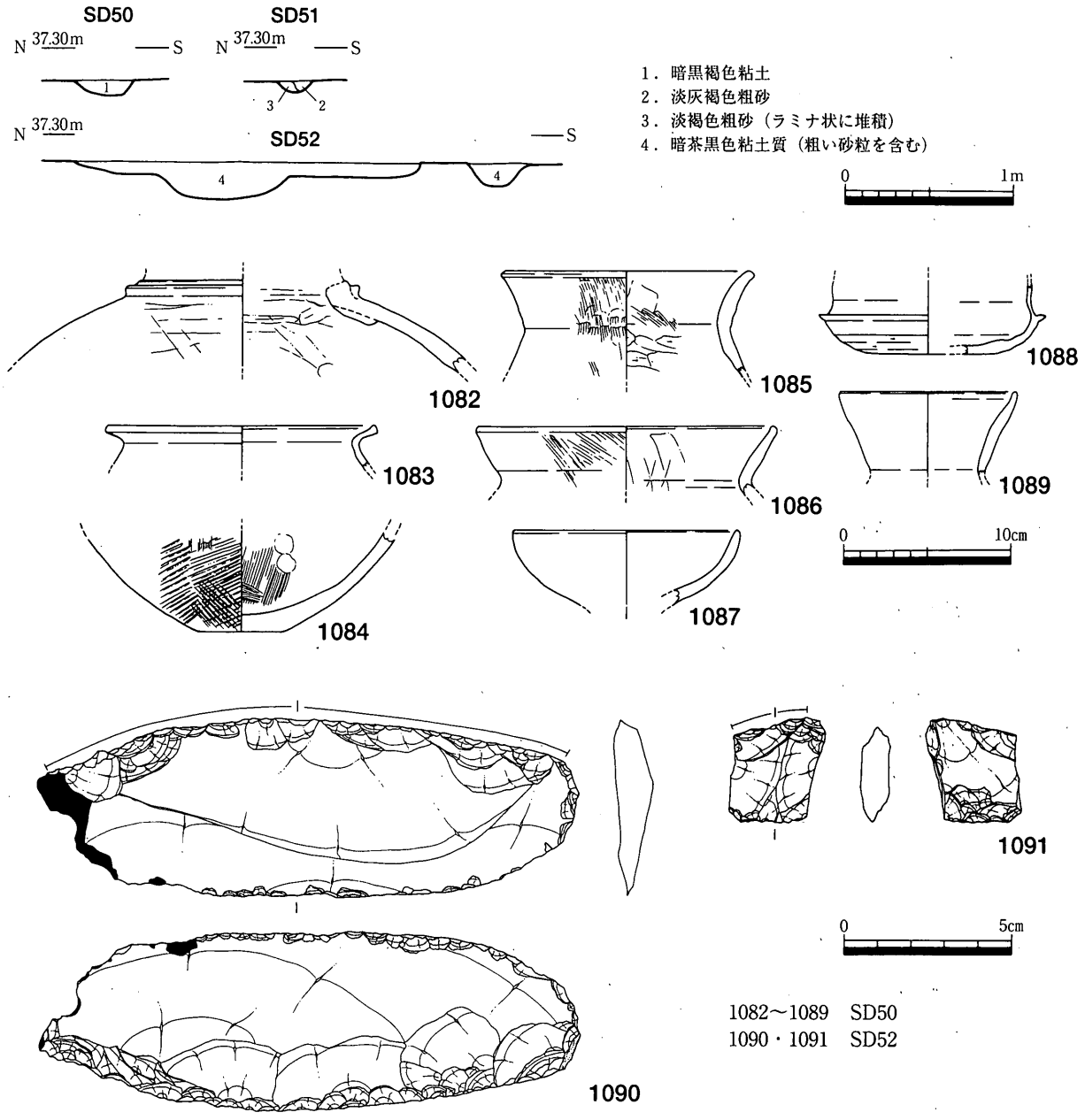
Ⅱ区SD39（第203図）

Ⅱ区C6グリットで検出した溝状遺構である。SD37の東側3.30mの位置で検出した。SD38の上面で検出する。検出長1.70m、幅52cm、深さ9cm、主軸方位はN23°Wである。埋土からは土師質土器杯、須恵器甕が出土した。

遺構の時期は出土遺物と遺構の前後関係から13世紀中～後半と考えられる。

Ⅱ区SD42（第204図）

Ⅱ区D・E5グリットで検出した溝状遺構である。検出長14m、幅47cm、深さ5cmで、南から2.5mの位置でSD43に方向を揃えるように分岐し、北から2.8mの位置で西側へほぼ直角に分岐する。主軸方位はN16°Eである。SD28の下部で検出した。



第205図　Ⅳ区SD50・51・52断面図（1/40）、SD50出土遺物（1/4）、SD52出土遺物（1/2）

1060～1079は土師質土器である。**1060～1062**は小皿。口径は6.7～7.2cmに収まり、底部はヘラ切りによる。**1060**には時計回りのヘラ切り痕が残る。**1063～1074**は杯。口径は10.2～10.8cmのもの、11.8cmのもの、12.7～12.8cmのもの、14.2cmのものに分かれるが、10cm台のものが多い。底部はヘラ切りで、**1065**には板圧痕が残る。**1075～1078**は足釜B。**1075・1077**には鍔部と鍔直下付近に粘土の接合痕が観察できる。**1078**は足釜脚部。**1079**は土鍋。**1080**は須恵器鉢E。**1081**は椀型鍛冶滓。両面に木炭痕が残る。

遺構の時期は、出土遺物よりおおむね13世紀後半頃と考えられる。

Ⅱ区SD43（第204図）

Ⅱ区E5グリットで検出した溝状遺構である。SD42の0.40m東側で、方位を揃えて検出した。北から3.30mで東へ屈曲する。検出長は6.50m、幅85cm、深さ5cm、埋土は淡茶褐色粘質土で、主軸方位はN16°Eおよびそれに直交する方向である。埋土中からは土師質土器小片、サヌカイト小片が出土した。

遺構の時期はSD42と同じと考えられる。

Ⅱ区SD44（第204図）

Ⅱ区E6グリットで検出した溝状遺構である。SD45の西側約2.30mの位置で検出した。検出長は4.80mで、北側で消失する。幅26cm、深さ5cm、主軸方位はN26°Wである。埋土中からは遺物は出土しなかった。SD45とは組になって通路を形成していたと考えられる。

遺構の時期はSD45と同じ13世紀代と考えられる。

Ⅱ区SD45（第204図）

Ⅱ区E6グリットで検出した溝状遺構である。SD44の東側約2.30mの位置で、方位を揃えて検出した。北側でSD31により消失し、溝の中程でもいったん消失する。検出長は13.40m、幅38cm、深さ5cmで、埋土は淡赤褐色砂質土、主軸方位はN30°Wである。埋土中からは土師質土器小皿・杯、須恵器甕片等が出土した。SD44とは組になって通路を形成していたと考えられる。

遺構の時期は13世紀代と考えられる。

Ⅱ区SD47（第204図）

Ⅱ区E6グリットで検出した溝状遺構である。調査区東部南端から北東方向へ延び、5.80m付近で南東へ直角に屈曲する。調査区端付近と屈曲部付近ではわずかにSD48の方へ向けて枝分かれするが、SD48とは連続しない。検出長10.20m、幅22cm、深さ8cm、埋土は淡褐灰色粗砂、主軸方位はN63°Eである。埋土中からは須恵器片が出土した。

遺構の時期は、溝の方位や埋土から13世紀前後と考えられる。

Ⅱ区SD48（第204図）

Ⅱ区E6グリットで検出した溝状遺構である。SD47の北西側約1.30mの位置で検出した。検出長2.50m、幅30cm、深さ6cm、埋土はSD47と同じで、主軸方位はN63°Eである。埋土中からの出土遺物はなかったが、SD47との位置関係からこれと同じ13世紀前後と考えられる。

Ⅳ区SD49（第204図）

Ⅳ区A・B・C6グリットで検出した溝状遺構である。Ⅳ区西端部を縦断する。SD29・50・52の上面で検出した。幅34cm、深さ6cm、主軸方位はN27°Wである。埋土中からは土師質土器杯片や須恵器杯身片等が出土した。

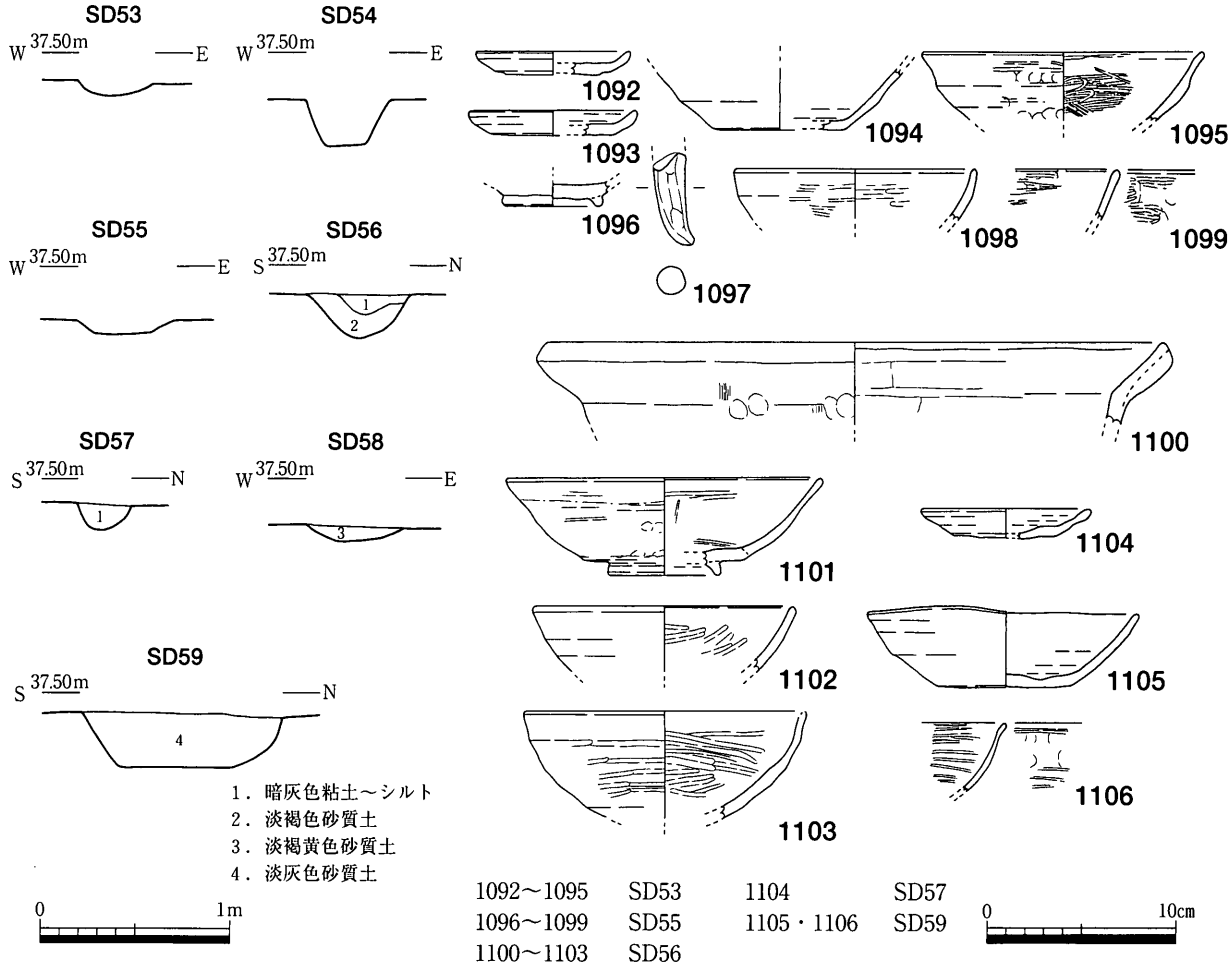
出土遺物は6世紀代のものと13世紀代のものがあるが、遺構の時期は溝の方位から13世紀代と考えられる。

Ⅳ区SD50（第205図）

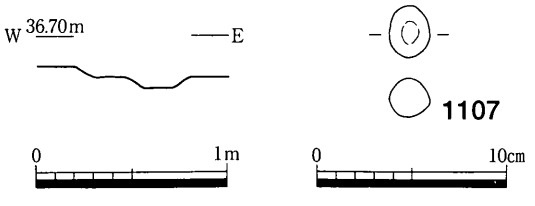
Ⅳ区B6グリットで検出した溝状遺構である。SD51の上面、SD49の下部で検出した。幅36cm、深さ9cm、埋土は暗黒褐色粘土、主軸方位はN57°Wである。埋土中からは弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。

1082～1084は弥生土器。**1082**は壺体部。頸部と体部の間に突帯が巡る。**1083**は甕。摩滅が著しい。角閃石を少量含む。下川津B類土器。**1084**は底部。**1085～1087**は土師器。**1085・1086**は甕。**1087**は高杯。**1088・1089**は須恵器。**1088**は杯身。体部下半部は回転ヘラ削りをする。**1089**は平瓶口縁部。

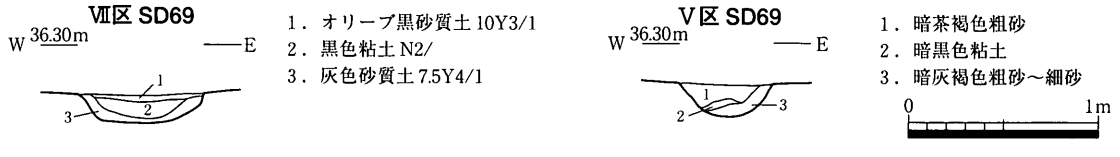
遺構の時期は、出土遺物からは古墳時代後期と考えられるが、溝の方位は条里型地割の方位を示しており、中世の可能性も考えられる。



第206図　Ⅲ区SD53・54・55・56・57・58・59断面図（1/40）、SD53・55・56・57・59出土遺物（1/4）



第207図　Ⅶ区SD82断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第208図　Ⅴ・Ⅶ区SD69断面図（1/40）

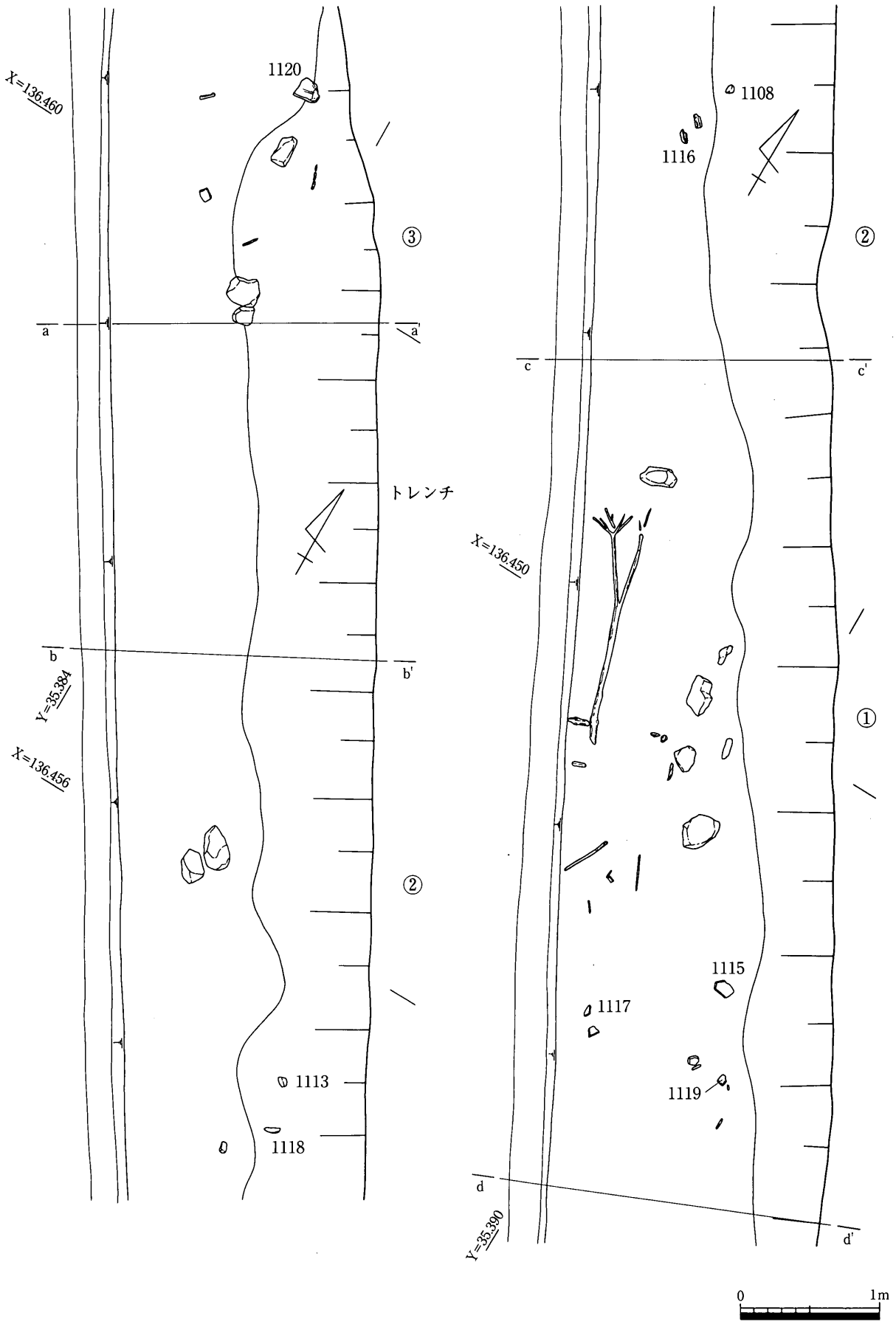
Ⅳ区 SD51（第205図）

Ⅳ区B6グリットで検出した溝状遺構で、SD50・SK46の下部で検出した。幅22cm、深さ6cm、埋土は淡灰褐色粗砂・淡褐色粗砂で、水の流れた痕跡が見られる。溝の主軸方位はN28°Eである。埋土からは出土遺物はなかった。

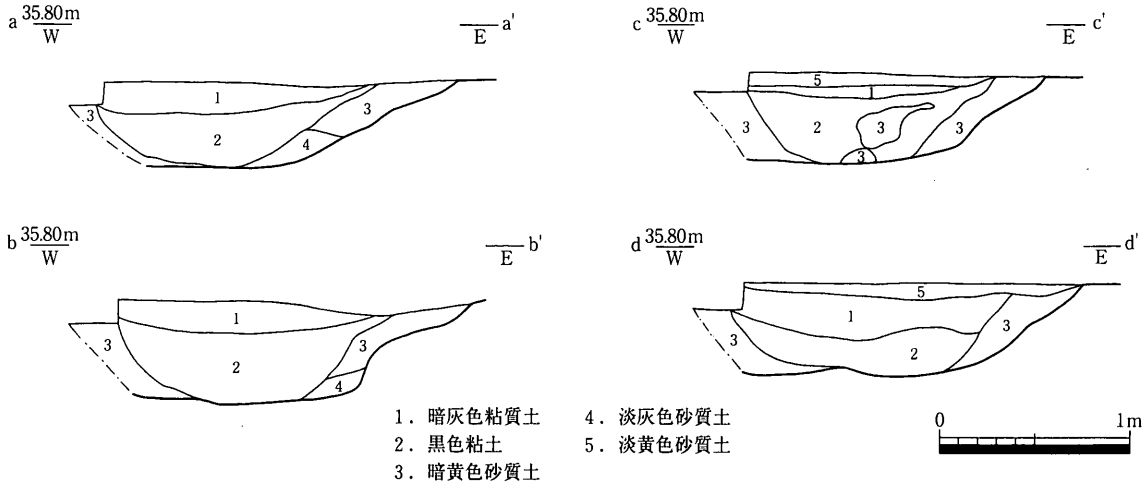
遺構の時期は溝の方位からSD29とほぼ同じ古墳時代後期頃と考えられる。

Ⅳ区 SD52（第205図）

Ⅳ区B・C6グリットで検出した溝状遺構である。SD49の下部で検出した。幅約2.70m、深さ21cmを測り、東から0.60mの位置で東方向へ小規模な溝が分岐している。断面形状は2段掘り状を呈し、埋土は暗茶黒色粘



第209図　Ⅵ区SD63遺物出土状況（1/40）



第210図　Ⅵ区SD63断面図（1/40）

質土、主軸方位はN37°Eである。埋土中からは須恵器甕片、サヌカイト片等が出土した。

1090は石庖丁。サヌカイト製。上部に敲打痕を残す。**1091**は楔形石器。サヌカイト製。上部に敲打痕を残す。

遺構の時期は溝の方位から古墳時代後期と考えられる。

Ⅲ区SD53（第206図）

Ⅲ区E9グリットで検出した溝状遺構である。丘陵地裾部付近で検出したため、途切れ途切れで検出した。SE02の上面で検出した。幅40cm、深さ7cm、主軸方位はN35°Wである。埋土中からは土師質土器、瓦器が出土した。

1092～1094は土師質土器。**1092・1093**は小皿。口径は8.1～8.8cmで、底部はヘラ切りである。**1094**は杯。9～10世紀代のもの。**1095**は瓦器椀。口縁端部外面は指ナデ痕が顕著で、内面には密に、外面には粗くヘラミガキが施される。和泉産。

遺構の時期は小皿や瓦器椀の時期から12世紀中～後半頃と考えられる。

Ⅲ区SD54（第206図）

Ⅲ区E10グリットで検出した溝状遺構である。若干西側へ湾曲して流れる。SH05、SB15の上面で検出した。検出長約10.50m、幅45cm、深さ25cmを測る。埋土中からは土師質土器または黒色土器A椀の高台部分が出土した。

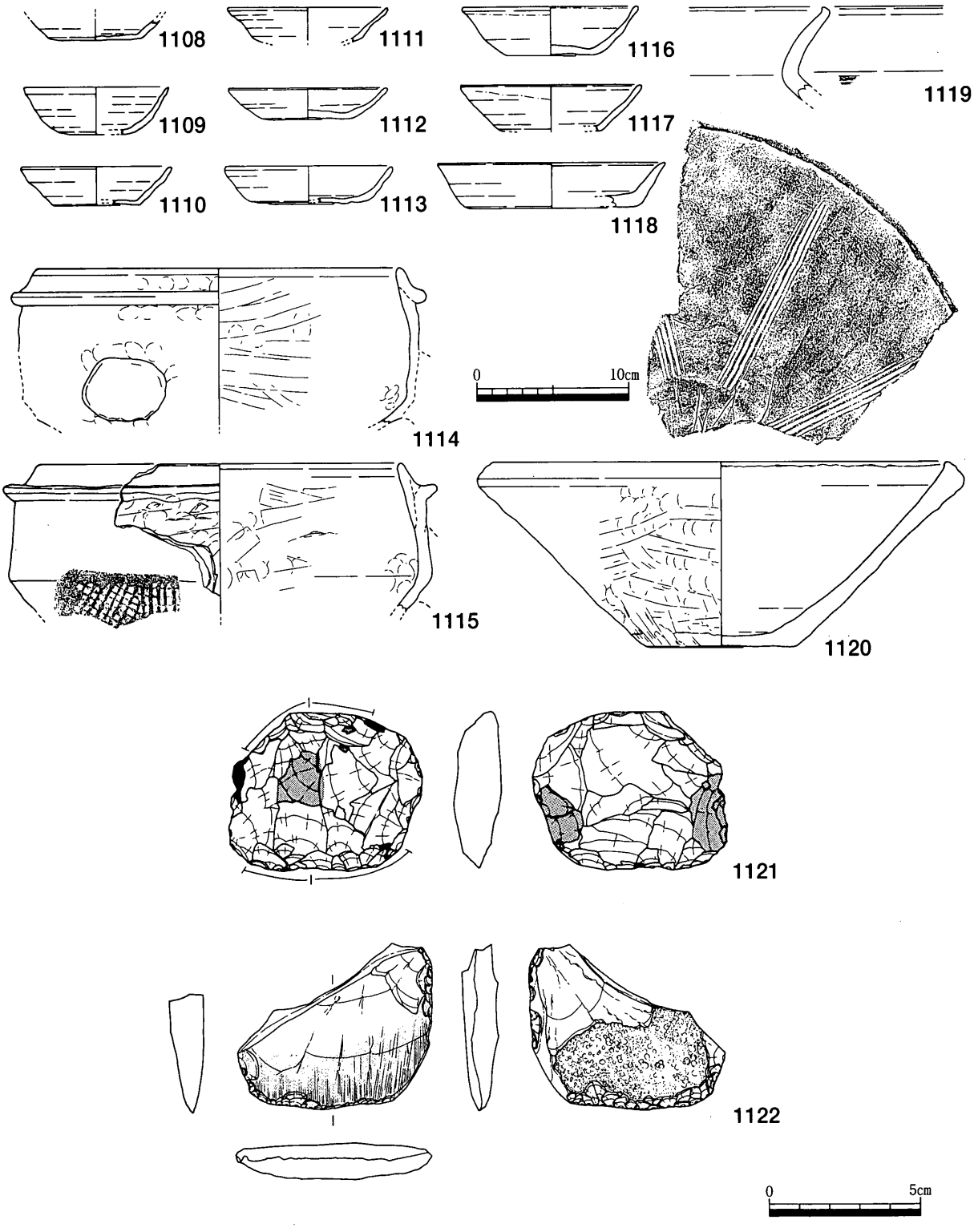
遺構の時期は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

Ⅲ区SD55（第206図）

Ⅲ区D9・E10グリットで検出した溝状遺構である。周溝墓9の上面で検出した。南部の一段高い部分では途切れて検出できていない。検出長10.70m、幅52cm，深さ7cm、主軸方位はN32°Wである。埋土中からは土師質土器椀等が出土した。

1096・1097は土師質土器。**1096**は椀。底部にはヘラ切り痕が残る。**1097**は足釜脚部。**1098**は黒色土器B椀。内外面にヘラミガキを施す。**1099**は瓦器椀。小片。内外面にヘラミガキを施す。和泉産。

遺構の時期は12世紀後半頃と考えられる。

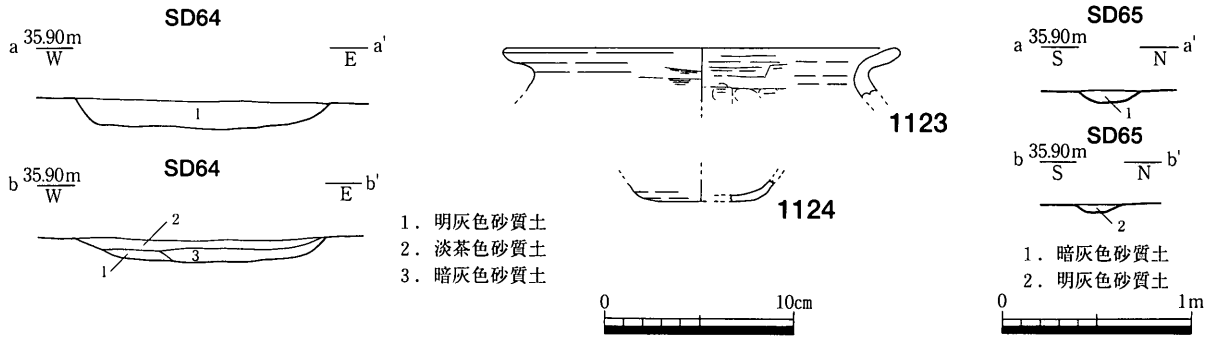


第211図　Ⅵ区SD63出土遺物（1/2、1/4）

Ⅲ区SD56（第206図）

Ⅲ区D8グリットで検出した溝状遺構である。SD57とSD58に挟まれる位置で、周溝墓7の上面で検出した。検出長7.60m、幅56cm、深さ22cm、埋土は暗灰色粘土～シルト・淡褐色砂質土で、主軸方位はN68°Eである。西から約5.20mの位置で南側へ約1.20m直角に屈曲し、消失する。埋土中からは土師質土器鍋、須恵器椀等が出土した。

1100は土師質土器鍋。口縁部外面に粘土の接合痕が観察できる。外面にはハケを施し、煤が付着する。



第212図　Ⅵ区SD64・65断面図（1/40）、SD64出土遺物（1/4）

1101は須恵器椀。体部と底部の境が明瞭に残る。やや摩滅するが、内外面ともヘラミガキが観察できる。口縁部内外面に重ね焼き痕が残る。**1102・1103**は黒色土器A椀。**1103**はSD57との接合資料である。

遺構の時期は12世紀後半頃と考えられる。

Ⅲ区SD57（第206図）

Ⅲ区D8グリットで検出した溝状遺構である。SD56の西側に接して、SD56に連続するようにして検出した。検出長10.90m、幅29cm、深さ12cm、埋土は暗灰色粘土～シルトで、主軸方位はN64°Eである。溝の西端部分では南西へいったん屈曲し、さらに西へ屈曲して消失する。埋土中からは土師質土器小皿・杯・椀が出土した。SD56とは別の溝として扱ったが、埋土の類似性や遺物の接合関係から、両者は同時に機能していたと考えられる。

1104は土師質土器小皿。遺構の時期はSD56と同じ12世紀後半頃と考えられる。

Ⅲ区SD58（第206図）

Ⅲ区D8で検出した溝状遺構である。SD56の東端に接して、ほぼ北東へ直交する位置で検出した。北側は調査区外へ延びる。検出長7.70m、幅48cm、深さ8cm、埋土は淡褐黄色砂質土で、主軸方位はN25°Wである。溝の南端部は東方向へわずかに屈曲するようにして、消失する。埋土中からの出土遺物はなかった。

遺構の時期は、溝の方位からSD56・57と同じ12世紀後半頃と考えられる。

Ⅲ区SD59（第206図）

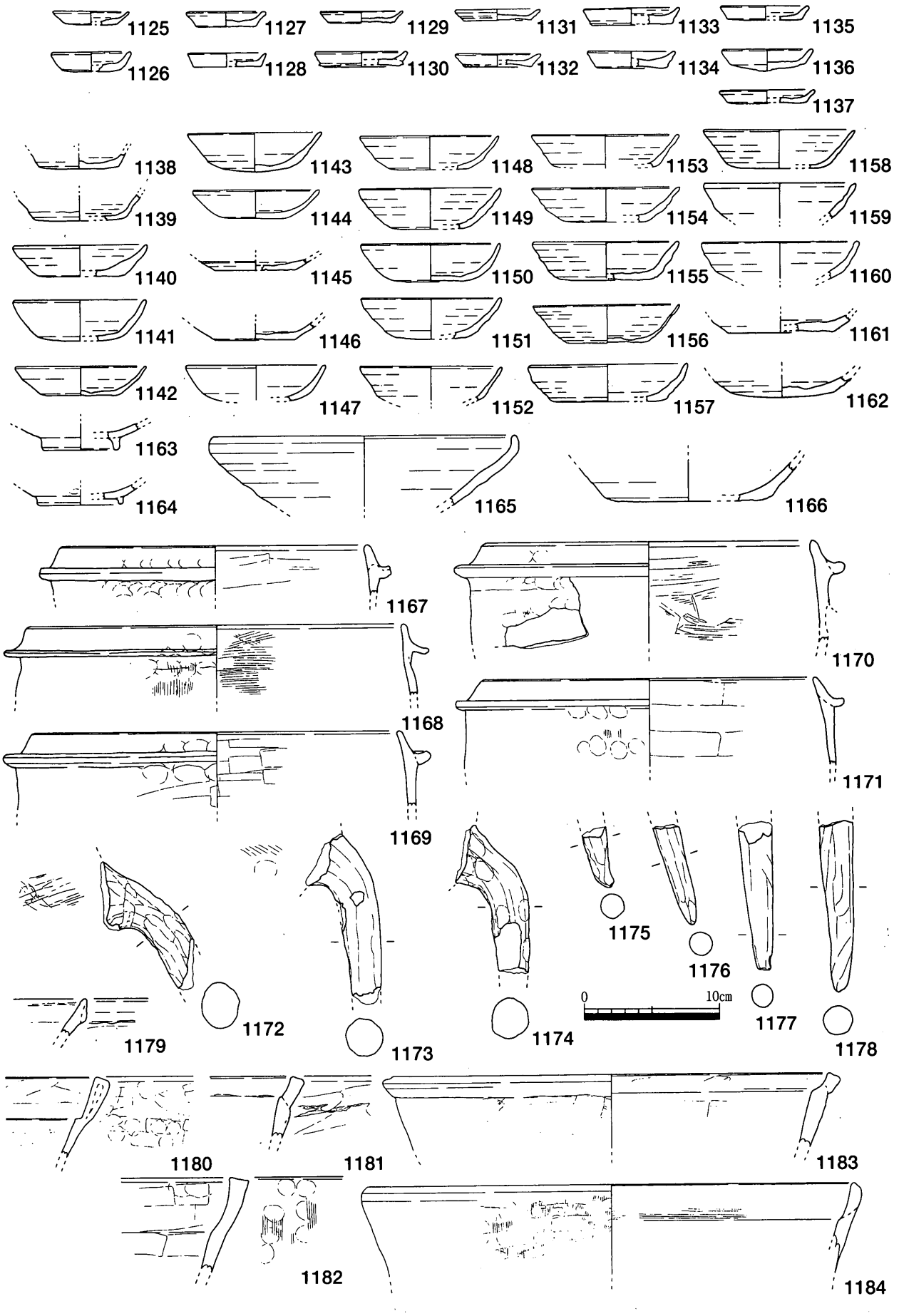
Ⅲ区C7グリットで検出した溝状遺構である。検出長6.70m、幅106cm、深さ28cm、埋土は淡灰色砂質土で、主軸方位はN55°Eである。北東側は調査区外へ延び、南西側は消失する。埋土中からは土師質土器杯、瓦器椀が出土した。Ⅱ区SD24の延長部である可能性が高い。

1105は土師質土器杯。底部には板圧痕を残す。やや歪みがある。**1106**は瓦器椀。内面には密な、外面にはやや粗いヘラミガキが残る。和泉産。

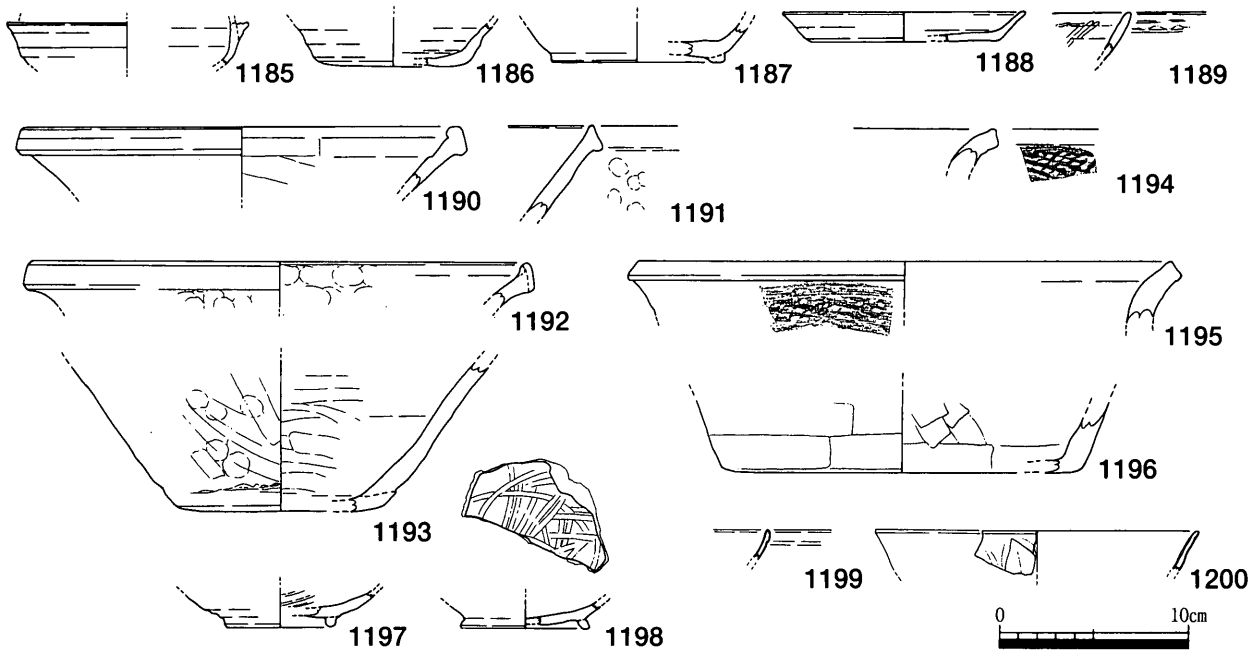
遺構の時期は12世紀後半頃と考えられる。

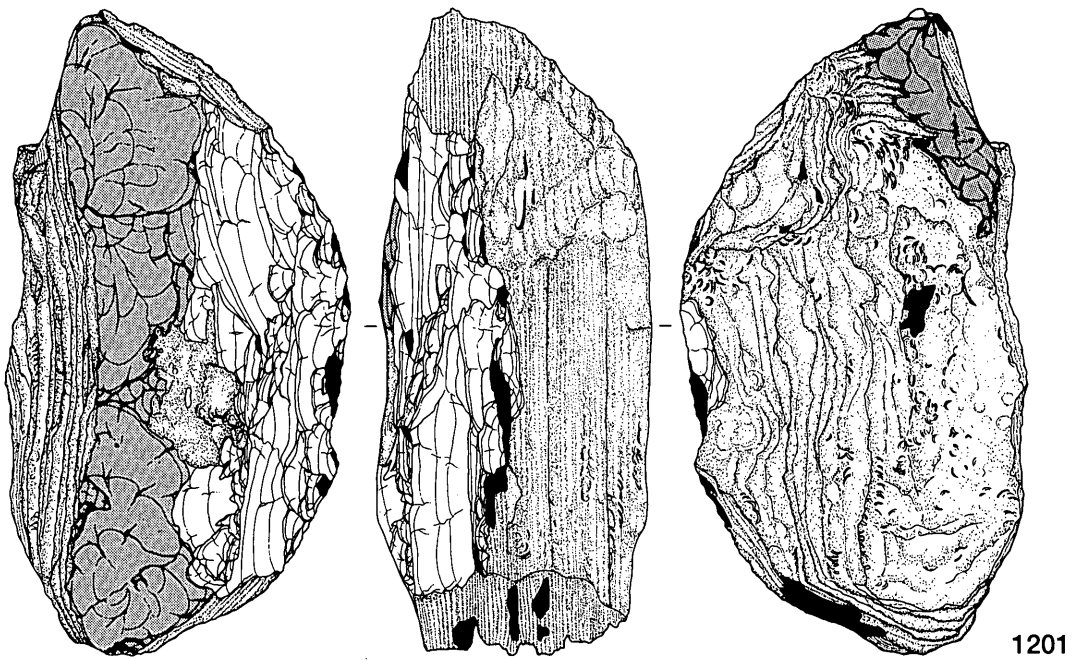
Ⅶ区SD82（第207図）

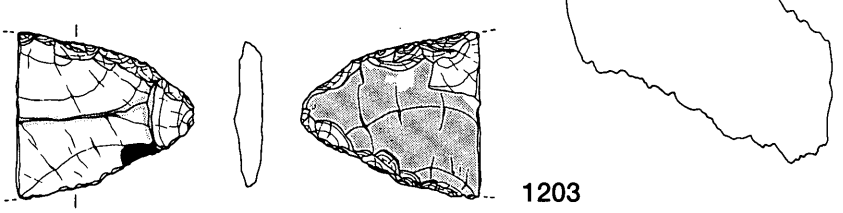
Ⅶ区D11グリットで検出した溝状遺構である。検出長14.10mで、Ⅴ区の1.90m手前で北東方向へ直角に屈曲し、消失する。また、調査区北端付近、溝の南端から13.60mの位置でも溝は北東方向へ直角に分岐する。幅60cm、深さ8cmで、断面は部分的に西側にテラス状の平坦部を持つ。主軸方位はN27°Wである。埋土中から

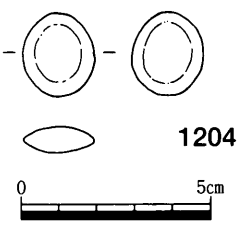


第213図　Ⅰ区中世包含層出土遺物（1）（1/4）

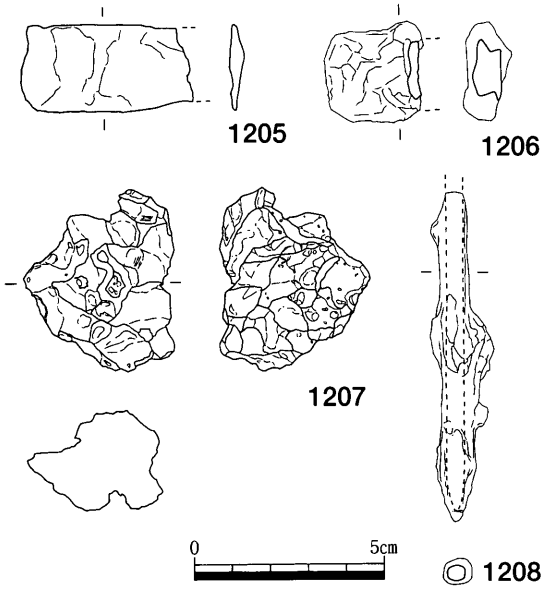








第214図　Ⅰ区中世包含層出土遺物（2）（1/2、1/3、1/4）



第215図　Ⅰ区中世包含層出土遺物（3）（1/2）

は土師質土器足釜脚部、不明土製品が出土した。

1107は玉状の土製品。土師質の焼成で、粘土を楕円形状に丸める。用途不明。

遺構の時期は13世紀前後と考えられる。

Ⅴ・Ⅶ区 SD69（第208図）

Ⅴ区とⅦ区、D12・13、E13にまたがって検出した溝状遺構である。Ⅶ区東壁から調査区外へ延びる。幅49～66cm、深さ15～17cm、埋土は黒色粘土、灰色砂質土等、主軸方位はN28°Wである。埋土中からは土師質土器足釜脚部、須恵器甕片が出土した。

遺構の時期は13世紀前後と考えられる。

Ⅵ区 SD63（第209・210・211図）

Ⅵ区D13グリットで検出した溝状遺構である。調査区の西壁に沿うようにして検出し、溝の西肩は調査区外へ伸びる。幅2.12m以上、深さ43～52cm、主軸方位はN31°Wである。埋土は暗黄色砂質土・淡灰色砂質土の堆積土を暗灰色粘質土・黒色粘土層が切り込んでおり、溝が再掘削された様子が窺える。溝からは土師質土器等ほか、20～30cm大の礫や木片等も出土している。

1108～1115は土師質土器。**1108～1113**は杯。口径は9.8～11cmで、底部はヘラ切りである。**1112**は底部に時計回りのヘラ切り痕と板圧痕を残す。**1114・1115**は足釜。**1114**は脚部が剥離する。鍔から上部に粘土を足している。**1115**は底部に反時計回りに施した格子叩き痕が残る。鍔の上部に粘土を足して口縁部を作る。**1116～1119**は須恵器。**1116・1117**は杯。ともに口縁端部に重ね焼き痕を残し、回転ナデ以外の調整は見られない。**1118**は皿。8世紀代のもので、やや時期の遡るもの。体部内面が摩滅により滑らかになっており、口縁端部は意識的に打ち欠いたように欠けている。用途不明。**1119**は甕口縁部小片。**1120**は備前焼擂鉢。5条1単位の卸目が施される。備前焼Ⅲ期前半。**1121・1122**はサヌカイト製石器。**1121**は楔形石器。上・下部に敲打痕がある。**1122**は打製石斧。上部が欠損している。刃部付近の擦痕、摩滅痕が顕著に残る。

遺構の時期は13世紀末～14世紀前半頃と考えられる。

Ⅵ区 SD64（第212図）

Ⅵ区C・D14グリットで検出した溝状遺構である。SD63の18.65m東側で検出した。幅132～135cm、深さ12～14cm、埋土は明灰色砂質土・淡茶色砂質土等で、主軸方位はN27°Wである。埋土中からは土師質土器小皿・杯片が出土した。

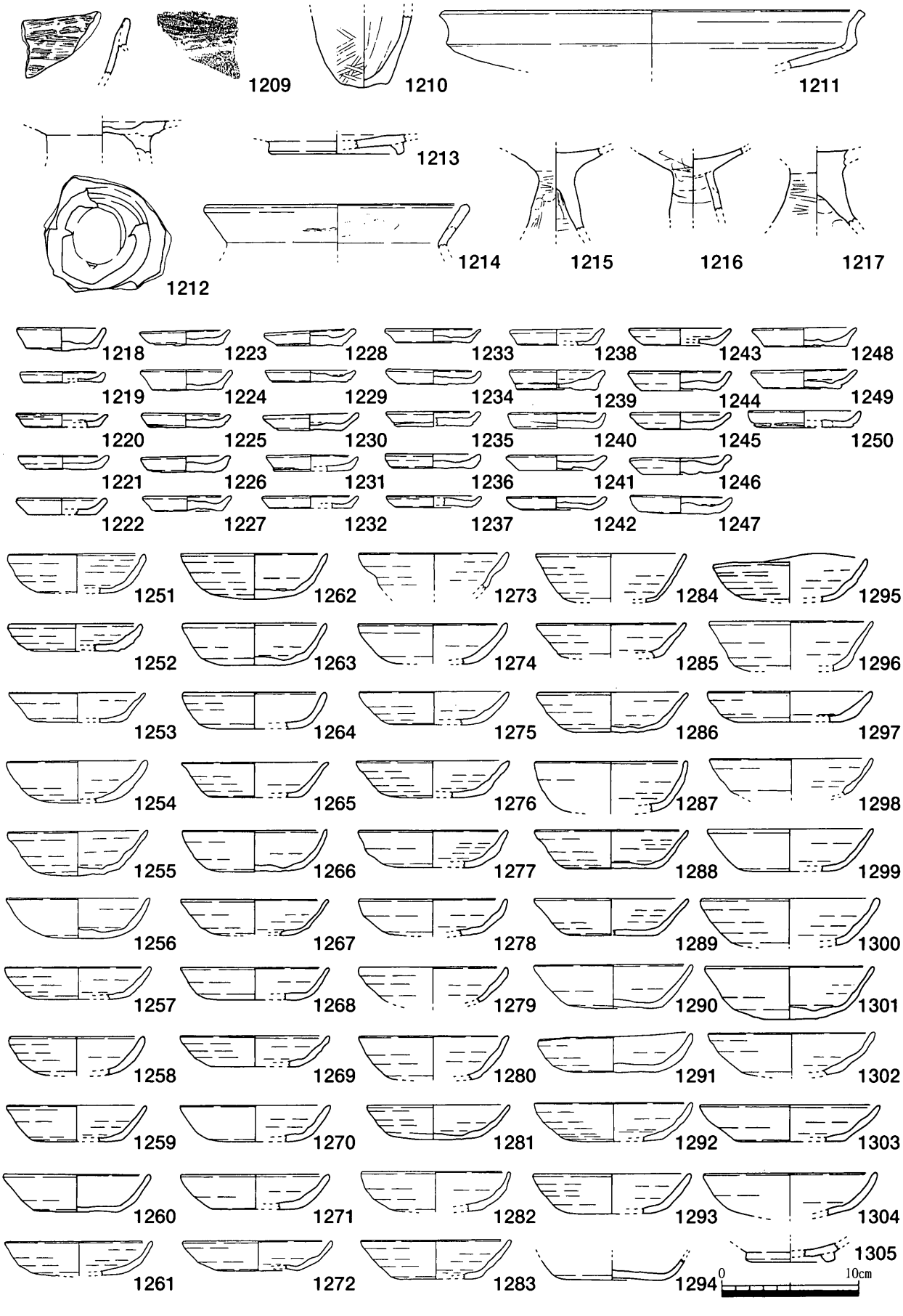
1123は弥生土器甕。**1124**は土師質土器杯。

遺構の時期はSD63とあまり隔たらないと考えられる。

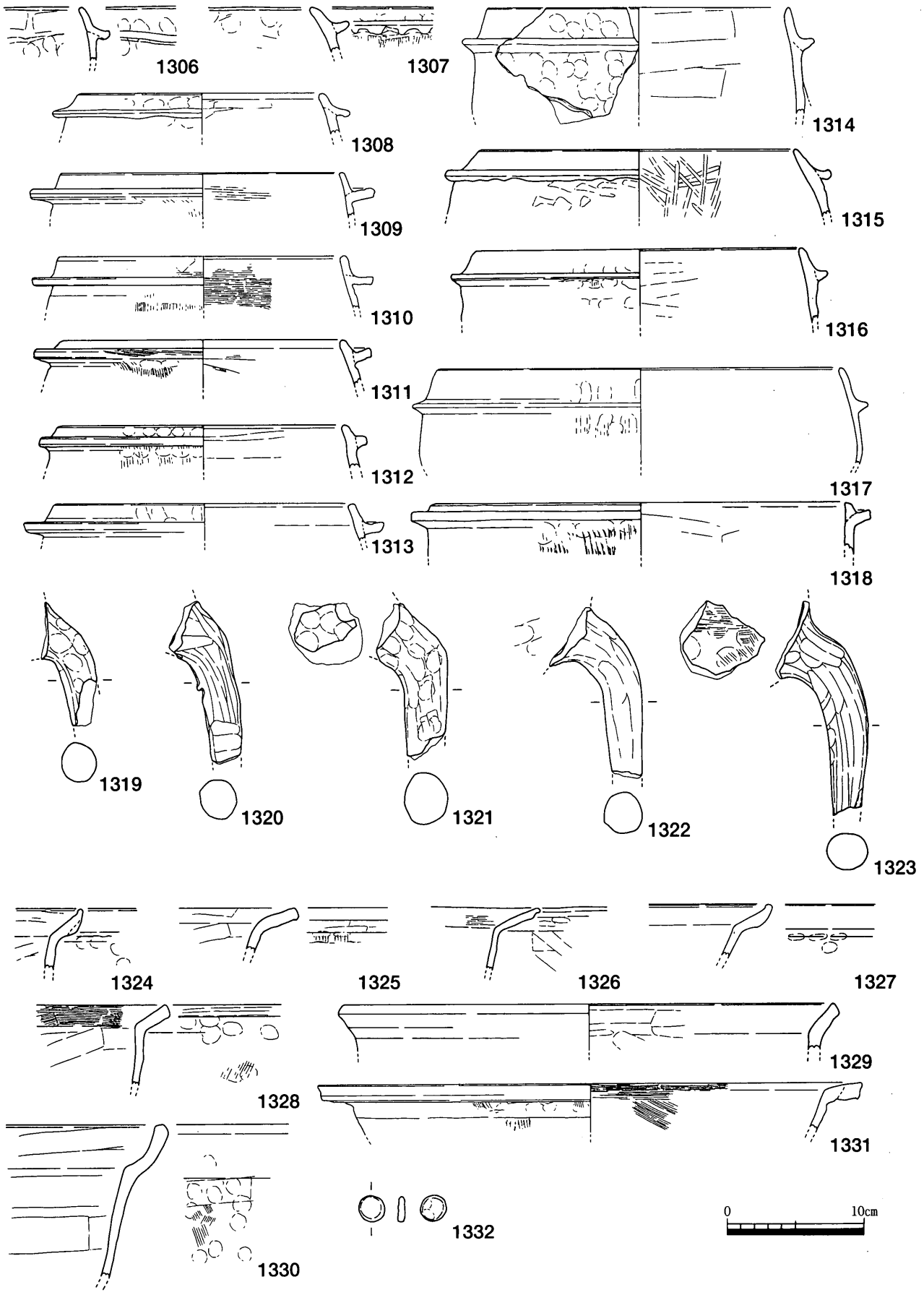
Ⅵ区 SD65（第212図）

Ⅵ区D14グリットで検出した溝状遺構である。SD64の西肩に直角に取り付く位置で検出した。検出長7.50m、幅23～30cm、深さ5～7cm、埋土は暗灰色砂質土・明灰色砂質土、主軸方位はN61°Eである。埋土中からの出土遺物はなかった。

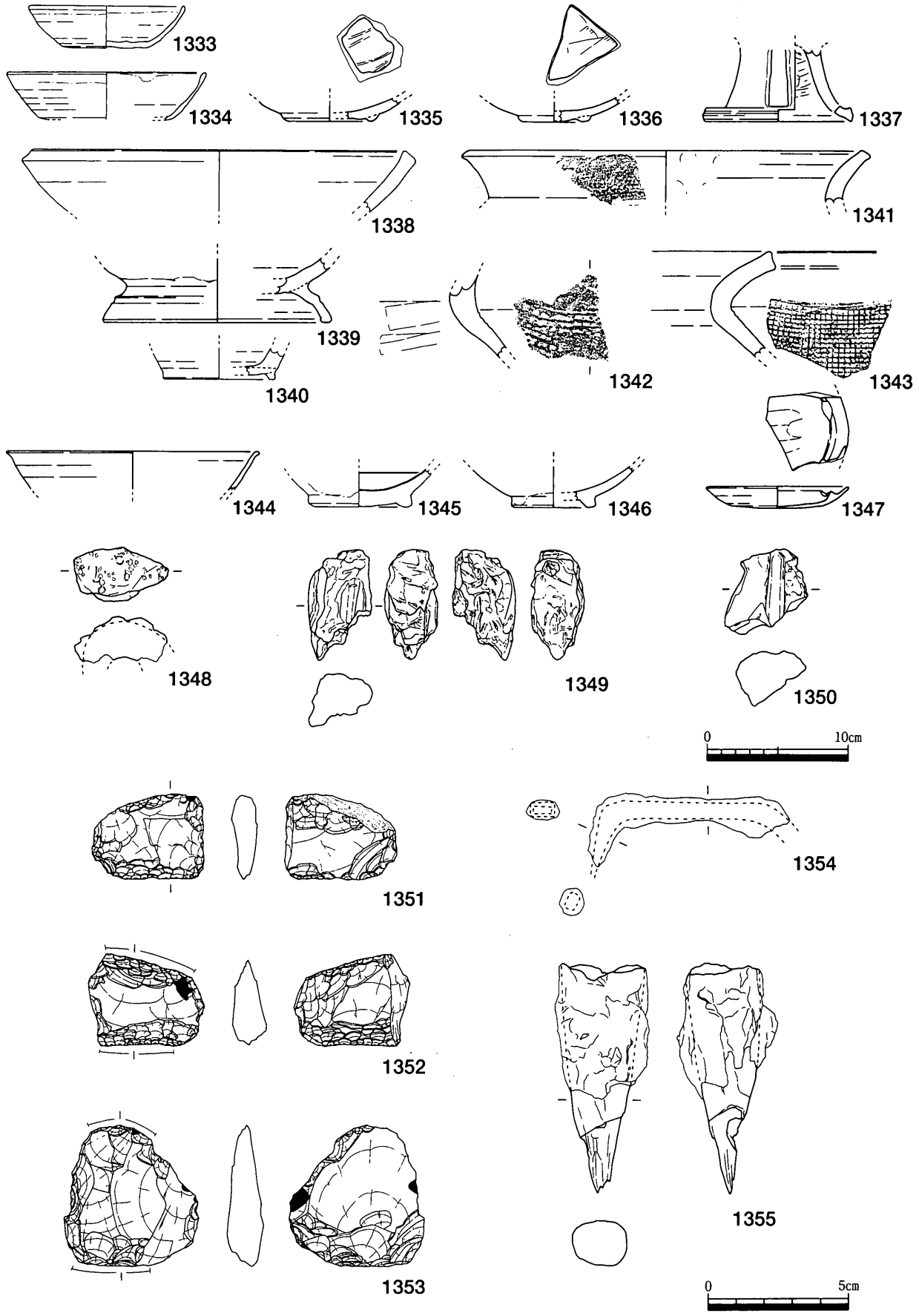
遺構の時期は、溝の方位、埋土よりSD63・64に近い時期と考えられる。



第216図　Ⅱ区中世包含層出土遺物（1）（1/4）



第217図　Ⅱ区中世包含層出土遺物（2）（1/4）

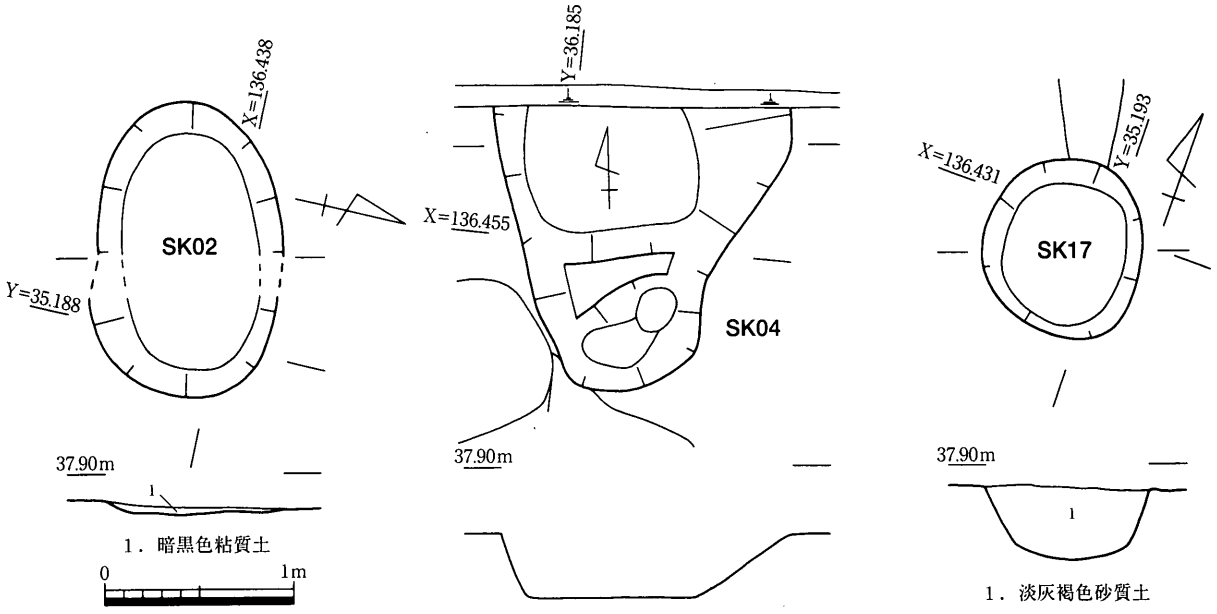


第218図　Ⅱ区中世包含層出土遺物（3）（1/2、1/4）

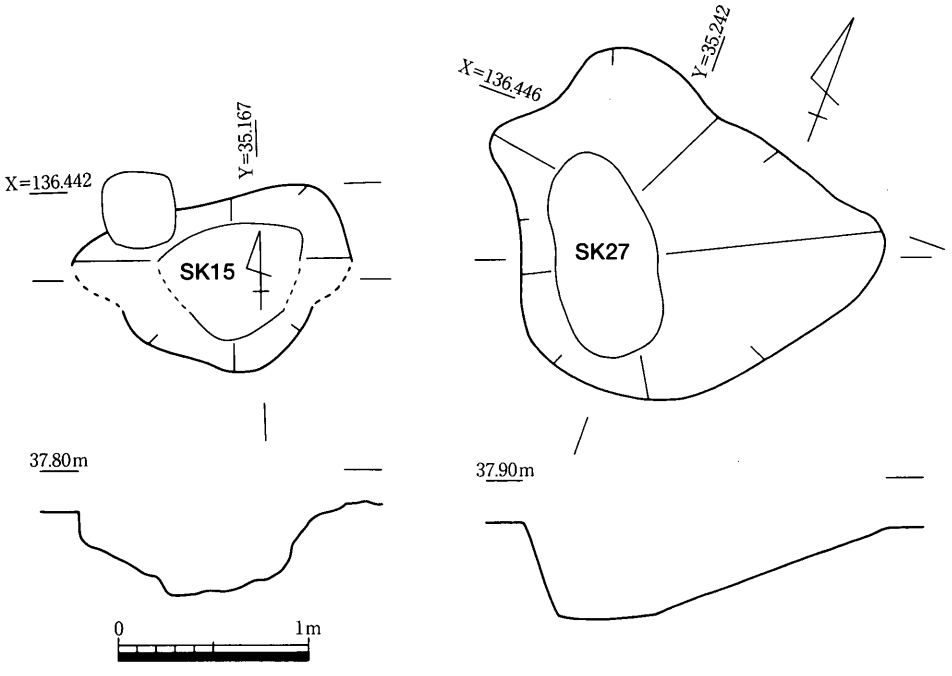
Ⅰ・Ⅱ区中世包含層（第213・214・215・216・217・218図）

Ⅰ区南東部～Ⅱ区西半部、E2・3、D・E4・5にかけて検出した、遺構面の上面を覆う包含層である。おおむね南西から北東方向へ、SD01・14・20の方向へ堆積するものと考えられ、Ⅱ区南壁土層では堆積は認められない。厚さはおおむね8～12cm、埋土は淡黄褐色・淡褐色シルト、黒色混灰色砂質土等である。中世の遺構面は包含層を除去後に検出した。

1125～1208はⅠ区で出土した遺物である。**1125～1184**は土師質土器。**1125～1137**は小皿。口径は5.6～7cmに収まり、底部はヘラ切りによる。**1127**と**1129**には時計回りのヘラ切り痕が残る。**1138～1162**は杯。口径はおおむね9.2cm、9.6～10.4cm、10.7～11.6cmに分かれる。底部はヘラ切りで、**1150・1155・1156・1162**には板圧痕が残る。**1150**には外面に煤が付着し、灯明皿として使用したと考えられる。**1163・1164**は椀。**1165**は鉢。**1166**は底部。**1167～1171**は足釜口縁部。**1167**は鍔から上部に、**1169・1170**は鍔部に、**1171**は鍔の下部に接合痕が残る。**1170**は脚部が剥離した部分が残る。**1172～1178**は脚部。**1172～1174**では、脚部分のみが剥離



第219図　Ⅰ区SK02・04・17平・断面図（1/40）

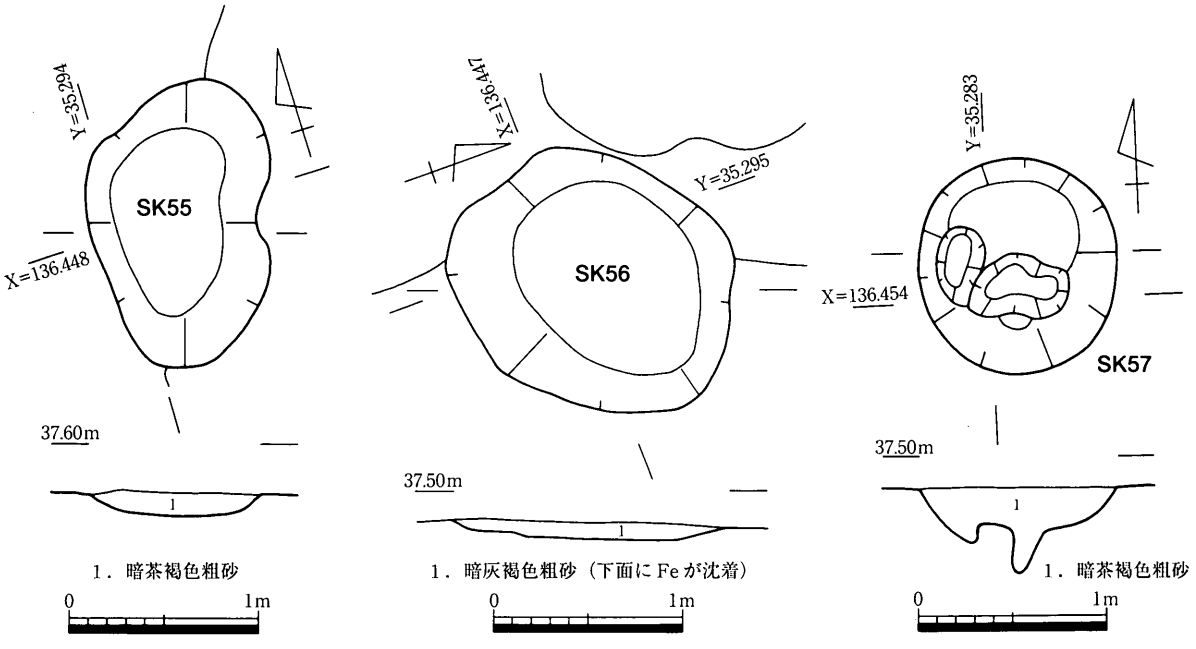


第220図　Ⅰ区SK15・Ⅱ区SK27平・断面図（1/40）

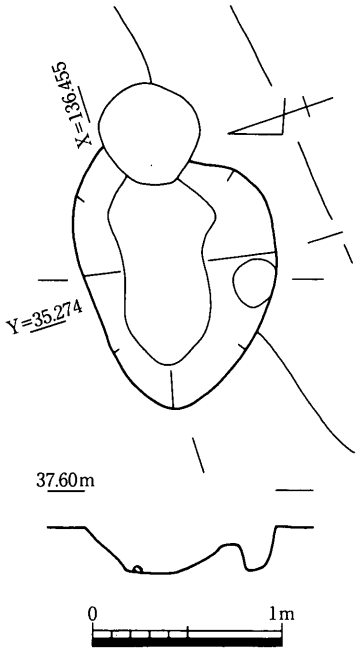
するのではなく、足釜の底部ごと毀れているようすがわかる。**1179～1184**は鍋。**1181・1183・1184**では口縁部を粘土を足して作っている様子が観察できる。**1185～1196**は須恵器。**1185**は杯身。体部下半は回転ヘラ削りする。5世紀後半。**1186・1187**は杯。**1187**は高台付杯。**1188**は皿。内面に火襷がかかる。**1186～1188**は8～9世紀代。**1189**は椀小片。口縁部内外面に重ね焼き痕が残る。**1190**は鉢。口縁端部が上下に膨らむ。色調は土師質土器に近いが、焼成は良い。焼成状況は**1193**と似る。**1191**は鉢。**1192**は東播系捏鉢。口縁端部外面に重ね焼き痕が残る。摩滅が進む。**1193**は鉢底部。底部の上部に粘土の継ぎ目が残る。**1194・1195**は甕。外面には左上がりの格子叩き痕が残る。**1196**は壷底部。**1197・1198**は黒色土器A椀。見込みにヘラミガキ、底部外面にはヘラ切り痕を残す。**1199**は白磁碗小片。口縁部外面は玉縁状にする。**1200**は青磁碗。外面に鎬蓮弁を施す。龍泉窯系。**1201～1203**はサヌカイト。**1201**は石核。大部分に自然面を残す。主要剥離面は風化が著しい。さらに後世にできたと思われる新しい剥離面も見られる（網かけ部分）。**1202**は石鏃。凹基式。**1203**はスクレイパー。半分欠損。**1204**は碁石。**1205～1208**は鉄製品。**1207**は椀型鍛冶滓。

遺物の時期は、土師質土器小皿・杯・足釜に関しては13世紀中頃～14世紀前半頃、鍋は14世紀中頃～後半のものが大半である。また、東播系捏鉢（12世紀末～13世紀初）、須恵器甕（11世紀末～12世紀前半）白磁碗（11世紀後半～12世紀前半）、青磁碗（12世紀末～13世紀前半）等、やや古いものが出土する傾向がある。

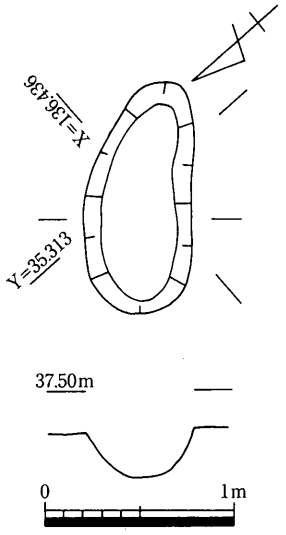
1209～1355はⅡ区から出土した遺物である。**1209**は縄文土器。深鉢。波状口縁を呈する。口縁端部は外側へ折り曲げて肥厚させる。口縁端部外面は二枚貝条痕が残る。縄文時代後期。**1210・1211**は弥生土器。**1210**は底部。**1211**は高杯。弥生時代後期中頃。**1212～1217**は土師器。**1212・1213**は高台付杯。**1212**は高台部の一部が剥離するが、剥離した部分に円弧状の刻みがある。**1214**は甕。**1215～1217**は高杯。**1218～1331**は土師質土器。**1218～1250**は小皿。口径は大半が6.2～7.4cmに収まり、6.4～6.8cmの間で1／2以上を占める。底部はすべてヘラ切り、**1218・1223・1225～1227・1234・1240・1242・1244～1246・1248**で時計回りのヘラ切り痕が見られる。外面の底部と体部の境付近に横方向の工具痕があるものもみられる。おおむね13世紀中～14世紀前半。**1251～1304**は杯。口径は9.6～13.0cm、器高指数は18～34とばらつきがあるが、口径の大半は10.4～11.4cm、器高指数は21～31で、25前後に若干の集中箇所がある。底部はヘラ切りで、**1256・1260・1286**には時計回りのヘラ切り痕が残り、**1266**には板圧痕が残る。13世紀～14世紀前半までの時期のものがあるが、13世紀後半～14世紀前半のものが多い。**1305**は椀底部。**1306～1318**は足釜。口縁端部・鍔端部をともに四角くするもの（**1309～1313・1318**）と丸くするもの（**1306～1308・1314～1317**）がある。鍔及び口縁



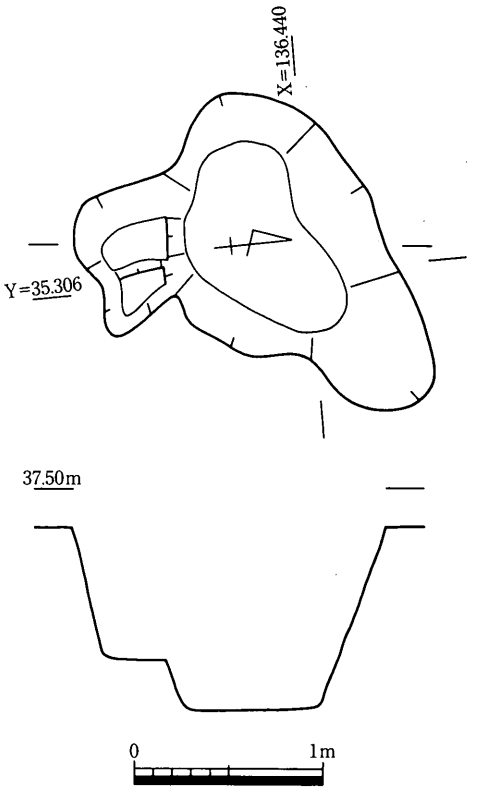
第221図　Ⅲ区SK55・56・57平・断面図（1/40）



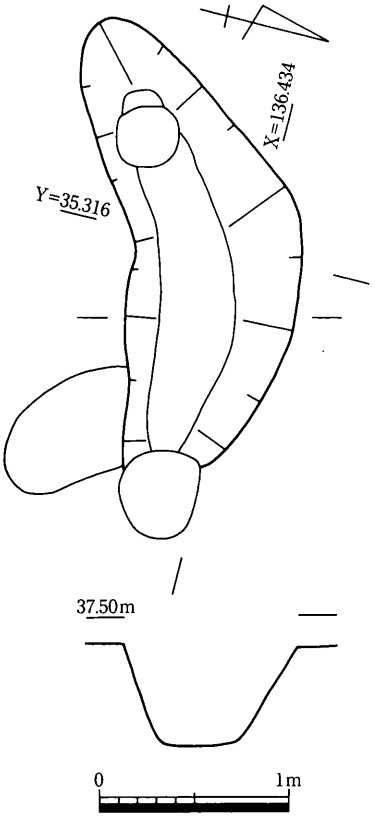
第222図　Ⅲ区SK58平・断面図（1/40）



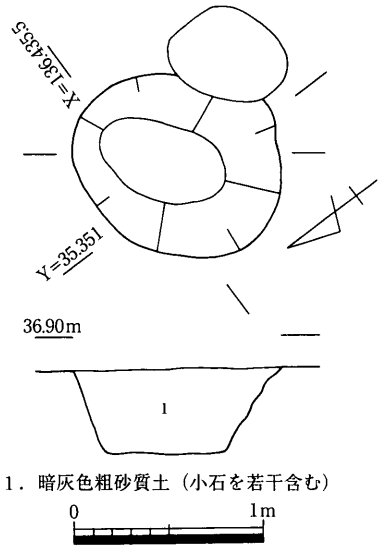
第223図　Ⅲ区SK60平・断面図（1/40）



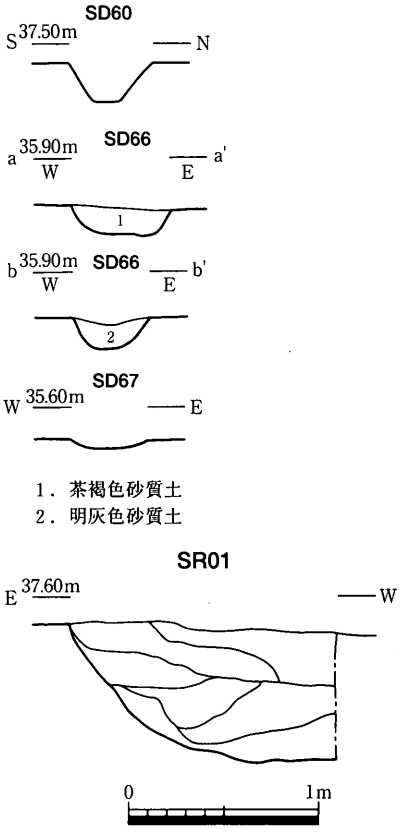
第224図　Ⅲ区SK61平・断面図（1/40）



第225図　Ⅲ区SK66平・断面図（1/40）



第226図　Ⅴ区SK73平・断面図（1/40）



第227図　Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区SD60・66・67、SR01断面図（1/40）

端部の接合箇所は、鍔部を接合するもの（**1307・1311～1313・1315・1316**）、鍔の上部に粘土を足して口縁をつくるもの（**1309・1310・1318**）、鍔の下部に粘土を足して鍔と口縁部をつくるもの（**1306・1308・1314**）がある。**1307**は鍔の下部の接合が粗く、一定間隔ごとになでつけるだけである。足釜の時期はおおむね13世紀末～14世紀前半である。**1319～1323**は脚部。**1324～1331**は土鍋。ほとんどは口縁端部が直線的に外反し、端部は四角くする（**1325・1328・1329・1331**）。**1330**はⅠ区中世包含層で多く出土した器形で、14世紀末頃のやや後出するもの。その他は13世紀末～14世紀前半頃と考えられる。**1332**は不明土製品。円盤状を呈し、指で成形する。**1333～1343**は須恵器。**1333・1334**は杯。口縁端部内外面に重ね焼き痕を残す。**1333**は底部には時計回りのヘラ切り痕と板圧痕を残す。13世紀末～14世紀前半。**1335・1336**は須恵器椀。見込みに**1335**には粗いヘラミガキ、**1336**には放射状の板目を施す。**1337**は高杯。脚部。長方形の透かし穴が4箇所にある。5世紀後半。**1338**は鉢E。全体に摩滅する。12世紀中～後半。**1339・1340**は壷底部。**1341～1343**は甕。外面には左から右へ進む格子叩き痕が残る。11世紀後半～12世紀前半。**1344**は灰釉陶器。内外面ともに施釉。9世紀後半頃。**1345・1346**は白磁碗。高台付近まで施釉する。**1345**は見込みに沈線を施す。11世紀後半～12世紀前半。**1347**は備前焼灯明皿。切れ込みが1箇所ある。**1348**はふいご羽口片。外面には溶融痕が残る。**1349・1350**は壁土。直方体状を呈し、溝状の切れ込みを各面に入れる。**1349**には草木の圧痕と思われる、細い線状の圧痕が認められた。**1351～1353**は楔形石器。いずれもサヌカイト製。**1352・1353**は上・下部に敲打痕を残す。**1354・1355**は鉄製品。

Ⅱ区中世包含層からは、土師質土器小皿・杯・足釜等では13世紀～14世紀前半の遺物が出土している。包含層形成もそれ以後に形成されたと考えられる。

（6）時期不明遺構

Ⅰ区SK02（第219図）

Ⅰ区E3グリットで検出した土坑である。楕円形で、長軸1.52m、短軸1.00m、深さ4㎝、断面形状は浅い皿状、埋土は暗黒色粘質土である。

埋土中からは出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

Ⅰ区SK04（第219図）

Ⅰ区D3グリットで検出した土坑である。楕円形と考えられるが、北半部は調査区外へ延びる。長軸1.48m以上、短軸1.54m、深さ34㎝、短軸側の断面形状は逆台形、長軸側では落ち込みが2箇所見られる。

埋土中からの出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

Ⅰ区SK17（第219図）

Ⅰ区E3グリットで検出した土坑である。円形で直径0.92m、深さ38㎝、断面形状は逆台形、埋土は淡灰褐色砂質土である。

埋土中からの出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

Ⅰ区SK15（第220図）

Ⅰ区D2グリットで検出した土坑である。不整円形で、長軸1.47m、短軸1.02m、深さ45㎝で、土坑底部には凹凸がある。

埋土中からは出土遺物はなかった。SB05のほぼ中央付近に位置し、遺構の軸の方位も近似することから、SK15はSB05に付属する貯蔵穴としての機能も考えられようが、推測の域は出ない。

Ⅱ区SK27（第220図）

Ⅱ区D6グリットで検出した土坑である。不整円形で、長軸1.92m、短軸1.85m、深さ50cmで、遺構の肩は北東側がなだらかである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明である。

Ⅲ区SK55（第221図）

Ⅲ区D8グリットで検出した土坑である。周溝墓7の上面で検出した。楕円形で長軸1.54m、短軸0.89m、深さ12cm、断面形状は浅い皿状、埋土は暗茶褐色粗砂である。

埋土からの出土遺物はなく、遺構の時期は、弥生時代前期末以降としか言えない。

Ⅲ区SK56（第221図）

Ⅲ区D8グリット、SK55と近接して検出した土坑である。周溝墓7の上面で検出した。楕円形で、長軸1.50m、短軸1.34m、深さ8cm、断面形状は浅い皿状、埋土は暗灰褐色粗砂である。

埋土中からの出土遺物はなく、遺構の時期は弥生時代前期末以降としか言えない。

Ⅲ区SK57（第221図）

Ⅲ区D8グリットで検出した土坑である。円形で、直径1.15m、深さ20～46cmを測る。底部には落ち込みが2箇所ある。埋土は暗茶褐色粗砂で、SK55と同じである。埋土中からは土器小片が出土しただけである。

遺構の時期は不明である。

Ⅲ区SK58（第222図）

Ⅲ区D7グリットで検出した土坑である。周溝墓4の上面で検出した。長軸1.40m、短軸1.06m、深さ22cmで、断面形状は南肩がなだらかである。

埋土中からは土器小片が出土しただけで、遺構の時期は不明である。

Ⅲ区SK60（第223図）

Ⅲ区E9グリットで検出した土坑である。長楕円形で長軸1.24m、短軸0.58m、深さ24cm、断面形状はボウル状である。

埋土中からは出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

Ⅲ区SK61（第224図）

Ⅲ区D・E9グリットで検出した土坑である。不整形で2基の土坑が連なったような形状である。長軸1.92m、短軸1.16m、深さは浅い部分は64cm、深い部分は94cmである。

埋土中からは土器小片が出土しただけで、遺構の時期は不明である。

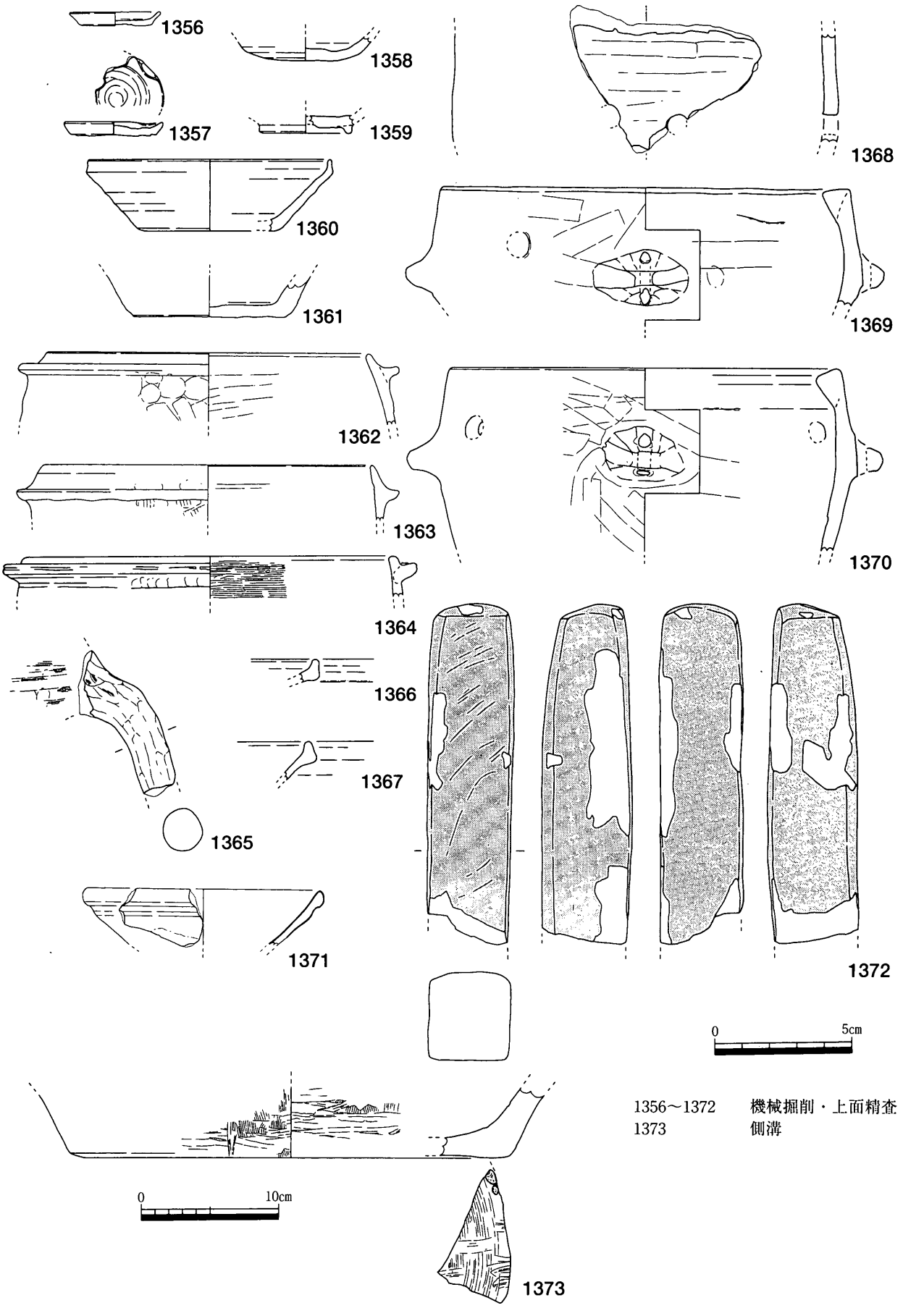
Ⅲ区SK66（第225図）

Ⅲ区E9グリットで検出した土坑である。長楕円形で長軸2.40m、短軸0.88m、深さ54cmを測る。

埋土中からは土器小片が出土しただけで、遺構の時期は不明である。

Ⅴ区SK73（第226図）

Ⅴ区E11グリットで検出した土坑である。楕円形で長軸1.14m、短軸0.92m、深さ44cm、断面形状は逆台形、埋土は暗灰色粗砂質土である。



1356～1372　機械掘削・上面精査
1373　側溝

第228図　Ⅰ区上面精査、機械掘削など出土遺物（1/2、1/4）

埋土中からの出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

Ⅰ区SR01（第227図）

Ⅰ区D2・3にまたがって検出した流路である。南西から北東へ向く。大半は調査区外へ延びる。幅1.40m以上、深さ70cm程度を測る。埋土からの出土遺物はなかった。

Ⅲ区SD60（第227図）

Ⅲ区D7グリットで検出した溝状遺構である。南東から北西へ若干南西側へ湾曲しながら調査区外へ延びる。検出長2.30m、幅44cm、深さ20cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明である。

Ⅵ区SD66・67（第227図）

Ⅵ区D14グリットで検出した溝である。SD64を挟んで検出したもので、1条の溝と考えられる。幅40～52cm、深さ5～13cm、埋土は茶褐色砂質土・明灰色砂質土である。遺構の前後関係によりSD64より古い。検出範囲では蛇行して流れるが、SD64付近で屈曲してSD64に近い方位をとることも考えられる。

遺構の時期は不明である。

（7）上面精査・機械掘削等出土遺物

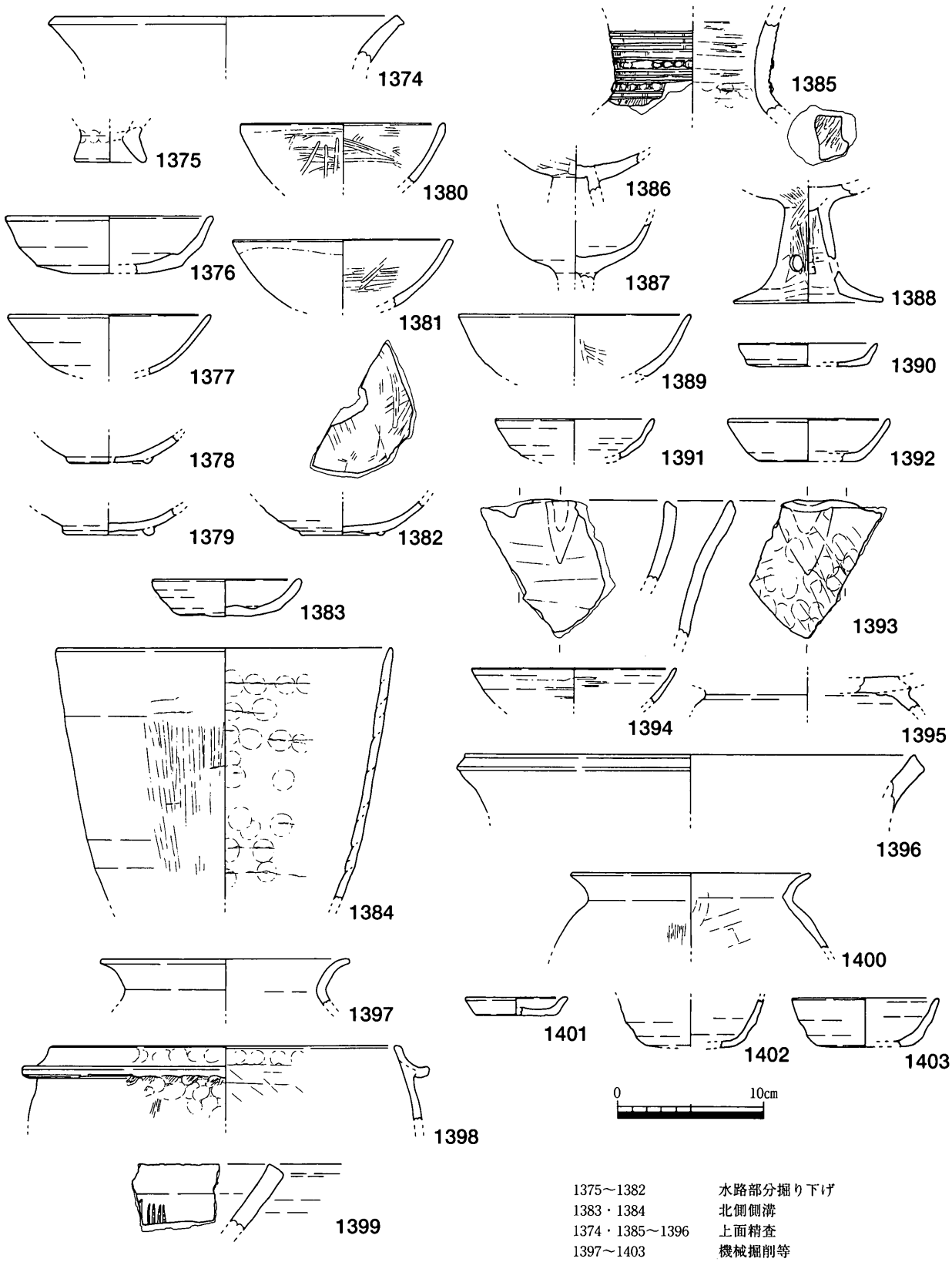
Ⅰ区その他出土遺物（第228図）

1356～1372はⅠ区機械掘削・上面精査時に出土した遺物である。**1356～1365**は土師質土器。**1356・1357**は小皿。**1356**は底部に時計回りのヘラ切り痕を残す。**1357**は1箇所に指で内側へ押さえて窪ませた箇所がある。煤は付着していないが、灯明皿として使用しようとしていたのかもしれない。**1358**は杯底部。**1359**は椀底部。**1360**は鉢。口縁端部は上側へ屈曲する。**1361**は鉢底部か。**1362～1364**は足釜。**1362・1364**は鍔部に接合痕がある。**1365**は足釜脚部。**1366・1367**は須恵器捏鉢。**1366**は口縁端部外面に重ね焼き痕がある。東播系。**1367**は口縁形態は東播系に似るが、焼成はやや不良で重ね焼き痕もない。**1368～1370**は焜炉。**1371**は白磁碗。口縁端部を玉縁状にする。施釉は体部外面中程までである。**1372**は砥石。使用痕はあまり認められない。**1373**は側溝出土遺物。須恵器甕底部。

出土した遺物は一部に近世のものもあるが、ほとんどは中世包含層の時期とあまり変らない。

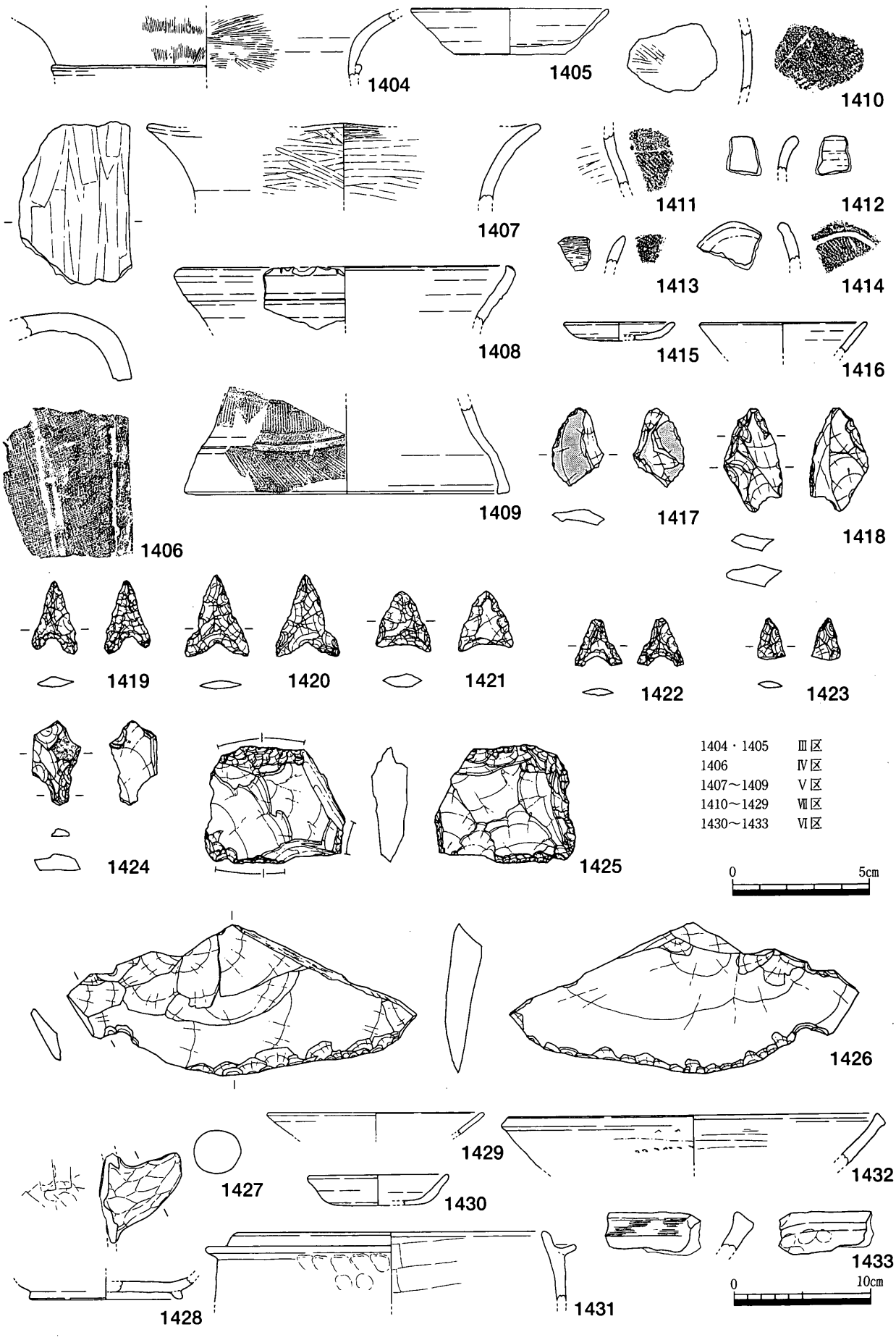
Ⅱ区その他出土遺物（第229図）

1374はⅡ区SK43付近で出土した。須恵器甕口縁部。13世紀前半～中頃。**1375～1382**はⅡ区南東部の現水路の下部を掘り下げた際に出土した遺物である。**1375**は製塩土器脚部か。上部には剥離痕がある。**1376・1377**は土師質土器杯。ともに口径14cm程度。12世紀後半～13世紀前半。**1378・1379**は土師質土器椀。**1380～1382**は須恵器椀。**1380・1381**は内外面にヘラミガキを施し、口縁部内外面には重ね焼き痕がある。**1382**は見込みに放射状の板ナデ痕がある。13世紀代。**1383・1384**はⅡ区北側側溝から出土した遺物である。**1383**は土師質土器杯。**1384**は土師器甑か。内面には約2cmごとに粘土の接合痕が明瞭に認められる。**1385～1396**は上面精査で出土した遺物である。**1385**は弥生土器壷。頸部にヘラ描き沈線を11条以上施し、2箇所には刻み目の付く貼付突帯を2条巡らせる。貼付突帯がはがれている個所にはその下部からヘラ描き沈線が見られ、ヘラ描き沈線を一定間隔に巡らせた後に突帯を貼り付けたことがわかる。弥生時代前期末。**1386～1389**は土師器高杯。**1388**は脚部の3箇所に透かし穴がある。**1390**は土師質土器小皿。**1391・1392**は土師質土器杯。**1393**は土師質土器捏鉢。小片で傾きは不確かである。**1394**は須恵器椀。口縁端部内外面に重ね焼き痕を残す。**1395**は壷底部。8世紀頃か。**1396**は須恵器甕。11世紀後半～12世紀前半のもの。出土遺物はおおむねⅡ区の

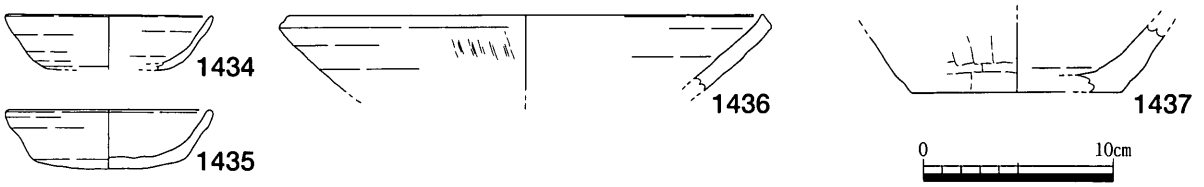


1375～1382	水路部分掘り下げ
1383・1384	北側側溝
1374・1385～1396	上面精査
1397～1403	機械掘削等

第229図　Ⅱ区上面精査、機械掘削など出土遺物（1/4）



第230図　Ⅲ～Ⅶ区上面精査、機械掘削など出土遺物（1/2、1/4）



第231図　Ⅰ区予備調査トレンチ出土遺物（1/4）

遺構の時期と重なる。**1397～1403**は機械掘削等、包含層よりも上面で出土した遺物である。**1397**は弥生土器甕。**1398**は土師質土器足釜。鍔の下部から粘土を足して鍔と口縁部を作る。**1399**は備前焼擂鉢。備前焼Ⅲ期前半。14世紀前半頃。**1400**は弥生土器甕。**1401～1403**は土師質土器。**1401**は小皿。13世紀中～14世紀前半。**1402・1403**は杯。13世紀後半～14世紀前半。

Ⅲ～Ⅷ区その他出土遺物（第230図）

1404はⅢ区E10杭から出土した。弥生土器壷。頸部に貼付突帯を巡らせる。小片で頸部径は不確かである。周溝墓からの混入か。弥生時代前期末頃。**1405**はⅢ区D8グリット機械掘削の際に出土した遺物である。土師質土器杯。12世紀後半～13世紀前半。**1406**はⅣ区機械掘削の際に出土した遺物である。丸瓦。凸面は縦方向の板ナデ、凹面は布目痕が残る。中世頃。**1407～1409**はⅤ区上面精査の際に出土した遺物である。**1407**は縄文土器。深鉢。波状口縁を呈する。内外面はヘラミガキする。**1408・1409**は須恵器。**1410～1426**はⅦ区上面精査の際に出土した遺物である。**1410～1414**は縄文土器。**1410・1411**は深鉢。**1410**は体部片で傾きは不明。外面には縄文が施される。**1411**は体部の屈曲する付近。下半部にはRLの縄文が施され、上半部はナデで調整する。**1412～1414**は浅鉢。**1412・1413**は口縁部小片。**1413**は口縁端部外面にRLの縄文が施される。**1414**は波状口縁で、やや口縁端部が内傾する。外面にはRLの縄文が施され、その後口縁部に沿ってヘラ描き沈線が施される。**1415・1416**は土師質土器。**1415**は小皿。**1416**は杯。ともにほぼ13世紀代。**1417～1426**は石器。いずれもサヌカイト製。**1417・1418**はサヌカイト小片の側縁部をわずかに加工しており、石鏃未製品と考えられる。**1419～1423**は石鏃。**1423**は下部欠損。その他は凹基式。**1424**は石錐の未製品。基部を作り出しているだけである。**1425**は楔形石器。上・下部と側縁部の一部に敲打痕を残す。**1426**は石匙。Ⅶ区では、周溝墓で出土したものも含め、縄文土器やサヌカイト剥片の出土が目立つ。近辺に当該期の遺跡があることが予想される。**1427～1429**はⅦ区機械掘削の際に出土した遺物である。**1427**は土師器甑把手。**1428**は須恵器高台付杯。底部。**1429**は土師質土器杯。**1430～1433**はⅥ区上面精査の際に出土した遺物である。**1430・1431**は土師質土器。**1430**は杯。13世紀後半～14世紀前半。**1431**は足釜。**1432・1433**は須恵器捏鉢。**1433**は片口部が残る。13世紀後半～14世紀前半。

予備調査時出土遺物（第231図）

1434～1437は予備調査時に出土した遺物で、いずれもⅠ区北東部のトレンチで出土した遺物である。**1434・1435**は土師質土器杯。13世紀中～14世紀前半頃。**1436**は須恵器鉢。12世紀後半頃。**1437**は須恵器甕底部。

第4章　自然科学分析の結果

佐古川・窪田遺跡出土管玉の産地分析

㈲遺物分析研究所

1．はじめに

今回分析を行った玉類の原材料としては滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、メノウ等が推測される。一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のように思われているのが実態である。これら玉材については岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求める等くらいであり、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率等を正確には求められない。また原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となるのである。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何箇所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）や碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説であったが、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法[2,3]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究としては蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用することで産地分析をより正確に行った例[4]が報告されている。石鏃等の石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。（1）石器の原材産地推定で明らかになる遺跡から石材原産地までの移動距離、活動範囲は、石器が生活必需品であるので、生活上必要な生活圏と考えられる。（2）玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではなく、勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれないし、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏ではないかと考えられる。このように玉類の産地分析では、石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った遺物は、香川県丸亀市綾歌町栗熊に位置する佐古川・窪田遺跡出土の管玉の4個で、これら管玉の分析結果が得られたので報告する。

2．非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違い等により、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉等は、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方

法でなければ発展しない。よって石器の原材産地分析で成功している[4]非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉等を水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した[5]。

3．碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を第232図に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの第232図で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いている。

4．碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を第233図に示す。佐渡猿八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何箇所か見られるが、今回分析した原石は猿八の各地点から表採したもの、および地元で提供された原石等であり、また提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、それはグリーンタフ層の間に約7㎝幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6～2.5の間のものは31個、2.5～2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6～2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞がある等、多少色の違いがあっても分析した組成上には大きな差はみられなかった。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は②島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。横屋堀地区から産出する原石は、濃緑色から緑色の緻密で剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色等いろいろで、他に硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は7個、2.399～2.300は11個、2.299～2.200は11個、2.199～2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域のものが分析されているのがわかる。これら花仙山周辺の面白谷、瑪瑙公園、くらさこ地区等から原石を採取し組成の似た原石でくらさこ群、面白谷瑪瑙群、また、花仙山凝灰岩群等を作った。玉谷原産地は、③兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で産出する碧玉の色、石質等は肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より緻密で優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した玉谷産原石は、比重が2.644～2.600は23個、2.599～2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラク等で採取できる。二俣原産地は、④石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。ここの河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割し

たもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。また元素組成は他の産地の組成と異なっており区別できる。しかし、この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか検証するために、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区にあり、そのグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。それは肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が分析した8個は2.25～2.12と非常に軽く、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域であり、そこでは赤色、黄色、緑色等が混じり合った原石が産出している。このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地は、⑦北海道紋別郡西興部村にあり、その碧玉原石は鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は、⑧兵庫県氷上郡山南町地区にあり、その安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.6～2.5が5個、2.5～2.4が5個である。その碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質のもの碧玉を多数収集することは困難である。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉は不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り第3表に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、例えば、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の玉の原材料で、玉作り工程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索するという目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B（女代B）群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。宇木汲田遺跡の管玉に産地未発見の原石を使用した同質の材料で作られた管玉で作った未定C（未定（C））群をそれぞれ原石群と同じように使用する。また、岐阜県可児市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚（1）、（2）の遺物群、多摩ニュータウン遺跡、梅田古墳群、上ノ段遺跡、梅田東古墳群、新方遺跡等から出土した玉類および玉材剥片でそれぞれ遺物群を作り他の遺跡、墳墓から出土する玉類に組成が一致するか定量的に判定できるようにし、現在遺物群は合計96個になり、これら遺物群を第4表に示した。この他、鳥取県の福部村多鯰池、鳥取市防己尾岬等の自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。最近、兵庫県香住町の海岸から採取された親指大1個の碧玉様の玉材は貝殻状剥離がみられる緻密な石質で少し青っぽい緑の石材で玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光X線分析の結果では、興部産碧玉に似ているが、ESR信号および比重（2.35）が異なっているため、興部産碧玉と区別ができる。

5．佐古川・窪田遺跡出土の管玉と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した管玉は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原材産地の同定をするために、（1）蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。（2）また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

6．蛍光X線法による産地分析

これら玉材の蛍光X線分析のスペクトルを第234図～第237図に示し、比重および管玉の蛍光X線分析から原材料の元素組成比を求めて結果を第6・7表に示す。碧玉と分類した遺物は、緻密で、蛍光X線分析でRb、Sr、Y、Zrの各元素が容易に観測できる等を条件に分類した。また、緑色凝灰岩（グリーンタフ）製は比重が2.4に達しない玉材が多い。分析した管玉の比重は、2.55～2.57で碧玉製と推測される。これら遺物の元素組成比の結果を碧玉原石群（第3表～第5表）の結果と比較してみる。分析個数が少なくて統計処理ができる群が作れなかった原産地については、原石の元素組成比を、遺物と比較したが一致するものは見られなかった。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT2乗検定[6]により同定をおこない、それぞれの原石群に帰属する確率を求めて産地を同定する[4,5]。産地の同定結果は1個の管玉に対して、125個の推定確率結果が得られている。125個の結果の中で、高確率で同定された原石群（必要条件満たした）の産地に管玉の原材産地を同定するが、原理原則は、同じ組成の碧玉が異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にある玉類の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。『遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されていると言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。』、十分条件の低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち未定C遺物群と判定された遺物に対して、花仙山産原石とか玉谷産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を第8表に記入した。原石群を作った原石試料は直径2㎝以上で精度良く分析される。遺物は、大きさ、形がさまざまでこれらの影響により分析値が少しは変化していることを推測し、判定の信頼限界を0.1%に設定した。判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低確率の遺物はあまり重要に考えない等、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。今回分析した管玉報文番号10（分析番号95044）は、未定C遺物群に組成が似ることから、この原石産地は未定C遺物群の原石産地の近くに存在が推測される。この管玉報文番号10の分析場所を変えながら40回分析して、窪田2遺物群を作り、原石・遺物群の第5表に登録して他の遺跡で同じ組成の玉類が出土しているか判定できるようにした。蛍光X線分析の判定で、未定C遺物群と同定（第8表）された管玉を、より正確に産地を特定するためにESR分析を併用して総合的に産地分析を行った。

7．ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心等の常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11㎜以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。第238図－（1）のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号（Ⅰ）は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号（Ⅱ）と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号（Ⅲ）で構成されたている。第238図－（1）では、信号（Ⅱ）より信号（Ⅲ）の信号の高さが高く、第238図－（2）、－（3）の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した玉類の中で信号（Ⅱ）が信号（Ⅲ）より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号（Ⅲ）の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。第239図に花仙山、猿八、玉谷、土岐を第240図に興部、石戸、八代谷－4、女代B遺物群は菩提、那谷原石と一致、八代谷および第241図に富良野市空知川の空知（A）、B、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代

表的な信号（Ⅲ）のスペクトルを示す。第242図には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形を示した。ESR分析では玉材と管玉のESR信号の形が、それぞれ似た信号を示す原石だったり、産地不明遺物群のESR信号形と一致した場合、そこの産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した管玉のESR信号（Ⅲ）の結果を第243図に示す。報文番号9（分析番号95043）はD、F、Kの位置のピークが菜畑と異なるが信号の両端部分にピークが見られるところが菜畑形に似ることから、崩れ菜畑形とした。報文番号10・52・51（分析番号95044～95046）は未定C形である。これら一致したESR信号形を第8表に示し、より正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合は、遺物が過大でESR分析ができず蛍光X線の元素分析のみで判定した原石・遺物群産地よりも正確に、そこの原石・遺物群と同じものが使用されているとして総合判定原石産地の欄に結果（第8表）を記した。

8．結　論

報文番号52・51（分析番号95045～95046）の管玉は、蛍光X線分析とESR分析の両結果が未定C遺物群と同じ組成の原石が使用されていると判定した。報文番号9（分析番号95043）は蛍光X線分析では未定C遺物群に一致するが、ESR分析は崩れ菜畑形で、また、報文番号10（分析番号95044）はESR分析では未定C形に一致するが、蛍光X線分析では、未定C遺物群に似るが一致しなかった。しかし、報文番号9・10（分析番号95043·95044）の管玉は未定C遺物群に関連する結果が得られたことから、この両管玉の原石産地は未定C遺物群の原石産地の近くに存在すると推測した。佐古川・窪田遺跡で多用されている未定C群は弥生時代前期を中心に使用された原石である。ここで弥生時代に使用された玉材をみると、女代南B遺物群は豊岡市の女代南遺跡の中期の玉作り過程の石片、滋賀県の筑摩佃、立花遺跡出土の管玉、神戸市の玉津田中遺跡の中期の石片、管玉には玉谷産と共に使用されていた。京都府の日吉ヶ丘遺跡で使用され、余部遺跡で剥片には玉谷産原石が使用されている。関東地方では埼玉県蓮田市宿下遺跡、東海地方では、清洲町朝日遺跡、新城市大宮の大ノ木遺跡の弥生時代の管玉に、畿内地域では東大阪市の、鬼虎川、巨摩、亀井、久宝寺北、久宝寺南遺跡で、また中国地方では、作用町の長尾・沖田遺跡の中期末の管玉、総社市の南溝手遺跡出土の弥生前期末～中期初頭の玉材、岡山市の百間川原尾島遺跡出土の管玉、岡山県川上村下郷原和田遺跡の管玉、鳥取県羽合町の長瀬高浜遺跡の中期中葉の管玉、米子市の御建山遺跡尾高19号墳第2主体部出土の管玉、東広島市の西本6号遺跡の管玉に使用されている。四国地方では徳島県板野町の蓮華谷古墳群Ⅱ、2号墳、3世紀末の管玉、香川県善通寺市彼ノ宗遺跡の末期の管玉に使用され、九州地方では、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、また宇木汲田遺跡の管玉に使用されていた。また、続縄文時代には北海道の上磯町茂別遺跡、余市大川遺跡、千歳市キウス遺跡にまで伝播し、女代南B群の原石は糸魚川産ヒスイに匹敵する広い分布圏を示している。一方、未だ畿内では使用が確認されていない管玉として、南溝手遺跡の中期前葉の管玉片には、唐津市の宇木汲田遺跡の管玉で作った原石群の未定C群の原石が使用され、この未定C群は善通寺市龍川・五条遺跡の管玉、丸亀市佐古川・窪田遺跡の管玉、今治市の持田町3丁目遺跡の前期の管玉、大和町の尼寺一本松遺跡の管玉、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、吉野ヶ里遺跡の南西サブトレ出土の管玉に使用されている。また、猿八産原石が弥生時代に使用されている遺跡は、北海道余市町の大川遺跡および茂別遺跡の続縄文時代では女代南B群原石の管玉と共に使用され、江別市の大麻22遺跡出土の続縄文（後北C1式）の管玉に、七飯町の大中山13遺跡（続縄文）出土の管玉に使用され、佐渡島以北で主に使用されていることが明らかになっている。西日本では、鳥取県の高瀬長浜遺跡では女代南B群と同時に猿八産碧玉が使用されているにすぎない。これら佐渡産碧玉、女代南B群の剥片出土遺跡は、豊岡市、米原町、福井県等日本海側で、これら玉類が日本海の玉材原産地地方で作られ、これら玉類の使用圏からみて、日本海を交易ルートとし遠距離に伝播したと推測され、伝播には遺跡をリレー式に伝わる場合、また、産地から遠距離の遺跡に直接到達する場合等が考えられる。未定C群は、最近の予備的な実験で朝日遺跡で使用されている可能性が推測されたことから、推測は空論になるが、未定C群の管玉が韓国

で作られ、西北九州地方および瀬戸内海ルートを通って伊予、備前、讃岐へ流入し現在の東進の限界になっている。朝日遺跡での使用が確実になれば、播磨、摂津、大和、近江を飛び越え、尾張の朝日遺跡に伝播したことが明らかになり東進の限界が一気に300km延びる可能性がでている（第233図）。花仙山産原石は弥生後期に笠見第3遺跡で使用されているが、大半は、北陸産と推測している女代南B遺物群が搬入されている。これは遺跡から近い産地が多用されるとは限らないことを示し、先史の交易を推測する貴重な例と思われる。玉類の産地分析の困難さは原石の入手で、産地同定を定量的に行う場合、統計処理の母集団（原石群）を作り、原石群の組成の変動を評価するため多数の原石が必要で、今後、佐渡島猿八産原石が佐渡島以南に本当に伝播していないかを調査し、女代南B遺物群を作る遺物の一部は菩提・那谷産地に一致するが、全ての組成の遺物を菩提・那谷地区に存在するか調査を深めていく必要がある。また、未定C群、不明の管玉等の原石産地を明らかにし、これら不明遺物群の原石群を作ること、また、玉類に使用されている産地の原石が多い方が、その産地地方との文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な管玉を数多く分析することが重要で、是非とも各地の遺跡の詳細な碧玉製遺物の科学的調査が必要であるが現在調査が殆ど進んでいないのが現状で、国庫補助での発掘調査には必ず科学的調査も加えるべきだと思う。今回行った産地分析は完全な非破壊で、玉類、碧玉産地に関する小さな情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われます。

参考文献

1）茅原一也（1964）、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63˚73

2）藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要　6：1˚18

3）藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』　14：95˚109

4）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学　16：59˚89

5）Tetsuo Warashina（1992）、Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19 : 357－373

6）東村武信（1976）、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学　9：77－90

第３表　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析個数	Al／Si	K／Si	Ca／K	Ti／K	K／Fe	Rb／Fe	Fe／Zr	Rb／Zr	Sr／Zr	Y／Zr	Mn／Fe	Ti／Fe	Nb／Zr	比重
		Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ
花仙山１＋２	63	0.021 ± 0.003	1.329 ± 0.359	0.052 ± 0.039	0.189 ± 0.059	0.063 ± 0.016	0.231 ± 0.032	10.681 ± 3.131	2.388 ± 0.585	0.466 ± 0.192	0.123 ± 0.052	0.005 ± 0.007	0.010 ± 0.004	0.003 ± 0.012	2.308～2.614
花仙山１	33	0.023 ± 0.002	1.593 ± 0.172	0.038 ± 0.020	0.155 ± 0.031	0.071 ± 0.015	0.241 ± 0.019	10.900 ± 1.887	2.599 ± 0.452	0.483 ± 0.196	0.120 ± 0.036	0.002 ± 0.003	0.010 ± 0.001	0.004 ± 0.016	2.570 ± 0.044
花仙山２	30	0.019 ± 0.003	1.038 ± 0.277	0.066 ± 0.049	0.227 ± 0.058	0.053 ± 0.011	0.219 ± 0.038	10.440 ± 4.070	2.157 ± 0.625	0.446 ± 0.185	0.127 ± 0.064	0.008 ± 0.008	0.011 ± 0.005	0.002 ± 0.006	2.308 ± 0.079
興部	31	0.011 ± 0.003	0.580 ± 0.320	0.123 ± 0.137	0.061 ± 0.049	0.022 ± 0.006	0.070 ± 0.021	174.08 ± 124.9	16.990 ± 13.44	0.668 ± 0.435	1.801 ± 1.434	0.004 ± 0.003	0.001 ± 0.001	0.455 ± 0.855	2.626 ± 0.032
神奈川・玉川グリーンタフ	48	0.048 ± 0.006	0.656 ± 0.208	7.350 ± 2.233	1.434 ± 0.273	0.028 ± 0.009	0.025 ± 0.010	2.743 ± 1.075	0.061 ± 0.019	1.187 ± 0.474	0.304 ± 0.039	0.008 ± 0.004	0.038 ± 0.012	0.004 ± 0.006	2.2～吸水激し
石川・日用川グリーンタフ	26	0.048 ± 0.004	2.010 ± 0.132	1.192 ± 0.051	0.190 ± 0.026	0.092 ± 0.008	0.220 ± 0.017	2.125 ± 0.148	0.467 ± 0.040	1.652 ± 0.586	0.092 ± 0.030	0.008 ± 0.001	0.017 ± 0.001	0.010 ± 0.011	2.1～吸水激し
空知A1	42	0.039 ± 0.006	1.026 ± 0.281	2.728 ± 0.907	0.547 ± 0.119	0.042 ± 0.011	0.124 ± 0.058	3.309 ± 1.295	0.353 ± 0.101	12.485 ± 3.306	0.032 ± 0.045	0.028 ± 0.009	0.020 ± 0.005	0.007 ± 0.010	2.495 ± 0.039
空知A2	46	0.021 ± 0.008	0.866 ± 0.447	0.797 ± 0.393	0.225 ± 0.050	0.032 ± 0.006	0.039 ± 0.007	25.866 ± 11.50	1.023 ± 0.499	7.433 ± 4.531	0.378 ± 0.198	0.009 ± 0.003	0.006 ± 0.002	0.118 ± 0.167	2.632 ± 0.012
空知B	47	0.064 ± 0.004	3.600 ± 0.328	0.088 ± 0.008	0.101 ± 0.009	0.242 ± 0.037	0.460 ± 0.055	2.137 ± 0.274	0.974 ± 0.110	0.190 ± 0.082	0.137 ± 0.022	0.015 ± 0.002	0.022 ± 0.004	0.134 ± 0.024	2.607 ± 0.001
猿八１	46	0.042 ± 0.005	3.779 ± 0.549	0.049 ± 0.052	0.074 ± 0.013	0.202 ± 0.070	0.285 ± 0.085	2.520 ± 0.874	0.654 ± 0.131	0.177 ± 0.154	0.128 ± 0.051	0.003 ± 0.002	0.013 ± 0.003	0.011 ± 0.007	2.395～2.597
猿八２	49	0.039 ± 0.003	3.565 ± 0.274	0.016 ± 0.013	0.063 ± 0.012	0.453 ± 0.065	0.471 ± 0.086	0.983 ± 0.172	0.457 ± 0.104	0.100 ± 0.062	0.125 ± 0.042	0.011 ± 0.008	0.025 ± 0.005	0.012 ± 0.007	2.461～2.752
猿八３	52	0.036 ± 0.002	3.304 ± 0.217	0.003 ± 0.003	0.062 ± 0.006	0.977 ± 0.141	0.854 ± 0.110	0.400 ± 0.067	0.333 ± 0.019	0.066 ± 0.009	0.280 ± 0.149	0.033 ± 0.017	0.055 ± 0.009	0.014 ± 0.007	2.526～2.557
土岐	51	0.006 ± 0.004	0.361 ± 0.131	0.072 ± 0.063	0.098 ± 0.063	0.023 ± 0.005	0.096 ± 0.025	43.067 ± 23.28	4.056 ± 2.545	0.271 ± 0.308	0.159 ± 0.180	0.001 ± 0.001	0.001 ± 0.001	0.072 ± 0.160	2.607 ± 0.009
玉谷	28	0.025 ± 0.009	0.625 ± 0.297	0.110 ± 0.052	0.476 ± 0.104	0.045 ± 0.014	0.151 ± 0.020	6.190 ± 1.059	0.940 ± 0.205	0.192 ± 0.170	0.158 ± 0.075	0.006 ± 0.003	0.016 ± 0.003	0.054 ± 0.021	2.619 ± 0.014
細入	8	0.019 ± 0.003	0.534 ± 0.284	0.991 ± 0.386	0.372 ± 0.125	0.031 ± 0.008	0.073 ± 0.020	12.884 ± 3.752	0.882 ± 0.201	1.879 ± 0.650	0.026 ± 0.032	0.003 ± 0.002	0.008 ± 0.002	0.021 ± 0.344	2.169 ± 0.039
緑川	48	0.040 ± 0.003	0.495 ± 0.014	0.798 ± 0.030	0.985 ± 0.032	0.026 ± 0.001	0.044 ± 0.004	3.764 ± 0.428	0.166 ± 0.024	0.830 ± 0.073	0.155 ± 0.022	0.019 ± 0.001	0.024 ± 0.001	0.020 ± 0.011	2.669
二俣	45	0.040 ± 0.003	2.520 ± 0.140	0.384 ± 0.015	0.174 ± 0.004	0.301 ± 0.036	0.377 ± 0.040	1.068 ± 0.103	0.399 ± 0.018	0.699 ± 0.059	0.086 ± 0.016	0.008 ± 0.001	0.046 ± 0.005	0.020 ± 0.007	2.440 ± 0.091
石戸	4	0.019 ± 0.004	0.601 ± 0.196	0.075 ± 0.022	0.086 ± 0.038	0.154 ± 0.072	0.170 ± 0.079	7.242 ± 1.597	1.142 ± 0.315	0.649 ± 0.158	0.247 ± 0.092	0.007 ± 0.001	0.009 ± 0.002	0.227 ± 0.089	2.598 ± 0.008
茂辺地川	4	0.031 ± 0.002	1.847 ± 0.246	0.077 ± 0.024	0.222 ± 0.052	0.092 ± 0.021	0.190 ± 0.052	5.566 ± 1.549	0.980 ± 0.044	0.300 ± 0.032	0.171 ± 0.051	0.003 ± 0.008	0.016 ± 0.001	0.132 ± 0.069	2.536 ± 0.033
ケショマップ１	44	0.040 ± 0.007	2.745 ± 0.957	0.234 ± 0.139	0.135 ± 0.030	0.067 ± 0.008	0.096 ± 0.007	5.720 ± 0.608	0.543 ± 0.034	0.489 ± 0.184	0.146 ± 0.027	0.003 ± 0.001	0.009 ± 0.001	0.035 ± 0.018	2.287 ± 0.013
小松・菩提－那谷	44	0.037 ± 0.002	3.475 ± 0.265	0.008 ± 0.012	0.093 ± 0.015	0.412 ± 0.093	0.347 ± 0.037	1.409 ± 0.256	0.479 ± 0.064	0.107 ± 0.119	0.115 ± 0.044	0.017 ± 0.012	0.033 ± 0.004	0.011 ± 0.009	2.323～2.584
小松・菩提－１	62	0.039 ± 0.003	3.150 ± 0.298	0.035 ± 0.029	0.129 ± 0.022	0.323 ± 0.147	0.327 ± 0.091	1.781 ± 0.686	0.523 ± 0.091	0.239 ± 0.147	0.135 ± 0.047	0.013 ± 0.011	0.036 ± 0.013	0.010 ± 0.009	2.536 ± 0.021
花仙山（白化風化）	43	0.026 ± 0.004	0.975 ± 0.276	0.027 ± 0.018	0.261 ± 0.072	0.036 ± 0.008	0.155 ± 0.033	15.733 ± 2.527	2.441 ± 0.669	0.351 ± 0.126	0.184 ± 0.050	0.009 ± 0.005	0.008 ± 0.001	0.001 ± 0.006	2.294 ± 0.151
花仙山（横屋堀－１）	40	0.019 ± 0.006	1.080 ± 0.161	0.017 ± 0.009	0.138 ± 0.042	0.097 ± 0.017	0.197 ± 0.013	8.187 ± 0.859	1.590 ± 0.111	0.339 ± 0.041	0.079 ± 0.022	0.021 ± 0.006	0.011 ± 0.001	0.003 ± 0.006	2.624～2.447
花仙山（淡緑色）	40	0.027 ± 0.006	1.449 ± 0.075	0.037 ± 0.007	0.161 ± 0.018	0.075 ± 0.012	0.246 ± 0.018	12.479 ± 1.513	3.022 ± 0.233	0.921 ± 0.066	0.182 ± 0.022	0.007 ± 0.005	0.011 ± 0.001	—	2.428～2.507
花仙山－くらさこ	48	0.023 ± 0.001	1.537 ± 0.129	0.011 ± 0.011	0.118 ± 0.028	0.167 ± 0.030	0.268 ± 0.044	5.638 ± 0.764	1.469 ± 0.110	0.324 ± 0.084	0.092 ± 0.019	0.022 ± 0.007	0.017 ± 0.003	0.003 ± 0.008	2.531～2.570
花仙山面白谷瑪瑙	52	0.021 ± 0.004	1.336 ± 0.444	0.072 ± 0.050	0.176 ± 0.043	0.061 ± 0.028	0.187 ± 0.042	16.137 ± 4.988	2.874 ± 0.744	0.824 ± 0.612	0.146 ± 0.044	0.012 ± 0.005	0.009 ± 0.002	0.001 ± 0.005	2.588 ± 0.036
花仙山めのう公園前－凝灰岩	46	0.047 ± 0.004	2.285 ± 0.142	0.055 ± 0.012	0.370 ± 0.023	0.046 ± 0.007	0.111 ± 0.011	12.125 ± 2.515	1.313 ± 0.177	0.497 ± 0.157	0.126 ± 0.015	0.005 ± 0.003	0.015 ± 0.003	0.002 ± 0.004	2.419吸水
会津坂下原石	42	0.039 ± 0.004	1.500 ± 0.155	1.162 ± 0.104	0.280 ± 0.058	0.154 ± 0.027	0.168 ± 0.027	1.630 ± 0.188	0.268 ± 0.032	1.162 ± 0.171	0.108 ± 0.017	0.032 ± 0.007	0.038 ± 0.004	0.009 ± 0.008	2.1～吸水激し

Xav：平均値、σ：標準偏差値

第4表　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

遺物群名	分析回数	Al／Si	K／Si	Ca／K	Ti／K	K／Fe	Rb／Fe	Fe／Zr	Rb／Zr	Sr／Zr	Y／Zr	Mn／Fe	Ti／Fe	Nb／Zr	比重
		Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ
女代南 B	68	0.045 ± 0.016	3.115 ± 0.445	0.042 ± 0.024	0.107 ± 0.036	0.283 ± 0.099	0.267 ± 0.063	2.374 ± 0.676	0.595 ± 0.065	0.214 ± 0.097	0.171 ± 0.047	0.011 ± 0.004	0.026 ± 0.009	0.034 ± 0.016	2.554 ± 0.019
未定 C	58	0.030 ± 0.028	4.416 ± 0.618	0.013 ± 0.013	0.207 ± 0.034	0.589 ± 0.130	0.650 ± 0.113	0.583 ± 0.110	0.369 ± 0.035	0.090 ± 0.030	0.070 ± 0.026	0.002 ± 0.001	0.101 ± 0.019	0.019 ± 0.016	2.646 ± 0.023
車塚 1	33	0.030 ± 0.015	3.774 ± 0.404	0.015 ± 0.005	0.278 ± 0.043	0.334 ± 0.031	0.469 ± 0.030	0.782 ± 0.071	0.365 ± 0.016	0.071 ± 0.012	0.090 ± 0.060	0.002 ± 0.001	0.081 ± 0.013	0.033 ± 0.013	2.619 ± 0.019
車塚 2	45	0.035 ± 0.015	4.066 ± 0.618	0.012 ± 0.004	0.232 ± 0.025	0.544 ± 0.118	0.672 ± 0.112	0.540 ± 0.122	0.350 ± 0.036	0.070 ± 0.280	0.057 ± 0.019	0.002 ± 0.001	0.109 ± 0.023	0.028 ± 0.013	2.616 ± 0.019
牟田辺	58	0.082 ± 0.042	3.327 ± 0.450	0.853 ± 0.213	0.913 ± 0.178	0.091 ± 0.019	0.161 ± 0.018	1.342 ± 0.160	0.214 ± 0.026	2.140 ± 0.412	0.064 ± 0.024	0.008 ± 0.003	0.067 ± 0.008	0.018 ± 0.010	2.1 ～吸水
天王山4号第1主体-No. 1	38	0.018 ± 0.004	1.341 ± 0.031	0.079 ± 0.013	0.277 ± 0.013	0.257 ± 0.011	0.389 ± 0.036	0.814 ± 0.057	0.316 ± 0.032	0.168 ± 0.027	0.074 ± 0.031	0.006 ± 0.001	0.069 ± 0.003	0.055 ± 0.027	2.437
天王山4号第1主体-No. 2	40	0.027 ± 0.000	2.602 ± 0.025	0.021 ± 0.003	0.234 ± 0.006	0.184 ± 0.001	0.228 ± 0.005	2.645 ± 0.044	0.599 ± 0.014	0.135 ± 0.009	0.066 ± 0.007	0.013 ± 0.007	0.039 ± 0.001	0.018 ± 0.011	2.548
天王山4号第2主体-No. 5	42	0.034 ± 0.000	3.572 ± 0.129	0.002 ± 0.002	0.252 ± 0.009	0.777 ± 0.030	1.035 ± 0.040	0.287 ± 0.009	0.295 ± 0.005	0.072 ± 0.004	0.041 ± 0.004	0.025 ± 0.015	0.176 ± 0.005	0.025 ± 0.004	2.466
天王山4号第2主体-No. 7	42	0.028 ± 0.000	2.650 ± 0.020	0.003 ± 0.003	0.073 ± 0.007	0.557 ± 0.010	0.672 ± 0.019	0.517 ± 0.014	0.345 ± 0.007	0.074 ± 0.006	0.337 ± 0.015	0.023 ± 0.019	0.036 ± 0.003	0.012 ± 0.007	2.555
長塚 (1)	47	0.036 ± 0.004	3.525 ± 0.347	0.033 ± 0.005	0.439 ± 0.050	0.204 ± 0.037	0.361 ± 0.040	2.756 ± 0.473	0.980 ± 0.110	0.472 ± 0.083	0.379 ± 0.143	0.005 ± 0.001	0.094 ± 0.013	0.022 ± 0.016	2.533 ± 0.016
長塚 (2)	45	0.028 ± 0.007	2.659 ± 0.122	0.010 ± 0.004	0.064 ± 0.003	0.719 ± 0.065	0.832 ± 0.054	0.412 ± 0.038	0.341 ± 0.023	0.036 ± 0.010	0.386 ± 0.242	0.004 ± 0.001	0.047 ± 0.004	0.024 ± 0.013	2.569 ± 0.003
No. 200 - 1	32	0.042 ± 0.004	0.808 ± 0.025	3.588 ± 0.074	0.639 ± 0.016	0.051 ± 0.002	0.042 ± 0.006	1.751 ± 0.149	0.073 ± 0.016	4.665 ± 0.374	0.239 ± 0.026	0.006 ± 0.001	0.033 ± 0.001	0.006 ± 0.009	2.308
No. 200 - 2	28	0.037 ± 0.004	0.990 ± 0.021	2.384 ± 0.067	0.605 ± 0.029	0.064 ± 0.003	0.072 ± 0.011	1.422 ± 0.075	0.102 ± 0.015	6.680 ± 0.322	0.170 ± 0.017	0.008 ± 0.001	0.038 ± 0.002	0.006 ± 0.010	2.277
No. 200 - 3	28	0.039 ± 0.003	0.926 ± 0.020	2.527 ± 0.114	1.085 ± 0.059	0.053 ± 0.002	0.053 ± 0.009	1.668 ± 0.093	0.088 ± 0.015	4.455 ± 0.197	0.343 ± 0.031	0.014 ± 0.003	0.058 ± 0.003	0.002 ± 0.005	2.27
No. 200 - 4	32	0.047 ± 0.007	0.855 ± 0.025	3.771 ± 0.079	1.228 ± 0.035	0.057 ± 0.003	0.118 ± 0.023	1.110 ± 0.129	0.130 ± 0.030	9.626 ± 1.090	0.117 ± 0.025	0.005 ± 0.001	0.068 ± 0.002	0.006 ± 0.008	2.256
No. 200 - 6	32	0.040 ± 0.006	4.185 ± 0.162	0.031 ± 0.006	0.103 ± 0.003	0.821 ± 0.019	0.692 ± 0.040	0.646 ± 0.037	0.447 ± 0.025	0.207 ± 0.020	0.296 ± 0.026	0.011 ± 0.002	0.082 ± 0.003	0.038 ± 0.026	2.542
本郷-No. 23	30	0.049 ± 0.003	0.922 ± 0.036	4.701 ± 0.161	1.027 ± 0.112	0.042 ± 0.002	0.193 ± 0.062	1.390 ± 0.134	0.271 ± 0.096	8.507 ± 0.791	0.118 ± 0.036	0.008 ± 0.002	0.043 ± 0.004	0.005 ± 0.005	2.201 吸水
本郷-No. 17	34	0.049 ± 0.003	1.094 ± 0.030	3.635 ± 0.074	0.823 ± 0.021	0.058 ± 0.002	0.166 ± 0.012	1.282 ± 0.088	0.213 ± 0.021	9.273 ± 0.591	0.137 ± 0.019	0.006 ± 0.001	0.047 ± 0.001	0.005 ± 0.005	2.204 吸水
本郷-No. 16	27	0.053 ± 0.004	1.254 ± 0.037	3.706 ± 0.078	0.970 ± 0.092	0.029 ± 0.004	0.085 ± 0.018	2.626 ± 0.429	0.215 ± 0.025	8.981 ± 0.646	0.170 ± 0.028	0.013 ± 0.001	0.027 ± 0.002	0.004 ± 0.004	2.254 吸水
本郷-No. 22	32	0.051 ± 0.005	1.274 ± 0.089	3.133 ± 0.146	0.699 ± 0.046	0.048 ± 0.003	0.175 ± 0.022	—	0.329 ± 0.047	6.754 ± 0.505	0.168 ± 0.033	0.007 ± 0.001	0.033 ± 0.001	0.005 ± 0.006	2.219 吸水
本郷-No. 11	30	0.051 ± 0.004	1.082 ± 0.028	4.221 ± 0.039	0.827 ± 0.015	0.041 ± 0.001	0.145 ± 0.011	1.580 ± 0.109	0.230 ± 0.023	9.062 ± 0.598	0.160 ± 0.018	0.009 ± 0.001	0.034 ± 0.001	0.001 ± 0.003	2.227 吸水
本郷-No. 8	32	0.034 ± 0.003	0.749 ± 0.043	3.138 ± 0.498	1.446 ± 0.131	0.019 ± 0.001	0.014 ± 0.002	5.991 ± 0.477	0.084 ± 0.015	3.924 ± 0.299	0.362 ± 0.025	0.021 ± 0.001	0.027 ± 0.001	0.010 ± 0.012	2.684
札幌市-K135	38	0.040 ± 0.006	4.017 ± 0.246	0.150 ± 0.008	0.160 ± 0.006	0.202 ± 0.015	0.315 ± 0.022	1.739 ± 0.136	0.546 ± 0.028	0.454 ± 0.026	0.136 ± 0.030	0.007 ± 0.001	0.035 ± 0.001	0.036 ± 0.016	2.436
山崎 4	58	0.012 ± 0.001	0.286 ± 0.021	0.209 ± 0.022	0.231 ± 0.019	0.028 ± 0.002	0.090 ± 0.009	15.726 ± 1.722	1.418 ± 0.177	0.628 ± 0.094	0.076 ± 0.081	0.002 ± 0.000	0.006 ± 0.000	0.127 ± 0.059	2.588
梅田 1	40	0.021 ± 0.003	1.204 ± 0.094	0.066 ± 0.017	0.143 ± 0.008	0.065 ± 0.005	0.220 ± 0.029	12.333 ± 0.882	2.710 ± 0.421	0.273 ± 0.374	0.741 ± 0.134	0.001 ± 0.000	0.009 ± 0.001	0.014 ± 0.019	2.579 ± 0.013
梅田 2	44	0.032 ± 0.004	2.539 ± 0.246	0.025 ± 0.006	0.522 ± 0.050	0.172 ± 0.035	0.299 ± 0.051	3.517 ± 0.603	2.024 ± 0.053	0.316 ± 0.048	0.283 ± 0.066	0.005 ± 0.001	0.080 ± 0.011	0.035 ± 0.015	2.531 ± 0.007
梅田 3	40	0.027 ± 0.003	1.911 ± 0.062	0.020 ± 0.007	0.518 ± 0.010	0.261 ± 0.012	0.430 ± 0.017	3.262 ± 0.209	1.401 ± 0.057	0.338 ± 0.028	0.386 ± 0.048	0.005 ± 0.001	0.121 ± 0.005	0.033 ± 0.027	2.511
梅田 4	38	0.081 ± 0.008	7.149 ± 0.288	0.023 ± 0.003	0.082 ± 0.002	0.558 ± 0.020	0.473 ± 0.026	1.003 ± 0.046	0.473 ± 0.018	0.222 ± 0.032	0.100 ± 0.013	0.006 ± 0.001	0.039 ± 0.002	0.039 ± 0.010	2.446
上ノ段 1	42	0.014 ± 0.002	0.413 ± 0.046	0.054 ± 0.026	0.395 ± 0.040	0.053 ± 0.005	0.223 ± 0.020	3.772 ± 0.448	0.833 ± 0.068	0.077 ± 0.037	0.296 ± 0.053	0.006 ± 0.001	0.019 ± 0.001	0.014 ± 0.018	2.636 ± 0.001
梅田東 1	51	0.030 ± 0.007	1.974 ± 0.317	0.026 ± 0.011	0.529 ± 0.061	0.192 ± 0.011	0.219 ± 0.019	2.366 ± 0.474	0.512 ± 0.069	0.072 ± 0.024	0.101 ± 0.042	0.008 ± 0.001	0.095 ± 0.014	0.027 ± 0.018	2.541 ± 0.016
新方 1	67	0.062 ± 0.005	1.868 ± 0.115	1.640 ± 0.137	0.733 ± 0.069	0.078 ± 0.012	0.111 ± 0.205	1.610 ± 0.264	0.175 ± 0.018	8.298 ± 0.619	0.078 ± 0.019	0.050 ± 0.020	0.046 ± 0.006	0.027 ± 0.009	2.290 ± 0.018
新方 2	30	0.056 ± 0.005	4.152 ± 0.162	0.226 ± 0.181	0.313 ± 0.010	0.212 ± 0.019	0.297 ± 0.018	3.847 ± 0.314	1.137 ± 0.057	0.649 ± 0.095	0.139 ± 0.053	0.010 ± 0.003	0.061 ± 0.004	0.032 ± 0.017	2.546 ± 0.011
新方 3	39	0.044 ± 0.008	0.912 ± 0.178	2.416 ± 0.174	0.786 ± 0.267	0.080 ± 0.011	0.086 ± 0.018	1.685 ± 0.413	0.144 ± 0.050	7.449 ± 1.605	0.182 ± 0.056	0.068 ± 0.027	0.057 ± 0.013	0.007 ± 0.007	2.257 ± 0.024
新井 1	51	0.046 ± 0.004	3.875 ± 0.879	0.316 ± 0.009	0.234 ± 0.004	0.146 ± 0.018	0.255 ± 0.021	1.874 ± 0.168	0.476 ± 0.020	1.994 ± 0.080	0.077 ± 0.022	0.084 ± 0.001	0.035 ± 0.001	0.021 ± 0.011	2.482
山ノ奥 1	42	0.013 ± 0.002	0.608 ± 0.049	0.080 ± 0.015	0.355 ± 0.018	0.136 ± 0.011	0.278 ± 0.025	1.052 ± 0.082	0.291 ± 0.015	0.083 ± 0.010	0.142 ± 0.015	0.010 ± 0.001	0.045 ± 0.002	0.027 ± 0.016	2.461
大歳山 3 号墳-No. 10	48	0.048 ± 0.006	3.589 ± 0.151	0.096 ± 0.013	0.346 ± 0.012	0.151 ± 0.005	0.220 ± 0.009	2.478 ± 0.104	0.545 ± 0.021	0.452 ± 0.059	0.065 ± 0.016	0.004 ± 0.000	0.046 ± 0.002	0.033 ± 0.014	2.2 ～吸水
大歳山 3 号墳-No. 2	48	0.062 ± 0.007	0.280 ± 0.045	26.464 ± 5.515	1.390 ± 0.161	0.002 ± 0.000	0.002 ± 0.001	77.099 ± 9.460	0.152 ± 0.049	0.428 ± 0.079	0.120 ± 0.060	0.014 ± 0.001	0.003 ± 0.000	0.087 ± 0.040	2.849？
大歳山 3 号墳-No. 3	42	0.037 ± 0.004	1.817 ± 0.072	0.111 ± 0.008	0.289 ± 0.008	0.052 ± 0.002	0.105 ± 0.004	4.471 ± 0.140	0.470 ± 0.017	0.284 ± 0.018	0.265 ± 0.028	0.012 ± 0.001	0.012 ± 0.000	0.002 ± 0.005	2.3 ～吸水
東船 2	40	0.118 ± 0.001	0.466 ± 0.010	0.376 ± 0.009	0.108 ± 0.004	0.020 ± 0.001	0.087 ± 0.004	48.841 ± 6.946	4.250 ± 0.538	0.756 ± 0.136	0.056 ± 0.074	0.001 ± 0.000	0.002 ± 0.000	0.115 ± 0.058	2.19 ～吸水
亀川 3	41	0.112 ± 0.010	3.879 ± 0.431	0.122 ± 0.022	0.668 ± 0.030	0.034 ± 0.004	0.073 ± 0.011	9.768 ± 0.951	0.706 ± 0.062	0.117 ± 0.011	0.126 ± 0.022	0.005 ± 0.001	0.022 ± 0.002	0.094 ± 0.020	2.530 ± 0.054
昼飯 3	48	0.028 ± 0.005	2.002 ± 0.046	0.020 ± 0.010	0.442 ± 0.015	0.169 ± 0.009	0.290 ± 0.014	0.967 ± 0.040	0.280 ± 0.010	0.052 ± 0.007	0.062 ± 0.010	0.002 ± 0.001	0.070 ± 0.002	0.035 ± 0.010	2.501
大歳山 3 号墳-No. 4	48	0.077 ± 0.006	6.185 ± 0.139	0.058 ± 0.006	0.104 ± 0.003	0.287 ± 0.011	0.286 ± 0.016	1.216 ± 0.076	0.346 ± 0.011	0.166 ± 0.014	0.113 ± 0.014	0.008 ± 0.001	0.025 ± 0.001	0.014 ± 0.007	2.2 ～吸水
昼飯 4	48	0.030 ± 0.005	2.078 ± 0.122	0.040 ± 0.018	0.702 ± 0.032	0.132 ± 0.008	0.263 ± 0.009	3.774 ± 0.170	0.991 ± 0.049	0.227 ± 0.035	0.145 ± 0.048	0.005 ± 0.001	0.083 ± 0.002	0.035 ± 0.015	2.579
有岡 1	45	0.046 ± 0.003	0.454 ± 0.091	4.885 ± 0.933	1.484 ± 0.257	0.038 ± 0.008	0.058 ± 0.007	2.395 ± 0.279	0.139 ± 0.025	1.639 ± 0.375	0.424 ± 0.041	0.006 ± 0.001	0.050 ± 0.005	0.004 ± 0.006	2.2
彼ノ宗 6	44	0.033 ± 0.007	3.017 ± 0.430	0.154 ± 0.042	0.107 ± 0.012	0.045 ± 0.002	0.120 ± 0.004	12.584 ± 0.730	1.508 ± 0.072	0.367 ± 0.018	0.069 ± 0.027	0.007 ± 0.001	0.005 ± 0.000	0.014 ± 0.011	2.475
彼ノ宗 3	35	0.072 ± 0.008	2.647 ± 0.079	1.233 ± 0.015	0.915 ± 0.018	0.085 ± 0.003	0.167 ± 0.029	1.471 ± 0.106	0.245 ± 0.038	5.611 ± 0.363	0.067 ± 0.019	0.006 ± 0.001	0.069 ± 0.001	0.026 ± 0.009	2.2 ～吸水
彼ノ宗 4	40	0.067 ± 0.010	4.156 ± 0.155	0.344 ± 0.009	0.488 ± 0.009	0.134 ± 0.005	0.183 ± 0.007	1.692 ± 0.065	0.310 ± 0.010	0.739 ± 0.020	0.074 ± 0.014	0.011 ± 0.001	0.058 ± 0.002	0.032 ± 0.009	2.2 ～吸水
斉当坊 6	45	0.045 ± 0.004	3.512 ± 0.108	0.038 ± 0.004	0.090 ± 0.003	0.839 ± 0.059	0.618 ± 0.047	0.849 ± 0.074	0.522 ± 0.020	0.181 ± 0.011	0.984 ± 0.219	0.015 ± 0.001	0.070 ± 0.004	0.030 ± 0.033	2.554
笠見 3 - 5	46	0.103 ± 0.010	4.761 ± 0.127	0.039 ± 0.005	0.513 ± 0.069	0.090 ± 0.003	0.157 ± 0.006	1.470 ± 0.050	0.231 ± 0.007	0.574 ± 0.047	0.022 ± 0.015	0.008 ± 0.001	0.044 ± 0.006	0.025 ± 0.005	2.249 ～ 2.098
笠見 8	40	0.079 ± 0.008	3.542 ± 0.123	0.148 ± 0.014	0.561 ± 0.019	0.044 ± 0.001	0.047 ± 0.004	2.782 ± 0.184	0.131 ± 0.014	1.861 ± 0.149	0.028 ± 0.009	0.008 ± 0.001	0.024 ± 0.001	0.023 ± 0.006	2.257
笠見 10	48	0.100 ± 0.008	4.776 ± 0.117	0.064 ± 0.004	0.600 ± 0.007	0.078 ± 0.001	0.097 ± 0.009	1.650 ± 0.059	0.159 ± 0.016	2.187 ± 0.074	0.020 ± 0.014	0.009 ± 0.001	0.046 ± 0.001	0.018 ± 0.005	2.278
笠見 4	45	0.105 ± 0.002	0.135 ± 0.005	0.313 ± 0.043	0.781 ± 0.030	0.013 ± 0.001	0.045 ± 0.005	7.429 ± 0.531	0.332 ± 0.035	0.220 ± 0.037	0.105 ± 0.032	0.059 ± 0.002	0.010 ± 0.001	0.049 ± 0.027	2.61
笠見 13	45	0.088 ± 0.008	4.591 ± 0.091	0.123 ± 0.005	0.439 ± 0.008	0.074 ± 0.002	0.099 ± 0.007	2.090 ± 0.151	0.206 ± 0.013	1.523 ± 0.108	0.028 ± 0.010	0.008 ± 0.001	0.032 ± 0.001	0.024 ± 0.007	2.297
矢野 4	46	0.039 ± 0.004	2.666 ± 0.087	0.042 ± 0.006	0.144 ± 0.003	0.482 ± 0.018	0.456 ± 0.019	0.911 ± 0.041	0.415 ± 0.016	0.173 ± 0.011	0.262 ± 0.023	0.008 ± 0.001	0.064 ± 0.002	0.024 ± 0.016	2.456
青田77	48	0.038 ± 0.005	2.294 ± 0.066	0.109 ± 0.009	0.302 ± 0.008	0.273 ± 0.010	0.401 ± 0.018	1.349 ± 0.077	0.540 ± 0.026	0.627 ± 0.035	0.143 ± 0.024	0.004 ± 0.001	0.077 ± 0.003	0.033 ± 0.019	2.583
青田78	48	0.053 ± 0.007	2.304 ± 0.206	0.432 ± 0.011	0.766 ± 0.016	0.072 ± 0.003	0.116 ± 0.009	1.643 ± 0.158	0.190 ± 0.021	1.583 ± 0.113	0.031 ± 0.019	0.011 ± 0.001	0.051 ± 0.002	0.024 ± 0.009	2.403
菜畑	36	0.029 ± 0.019	3.666 ± 0.328	0.081 ± 0.034	0.268 ± 0.050	0.529 ± 0.189	0.674 ± 0.256	0.548 ± 0.131	0.337 ± 0.017	0.198 ± 0.096	0.103 ± 0.038	0.005 ± 0.002	0.129 ± 0.028	0.035 ± 0.016	2.521 ± 0.027
石田 2	30	0.019 ± 0.001	1.325 ± 0.043	0.010 ± 0.007	1.041 ± 0.047	0.109 ± 0.003	0.157 ± 0.005	1.810 ± 0.058	0.281 ± 0.011	0.010 ± 0.006	0.049 ± 0.006	0.022 ± 0.006	0.102 ± 0.003	0.025 ± 0.010	2.425
石田 3	30	0.014 ± 0.001	0.461 ± 0.059	0.001 ± 0.003	0.335 ± 0.038	0.098 ± 0.011	0.134 ± 0.014	4.288 ± 0.414	0.567 ± 0.062	1.160 ± 0.117	0.204 ± 0.035	0.065 ± 0.009	0.029 ± 0.002	0.010 ± 0.018	2.63
美保 1	30	0.095 ± 0.002	4.703 ± 0.190	0.140 ± 0.006	0.421 ± 0.013	0.062 ± 0.005	0.101 ± 0.010	3.071 ± 0.337	0.304 ± 0.006	0.483 ± 0.011	0.039 ± 0.002	0.001 ± 0.001	0.023 ± 0.002	0.024 ± 0.003	2.173

第5表　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

遺物群名	分析回数	Al／Si	K／Si	Ca／K	Ti／K	K／Fe	Rb／Fe	Fe／Zr	Rb／Zr	Sr／Zr	Y／Zr	Mn／Fe	Ti／Fe	Nb／Zr	比重
		Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ	Xav ± σ
大代 8	46	0.031 ± 0.001	3.129 ± 0.100	0.010 ± 0.005	0.394 ± 0.008	0.261 ± 0.005	0.418 ± 0.009	2.010 ± 0.041	0.835 ± 0.018	0.253 ± 0.013	0.343 ± 0.014	0.006 ± 0.007	0.093 ± 0.001	0.011 ± 0.009	2.546
大代 5	46	0.049 ± 0.002	0.677 ± 0.053	7.307 ± 0.891	1.069 ± 0.113	0.004 ± 0.001	0.002 ± 0.001	36.228 ± 2.282	0.061 ± 0.011	7.363 ± 0.353	0.253 ± 0.015	0.012 ± 0.001	0.004 ± 0.001	0.000000	2.589
沖丈-2号	45	0.066 ± 0.005	2.596 ± 0.355	0.876 ± 0.105	0.937 ± 0.082	0.093 ± 0.008	0.192 ± 0.020	1.124 ± 0.189	0.210 ± 0.018	4.640 ± 0.439	0.044 ± 0.008	0.001 ± 0.004	0.079 ± 0.011	0.016 ± 0.004	2.399 ± 0.015
大歳山3号墳－No. 1	42	0.040 ± 0.001	0.762 ± 0.042	0.929 ± 0.118	0.206 ± 0.018	0.035 ± 0.002	0.020 ± 0.003	1.338 ± 0.014	0.027 ± 0.004	0.595 ± 0.023	0.064 ± 0.004	0.023 ± 0.002	0.006 ± 0.001	0.009 ± 0.005	2.611
持田 3 丁目-No. 1	42	0.055 ± 0.004	3.186 ± 0.281	0.482 ± 0.048	0.725 ± 0.031	0.080 ± 0.010	0.150 ± 0.020	1.320 ± 0.172	0.194 ± 0.011	2.827 ± 0.286	0.050 ± 0.007	0.015 ± 0.010	0.052 ± 0.007	0.019 ± 0.004	2.3～, 2.4～
持田 3 丁目-No. 2	45	0.038 ± 0.002	3.370 ± 0.104	0.024 ± 0.024	0.244 ± 0.053	0.273 ± 0.039	0.368 ± 0.044	1.210 ± 0.222	0.445 ± 0.114	0.277 ± 0.223	0.063 ± 0.025	0.005 ± 0.007	0.058 ± 0.006	0.032 ± 0.011	2.5～, 2.6～
持田 3 丁目-No. 3	45	0.045 ± 0.003	4.282 ± 0.393	0.001 ± 0.002	0.173 ± 0.014	0.981 ± 0.119	1.164 ± 0.185	0.290 ± 0.023	0.333 ± 0.041	0.079 ± 0.015	0.055 ± 0.010	0.010 ± 0.014	0.152 ± 0.012	0.021 ± 0.008	2.5～, 2.6～
花仙山遺物群	60	0.019 ± 0.003	1.137 ± 0.332	0.037 ± 0.026	0.152 ± 0.065	0.122 ± 0.029	0.219 ± 0.033	7.452 ± 2.397	1.556 ± 0.288	0.478 ± 0.185	0.076 ± 0.030	0.031 ± 0.015	0.016 ± 0.006	0.003 ± 0.006	2.543～2.562
上野 1 号墳-No. 3	42	0.030 ± 0.000	1.977 ± 0.039	0.020 ± 0.003	0.914 ± 0.026	0.104 ± 0.003	0.267 ± 0.005	2.840 ± 0.086	0.752 ± 0.029	0.097 ± 0.013	0.100 ± 0.009	0.015 ± 0.007	0.085 ± 0.001	0.024 ± 0.011	2.444
石台-No. 1	44	0.069 ± 0.001	2.580 ± 0.035	1.220 ± 0.056	0.892 ± 0.014	0.049 ± 0.003	0.120 ± 0.006	1.831 ± 0.072	0.218 ± 0.005	6.025 ± 0.088	0.043 ± 0.004	—	0.039 ± 0.002	0.011 ± 0.003	2.409
鶴貫-No. 1	42	0.027 ± 0.001	2.279 ± 0.131	0.014 ± 0.010	0.166 ± 0.008	0.141 ± 0.012	0.162 ± 0.009	2.644 ± 0.126	0.423 ± 0.014	0.177 ± 0.012	0.112 ± 0.009	0.016 ± 0.006	0.021 ± 0.002	0.011 ± 0.008	2.564
玉の宮-No. 1	43	0.017 ± 0.001	1.289 ± 0.178	0.044 ± 0.008	0.196 ± 0.031	0.038 ± 0.001	0.116 ± 0.002	30.326 ± 1.854	3.478 ± 0.213	0.544 ± 0.055	0.270 ± 0.036	0.006 ± 0.003	0.007 ± 0.001	0.0003 ± 0.001	2.613
仲仙寺 9-No. 2	40	0.020 ± 0.000	1.496 ± 0.058	0.021 ± 0.005	0.132 ± 0.008	0.279 ± 0.007	0.406 ± 0.013	0.669 ± 0.012	0.269 ± 0.009	0.088 ± 0.007	0.086 ± 0.006	0.053 ± 0.013	0.033 ± 0.002	0.020 ± 0.008	2.099
仲仙寺 9-No. 5	40	0.019 ± 0.001	0.818 ± 0.017	0.105 ± 0.014	1.074 ± 0.021	0.123 ± 0.002	0.333 ± 0.012	0.485 ± 0.020	0.160 ± 0.009	0.112 ± 0.006	0.049 ± 0.003	0.048 ± 0.010	0.119 ± 0.002	0.026 ± 0.006	2.49
西川津	42	0.077 ± 0.004	2.470 ± 0.213	1.483 ± 0.124	0.834 ± 0.055	0.062 ± 0.008	0.167 ± 0.032	1.591 ± 0.254	0.258 ± 0.021	6.169 ± 0.619	0.053 ± 0.006	—	0.046 ± 0.006	0.013 ± 0.004	2.415～2.444
源代	46	0.067 ± 0.011	0.770 ± 0.153	3.837 ± 0.573	1.859 ± 0.170	0.013 ± 0.001	0.017 ± 0.003	5.261 ± 0.287	0.091 ± 0.017	5.048 ± 0.373	0.065 ± 0.012	0.016 ± 0.005	0.021 ± 0.003	0.002 ± 0.004	2.192～2.277
紫金山-鍬形石	45	0.059 ± 0.001	2.691 ± 0.337	0.695 ± 0.164	0.364 ± 0.032	0.105 ± 0.009	0.189 ± 0.034	1.890 ± 0.163	0.354 ± 0.063	1.457 ± 0.333	0.174 ± 0.060	0.002 ± 0.002	0.034 ± 0.005	0.006 ± 0.005	2.209～2.204
紫金山-車輪石	49	0.066 ± 0.001	2.651 ± 0.040	0.801 ± 0.049	0.391 ± 0.007	0.098 ± 0.003	0.198 ± 0.006	1.691 ± 0.101	0.331 ± 0.017	1.149 ± 0.022	0.125 ± 0.020	0.004 ± 0.002	0.035 ± 0.001	0.005 ± 0.005	2.1
紫金山-紡錘車 1-3	42	0.052 ± 0.003	1.344 ± 0.138	1.402 ± 0.232	0.269 ± 0.153	0.085 ± 0.018	0.134 ± 0.015	2.814 ± 0.528	0.370 ± 0.042	2.117 ± 0.547	0.565 ± 0.383	0.010 ± 0.005	0.019 ± 0.008	0.0003 ± 0.002	2.22～2.223
紫金山-紡錘車 2	42	0.055 ± 0.000	3.076 ± 0.009	0.240 ± 0.002	0.373 ± 0.004	0.118 ± 0.000	0.263 ± 0.004	1.958 ± 0.020	0.512 ± 0.008	1.228 ± 0.017	0.164 ± 0.004	0.0004 ± 0.0009	0.039 ± 0.000	0.011 ± 0.006	2.189
山持川-41-5	40	0.042 ± 0.000	3.213 ± 0.068	0.120 ± 0.006	0.119 ± 0.004	0.256 ± 0.020	0.252 ± 0.015	1.421 ± 0.114	0.354 ± 0.013	0.866 ± 0.032	0.062 ± 0.007	0.008 ± 0.004	0.027 ± 0.003	0.004 ± 0.004	2.211
堀部Ⅱ-222	44	0.013 ± 0.000	0.365 ± 0.083	0.038 ± 0.022	0.308 ± 0.068	0.144 ± 0.032	0.226 ± 0.024	2.700 ± 0.284	0.605 ± 0.091	2.127 ± 0.233	0.013 ± 0.022	0.126 ± 0.018	0.038 ± 0.003	0.016 ± 0.023	2.536
川向-No. 3・5	36	0.042 ± 0.001	2.786 ± 0.361	0.196 ± 0.085	0.156 ± 0.028	0.199 ± 0.029	0.218 ± 0.029	1.918 ± 0.474	0.405 ± 0.062	1.776 ± 0.688	0.084 ± 0.027	0.002 ± 0.003	0.028 ± 0.005	0.002 ± 0.004	2.365-2.386
川向-No. 4	28	0.029 ± 0.000	1.932 ± 0.057	0.032 ± 0.005	0.179 ± 0.005	0.224 ± 0.019	0.325 ± 0.023	1.184 ± 0.129	0.583 ± 0.017	0.316 ± 0.038	0.075 ± 0.009	0.028 ± 0.007	0.036 ± 0.003	0.005 ± 0.006	2.516
古志本郷	40	0.085 ± 0.014	2.960 ± 0.197	0.632 ± 0.192	0.668 ± 0.041	0.064 ± 0.005	0.139 ± 0.014	1.436 ± 0.232	0.196 ± 0.016	4.070 ± 0.584	0.033 ± 0.006	—	0.038 ± 0.004	0.015 ± 0.003	2.334-2.362
古浦砂丘-65	40	0.055 ± 0.002	5.450 ± 0.139	0.0002 ± 0.0007	0.130 ± 0.005	1.156 ± 0.076	1.352 ± 0.064	0.253 ± 0.009	0.339 ± 0.008	0.069 ± 0.005	0.058 ± 0.004	0.006 ± 0.009	0.135 ± 0.012	0.020 ± 0.006	2.576
古浦砂丘-A6	40	0.036 ± 0.000	3.098 ± 0.046	0.165 ± 0.019	0.091 ± 0.008	0.278 ± 0.004	0.292 ± 0.011	1.538 ± 0.039	0.445 ± 0.018	0.386 ± 0.017	0.127 ± 0.007	0.009 ± 0.011	0.023 ± 0.002	0.010 ± 0.008	2.559
古浦砂丘-21	40	0.077 ± 0.002	3.223 ± 0.121	1.289 ± 0.111	0.652 ± 0.022	0.087 ± 0.003	0.195 ± 0.009	0.931 ± 0.026	0.180 ± 0.006	6.947 ± 0.121	0.049 ± 0.004	0.003 ± 0.005	0.051 ± 0.001	0.011 ± 0.004	2.353
堀部Ⅲ-88-105	40	0.028 ± 0.000	1.343 ± 0.016	0.130 ± 0.009	0.231 ± 0.012	0.038 ± 0.002	0.191 ± 0.009	16.790 ± 0.660	3.181 ± 0.144	0.853 ± 0.052	0.150 ± 0.022	0.011 ± 0.002	0.008 ± 0.000	0.0003 ± 0.0013	2.218-2.305
会津坂下-G	50	0.038 ± 0.004	3.323 ± 0.455	0.018 ± 0.012	0.047 ± 0.006	0.360 ± 0.058	0.412 ± 0.053	1.454 ± 0.239	0.583 ± 0.030	0.085 ± 0.018	0.174 ± 0.034	0.019 ± 0.009	0.015 ± 0.002	0.025 ± 0.008	2.523 ± 0.035
会津坂下-N	48	0.045 ± 0.006	4.044 ± 0.475	0.026 ± 0.007	0.325 ± 0.064	0.274 ± 0.048	0.311 ± 0.034	2.861 ± 0.314	0.876 ± 0.083	0.276 ± 0.095	0.168 ± 0.089	0.011 ± 0.005	0.078 ± 0.009	0.019 ± 0.010	2.401 ± 0.096
湯坂 1	54	0.041 ± 0.005	3.292 ± 0.543	0.020 ± 0.009	0.054 ± 0.019	0.278 ± 0.051	0.377 ± 0.061	2.510 ± 0.430	0.922 ± 0.122	0.341 ± 0.137	0.123 ± 0.032	0.007 ± 0.007	0.013 ± 0.003	0.021 ± 0.015	2.249 ± 2.420
湯坂 2	40	0.058 ± 0.004	5.308 ± 0.422	0.033 ± 0.036	0.071 ± 0.013	0.212 ± 0.038	0.263 ± 0.041	3.643 ± 0.395	0.938 ± 0.053	0.352 ± 0.071	0.126 ± 0.020	0.011 ± 0.004	0.014 ± 0.004	0.034 ± 0.013	2.223 ± 2.339
阿尾島田-1	49	0.021 ± 0.013	1.116 ± 0.122	0.026 ± 0.019	0.239 ± 0.038	0.307 ± 0.026	0.482 ± 0.064	0.882 ± 0.144	0.419 ± 0.075	0.211 ± 0.059	0.071 ± 0.011	0.089 ± 0.019	0.066 ± 0.012	0.014 ± 0.011	2.481 ± 0.038
阿尾島田-2	45	0.030 ± 0.001	2.212 ± 0.053	0.000 ± 0.001	0.033 ± 0.004	0.671 ± 0.031	0.808 ± 0.040	1.022 ± 0.047	0.819 ± 0.040	0.039 ± 0.024	0.143 ± 0.018	0.047 ± 0.025	0.020 ± 0.003	0.013 ± 0.016	2.467
佐古川・窪田-2	40	0.033 ± 0.001	2.948 ± 0.112	0.018 ± 0.003	0.226 ± 0.006	0.727 ± 0.020	0.859 ± 0.028	0.367 ± 0.013	0.313 ± 0.007	0.284 ± 0.008	0.071 ± 0.007	0.044 ± 0.017	0.148 ± 0.005	0.020 ± 0.005	2.563

Xav：平均値、σ：標準偏差値　比重2.29以下は緑色擬灰岩女代南 B：女代南遺跡（豊岡市）、未定 C：宇木汲田遺跡（唐津市）、車塚 1、2：車塚古墳（交野市）、牟田辺：牟田辺遺跡（多久市）、長塚（1）、(2)：長塚古墳（可児市）、No.200-1～6：多摩ニュータウン遺跡（東京都）、梅田 1～4：梅田古墳（兵庫県和田山町）、梅田東 1：梅田東古墳（兵庫県和田山町）、上ノ段 1：上ノ段遺跡（兵庫県島町）、新方 1～3：新方遺跡（神戸市）、新井 1：新井三丁目遺跡（東京都中野区）、亀川 3：亀川遺跡（阪南市自然田）、東船 1：東船遺跡（島根県今津町）、山ノ奥 1：山ノ奥遺跡（岡山県）、昼飯 3、4：昼飯大塚古墳（大垣市）、斉当坊 6：市田斉当坊（京都府久御山町）、笠見3～13：笠見第3遺跡（鳥取県東伯町）、矢野4：矢野遺跡（徳島市）青田77、78：青田遺跡（新潟県加治川村）、菜畑（唐津市）、石田 2、3：石田古墳（松江市）、美保 1：中野美保遺跡（出雲市）、大代 8、5：大代古墳（鳴門市）、湯坂 1、2：湯坂遺跡（鳥取県赤碕町）、阿尾島田-1、-2：阿尾島田 A1 号墳（氷見市）、佐古川・窪田遺跡（丸亀市）で使用されている原石産地不明の玉類で作った群。

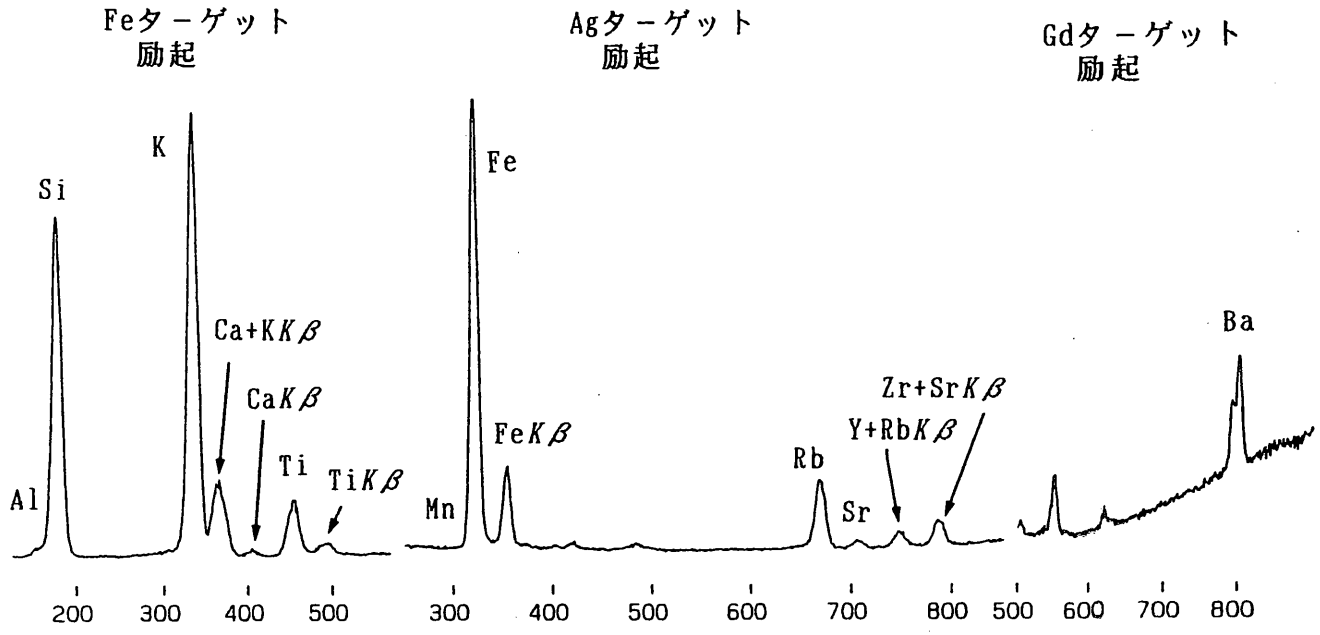
第6表　佐古川・窪田遺跡出土管玉の分析結果

報文No.	分析番号	元素比							
		Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
9	95043	0. 041	3. 819	0. 000	0. 228	0. 454	0. 467	0. 663	0. 307
10	95044	0. 033	2. 941	0. 019	0. 229	0. 707	0. 815	0. 389	0. 314
52	95045	0. 040	3. 530	0. 000	0. 203	0. 529	0. 643	0. 561	0. 358
51	95046	0. 044	4. 276	0. 000	0. 207	0. 757	0. 874	0. 353	0. 306
	JG-1 [a)]	0. 067	3. 392	0. 774	0. 237	0. 111	0. 263	3. 795	0. 998

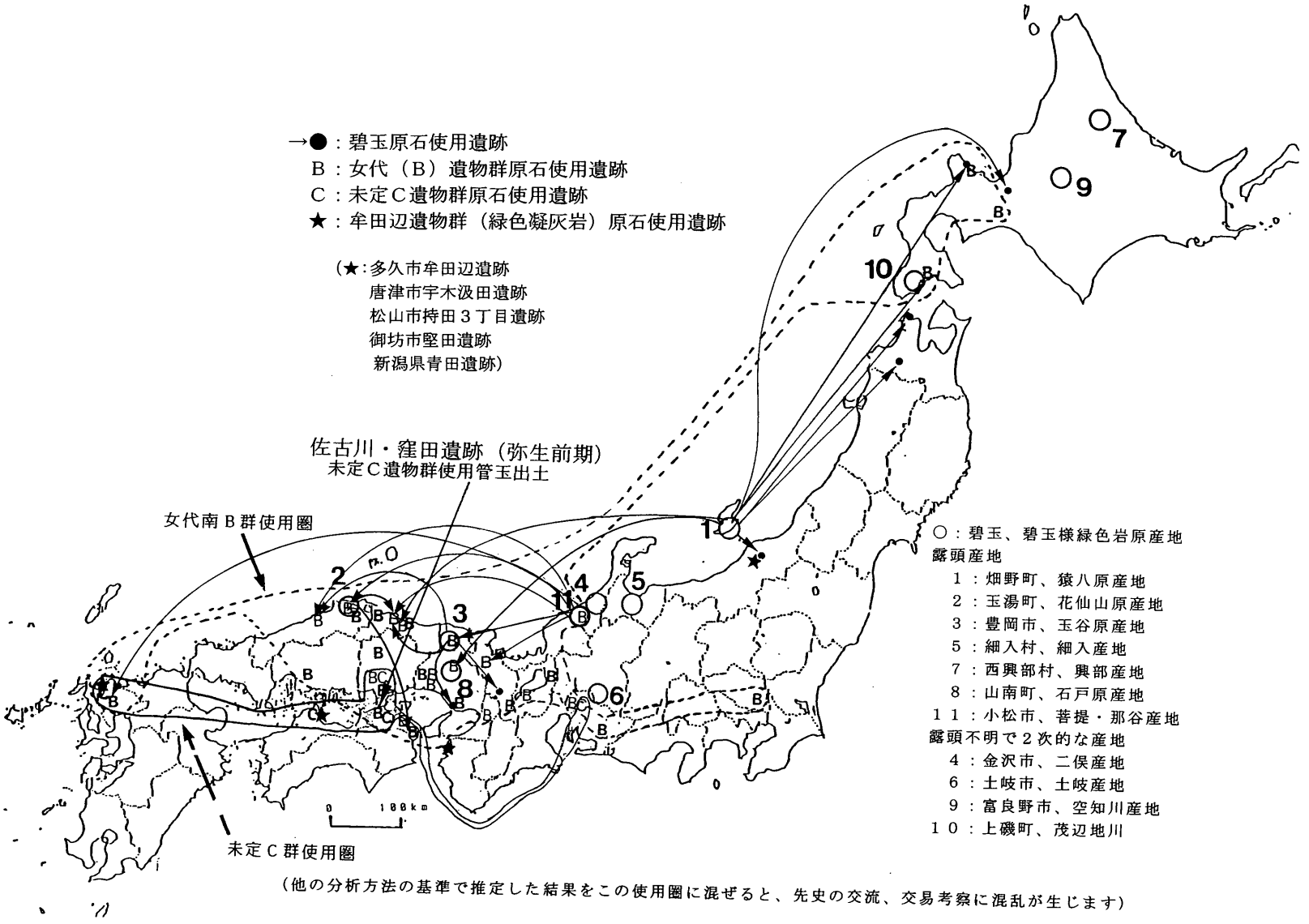
第7表　佐古川・窪田遺跡出土管玉の分析結果

報文No.	分析番号	元素比					重量	比重
		Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	gr	
9	95043	0. 047	0. 047	0. 025	0. 093	0. 039	0. 35170	2. 575
10	95044	0. 302	0. 084	0. 059	0. 145	0. 017	0. 26042	2. 563
52	95045	0. 190	0. 069	0. 001	0. 097	0. 014	0. 06848	2. 555
51	95046	0. 052	0. 038	0. 040	0. 141	0. 032	0. 13636	2. 573
	JG-1 [a)]	1. 345	0. 281	0. 024	0. 024	0. 079		

a）：標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG－1 granodiorite and JB－1 basalt. *Geochemical Journal,* Vol. 8 175－192.

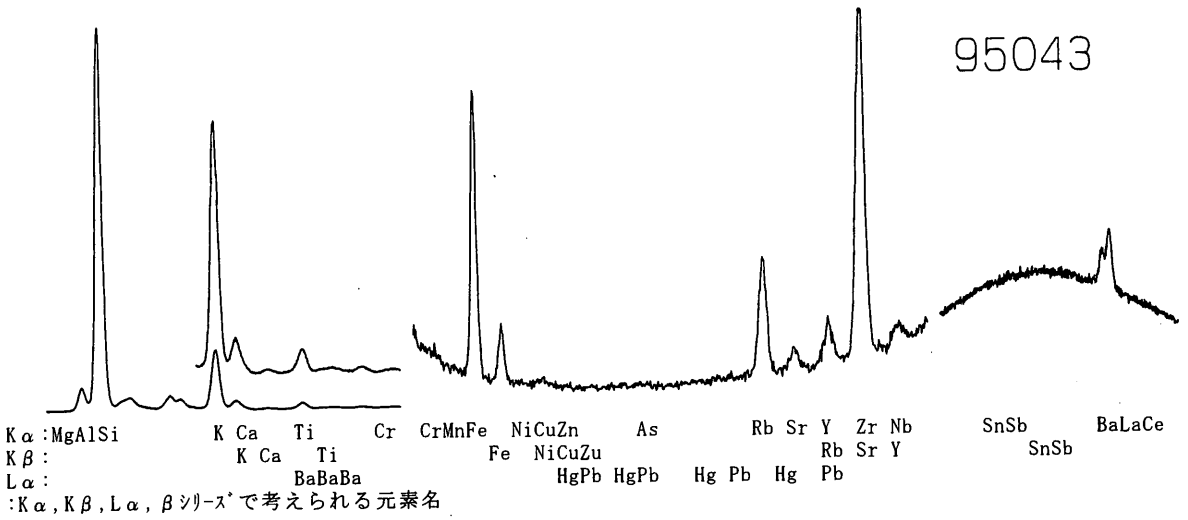


第232図　花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

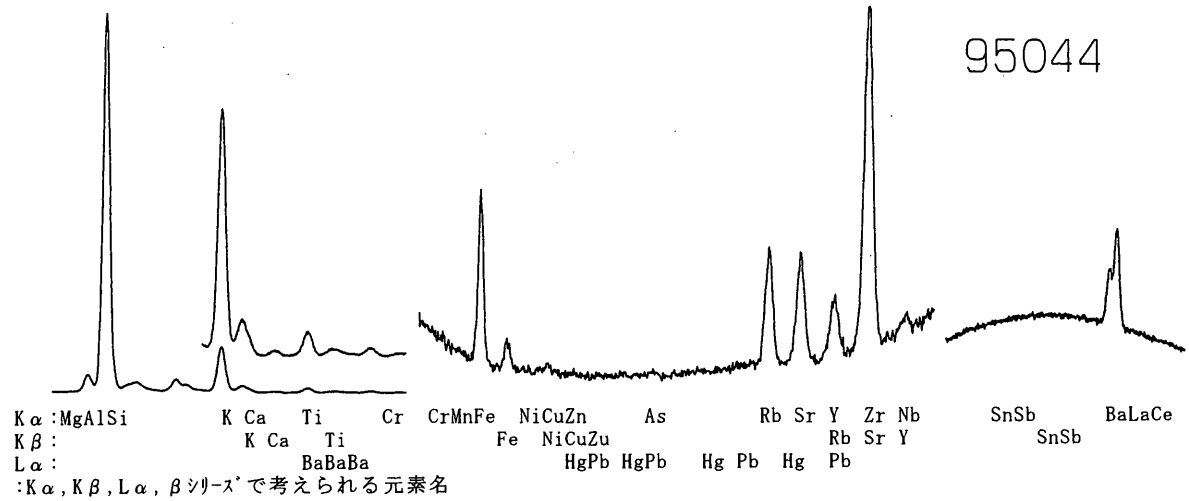


（他の分析方法の基準で推定した結果をこの使用圏に混ぜると、先史の交流、交易考察に混乱が生じます）

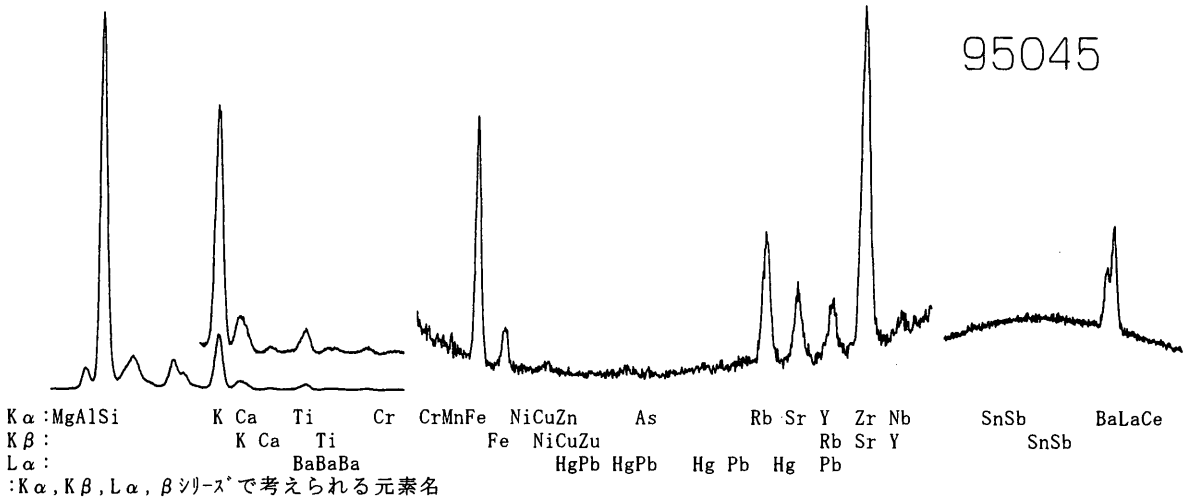
第233図　弥生（続縄文）時代の碧玉製、緑色凝灰岩製玉類の原材使用分布圏および碧玉・碧玉様岩の原産地



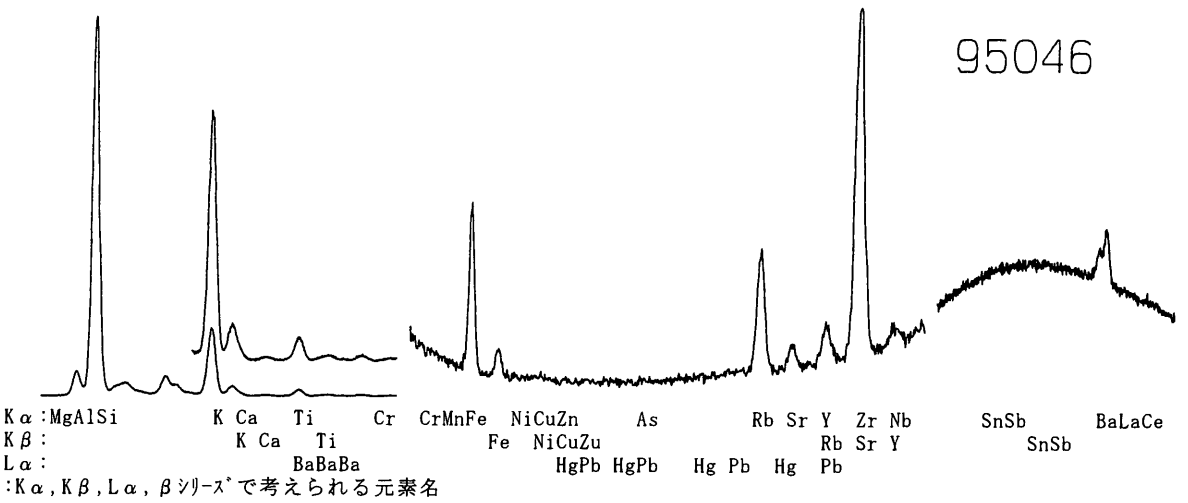
第234図　佐古川・窪田遺跡出土管玉報文番号９（95043）の蛍光Ｘ線スペクトル



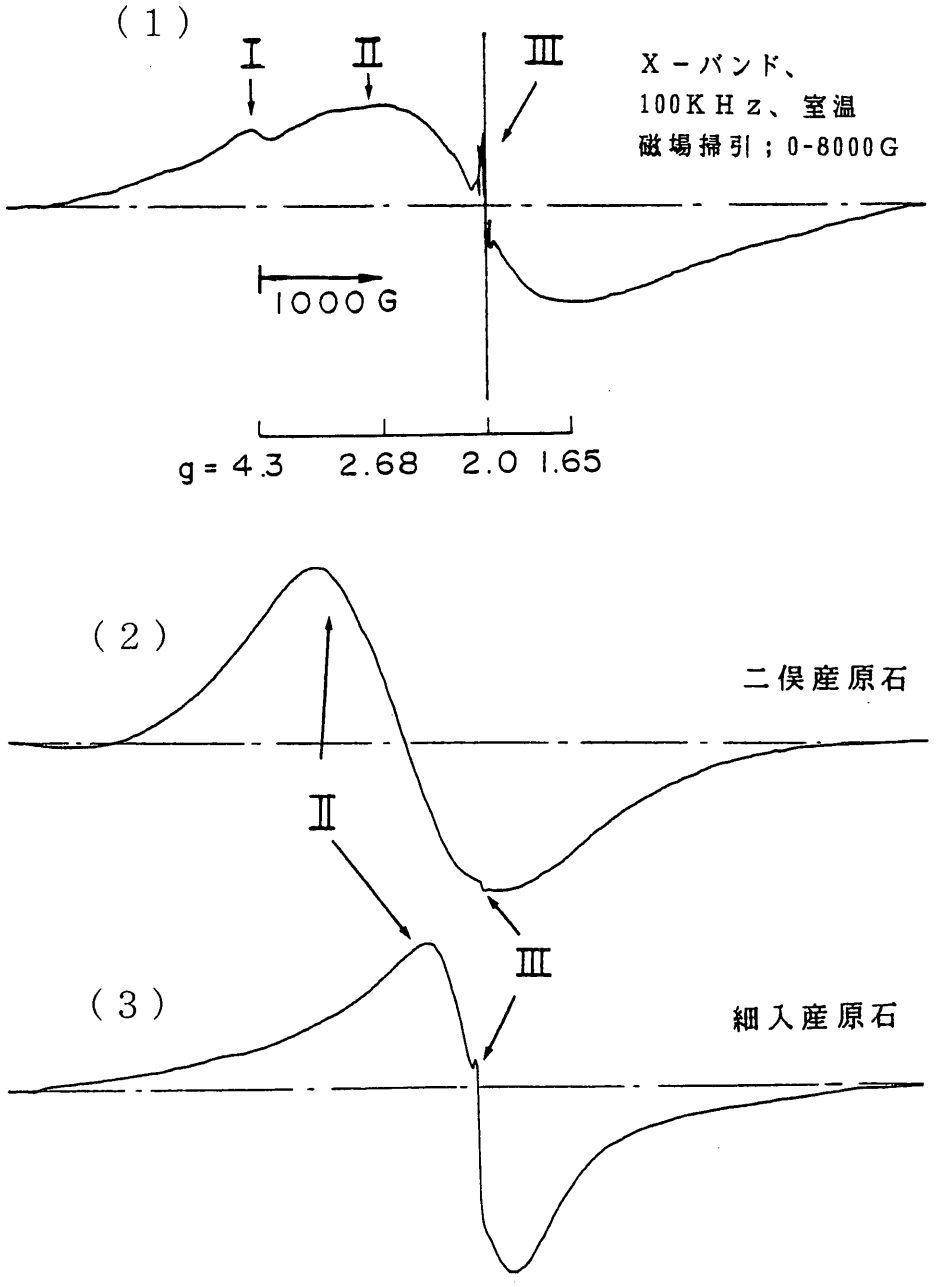
第235図　佐古川・窪田遺跡出土管玉報文番号10（95044）の蛍光Ｘ線スペクトル



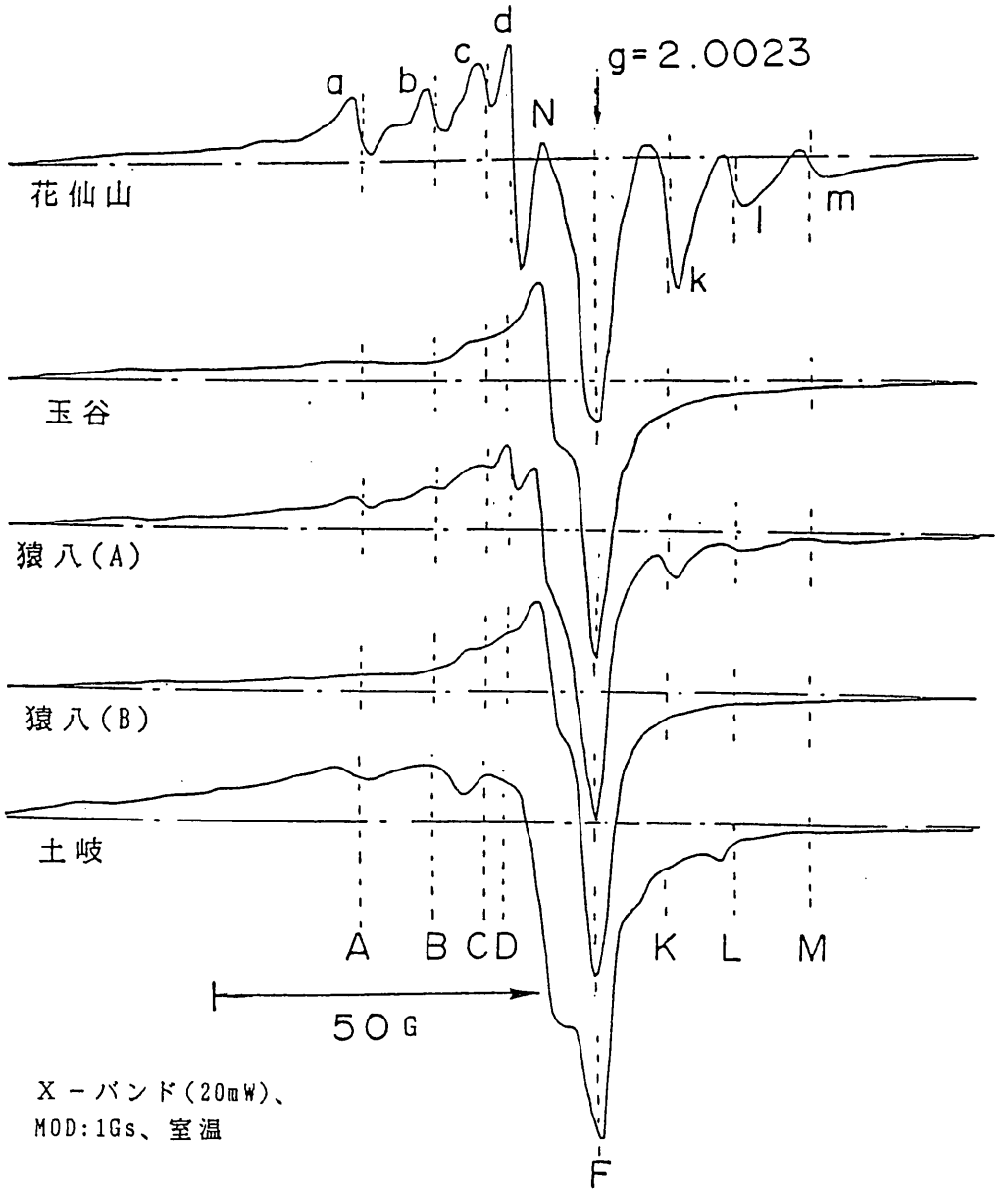
第236図　佐古川・窪田遺跡出土管玉報文番号52（95045）の蛍光Ｘ線スペクトル



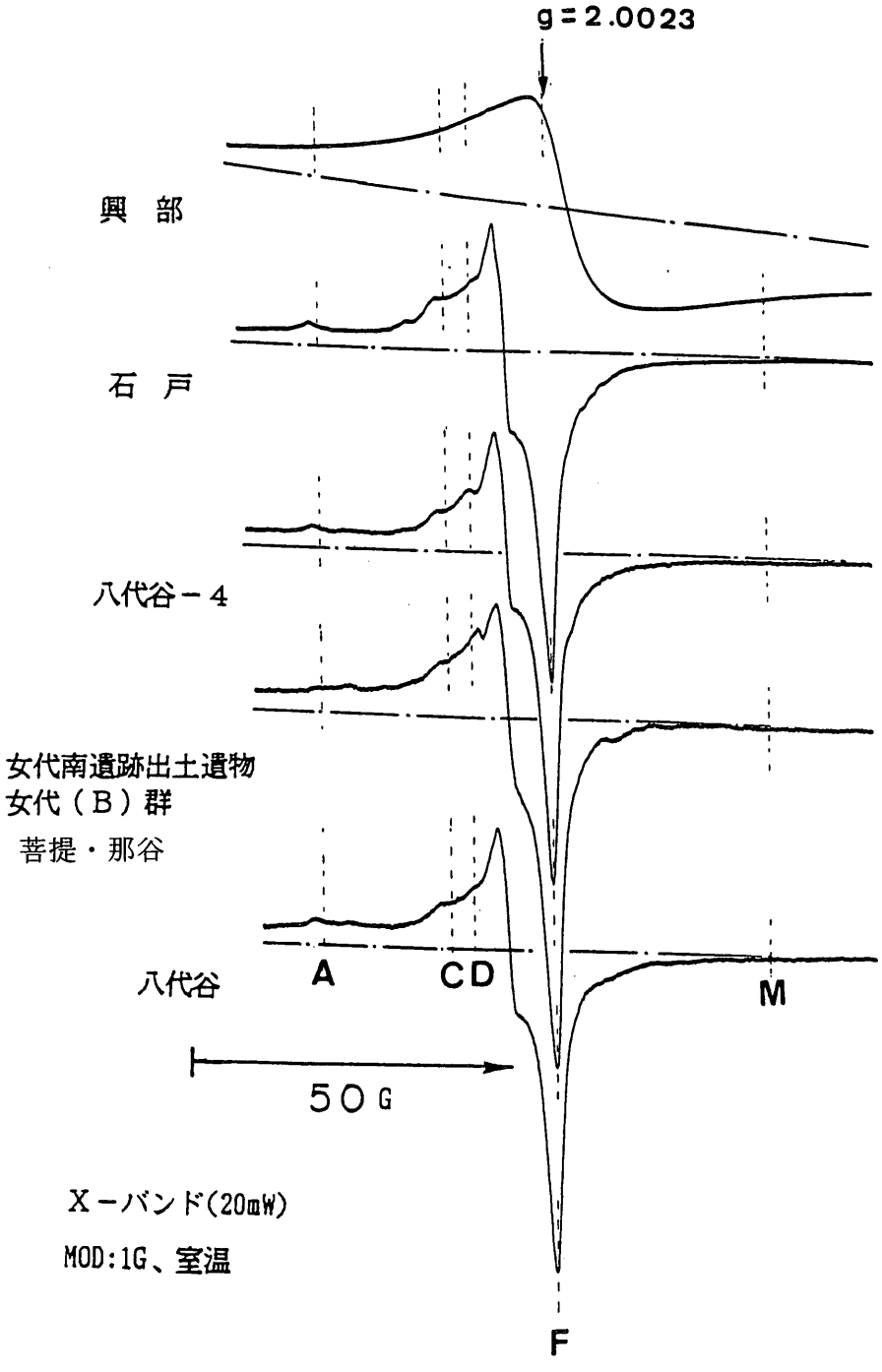
第237図　佐古川・窪田遺跡出土管玉報文番号51（95046）の蛍光X線スペクトル



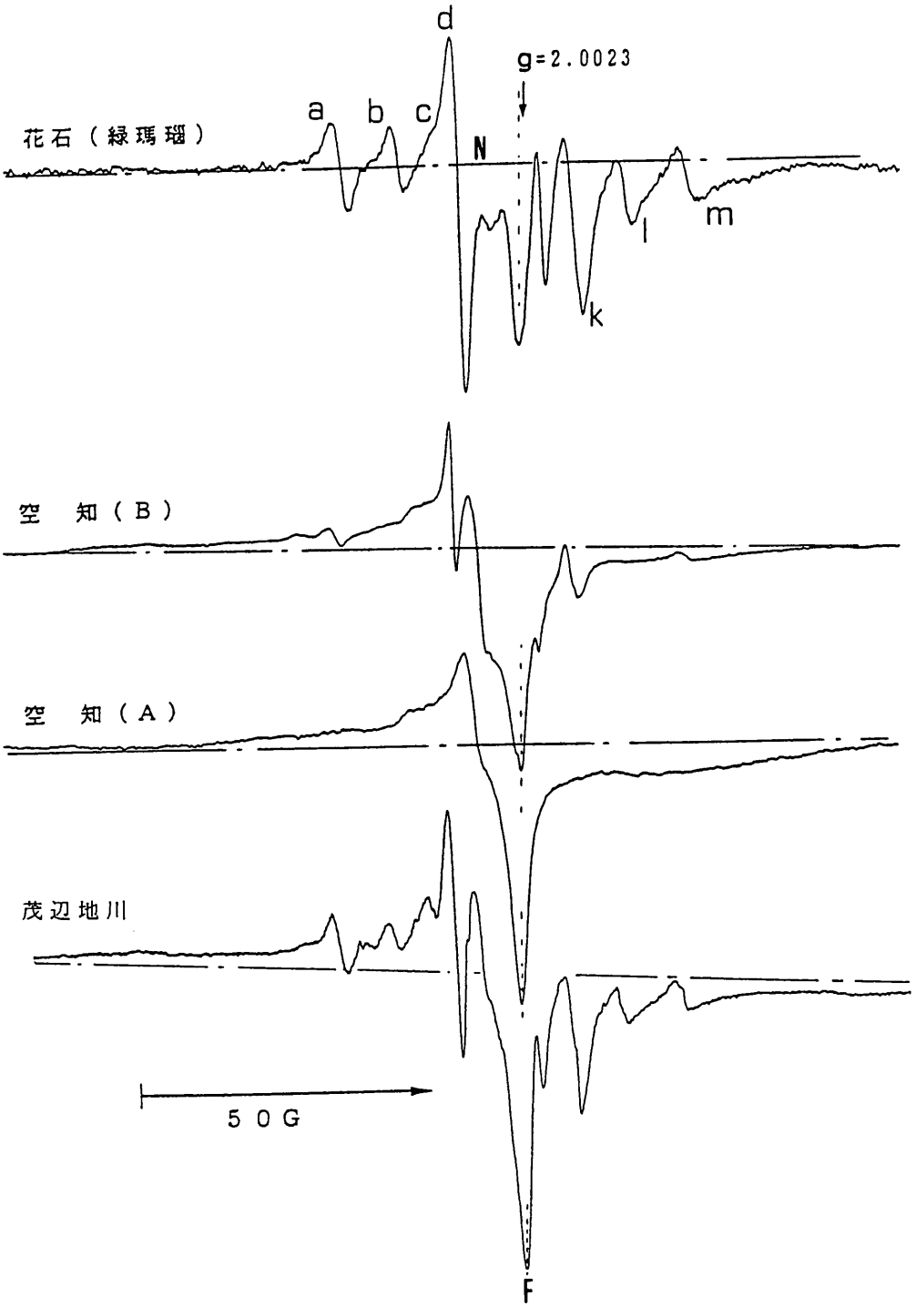
第238図　碧玉原石のESRスペクトル（花仙山、玉谷、猿八、土岐）



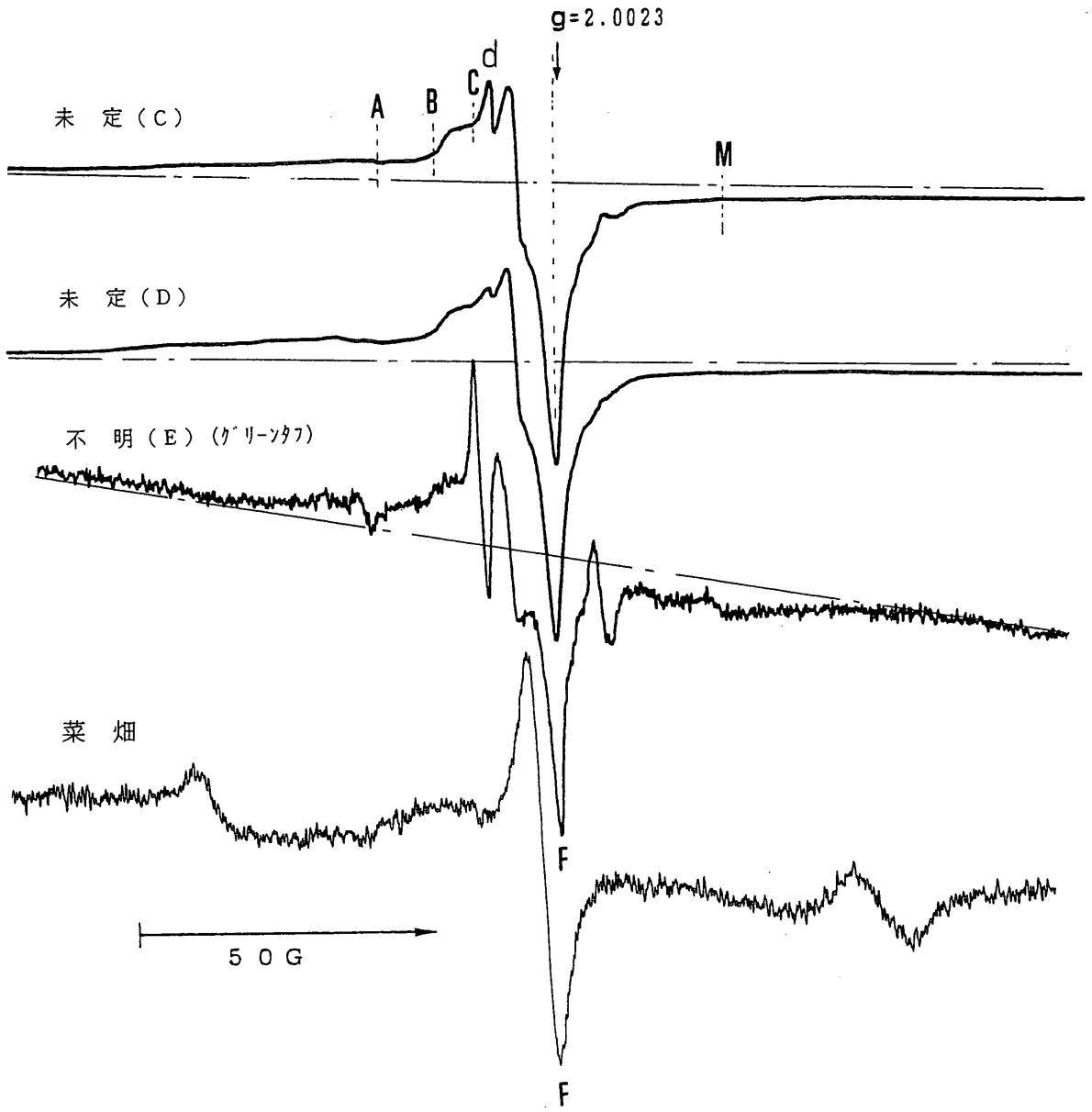
第239図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル



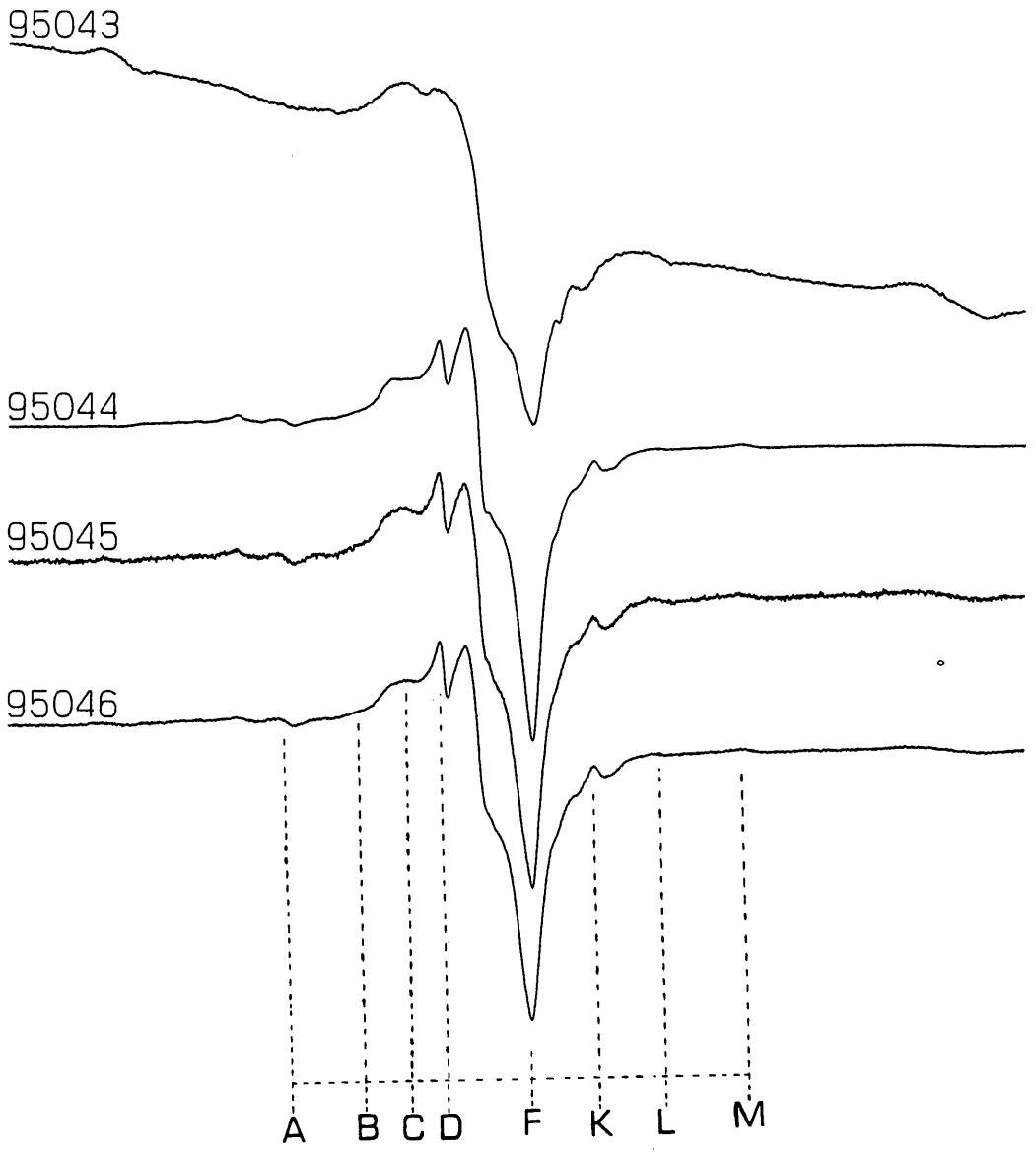
第240図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル



第241図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル



第242図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル



第243図　佐古川・窪田遺跡出土管玉の信号（Ⅲ）のESRスペクトル

分析番号	報文No.	区名	遺構名	ホテリングT2乗（確率）	ESR形	総合判定
95043	9	Ⅲ区	周溝墓3主体部	未定C遺物群（62%） 車塚2遺物群（11%） 車塚1遺物群（0.1%）	崩れ菜畑形	
95044	10	Ⅲ区	周溝墓3主体部	窪田2遺物群（27%）	未定C形	
95045	52	V区	周溝墓16主体部	未定C遺物群（3%）	未定C形	未定C遺物群
95046	51	V区	周溝墓16主体部	未定C遺物群（11%） 車塚2遺物群（3%）	未定C形	未定C遺物群

第8表　佐古川・窪田遺跡出土弥生時代前期の管玉の原材産地分析結果

第5章　ま　と　め

第1節　遺構の変遷

1．弥生時代前期

弥生時代前期後半～中期初頭にかけて、Ⅱ区東端からⅥ区の範囲で周溝墓群を検出した。これらは大きく4つの群に分かれる。

＜1群＞

周溝墓1～4が立地する。南からは尾根の先端部が迫っており、尾根の先端から西側斜面の裾部に当たる。形状は明確な方形が1基、楕円形が2基、円形が1基である。おおむね等高線に沿うように配され、周溝墓2・3には等高線に直交する位置で陸橋部を持つ。構築順序は周溝墓2→周溝墓3ということ以外は不明であるが、出土遺物から周溝墓4が若干遅れる可能性がある。周溝墓2・3の共有する溝からは供献土器の甕が出土した。墓道は周溝墓の陸橋部から、周溝墓2・3の北西側と、周溝墓2・3と周溝墓1・4の間の2箇所が考えられる。それぞれの周溝墓間には規模の上で格差は見られないが、周溝墓3では木棺内から碧玉製管玉が2点出土した。1群が形成された時期は前期後半中葉後葉と考えられる。

＜2群＞

周溝墓7～14、24、31、32が立地する。1群とは尾根先端部を挟んで東側に位置する。1群同様尾根の等高線に沿って配置する。形状は周溝墓8・6は円形、周溝墓24は不明、残りは方形と考えられる。陸橋部は、西側に位置する周溝墓11・12は南西部に、中間の周溝墓7は南東と南西の両方に、東側に位置する周溝墓9・31は南東部に持ち、墓道の1つは2群の南側の等高線上を通っていたと思われる。また、これらの北側に位置する周溝墓のうち、周溝墓13・14は北東から北側、周溝墓24は南西側となるので、周溝墓24を行き止まりとする、尾根線に沿う墓道も想定できよう。

構築順序を遺構の前後関係から明らかにすることはできず、出土遺物からもあまり差は認められなかったが周溝墓7ののち、それに付随する周溝墓11～14、周溝墓8ののち、それに付随する周溝墓9が作られたことは確かであろう。

周溝墓の規模は、2群の中では南側に位置する周溝墓7・8・31が最も規模が大きく、周溝墓7・8に取り付く周溝墓9・11～14は規模が小さい。規模の大きい周溝墓に取り付く小規模な周溝墓はどのような位置付けがなされるかは課題として残った。また、周溝墓9・11～14以外の、中程度以上の規模を持つ周溝墓は、周溝墓5・10以外は供献土器を持つ。周溝墓5・10の検出範囲が狭いことを考えれば、土器を供献する習慣があったことがわかる。主体部は周溝墓8でのみ検出した。築造の時期はおおむね前期後半後葉と考えられる。

＜3群＞

周溝墓15～21、25～40が立地する。もっとも多数の周溝墓が立地する。徐々に東側の低地へ向かっていく位置である。円形周溝墓として確実なものは周溝墓21だけで、ほとんどは方形周溝墓と考えられるが、周溝墓18・29・30・34・40等、不整形な形状のものも少なくない。

構築順序は、遺構の前後関係と周溝墓の外形から推測すれば、

周溝墓26→周溝墓27→周溝墓15→周溝墓16／周溝墓34→周溝墓33・35・36→周溝墓17→周溝墓19

と考えられ、築造の時期は弥生時代前期後半～末頃と考えられる。この時期には出土遺物から周溝墓29・37・38も築造されたと考えられる。また、周溝墓21・28からは中期初頭まで下る供献土器が出土しており、周溝墓21周辺の構築順序は

周溝墓21外側→周溝墓21内側／周溝墓30→（周溝墓30南区画？）

と考えられる。3群の構築は、当初は墓道を確保しながらおおむね南から北へ広がったようであるが、途中から墓道を壊して周溝墓を構築したようである。また、中期初頭には東側へと拡張した様子が認められる。

墓道は、当初は周溝墓15・16の北側を通るルートがあったと思われ、そのルートと周溝墓37・38の間を通るルートがあったと思われるが、周溝墓33・17・19等により南側のルートは壊されて、北側のルートのみになったのではないか。

周溝墓の規模は、後出するものに若干1・2群並みの大きさのものが認められるが、やや小さめのものが群集するものが目立つ。また、他の群では、埋葬主体が認められるものは周溝墓1以外は木棺墓であったのに対し、土坑墓が認められる。埋葬主体が検出できた周溝墓自体があまり多くないので、はっきりとは言えないが、3群の特徴として挙げられよう。中期初頭まで下る周溝墓が認められるのもこの群の特徴であろう。周溝墓16からは碧玉製管玉が2点出土した。

＜4群＞

周溝墓22・23は立地は3群と類似する。周溝墓21・28が築造されたため、あまり空閑地がなくなったが、もともとは別の群であったと考えられる。形状は方形で、規模はどちらかと言えば1・2群に似る。供献土器はない。

以上をおおまかにまとめると

- 周溝墓群は1～4群に分かれ、それぞれ丘陵裾部の西側～先端、東側、低湿地に位置する。
- 墓道はそれぞれ等高線に沿う方向で、東西方向に2ルート程度が平行して想定できる。
- 方形周溝墓が優勢で、円形周溝墓は少ない。方形でも隅丸方形や形状の不整なものが認められる。
- 供献土器の出土位置は共有する溝状遺構や分岐点近く、または溝状遺構の端部（陸橋部付近）が多い。
- 周溝墓の時期は、時期のわからない4群以外はおおむね前期後半頃であるが、3群のみは中期初頭まで継続的に続いたようで、周溝墓が拡張していく様子もよくわかる。

弥生時代前期後半頃の遺構は、他に主に微高地上に相当する。Ⅰ・Ⅱ区で土坑を5基、ピットを2基、溝状遺構を2条検出した。佐古川・窪田遺跡の南東側には弥生時代前期の集落を持つ佐古川遺跡があり、付近に弥生時代前期の集落が控えていたと考えられる。

2．弥生時代後期

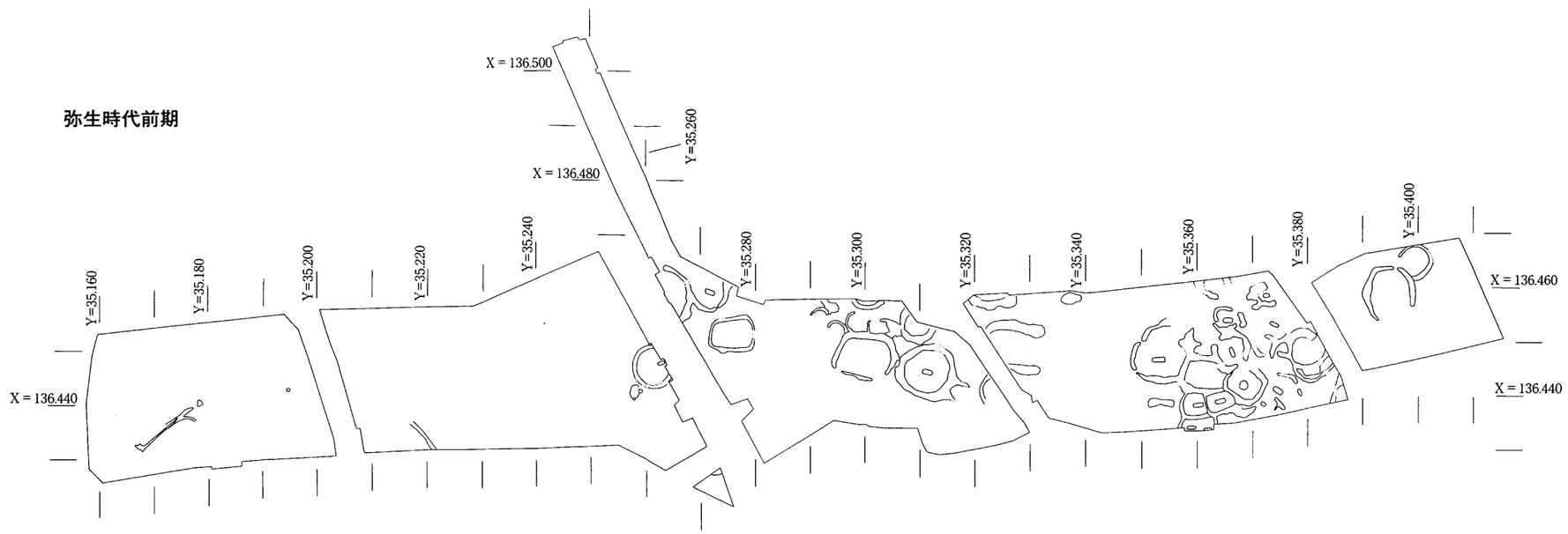
灌漑水路SD01とSD14が開削される。また、Ⅲ区には竪穴住居跡を4棟検出したが、灌漑水路の規模に比べて集落規模は小さく、中心的な集落は他に考えられよう。2条の灌漑水路の開削は、微高地単位での集落の再編と、弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけてこの地域で広がる墳墓・古墳群と密接な関係が考えられようことは『平成9年度国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』に詳しい。

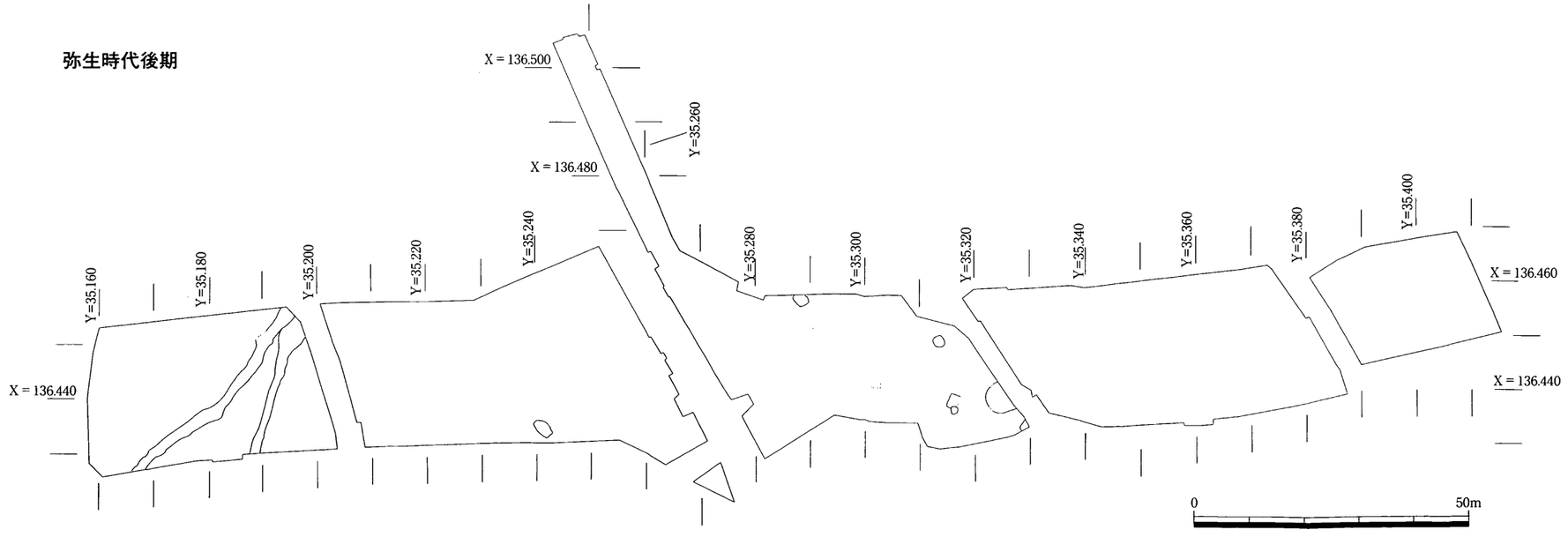
3．古墳時代後期

微高地上であるⅠ・Ⅱ区において灌漑水路SD20・SD29が掘削され、この時期と考えられる竪穴住居跡3棟と掘立柱建物跡21棟を検出した。掘立柱建物跡のうち9棟は総柱建物である。SD20・29は規模の大きなもので、当時の幹線水路の役割を果たしたと考えられる。

建物は主にこれらの幹線水路に沿うように総柱建物の倉庫群が配置されるようになる。幹線水路の北西側に重複関係を持つ掘立柱建物跡を含め、竪穴住居跡2棟、総柱建物跡5棟、側柱建物跡4棟を検出し、幹線水路の南東側では、ややまばらではあるが、総柱建物跡を4棟検出した。いずれも総柱建物の多さは際立ち、幹線水路沿いに立地することと関連があるのであろう。

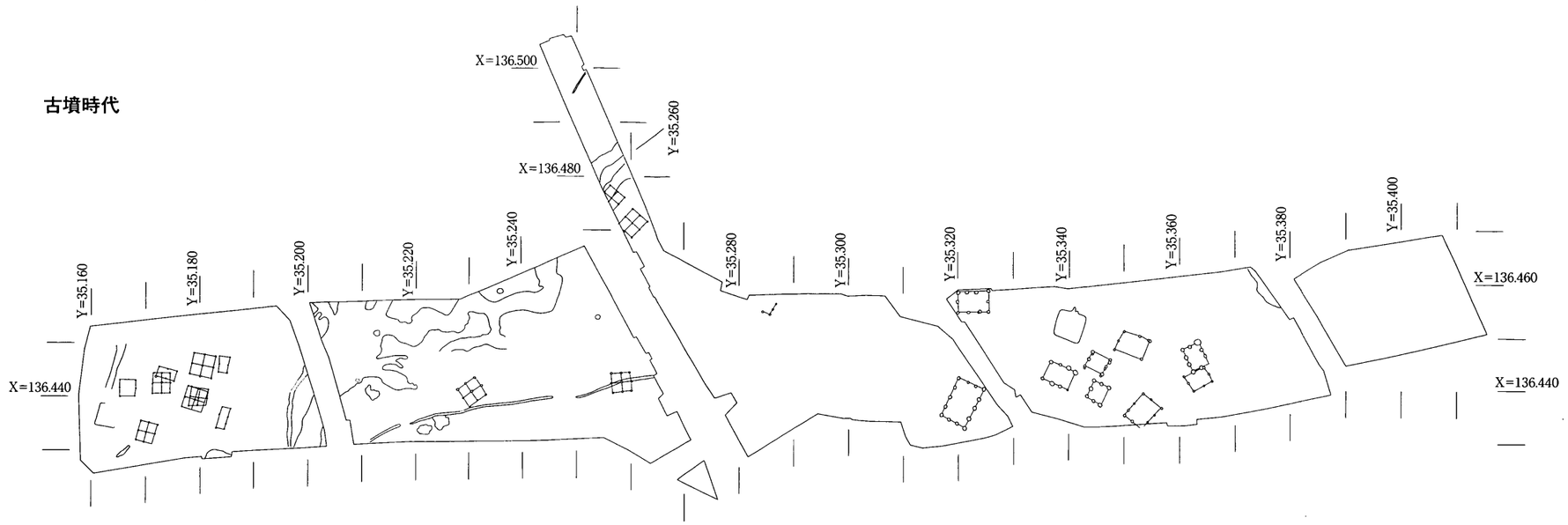
Ⅲ区東端部とⅤ・Ⅶ区においては竈付竪穴住居跡1棟と掘立柱建物跡9棟を検出した。これらはほぼ丘陵裾の斜面に平行に配置される。掘立柱建物跡は幹線水路沿いで検出したものとは異なり、柱穴規模が大きく、すべて側柱建物で、他とは異なる掘立柱建物群であったと考えられる。



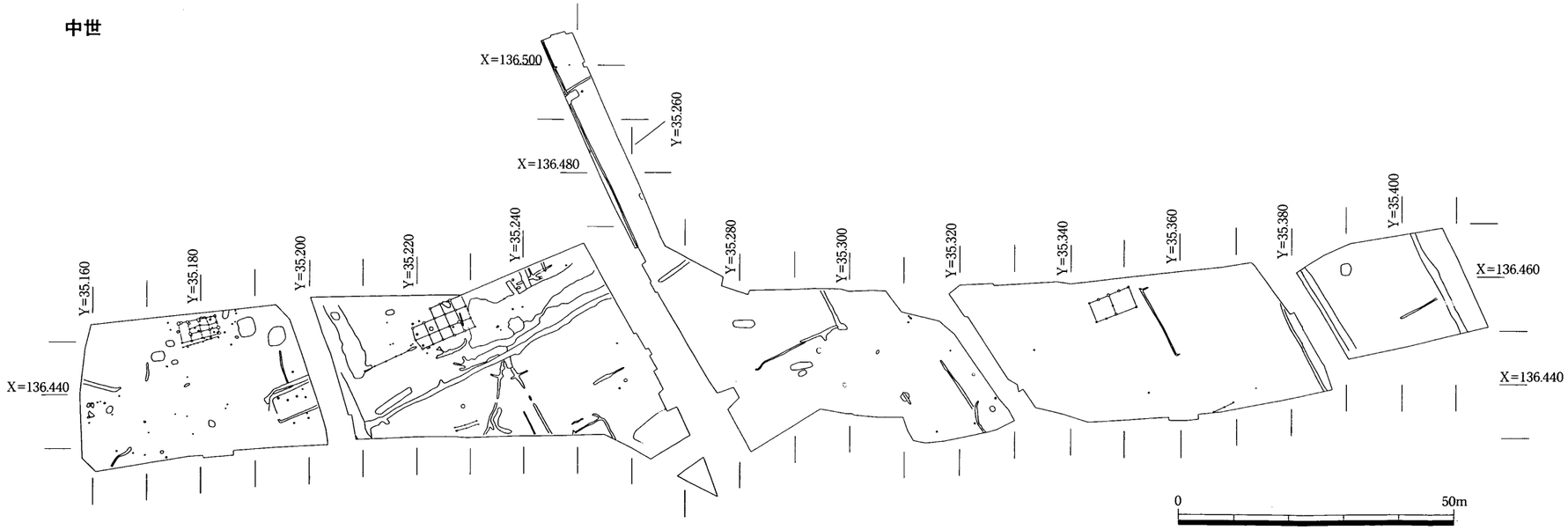


第244図　遺構変遷図（1）（1/1000）

古墳時代



中世



第245図　遺構変遷図（２）（1/1000）

4．古　代

遺構・遺物ともほとんど見受けられず、人のあまり住まない地であったことがわかる。

5．鎌倉・室町時代

佐古川・窪田遺跡は条里型地割が遺存するほぼ南限に当り、南北方向の地割は良く遺存するが、東西方向の地割はあまり遺存しない。現存地割によればⅡ・Ⅲ区間とⅤ・Ⅵ区間が坪界線に相当する。

佐古川・窪田遺跡では11世紀後半～12世紀後半頃にまず微高地のやや東寄りに位置するⅢ区を中心に小規模な集落が広がる。現在の条里型地割の方向と同じ方向の溝が数条、平行して配される。掘立柱建物の復元には至らなかったが、同時期のピットも検出しており、Ⅲ区にまず小規模な集落がつくられ、12世紀後半には井戸も作られた。しかし、この時期には土地を整然と区画するような溝等はなかった。

13世紀中～後半を中心とする時期には微高地の中心に当たるⅠ・Ⅱ区を中心に集落が出現する。特にⅡ区においてはSD21・22・24による、整然とした溝に囲まれる区画が出現し、SB11が建てられる。SD24とはSD30・31が重複し、遺構の重複関係からはSD24のほうが新しいように見受けられるが、出土遺物による時期差はほとんどない。SD30・31は浅く、水路または区画施設として機能した溝ではなく、自然の落ち込みに近いものであろう。SB11の東部ではさらに区画が予想される南北方向の溝がある。SD24から南側では、遺構密度は低くなるものの、溝による区画がなされる。Ⅰ区では溝による区画はなされておらず、Ⅱ区のような屋敷地の状態は示していないが、掘立柱建物1棟に大型の土坑が検出されている。13世紀末～14世紀前半にかけてはⅥ区において条里型地割の溝と、その20m西側で同方向の溝を検出した。他に遺構は見られず、農業用水用の水路とも考えられるが、出土遺物量は多く、付近に集落が存在したと思われる。佐古川・窪田遺跡の中世の集落はおおむね14世紀代で終わりを告げるようである。

	群	形状	規模	供献土器	主体部	副葬品	陸橋部	溝の共有関係	前後関係	時期	
周溝墓1	1	円形	7.0m	—	土坑墓	—	?	—	—	前期後半 中葉	
周溝墓2	1	不整円形 又は円形	(9.2m?)	甕（周溝墓3と合流付近）（磨き　無装飾）	—	—	北西	周溝墓3	周溝墓3より新しい	前期後半 中葉	
周溝墓3	1	不整円形 方形の可能性 もあり	8.0m×5.8m	甕（周溝墓3と合流付近）（磨き　無装飾、口縁部刻目）	木棺墓	碧玉製 管玉2	北西 南東	周溝墓2	周溝墓2より古い	前期後半 中葉	
周溝墓4	2	方形	7.4m×5.1m	—	—	—	—	—	—	前期後半 後葉	
周溝墓5	2	方形?	4.2m×?	—		—	—	周溝墓24?	—	前期後半 後葉	
周溝墓6	2	円形	4.4m	壺（磨き　無装飾）	—	—	(西)	—	—	前期後半 後葉	
周溝墓7	2	方形	9.0m×6.9m	鉢（磨き　無装飾）	—	—	南西 南東	—	周溝墓13・14より新しい	前期後半 後葉	
周溝墓8	2	円形	8.2m	壺	木棺墓	—	—	周溝墓9	?	前期後半 後葉	
周溝墓9	2	方形	2.5m×?	—	—	—	南東	周溝墓8	?	前期後半 後葉	
周溝墓10	2	方形	6.0m以下×?	—	—	—	—	—	—	遺物なし （前期後半 後葉?）	
周溝墓11	2	方形	2.8m×2.8m	—	—	—	南西	周溝墓12・24	周溝墓24より古い	遺物なし （前期後半 後葉?）	
周溝墓12	2	方形	2.8m×2.8m	—	—	—	南西	周溝墓11・13・7	周溝墓13より新しい	遺物なし （前期後半 後葉?）	
周溝墓13	2	方形	3.6m×3.3m	—	—	—	北東	周溝墓7・12・14	周溝墓12より古い	遺物なし （前期後半 後葉?）	
周溝墓14	2	方形	3.1m×2.3m	—	—	—	北西	周溝墓7・13		遺物なし （前期後半 後葉?）	
周溝墓24	2	?	?	鉢（磨き　無装飾）	—	—	南東	周溝墓11	周溝墓11より新しい	前期後半 後葉	
周溝墓31	2	方形	8.8m×5.0m	甕　壺　蓋	—	—	東	—	—	前期後半 後葉	
周溝墓32	2	方形	5.0m×?	甕（磨き　無装飾、口縁部刻目）	—	—	—	—	—	前期後半 中葉	周溝墓2の供献に似る
周溝墓15	3	方形	4.1m×4.1m	—	木棺墓	—	—	周溝墓16・26・33	周溝墓16・33より古い	石器だけ （前期後半 後葉）	
周溝墓16	3	方形	3.6m～ 4.8m×3.4m	壺（周溝墓27との境）	木棺墓	碧玉製 管玉2	—	周溝墓15・17・27・33	周溝墓15より新しく、周溝墓17より古い	前期後半 後葉	
周溝墓17	3	方形	5.9m×4.9m	—	土坑墓	—	北	周溝墓16・33・19	周溝墓16・33より新しく、周溝墓19より古い	前期後半 後葉	
周溝墓18	3	歪な方形	一辺3.7m～4.8m	壺	木棺墓	—	北西　南 東　南西	周溝墓29		前期後半 中葉	
周溝墓19	3	方形?	一辺4.5m	—	木棺墓	—	北西　南 東	周溝墓17・33・35・36	周溝墓37より古く、周溝墓17・33より新しい	前期後半	
周溝墓20	3	方形	2.2m×2.2m	—	—	—	北西　南	周溝墓30・39			
周溝墓21	3	円形	4.6m×5.9m	甕（クシ描き沈線）	—	—	北東	周溝墓30・39	—	中期初頭	
周溝墓22	4	方形	8.5m×6.9m	—	—	—	南　北東	周溝墓23	周溝墓23より新しい		
周溝墓23	4	円形又は方形	5.2m×5.2m	—	—	—	西	周溝墓22	周溝墓22より古い		
周溝墓25	3	方形	6.4m×3.0m	—	—	—	西　南東	周溝墓34			
周溝墓26	3	方形	6.0m×?	—	土坑墓 2	—	—	周溝墓15・27	周溝墓16より古い	遺物なし	
周溝墓27	3	方形	3.6m×?	—	—	—	東	周溝墓16・26・33		遺物ほとんどなし	
周溝墓28	3	方形?	?	壺?（クシ描き沈線）	—	—	—	—		中期初頭	
周溝墓29	3	方形	3.2m×2.0m	—	土坑墓	—	北東　南 西　南東	周溝墓17・18	周溝墓17・18より遅れる?	前期後半	
周溝墓30	3	方形	一辺1.6m～2.1m	—			南西	周溝墓21・20・39		中期初頭?	
周溝墓33	3	方形	6.9m×5.0m	甕（周溝墓34との境）	—	—	—	周溝墓15・16・17・19・34・35	周溝墓15・16より新しく、周溝墓17・19より古い	前期後半 末葉	
周溝墓34	3	方形	一辺8.6m～9.3m	甕（周溝墓33との境）	木棺墓	石鏃2 石匙	南西　西 北東	周溝墓25・33・35・36	周溝墓33より古い		
周溝墓35	3	方形	3.1m×1.4m	—	—	—	北	周溝墓19・33・34・36			
周溝墓36	3	方形	3.8m×2.6m	—	—	—	南　南東 北西	周溝墓19・34・35・37			
周溝墓37	3	方形	3.2m×2.6m	鉢（磨き　無装飾）	土坑墓	—	南西　南 東　北東			前期後半 後葉	周溝墓24土器と似る
周溝墓38	3	円形?	3.6m	甕　鉢 （磨き　無装飾）	—	—	南東	—	—	前期後半 後葉	周溝墓24土器と似る
周溝墓39	3	方形?	6.4m×4.0m	—	木棺墓	—	北西　北 東　南東	周溝墓20・21・37・40	—		
周溝墓40	3	方形	2.4m×2.1m	—	土坑墓	—	北北西 南南東	周溝墓39	—		

第9表　周溝墓一覧

区　名	遺構名	桁　行（間・m）	梁　間（間・m）	桁行・柱間（m）	梁間・柱間（m）	主軸方位	面積（㎡）	備　考
Ⅰ区	SB01	2間（3.45m）	1間（1.92m）	1.70	1.92	N73°W	6.6	古墳時代後期？
Ⅰ区	SB02	2間（4.06～4.26m）	2間（3.96m）	1.95～2.10	—	N12°E	16.5	古墳時代後期
Ⅰ区	SB03	2間（3.40～3.60m）	2間（3.10m）	1.44～1.89	1.47～1.57	N10°E	8.8以上	古墳時代後期
Ⅰ区	SB06	2間（3.15m）	1間（1.56～1.95m）	1.50～1.65	1.53～1.95	N10°E	5.5	古墳時代後期
Ⅰ区	SB07	2間（4.14m）	2間（3.81m）	2.04～2.10	1.80～1.95	N20°E	15.8	古墳時代後期
Ⅰ区	SB08	3間（4.14～4.20m）	1間（1.56m）	1.26～1.68	1.56	N16.5°E	6.5	古墳時代後期
Ⅰ区	SB04	2間（3.84～3.96m）	2間（3.12～3.30m）	1.86～1.98	1.53～1.68	N1°E	12.3	古墳時代後期
Ⅰ区	SB05	2間（2.94～3.09m）	2間（2.76～2.94m）	1.50～1.59	1.44～1.50	N1°E	8.8	古墳時代後期
Ⅰ区	SB09	2間（3.69～3.75m）	2間（3.21～3.27m）	1.77～1.92	1.59	N16°E	12.1	古墳時代後期
Ⅱ区	SB12	2間（3.87～4.14m）	2間（3.75～3.99m）	1.86～2.16	1.86～2.10	N57.5°E	15.5	古墳時代後期
Ⅱ区	SB13	2間（3.45～3.60m）	2間（3.36～3.45m）	1.65～1.92	1.56～1.80	N4°W	12.0	古墳時代後期
Ⅲ区	SB15	4間（7.56～7.86m）	3間（4.86～5.10m）	1.83～2.04	1.56～1.71	N26°E	38.4	古墳時代後期
Ⅲ区	SB14	2間（2.28m）	1間（4.10m）	—	4.10	N31°E	—	古墳時代後期
Ⅳ区	SB16	2間（3.51m）	2間（3.39m）	1.71～1.80	1.68	N48°W	8.6以上	古墳時代後期
Ⅳ区	SB17	2間（4.11m）	2間（3.57m）	2.01～2.10	1.77～1.80	N44.5°E	14.7	古墳時代後期
Ⅶ区	SB22	3間（4.95m）	1間（3.60m）	1.44～2.04	3.60	N64°W	17.8	古墳時代後期
Ⅶ区	SB23	2間（3.39～3.84m）	2間（3.00～3.12m）	1.68～1.74	1.38～1.44	N28°E	10.6	古墳時代後期
Ⅶ区	SB25	2間（3.06m）	1間（3.51m）	1.44～1.65	3.51	N26°E	10.7	古墳時代後期
Ⅶ区	SB26	2間（5.04～5.10m）	2間（3.75～3.81m）	2.04～3.06	1.83～1.98	N22°E	19.2	古墳時代後期
Ⅴ区	SB18	2間（3.84m）	2間（3.15～3.21m）	1.68～2.20	1.50～1.71	N30°W	12.3	古墳時代後期
Ⅴ・Ⅶ区	SB20	3間（4.38m）	2間（3.21m）	1.29～1.56	1.50～1.80	N25°W	14.1	古墳時代後期
Ⅶ区	SB24	3間（5.61～5.70m）	2間（3.96m）	1.62～2.25	1.95～2.01	N2°W	22.4	古墳時代後期
Ⅴ区	SB27	3間（5.34m）	2間（4.29m）	1.41～2.52	1.80～2.43	N40°W	22.9	古墳時代後期
Ⅰ区	SB10	4間（7.32m）	3間（3.30～3.65m）	1.50～2.10	0.99～1.44	N79°W	25.4	13C中頃～14C前半
Ⅱ区	SB11	5間（10.92m）	3間（6.36m）	2.01～2.31	1.86～2.55	N24°W	69.5(36.6)	13C中頃～13C後半
Ⅶ区	SB21	4間（7.74～7.80m）	2間（3.75～3.93m）	1.86～2.04	1.65～2.10	N22°W	29.1	13C代

第10表　掘立柱建物一覧

報告書抄録

ふりがな	さこがわ・くぼたいせき
書名	佐古川・窪田遺跡
副書名	一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	第1冊
編著者名	山元素子
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762－0024　香川県坂出市府中町南谷5001－4　　TEL 0877－48－2191
発行機関	香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
発行年月日	西暦2007（平成18）年3月31日

総頁数	目次等	本文	表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図
272	20	252	10	(CD)	245	0	10

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
さこがわ 佐古川・ くぼたいせき 窪田遺跡	香川県丸亀市 綾歌町栗熊 佐古川・窪田	37384		34度 14分 01秒	133度 52分 48秒	19970528 ～ 19980331	6,844	一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う
						19980413 ～ 19980630	1,164	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐古川・窪田遺跡	集落 墳墓	弥生時代前期後半～中期初頭	周溝墓・土坑跡	弥生土器、碧玉製管玉	周溝墓群
		弥生時代後期	竪穴住居跡・溝跡・土坑跡	弥生土器、石器	
		古墳時代中～後期	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑跡	土師器、須恵器	
		中世	掘立柱建物跡・柱穴跡・井戸跡・土坑跡	土師質土器、須恵器、鉄滓	

一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第1冊

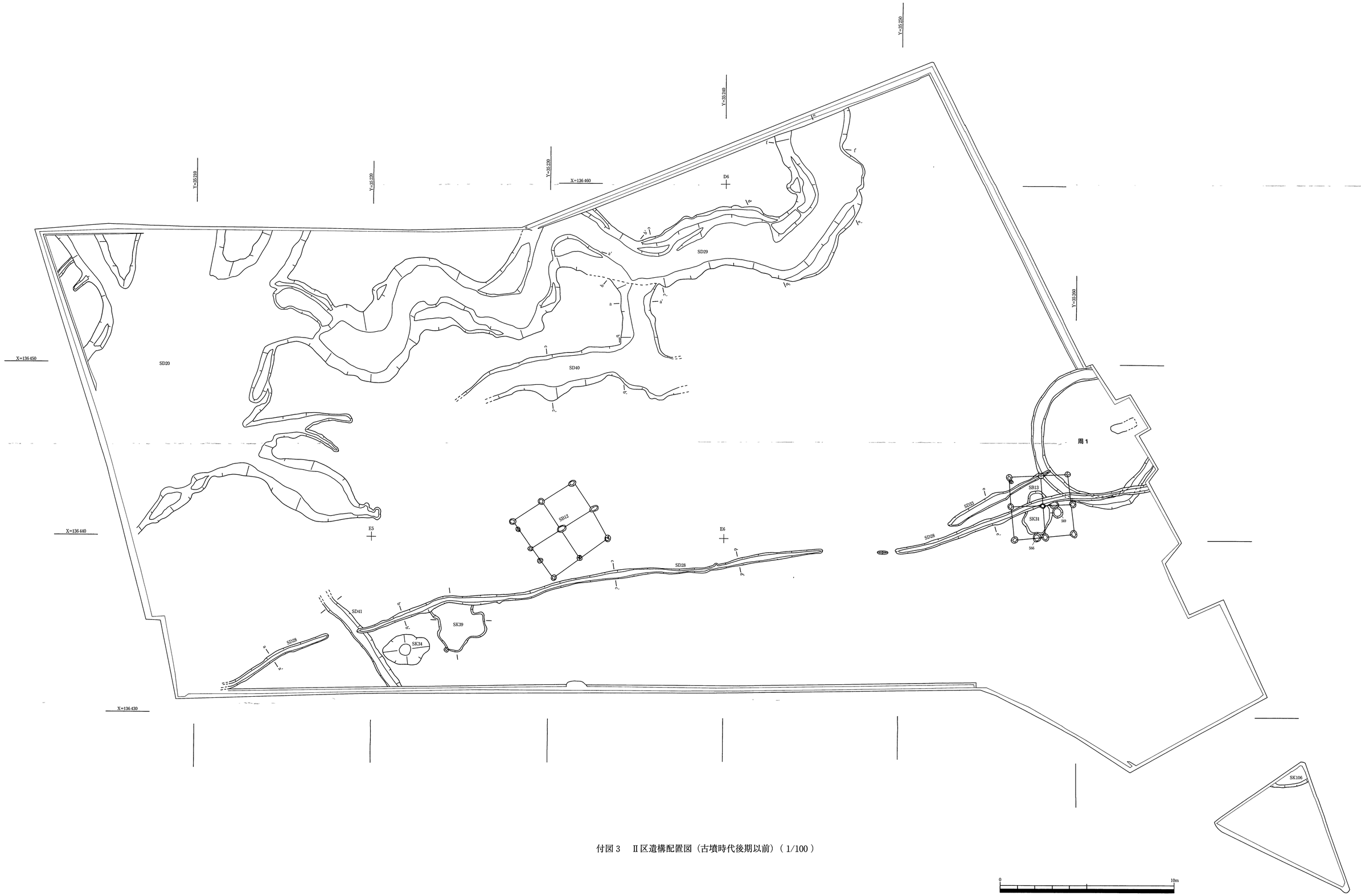
佐古川・窪田遺跡

平成18年3月31日　発行

編集　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024
香川県坂出市府中町字南谷5001番地の4
電話（0877）48-2191
発行　香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
印刷　西尾総合印刷株式会社

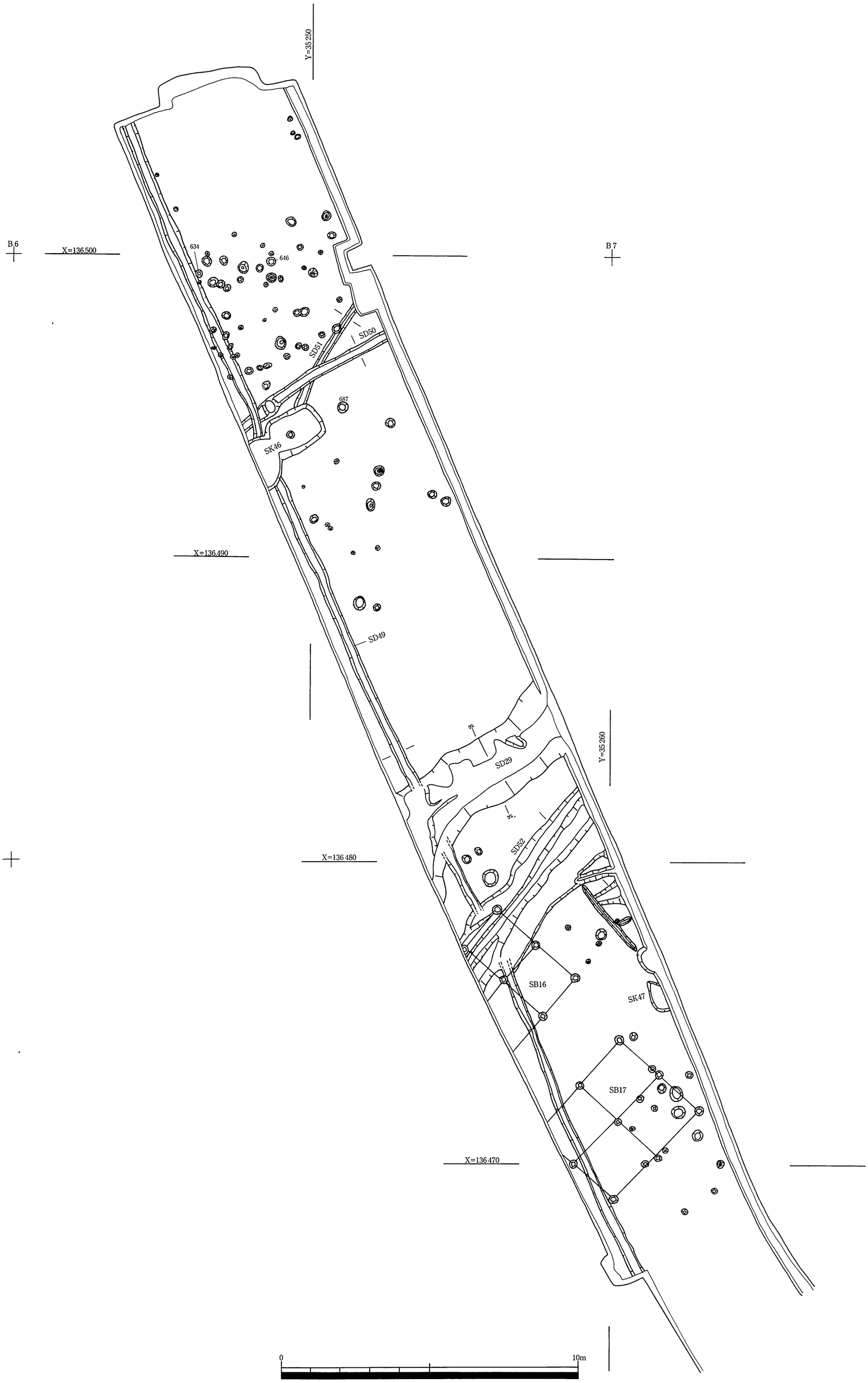
付図１　　Ⅰ区遺構配置図（ 1/100 ）

付図２　Ⅱ区遺構配置図（中世以降・時期不明）（ 1/100 ）



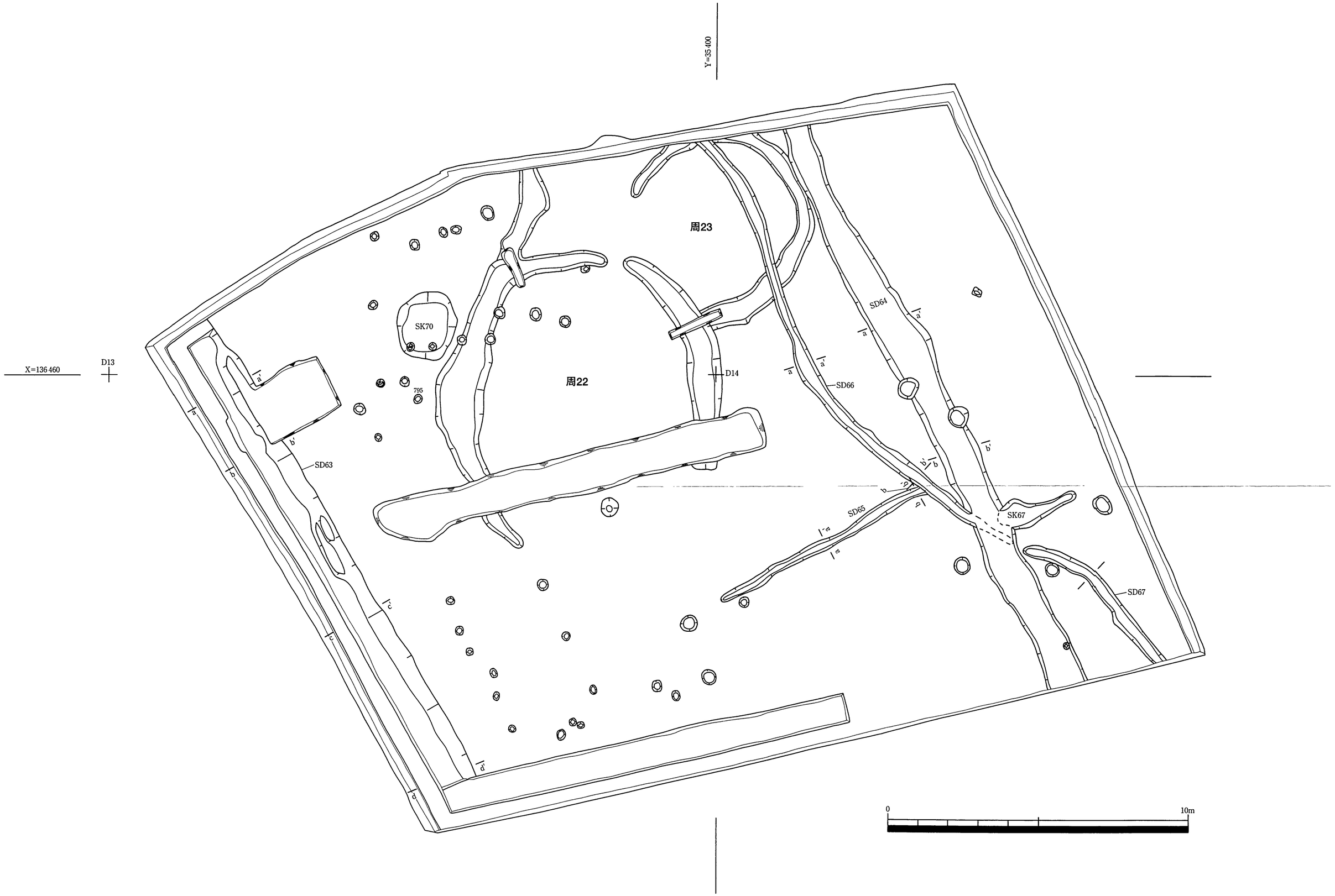
付図 3　Ⅱ区遺構配置図（古墳時代後期以前）（ 1/100 ）

付図４　Ⅲ区遺構配置図（ 1/100 ）



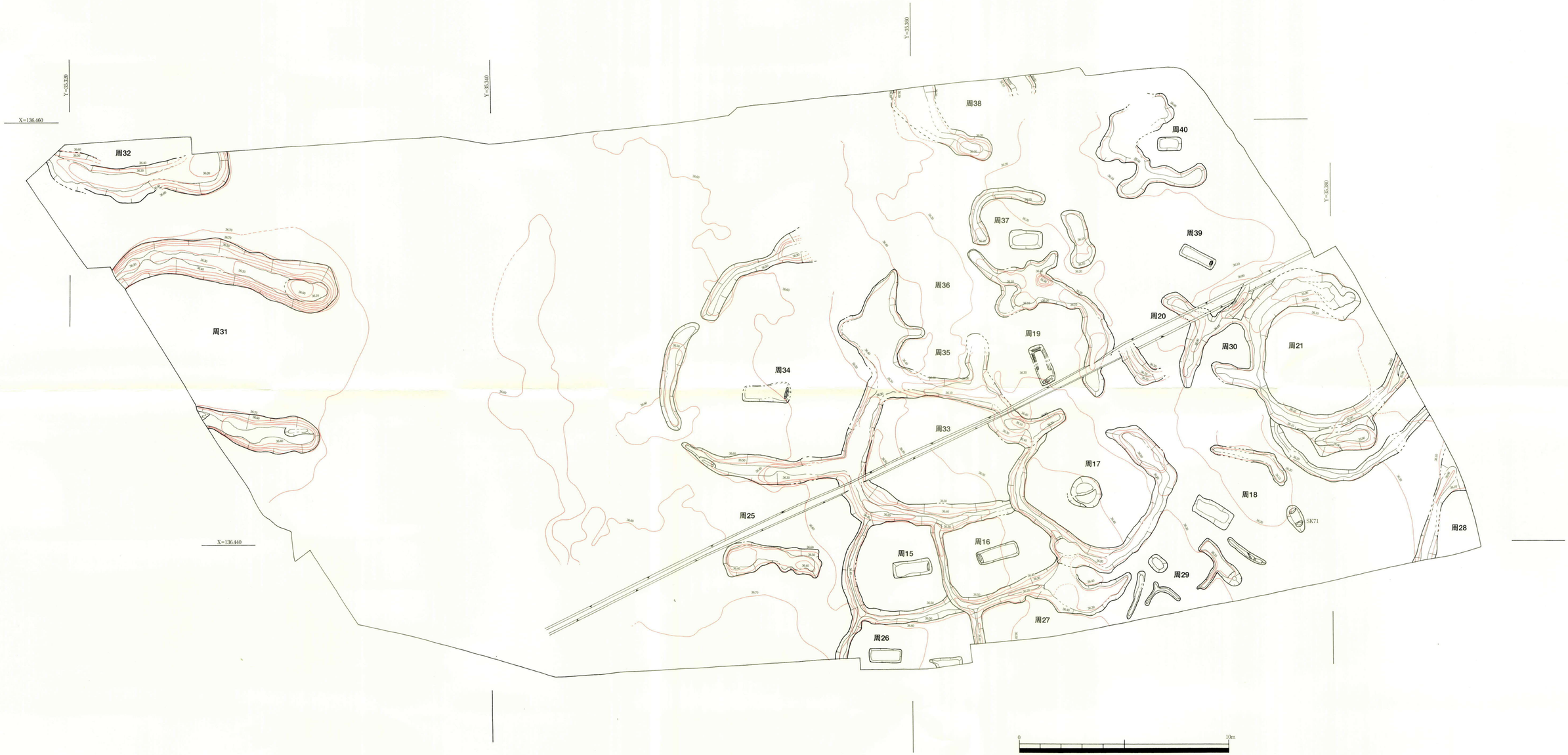
付図５　Ⅳ区遺構配置図（ 1/100 ）

付図 6　Ⅴ・Ⅶ区遺構配置図（ 1/100 ）

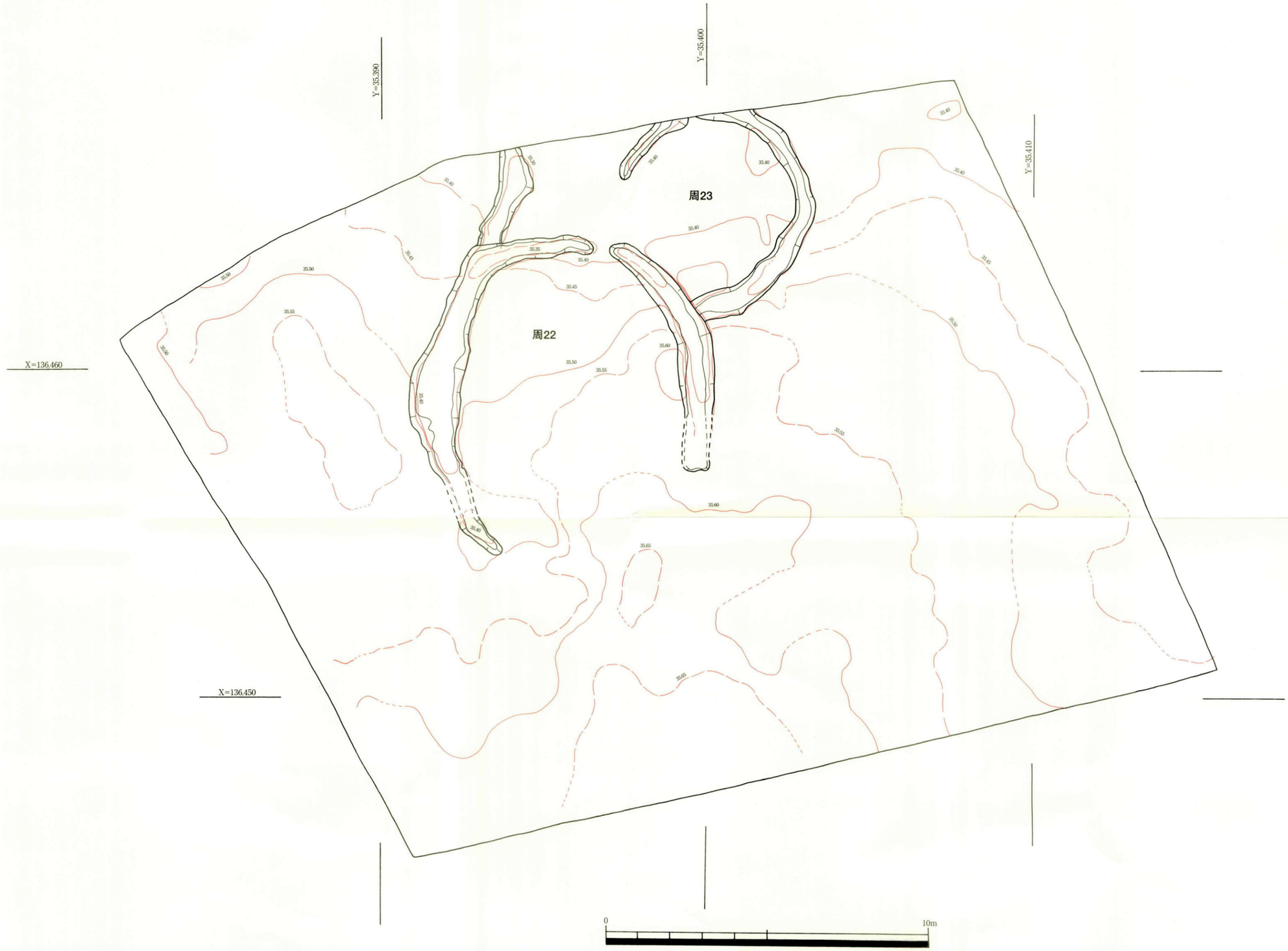


付図７　Ⅵ区遺構配置図（ 1/100 ）

付図 8　周溝墓配置図（1）（1/100）



付図 9　周溝墓配置図（２）（1/100）



付図10　周溝墓配置図（3）（1/100）